

一橋大学審査学位論文

博士論文

物語を断つ「視」の20世紀初頭精神

——青年におけるアナーキーとアマチュアの共振——

後藤優子

一橋大学大学院言語社会研究科博士課程

LD111004

目次

序章 20世紀初頭精神の考察

はじめに

第1節 創出される「青年」

第2節 「個」のゆくえ

第3節 見神と死

第4節 煩悶する男子から都市の観察者へ

第5節 遠心力としてのアナーキー／アマチュア

第6節 方法論について

第1章 カメラ・オブスキュラの「眼」——近代アマチュアが有したポテンシャル—— 安井仲治（1903-1942）

はじめに

第1節 有限な生における自在

(1) 資本の潤沢と病

(2) 自治都市「大大阪」

(3) 阪神間モダニズム

第2節 アマチュアたること

(1) 発生の背景

(2) 「芸術」の支持

(3) オルタナティブとしての関西

第3節 逆照射する他者

(1) 労働者

(2) 実験動物

(3) 老画家

(4) 女性

第4節 報国と写真家

(1) 「芸術」の駆逐

(2) 『王道楽土』

第5節 あらがう「視」

(1) 半静物

(2) ある銃後の表象

第6節 生きるために「みる」

第2章 まなざされるもの

第1節 近世の女性写真師が写した「男」

第2節 氾濫する「女」

第3節 不在のモダンガール

第4節 ダンスブームとダンサー

第5節 転落する女子学生

第3章 まなざす「女」——Spleen de Tokio 1930の自照精神——ささきふさ(1897-1949)

はじめに

第1節 ふたしかな「私」の位置

第2節 断髪するとき

第3節 プロテスタント的精神——港都に射す光——

(1) 洗礼と親密圏

(2) キリスト教女子青年として

(3) 共闘する男性たち

第4節 コンフォーミティ・夫婦・虚無

(1) 万国婦人参政権大会と関東大震災

(2) 馬脚

(3) 「行乳薬求死」

第5節 「ただ見る」という行為

(1) 窃視／傍観者

(2) カメラ・オブスキュラと夢の知覚

(3) 踊る彼女たちと踊らない「私」の solidarity

第4章 開港と国家売春

第1節 アメリカの要請に応える

第2節 港崎^{みやまき}遊郭

第3節 遊歩道・茶屋・チャブ屋

第4節 港と感染

第5章 初期映画の衝迫と「彼女」たち——Incoherentな系譜——渡辺温(1902-1930)

はじめに

第1節 スクリーン・プラクティスとしての活動写真

(1) ものがたられない映像

(2) 技術と評論

(3) 純映画劇運動／プロキノ

(4) 「いみじい夢」の奪還

第2節 「主義」から「趣味」へ

- (1) 作家兼編集者の創作性
- (2) 雑誌王国の凋落が生み出したもの
- (3) 新時代の地方青年に期待する
- (4) 哄笑する浪漫趣味者

第3節 兵隊の死——カタストロフ以前の「個」の死——

第4節 まったき「家族」の欠落——父子・母子・姉弟——

第5節 「シルクハット」／「ああ華族様だよと私は嘘を吐くのであった」

——港が媒介する関係——

- (1) 買売春か恋愛か
- (2) 「良妻賢母」でも「職業婦人」でもなく
- (3) ディエジェーシス——点睛をのこした——

第6章 二都港灣史

第1節 対抗する都市

第2節 近代化の先鞭——海から陸へ——

第3節 焦点のないヴィスタが意味するもの

第7章 都市をよぎる視線——揺籃の港都から死の帝都へ——金子文子（1903-1926）

はじめに

第1節 ものがたる「私」とはだれか

- (1) 「懺悔」の内実
- (2) 傾向映画の時代
- (3) テクストの亀裂

第2節 港都を移り住む家族

- (1) 未来を臨まれた町
- (2) 巡査と紡績工
- (3) 寺町に住む
- (4) 丘のふもとの「学校」
- (5) 8歳の彼女についての値段

第3節 都市と政治

- (1) 写真の「怪」——読書する女性「犯罪者」——
- (2) 既遂か未遂か
- (3) 都市がみた「夢」

第4節 学知・女性・虚無

第5節 自由な死

第8章 ことばの獄

第9章 「視」の自律——青年は未来へとつらなる——難波大助（1899 - 1924）

はじめに

第1節 志士の後衛

- (1) 向山文庫と顕彰碑
- (2) 外様の位置
- (3) 理想主義と権謀術数

第2節 労働と懐疑

- (1) 「紙上遊戯」
- (2) 富川町スケッチ
- (3) 桜の山を越える兄弟
- (4) 白色テロルとコンフォーミティ

第3節 「女」から人間へ

- (1) 「淫売婦」とはだれか
- (2) ことばの宰領へのあらがい——囚われの女性と「青年」の **solidarity**——
- (3) 自由廃業の日——読書する遊郭の女性——

第4節 「大逆」の内実

- (1) 社会と狂気
- (2) 圍繞する「父」
- (3) 子孫崇拜

終章 20世紀初頭精神の可能性

第1節 各章のまとめ

第2節 成果と課題

参考文献

序章 20世紀初頭精神の考察

はじめに

歴史という名の過去に関する「記述」において、とりあげられる「できごと」や「人物」が、未だ限定的であるのはなぜだろうか？ 記述された事象の価値判断に振幅はあっても、事象そのものは、自明のように共有されており「入れ替え」は容易におこなわれな^い。語るにあたいするといったん認識された事象は、配置され、共有され、ある「物語」が築かれていく。¹この事実にかんがみれば、従前記述された歴史は、たったひとつの真実を語るのではなく同時に不在の「歴史」をも暗示しているといえる。かかる状況が、意図的に創出されたのか、精神的な硬直によるものなのかは不分明である。だが、いずれにしてもそこで捨象された「異なるもの」²は、あるいは、当該の物語を挫かせるとしてあらかじめ忌避されたのではないか？ という問いがうかぶ。そのとき、そこへの無批判なつらなりが、かえりみられる。

たとえば歴史的記述により、われわれは場に立ちあうことなく、日本近代の「破局」の存在とその原因を知らされる。しかし、できごととしての破局を語るに際しては、上述したような不可能性がともなう。そうであれば、破局への道程にある「不在」の歴史を可視化しようとする行為は、危機の時代のひとつの捉えかえしにはならないだろうか？ 無論、不在のマスを、一気に取り出すことなどは不可能である。だが、別なバージョンを記述しようとするころみは、すでに在る物語を自明視しない、なにものをも疑似的な神性としない地点への到達を志向するであろう。それが、最終的な解決などではなく、しかしあらたな可能性のひらかれを将来することを期し、本論が大枠でこころみるのは日本近代の「再記述」である。³

「通史」を概観すれば、日本の近代は、鎖国から開国、さらに日清・日露戦争、そして2度の世界大戦という事件を経た激動の時代といえる。長い時間がついやされた西洋の内発的近代化とことなり、外部からの脅威に端を発した日本の近代化は、圧縮されたものとならざるをえなかった。そのなかで、「王政復古」から第2次世界大戦の開始直前までを仮に4期にわけると、1868年から1885年が第1期、1886年から1903年が第2期、

¹ ヘイドン・ホワイト『歴史の喩法』上村忠男訳、作品社（2017）p.62

「歴史的環境の具体性および接近可能性と思いなされているもの、文学の研究者たちが研究しているテキストのこれらのコンテキストは、それ自体がそれらのコンテキストを研究してきた歴史家たちのフィクション作成能力の産物なのである。歴史的資料は、文学批評家の研究するテキストに劣らず、不透明である。そして、それらの資料が象っている世界も、文学作品より接近可能なわけではない。どちらも『所与のもの』ではない」。

² ミシェル・セルトー『ルーダンの憑依』矢橋透訳、みすず書房（2008）pp.8-9

³ Rorty, Richard. *Contingency, Irony, and Solidarity*. Cambridge UP, 1989. 21.

1904年から1921年が第3期、1922年から1939年が第4期となる。

この71年——日本近代が「開化」から破局へと突入していくまで——のちょうど中間地点にあたるのが、第3期の始まる1904年である。当該の時期は区分中の後半に位置しながらも、性急な近代化の途上にあつては、社会は熟しておらず——不安定さと同時に流動性を有しており——、後続する終末期のような社会的基盤の完全崩壊からも自由であったと考えられる。かかる「流動性」との連関で、この第3期には、第1、2期と第4期における「求心」的な社会の磁場——固定化をうながす——に対抗するような「遠心」的「個」のはたらきがみとめられる。その発露は、とりわけ若年層において顕著であったことが看取されるのである。

第3期の開始年には日露戦争が起こっているが、日清戦争につづく勝利をおさめた日本は、富国強兵の達成を内外に示し、欧米とならぶ近代資本主義国家として一応の体裁をととのえる。しかし、わずかな期間で資本主義を飛躍的に発展させ、帝国主義を堅固なものとしていく過程で、社会には諸矛盾が噴出していった。一連の過程を「上から」の近代化として推進した官僚たちは、実際には近世の生まれであり、このころには高齢であつたにもかかわらず政治的権力の座にあつた。それに対し、かかるパワーからへだたった少壮の人間たちは、いかなる態度で現前する問題と対峙したのであろうか。

たとえば日露戦争が開始される前年には、世界市民的な立場からの「非戦論」が、一部の知識人により提唱される。4一方で戦争終結の翌年には、戦後賠償への不満をきっかけに、内なるデモクラシーのうねりともいえる日比谷焼打ち事件が発生する。また、戦争の前年には、16歳の一高生・藤村操が、万有の真相を「不可解」として華嚴の滝に投身し、社会に反響を呼んでいた。国外へまでの射程を有した連帯の精神であれ、国内に限定された反権力的な衝動であれ、あるいは哲学的な沈潜であれ、そこにみとめられるのは「個」の覚醒である。すなわち、彼らの行動は一見、政治的な実践や哲学的な悟りをそれぞれが志向しているようでありながら、近代の開始時を知る世代の国家独立を最優先させるため小異を捨て大同を取るといった——あらかじめ個を捨象した——「一体化」の志向とは、相容れない意識において通底している。

そこで本論は、第3期にあらわれた若年層の彼らをまず注視する。後述するように、近代に「青年」と名ざされた存在は、当初、前世代からよせられた期待へ応えるごとく立ち上がりながらほどなく自律の途を模索していった。その矜持は、「われ若し一個の特権を得て、萬國歴史の中、おのが欲する時代に生れ、おのが欲する國家に生活することができるとすれば、われは現代の日本に於て、一個の青年として生活したいのである」というよ

⁴ Sho, Konishi. *Anarchist Modernity Cooperatism and Japanese-Russian Intellectual Relations in Modern Japan*. Cambridge and London: Harvard UP, 2013. 142-208.

日露戦争時に創出された「平民」の語は、西洋的な概念の「国民」とはことなる意義あるものであるが、幸徳は「両性」の上に平等な人格を置こうとはしなかった。

うな「自称」からもうかがえる。⁵やがて、理想と現実の懸隔が生じさせた青年の「煩悶」に、おとなたちは「逸脱」の烙印を押すが、それこそが彼らにとっての「至誠」の源泉なのだった。

本論は、当該の時代の前段階から存在する求心的な社会形成の磁場や、後続する時代の「反動」を経て求心性をよりつよめた磁場からも自由な精神が、第3期における「青年」に存したと措定する。世紀の転換期にあらわれた「青年」は、ほどなく囲い込まれ、文化的に馴致されたかのようにみえながら、しかし遠心的な個の力を完全に喪失したわけではなかった。

それは国家権力からへだたりつつ、二項対立的な反権力の陣営——そこにおいても別なパワーへの志向は存する——にもおさまらない、ひとつの「主義」に限定されない、いわば「モバイルな」生のありよう⁶であったといえる。第3期の開始と同時に、藤村により自裁のかたちをとった「個」の発露は、当該の時代の後半で青年期をむかえる都市の「観察者」のなかで先鋭化する。かかる顕現の一形態が、「アナキー」と「アマチュア」の精神的共振にみとめられる理由を、以下に順を追って述べることにする。

第1節 創出される「青年」

前近代的共同体社会において、人生上に規定された時間は、おとなと子どものほぼ二段階からなっていた。時間のながれは、個人よりも共同体に属するものであり、成年式は子どもを一気におとなへと生まれかわらせる社会システムであった。しかし、共同体が解体される契機にあり、かかる時間枠からの解放は、自己とはなにかという問いを生じさせる。それは、ライフサイクルのなかにモラトリアム期が侵入してきたことでもあり、おとなになるということは、いったんは個人の手にはゆだねられたのだといえる。⁷

近世までに、現在の「青年」概念に相当する語はみあたらず、別に「少年（わかもの）」「わかうど（後生）」という語が存在していた。「青年」の語は、1880年に小崎弘道らが Young Men's Christian Association を「基督教青年会」と訳し、会を発足させたのが嚆矢とされる。⁸その後、自由民権運動の担い手であった「壮士」にかわるあたらしい存在として、「青年」は注目をあつめることとなる。1880年代後半から1890年代前半にかけての知的な若い世代にとって、二者は積極的な主体化の可能性としてありながら、矛盾な

⁵ 渡邊半次郎「基督教青年に望む」『明治の女子』日本基督教女子青年会（1905）pp.20-21

⁶ ジョン・アーリ『モビリティーズ 移動の社会学』吉原直樹・伊藤嘉高訳、作品社（2015）pp.18-19
四つの定義内で第一の「肯定的評価」として「移動」すなわち可動性、第二の「境界のなかに完全に閉じ込めることができず」、「無秩序」なものを自在な動きをなすもの、の意で援用する。

⁷ 尾形裕康「近世の元服と教育——庶民層を中心として——」『教育学研究』第20巻 日本教育学会（1953）pp.60-73

⁸ 小崎弘道『小崎弘道全集』第2巻 日本図書センター（2000）p.79

小崎は、中国に倣えば「幼年」や「少年」の語をもちいるところを「青年」と訳したというが、のちに中国がこの語に倣ったのを「漢字の本家たる彼にしては面白い事と思ふ」と回想している。

く分かれていたわけではなくそのあいだで不安定に揺れうごいていた。しかし、頭脳明晰な者であるほど「青年」性を突出させている傾向にあり、「青年」的であることは「圧倒的な卓越性と前衛性をおびた存在の一様式だった」ともいえる。⁹

かかる経緯から、新世代の建設者とみとめられた「青年」とは、当初あくまでも「教育」をほどこされた存在を意味していた。青年が登場する背景には、1886年の諸学校令により学校制度が整備されていく過程があったが、そこであたらしかったのは、ピラミッド型の階梯がのちに「進学」とよばれる学校間接続を前提としていたことである。日清戦争後の1897年ごろに、この進学ルートは、東京のみならず高等学校や府県立尋常中学校が設置された地方都市でも認識され、高等学校への進学志望者は急増していく。

それ以前の1872年から1886年の期間、近代の教育制度は改変を繰り返して模索されていたが、山縣有朋内閣においては「徳育」が最重要視され、その基となる「教育勅語」が起草されることとなる。山縣は、当時の緊迫した東アジア情勢下で軍備拡張をすすめるにあたり、教育による愛国心の涵養が重要であるとみなしたため、勅諭の形式で教育方針を示すことがもとめられたのだった。中村正直による初案は、儒教を基調としながらもキリスト教や西洋哲学の思想も取り入れられていたことから採用されず、その後、井上哲次郎と元田永孚により修正をほどこされた文章が、天皇・睦仁の裁可を受け、1890年に「教育勅語」として頒布される。そこには、「教育」の淵源が「天皇を中心とする日本の国体にある」ことが明言されていた。¹⁰

大日本帝国憲法の制定（1889）や翌年の帝国議会開設（1890）といった国民国家の体制づくりと並行し、教育勅語——「修身」科目の内容を規定した——は普及していく。そして、高等学校への進学志望者が急増する時期に、青年のあるべきすがたに関する修養論が起こる。藤村の事件で、青年の自死による「煩悶」が可視化されて以降、「修養」はよりつよい語調で発されることとなった。論者は、宗教家、教育者、武術者、文学者、政治家等さまざまだったが、彼らの大多数は、近世の1830年代から近代が明ける1868年前後の生まれである。一方、語りかけられる対象の青年は、1880年から1890年代生まれだった

⁹ 木村直恵『〈青年〉の誕生 明治日本における政治的実践の転換』新曜社（1998）pp.179-180

¹⁰ 服部有紀「教育勅語の成立から終戦後の国会決議に至る経緯」国立国会図書館調査及び立法考査局編集『レファレンス』第800号（2017）pp.83-91

政府は「学制」を起草し1872年に公布したが、各学区の負担のおもさや授業の難易度のたかさ、基本にすえられた欧米的市民的道德観への違和等から反発が起こり、1879年に元田永孚主導で、儒教主義的な色彩の濃い「教学聖旨」が内示された。それに対し、同年、従来の方針を擁護する「教育義」が、井上毅により起草され伊藤博文の名で上奏されるが、間を置かず元田は、再度儒教主義の立場からの道德教育を主張し「教育義付議」を上奏する。さらに同年、当時の実情に即した「教育令」、「改正教育令」が公布される。前者では、就学率の低下をまねき、後者では重要な改正点として「修身科」が筆頭科目とされた。その後1886年からは、「学校令」と総称される学校の種別ごとに制定された法令が公布されはじめる。

ため、そこには父子かそれ以上の年齢のへだたりがあり、背後には近代における社会状況の間断ない転変が存在していたのである。

たとえば、1906年に『中学世界』は、「青年修養百談」という特集を組んでいる。そこでは、自身の学生時代には武骨な漢学生こそが尊王攘夷の志士として愛国心を発揮したのに、今日いう文明的人物とはうわべをかざり内緒で悪事をはたらく。昔時の儒学は智育ではなく人格を修養することを意味していた。それゆえ「武士道における廉恥の心をやしなうべき」だと唱える加藤弘之（1836年生まれ）、「自治團體が、よく自治の制に堪へるには、其團體の上に立てる権力に服従し、自治を許された主旨に従つて行動し、又自治者が各自己の本分を守るの能力を有して居らねばならぬ」。学生みずからによる「自治」もゆるされるべきものではなく、監督指導者の方針に沿い学生の本分をまっとうせねばならないと迫る嘉納治五郎（1860年生まれ）、「立志」が肝要であり、詩吟により奮発心を起こし山川を跋涉して浩然の気をたくわえ、読書により古今東西の偉人英傑がいかにして成功したかを参照し修養の資とするよう語る（ただし「小説」は学生の読むべきものではないとする）高瀬武次郎（1869年生まれ）、高大すぎるのは真の理想でなく「自惚れ」であるとして、伴食大臣よりは村長に、学問を教えるだけの大学の先生よりは人を教える小学の先生になるべし、と青年に「わきまえ」を説く大町桂月（1869年生まれ）、現代の好尚が柔弱なのは、平安朝末葉の「平家」の公達のようなものであるから、その後禅と念仏と日蓮を輩出した鎌倉時代にならぬ、虚名虚飾にながれず「確信的、自覚的の立場に至って」社会活動をする青年たれ、という近角常観（1870年生まれ）らの文章が掲載されている。

論調に多少の異同はあれ、論者たちの紐帯は堅固であり、ことばを濫費しつつもその主張はみずからの青年時代を自明の規範としており、現時の青年存在によりそうものでは到底なかった。終極、青年は批判精神など有すべきでなく、本分を「わきまえ」、権威は絶対のものであることを自覚せよ、との強要が「上から」説かれたのである。だがそれに対し、誌上で反論がこころみられた形跡はみあたらず、権威は権威として青年のうえに一定以上機能したことが想像される。

そうして、中学校で5年間をすごしたのちには高等学校や大学へと進むことが自然であるとの認識がすすむと、自由民権運動末期にみられた政治的準備段階としての活動は完全に過去のものとなり、「立身出世」のルートも、整備されつつさきが見通せる程度のものとなりはてる。この時代に、青年が、修養を積むべき存在として「一定の年齢層」に「ひとくくりにとめられるようになったことは偶然ではない」。ほどなく、立志をこそともなうことで「青年」と認識されていた若者たちの大勢は、「学生青年」ともいうべき存在へと移行するのである。¹¹

「青年」が創出される経緯については、近年研究がすすんでいるが、世紀の転換点にあられた「青年」の語がキリスト教由来であり、関連団体においては早くから女子にも「青年」の呼称が適用された事実は、従前かえりみえられてこなかった。だがその気圏で

¹¹ 和崎光太郎『明治の〈青年〉——立志・修養・煩悶』ミネルヴァ書房（2017）pp.164-165

は、男子同様女子にも「有為」がうながされ、彼女らにおいては名実そなわった青年意識が進んでいたのである。

たとえば、さきに引用した「青年」を自称する文章は、キリスト教系女性雑誌に掲載されており、筆者（男性）の呼びかけは「青年」から「青年」へとむけられている。「あゝ『実行』なるかな、我等空想に耽りやすき青年は、特にこの二字を銘記して、その天職を完うすることを勉むべきである」とむすばれる文中で、相手の性別は問われていない。さらに3年後の1908年には、同誌上に「青年てふ事に就いて」という文章がみとめられる。そこでは、筆者自身（無記名だが女性と推測される）により青年の「青二才」たることが嘆じられる一方、「上帝」——天皇をふくむ権威一般でなく——を仰ぐことでこころ安けく果敢にあゆもうではないか、との呼びかけがなされている。「日本基督教女子青年会」の発行していた当該誌『明治の女子』は、睦仁の没する1912年、その名を『女子青年界』とあらためることとなる。

かかるながれにあり、1906年に起きた岡山県山陽女学校の学生・松岡千代の自殺は、大半のメディアからは黙殺されたが、男子と同時代的に女子の青年性が先鋭化した例として注視される。したしかつた友人にあてた松岡の遺書は、「我最愛の姉君よ……」とはじまる。「幽明遠く隔て永久に見えざるべし、されど妾^{わらわ}が君の妹たるべき事のみは、永久にゆるしてよ。「十月以来の本懐はじめてこゝに達す、あゝ何等の愉快ぞ……痛絶……快絶……」。「死は塵の世を通るべき、只一すじの道なるを、好機ありぬ今既に我は決せり」。

署名には「巖頭に立てる狂暴極まる生存不適當者より」と記されながら、松岡は文中で、己の死は藤村にまなんだものではない、とことわり置いている。「本懐はじめてここに達す」の意は、彼女が以前にも殺鼠剤を飲み自殺を図りながら、すぐに発見され未遂に終わったことを指す。松岡の死亡時の年齢は、藤村より1歳年少の15歳で、死因はひそかに入手した亜砒素を飲んだことにあった。彼女は生前、自分は12歳のころよりこの世がいやになったので、早くあたらしい世界に逝きたい、「狭隘なる天地に彷徨うのは既に倦怠に堪えない」と友人に話していた。寄宿舎に入ってから、立石哲、古谷秀と一室で生活しており、「元来キリスト教を信じ」教会に足しげく通うほかは散歩程度の外出しかしなかった、とつたえられている。¹²

だが同紙は、自死の主たる原因に「女子教育の罪」をあげた。「我邦の女子教育は、其根本義を文部省により賢母良妻のうえに置く」と示しているのに、省令は死物となっており、特に高等女学校以上において、一知半解にもかかわらず「彼等」が人生観を談じたり哲学を語ったりするのは、賢母良妻教育と「相抱擁親和」すべきだろうか？ 「生物識^{なまものしり}のハイカラが賢母良妻の資格なきは、無學文盲の野郎よりも甚だし」く、「我が國俗を敗るもの、其れ女子教育ならん哉」と断じている。¹³

1870年にスタートを切った日本近代の女子教育は、その時点ですでに30年以上の歴史

¹² 「山陽女学校生徒自殺」『山陽新報』1906年1月27日付夕刊

¹³ 「山陽女学校生徒自殺」『山陽新報』1906年1月30日付日刊

を有しており、学生たちは男子同様少数のエリートといえたが、社会の反応は決して好意的なものではなかった。彼女たちにおいて、フェミニンな外貌の美をたたえられることと「男装」のような身なりを糾弾されることは表裏一体で、そこにはしばしば「性的な」視線がともなわれた。ほどなく、当人たちの意思にかかわりなく「知性という牙を抜かれた」女子学生の表象は、新聞小説を中心に恋愛の対象としてはなやかにえがかれていくが、そのさきには、「墮落」の言説が待ちうけていたのである。¹⁴かかる状況にあり、松岡の遺文にみられるむしろジェンダーレスで確信にみちた態度は、煩悶する男子青年よりもはるかに危険な存在と認識されながら、しかし女性であるがゆえ——「青年」とはみなされず——、黙殺されたのではないかと推測される。

第2節 「個」のゆくえ

修養論者が知育よりも徳育をおもんじていたように、学校教育批判の文脈で説かれた「修養」の成立は、学校階梯をのぼるエリート以外にも一定以上の教育を受けた青年を、国家を「変革」するのでなく「ささえる」国民とすべく、その素地をはぐくんでいった。¹⁵

第3期のはじまりにおいて「非戦論」の中心人物となった幸徳秋水と堺利彦はともに第1期初頭の1871年生まれであり、世代的には修養論者たちにちかく、藤村は第2期開始年の1886年生まれ、日比谷焼打ち事件につづく一連の都市騒擾事件に参加した丁未倶楽部¹⁶の鈴木正吾は1890年生まれである。幸徳や堺の若年には、「壮士」と「青年」が併存していたが、藤村や鈴木は、壮士的实践を知らない世代である。藤村は早世するが、第2期に青年時代を送った者にとって同時代的な「個」としての自我は、その後どのような発露をみせたのであろうか。

たとえば、初期の都市騒擾に組織化はみられず、浮遊する「個」は、それゆえに一層不気味な勢力として元老らから警戒されていた。¹⁷しかし暴動に連座したとはいえ、鈴木のような「院外青年」は、社会主義的思想には共鳴せず、議会主義的立場を堅持していく。鈴木は、1913年、明治大学政治科卒業後、以前から私淑していた茅原崋山にしたがい、同年に創刊された雑誌『第三帝国』の政治評論担当記者に就任した。茅原による自我と国家の補完的調和を謳う「益進主義」に共鳴する彼は、個性に立脚した社会の建設を説きながらも「新愛国主義」にいきつくこととなる。1932年には第18回総選挙で当選し、国民同盟の結成に参加、第21回選挙すなわち「翼賛選挙」（1942）後には、東方会に加入する。

¹⁴ 平石典子『煩悶青年と女学生の文学誌』新曜社（2012）pp.74-76 pp.114-136

¹⁵ 和崎光太郎『明治の〈青年〉——立志・修養・煩悶』ミネルヴァ書房（2017）p.133

¹⁶ 丁未倶楽部は都下各大学弁論部の横断的有志組織であり、雑誌『雄弁』が創刊された1900年ごろから学生のあいだでひろがった弁論ブームを追い風として、急速に組織を拡大した。

¹⁷ Gordon, Andrew. *Labor and Imperial Democracy in Prewar Japan*. California: Berkeley UP, 1991. 26-42.

後援勢力や財力をもたなかった鈴木が、「院外」から「院内」へと移行しえたのには、学生時代にきたえた「雄弁」術が効力を奏していた。院外青年運動は、それ自体議会政治の担い手をめぐる世代間対立を惹起するものとして出現したのであったが、鈴木は青年層や新有権者層につよくアピールし、彼らの票を取りこんでいく。¹⁸

他方で、暴動の一翼をなした労働者たちの大勢は、社会的「上昇」の野望をいだきながら下層の生活を余儀なくされていた。都市に流入した肉体労働者の第一世代が、社会内上昇をすみやかに遂げるのはきわめて困難であったが、単身者は結婚し世帯をもつことで、勤労意欲や教育熱を再生産する。¹⁹ そうして世帯をもち「家」の永続に努める彼らは、家族国家観に立脚する近代天皇制に唱和し、その担い手となっていくのである。

また、一高を中心とする藤村と同世代の青年たちは、一般の冷嘲をよそに藤村の死を「もっとも純粋に美化し象徴化して、一種の神話作用を推進し」²⁰ながら、教養至上的な気圏を築いていった。籠城主義や勤儉尚武、修養といった前代には自明であった青年のありかたに不信をいだき、「我に理想信仰」をあたえるものは「我」であり、他の一切は「従」だと考えた点において、彼らは同時代性を有していた。しかし、修養にかわってもとめられた「教養」とは、そもそも単なる知識技術の習得ではなく、観念にとどまるべきものでもない。にもかかわらず、藤村の遺体を引き取りにおもむき「我が友を憶ふ」をしたためた安倍能成や、それから10年後に青年たちの愛読書となる『三太郎の日記』を発表した阿部次郎は、現世を低しとするような「内観」に、自我至深の要求をあきらかにしようところみる。だが、終極彼らにとっての「個」とは、世界の認識への出発点であって、ふるい自我を超越しあたらしい自己に到達することではありえなかったのである。²¹

彼らの軌跡を概観すれば、「個」の覚醒によりいったん引き起こされた遠心性は、やがて世俗的な自利の心性や、特権的エリートイズムに回収され、ついには国家の求心性と共振をはたしていったのだといえる。それでは、かかるパワーに追従せず、彼岸へと一気に跳躍した藤村や松岡のような者ともことなり、生の側にとどまりながら個たることをつらぬこうとした青年がいたとすれば、「彼」はどこに存在したのであろうか。

第3節 見神と死

しかし、大方の罪悪では偶像教徒が無神論者と肩を並べるにすぎなかったとしても、神に対する最高の大逆罪では無神論者を凌いだことは確かです。(中略)
日本人は今日でもそれとよく似たことをしています。

¹⁸ 伊東久智『『院外青年』運動及び同運動出身代議士と選挙——鈴木正吾と西岡竹次郎を事例として——』『日本選挙学会年報』北樹出版(2016) pp.5-8 pp.11-12 p.14

¹⁹ 藤野裕子『都市と暴動の民衆史——東京・1905—1923年——』有志舎(2015) p.175

²⁰ 高橋新太郎『『巖頭之感』の波紋』『文學』第54巻第8号 岩波書店(1986) p.16

²¹ 助川徳是「良心の実践(下)」『文學』第47巻第10号 岩波書店(1979) p.25 p.32

ピエール・ベール「神に対する大逆罪において、偶像教徒は無神論者を凌ぎしこと」²²

日本近代に整備された制度のうちで、国民を統合する手段として、あらゆる根幹におかれたものこそ近代「天皇制」であった。だが、その象徴が「禁裏」の奥から呼びだされたとき、「破局へ」と舵はすでに切られていたのではないだろうか？ 当該の制度の疑似「宗教」性は、人間の精神から「尊厳」を収奪し、究極的に存在をたちゆかなくさせるような虚無を供給することとなる。公的制度の創設に際しては、信教をはじめとする人権の確立が不可避的であるにもかかわらず、天皇制を戴く大日本帝国憲法に規定された「信教ノ自由」とは自由とかけはなれた内実であり、諸矛盾の基をなす。教育勅語に謳われた「教育」の淵源が「天皇を中心とする日本の国体にある」という取りきめは、人間の自律を、成長過程においてあらかじめくじこうとするものであった。そうして、「現人神」の公式化と、青年における煩悶の顕現が期をおなじくしているのは、決して偶然ではない。

「煩悶」は、当時からさまざまな角度において分析されてきた。だが本論は、その根本に、現前する世界の虚構をささえる「ことば」への不信を指摘するものである。「語る」生き物を人間として再生産するため、交わされることばを宰領し理性を制定すべき「超越者」の置かれる場に、生身の人間が据えられるのであれば、それにより生じる「狂気」の「代償」がもとめられねばならない。²³

たとえば藤村の遺した辞世には、哲学をいくらまなんだところで世界の真理をつきとめることなどできないという絶望と同時に、「ことば」からの解放があらわれている。宇宙の真理をつきとめられずに煩悶したものの、いまここに立ち、ことばを語らぬ大自然と対峙するに至り「胸中何等の不安あるなし」というのである。彼は神の似姿をした人間を仰がず、あるいは生命とひきかえることで、ただ一度神の位置に立とうとし、たかみから眼下にひろがる世界を「俯瞰」したのではないだろうか。そうしてより透徹した境地をもとめ、むしろ生のエネルギーがきわまった地点で、此岸から彼岸へ跳躍をしたのだともみなされる。それは、一極に求心力をつよめながらやがて破局へとむかう——ことばの無化が人間の供養をとめどなく必要とする——場から、あらかじめ身を引きはなそうとするリチュアルな行為だったともいえよう。生前の藤村は、キリスト教にひかれながら「信仰はほしいが得られぬ」と語っていた。そうであれば、模倣ではないとことわりつつ松岡がもちいた「巖頭」の語には、「青年」の精神的共振がみとめられるのである。

藤村の死の直後、キリスト教系雑誌『新人』には「青年思想界の暗流」という題の社説が掲載された。冒頭から「現在は煩悶の時代也、失望、倦怠、自暴自棄の暗潮は混々流れ止まざる也」とはじまり、「煩悶」は、「意義なき」ものであり「厭うべき」感情主義による神経衰弱症だとの分析がなされる。青年における「感情主義」とならび、「批評主義」が不健全であるとされるのも、上述した修養論につらなる見解である。信仰は「一念専

²² ピエール・ベール『ピエール・ベール著作集 第1巻 彗星雑考』野沢協訳 法政大学出版社（1978）pp.210-211

²³ ピエール・ルジャンドル『ピエール・ルジャンドル第8講 ロルティ伍長の犯罪 父を論じる』西谷修訳 人文書院（1998）pp.105-106

往」であり、比較研究などする性質のものではないと「不拔の信仰」が鼓吹されつつ、感情主義の結果は惑溺のみ、批評主義の結果は懐疑のみ、懐疑と惑溺の最後は自滅のみ、と断じられる。最後に、著者は「有為の諸君よ」と呼びかける。これらの主義を棄て、「自我発展の大活動を」こころみ「努力精進の大意力を發揮」せよ、「永遠の安撫は活動の中に在り、活動は唯一の救済、唯一の解脱なるを知らざるか」と。だが、肝心な「活動」の内容は一切語られていない。²⁴

同紙上に、当時第一高等学校在学中であった20歳の魚住折蘆（影雄）は「藤村操君の死を悼みて」を寄せた。社説が、藤村の自殺に直接言及しないながらも、彼を意識したところで「煩悶」を全否定したのに、真向から挑戦するごとく論を展開している。「——あゝ軽薄の風世に満ち偽を知らざる至誠は君に凝りて姿を潜めしか、君をして時代の煩悶を代表せしめし明治の日本は思想の過渡期に當りて實に高貴なる犠牲を求めぬ。之を思ひ嘆じては惜むの情にたへず、惜んでは尊敬の情ますます加はるを覺ゆ」。前年の秋、魚住自身が信仰の「混惑」におちいり死を思い描きながら、藤村に告げえなかったことが述べられ、それへの後悔と同時に「永久の静寂に入」った友への限りない共感がつづられる。「君は人生の迷疑に苦んで自ら死に我は神の光明に慰められて残りぬ、君は君の生を私せず至誠の動くところに従へり」。²⁵

年長の修養論者は、青年の精神的混乱を避けるという理由で、ふかく考えたりせずに「まずは体をうごかせ」と素朴にすぎる提言をおこなった。社説のいう「活動」も、社会において目にみえるかたちでおこなう「なにか」であり、現前する世界を凝視し思索をふかめることは活動とみなされていない。かかる「智」をかるんじる姿勢にも、おそらくは裏の意図をかぎとり、彼は痛烈な論駁を加えている。「若し萬有の真相之を悉す能はずして、人間死後の永世なきを觀ぜん日は我行かむ所も華嚴の灌のみ、行きて奇寒の洗禮を受け以て此世を辭せむのみ。陋劣なる情感を懷き臭骸を擁し死肉を運んで揚々たるものに何の意義かある、心ある者豈彼等と相伍して蜉蝣の世に常住を装ふ事を得むや」。「今日の殉教は肉體の死に非ず寧智腦の問題也、時あつてか藤村君の如き死をも要す。然るに誰ぞ基督の教會を以て偽善者の潜伏所となさしめたるは」。²⁶

批判精神をねむらせ、問いを封じ、世俗的權威に唯々諾々とすることはむしろ信仰の喪失なのだとして魚住は端的に指摘する。「夫れ信仰は生命也、信仰が人格となり指導となるに非ずんば信者に非ず、予の信仰は予が人格全體を運轉しつゝあり、何ぞ其内容を研究せざるを得んや、而して研究は疑團を生ず、予は懷疑を経ざる信仰を耻づ、今日猶理性を壓圧し目前安慰の情感を満し不合理陳腐の教義を固守し、廿世紀の朝暘を見て猶ユダヤ人の神を拝するが如きは予の與せざる所なり」。²⁷

²⁴ 「青年思想界の暗流」『新人』第4巻第7号 新人社（1903）pp.1-3

無記名であるが、主筆の海老名によるものと推測される。

²⁵ 魚住影雄「藤村操君の死を悼みて」『新人』第4巻第7号 新人社（1903）pp.28-30

²⁶ 魚住影雄「藤村操君の死を悼みて」『新人』第4巻第7号 新人社（1903）pp.30-31

²⁷ 魚住影雄「藤村操君の死を悼みて」『新人』第4巻第7号 新人社（1903）p.31

「煩悶」は社会の矛盾から胚胎したものであるにもかかわらず、それを全面的な非としたうえで責任を青年存在の側へ全面的に押しつけかえりみよしない姿勢が、権威によってほころびを隠蔽しようとも、彼は虚偽を看破していた。遺骸の未だ揚がらない故人の記憶もなまなましいときにあり、悲痛な調子ではじめられたこの辞は、一転してほころかにむすばれる。「煩悶上下の裡一道の光明我を率ゐて天邊に至るを見る、予輩の信仰に理想の復活あり予輩の道徳に希望の光存す」。²⁸

一方、主筆の海老名弾正は、つづく『新人』誌上に「健全なる人生観」の連載を開始する。彼は、健全なる精神は健全なる身体に宿るという常套句からはじめ、健全なる人生観も健全なる精神に宿るのであり「或方面から言ふと、人心は、恰も鏡の如く萬物を映して見るが、又或方面から言ふと、自分の姿を萬有に映して見る、即ち、自己の不具的の姿を萬物にうつして見るのである」と応酬している。さらに、懐疑を経ない信仰を恥じるといった魚住を意識し、デカルト、カント、ヒュームのごとき「疑」は、不健全でなく根底に「真面目なる」信念を有しているが、それとは別に存在する「軽薄なる」疑は、天地のことは到底解せられぬので「一寸こころで死んで見ませう」というようなすこぶる「不真面目な」ものだという。

彼藤村氏の如き、天地人生は不可解なりと稱し、華嚴の巖頭に立つて、有為の身を水中に投じたのは、誠に同情に堪へぬが、兎角、青年の時は、餘りに物事を極端に考へ、容易に成し得ると信じたのが、一たび頓挫すると非常に失望する者であるが、僅か一年位考へて見て、不可解とは餘りに性急ではないか。是れ人の智を餘りに安く見、人生を餘りに軽々しく見た誤りである。ア、一二冊の哲學書、一二の研究でどうして人生が解釈されるであらうか。茲には慥に一種病的の所があると言はねばならぬ。もし夫れ、健全なる頭脳であるならば、今少しく考へて、智に於て^{エンジョイメント} 怡樂を得つゝ喜んで研究してゆくべき筈である。然るに彼は直に人生は不可解なりと叫んだ。

ア、不可解、是れ慥に智的死である。彼藤村君の如き、瀧壺に投ずる前に、業に已に彼の智は死んで居つたのだ。²⁹

そして結論は、修養論者の大勢とおなじく型通りの武士道礼賛にたどりつく。総じて日本人は悲觀的——仏教の移入以来——だが、悲哀に落ちず、俗にながれず、士気を維持していたのが武士であった。「真の^{クリスチアン} 基督者こそ此武士の後を継ぐべき者で、^{クリスチアン} 基督者こそ真に古武士の精神を完全に傳へる者であらう」。³⁰

さらに、次号で海老名が展開するのは、時流に随伴した家族国家観である。人間は、生長しては家庭をつくるべきで、さらに社会、ひいては国家にかかわるのでなければ、人生

²⁸ 魚住影雄「藤村操君の死を悼みて」『新人』第4巻第7号 新人社（1903）p.31

²⁹ 海老名弾正「健全なる人生観（其一）」『新人』第4巻第9号 新人社（1903）pp.28-29

³⁰ 海老名弾正「健全なる人生観（其一）」『新人』第4巻第9号 新人社（1903）p.31

の意味は解釈できない。親が老いても成長する子のなかに生きていくように、国家を担う人間は、死んでも精神は国家のなかに生きるという。たとえば禅などでは死の覚悟をするが、死んで終わりなら意味がない、それより死なないと自覚したほうがよいではないか、と指摘する。「思を世界人類に灌いで居る人は容易に死ぬとは出来ない」。³¹

だが、彼の明白な矛盾は、一方で「世界人類」といいながら最上位に限定的な「国家」を置いたことにある。ほどなく日露戦争が始まると、海老名は、戦争を礼賛すると同時に先祖崇拜を「至誠」のものであると評し、帝国主義的海外膨張を肯定していく。そして、「国民」に語りかけられるのは「世人が教育をへたる青年を以て、単に己が私利私益を増進する道具とし、日當の用事を便ずる婢僕とすることなく、之を目するに國家公共の愛児を以てして其長養を謀り、之を取扱ふに文明進歩の戦士を以てして之を激勵するに至らざれば、よく堅實透徹の學風を作興維持して、國家膨張の氣運に副ふ能はざる也」という辞なのであった。³²

一方魚住は、藤村の死から1年後に「自殺論」を第一高等学校の『交友會雑誌』上に発表し話題を呼ぶ。日露戦争が遂行されるなか、彼は故国や血縁、朋友がいかにばかりのものであるか？ と問い「人の尊嚴は其自主自由にして外界の支配を受けざるにありと悟らずや」といいきった。彼は、生涯信仰のうちにあるながら「宗教を斥け、道徳を排し、人格を忘れ智識を棄つるに非ずんば遂に真相を徹見する能はず」と断じ、決然と、自身が恥じることなく選ぶものが「狂」「自殺」「信仰」であると述べている。³³ ここで魚住が、形式としての「宗教」と精神的な「信仰」を、峻別している点は重要である。

もとより「青年」存在が外側から召喚されたごとく、戦争に駆り立てられていく現今の青年の群れを身近にしながら、彼は、みずからの意志で生を終わらせえた藤村を至上の者としつつ、存在の淘汰される予兆に「全靈」で抗していたのではないだろうか。

「永久」の姿は煩悶に在り、「無限」の面影は懊悩にあり。至誠は激烈ならしむ、狂熱の外に生命無し。現在に於て現在を解するに他人の教訓何の價値あらんや、今年今月今日今時今分今秒に於て自己の生存の意義を解せんと欲す。今年今月今日今時今分今秒の主觀の要求を以て、我世の舞臺を回轉せしむる外に又他岐あるべからざる也³⁴

魚住は、社会主義に共感しながらも実践には移すことなく終わったが、非戦主義に関しては、自身の「基督教的博愛觀」から当然のものであり、戦争を輕蔑し非とするのは至当であるとし、たとえ死刑を宣告されようとも徴兵を拒絶するという覚悟を示している。彼が藤村にみずからをかさね「歴史的傳承の舊物を否定せずして新天地を開拓せしもの古來幾

³¹ 海老名弾正「健全なる人生觀（其二）」『新人』第4巻第10号 新人社（1903）pp.12-15

³² 海老名弾正『『膨張的國民』の學徒に對する態度』『新人』第5巻第3号 新人社（1904）pp.1-4

³³ 魚住折蘆「自殺論」『明治文学全集 50』筑摩書房（1989）p.294

³⁴ 魚住折蘆「自殺論」『明治文学全集 50』筑摩書房（1989）p.291

人かある。先づ假定を棄てよ、假定は時代と周囲が與ふる妄想なり」³⁵と語ったアナーキーな精神は、出発点において知識としての「教養」を共有しながら、ほどなく自己の内観に沈潜していく学友たちにはみいだしえない。

そして、自身が27歳で死去する1910年に書かれた「穩健なる自由思想家」で、魚住は同年に起きた大逆事件により強化された検閲制度に関して、自由思想家の態度のなまぬるさを糾弾しつつ、これを契機に新思想の意識が徹せられるなら痛快でもある、と語る。

「従来氣の宜い自稱自由思想家や文士達は、社會主義者や無政府主義者が蒙りつゝあつた抑壓を對岸の火災視して、其或ものは自分の立場のそんな危険な極端なもの一つでない明りを立てようとした。彼等は其自由思想家たる點即ち文明史上に於ける位置に於て彼我同列に在る事を氣附かなかつたり、氣附いても氣附かぬ振りをして居つた。不明に非ずんば情ない根性である」。³⁶

魚住において、ことばは思弁にとどまるのでなくひろい世界へと発信され、さらに、現在から未来を先見するために「みる」ことが重要視されている。魚住は主張する。自由思想は、人類が自己をオーソリティの束縛から解放せんと、長きにわたり努力した結果である。これが虚偽であるなら、われわれは「人文の歴史を疑はねばならぬ」。もとより新思想は犠牲を要する。「犠牲は個人である。進むは思潮である」。³⁷

己の信仰に「至誠」を賭けた魚住は、その早い晩年において、「予が見神の實驗」(1905)を著した網島梁川(栄一郎)からつよい影響を受けることとなる。第3期のはじまる1904年は、網島にとっては光耀の時代であり、1年に3度も「稀有の光明に接」した経験を語っている。それは、自身が神を直接みるのではなく、眼前にひろがる自然の光景を神と「ともにみた」という意識であった。網島には、己の眼が靈化されたようになり、神とともに世界をみていること——「神我の融合」——が、刹那に信じられたのだった。³⁸

網島は、17歳のとき岡山県の高梁教会で古木虎三牧師から洗礼を受けた。しかし、東京専門学校に入学し『早稲田文学』誌上で評論を書きながら、本郷教会や一番町教会に通ううち、神学の「正統」を懷疑するようになる。結核療養中に、海老名弾正と出会い信仰を回復するが、禅宗や浄土真宗などからもまなびつつキリスト教「信仰」の立場を生涯すてなかつた。喀血をくりかえしながらも感覚を研ぎ澄ましていった彼は、1907年に34歳で死去し、魚住に衝撃をあたえる。³⁹

20世紀初頭に完成した天皇の神格化により、煩悶を経た青年の至誠は、現人神の宰領することばの世界をはなれ、不可視の「神」を「みる」ことに賭けられていったともみなさ

³⁵ 魚住折蘆「自殺論」『明治文学全集 50』筑摩書房(1989) p.292

³⁶ 魚住折蘆「穩健なる自由思想家」『明治文学全集 50』筑摩書房(1989) p.309

³⁷ 魚住折蘆「穩健なる自由思想家」『明治文学全集 50』筑摩書房(1989) p.310

³⁸ 『文語訳 新約聖書』岩波書店(2014) p.16

「幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん」。(マタイによる福音書第5章8節)

³⁹ 虫明玢 行安茂編『網島梁川の生涯と思想』早稲田大学出版(1981) p.11 pp.32-48 pp.249-251

れる。海老名のような初期のキリスト者が、キリスト教信仰に矛盾をきたしながら、それと直接対峙することに目をふさいでいったのと対照的に、魚住は同時代の疑似「宗教」——家族制度と不可分の——を的確に記述した。

人よ、人よ、汝が頭上に大なる壓力の加れるを感ぜずや、これ祖先より傳承せる亞細亞の空氣なり、其道德は良心の自治を許さず、崑崙を取つて人の頭上にかざす、誰か能く此壓迫に堪へ得んや。良心繫縛せられて何ぞ理想の自由あるを得ん、況んや之が體達の自由をや、内に然り、外亦然り、其帝王は人為的神聖を装ふて上より壓迫し、其家長亦之に倣つて家庭に靄氣無し。⁴⁰

「神」と現象の世界をめぐる切実な問いは、世紀があらたまり 10 年が経過した——大逆事件が起き、魚住が病死する——ころ、いったんは姿をひそめたようにみえながら、かたちを変え精神的に引きつがれていったものと考えられる。近代が終末へとむかう第 4 期の開始される 1922 年の翌年、関東大震災が発生するが、その混乱のおさまらないなか、間近い将来に「天皇」と名ざされ戦争の遂行を統帥することとなる若者にたったひとりで銃口をむけた青年がいた。前者が無傷であったにもかかわらず、後者は、天皇制の機能する領域内で、人権を切りすてた前近代的判決により命をうばわれることとなる。

その青年・難波大助は、決行のまえから、親友にあてた手紙のなかで「ことば」による陥穽をたびたびうたえていた。難波の死は、藤村のような自殺ではないものの、決行後におとずれるであろう結末は、十分に知ったうえでの「選択」であった。死刑執行の直前、彼もまた、胸中はやすらかであり今がもっとも幸福であると告白している。難波は、藤村同様無宗教だったにもかかわらず、そのときにあつては、覚醒した理性とともに召命に遭ったかのような精神の高揚がみとめられる。そこには、日本的な、神の存在自体を平生意識にのぼらせないという意味ではなく、疑似的な神性を「積極的に」信仰しないという意味での無神論者の姿がうかびあがる。

第 3 期に存在した流動性が徐々にうしなわれていく日本近代の終末期のはじまりにあり、虚無の象徴とそれを引きはがそうとする意志は、極限的——抹殺するか、されるかの——「対決」のかたちを取ったともいえる。後述するように、大逆事件と称された事件は 4 件あるが、完全なる単独のしかも既遂行為は、難波によるもののみである。青年が、彼の神を可視化しようとする衝迫は、魚住の予言「犠牲は個人である。進むは思潮である」そのままに、死とともにあつた。

第 4 節 煩悶する男子から都市の観察者へ

藤村においては、生の果てに「哲学」の無力さと「自然」の偉大さが並置され、後者の

⁴⁰ 魚住蒼穹「我が来世観と信仰観」『新人』第 4 卷第 11 号 新人社（1904）pp.28-33

優位が確認されながら、現象の世界での踏み出しはならなかった。また魚住においては、知識を棄てねば「真相」を徹見することが不可能であるとの確信がいだかれ、信仰と自由な言論の場にいったんは居場所がもとめられるも、早い死は以後の実践を断つ。彼らにおける「至誠」のありかたをさらに進めるようにして、難波は、ことばによる陥穽を警戒しつつ、雑多な現実とまじわるべく行動に出ることをもはや躊躇しなかった。

そこには、個人の資質もさることながら、時代の推移とともに変化した社会状況がかかわっている。具体的には、加速する都市化と可動性、それにともなう多量かつ多様なリファレンス、濃淡がありながら成りたつ他者とのまじわり等が、より動的な身体と複眼的な視点を彼にあたえたと想像されるのである。

難波は、1918年に受験勉強のため山口県から東京へ出た。その後も、学業と労働のあいだで揺れながら、関東大震災が起こる1923年まで、地元と東京を鉄道で何度も行き来している。1890年代から1900年代にかけ、それまで江戸の人口におよばなかった東京の人口は、前者をおおきく凌駕しており、東京市15区の既成市街地は飽和状態となり、それを超えるあらたな都市圏への模索がはじまりつつあった。そして1910年代には、「大東京」の構想が進み、都市化の進展と国有鉄道による改良計画が活発化していく。日清戦争から第一次世界大戦までの20年間に、農村からその地域ごとの中心である町へ、町からさらに都市への人口集中は順を追って進行し、さらに第一次世界大戦中には大都市への急激な人口集中がすすんだ。1920年の時点で、六大都市の人口は、東京217万人、大阪125万人、京都59万人、名古屋16万人、神戸14万人、横浜12万人となっている。生成する大都市、帝都・東京を難波は、毎日徒歩で経巡りながら、ことなる相にみいった。

未だ「決行」を思いえがかない一学生としてあったころ、彼は親友に宛て、自身が遭遇した光景を書き送っている。それは、しばしば詩形をとった。難波自身には、「文学」をものしようという意識など毛頭なかったであろうが、スピードと流動性のつよい都市の相貌が写真のように切り取られている。そこにおける「視」は、後述する安井にとってのカメラ・オブスキュラのごとく自己と外界の切断でありながら、同時に、「撮る」=shootingとは、求心的「物語」を一閃で「撃つ」謂いであったのではないだろうか。推敲の跡もない的確な一筆書きは、動体視力の高さと周辺視野の広さを証している。

特殊動物

金ピカの騎馬巡查

威しピストル擔つた憲兵

何事だ この十字路！

電車 自轉車 自動車

人迄止る！

立ちん棒の手が一斉に帽子に觸れる

その瞬間——
愚物面が肅々と奴隷共の前を過ぎる
何だ 化物のような風体をして
フブン
それが有名なデモクラチックの風俗かね？
日本の 東京の名物——
デモクラチックと武器の交通遮断！
逆賊不逞の日本よ
お前はこの特殊動物を如何に仕末する？⁴¹

ショック、断片、注意の拡散といった都市の知覚に彼は己を馴致させ、きたるべき日の到来まで、しなやかな行動力を身につけていくだろう。近代に可能となったその力は、視覚的であれ聴覚的であれ、限られた数の刺激をきわだたせたり、それに焦点を合わせたりすることにより、われわれを惹きつけているよりひろい領域から離脱することを可能にするのだ。⁴²

そして、難波におけるもうひとつの「移動」とは、後述するように「移行」ともよぶべき精神的転換にある。身分制度が外面上消失したのち、それが世代を経ながら精神的痕跡をのこし、押しよせる新時代の精神と葛藤するなかで選択された態度ではあった。そこには、青年の煩悶が「困い込み」をやぶったのちにたどりついた、あたらしい世代による「至誠」がうかびあがる。学生青年たる彼は、「学校」という人生のそとへ所与の関係性を抜け出し、他者の住む世界にひとり足を踏みいれていく。その巷間で、書かれた「ことば」ではなく、己の眼でみて体験することにより世界を知ろうとするのである。

日本における近代都市は、そこから半世紀以前の近世よりも現代にとって同時代的である、とかつては指摘された。たとえば、固定された身分制度のなかで生活様式を厳密に統制された城下町と、破壊と建設をくりかえしながら不定形にひろがってゆく都市とでは、外面的には、後者に現在と近似する性質があるといえる。しかし、21世紀に入りすでに20年ちかくを経た今日にあつては、さらなるグローバル化により都市は無個性化し、都市空間には「非-地域」の景観が増殖しているとも評される。⁴³かかるジェネリックな都市空

⁴¹ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局 pp.226-227

⁴² ジョナサン・クレーリー『知覚の宙吊り——注意、スペクタクル、近代文化』岡田温司訳 平凡社 (2005) p.9

⁴³ フランセスク・ムニョス『俗都市化——ありふれた景観 グローバルな場所』竹中克行・笹野益生訳 昭和堂 (2013) pp.44-48「都市空間と農村空間、中心と周辺、大都市と小都市のように、以前なら異なるものと認識するのがふつうだった空間どうしに、形態的な類似性が生じたのである。(中略)——さまざま、都市の間で具体的な空間類型を比較したときにも、空間の無差別性が認められる。(中略)——とくに都市景観は、しだいに個性のない抜け殻と化している。地域は、特定タイプの景観、つまり大都市圏人口によるメディアや視覚を通じた消費を意識し、特別にあつらえられた形態への専門特化を強めている」。

間⁴⁴と当該時のそことでは、「混沌」という意味において懸隔が存在する。

難波の詩にきざまれた皮相のデモクラシーのきわまりは、現在では直接目にするものがない、この時代に噴出した近代化の矛盾そのものである。彼は、露呈された「断層」を凝視する。それは、種々の「限界」をふくみつつも、近代の都市的空間において「可能」となった自律的な視覚といえるのではないか。実際に帝都ですごした期間はわずかでありながら、難波は日本的「デモクラシー」の内実をみすえ、当為を模索した。

最終的に、それは藤村とはことなり未来へつらなることを確信しての、しかし「死」という着地点においてはひとしい跳躍となった。「青年」たる彼は、「個」のままで、現前する世界の虚構——仮のかまえであり代替可能の——にゆさぶりをかけようとする。視覚的な把握も、意味をもとめる以上ことばを必要としており、ことばから完全に自立してはいない。しかし、この時期に生じたことばに対する広汎な懐疑は、近代的「視」と密接にかかわっており、それが彼をして、パワーへの迎合や醇化された観想への没我から自由たらしめたのだと考えられる。

帝都はまた「他所者たちの都市」であり、難波のような地方出身者のほか、多数の外国人が居住しており、彼らのあいだにも国家を超えた「青年」的共振はみとめられる。当時、外国人を主体としたきわめて流動的な無数の紐帯が、ときに日本人をまじえ、集合と離散を繰り返していた。たとえば「東京市外杉並町高圓寺四二」在住であった金近烈は、「彼は凝視する」(1928)で語りかける。

世紀末であるか、過渡期であるか、——現代を正視して居ながら、獨り自らの世界にのみ籠ることの卑怯さを感じない者はないであらう。若人の胸に暗示された未来の世界の建設の為に、雄々しく邁進する者こそ人間として當然の義務であるに違ひない。

若人（彼）は悩んで居る。

若人（彼）は凝視して居る。⁴⁵

難波と同様、徹底して天皇制を糾弾した金子文子も、港都・横浜に生まれ移動のうちに年月を送り朝鮮人との共働をおこなうようになるが、ついには帝都・東京で検束され死刑判決を受ける。その過程で、示威性を有した集団行動における街気は徐々に立ちきえ、裁判過程でたったひとりになったとき「ことば」は明晰さをきわめる。収監された独房で、死を覚悟したのち、金子は憑かれたように歌を詠みはじめた。

⁴⁴ レム・コールハース『S,M,L,XL+：現代都市をめぐるエッセイ』太田佳代子・渡辺佐智江訳 筑摩書房 (2015) pp.10-42 「ジェネリック・シティは中心の束縛、アイデンティティの拘束から解放された都市である。[……] それは歴史のない都市だ。大きいからみんなが住める。お手軽だ。メンテナンスも要らない。手狭になれば広がるだけ。古くなったら自らを壊して刷新する。どこもエキサイティングで退屈だ」。アイロニカルな表現でありながら、ハースはかつてあったものが消失したのではなく、ジェネリックなものが現今「ある」のだと肯定的にとらえようとしている。

⁴⁵ 金近烈「彼は凝視する」『文章倶楽部』新潮社 (1929) pp.151-152

しかし、疑似宗教としての天皇制が、贅としなければならなかったものこそがその「理」だったのである。

藤村や松野が嘆じた「狭隘な」場所の感覚は、難波や金子のように 20 世紀が明けるころ生まれた者が成人する時期には、増幅された可動性や参照軸としてのリファレンスの増加、広範なネットワークなどから、革新の契機がみいだせるように変化してきていた。換言すれば、限定された場所でかかえこんでいた煩悶には、すみやかな解消がもたらされたわけではないものの、青年の良心の実践にはあらたな選択肢が加えられたのだといえる。

上述したように「青年」のあゆみは国民国家の創出とかかわっていたが、彼らにほどこされた教育は終極、日本的「宗教」である天皇制を基とした国体に規定されており、自我はそこに組みこまれるべく運命づけられていた。第 3 期がはじまる 1904 年、魚住が指摘したように、良心の自治を取りあげられ公正な「體達」の活動もうばわれたまま出口をなくした青年の「至誠」は、しかし第 4 期の開始時にきわめて鮮烈な発露を示すこととなる。全体のうちではマイノリティであるといえ、この時期に己を恃んで「決行」に出る青年が出現したのには、都市的な環境における個の覚醒の一方で、虚構の求心力が低下していく大状況が影響していた。

1910 年に起きた近代初の大逆事件・幸徳事件後、自由思想には冬の時代が到来したといわれながら、ほどなく睦仁が死去し（1912）、天皇の代替わりがおこなわれると、つよい国父たる天皇像にはゆらぎが生じる。新天皇の嘉仁は、おさないころから病弱であり、結婚後一時的に健康を回復しながらも政務に疲弊し病を発症したため、公的場にはすがたをあらわさなくなっていた。そこで摂政を務めた皇太子の裕仁は、上述したように、彼らと同世代である 20 世紀初頭生まれ（1901 年）の若者だったのである。

当該期に、外国の思潮は出版産業の興隆にともないさかんに流入し、共産主義は 1917 年のロシア革命の成功により決定的に印象づけられる。父権の低下、革命の可能性、さらに第一次世界大戦後の国際協調路線へのシフトは、「青年」をふたたび強度のある理想へと駆りたてた。特定の信仰の有無にかかわらないしかし宗教的な徹見、「理」の追求、そして朋党からの自由にささえられた超俗的な精神は、いったんは命脈をほそらせつつも第 3 期を通じてつらぬかれたものとみなされる。とりわけ彼らの「青年」的純度は、早い生のおわりに立ち、日本近代における虚無の淵源を「凝視」することで、超越者の不在を同定したのだった。

ことばの無化を乗り越えるべく、難波や金子は生身の個人による社会的実践に踏みだしたが、同時期に他方では、視覚と言語における往還的表現の追求がみとめられる。メディ

⁴⁶ 金子文子『金子文子 わたしはわたし自身を生きる——手記・調書・歌・年譜——』鈴木裕子編 梨の木舎（2013）p.380

アの発達、人間の身体的拡張にとどまらず、編成された秩序や規範に対する「変更」の可能性を生じさせていき、なかでも視覚メディアである写真 (picture) や活動写真 (motion picture) ——映画は、言語ではあらわしえぬ領域の提示により、言語表現の側を対象化した。写真や映画は、あるときに完全なかたちで誕生したのではないが、あたらしい歴史を有する視覚表現は、発明されてまもなく広範に拡散され、早い時期に日本でも受容されていた。

関東大震災 (1923) に誘発された惨事を契機とする「事件」後、難波は 1924 年 11 月に刑死、金子は 1926 年 7 月に自死するが、同年 12 月には嘉仁も病死している。明けて 1927 年 1 月、『探偵趣味』に発表された渡辺温の掌編「兵隊の死」には、「青年」の後進たる「新青年」による自由な死の変奏が看取される。春の一日、野原にねそべった聯隊きっての射撃の名手である青年は、「ホリゾン」のような青空めがけ引金をひくと摘んだ花を胸にまどろんだ。数分後、弾は彼の額を撃ちぬくが、死因を調べにきたシャアロック・ホルムスの 19 世紀的観察眼は、兵隊の心に宿っていた「最も近代的なる一つの要素」を検出し得なかったのである。

渡辺の作品は大半が短編であるが、初期映画との出会いは彼に、表現の自律にかかわる徹底してみじかい形式と、そこにいあわせている「見物人にむけて外向きに作用する」ような表現——「読ませる」というより「みせる」——を選択させた。声楽や舞踏を習い、楽器を演奏し、雑誌の編集でコラージュ的实践をおこなう彼は、言語に限定されない表現の可能性を摸索しつづける。

また 1920 年、前出の『女子青年界』に「自由と責任」を寄稿し「自由を憧れる心は徐々に民衆を暴君の手から、奴隷をその雇主から、児童を専横な親の手から、労働者を資本主から開放して来ました。そして最後に残された大きな事業は婦人開放 (原文のまま) だと思ひます」と書いたささきふさは、1926 年、『映画時代』に掲載された「ことよせて」で、「まなざされる」ことと不可分のアフェクテーションに言及している。

ささきはまず、映画の虚構にあらわれるアフェクテーションが、人間の生活や芸術にとって、それ自体なくては成り立たないものであると端的に指摘する。だが、そうであるからこそ、スクリーン上でそれを「みせつけられる」のは耐えがたいのだともいう。さらに、かかる興醒ましには、ジェンダー的視線の分配——男性性に偏向した——が影響することも示唆されている。

そして関東大震災の 1 年前 (1922)、東京を旅行し英国の皇太子を歓迎するため現れた皇太子の裕仁に、東京の人間が万歳をさけぶのを目のあたりにして、大阪ではありようもないことだと書く安井仲治は、風俗のモダニズムの裏側で軍国主義のたかまっていた 1931 年、メーデーで撮影した写真を「凝視」と題し発表する。

1941 年、目前に迫る自身の死と世界の破局の予兆を、二重写しに幻視するごとく、安井は「鏡」で闊達につづる。

無限大の鏡。十万界を映じ尽して自ら曼荼羅なす鏡。かようなものはひっきょう人間の持物ではない。聖人と雖も難く、せいぜい想像してみても結局無色透明。有りと無しの境のものであって、あまりの広大無辺は虚無に近いのである。(中略)

鏡に姿がとどまるならば、とどめたしと紅毛人の苦勞凝って写真術となる。⁴⁷

過日に「寛永5年」の著である訥庵居士大橋順の『關邪小言』を読んだ安井は、その「反動論」を、「今の世につらつらこれを読めばいろいろの意味で微苦笑ものだが、一つには訥庵先生の誤りを再びするような言説の横行を知り、二つには訥庵先生の国を憂うの情に一脈の真ありて、戒心の要を覚え誠におもしろい」という。ペリー来航の前年(1852)という時期にかんがみ、「物情騒然かような議論も多かったのであろう」としながら、それ以前のニエプスのヘリオグラフィー1825年、ダゲールのダゲレオタイプ1838年頃、カメラの日本への渡来が1842年、カールツァイス創立1846年、佐久間象山の写真研究1850年とかぞえあげてみせる。そして、訥庵が名指した「幻術」もあまりに普通になってしまったのだから、千年後にはどんな「留影鏡」ができるだろうと想像をめぐらせるのである。⁴⁸ 後述するように、安井は、行為としての写真に情熱をそそぐだけでなくカメラ・オブスキュラの眼をつねに意識することにより、日本が破局を経たのちの未来を遠望した。

渡辺は、北海道で生まれ、家族とともに東京、茨城と転居を繰り返えし、青年時代には東京、鎌倉に住んだ。ささきは、東京に生まれ、横浜で養女になり、その後ふたたび東京、鎌倉に転居し、戦時中は伊東に疎開し、最後は東京にもどった。そして安井は、大阪に生まれ、養子となり宝塚に住み、そこから勤務地の船場にかよったが、阪神間をホームグラウンドとしながら写真の関係でときおり東京を訪れている。上述した難波、金子もふくめた彼らの共通点は、東京に滞在する機会はあるしながら、東京生まれの東京育ちで終生東京に居住した者ではないことである。すなわち、彼らは、帝都という近世からつづく近代日本の「中心」を「よぎった」都市の観察者だといえる。また、彼らが東京以外でふかふかかわった大阪や横浜は、帝都とはことなる性格の「商都」、「港都」と呼びうる近代都市であった。

第5節 遠心力としてのアナーキー／アマチュア

5人は、第3期がはじまる(1904)前後に誕生し、第3期がおわるころ(1921)成人する。第3期の開始時つまり20世紀初頭には、上述したように天皇の神格化と、ときをお

⁴⁷ 安井仲治「鏡(Ⅰ)」川崎亀太郎『安井仲治の人とその業績 その3』日本写真会会報第11巻第4号 日本写真会(1965) p.7

⁴⁸ 安井仲治「鏡(Ⅱ)」川崎亀太郎『安井仲治の人とその業績 その4』日本写真会会報第11巻第5号 日本写真会(1965) p.7

なじくして青年の煩悶が可視化される。その意味において、彼らは、20世紀初頭の「青年」を体現しているといえる。日本近代の教育が、国体に規定された教育勅語に依拠していたことは、自我がそこにあらかじめ組みこまれざるをえない状況をつくりだしたが、そのなかで、かかる虚構を直視しえたのには、第一に彼らの出自が影響している。

難波は、地方在住ながら近世から中央とふかいかわりをもつ長州藩の士族の勤王「家」出身であり、つよい政治意識は、近世末の志士がそうであったように、ときに応じて一身をすてることをもいさぎよしとするような理想主義をはぐくんだ。機先を制す身体性、生死を賭して身の置き場を処す哲学は、眼前の機構を的確に把握する洞察力をそなえたものだったのである。

一方、金子は、没落した家の父とかたむきかけた元中農出身の母のもとに生まれ、家庭内暴力やネグレクトを受けながら、父の意向により生涯無籍であった。まなびに対する燃えるような情熱と、無籍のため正式に学校へ通えないことからくる絶望は、しかし「学知」とはなにか？ という根源的な問いを彼女にもたらず。そして、間断ない移動のうちに送られた生は、収監の体験をもふくめ、彼女の「視」を透徹したものにまでたかめるのである。

他の3人に比して経済資本がとぼしいながら、理想を持した難波と金子が、社会を渡っていくにあたり、行動主義に出るのは自然な流れでもあった。両者は、反権力的なアナキストやテロリストのようにしばしばみなされるが、そもそも「権力」対「反権力」のように単純な図式でとらえるかぎり、パワーやドミナンスの問題は抽出しえない。難波や金子において、きわだっているのは、彼らのあらがいが単に情念的なものに根ざしているのではなく、徹底して醒めた「理」にもとづいている点である。アナキズムは、それがどのように特殊な形態をとっていようとも、本質的にある社会「組織」であり、ある経済的・政治的および社会的な教義であって、行為のなかにある理想を通そうとつとめる。⁴⁹ この点にかんがみれば、終局単独行動に重きを置いた両者は、やはり「アナーキー」なのであって、アナキズムの信奉者ではない。

労働運動を中心とするアナルコサンジカリズムとは、とくに難波は積極的にかかわろうとしたが、両者のアナーキーな性質は、なにより天皇制との対峙において発露をみるのである。同時代に天皇制を、虚構と知りつくしそれを積極的に利用する官僚や、最初から非科学的な「かのようなもの」であると理解しつつその矛盾にはかかわろうとしない知識人、また、天皇や天皇制に随順する態度を示しながら裏では軽んじている、あるいは天皇の存在自体意識しない一般人と彼らのあいだの懸隔はいちじるしい。近代日本における「神」不在の時空間にあつて、「理」を希求する両者は、一種の無神論者であり、既存の宗教に反発しながらも、彼らの超俗性はかぎりなく宗教的である。それは、第3期がはじまろうとするころに魚住が喝破した「煩悶」こそがわれを生かすという自照精神であり、「狂」——当該の空間では逆説的にそうみなされる——、「自殺」——みずからを生かす

⁴⁹ ジョルジュ・パランド『個人のための戦い』久木哲・村田美奈子訳 ベリカン書房（1975）p.36

ための——、「信仰」——理性のありかである——が並置されるものなのだ。

関東大震災後の反動期に、「理」を希求するあまり、天皇制と直接対決せずにはいられなかった両者とは別な方法で、安井、ささき、渡辺は、近代日本の虚構を凝視した。彼らは、かかる仮のかまえが可変的な性格を有するものであることを、創作を通じて示唆したが、その態度は、ストレートな表現をもちいた前者とはことなり多分に韜晦をふくんでいる。

渡辺、ささき、安井は、比較的リベラルで裕福な家庭の出身であり、生育の過程で「家」からの抑圧をほとんど経験しなかった。経済資本、文化資本にめぐまれた彼らには、それだけおおくの選択肢が存在したのであるが、手放しでブルジョアの生活を享受することはなく、前時代の立身出世主義的価値観とは相容れない反俗精神を内に秘め、そこに「対抗」を持した。創作表現は手段の一であったが、「理」の獲得にかかわる契機として、安井においては行為としての「写真」、ささきにおいては「キリスト教」信仰、そして渡辺においては「初期映画」との出会い、が挙げられる。各人がむかった対象はことなりながらも、彼らは、アマチュア的立脚点において一致をみる。

アマチュアの語は、古代ギリシアにまでさかのぼり、ラテン語の *amator* に由来している。分野としては、スポーツにしばしばもちいられるが、芸術や、ときには科学技術に関する研究等にも適用される。対象に特別の愛情をもっているが、そのみに専念しているのではないこと、「無償」の行為をささげる者の意がふくまれる。⁵⁰

かかるアマチュア概念は、近代ヨーロッパ、とりわけイギリスで再発見されることとなった。それに関連して、第1次科学の制度化といわれる科学的研究成果の共有は、フィレンツ実験学会（1657-1667）、ロンドン王立協会（1660）、パリ科学アカデミー（1666）が嚆矢とされる。なかでもロンドン王立協会は、グresham・カレッジに参集したメンバーにより発足したものであり、会員制を基としていた。国庫からの補助はなくとも、勅許を得ることにより法人格ができれば、単なる好事家のつどう倶楽部とはことなり出版事業もおこなうことが可能であった。それ以前の清教徒革命時には、ロンドンに実験哲学者のサークルがあり、また、オックスフォードにも、同様のサークルが結成されていた。それらは最初から正式に統括されたものではなく、いわば自主的に生成した「インビジブル・カレッジ」であり、そこにつどう「ヴァーチュオーソ (*virtuoso*)」は、単なる好事家でない自身で研究能力にたけている者を意味した。この時代には、科学それだけにのみ従事する者はいなかったため、大貴族や法律家、外交官、医師などの本職をもつ彼らは、イギリス伝統のアマチュア科学者といえる。17世紀イギリスの科学は、一説ではピューリタンが、カトリック的権威そして先哲の思弁を排しつつ、実験精神や勤勉で有用な仕事を重視するというエートスにより発展させたとみなされる。神への奉仕、あるいは賛美は「無償の行為」に価値を付することを促進した。⁵¹

⁵⁰ 井上春雄『アマチュアリズム』逍遙書院（1968）p.15

⁵¹ 榛葉豊「王政復古期の科学と郷土階級——王立協会と好学者——」『静岡工科大学紀要』第18巻

イギリスには、ほかにも古物研究者、歴史家、考古学者、天文家等、無数のアマチュアと彼らの属するグループが存在した。税率は低く、政治家も、専制君主でさえも大衆の圧力からのがれることのできない国家として、イギリスは科学を公に方向づけることを特例とはみなさず、最小限の介入は、才能を最大限に引きだした。⁵²

従前、指摘されてこなかったが、後述するように安井が所属した関西のアマチュア写真家集団は、ビクトリア朝アマチュア写真家たちとの共通点が多い。日本では、アマチュアといえば、当時から今日にいたるまでプロフェッショナルとしての資質の欠如や不適格を示唆し、最初から軽視されるしろうとのニュアンスをふくんでいる。だが19世紀イギリスのアマチュア写真家は、まだ開発されていない高度な技術にまえむきに取り組み、熱心にまなび、写真に限らない芸術全般を追い、そのうちのひとつとしての写真行為に熱中する存在だった。彼らの活動は、家族や友人と共有され、たがいをたかめ合う関係が築かれていた。アマチュアの伝統には、階級的な構成があり、ジェントリやアッパーミドルは余裕をもって活動をおこなえ、彼らの参加はプロに対抗する威信をあたえたのである。1850年代の10年間、主としてアマチュアのグループにより、イギリスにおける写真研究の有用な焦点が提供された。彼らの写真は、社会的なコンテクストから生じたものであり、そこにおいて美的な価値と学問的な探求、美術と科学は矛盾しない。結社は、アマチュアに占められていたが、肩書はそうであっても、それはプロフェッショナルな写真家集団だったのである。初期アマチュア写真家に比し後期アマチュア写真家は、写真の商業的な価値が高まるにつれ写真界への影響力を低下させるが、年齢をかさねた一見風変わりな彼らは、追従者とみずからに一線を画し、科学者として、医師や古美術商、また文書家として写真への愛に相互にむすびつけられていた。⁵³

関西、とりわけ大阪のアマチュア写真家のグループでも、当初は機材が高価で、写真の完成までには技術と時間を要したことから、中心となったのは余裕のある身分の男性たちだった。イギリスとことなるのは、スタート時のメンバーには、後述するようにより「道楽」的側面がつよかった点である。しかし、安井がアマチュア写真家として、複数のクラブにかかわるようになる1920年代には、イギリスでのように先鋭な感覚で「道」を追求し、技術、精神面ともにプロに迫るアマチュア写真家が増加していた。安井が住んだ宝塚には、当時「阪神間モダニズム」と呼ばれる文化が開花しており、最初はイギリス、つぎ

静岡工科大学 (2010) pp.85-88

⁵² アラン・チャップマン『ビクトリア時代のアマチュア天文家——19世紀イギリスの天文趣味と天文研究——』角田玉青・日本ハーシェル協会共訳 産業図書 (2006) p.6 pp.185-197

高度な物理や数学の理論をマスターし、機材のために出費を余儀なくされたにもかかわらず、ビクトリア朝のアマチュア天文家には、富裕なグランドアマチュアの方で、鍛冶屋、犁職人、靴直し、パン職人等のアマチュアも多数存在した。

⁵³ Seiberling, Gace, *Amateurs, Photography, and the Mid-Victorian Imagination*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1986. 1-4,8

にアメリカからの影響が顕著であった。

一方、渡辺とささきは、主として文筆を通じ表現をおこなったが、渡辺は同時に諸種の表現を模索しつつ雑誌の編集もこなしており、ささきは、書く行為に就いた理由がキリスト教信仰を通じたものであったため、当初から純然たる職業作家や文学者がめざれたわけではなかった。結果的に、作品は価値をみとめられ活字化されていくが、それにより姿勢をかえたり「うけ」を気にしたりせず、自身が希望すること、可能性があることをおこなう伸びやかさは彼らに共通した態度であった。とりわけ、「文壇」がドミナンスを掌握した文学界で、評価のたかい「純文学」や長編小説をみずからものしようという意識はなく、各人は、むしろそれと正反対のジャンルの境界線上にある形式をこころみたのである。イギリスのアマチュア写真家のごとく、芸術行為全般に関心をいだき、そのなかの一として書く手段を採った両者には、創作に無償性をつらぬくアマチュア的資質がたかい。

あらためて、彼らの共通点にかんがみれば、難波や金子が「アナーキー」で、渡辺、ささき、安井が「アマチュア」と、明確に二分されるわけではない。前者も、無償で行為に出たという点では、アマチュア的な前提があるし、後者も、功利的でないことにより、慣性から自由であるという点においてはアナーキーな側面を有する。そしてアナーキーとアマチュアに通底するものは、なににもまして強固な「個」である。それは発露の形態により別物のようにみえようとも、社会への対抗であり、個人の独自性をとり戻そうとする意思なのである。社会は、その構成員の総和とは別物であり、構成員たちは、たがいにかたまることにより、共通点をもった似たものがつよい力を得て、共通点をもたないものを押しつぶす。⁵⁴この点にかんがみ、1人1党を任じ、朋党につらなることをいさぎよしとしない彼らは、先行する世代に対抗的な非「主義」の態度を示すことで、やはり一致している。そして、どれほど表面的にはへだたっていようとも、濃淡はあろうとも、5人には、反ブルジョアの社会主義的な心性がみとめられるのである。彼ら「青年」におけるアナーキーとアマチュアの共振は、求心的な社会の磁場に反して、遠心的な個の力を示す。

第6節 方法論について

日本近代に関する研究は、各種のアプローチを採りながら展開されてきたが、本論が対象とする20世紀初頭に関するものとしては、たとえば「大正デモクラシー」や「教養主義」、「新興芸術派」等、政治、文化思想の運動や主義、芸術における派、また雑誌等を中心とするグループといったマスをあらかじめ措定して分析をおこなうものが主流を占めてきた。あるいは、近代に限定されないが、特定の個人に関する研究は、ごく一般的である。だが、どちらにおいても、すでに記述された歴史のなかでは有名な顔ぶれが繰り返されし登場し、自明のように無名の人物が取りあげられる機会は少ない。冒頭に記したごとく、かかる事象への疑問は、まずそれらと別な方法論を模索させた。

⁵⁴ ジョルジュ・パランド『個人のための戦い』久木哲・村田美奈子訳 ベリカン書房（1975）p.37

本論が取りあげる5人の人物は、特定の同集団に属しているわけではなく、たがいに面識もない。それにもかかわらず、20世紀の明けるところ誕生している彼らには、ある時代精神とも呼びうる共通点がみとめられた。そこで、集団や総体からでなく「点」としての個人から出発し、各人の生涯を評伝のようにまとめるのでもなく、媒介する事象により大枠では彼らをふくめた精神的なマイクロコスモスを描出できないかと考えた。

アナーキーやアマチュアのキーワードに合致する同時期の「青年」は、無論、ほかにも存在するだろう。だが、5人を選定したのは、今日からみてもなにかの「あたりしき」が、その生きかたや創作の上に直観されたことによる。そこで、5人のあたりしきを検討すると、「視」の優位が、彼らの行動、創作に反映されていることがみとめられた。ひとつの分野におさまらず、表現においても境界上に立っていた5人は、皆文筆をよくしながら、彼らのことばへの依存度は高くない。換言すれば、天皇制原理主義が「宗教」として機能するような近代の時空間にあり、「理」の容易にはたらしえない状況で、ことばへの陥穽を意識することが、「視」の強化につながっているのではないかと考えられたのである。

また、彼らの表現に共通する性格に、「みじかい」形式がある。それは、創作物としての写真、自動筆記のような掌編、初期映画のディエジェシス、短歌、詩にみとめられるが、行動のうえにも同様の傾向は存在する。本論は、そこに20世紀初頭の一精神が存在する、と措定するものである。かかる方法で、国民の、家族の、また性の「物語」——近代に創出された——を、彼らの「視」は、断とうとところみるだろう。

彼ら5人は完全に無名ではないが、歴史の記述において、かならず取りあげられる人物でもない。たとえば「文学の屠場」⁵⁵のように、諸種の偶然は「正典」とその他おおぜいを選別する。この事実にかんがみれば、彼ら自身、「物語」を挫かせるとしてあらかじめ忌避された「異なるもの」なのではないだろうか？ 本論は、20世紀初頭に、近代の「物語」を断とうとする「視」に反映された精神が、いかなるものであったのかを考察するが、それは同時に、彼らを「異なるもの」の側に置こうとするなにかを、逆照射しようするだろう。

近代をあつかうにあたっては、歴史的考察がふくまれるが、本論は、いわゆる歴史研究ではない。広義の長期持続的歴史学は、従属的な諸階級や周縁的事象を自明のように黙殺することでなりたってきた。たとえば、それに対抗するものとして起こったマイクロストリアは、本質的に観察のスケールの縮小に基礎を置いている。⁵⁶ 「個」から出発するという点において、本論は、このニュー・ヒストリーの手法にならうものである。

しかしスケールの縮小は、パースペクティブをすてきることではない。洞察しようとする

⁵⁵ フランコ・モレッティ『遠読——〈世界文学システム〉への挑戦』秋草俊一郎他訳 みすず書房 (2016) pp.91-127

⁵⁶ ジョヴァンニ・レーヴィ「マイクロストリア」『ニュー・ヒストリーの現在——歴史叙述の新しい展望——』谷川稔 谷口健治 他訳 人文書院 (1996) pp.110-111

るのは、特殊事例の特殊さではなく、その特殊さが示す普遍性なのである。⁵⁷ たとえば、「テロリスト」という一語であらわされ、特殊なものとしてあつかわれ、今日までそうみなされつづけている存在が、同時代的な普遍性とむすびついていることを積極的に提示したい。

また、「点」における観察と同時に、眺望は欠かせないものであるため、「個々の思想家だけでなく、有名無名の文学・芸術作品、さらには過去の出来事や事象」を限定せずに研究の対象とするインテレクチュアル・ヒストリーの「研究対象でないものはない」⁵⁸という姿勢に、本論はつらなるものである。一方、「個」を社会文化的関係と切りはなすことも、対象を非時間的な中性性に回収してしまうことも、適切ではないながら、あらゆるすべてを同時に記述する行為は成立しえない。それゆえ、限界が設定されてしまうとしても、もとめられるのは「厚い記述」⁵⁹であると認識する。

上述したように、本論におけるバージョン⁶⁰では、諸種の偶然から5人が取りあげられることとなったが、彼らを「点」と捉えることから、ほかに可能なかぎりの人物が、折々記述されていくだろう。5人は語るが、ほかの人物たちも、各人の語りかたで語ることとなる。それに際して、引用がながくなっても、必要とみなされた箇所は必要なだけもちいることとする。構成に関しては、5人と他の人物、事象を可能なかぎりむすぶために、各人をあつかった章のあいだに、前後する人物をつなぐテーマの章が置かれる。

⁵⁷ 森涼子『敬虔者たちと〈自意識〉の覚醒』現代書館（2006）pp.12-13

⁵⁸ ヒロ・ヒライ 小澤実編『知のマイクロコスモス：中世ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』中央公論新社（2014）pp.1-3

⁵⁹ クリフォード・ギアツ『文化の解釈学』吉田禎吾訳 岩波書店（1987）pp.7-8

⁶⁰ ネルソン・グッドマン『世界制作の方法』菅野盾樹訳 筑摩書房（2011）pp.20-27

第1章 カメラオブスキュラの「眼」——近代アマチュアが有したポテンシャル—— 安井仲治（1903-1942）

はじめに

安井仲治は、日本近代における行為としての「写真」の可能性を象徴する人物である。その力量は、主として写真家や評論家たちによりみとめられてきたが、⁶¹今日における知名度は、おなじ1900年代生まれの木村伊兵衛や土門拳らに比し高いとはいえない。理由として、生涯アマチュアであったこと、早世をしたこと、そして作品の芸術的な純度が明確な作家像をむすびにくいこと等が考えられる。

なかでも「アマチュア」の立脚点が影響してか、安井に関する学術的な研究は、戦後に入ってからもおこなわれてこなかった。しかし生誕百年の節目に、個人の写真展が開催され写真集が出版されるにあたり、一部で再評価のきざしがみとめられた。⁶²この流れにおける論文に松実輝彦の「安井仲治と丹平写真倶楽部——写真集『光』を中心に——」⁶³、また、安井を美術史ではなく精神史のなかに位置づけようとした後藤優子の試論「アマチュア・アウラ・アナーキー——安井仲治（1903-1942）の近代——」⁶⁴がある。

序章で述べたごとく、日本におけるアマチュア全体の評価は低く、日本近代に写真の一大

⁶¹ 福島辰夫や飯沢耕太郎、光田由里の論考があり、兵庫県立美術館や松涛美術館などの諸機関によって業績を紹介されてきた。

⁶² 2004年に初の総合的回顧展として渋谷区立松涛美術館で開催された。

⁶³ 松実輝彦「安井仲治と丹平写真倶楽部——写真集『光』を中心に——」『日本写真芸術学会誌』第12巻第2号 日本芸術学会（2003）

⁶⁴ 「アマチュア・アウラ・アナーキー——安井仲治（1903-1942）の近代——」『日本研究』第41輯 韓国中央大校日本研究所（2016）

ブームを引き起こしたアマチュア写真家も、アマチュアであるがゆえに作品を正当に取りあげられなかったという事実は、長きにわたり正面から検討されてこなかった。しかし、そこには、日本近代のあゆみと重なるドミナンスの問題がひそむ。近世に「奇器」と称されたカメラ以前の光学機器との接触は、帝都以前、幕府の置かれた江戸において開始されたのではなく、貿易相手国であるオランダから主として流入した製品全般は、その窓口に近い西方の地に住む人間が、より早く接する機会を有していた。それにもかかわらず、近代開始後、「中心」の象徴たる天皇を戴いた帝都・東京は、「開化」から「破局」への道程上で写真にかかわるパワーを回収し最大の権威となっていく。

写真の存在を、早い時期に日本に普及させる駆動力となったアマチュア写真家の団体は、日本全国に点在したが、関西には有力な団体が多く、とりわけ大阪は東京に対抗する一大勢力と目された。後述するように、たとえば「芸術」の解釈において、東京では比較のおだやかな写実表現がこのまれたのと対照的に、関西以西ではより大胆で前衛的な表現が追及されるということなりが存在した。そこで西方の写真家たちの創作に、伝統に根ざす文化的な嗜好と同時に、社会的な「対抗」が持されていた事実は看過できない。さらに、ルポルタージュのような作品が「中心」の趨勢を占めると、相違はさらにきわだったものとなる。どちらが作品としてすぐれているかは、第三者の判断にゆだねられねば公正でないにもかかわらず、すでに確立されていた東京写壇の権威は、みずからの基準を優位に置いた。その際、とくに大阪のアマチュア写真家の作品は、「真剣」なルポルタージュの対極に置かれ「趣味」写真のようなものとみなされる。

だが、関東大震災後の思想統制の強化から戦争体制への移行期に、ルポルタージュ——報道写真は「報国」の写真へと転じていった。その過程で、プロ写真は主体的に對外宣伝に従事しつつ、アマチュア写真家を、統制し教化しようところみながら一層低位に位置づける。彼らにとって、アマチュアによる写真は社会性がなく、意識が高ければプロになるのが当然だと断じられたのである。

かかる危機の時代に、安井は、アマチュアがアマチュアであるがゆえに至誠の「道」を先導するとの信念をつらぬいた。1941年、病身を押しておこなった講演「寫眞の發達とその藝術的諸相」で、彼は「普及が却つてその藝術を滅ぼす虞れにつきましては、その普及の圓の中心が確固としてゐなければならぬ。そしてそれは『道』である」といいきる。芭蕉が曲水に宛てた手紙で、定家や西行、樂天、杜子のことを研究し真に理解する者は10の指にも満たないといった話を引き、その稀少な人物が「西鶴のいふやうに末々の手に渡りて捨てられるのでなくして、末々から優秀な人を抜粋して捨てられるのを防ぐ要件であるといつてゐる」のだと、堂々持論を展開していく。

寫眞家も實際の仕事をしてゐる人は、アマチュアの同情者として必要でありませうが、實際の藝術的な仕事をしてゐる人は、芭蕉の言葉に聴くところがなければならぬ

と思ひます。⁶⁵

ここでは、真に「芸術」にかかわる人間が、利害をはなれ主体的に優秀な後生を活かし「道」につらなっていくことが主張されている。パワーを掌握した「普及の圓の中心」は、そうして芸術の意義を、教化の対象とみなす存在からするどく問いかえされることとなる。確固としていなければならぬその場が、みずから破局へ傾斜していこうとするときにあり、安井が先見しようとしていたのは自身の死と二重写しになったその破局が明けたのちの未来だった。

本章は、日本近代に行爲としての写真に就いた安井仲治が、カメラ・オブスキュラの「眼」を意識することで過去と未来の知的精神につらなろうとし、アマチュアのポテンシャルを最大限に発揮した経緯をさぐる。第1節では、安井の出生地である大坂の近世からの「知」の遺産と近代の都市的性格が彼におよぼしたもの、第2節では、アマチュア写真の発生と「芸術」の支持、関西アマチュア写真のオルタナティブとしての性格、第3節では、他者の尊厳に光源を有する安井の作品、第4節では、「芸術」写真が、戦争への傾斜とともに駆逐され、職業写真家が写真報国を主導していく経緯、第5節では、危機の時代のあらがう「視」が到達した地点、そして第6節では、安井におけるカメラ・オブスキュラを通した「眼」とはいかなるものであったか、を考察するものである。

第1節 有限な生における自在

(1) 資本の潤沢と病

お奉行の名さへ覚えぬ年暮れぬ

小西来山『今宮草』⁶⁶

安井仲治は、1903年12月15日、大阪市東区内平野町2丁目7番地に誕生した。安井は二男二女の長男で、信子、賢治、節子の妹弟がいる。安井家は、奈良県北葛城郡岩城村（現・当麻町）近くの今倉の出身で、名字・帯刀をゆるされた地主で、庄屋をつとめたこともある家柄だった。当時、父・圓治郎は、長兄・仲蔵が1891年に船場・平野町に創業した「安井洋紙店」で共同経営をおこなっていた。⁶⁷「船場」は、大川から長堀川までの東西両横堀川にはさまれた地域の総称であり、近世には、全国諸機構の中央市場の役割をつとめた大坂の心臓部である。

⁶⁵ 安井仲治「寫眞の發達とその芸術的諸相」川崎亀太郎『安井仲治の人と其作品』くらぶ草土（1979）pp.96-97

⁶⁶ 小西来山『今宮草』天青堂（1925）p.13 詞書に「大阪も大阪まん中に住で」とある。

⁶⁷ 光井由里編「安井仲治年譜」渋谷区立松涛美術館・名古屋市美術館・共同通信社編集『安井仲治写真集』共同通信社（2004）p.285

近世大坂の原型は、石山御坊を中心とした寺内町であったが、1570年から11年つづいた石山合戦後には、織田、豊臣にうけつがれていった。賤ヶ岳の戦いの直後には、石山御坊の跡地への築城と、城下町としての町づくりが急速にすすめられ「僅々40日間に7000軒の家が建てられた」といわれている。当時の市街地は、堺との接続を期して南方にのびたが、大坂の圏外であった東横堀川以西の船場、下船場の地域にも町屋の展開がなされており、安井の生誕地・平野町は、道修町、淡路町、瓦町、安土町、本町などともに記録がのこされている。これらの町と町屋だけではなく、順慶（筒井順慶氏）、竜造寺（竜造寺氏）、玉造（細川氏、前田氏、鍋島氏、浅野氏、蜂須賀氏）、天満（黒田氏）、備前島（宇喜多氏、石田氏）、今宮（伊達氏）などには、諸大名の館、ついで蔵屋敷が建てられるようになった。

人口20万人にもなった大坂は、1615年、夏の陣の戦火で灰燼に帰すが、幕府は、松平忠明を12万石の大和郡山に移封し、大坂を直轄地として再開発をすすめる。1629年に大坂城が再建され、1634年に上洛中の徳川家光が来坂し永世にわたる地子銀の免除という恩恵をあたえると、大坂は次第に町人の町として発展し、1665年には26万人、のちに近世を通じて30万人から40万人の規模にまで成長する。この人口のうち、武士は、わずかに東西の両町奉行に所属する60人の与力と100人の同心だけであった。住民の半数が武士といわれた江戸に対し、大坂が町人の町といわれる理由は、人口比のほかにも北、南、天満の大坂三郷の下部行政が、各組各町の入札をもちいた惣年寄り、町年寄からなる自治制であったことによる。⁶⁸

江戸時代に天下の豪商が軒を並べ、近世大坂の経済・文化・学問の中心地であった船場には、近代になり証券取引所が設けられ、銀行や会社が設立されてビジネス街が形成された。宮本又次は、船場を「格式ばったふるさも温存されていながら、自在にして奔放な気骨があり、インテリや文化人にあるような表裏の不一致がない」と評している。⁶⁹かかる矜持を有す伝統的文化のうちに、安井は、生涯の半分を勤め人として過ごした。彼の写真に対する真摯な情熱と、創作に関する融通無碍な態度の共存は、この地の商人のアイデンティティと無縁ではない。

1935年、『アサヒカメラ』に掲載された安井自身によるプロフィール（34歳時）には「七歳の時奥太利人フランクと云ふ者商賣の關係上父と親交あり頗る立派なる人にて日本語を能くす、同人は度々寫眞器を携へ來りて家族を寫してくれたのを見小供心に自分もあんな事をやつて見様と思ひたり。尋常三年の時一厘五十錢で零板のスター箱カメラを買つて貰ひたり商業学校の一年生の時プレモエツトの古物を買ひて漸く相当寫る様になる」「(趣味)「眼」と「食」とに大いに興味あり」⁷⁰とある。

のちに浪華写真倶楽部で、安井とは先輩後輩の立場を越え切磋琢磨しあうこととなる米谷紅浪は、初対面における彼の印象をそれから22年後に回想している。

⁶⁸ 辻野増枝・青木祥子・白木小三郎『『北船場』の町割と町家の変遷について——特に江戸時代から今日まで——』『大阪市立大学生活科学部紀要』第29巻 大阪市立大学（1980）p.1

⁶⁹ 宮本又次『船場』ミネルヴァ書房（1964）pp.2-4

⁷⁰ 安井仲治「寫壇 WHO'S WHO 4」『寫眞雜誌アサヒカメラ』東京朝日新聞（1935）p.208

——當時小生浪速防大阪探題として南久太郎町に出勤してゐましたが、或日のこと知人の安井洋紙店番頭I君がヒヨツコリ顔を見せて、同伴の精悍な面貌の中學生を紹介、「うちのぼんぼんに一つ寫眞を教へて貰いたいのので……」と切り出されて「ホーそれは何より結構な話で……」と受けながら二三話を交しましたが、恐ろしく強気な少年で、見るからに利かん氣の口數の少ない一寸取り付き難いやうな少年でした。後から思ふと明星商業の一つ星時代前後かと判じられますが何しろこんな調子で、あの華やかな小肥り切つた晩年の「大安井」を想像することは夢にも思へないことでした。⁷¹

6歳のとき、実子を亡くした仲蔵の養子となった安井は、家業の跡取りとして、養父が宝塚紅葉谷に新築した本格的日本庭園と茶室、離れをそなえた純日本風の邸宅に移り住み、以後生涯をそこに暮らすこととなる。明星商業学校でフランス語の学習を選択し、のちには『ミノトール』を購読するようになる安井は、写真に限らず芸術全般への関心をいだけ少年であった。卒業をひかえたころには友人と同人誌『AMITIE』を発行。写真や水彩画から短歌、漢詩、新体詩、評論にまで旺盛な意欲をみせている。⁷²



fig.1 安井仲治「クレインノヒビキ」(1923)

先述した「東京にて」(1922)は、19歳のとき「娜迦璽」のペンネームでそこに掲載された随筆であり、養父母と上京の折に体験したできごとが、クールな筆致でつづられる。彼が遭遇したのは、おなじ時期に難波が苦学生として東京に在り、目にやきつけた帝都・東京の光景でもあった。英国皇太子歓迎の群れに加わった安井は、東京のひとつとにつられ自分もおぼえず「バンザイ」とさけびながら、「皇族にバンザイをあびせかけるのは初めてであり、「大阪では見られへんな」と思う。それゆえ日英の皇族に対する形容も、「肅々」と「やうて来やはうた」(傍点は原文のまま)と、大阪のことばをもちいて闊達である。

⁷¹ 米谷紅浪「白洋仲治両子追悼記」『浪華写真倶楽部会報』浪華写真倶楽部(1943)p.11

⁷² 光田由里「安井仲治 リアルさの果て——写真黄金期の巨人」渋谷区立松涛美術館・名古屋市美術館・共同通信社編著『安井仲治写真集』共同通信社(2004)pp.9-10

また「万才」が起る。

驚くばかりの人出である。人間と云ふものがこんなにたくさんあるものかと今更ながら感心した。

自分も其中の一人である事は忘れてみた。⁷³

難波が友人に詩で語ったように、安井も自身が住む商都と帝都を比較することに興じながら、随筆のなかで友人たちに語りかける。「本通りの家は皆一棟一家である事」、「散髪代に1円とられた事」、「明治神宮の広い事」、「道路の大阪よりもひどい事そしてややこしい」、「丸の内 building のあまりに大なりし事」、「女学生の美しい事」、「浅草観音と（さかんな）賽銭の音 人々は一銭一五銭の賽銭で無病息災が買へると思ふてゐるらしい。安いものだ。安いからはんじょうする……之れが眞理らしい」。また、上野で開催されていた平和博覧会では、同年にそれを被写体にした自身の作品が入選する分離派の建築⁷⁴についても、意匠だけがおもしろく造りは粗雑である、とみきわめている。だが、むすびのことば「東京に於ける或る痴者の印象一打所如件」⁷⁵には、クリティカルな精神は己に対しても適用しなければ本物でない、という信条が示される。

ここで注視される「皇族にバンザイをあげせかけるのは初めて」というような表現は、士族とむすびついた政治的シンボルであった天皇に対しては大胆でありながら、そこには、近世からつづく大阪という場の政治性が反映されている。たとえば、前出の句は、1654年に大阪の薬種商の家に生まれ1716年に没するまで当地に生きた俳人・小西来山の詠んだものであるが、表の意は、泰平の世に生れた恩恵で市政にあずかる町奉行の名もおぼえないまま今年も暮れていくという感慨でありながら、同時にそこには、奉行の名など知らずとも生きることに支障はないという磊落な精神が含意されている。「浪華の南、今宮村に幽栖」し、宗匠として門人をもつ身でありながら、その行状からは「老荘者にして、俳諧に息する人にはあらざりけらし」と称される小西は、辞世の句も「来山はうまれた科で死ぬる也それでうらみも何もかもなし」というものだった。⁷⁶

「俳壇の流れに従順に、談林風に行き、蕉風に行き、或いは鬼貫の口語調に親しみ、前句附が盛んになれば又一肌ぬいで點料も稼いだ」とはいえ、士族の祖をもつ芭蕉や鬼貫のごとく几帳面な理想化肌や野心家とはことなり、特別主義主張を立てず清濁あわせ呑む態度には、大坂町人の処世観が反映されている。彼が、俳諧の道に入ったきっかけも、父親のしたしかった俳人・前川由平にまなんだことにあり、そこから井原西鶴らもまじえたグ

⁷³ 娜迦璽「東京にて」安井仲治撮影 渋谷区立松涛美術館 名古屋美術館 共同通信社編集『安井仲治写真集』(2004) p.263

⁷⁴ 堀口捨己らによる前衛的な近代建築運動。1922年、安井は、浪華写真倶楽部で「分離派の建築と其周囲」が入選。

⁷⁵ 娜迦璽「東京にて」安井仲治撮影 渋谷区立松涛美術館 名古屋美術館 共同通信社編集『安井仲治写真集』(2004) p.264

⁷⁶ 宗政五十緒『近世畸人伝』平凡社(1972) pp.130-131

ループのなかで成長していくこととなったのだった。⁷⁷ 土地とむすびついた資本にめぐまれ、終局功利や名声をもとめず、創作と実人生を一致させた小西の態度は、安井にもうけつがれた資質といえよう。

近代が明ける以前、町人は、経済力を持ちながら被支配者身分として武士にむきあわねばならず、その関係は、商取引を難なくつづけながら一定の距離を置く緊張感のあるものだった。たとえば、江戸の札差が、旗本・御家人の将来を左右するほどの力を掌握したのに対し、大坂の町人は、それにおとらぬ権勢を有していた。彼らは、米穀のほか薬種・綿・木綿・油の類から砂糖・紅花・金銀の領域にいたるまでの相場を立て、日本中に流通する商品の高下を支配し、なかには50万石以上の相場を個人の手におさめる者も存在したのである。武士における地位の安定が、前途に希望のない偷安であったのに対し、町人における生活の安定には、それを元手に進んでゆける可能性が存した。⁷⁸ 参勤交代等で、早くから財政窮乏になやんでいた大名は、大坂の町人にたびたび借入れを申し込む。

「大名貸し」は、踏み倒しの危険をつねにはらんでいたが、「格式を禁物とする平民主義が真髓の」大坂町人は、「用心に用心をかさね」対処をおこなった。そこには、金銀を死蔵させず、多少の危険は冒しても財の再生産をくわだててやまない商人精神が看取される。⁷⁹

そして、勤勉と知恵や才覚にもとづき社会的に進出した町人層は、儒教思想においては害をなす分にも有用ではないとされながら、みずから実力にみあった道徳と学問をもとめ、1724年、船場・尼崎町に「懐徳堂」を創立する。そこでの規則「定」は、町人の実学を意識した内容で、書物を持参しないこと、所用があり途中退出することさえもみとめており、武士も町人も貴賤のない同輩としてあつかった。⁸⁰ 「懐徳堂」は、2年後には官許となり、1780年にはその名を「学問所」から「学校」へとあらためる。公儀に積極的にはたらきかけることでみとめられた「公共性」は、以後懐徳堂の基盤となり、もはや「彼らの学問が、単なる商人の道楽でな」いことを証していた。だが町人の町に生まれた学問は、武士的な発想にもとづく学問とは根本的にことになっており、「草芽の儒者を自負する町人学者たちは、当代随一の学者として名声の高かった江戸の徂徠学との格闘を通じて、自分たちの学問の基盤を築いていったといってもよい」。⁸¹ そうして、権威や功利性によらないアマチュア学者たちのスケールと自在性は、知的遺産としてこの地に引き継がれたのである。

たとえば升屋山片家の二代・重賢は、商人ながら学問好きで、当家の近くにあった懐徳堂の門人となり漢学をまなび、実学を研究している。升屋の番頭であった山片蟋桃も、主

⁷⁷ 今榮蔵「來山」『国文学解釈と鑑賞』第20巻第2号 至文堂（1955）pp.68-70

⁷⁸ 奈良本辰也『日本の歴史17 町人の実力』中央公論社（1984）pp.386-396

⁷⁹ 宮本又次『大阪商人』講談社（2010）pp.268-271

⁸⁰ 脇田修『近世大坂の町と人』吉川弘文館（2015）p.218 p.221

大坂の有力町人5人が出資し、初代学生は三宅石庵。

⁸¹ 宮川康子『自由学問都市大坂 懐徳堂と日本の理性の誕生』講談社（2002）pp.26-28 pp.30-31 p.35

人・升平の好意により「懐徳堂」で中井竹山、履軒に師事して儒学を究めた。そのかわり、当時大坂で医を業としていた豊後杵築藩士で、天文学の大家としても有名だった麻田剛立についてまなぶ。山片における蘭学はもとより、後日唱導した地動説の基礎も、そこで養成されたものであった。また彼は、卓越した経済学者でもあり、多年の実践を基にし物価や財政、貨幣に独創的な自説を展開している。

山片の代表作『夢の代』は、近代の開始から第二次世界大戦が終了するまでは、思想界の一部で言及される程度であり、「とりわけ天皇制史観の支配する体制側にあっては、極力これを黙殺する姿勢があった」。⁸²当該書は、天文、地理、神代、歴代、制度、経済、経論、雑書、異端、無鬼（上・下）、雑論の12章からなっている。かかる百科全書的な分類の方法は、伝統的儒学の経学とことなり、近代に成立する学科と共通しており、経学もその一分野として置かれる。「人間の関心に合わせて領域を切り取り、それぞれの領域にふさわしい学問的方法を追求していこうとする態度は、人間理性の側に知の根拠をおく近代的視線から生まれた」⁸³のだった。

なかでも「無鬼論」は、「江戸時代に出現した無神論として全く特徴的であり」、山片は「鬼神とは客観的に存在するものではなく、唯祖先や父母を憶ふ個人の道徳的な意識に於てのみ存在する」と語っている。⁸⁴ 懐徳堂の無鬼論の立場は、鬼神を説く私の法にからめとられた民衆のエネルギーを解放し、政治化しようとするものであり、武士的支配階級ひいてはあらゆる権威に対し、新興の町人階層と開明的知識人により提示されたあらたな政治的視点であった。伝統的宗教が形骸化して幕藩体制の危機があらわになってきたことを背景に、統一的な世界像がゆるぎはじめたとき、一方では新宗教が生まれ、それに対して正教を制定しようとする政治的な統制が起こってくる。だが、無鬼論は、両者のはざまでもオルタナティブなユートピア的政治思想を展開していくのである。⁸⁵

幕府の地・江戸の官学に堂々対抗する「自由な学問空間の精華」懐徳堂がかつて存在した船場という地に生誕した安井は、経済資本にとどまらないゆたかな文化資本を享受した。そこにおける実学志向の教養は、すべてを相対化しうる「知」であり、天理から人理への転換は、天皇をも脱神秘化する性格をひめていたのである。⁸⁶ 『夢の代』の巻之十には「聖人ハ民ニ難キヲ教ヘス、只ソノ時ノ俗ニヨリテ教法ヲ立、民ヲ安シ導ク也、故ニソノナリニテ礼ヲ立玉フ、又天ト云、神ト云、祖先ト云テコレニ由ラシメ礼ヲ立ルトキハ、タミヨク帰服シテ治ルナレハ幸ノコトナルヤ、故ニ山川・社稷・宗廟ノ祭ヲナセハ、人々事ヲ専ラニセスシテ、ミナ社稷・宗廟ノ命ヲ受ル也、コノヲ以テ民ヨク治マル、シカルニコレモ亦増長シテ防クヘカラサルニ至ル也、我日本ノ古ヘモマタ如此、神代ノコトハ

⁸² 末中哲夫『山片蟠桃の研究「夢の代」編』清文堂出版（1971）p.1

⁸³ 宮川康子『自由学問都市大坂 懐徳堂と日本的理性の誕生』講談社（2002）pp.183-184

⁸⁴ 末中哲夫『山片蟠桃の研究「夢の代」編』清文堂出版（1971）p.1 p.48 pp.345-346

⁸⁵ 宮川康子『自由学問都市大坂 懐徳堂と日本的理性の誕生』講談社（2002）pp.198-201

⁸⁶ 宮川康子『自由学問都市大坂 懐徳堂と日本的理性の誕生』講談社（2002）p.208 pp.142-143

ミナ夢中ノ夢ノ如シト云モ、スヘテ鬼神ヲ祭ルノコトハ大抵同シ」⁸⁷とあり、万世一系の神話をもふくむあらゆる「神話」が喝破されている。

英国皇太子歓迎の行事がおこなわれた当日、安井は東京に住む知人を訪ね、ふたりでおおきな石をかかえ丸の内ビルディングの裏手があるいていったが、はじめそれをみて笑っていた群衆もついに羨望の目をむけるようになったという。なぜなら、石の上へのぼり5寸でも1尺でもたかくしないと「最前列の兵隊さんが邪魔になつて皇太子が見えないからである」。⁸⁸だが、皇太子を「あおぎみる」のではなく「みおろす」とは、その場で不敬とされることがなかったにしても不敵な態度ではある。

その翌年、そこからほどちかい虎の門で、やはり厳重な警戒をかいめぐり、難波は安井が間近で目にした「公式鹵ば」へさらに近づき、ガラス越しの裕仁のすがたを瞬間的に捉える。安井が随筆中で「皇太子」と形容しているのに対し、難波は友人への書簡中で「天皇の息子」、「天皇」と名指している。そこには両者の政治意識のことが反映しているともいえるが、同世代（難波は1899年、裕仁は1901年、安井は1903年生まれ）の「対象」をつきはなし冷静に観察する態度には、「青年」的共振が看取される。

また、このころ安井は「朝鮮人之顔」というエッセーの草稿（未完）⁸⁹で、工事現場で黙々と働く朝鮮人の顔を「正直其物である」と記す。「朝鮮人の顔はどこか抜けている」という意見を聞き、自身のかんがえを述べる一文だが、対象の「部分」だけを取りあげた根拠のない説に、明晰なことばで反論をおこなうのである。当時、朝鮮人の知己はいなかったにもかかわらず、彼は公平な立場をくずそうとしていない。たとえば安井が生育した伝統的な商家における一見封建的なきまりごとは、平等の原理にもとづいており、そこには「人倫に即するものがあつた」。⁹⁰翌年の関東大震災で、無実の朝鮮人が多数虐殺されたことを考えるとき、この時期すでに張りめぐらされていたであろう「他者」を排除したところに成りたつコンフォームィティから、彼がいかに自由であつたかがうかがえる。のちに安井は、朝鮮人の住む集落へ、ひとりカメラをたずさえ出かけていく。

安井は Association d'Amitie の中心人物となっていたが、高校卒業後、大学受験に失敗したことから、家業の「安井洋紙店」に就職。同時期には軽い結核をわずらい、家族からはなれ療養をすることとなった。1941年に自身が病にたおれるまで、安井は、あいついで身内の人間に先立たれている。1933年に弟、1934年に妹、1939年には次男が早世した。また同年には、結核を病んだ妻が、療養のためかつて彼が独居していた別宅に移る。

貧富の差が未だはげしい時代にありながら、先天的に経済資本に恵まれた安井は、生涯物質的欠乏を知らず、知的伝統に根ざした文化資本は、行為としての写真を将来した。だ

⁸⁷ 末中哲夫『山片蟠桃の研究「夢の代」編』清文堂出版（1971）p.992

⁸⁸ 娜迦璽「東京にて」安井仲治撮影 渋谷区立松涛美術館 名古屋美術館 共同通信社編集『安井仲治写真集』（2004）p.263

⁸⁹ 2016年に筆者は、子息の安井仲雄氏から、草稿は原稿用紙か便箋に書かれていたもので「読んだ記憶が在ります」との手紙を受け取った。

⁹⁰ 宮本又次「大阪町人の家訓と気質」宮本又次編『大阪の研究3』清文堂出版（1969）p.9

が、わかさのうちにしばしば濃い翳を落とす「病」は、彼によりふかいところで人間存在のうつろいやすさを認識させたのではないだろうか。それゆえ、多数の写友にめぐまれ、経営者としての責任をはたし、家族との時間をもたいせつにしながら、同時に彼は、創作には欠くことのできない「孤」の領域を生涯かこちえていたと想像される。彼の死の直後、アマチュア写真家としてながい交流のあった上田備山は、「安井さんは人間としてのつきあいではとても暖い（原文のまま）人なんです、芯はあれでとても寂しい人で、その心境が出るんですね。いつでも孤独です。それが作品をみるとよくわかる」⁹¹と述べている。

一方でかかる孤独をかみしめていたとしても、当該の地の「知」を通じ先人に「つらなる」ことの可能であった安井は、己の生き方に迷いを生じることがなかったのではないだろうか。先人の生きざまをまなぶことは、己を軸に過去、現在、未来という時間のながれを意識することでもある。そうであるがゆえに安井は、有限という意味においては生あるものにあまねく平等にあたえられた時間のうちに、あたくかぎりの「自在」な生を希求したのだと考えられる。たとえば、つぎのような歌からは、おおいなる世界の仮借ない回転を凝視しながら一方で微小な生のいとなみをもみのがさない、つかのまの「視」が浮かびあがるのである。

炎日や二階の窓にさしのぞく 松の小枝に蟻の通へる⁹²

（2）自治都市「大大阪」

都市と云ふ言葉はよく人の使ふところであるが、元来都市と云ふものは何であるかと云ふ事に就て明かに之を知つて居る人は極めて少数である。都市と云ふことは都と云ふ意味ではない。（略）即ち都市なるものは單に商工業者が寄集つて其の處で營業をなす所の場所ばかりではない。（略）其の處には人格と云ふものがあつて都市の考へ、都市の意志を拵へる。市長以下の機關があつてそこには都市の執行機關が形造られるのである。其の如きものが都市なのである。

岡實「我国都市の特色」

（1925）⁹³

国民国家の体制づくりの一環として市制が整備されつつあった 1889 年、帝国憲法の発

⁹¹ 「安井仲治氏を偲ぶ座談会」『写真文化』第 24 巻第 5 号 アルス（1942）p.566

⁹² 安井仲治「遺詠七首」『浪花写真倶楽部会報』（1943.6）p.39

⁹³ 岡實「我國都市の特色」大阪都市協会『大大阪』思文閣（1996）初出は 1925 年 12 月第 1 巻 1 号 p.19

布後に黒田清隆内閣は、市政特例案を元老院に付議した。それは、東京、大阪、京都の三市には市制に特例を設け、官選の府知事が市長の、書記官が助役の職務を執行し、その他の付属員の職務も府庁の官吏がおこなうというもので、元来中央集権的な性格のつよい市制町村制をさらに官治的にし、実質的には市を府の直轄地にする企図がこめられていた。各市からは批判の声があがったにもかかわらず案は可決されたが、自治をもとめる地道な運動の結果、1899年に市政特例は撤廃され、一般市制が適用されるようになる。大阪では、官治への抵抗を示しながらも、一方で1900年代にかけて汚職問題がつづいた結果、市政改革運動が起こる。中心となったのは、職業的政治家ではなく資本家の土居通夫、弁護士の中井隼太、新聞記者の高松正道などデモクラティックな知識人たちであった。

第一次世界大戦を契機に、大阪における工業は規模の拡大と近代化がすすみ、社会構造の革新が促進されるが、同時に零細工業も増大し、植民地経済への依存度が高まる。工業の発展にともない、人口の増加率も1914年から1919年のあいだに大阪市で11.2%、接続町村では50%以上にも加速し、超過密状態を示すにいたった。そこで大都市行政のかなめとなる都市計画にあたり、1914年、東京高等商業学校の教授・関一が外部から招聘され、高級助役に就任する。⁹⁴ 関は、元来経済政策を専門としていたが、のちに都市問題への関心をふかめ、労働者に対する社会政策、住宅問題を論じていた。⁹⁵

そして1925年、東成郡と西成郡の44か町が市域に編入されると、大阪市は「大大阪」と称されるようになる。内務省が、当初市街地化した地域のみを編入をみとめる方針を示したのに対し、大阪市はみずから構想した都市計画を実現する立場から農村地域をもふくめた郡全部の編入を主張していたが、確執のすえ初志は貫徹されたのだった。関東大震災で東京が大打撃を受け、市域拡張がおくれたこと等の原因により、同年、大阪は東京市を抜いて全国第1位、世界第6位の大都市となる。1925年から1944年にかけて発行された月刊誌『大大阪』には、日本一の都市となった当地の矜持が、さらなる発展をもとめ自治の精神を謳いあげるようすがつづられている。1926年、後藤新平は、同誌に寄稿した「自治精神と政治の倫理化」で、自治の民にして初めて真正の自由があるとし、大阪には東京のような自治の不健全さがないといい、当地にふるくから自治精神が発達してきた歴史的経緯をたかく評価している。⁹⁶

また前出の岡は、「特別市制について」で、元来都市というものは独立自治の発生地であるのに、日本の場合後進国のため「上からおしかぶせられた」制度から出発したため、これまで自由が効かなかったのであるが「中央集権はもはや適切でない」と主張している。中央政府に近い関係で「自治の魁に踏みだせない」東京よりも、わが大阪はあらゆる点において独立の素質が多分にそなわっている、と分析するのである。⁹⁷

⁹⁴ 小山仁示、芝村篤樹『大坂の百年』山川出版（1991）pp.67-76 pp.98-108

⁹⁵ 鈴木勇一郎『近代日本の大都市形成』岩田書院（2004）pp.179-180

⁹⁶ 後藤新平「自治精神と政治の倫理化」大阪都市協会『大大阪』思文閣（1996）初出は1925年2月第2巻8号 pp.2-3

⁹⁷ 岡實「特別市制について」大阪都市協会『大大阪』思文閣（1996）初出は1926年3月第2巻3号

一方、西村健吉は「市會の腐敗墮落と其對策」で、東京や京都で相次ぐ汚職事件が当地で起こりにいくのは、大阪において信用が置かれるのがまず市井の人間としての務めをはたした上で政治をおこなうような人間であり、最初から政治のみをおこなおうとする姿勢自体、評価の対象にならないからだと説明する。ここでは、前出の市政改革運動にみられたのと同様に、都市を形成する一市民のいわばアマチュア的な立場における良心が確認されている。⁹⁸



fig. 2 安井仲治「メーデーの写真」(1931)

だが一方で、産業の発展にともない、煤煙と人口過密の問題は深刻なものとなっていく。前者において、1877年以來日本紡績・福島紡績や住友伸銅場等の巨大施設を有し、蒸気力をあつかう工場は、周囲の民家あるいは市街地から隔離するのが大阪府の方針であったが、1897年には、それら大工場が河川舟運の便のある既成市街地に隣接して建ちならぶこととなる。⁹⁹当時、大阪に移入するのは比較的貧困層であり「ドン底生活は都市の生活水準を下げる」というような意見も主張され、そこでは日本人のみならず外国人も対象とされていた。たとえば、現在平野川と呼ばれている川は、以前百済川と呼ばれ、その周辺に住む移住者は、工芸文物あらゆる点において日本人を教えみちびく指導者であったのが、ほどなく日本人化した。そこへ千年後に移住した同民族は、湍川のドン底に落ちた、というような論も登場する。¹⁰⁰

pp.2-12

⁹⁸ 西村健吉「市會の腐敗墮落と其對策」大阪都市協会『大大阪』思文閣（1996）初出は1928年3月第4巻9号 pp.8-9

⁹⁹ 小田康徳『近代大阪の工業化と都市形成——生活現場からみた都市発展の光と影』明石書店（2011）p.120

¹⁰⁰ 井上吉次郎「大大阪と移入鮮人の問題」大阪都市協会『大大阪』思文閣（1996）初出は1928年11月第4巻11号 pp.619-622

安井には、朝鮮人集落を撮影したネガが多数存在するが、彼が初めてそこへ足をはこんだのは、この文章が書かれた1928年であることが注視される。¹⁰¹ 前述の「朝鮮人の顔」に関しても、都市化にともなう諸工事に動員された朝鮮人を路上でみかける機会があったのかもしれない、集落での見聞もふくめ、外国で懸命に生きる彼らに対し彼が人間としての共感や敬意を置いていたであろうことが想像される。

(3) 阪神間モダニズム

上述したような公害の状況もあり、19世紀末すでに大阪の富裕層は、天下茶屋に「別荘」と称する別宅を有しながら、休暇のときのみ訪れるのではなく当地から市内に通勤する形態を取っていた。だが、その場所がえらばれたのは、景勝地であることよりも深刻化する市内の環境悪化からのがれるための衛生上の要請による。1898年、イギリスでエベネザー・ハワード（Ebenezer Howard）により著された『明日』は、1902年『明日の田園都市』のタイトルで日本でも出版され「田園都市は健康的な生活と産業のために設計された町であり、その規模は社会生活を十二分に営むことができる大きさであるが、大きすぎることはなく、村落地帯に囲まれ、土地はすべて公的所有でありながら、コミュニティに委託される」¹⁰²との定義が記されていた。日本において「田園都市」の語がひろまるのは、1907年12月に内務省から『田園都市』が出版されてからのことである。そこでは、ハワード案とはことなり、イギリスに存在した職住近接型の工場村のようなモデルが想定されていた。しかし、現実には郊外に居住しつつあった者たちにとっては、前述したように目的や理念が最重要ではなかったため、現実的かつ広汎な住宅地計画がもとめられたのである。

かかる経緯から、大阪と神戸には生まれた阪神電鉄の沿線地域に郊外住宅地が形成され、「阪神間モダニズム」が創造されていくこととなる。阪神間の西部には六甲山脈がつつらなり、神戸市の中央から須磨へとのび、六甲山の最高峰は本山村の北方にある。この山脈はつよい北風をふせぎ、南面の山麓は段丘状となっており、その地質は主として花崗岩であった。風化した砂粘土は、長い年月を経て海岸に流出し、堆積した沖積層が平地部を形成する。南斜面の山麓台地は起伏があり、海岸線から遠近がことなる距離にある台地は変化に富み、雛壇形式の宅地造成に適していた。気候が温暖で緑が豊富なうえ山麓から湧出する水は良質、と自然環境にめぐまれていたのに加え、人為的に整備された交通機関の発達は、この地域を住宅地として発展させることとなる。1905年に開業した阪神電気鉄道の発行した『市外居住のすすめ』（1908）、『郊外生活』（1914）、箕面有馬電気鉄道が発行した『山容水態』（1913）には、郊外に住居をかまえば市民は煤煙の都から解放され、

¹⁰¹ 安井仲治「讀後小感」渋谷区立松涛美術館・名古屋市美術館・共同通信社編集『安井仲治写真集』共同通信社（2004）p.174 p.287 1928年、第1回銀鈴社写真展に「朝鮮童女」を出品している。

¹⁰² エベネザー・ハワード『明日の田園都市』長素連訳 鹿島出版会（1968）pp.39-40

清新で活気に満ちた生活を味わえると謳われていた。¹⁰³

そうして近世に「文化の核となる人的要素をもたなかった阪神間」には、近代以降、急激に人口が集中し、人口比率からみるとごく少数であった富裕層が主導的立場となり「阪神間モダニズム」が築かれる。西洋文明の移入は、最初イギリスへの傾倒、第一次世界大戦以降はアメリカの影響がいちじるしかったが、特徴的なのは、住居の意匠、格式や礼儀作法においては日本の伝統が尊重されたことである。たとえば、住民の交流の場では「茶の湯」などがおこなわれており、¹⁰⁴安井も、1922年から自宅の茶室で、月3回の茶道の稽古を養父母と熱心におこなっている。¹⁰⁵

人工的な郊外ユートピアは、新時代の娯楽にもことかかなかつた。ラジウム温泉・ホテルが立ちならぶ苦楽園、温泉・歌舞演劇場・東亜キネマ映画撮影所が併設された甲陽園など、その発端はいずれも郊外の余暇・保養施設として出発したものである。なかでも、大阪の実業家・香野蔵治と櫛山慶次郎の名に由来する香櫛園は、夙川右岸に建設された冷泉・ホテル・動物園・音楽堂・遊園地・海水浴場をそなえた1万坪におよぶ阪神沿線最大の総合レジャー施設であった。また、甲子園球場では、野球の試合だけでなく、博覧会・サーカス・戦車大展覧会・スキージャンプ大会・野外歌舞伎などがおこなわれた。1911年に箕面有馬電気軌道株式会社（のちの阪急電鉄）が大阪梅田から宝塚線と箕面線を開通してからは、それまで武庫川べりの寒村であった宝塚には、大阪からの行楽客を当てこみ、温泉・遊園地・植物園・動物園などの施設があいついでつくられる。なかでも、室内プールを余興場に転用したパラダイス劇場での宝塚少女唱歌隊は人気を呼び、1927年には欧米から取り入れたレビュー「モン・パリ」を上演して話題をあつめた。また、各種のレクリエーションが神戸に在住していた外国人からもたらされ、彼らは機関誌『INAKA』を発行し、六高山でゴルフや登山、スケートやクリケット等に興じたのである。¹⁰⁶

「大大阪」のピークは1925年、「阪神間モダニズム」のピークは1930年ごろといわれるが、それは安井の22歳から27歳の時期にあたっている。当時、活気あふれる経済活動の中心地と夾雑物を遮断した田園都市を、自由に行き来して暮らすことは特権的な身分によるものだったが、彼はあたえられた環境をただ享受するのではなく、観察者の視線でことなる階層を凝視した。安井は、生地・大阪や住居のある兵庫の文化に自然な愛情をそそぎつつも、偏狭な地域中心主義におちいることなく、当該の地で生涯のほとんどの時間をすごした。それは、近代に多くの地方出身者が、封建的な土地からの解放や社会的成功をもとめ、東京をめざしたのと対照的である。また東京の出身者も、幕府から帝都へと変貌した「場」に、「中心」意識を持つ一方で、他所からの人間であふれるそこに愛着を持つことが容易ではなかった。

¹⁰³ 「阪神間モダニズム」展実行委員会『阪神間モダニズム』（2004）pp.27-31

¹⁰⁴ 「阪神間モダニズム」展実行委員会『阪神間モダニズム』（2004）p.109

¹⁰⁵ 安井仲治「讀後小感」渋谷区立松涛美術館・名古屋市美術館・共同通信社編集『安井仲治写真集』共同通信社（2004）p.286

¹⁰⁶ 「阪神間モダニズム」展実行委員会『阪神間モダニズム』（2004）pp.210-212

たとえば、安井より1歳年少の小林秀雄は「故郷を失った文學」（1933）で「私は自分を江戸っ子だと思ったこともないし江戸趣味もまったくない。もっと奇妙なことに自分は東京に生まれたことが実感できないでいる」と、故郷喪失の不安について述べている。かかる感情は、関東大震災という「有事」にあつて、初めて東京に愛着をおぼえたという一世代前の東京人・芥川龍之介の感情と、呼応をしている。¹⁰⁷

小林の文章が書かれた1933年は、関東大震災からちょうど10年後にあたる。同年の1月には、ドイツでナチスが政権を掌握、9月に日本は満州国を承認する。橋川文三は、小林が述べているのは当時の中間層に顕著であった「郷土喪失」、「根底喪失」の感情であり、いわゆる「自由からの逃走」的状況が浸潤しつつあったこと、それは「時代閉塞の状況」の再現であり、その反射として「深い夢を宿した強い政治」への渴望が開始されたことを指摘している。だが、その夢こそが満州国という「思想」を醸成し、それは国民国家との共振をはたしたのであった。¹⁰⁸

一方、安井は、可動的で複眼的な「視」を保持することで、「根底喪失」の陥穽からのがれていた。たったひとつの「中心」におちこまないオルタナティブな「精神」は、この時期にあつて精彩を放つ。彼は、それをアマチュアとして、写真表現に還元していくのである。

第2節 アマチュアたること

（1）発生の背景

本章の「はじめに」で述べたように、従前、日本におけるアマチュア写真家を正面からとりあげた写真史や写真論はほとんど書かれてこなかった。主たる理由に、プロフェッショナル／アマチュアという二項対立において、プロフェッショナルを正典に置くべくアマチュアが、その存在を「異なるもの」として捨象されてきた経緯が指摘される。

技術史にかんがみれば、1888年、100枚のロール・フィルムが装填され撮影後に本体ごと工場へ送ることのできるコダック・カメラの発売が、大量の撮影者を創出したことはひとつの画期であった。同時期には、湿版法から簡便な乾板法への転換があり、さらに携帯しやすい各種小型カメラが発売され、1900年にはこどもでも操作可能なコダック・ブローニーが発売されている。一連の経緯を通じ、写真市場と写真を撮影する層には構造転換が生じるのだが、アマチュア写真はそれを推し進めたのだった。

序章で述べたように、19世紀なかばに登場した近代イギリスのアマチュア第一世代は、

¹⁰⁷ 後藤優子「関東大震災とアナキストと作家：和田久太郎と芥川龍之介の場合」『翰林日本学』第24輯 翰林大学校日本学研究所（2014）pp.105-108

芥川のことばは地震関連のエッセー「東京人」に見られる。かかる愛郷心は復興を合言葉としたコンフォーミティにつらなり、原理日本主義的心情とむすびついていく。

¹⁰⁸ 橋川文三『日本浪漫派の背景』講談社（1998）pp.33-40

高度な教育をうけ、豊富な資金をそなえ、すでに確立された社会的地位を有する男性たちを中心としていた。「科学」と「芸術」に境界をつくらず、はばひろいジャンルを横断する彼らにとって、写真は複数の関心事のひとつであった。すなわち、揺動期のメディアたる写真を通じておこなわれる「探求」そのものが、アマチュア的实践であったともいえる。109 当該の地では、写真にかぎらず各種の分野で活動するアマチュアに、日本で付されるような素人の好事家というようなニュアンスがなかったばかりか、卓越した知のよこびは有意義な「仕事」を教養人にもたらし、利益でなく愛情のためにはたらくことは高貴だと認識されていたのである。

日本においても、機材が高価で専門知識が一般にひらかれていなかったころ、写真にかかわったのは華族、企業家、高級官僚、大学教授、お雇い外国人などごく一部の人間だった。そのうちのひとり東京帝国大学教授ウィリアム・K・バルトン (William Burton) の呼びかけで、1889 年、榎本武揚を会長とした日本初の写真関係者の親睦団体「日本写真家会」が発足し、写真雑誌の発行や展覧会の開催を通じ、写真文化をもりあげていく。1893 年には、鹿島清兵衛 (政之助)、小倉俊司、有藤金太郎を発起人とし、伯爵の徳川篤敬・亀井茲明をはじめとした華族会員たちにより権威を付された有力団体「大日本写真品評会」が結成され、東京ほか大阪や名古屋にも支部が設けられる。

アマチュアの先駆者とされる鹿島清政之助は、1866 年、大阪に生まれ、幼少時に東京新川の豪商・本店鹿島屋の養子となり、成人後は第 8 代目鹿島清兵衛を名乗った。青年時代には、浅草の写真師・松林堂今津庄三郎に師事し、湿板写真法をまなぶ。乾板時代がおとずれると、写真への熱が高じバルトンに師事をして、写真関連の製品が舶来するたび無制限に購入した。また 1895 年には、日本幻燈会を組織し、向島の別荘で、幻燈会、撮影品評会、音楽会などをたびたびもよおしている。110

日本で、一般にもアマチュア写真家が増え始めるのは、近代に入り約 10 年を経た 1880 年ごろと早い。彼らの登場をうながしたのは、前述したような手間がかかる湿板にかわり乾板が普及したこと、そして持ち運びに便利な「写真器」の発売であった。1893 年に、日本写真協会がロンドン・カメラクラブから 296 点の作品を運びいれ、1 か月にわたり開催した日本初の海外写真展は、アマチュア写真家をおおいに刺激し、ピクトリアリズムの影響をもたらす。そして 1900 年代にはいると、写真関連の企業が、アマチュアを組織的に後援するようになった。

1904 年には、小西本店で『写真月報』の編集をしていた秋山轍輔と加藤精一らが、東京に「ゆふつゞ社」を結成、3 年後に「東京写真研究会」へと発展する。一方、同年、大阪では桑田商会の桑田正三、石井吉之助らにより「浪華写真倶楽部」が結成される。そして、1910 年ごろには日本各地に写真団体が結成され、一種のヒエラルキーである「写壇」が生まれ

109 前川修「アマチュア写真論のためのガイド」青弓社編集部編『写真空間 1』青弓社 (2008) pp.18-22

110 梅本貞雄『写真師たちの幕末維新 日本初の写真師家・梅本貞雄の世界』緒川直人編、国書刊行会 (2014) pp.30-31

る¹¹¹。そこにおける個人の評価は、団体主催の定期展覧会での実績によりきまった。なかでも東京写真研究会の「研展」、浪華写真倶楽部の「浪展」は、質、量ともに他を凌駕し、東西を代表するものと目されていく。

(2) 「芸術」の支持

1904年、小西本店発行の『写真月報』に、ペンネーム「むらさき」の論考「空蟬」が掲載される。そこでは、物理や化学をまなび技術を得ても、形態を写すばかりの「輩」が非難の対象となっていた。「何を寫眞の精霊と云ふ、趣味是なり、藝術思想是なり、技術は唯形態のみ、單に形骸を存すれば死屍なり、生命なかるべからず」。「むらさき」は、しかし形態をかるんじてよいというのではなく、「二者」は「車の両輪の如し」とであると主張する。また、「写真師」とよばれる存在が、先生然としてふるまい「素人写真家」を自己以下の技量だと速断するが、彼らこそ思想も知識も有さないただの職工だというのである。いずれにしても、従来単に物のかたちを写す説明図とみなされた写真が、近年芸術品としてみとめられるにいたったのはよろこぶべき現象だとむすんでいる。¹¹²

「むらさき」は、前出の秋山轍輔のペンネームである。『写真月報』を擁すゆふつゞ社では、会員に、写真界において率先し「芸術写真の研鑽をなす」ことがもとめられていた。すなわち、写真を「精確」な事物の記録や単なる趣味としてとらえるのとはことなる、あたらしい価値の提唱である。当時、芸術的な「写真画」を制作するためにもちいられたのは、軟焦点レンズの効果や、ゴム印画法、ブロムオイル法などのピグメント印画法だった。そこでは、19世紀末から20世紀初頭にかけて欧米各地の写真家によって追及された最先端の「絵画的表現」が理想とされていたのである。

しかし、芸術重視の立場に対抗する「こだま」の反論が、間をおかず同誌上に展開される。「美の神髓は自然にあり、然れども自然は必ずしも美にあらず」、「又理想と一致する者にあらず」。種々の「手術」（技術）を適切にほどこし、はじめて靈化理想化は成るのである、とこだまは大時代的な表現で論を展開する。そして、宏量なる旧式写真家に、新知識の光明をあたえることを積極的に信じるがゆえ「敢て足下に乞はんとす」とまで述べている。醇化理想化を自由におこなうには、新式写真術を、当方が気絶するほどのレベルで示してほしい、それが得られたなら、夕に死するも惜しくない。¹¹³「こだま」は、小西本店の写真材料工場・六桜社の技師・江頭春樹である。その年いっぱい交わされた議論には、すでに写真表現をめぐる本質的かつ根本的な問いがふくまれていたことが注視される。

結果として、アマチュアを中心とする当時の写真家たちに支持されたのは、「芸術」としての写真であった。東京美術学校が岡倉天心によって設立されるのが1889年、文部省美術

¹¹¹ 鳥原学『日本写真史（上）幕末維新から高度成長期まで』中央公論新社（2013）pp.28-30

¹¹² 秋山轍輔「空蟬」『写真月報』（1904）pp.28-33

¹¹³ 江頭春樹「こだま」『写真月報』（1904）pp.42-48

展覧会が開催されるのが1907年である。西欧由来の「美」や「芸術」という語がようやく浸透しはじめたばかりの当時、「芸術写真」という名称は、新鮮で価値あるものとして受けとめられたのだった。

(3) オルタナティブとしての関西

あたらしくなりゆくよにもひむかしのふるきたましひよみかへるなり

にしのかたよせくるしほをながめむとしほのみさきのいははなになつ

億川兆山¹¹⁴

上述したように、大阪におけるアマチュア写真家の団体「浪華写真倶楽部」は、1904年、東京のゆふつゞ社が結成されたのと期をおなじくして誕生する。関西最大の写真材料商・桑田商会の後援で、当時は、石井吉之助、勝汀舟、芦田閑月、宗得蕪湖、横山錦溪、米谷紅浪等の有力メンバーが存在した。1916年の還暦祝いで上梓された『月乃鏡』によれば、桑田は、京都で武具商の家に生まれながら、禁門の変で家を焼失し父も病死したため、菓種商に奉公したという。その間維新の激動期をむかえ、中野薬舗ではたらくようになったが、同家の息子が京都舎密局に入学し、桑田も付人の名目で教室に出入りが許可された。「——種々の機械のうちに翁の心を深く動かせしは寫眞器械なりき、其頃の寫眞は硝子寫にて教師は即座に生徒を撮影して示しぬ、翁が寫眞を業とせんと思ひ込みしは實に此時に始まりける」。¹¹⁵

米谷の『写壇今昔物語1』には、1900年代の関西写壇は「大阪を中心としてそれに京都、神戸、和歌山と続き、四國では土佐が中々古くから勃興して居り、名古屋、中國、九州、臺灣、滿州」という分布であった、と記されている。大阪では「浪華写真倶楽部」と前後して「大阪カメラ倶楽部」、つぎに「大阪寫友会」、「日本カメラクラブ」がつづけて結成される。米谷は、京都では、「浪華写真倶楽部」よりも「余程前」から「京都寫眞教會」、「京都カメラ倶楽部」があり、「京都組」が関西写壇の草分け的存在であることはまちがいないと証言する。神戸では「神戸寫友會」が1908年結成でもっともふるく、つぎが「神戸寫眞研究會」である。また、和歌山にふるくから1人1党主義で年々展覧会をひらいている「木國寫友會」があり、名古屋では1912年に「愛友寫眞倶楽部」、土佐では1908年に「土佐寫眞會」が誕生した。岡山では「鳥城寫眞倶楽部」が真摯な研究をつづけており、鹿児島では1911年に「鹿児島寫眞研究會」が創成され講演や実験が盛況である。そして、台南では「臺灣寫眞會」が大阪から同地へわたった西垣により設立され、満

¹¹⁴ 『浪華寫眞倶楽部会報』浪華寫眞倶楽部（1933）p.28

¹¹⁵ 桑田正三郎『月之鏡』出版元不明（1916）pp.4-5

州では 1911 年に「満州寫眞展」が開催された、と報告されている。

以上をふまえ、関東では、関西方面のようなバランスの取れた分布がなく、当初から「中央集権的」に東京一横浜の一大団塊に集中されていて「残る地方團體全部を一丸としても到底太刀打ちが出来ない」という状態が「現在と変わらない」と分析されている。関東と関西では、写真団体設立の時期は、総体的にみてほぼおなじか関西のほうがやや早いながら、そのありかたはきわめて対照的であることが注視される。

「浪華写真倶楽部」設立は、日露戦争の前半にあたり、結成の翌年に第 1 回展覧会をおこなったものの作品は素人の域を出なかった。入会動機も、野心的ではなく健康促進法や「ブルの暇潰し」が多数を占めていたが、今（1936 年当時）と共通するのは「キカイ道楽で贅を競ふ」という面であり、いずれにしても「誠に和気アイアイたるもので」、「会員相互の親睦を図る」という規約にすこぶる適したものであったという。メンバーの本職も、「呉服屋の若旦那」、「質屋の部屋住み」、髭のある「ドクターと弁護士連」といったところで、今のように「超プロのウオーク連」はほとんど居らず「要するに完全にアマチュア」のグループだったと回想される。¹¹⁶

都市の中間層にまで写真撮影のアマチュアがひろがっていった 1920 年代後半、浪華写真倶楽部は活況を呈し、「新興写真」の重要な拠点となる。ここにおいて彼らは、貪欲に技術を吸収し、あたらしい美術思想に目をくばり、果敢な実験に取り組むことで、戦前の「最前衛」と称されるにいたった。

われ等の寫眞藝術は過去に於て既に一種の形式を完成した。而してこの破壊を企てたる運動もその目的の九分九厘を達成して、これまた別種の形式に墮した

あるものゝ目的完成の日はそのものゝ存在を不必要とし、そのものゝ滅亡すべき日である、たとへば醫術の目的の究極はあらゆる病氣及びその原因を根絶して遂に醫術それ自身の存在を否定するが如く、

われ等は過去に於て絵画の追隨をことゝして畧ぼその目的を達成した藝術寫眞の旧套を捨てねばならぬ、寫眞の本質的解釈より發足して遂に自慰的満足に魅せられて或種の型式に墮したる藝術も、最早過去の一頁を占むることゝなつた

われ等は一切の旧套を捨て、新しき寫眞藝術の創造へ猛進せねばならぬ、新しき寫眞藝術は光の本質的表現であり、絶對的表現であり、独自の光線藝術であらねばならぬ、(中略)

1930 年、われ等の新しき寫眞藝術はこゝに展開する。¹¹⁷

1930 年 2 月、浪華写真倶楽部会報の冒頭における一文「新興寫眞藝術への第一歩」には、自己否定をもともなう激烈さで「芸術写真」から「写真芸術」への転換が語られてい

¹¹⁶ 米谷紅波『写壇今昔物語 1』出版元不明（1936）pp.89-97

¹¹⁷ 『浪華寫眞倶楽部会報』浪華寫眞倶楽部（1930）pp.4-5

る。文中の「われ等」とは、一団体や、一地域にとどまらない写真家全体を指すものであり、連帯の意志がこめられている。無記名であるが、芸術が医術にたとえられているところから、冒頭の句を詠んだ億川のような医業を生業とするアマチュアによるものかもしれない。彼らの態度は、形式の固定化に随することを忌避し、慣性から自由たらしとする態度においてのみ一致していることが、誌上の多様な見解からはみとめられる。

当該年は、モダニズムがピークをむかえるところであるが、そこにただよう真摯さと緊張感は軽躁な気分とは一線を画している。たとえば1932年の同会報では、社会の風俗を写すにあたり、それが皮相にとどまっていまいかが問われている。

尖端、尖端、尖端！

之は近代の流行語である。そして尖端に行くことは常識を外れてまでも極端さを見せる事だと一面解釈されてゐるのは遺憾な事だと云はねばならない。けれども尖端はエンサイクロペディアを繙くまでもなく常識的に最も洗練されたモダン味と知識と理性との表現される謂でなければなるまい。¹¹⁸

安井は、1922年7月浪華写真倶楽部展の会員外の部に応募した際「分離派の建築と其周囲」が入選し、9月に倶楽部の機関誌『写真界』に同作品が初めて掲載されたときから、同倶楽部とかかわるようになる。その後も入賞を繰り返すうち、若年にして倶楽部を牽引する存在となっていく。1928年、活動の中心は「銀鈴社」に移り、1930年からは、丹平薬局写真材料部内につくられた「丹平写真倶楽部」にもかかわっていくこととなる。丹平写真倶楽部の写真家たちは、共同作品展にはこぞって参加したが、個展をひらく意思を有さなかった。写真集や商業出版の申し出を辞退し、あえて自費出版の途に就くことで、写真作品の表現を徹底して追求したのである。審査員として指導的な立場にあった上田、安井のほかにも、浪華写真倶楽部と丹平写真倶楽部双方に名をつらねる会員は多数であった。¹¹⁹

安井は、ピグメント、ブロムオイル、ゴム印画からストレートプリント、多重ネガ、シルエットなど、テーマごとに多様な技法をつかひわけながら、それらの利点を貪欲に吸収、取捨選択しつつ、技術上の区分を「主義主張と混同するような因習」からは自由たらしとする姿勢を持した。かかるありかたこそが、彼のアマチュア写真家たる所以であり、写真界全体をみすえた掛け値のない見解をつねに披瀝することを可能としたのだと考えられる。

——寫眞術の如く若く、根の深くはいる時間のないものは八方に延びに延びて其樹幹を養ひ育てなくてはいけない。あの進み方はいけない、この變り方は邪道だと云つて居ては面白くありません。(略)

いろいろの試みを呈出して自他を益する仕事は相当尊いものですが、なかなか難し

¹¹⁸ 『浪華寫眞倶楽部会報』浪華寫眞倶楽部（1932）「鳴村生」による扉のことば。

¹¹⁹ 『大阪人』大阪都市協会（2002）p.8 p.18

い事です。誰れもが新しい試みをしなかつたら寫眞藝術は進歩しません。唯々命これ畏しと同じ事ばかりやつて居るところには反覆があるだけです。せんべいを焼く手際は反覆のうちに上達ませうか、藝術的な修行、それも筆を使つて、日本畫の重く見る「運筆」等の事もあれば別だが、寫眞器を持つての仕事には通用しません。(略)

「この次は何をどうしてやろう」と工夫を重ねる事は、ハリ切つてみないと出来ない事です。但し前へ前へと進んでみると、觀衆の理解の方が付いて行けませんから、時とすると相當の悪評を受ける事があります。骨折つて叱られる傘屋の小僧です。だから一寸した大先生に安定してしまふと前進しなくなります。同時にこれが寫眞藝術界一般の低調の相當大なる原因です。¹²⁰

安井のような、アマチュアとはいえたびかさなる入選により他地域にまで名を知られた写真家にとどまらず、当時大阪を中心とするアマチュアのあいだには、「1人1党」を旗印に掲げよりひろい世界へとつらなっていこうとする精神が存在した。それは、長い歴史を誇るある写真団体で、唯一専門家の肩書があり指導者側の位置をそなえていた人物が、専門家意識と実際の実力に懸隔を生じながら努力もせず意識をあらためなかつたのを、団体が排除したというエピソードからもうかがえる。

権威を意識的に排した場では、ふるくからの会員と新入会員は同等にあつかわれ、経験年数からベテランが場を占めてしまわないよう、後進は最大限才能を引き出されるような配慮がなされたのは、中央の写壇とのいちじるしい相違であつた。かかるアマチュア写真家の矜持と自負は、未来への希望を、確信をもってえがきだす。「今にアマチュア一の時代が来る。そして現在の専門家と稱ふ人達から兎も角藝術写真だけは完全に取り上げて行くだらう。——併し假令それが何れの手に着しようとする要は其のいゝ成長と發達を遂げしむ事がそれ自體に取つてのよろこばしさだ」。¹²¹

第3節 逆照射する他者

当時、安井は他の写真家に比しモチーフえらびにおいて大胆であるとされ、当該の被写体にはゲテモノやグロテスクという形容があたえられることもあつた。しかし、より多様で多量な「視」のリファレンスを有する今日からみれば、際物的な印象は受けづらく、他者たる彼らは、人間にかぎらない存在すべての尊嚴を光源としているかにみえる。

(1) 労働者

¹²⁰ 安井仲治「春宵漫語」『カメラマン』第20号 中京堂書店(1938) pp.18-19

¹²¹ 岡哲生「関西寫壇私録(二)」『寫眞月報』第34巻第8号 東京専門学校出版部(1929) p.692

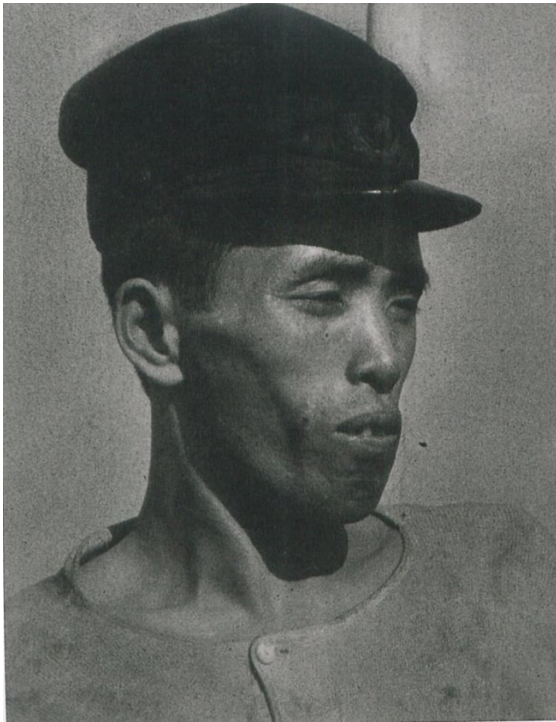


fig. 3 安井仲治「或る船員の像」(1927)

「或る船員の像」は1927年に発表された作品である。安井は、しばしば写真に大胆なトリミングをほどこした。それは非ルポルタージュ的であり、対象のある部分を強調し、そこから象徴性を引き出す行為である。¹²²この写真も、トリミングの作業を経てのち、船員の表情がクローズアップされた。オリジナル・ネガには彼の上半身が横位置で写っている。カメラをむけられることになれていないせいか、ポーズはぎこちない。よろけかけたように体を少しかたむけ中途半端に手をひろげるのは、バランスを取ろうとしているためだろうか。シャツには大小のしみが点々となっている。¹²³

近代における船内労働は、船長以下、高級船員と普通船員との階級差がいちじるしかった。この写真が撮影されたころ、葉山嘉樹は、下級船員としてみずからたずさわった貨物船内部での労働を描いた小説をつづけて発表している。たとえば『海底に眠るマドロスの群』(1929)で、下級船員の波田は、地位でも名誉でも金銭でもない「太平洋の上を一杯に蔽っている空気のような」大きくて清澄な「自由」がほしいとうったえるが、仲間さんざん彼をからかったあとに「そいつあ土左衛門(になったとき)さ」ときめつける。¹²⁴

「或る船員の像」におさめられた青年の粗末な身なりからは、彼が下級船員であること

¹²² 竹葉丈「安井仲治——他者の描写、静物の表象」『安井仲治写真集』共同通信社(2004) p.255

¹²³ 光田由里「安井仲治 リアルさの果て——写真黄金期の巨人」『安井仲治写真集』共同通信社(2004)

p.10

¹²⁴ 葉山嘉樹『葉山嘉樹集』新日本出版社(1984) pp.103-104

がうかがえる。だが、帽子をかぶった面長の顔は、縦位置の画面とあいまって真摯そのものだ。まぶしさに目をほそめながらもうなだれることなく、生の不合理をしずかにはねかえし、そのさきにあるものをみつめているかのようなようである。近代の海に生きる労働者のふとい輪郭を、安井は抽出した。

(2) 実験動物



fig. 4 安井仲治「犬」(1935)

長女・道子が大阪大学病院に入院したとき、見舞いにおとずれた安井は、実験用の一匹の犬に出会った。檻の上部にあるプレートには「絶食」とチョークで乱暴に書きつけられ、そこに「食事ヲサスナ 小沢内科」というメモが、ピンで無造作に留められている。

前出の作品同様、これがルポルタージュではないことには意義がある。暴力を直接に写したルポルタージュの衝撃性は、かえって思考の停止状態を引き起こしやすい。¹²⁵もしこの犬が決定的に痛めつけられている瞬間をおさめたルポルタージュなら、それをみる人間は何を考えるか。日本においては、犬の苦しみは「感性」の次元で受けとめられ、「かわいそうに」のことが消費され終わってしまうであろう。たとえば外国では、強固な動物

¹²⁵ ジョン・パージャー『見るということ』笠原美智子訳 筑摩書房(2005)pp.56-60

「苦悩の写真」に戦争写真をめぐる矛盾が言及されている。

実験反対運動が存在するが、日本には動物の権利に対する異議申し立てが希少である一方で、「実験動物慰霊祭」のような日本の感性を反映した儀式が存在する。

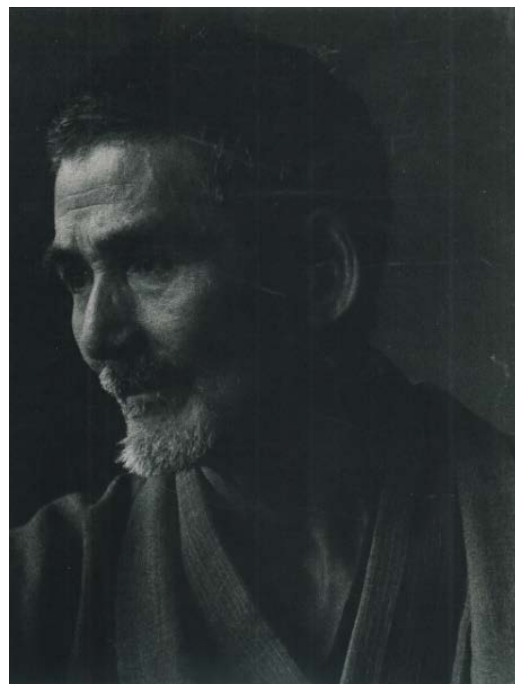
土門拳は、戦後この作品について、安井のカメラの背後にあるものが「同情」以上のなものでもなく、一種スナップ的な軽さがあると述べている。一方で、発表された当時とおなじく「ヒューマニスティックな感動」は受けるという理由で、当該の作品は「名作解説」のシリーズに取りあげられた。土門は、現代（1952年現在）のわれわれは、檻の線を傾斜させるようなトリミングはおこなわないだろう、安井はそれで犬の不安な運命を表現したつもりであろうが、檻はまっすぐに撮ったほうがきびしい「リアリスティックな表現になったと思う」と付言する。

安井は、日本に国家総動員法が敷かれる1938年に、長く写真を撮っていたら「進歩」をしたような気にはなるし、悟りの境地に達すれば芸術としては幸福なのかもしれないが、そのときは「まるで死んでしまった様な平静が来る」のではないかと記している。¹²⁶ 対照的に、戦前から戦後まで写真に対する一貫した進歩史観をうたがわなかった土門は「僕たちは、最早、実質的に安井仲治氏を乗越えたところに達しているというわけである」と「名作解説」の文をむすぶ。¹²⁷

安井はわれわれが「生かされている」と語ったが、当該の動物たちは、人間の「光」ある生のため「影」になった場所で死におもむかされる。まっすぐな檻は、可能世界の存在を遮断しようとするが、わずかにかたむいた檻は、眼前の世界が虚構であるのではないか——つくりかえることが可能なのではないか？——と、犬のしんとしたまなざしを通じわれわれに問いかけてくる。それは、微温なヒューマニズムやあわれみでは終わらせえない一回性のあらゆる生の「尊厳」につらなるものなのだ。

¹²⁶ 安井仲治「春宵漫語」『カメラマン』カメラマン社（1938）pp.17-18

¹²⁷ 土門拳「名作解説5 安井仲治の『犬』」『写真の教室』第1巻第8号 アルス（1952）p.41



ffig. 5 安井仲治「熊谷守一氏像」(1935-42)

(3) 労画家

「熊谷守一氏像」は、1939年から1942年にかけて制作され、安井にとっては最晩年の作品となった。1880年生まれの熊谷守一は、97歳の長寿をまっとうした特異な風貌の画家である。岐阜県の素封家に生まれた熊谷は、少年のころ実の母親から引きはなされ父の第二夫人のもとでそだてられたことが、生涯の反抗的性情の出発点になったという。自伝のなかでは「絵なんてものは、やっているときはけっこうむずかしいが、でき上がったものは大概アホらしい。どんな価値があるのかと思います。しかし人は、その価値を信じようとする。あんなものを信じなければならぬとは、人間はかわいそうなものです」と語っている。¹²⁸

1941年、安井は、阪急デパートでおこなわれた二科の展覧会で熊谷の作品にふれ、「まったく感心した」とその印象を述べている。つまらない職人的な絵がありえないほど高値なのに、熊谷の絵は5、60円でかかっている、それが「芸術的香気と実相の^{みかた}視方の厳しさが飄逸の表面を以て表れている」のをみるにつけ「世間の評価の馬鹿馬鹿しさ」をつくづく感じたのだという。別々な場での発言ながら、芸術の価値に関して、両者には相似した視点がみとめられる。作品にあらわれる清新なかがやきを重視した安井にとって、童子

¹²⁸ 熊谷守一「へたも絵のうち」平凡社(2000) p.149

型の画家には、創作態度においても直截な共感がいだかれたと想像される。だが、芸術への対峙に近似する部分があったとしても、生きかたの面で、両者はあまりにもへだたっていた。

浪華写真倶楽部の同志であった花輪銀吾は、「哀悼譜」で、安井について「家庭でのよき夫であり、よき父であり店ではよき支配人であった。それは何でも受け入れる君のアマチュアらしい寛容さによる」と語っている。さらにそこには、関西の写真界を牽引していく指導者の顔もつけ加えられるだろう。元来病弱な身体を痛めつけやがては命をけずるほどに、安井は、いくつもの「役割」を誠実にこなし、芸術的な情熱を内奥に秘めながらも他人とのまじわりを避けなかった。一方、熊谷は、いつのときでも最終的には自己のありかたを優先した人生だった。「大好きなもの」として、とくに「小さな子供」を挙げながら、極貧生活のうちに病気の次男を4歳で亡くしている。実際に子煩悩な気質であることと、子の最期に際しても「描けないものは描けない」とする自我が、個人のうちに同居する。¹²⁹終生活動的でありながら38歳で亡くなった安井に対し、熊谷は97歳まで生きたが、1932年以降は小さな庭のある自宅からほとんどそとへは出ずに、鳥や虫をながめては絵を描き書をしたためて暮らした。

上述した辞のなかで花輪はいう。

安井君はいやなもの、汚いもの、恐ろしいものにも、愛情の持てる人だった。猿の脳盥でも、鼠のはらわたでも食つて見たい程、凡てに好意を持てる人だった。嘗てはしきりに穢い子供をねらつた。乞食爺も撮つた。¹³⁰

印画紙に写っているのは、しかし、理知的で充足したまなざしを前方に送る老画家の姿である。安井がカメラを向けつづけたなにかを「眺める」人々の肖像¹³¹をしめくくるのにふさわしいそれは、1942年という時節にあり、「全体」に埋めこまれた欠片ではなく孤高な一片として屹立している。安井が熊谷を撮影したとき、彼に死の予感があったかどうかは知るすべもないが、己の自在をつらぬく老画家に、もしかしたらありえたかもしれない自身のオルタナティブな「生」をみていたのかもしれない。そこには、近くにあるながら手のとどくことがかなわない、生の唯一性の切実さがみとめられるのである。

(2) 女性

1930年に発表された「夏の妻」は、安井の作品には数少ない家族を被写体にした作品である。さおに干されたこどもたちの水着や空気を抜いたうき輪をバックに、縫いものをす

¹²⁹ 熊谷守一「へたも絵のうち」平凡社（2000）pp.121-125

¹³⁰ 花和銀吾「哀悼譜」『浪華寫眞倶楽部会報』浪華寫眞倶楽部（1943）p.40

¹³¹ 未発表ネガに『眺める人々』の作品があり、その他にもことなる姿態のひとつとは、各人がどこかをまなざしている。

る女性のシルエットが浮かびあがっている。昼間の時間で、室内には電気がともっておらず、暑さをさえぎる簾を透かして陽の光を採りながら彼女は針しごとをしている。うつむいた横顔からは、ほんのかすかにおだやかな表情がうかがえ、作業をする手もと以外は、影になっている。

fig. 6 「夏の妻」 (mid. 1930's)



写真において、撮影者が男性であり被写体が女性であるという固定された「関係性」の考察は、作品の美術的価値を最優先にすることで後手にまわされてきた。それは端的に、撮る側のみならず論じる側も、長きにわたり男性に占められてきたという事情におおくを負う。当時男性写真家の大多数は、ジェンダー規範にとどまりつつ、女性美の演出をこころみた。しかし、安井が撮る女性の写真は、ことさらにフェミニンな美が強調されていないのと同じくどこかぎこちなかったり、対象とのあいだにいくばくかの距離が置かれたりしている。アノニムな美女の笑顔や、精神をぬきにしたかのような女性の肉体的美を謳う作品が評価を受けてきた写真的史実にかんがみれば、安井の作品における女性との対峙は稀有な態度といえる。

「夏の妻」には、たとえば現代にたかい評価を付された「私写真」——暴露の装置を有する——¹³²とは対照的な、身近に存在する人間の肖像が息づく。薄明のような光が対象を描き出す対象は、手をのばせばとどく位置にありながらその静寂はたいせつにまもられており、そのとき彼女もまたひとりの他者なのである。

第4節 報国と写真家

(1) 「芸術」の駆逐

1931年の満州事変以降、国際的に孤立をしていた日本は、状況の改善を図るべく政府主導で国際交流機関を設立していく。それは、各国に日本の文化を「正しく」理解してもらうことで、関係の改善をこころみる方策であった。報道写真のパイオニアたちは、このながれに乗り「写真外交」という任務を請けおうことで、みずからの役割を確保しようと努めた。1933年、国際連盟を脱退した日本は、さらなる孤立をふかめるが、それは前述の諸機関の

¹³² 笠原美智子「囚われの荒木——『荒木経惟 センチメンタルな旅 1971-2017』展に寄せて」『ジェンダー写真論 1991-2017』里山社（2018）pp.404-405 「ちっぽけなひとりの人間が全身をカメラと化したとたん、センチメンタルなその視座さえも肯定し称揚する」

制度化を促進することとなる。1934年に設立された財団法人国際文化振興会は、外務省との関係により、対外宣伝をリードしていく。また1935年には、外務省文化事業部内に第3課が新設され、諸種の国際交流機関に補助金を交付しながら指導的役割を担う。国際文化振興会の経営は、政府の補助金から成りたっており、そこには必然的に外務省の意向が反映されていた。¹³³

そして、1930年代後半には時流を反映し「国策写真」、「愛国写真」、「写真報国」、「一撮報国」という新語が生まれる。資材不足によりカメラ、レンズ、フィルムの値段が高騰するなか、1937年の「軍事保護法」では、要塞地域や高所など撮影禁止地域の指定が拡大された。同年、東京写真材料商組合は、10月から11月にかけて「カメラ報国運動」として、戦地に慰問写真を送る運動を展開する。1000人のアマチュア写真家からあつめられた2万枚近くの写真は、憲兵隊の立会のうえ、慰問袋にいれられ陸海軍に送られた。¹³⁴

翌1938年、『フォトタイムス』上で、「内閣情報部と国策写真の座談会」がおこなわれる。内閣情報部の情報官・津田（名字のみ記載）は「アマチュア作家の皆さんからも写真を頂戴することが出来るといふやうなことになるれば、私共の非常に幸とする所」だと述べている。ここでの「写真」とは、国内向けの啓発宣伝用のものを指す。おなじく内閣情報官の林謙吉は、国策写真の内容に関し「在来の藝術写真の考へを一時清算なさらんと行けないです。「藝術写真的な観方といふものよりも、もつと写真を文學的にみる、即文章を書くために筆や万年筆を握る気持ちでカメラを握るんですね」と述べている。林は、芸術写真の創作をこころみたこともあるという元アマチュアだった。¹³⁵

同1938年、九州の写真家団体「ソシエテ・イルフ」のメンバーであり、弁護士の職をもちながらアマチュア写真家として活動する高橋渡は「所感一ツ」で書く。「写真によつて生活をしてゐる人、プロフェショナルの人々が、現時勢下に於て最も端的に社会的であり生産的であるものとして報道写真を挙げる態度は正しい。併し乍ら之を以て凡てであるとし是以外のものを否定するならばそれは狭量と言ふより寧ろ越権である。何故ならば吾々アマチュアは写真報國(!?)しなくとも各人それぞれの職業をする所に於て、國家社會の一員としての任務は直接的に間接的に致してゐる筈である。之に更に科するに写真報國を以てするならばそれは屋上屋を架するの類であらう。「時勢に眩惑され時流に迎合して結局に於ては、他の社会的勢力に利用されたに過ぎない結果となることは藝術自體の自殺であらう」。¹³⁶ 同年は、国家総動員法の施行後、日本軍は広東につづき武漢三鎮を占領、また近衛文麿による東亜新秩序声明が発表されている。かかる時勢にかんがみれば、高橋の辞は、本音であったとしても、その表明は相当に勇気の要る行為だといえる。

¹³³ 川崎賢子・原田健一『岡田桑三 映像の世紀——グラフィズム・プロパガンダ・科学映画——』平凡社 (2002) p.229

¹³⁴ 白山真理『〈報道写真〉と戦争——1930—1960——』吉川弘文館 (2014) pp.202-203

¹³⁵ 「内閣情報部と国策写真の座談会」『フォトタイムス』フォトタイムス社 (1938) pp.10-11

¹³⁶ 高橋渡「所感一ツ」『カメラマン』カメラマン社 (1938) pp.24-26

1932年に新興写真の拠点であった『光画』に主体的にかかわり、「写真に帰れ」を發表した伊奈信男は、1939年、「新體制下に於ける寫眞家の任務」において「寫眞家は起ち上らなければならぬ」と飛檄する。彼は、あたらしい理論はあたらしい作品に先行し、それを創造しえるところを以て、あたらしい時代の芸術は「余剰価値」の芸術であってはならないと説く。時局にかんがみれば、一人一党というような創作上の自由はもはやみとめられるものでなく、自己の主張、思想、ところがまえ等は「投げ捨て」、おおきい全体的目的のため一致団結せねばならない。そこで参照されるのが、文化の地位を中立的なものから、一躍全体主義的なものに転換した「血液」と「魂」からなるドイツ国文化院法である。「——大切なのはその精神である。それは國民の意志を導き、國家の進路と常に一致せしむる基礎を為す」。「文化」創造は、個人のしごとであるばかりでなく、国家政策的な指導問題であり教育問題であるならば、個々の文化創造者は「正に公的任務の担当者」となるのである。そこで、伊奈は「報道寫眞家は社會の指導者となり教育者とならねばならない」と主張する。¹³⁷

また同号では、勝田康雄により「不健全写真」の排撃がとなえられている。職業作家は、使命を「どしどし」実行しているが、アマチュア作家の基本は「娯楽」であるから、それを全部滅却すれば存在自体が「無」にひとしい。アマチュア作家が、「知らず識らずの間に不健全な寫眞作畫を楽しむ傾向」は、この際徹底的に除去されねばならない。彼らの写真にまみられるのは、デカダン美というより醜に墮した作品で、他方やせおとろえた老婆や少女などかよわいものに対する愛情を感じさせる作品も、時局下には遠慮されるべきだろう、という。¹³⁸プロ寫眞家の活動が、正当な唯一のものとされ、公的に強大なバックアップを得て「報國」の写真を生産していくのと対照的に、教化の対象とされたアマチュア寫眞家は、侮蔑されつつ、「活用」はいかにすれば可能か？ という論点で語られていく。

翌月、同誌上の「アマチュアは何をすべきか」で光吉夏彌が唱えるのは、アマチュア寫眞家無用論である。

寫眞家は厳然と「寫眞家」であればよいし、寫眞をたのしむものは、楽しむものとして、それだけの存在であればよい。もともとこれが健全な寫眞界の本来の姿であるべき筈のところ、アマチュアが變に寫眞家面をしたり、また寫眞家が自分の寫眞的教養を完成することもなしに、絶えずアマチュアを對象意識においての所謂寫眞界名士であつたり、凡そ不愉快きはまる世界が、これまでの寫眞界だつたのである。(中略) 寫眞をやりたいものは、判然と「寫眞家」になればよいのである。(略) まして藝術の偽装によつて行はれる青白いアマチュアリズムは徹底的にその無意義さを糾弾されなければならないと思ふのである。(略) 今日は寫眞アマチュアなんてものは、當然姿を消すべきものなのだ。時代的に有りうるものではないのである。¹³⁹

¹³⁷ 伊奈信男「新體制下に於ける寫眞家の任務」『カメラ・アート』カメラ・アート社(1939) pp.85-89

¹³⁸ 勝田康雄「不健全寫眞の排撃へ」『カメラ・アート』カメラ・アート社(1939) pp.101-102

¹³⁹ 光吉夏彌「アマチュアは何をすべきか」『カメラ・アート』カメラ・アート社(1939) p.146

同 1939 年、安井は、その前年に高橋が持論で時局に抗した『カメラマン』誌上に「拝啓」を寄稿する。ごくストレートな高橋の表現とはことなり、安井らしい象徴的な語りには、含意がみとめられる。過日、伊良湖崎に撮影旅行に出かけた安井たち一行は、そこからほど近い場所でひとりの人間が熱心に作業をしているのをみかけ、タクシーの運転手にあれはだれかと尋ねた。答えは「狂人です、浜に打ち上げられた貝や材木を毎日並べてよろこんでいるんです」というものだった。安井たちがながめていると、腕白な中学生が 5、6 人やってきてその男性に石を投げつけた。すると「狂人」は、反抗もせずに波打ち際をゆったりした足どりであるいていき、大洋のしぶきにちいさくなって姿をけしたという。安井は、「腕白を憎く思った」が、「狂人を左程哀れには思へなかつた。寧ろ何か昂然としたものさへ感じられた」¹⁴⁰と記す。

後述するように、近代国家が、すでに 1920 年代「狂気」を囲い込んで管理下に置き、戦争遂行の目的とともに当該の政策を強化していったことにかんがみれば、この時期における安井の「狂人」への評価は、きわめて大胆なものといえる。一行は、結局撮影をおこなうことはなかったが、それは決して無意味なできごとではなかったと彼は語る。なぜなら、いろいろの「フォーミュラ」を心に蔵していれば、カメラの前は「無尽蔵」だというのである。¹⁴¹

しかし、ついに 1940 年、全面的にカラーを変えた同誌には「寫眞家新體制順應」が掲載され、高橋や安井のような文章は姿をけす。「小誌はかねて聲明せし如く、八紘一字の大理想實現の前には如何なる苦難も犠牲も敢て辞せざるの概を以て、飽くまで寫眞文化建設と國民教化指導の重大使命に向つて挺身せんとするものであるが、これが實行の第一歩として恰く読者諸君に向つて次の如き決意とその實行を要請せんとするものである」。

- 一．放恣なる趣味寫眞行動の自肅自戒と、国策協力の實踐
- 一．區々たる傾向、傳統に籍口する群小寫眞團體の解散統合
- 一．全寫眞家、寫眞關係者を打つて一丸とする大日本寫眞報國の結成¹⁴²

同号にはまた、落語「寫眞息子」なるものが掲載されており、「物知り顔はスパイの好餌」と警告されている。写真が趣味の「寫太郎」は、どうしても写真を撮りたいなら時局を意識したものにして「先生」にいわれ、出征軍人を駅に撮りにいき憲兵にしかりつけられた。先生は、どんなものを撮るか以前に、どんなものを撮ってはいけないかを注意するよういい、つまりは「国威宣揚、力強い銃後等を取材とするのだなア」とアドバイスする。それでも「藝術寫眞」がどうしてもおこないたいという寫太郎に、先生は、そんなだ

¹⁴⁰ 安井仲治「拝啓」『カメラマン』カメラマン社（1939）p.27

¹⁴¹ 安井仲治「拝啓」『カメラマン』カメラマン社（1939）p.27

¹⁴² 「寫眞家新體制順應」『カメラマン』カメラマン社（1940）p.17

いそれたことをかんがえずに、まずは技術をみがくようにと「わきまえ」を説く。¹⁴³

(2) 『王道楽土』

本論があつかう5人の人物中、安井、ささき、渡辺とかかわりをもった岡田桑三は、ロシアとのコネクション、社会主義思想、複数のメディアにおける積極的な活動を通じ、当時の日本の対外宣伝活動にポストを得た。1934年、岡田は、伊奈信男、原弘、疋田三郎、木村伊兵衛らによって結成された「中央工房」のメンバーに加わる。工房内には、三浦直介を中心に対外宣伝を目的とした「国際報道写真協会」が置かれていた。

一方、それ以前の1932年に岡田たちと「日本工房」を設立しながら、1934年には彼らと決別する名取洋之助は、日本文化を海外に紹介する雑誌『NIPPON』を創刊する。1936年、名取はニューヨークで『LIFE』の契約カメラマンとなった。1937年2月に、陸軍大臣を務めた林銑十郎内閣が誕生すると、それを受けるように『LIFE』の表紙には、木村伊兵衛が撮影した林の肖像写真が掲載される。しかし同年6月に第一次近衛文麿内閣が成立、翌日盧溝橋事件が起き日中戦争が本格化すると、『LIFE』には、組写真とエッセー「日本人——世界で最も因習的な国民」の小特集が組まれた。¹⁴⁴

1939年、岡田は、モスクワで知己となった馬場から「陸軍参謀本部の依頼で対外宣伝のためのコミュニティをつくるので協力してほしい」という電話を受け、日本共産党から転向した高谷覚蔵、近衛秀麿の音楽マネージャー・原善一郎、ニコライ教会の宣教師・吉村柳里、中佐の矢部忠太、ロシアから帰国した勝野金政¹⁴⁵らに引き合わされた。同1939年8月、第8課第11班長に矢部が就任すると、対ソ宣伝を目的とする「ソビエト研究所」（通称・九段研究所）が九段に開設される。

さらに1941年には、理事長を岡田、理事を林達夫、岡正雄、岩村忍、小畑操、写真部主任を木村、美術部主任を原として「東方社」がスタートする。ソビエト研究所同様「東方社」にも、海外経験がありながら前歴のあかさされないような人物が、複数出入りしていたという。開始後まもなく同社では、月刊写真画報『東亜建設』の発行が計画される。

当時、東京府立工芸学校製版印刷科の5年生であった多川精一は、太平洋戦争が始まる前年、同校の教師であった原から紹介され、東方社に就職した。開戦前夜の緊迫した状況

¹⁴³ 櫻屋銀詩楼「寫眞息子」『カメラマン』カメラマン社（1940）pp.42-43

¹⁴⁴ 川崎賢子・原田健一『岡田桑三 映像の世紀——グラフィズム・プロパガンダ・科学映画——』平凡社（2002）pp.142-147 p.172 p.187 pp.225-227

¹⁴⁵ 勝野金政『凍土地帯』吾妻書房（1977）pp.26-27 pp.33-39 p.55 pp.103-135 pp.239-257
フランス留学中の1924年共産党に入党し、1928年にモスクワへ行くが、「地上天国」のイメージと同地の落差に幻滅、のちにスパイ容疑で投獄され3年半のあいだ監獄を転々とし1934年に釈放された。帰国後は、治安維持法で逮捕されながら、日本政府に協力することでポストを得たのだった。

も実感できていなかった 19 歳の彼は、それから 45 年後に当時を回想している。「1940 年に日本ばかりでなく世界中が戦争状態となってしまったことは、早くから新興芸術である写真や、デザイン、宣伝技術などを研究していた者にとっては、まことに不運な時代であったといえよう。オリンピックも万国博も中止になってしまった今、可能なのは国家宣伝しかなかった。岡田をはじめ中央工房系の人たちが、東方社を組織し参謀本部という軍の中枢と結びついたのはこうした状況下であった。当初、参謀本部側の計画が文化宣伝であったことが、これに参画した人たちにとって、自らを納得させる唯一のよりどころだったのであろう。情報局が握るそのころの国内宣伝の方向は、国民を戦争協力に駆りたてることに、主眼が置かれていたのである」¹⁴⁶。

一方、1938 年に木村から東方社への参加を打診された 23 歳の濱谷浩は、社会が「物情騒然」にありながら「はいれば徴用の心配もないし、いい仕事ができる」と聞き、入社をきめる。「噂では、参謀本部の口ききで三井関係から金がでていたとのことだった。だからガツガツしたところがなくて、至極鷹揚な社に思えた」。濱谷は、「写真機材も暗室設備も当時としては超一流の構えだった」東方社が、謀略宣伝の材料を制作していたことを証言している。「私が見たのは、対ソ戦に備えての宣伝ビラで、日本軍に捕虜になったソ連兵が、うまそうに給食を食べている場面の写真だった。日本人にソ連兵の服装をさせて、顔はエア・ブラシで巧みに修正されていた。東方社にはそうした修正の名人がいて、戦車の 5 台や 10 台、爆撃機の 50 機や 100 機、写真の場面につけ加えるぐらいのことはお安い御用だった」。¹⁴⁷

特筆されるのは、当時そこにかかわった人間のほとんどが、終戦後沈黙を通したのに対し、濱谷が告白を果たし「向後の自戒」としている態度だ。そうせねばならないと彼に決心させたのは、自身の撮った写真が無断で修正され発表されていたのを、のちに知ったことによる。「そのとき、私は東方社をやめていたので、どういう手練手管で嘘ツキ写真が作られ、新聞社に配給になったのかわからない。政府も軍部も国民を欺くのは大義名分みたいにしていたのでいたし方ないけれど、私の写真が一役買っているとなると心おだやかでない」。¹⁴⁸

濱谷らをスカウトしながら、管理職にはむかず「ファッション的な上位下達的一方で下意上達はさっぱり」の状況で統括に腐心していたといわれる木村は、満州へわたり『王道楽土』という写真集を出版する。「恰も建国 7 年、治国の基本原則、王道政治が隈なく行き届き、文字通り民族協和、安居樂業の姿が、いたるところでカメラの対象となつて展開されてをりました」。「——この度日本と手を携へて大東亜戦争遂行の輝かしい使命達成に協力することが出来る、満州國の實績の一部だと私は深く信じてをりますから」。¹⁴⁹

『王道楽土』は、ことばと挿「絵」たる写真から、念入りにつくりこまれた「物語」だ。「絵」になる場所、「絵」になる人物のみを選びわけて撮った写真には、さらに木村の習い

¹⁴⁶ 多川精一『戦争のグラフィズム——「FRONT」を創った人々』平凡社（2000）pp.92-95

¹⁴⁷ 濱谷浩『潜像残像』筑摩書房（1991）pp.61-66

¹⁴⁸ 濱谷浩『潜像残像』筑摩書房（1991）p.66

¹⁴⁹ 木村伊兵衛『王道楽土』（1943）※ページ数の記載なし

性であるソフトフォーカスがほどこされている。暗さの微塵もない人工的風景は、しかし、エアブラシで加工された軍事場面と何らかわるところがない。

八、 ハルビン

外人墓地の日曜日の午後は、チエホフの芝居を思はせるやうな幾つかのロマチツクな情景に魅せられて不思議な感じがしてならなかつた。その後、せつかく撮りあげなければならぬ題材にもこの幻影がつきまとつて、落ちついた気持ちで撮影する気にはなれなかつた。こんなにそはそはする環境が旅行者として私がうけたハルビンの印象かもしれない¹⁵⁰

十、 牡丹江

建設途上にある牡丹江附近にも渡し場風景の如きこうしたのどかな場面がある。民族協和はちよつとした所にも展開されてゐてたのもしい気がした¹⁵¹

注視されるのは、文章の脇に添えられた写真機材と撮影方法に関する覚書である。「こゝ一番の撮影には、ライカ・カメラに廣角レンズをつけて、出来るだけ遠近感を強調した効果をねらつて見た。大陸の空はよく澄んでゐるから濃黄色フィルター使用は空の調子を暗くし過ぎる。特殊な効果を必要とする外は、淡黄色か、緑色フィルターを使用すべきだ」。

1952年、木村は、アサヒカメラで己の「作画精神」について語っている。「絵画に追従している、いわゆる芸術写真は決して写すまいと心がけてから、二十数年が過ぎ去つた」。¹⁵²自身で創出した「絵」を絵でないとし、リアリズムの形式を取らない写真を「芸術」＝絵空事ときめつけることへのドミナンスの適用は、「中央」の特権をあらわにする。この発言が戦後におこなわれながら、批判はおろか関心もはらわれてこなかつた状況は、ドミナンスの有効性がうしなわれていないこと、近代の「物語」が完全に断たれていない事実を端的に示す。

第5節 あらがう「視」

行為としての写真にたずさわる以上、安井もこのような統制から完全にのがれることは不可能であつた。彼は、生涯おもてだつた政治的発言をおこなわなかつたが、政治的主義

¹⁵⁰ 木村伊兵衛『王道楽土』(1943) ※ページ数の記載なし

¹⁵¹ 木村伊兵衛『王道楽土』(1943) ※ページ数の記載なし

¹⁵² 木村伊兵衛「私の作画精神」『アサヒカメラ』(1952) p.118

を標榜しないことを現実逃避の非政治的態度とはいえない。安井は才知をはたらかせ、戦争の開始という最悪の事態に直面しても、写真表現が完全に閉塞してしまわないよう自律の道をさぐりつづけたのだった。

(1) 半静物

fig.7 安井仲治「生」(1932)



1932年、安井は「半静物」ということばで、静物写真のあらたな展開を語っている。それは、みつけたものをそのまま写すのではなく、現場で手を加えて「被写体の創造」のステップを踏む手法である。彼が実践した表現は、「主題そのもの」であるよりは「ある種構成された静物のフォルムの美しさへの関心を見せながら、そこに社会的な関係を黙示させるような象徴的風景を現出させること」だったと考えられる。「みること」と「思考すること」の止揚は、彼のなかで普遍への志向として熟していった。¹⁵³

「生」は、1938年7月、第27回浪華写真倶楽部展で発表されたのち同年の『アサヒカメラ』8月号に掲載された作品である。「岩の上に置かれた海草など奇妙な断片たちは、複雑な配置にあるのに、作家が演出したというふうにはもはや見えない。意味ありげであるよりは、ほとんどオートマティックな所業にさえ見え、尋常ならざる効果を生み出している」。¹⁵⁴「生」というタイトルは、「今・ここ」そのものの象徴ではないだろうか。近代に

¹⁵³ 竹葉文「安井仲治——他者の描写、静物の表象」『安井仲治写真集』共同通信社（2004）p.255

¹⁵⁴ 光田由里「安井仲治 リアルさの果て——写真黄金期の巨人」『安井仲治写真集』共同通信社（2004）p.14

なり、いったんはくびきを解かれた相貌のことなる「個」は、ふたたびさざれ石の一粒のごとく、一体の巖に埋めこまれようとしている——1938年、「国家総動員法」の公布された年であった。岩に配置されたモノたちは、身うごきがとれないそのままの場所で、しかし消しつくされない生々しい光を放っている。

(3) ある銃後の表象

fig.8 安井仲治「惜別」(1939-1940)



1939年、ついに第二次世界大戦が勃発し、翌1940年8月に日本国内では国民精神総動員本部が「贅沢は敵だ」の標語を掲げ、10月には大政翼賛会が発会式をおこなうなか『寫眞週報』の「遺児を抱いて教壇に起つ」という3ページにわたる記事が目を引く。本文には「七月五日、靖国の社頭に夫と対面した未亡人たちは夏休みが済んだ二学期はじめから（軍事保護院の政策により）教壇に立って、夫が命を捧げた興亜聖業を承継い^{あかご}でくれる第二国民の指導にあたります」とある。夫を亡くしたうえ、児童全体をたばねる「聖なる母」の役目をあてがわれた女性たちは、武器を手にしないまま戦争に加担していきのだった。

「惜別」(1939-40)は、かかる時代を背景とした作品である。出征の兵士たちを見送る国旗が一斉にふられるなか、背中に赤子をせお^{あかご}った若い婦人が立ちつくしている。オリジナル・ネガは横位置で、大勢の姿がスローシャッターでおさめられているが、安井は、そこからある「銃後」の表象をあざやかに切り取った。女性はもはや顔をなくしてしまった——極端なトリミングにより画面は朦朧としているが、それに反して、この時期の過酷

な状況におけるぎりぎりの表現の「自律」があざやかにきざまれている。

第6節 生きるために「みる」

「写真に帰れ」で伊奈は、写真の歴史を知れとうったえたが、彼が指摘するずっと以前から、安井はその重要性を認識していたと考えられる。1941年10月18日、安井は、大阪朝日新聞社で「新体制国民講座」の一として「写真の発達とその芸術的諸相」を講演することとなるが、太平洋戦争直前という時期にあり、まなびの成果は大胆な啓蒙的色合いをおびていた。安井の子息は、かかる姿を今日も鮮明に記憶する。父親としての彼は、こどもに対し現体制でなにが進行しているかをつつみかくさず説明していた。購読していた『Life』の切りとられている箇所だけでなく「切りわすれた箇所」をも指し示してくれたのだという。

これは都合の悪い事は見せない、国粹排外、の政策のためですが、1941年暮れにあった父の講演の引用写真では、ドイツも含めて外国の物がはるかに多く、中には《文久3年下関赤間が関へ英国兵が上陸した時の写真》というのまであります。(この「新体制国民講座」第十集藝術篇には、金剛巖氏「能楽に就いて」、須田国太郎氏「西洋画の表現法」、春山武松氏「絵巻の性格」も収録されていますが、戦争と全く何の関係もないお話ばかりでした。) ¹⁵⁵

講演の内容は、周到に計算をされ、組み立てられていた。導入部分から、前年観覧した正倉院展にふれ「何だか現代の工藝美術其他の方面が光を失ひ、情無いやうな感じに打たれた」と上代の日本文化を讃美するのだが、安井のいいたいことはその一点ではない。今の時代とことなり当時は「一枚の鏡を作るにも、佛像を刻むにも、科学と藝術との一致を見る」のであり、「科学は科学」、「藝術は藝術」と分かれていなかったと分析してみせる。すなわち、芸術のように美的なものも、「科学」文明にささえられていると示唆しているのである。安井は、おそらく故意に言及していないが、正倉院が造られた奈良時代は、「唐文化」の移入によって日本の諸文化がさかえた時代だった。

彼は、写真の歴史について述べながら、よりおおいなるものの存在を語っている。「芸術とはなにか？」それは、ただ情の問題だけを取りあげても、芸術としては成りたない。人間の生きていくうえにおいて、さまざまな「発明」、「発見」を駆使して、それに血と肉をあたえて芸術として取りあげ得るような作品をつくる人間が出現したら、昔からあったものだけが芸術ではないと考えられるだろう。つまり、伝統的な表現に対し「わかい」表現である写真の可能性について言及しているのである。

¹⁵⁵ 安井仲雄「父のこと」『安井仲治写真集』共同通信社（2004）pp.6-7

しかし、彼が写真の歴史をひもといた真の理由は、写真が有する未知の可能性と同時に、現今の「限界」をもみきわめようとしていたためではないかと想像される。日本に写真機（タゲレオタイプ）がもたらされたのは1841年で、タゲールが写真術を発明してからわずかに2年後であるにもかかわらず、日本で写真の「芸術性」が論議されるようになるのはずっと遅く、安井が写真を始めたころであった。それゆえ、黎明期からともに成長をしてきた彼にとって、写真表現はわが身そのもののように感じられたのではないだろうか。

開國の前夜には非常に國が鎖國的な状態になる事は、これは學者の本にも書かれてあるのですが、明治維新になつて國が段々開ける前夜には、一方に於ては外國の技術を採入れ一方に於ては非常に鎖國的な心境に國民が支配されてゐます。それによつて國をどうにかして行かうといふ心境が働いて来るのでせう。現在の日本を見ましても矢張り鎖國のやうな状態であります。アメリカへ船を三ばい出すか出さぬかといふやうな事が問題になつてゐます。が、これはいつまでもさう續くものではなく、寧ろ大なる開國の前夜の姿ではないかと思ふのであります。¹⁵⁶

安井はすでに、この戦争が遠くない将来終わることを確信し、その後おとずれる時代に希望をつなぐため「今・ここ」での当為を実践したのだった。

同1941年、秋山轍輔こと元小西本店の「むらさき」が、東京写真研究会会報に「日本寫眞文化の昂揚」を寄稿するが、安井はそれを読んでいと想像される。従前指摘されてこなかったが、当該の秋山の文章の活字化よりあとにおこなわれた講演では、その内容があきらかに意識されている。ひるがえって考えれば、安井による最初で最後の講演は、近代日本の「中心」に対し、彼が遺したメッセージをふくんでいるだろう。

1904年に、率先して「芸術」を支持し、「寫眞の精霊」は「趣味是なり」といいきった秋山轍輔は、1941年の日本にあり、長い時間を経たのちの変節を体現する。

新體制に直面する我々は、「大化改新」を想起しないではゐられない。又「明治維新」の大業をも想起せざるを得ないであらう。大化改新は當時における回天の大業であり、神武建國の大精神が中大兄皇子や中臣鎌足を憤起させ、死を決して、八紘一宇、國家の大綱を復歸せしむるに至つたのである。明治維新は國家の危機に當面して日本の危機を反省し、世界列強に對してあまりに微弱な日本を反省し、勃然として起つたのが尊王論である。即ち惟神道への復歸である。(略)

一國の文化は物心二元の基調から成り立つてゐる、即ち自然科学と精神科學の両方面の科學が相互に提携して進歩してゆくところに文化の昂揚が所期せられるのである。

¹⁵⁶ 安井仲治「寫眞の發達とその芸術的諸相」川崎龜太郎『安井仲治の人と其作品』くらぶ草土（1979）p.66

自然科学のみが跛行的に進歩して物質文化のみが著しく発展すると、國民が物質的享樂に耽り、人間としての貴き精神生活が忘れられることになる。反之精神文化の方面のみが高潮して物質的文化がこれに伴はなければ、國際場裡に處して國家の獨立を保存することが出来ない。(略)

爾来日本人は時の世界における最高の技術を習得し、これを消化大成している。これを奈良の正倉院に蔵められてゐる御物においても、平安朝以来の建築に、美術工藝に又近世の泰西技術の輸入に見るも、これを立證することが出来る。(略)

かう考へてみると、我が寫眞文化は、惟神の道に即する日本精神を表徴するものでなければならぬ。(中略)

彼の歐米の糠粕を嘗め唯その新奇なるのに眩惑されて“新興”とか何とかいふ名で作畫するが如き輩は、全く日本精神を解せぬものである。¹⁵⁷

両者の主張は、文化と文明の双方が重要であるという点においては一致をみながら、秋山においては、無媒介に写真と「惟神道」が接続される。一方、安井は、正倉院の御物が「忠君愛國の心と共に保存されて居るといふことに絶大な國民的興奮を覚え」たといひながら、今の世にこれに匹敵するものとして飛行機、ラジオ、写真を堂々と挙げるのである。

翌1942年、亀井勝一郎は、現代文明がもたらした害毒のなかでも顕著なのは、感性の退廢であるといひ、それに拍車をかけるものとして、写真と映画を挙げる。

何事に対しても見境ひなく之を写すといふ、無邪氣極まる犯罪の重大さを知らないのだ。何か珍しいもの、美しいもの、尊いものがあれば直ぐカメラを向ける。写して然るべきものと然らざるものとの区別がつかぬのである。たとへば大和の古仏や美術品を映画化することに私はいつも疑問をもつ。古びた御堂の、幽塔の裡においてこそ光りを放つ古仏を、映画で露骨化し、かうして普及するのが國民の美意識を高める所以だと考へるのは果してノーマルであるか。¹⁵⁸

亀井が、永遠であり固有の民族の生活にこそ存在するとした「精神」は、その差異による文化的特質から、「均質化」が進む世界への対抗手段にもちいられようとした。亀井のような文学者を悩ませたのは、かかる道具の「理性」の効用が、神話的な想像力を無化することであった。¹⁵⁹ それは、後述するように、近代的な「個」の疎外をおぼえた三井甲之が、文明を拒絶し、ことばのなかに閉じこもろうとした態度と質をおなじくしている、

¹⁵⁷ 秋山轍輔「日本寫眞文化の昂揚」『東京写真研究会会報』東京写真研究会(1941) pp.1-4

¹⁵⁸ 亀井勝一郎「現代精神に関する覚書」『近代の超克』河上徹太郎 竹内好編 富山書房(1979) p.12

¹⁵⁹ Harootunian, Harry. *Overcome by Modernity: History, Culture, and Community in Interwar Japan*. Princeton UP.2012.45.

だが、現前するできごととしての戦争から距離をとったところに、「伝統」を動員しても、未来をえがくことなどできない。かかる「理性の頹廢」は、過去志向にならざるをえなかったが、それは日本的な「永遠の今」の時間感覚と共振していた。

1941年の7月、視界がゆがむ症状があり検査の結果腎臓病が発見されて療養に入ることになった安井は、無理をして引きうけた講演で力尽きたようになり、12月には入院をする。彼は、死を半年後にひかえたその夏、つぎのような短歌をのこしている。

古の紅毛人の造りたる カメラオブスキュラ 今わが命¹⁶⁰

17世紀から18世紀にかけてのヨーロッパで、「観察」にかかわる科学の一部であったカメラオブスキュラは、絵画をえがくための道具としてよりも、対象物を再現するはたらきをおこなう器具それ自体として存在した。内部化された主体と外部の世界が分離し、「距離」が生じるときに、世界の認識がはじめておこなわれる。¹⁶¹ 1941年の日本で、安井が、生の終焉を目前に31文字の「固有」な形式のうちに名指さしたのは、いにしえの外国人が創造した「普遍」性を持つ利器であった。危機の状況にあり、暗箱の「眼」を通し理性を充満させることは、すなわち生きることである。

近代に登場してからプロ写真家の下位に置かれ、とりわけ戦争への傾斜とともに決定的に否定されたアマチュア写真家たる彼は、しかしアマチュアであるからこそ、有事においても陥穽におちこむことなく、未来を先見する眼をもちえたのだった。無名の彼らを代表するように、諸種の偶然から「写真史」の一隅にすがたをとどめた安井は、近代アマチュアのかぎりないポテンシャルを示している。

¹⁶⁰ 読人不知（安井仲治）「遠西奇器」川崎亀太郎『安井仲治の人とその業績 その4』日本写真会会報第11巻第5号 日本写真会（1965）p.7

¹⁶¹ ジョナサン・クレーリー『観察者の系譜—視覚空間の変容とモダニティ—』遠藤和己訳 以文社（2005）pp.56・58 p.68

第2章 まなざされるもの

第1節 近世の女性写真師が写した「男」

「いつそスラムは大なるがよろし」とはじめられ「きょうの写真より明日の写真よろし」とむすばれる「^{しやしんをうつすひとよんじゅうはちよろし}寫真家四十八宜」のなかで、安井は「女の写真家もつと増えてよろし」と詠んでいる。¹⁶² 近代に起きた未曾有のアマチュア写真ブームのなかでも、主たる行為者は男性であり、方法論や表現内容、それ以前の撮影機器をめぐる議論等は過熱しても、不在の彼女らがその場に招じ入れられる機会は稀有であった。

大阪には、「卯月会」のような女性だけの写真家団体も存在したが、現存している作品や資料は少なく、研究はほとんどおこなわれていない。1939年の『写真月報』には、同団体の作品特集として江原初子「お手柄」、菅谷和子「ふじとかりうど」、「亀岡風景」、金森重子「猫のある家」、工藤ハマノ「元町にて」、木村靖子「静物(一)・(二)」、藤田芳子「村の平和」が掲載されている。時局を反映してのことかもしれないが、被写体は日常生活や街頭、村落の風景等であり、おだやかで写実的な作風という点で一致する。¹⁶³

また、野島康三がかかわったレディス・カメラ・クラブ(LCC)は、1937年に彼の交際圏で発想され、友人たちと一般から募集した有志とで結成された団体である。職業写真家をめざすメンバーとともに、すでに職業に就いている女性が在籍したが、比較的裕福な階層の出身者が多く、自身が所有する暗室において現像から焼きつけまで各人がこなしたという。だが、当時はすでに戦時色が濃く、活動は2年たらずで現存する作品も少ない。

主たるメンバーには、野島の経営するノノミヤ・アパートメントの設計をした建築家の夫・土浦亀城とともに1923年から約3年間滞米し、帰国後、建築の仕事にたずさわる一方で、写真に熱中するようになった土浦信子、芸術写真家を志望するも東京写真専門学校に女子の入学が許可されていなかったため、個人のスタジオに弟子入りし、その後野島作品のプリント、引き延ばしを担当した佐藤田鶴江、同様に野島の助手を務めた津田美津子、もっとも精力的に活動したメンバーであり、戦後にはうしなわれていく全国の民家を撮影、記録することをライフワークとした溝口歌子、洋画を勉強しており、ロマンティッ

¹⁶² 安井仲治「寫真家四十八宜」『丹平写真倶楽部会報』第25巻12号 丹平写真倶楽部(1950) pp.2-3

¹⁶³ 小西六本店『寫真月報』寫真月報社(1939)11月号 pp.59-64

クで重厚な写真を得意としたといわれる富永芳子、家族ぐるみで野島家と親交があり、スナップを主とした島田順子がいる。¹⁶⁴ 1935年7月号の『アサヒカメラ』には、同メンバー・佐藤の「築地所見」、溝口の「仲良し」ほか、女性の作品として宮本満榮の「オペラチオン」が掲載された。¹⁶⁵

1935年2月号の『アサヒカメラ』誌上でおこなわれた「寫眞上達法雑談会」には、溝口が唯一の女性として参加しており、今はほんの初心者で「ほんたうにアマチュアとして」であるが、ライカを使用してからは「楽に撮れる」ようになった。失敗で「一番多いのは露出の加減」と語っている。なかでも、初期の写真関係者で1934年に早世した親類の松平忠諒から「しょっちゅう撮られて居るのが専門であつ」たのが、自身で写す側へ移行するきっかけになった、という発言が注視される。¹⁶⁶

溝口はまた、1936年4月号の『アサヒカメラ』に掲載された「のぞみその他」で、展覧会や雑誌の写真をみていつも感じるのは、女性によってのみつくられ得るような「感じを盛った」写真の少ないことだと述べる。無理に泣き出しそうなのをだまして撮ったのではないこどもの写真や、すました顔でなくリラックスした「年頃のお嬢さん」、またはちいさな人形、犬猫の玩具、ミニチュアの家などの「卓上写真」を女性写真家にはすすめたいという。¹⁶⁷ 溝口の提唱する女性に特化された写真とは、スナップを基に、一種のブルジョア的価値とジェンダーを反映した世界観の結晶といえよう。



¹⁶⁴ 光田由里「レディス・カメラ・クラブと野島の作風の展開」『野島康三とレディス・カメラ・クラブ』渋谷区立松涛美術館（1993）

¹⁶⁵ 朝日新聞『アサヒカメラ』東京朝日新聞社、大阪朝日新聞社（1935）7月号 pp.14-16

¹⁶⁶ 『アサヒカメラ』朝日新聞社（1935）3月号 p.383 p.389

¹⁶⁷ 『アサヒカメラ』朝日新聞社（1935）3月号 pp.684-685

fig.9 島隆「島霞谷 像」

だが、外国で写真が発明されたとき、それが自明のありようとしては共有されていなかったように、日本の近代が明けるまえ写真に接触した女性が、身近な存在である「男」を撮影したとき、そこには一見してあきらかな撮影者のジェンダーはきざまれなかった。

日本初の女性写真師とされる島隆^{りゅう}は、1823年、上野国山田郡上久方村の岡田家に誕生し、田村梶子の松声堂にまなんだのち、18歳ごろ一橋家の右筆にあがった。1855年、彼女は島霞谷と結婚し、浅草、下谷と居をかまえ、のちには夫婦で関東周辺の各地を遊歴する。1827年、下野国下都賀郡栃木町生まれの島霞谷は、長じて同年代の川上冬崖、高橋由一らと交流をもち、34歳で幕府の蕃所調所に入所した。その後は、開成所の絵図調出役に就き、西洋画法の習熟に努める。近代が明けてからは、大学東校の中写学生、大写学生として解剖図の制作にあたるかたわら、医学書出版の必要から日本で最初の実用金属活字を発明する。霞谷から写真術をまなんだ隆は、1870年の彼の死後、郷里で写真業をいとなみ、1899年に同地で死去した。¹⁶⁸

当時の写真は、美術的な表現である以上に科学への関心とむすびついており、創作の過程において実践性をともなう高い教養が必要とされた。写真にとどまらず、文理の才能を発揮する霞谷をパートナーとした隆自身、当時においては教育を受けたきわめて少数の女性であったため、行為としての写真にかかわる機会を得たのである。

近世には、公の学問所は、幕府の教育施設であった昌平坂学問所や諸藩が藩士の指定を対象として創立した全国200以上におよぶ藩校、さらには藩士にかぎらず庶民をも教化、教育しようと創設された郷校が存在したが、ごく一部の郷校をのぞき女子は対象外であった。したがって、女子教育はおのずと家庭教育に一任されることとなり、一般的には女訓書にうたわれているような婦功、すなわち紡績・裁縫・洗濯・調食を身につけることが基本とされた。読み書きの手習いや文芸の手ほどきは、親やきょうだい担当したが、大奥奉公後の女性が運営する寺小屋でまなぶことも少なくなかった。寺子屋の総数は、全体の教育機関の3%ほどであったが、なかには男性をしのぐ大型寺子屋で「師匠」と呼ばれる女性も存在したのである。寺子屋で使用される女子用教科書には、『女大学』、『女今川』、『女孝経』、『女実語教』、『女商売往来』、『女庭訓往来』等があり、初期の文芸の手ほどきには『小倉百人一首』等がもちいられていた。¹⁶⁹

上述した田村は、1785年、上野国桐生の機屋兼買次商・田村家に生まれ、江戸城大奥に右筆として出仕し、31歳で帰郷すると夫をむかえ家業を継いでいる。そのかたわら「松声堂」をひらき、手習い、礼儀作法、和歌、和文を教授した。同校の筆子は100人を超え、男女共学ではあったが女子が多く、修業年限は8、9歳から13、14歳までだった。¹⁷⁰

¹⁶⁸ 群馬県立歴史博物館編集『第81回企画展 幕末の写真師夫妻 島霞谷と島隆』群馬県立歴史博物館 (2007) pp.8-9 p.36 p.50 p.70 pp.77-78 pp.81-82 p.84 pp.90-91 pp.94-100

¹⁶⁹ 柴桂子『近世おんな旅日記』吉川弘文館 (1997) pp.144-145 pp.148-150

¹⁷⁰ 高井浩『天保期、少年少女の教養形成過程の研究』河出書房 (1991) pp.20-24

「女右筆」の職は、それ自体としての正式名称をとまわらないまま、旧来身分の高い女性につかえる女房たちに受けつがれてきたものと考えられる。彼女たちは、その家の書法を直接伝授され実践的に身につけていったのだが、女性に限定された書法は現実に存在しない。近世社会の支配層における「家」世界が徐々に崩壊していく過程で、各身分における横ならびの「家」集団の世界が成立するのにもない、それまで秘伝として通用していた諸作法は社会化される必要があった。男性の場合は、「家」のそとでの公的社会における作法がもとめられたが、「家」の管理を主としてつとめる女性にとっては、その様式をまもっていくことに重要な役割があったのである。

かかる歴史的経緯から、才能を有する女性たちにはあらたな自立の道がひらかれたのであり、「女右筆」という名称はその事実を象徴している。すなわち「家」につつまこまれた陰の存在ではなく、公的に通用する能力がもとめられる過程で、専門職として男性にもちいられてきた右筆という職名が一般化され女性にも適用されたのだった。「家」に占められた作法——男性社会が規範の——の崩壊は、女性の仮名書きや女性用語に基本的な変化をもたらさなかったものの、当時の諸作法のありかたの一部は、すでに男性のそれと共通していた。実際には公的用語である漢語の世界にも、女性が参入していく現象がみとめられ、たとえば「発端」などという元来女性のもちいない語彙が、18世紀の手本にはあらわれるのである。¹⁷¹

女性にとって、右筆にかぎらず18世紀後期の大奥での奉公は、一方では結婚の準備でありながら、職業をもち生計を立てる機会がふえたことを意味していた。短期間のつとめながら、庶民や武士階級の女性たちにはあこがれの職業だったが、そこは身分上の区別が確立され強化される場であったのと同時に、そとの世界ではありえないほどことなる身分の混淆が生じる場でもあった。しかし、女性的なものとして定義づけられた「大奥」は、あこがれと同時に好奇なまなざしがそそがれたという意味では「遊郭」となり、多くの文芸作品のモチーフとなる。当該の時期に「書かれたものや絵によって表現されたものは、民衆のまなざしから隠蔽されたあらゆる空間で起きていることに対する生き生きとした好奇心を示」している。その受容者は、身分の高い知識人層と、黄表紙を読むことができる中間層、多くの非識字層に大別される。ジェンダー的に優位な男性のなかにも、非識字層が大勢を占めることは、彼らのまなざしが女性の表象を下位にえがこうとするねじれた欲望にもつながり、男性作者の手になる作品は、空想のなかで性的な揶揄をおびることもしばしばであった。¹⁷²

田村の塾にまなんだ女性には、島のほかにも望月福子や吉田いとなどの例が記録にのこされており、大奥に奉公後、帰郷して寺子屋をひらくことは、教育を受けた女性のライフコースとして確立されていたことがうかがえる。かかる文化資本を彼女らと共有しなが

¹⁷¹ 中野節子「解題」『江戸時代女性文庫 99』大空社（1998）pp.1-3

¹⁷² アン・ウォルソール「江戸文化における大奥」森本恭代訳『ジェンダー研究 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報』第4巻 茶の水女子大学ジェンダー研究センター（2001）pp.43-64

ら、島の「知」は、より先鋭な発露をしたのだった。彼女は、夫と英語をまなび、篠笛、月琴、京胡を演奏、楽譜を墨守し、和歌を詠みながら、数多くの書や日記をのこした。今日からみてもあたらしい規範にとらわれない生きかたは、すでに「流動」を開始した固定的な時代の磁場を、主体的にまなざすことから得られたものと想像される。

たとえば島の記した「愛蓮説」には、花のすがたに託し、近世も終末にさしかかった時相への批評と同時に毅然とした「自律」のことあげがなされている。いわく「水陸に愛でる花は多数あるが、私は泥から生えても泥に染まらず、清水の浄めを受けても素朴さをたもち、つるをのぼさず枝分かれせずまっすぐで、とおければとおいほど香りがただよい、決して近寄って気軽に鑑賞できない蓮がすきだ。菊は清貧、牡丹は富貴な人、蓮は君子だと思う。菊の愛好者は、陶淵明以来減った。今、蓮をすきなひとは一体どれほどいるだろう。牡丹がすきなひとがいちばんおおいが」。¹⁷³ ここで重要なのは、島の辞が、性別を超えた「人間」観に根ざしていることである。ひるがえって考えれば、彼女の態度は、近代にジェンダーの再編成と強化がおこなわれた——島はそのしぼりを受けていない——事実を示唆しているともいえよう。¹⁷⁴

近代以前の創作的出発は、たとえば近代の写真絵のような定型からも自由にはたらしき、¹⁷⁵とどまるころのしらない隆と霞谷の「知」への希求は、たがいをよりたかめあう稀有な例であったと考えられる。日本初の女性写真師による「男」の写真には、生物的単性としての男性ではなく、ゆたかな知の創造とむきあう「人間」が姿をとどめる。それは彼女の特殊性にとどめられるものではなく、マイノリティではあっても、同時期に存在した「可能性」のひとつとして捉えられよう。そこにきざまれた「自在」性には、行為への愛情と無償性という意味において「アマチュア」の精神がみとめられるのである。

¹⁷³ 群馬県立歴史博物館編集『第81回企画展 幕末の写真師夫妻 島霞谷と島隆』群馬県立歴史博物館（2007）p.4 p.8 p.50 pp.96-97 p.100

¹⁷⁴ 長野ひろ子『明治維新とジェンダー——変革期のジェンダー再構築と女性たち——』明石書店（2016）pp.123-147

¹⁷⁵ 群馬県立歴史博物館編集『第81回企画展 幕末の写真師夫妻 島霞谷と島隆』群馬県立歴史博物館（2007）p.50 当時は写真をうつすこと自体が画述の習得にほかならず、近代以降画家が写真を手本に絵を描くのを忌避する感覚はなく、日本画、洋画のジャンル分けもなかった。



fig. 10 カボチャを持って笑う島霞谷 像

第2節 氾濫する「女」

ジェンダーが後天的に形成されるごとく、完全に社会的まなざしから自由である性主体は存在しない。近世から近代へと時代が移行した直後も、暗黙のホモソーシャルな紐帯のうちで女性がまなざされる構図に、基本的な変化は起こらなかったと考えられる。しかし、国民国家の形成にあたり、再編成され強化されていくジェンダー規範は、パワーやドミナンスにふかくかかわっており決して看過できない問題である。

本論であつかう人物たちは、20世紀初頭の雑誌全盛時代に生育し、そこから少なからぬ影響を受けている。とりわけ、雑誌を通じた文化の送り手と受け手という双方向的なありようは、彼らの自我形成にかかわっていたといえる。たとえば、5人が思春期から青年期を送ることとなる1920年代前半の雑誌には、女性をモチーフやテーマにした創作は、それほど多くはない。ところが、モダニズムのピークといわれる1930年ごろになると、女性の表象は、紙面にとどまらない日常空間にあふれることとなる。

たとえば1927年、『三田文学』第3巻第1号に佐藤春夫は、詩「酒、歌、煙草、また女」を発表している。そこで女性は、まなびの場に対置された嗜好品や趣味と並列されえがられる。「ヴィカスホールの玄関に 咲きまつはつた凌霄花 感傷的でよかつたが 今も枯れずに残れりや」「秋はさやかに晴れわたる 品川灣の海のはて 自分自身は木柵によりかかりつつ眺めたが」「ひともと銀杏葉は枯れて 庭を埋めて散りしけば 冬の試験

も近づきぬ 一句も解けずフランス語」「若き二十のころなれや 三年^{とせ}がほどはかよひしも 酒、歌、煙草、また女 外に學びしこともなし」。176号では、「妻」、「母」をタイトルに冠した創作はあるが、他に「女」が中心にすえられた文章はない。

だが1930年に入ると、紙面の様相は一変する。たとえば同年、『文學時代』第2巻第12号の「現代怪奇探偵小説集」では、岡田三郎「活動屋と女掏摸」、特集「何が私を最も驚かしたか」に橋本英吉「驚くべき娘の魅力」、「文壇小景」に「金と女」、『文藝春秋』11月増刊号「表紙・グラフ・漫画」に「美人乱舞」、下田凹天「小夜子の一日」、「クララさまよ」、「夜と女のある世界の都小説集」に松本泰「緑の女」、中川與一「上海の姉妹」、ジェームス・ダン「夜と女と東京」、「あゝ残念物語」に市川寿美蔵「車中の女」、守田勘彌「妓生との戀」、1931年『文學時代』第3巻第7号の「国際小説集」に翁久充「マリ子の死」、「海外驚異実話」に飯田あきら「美女生理事件」、「連載」に横溝正史「女王蜂」、「小説」に橋本英吉「姉妹の上に」、松本悟朗「變態女性の驕り」が掲載される。

また同時期の『現代獵奇尖端図鑑』（1931）は、文章とビジュアル・イメージの結合として多数の写真を使用しており「エロチック」、「グロテスク」、「ナンセンス」、「レビュー」、「奇観」、「スポーツ」、「尖端」、「ポーズ」、「珍奇」の項からなるが、「エロチック」において「映画のラブシーン」で男女の一对が登場するほかは、大半が女性の写真で構成される。前半部分は裸婦像で占められるが、被写体は姿態をさらすかのごとく、すべて人工的なポーズなのが特徴的である。

以上はメジャーな出版社から発行された雑誌や書籍であるが、編集の姿勢においてより先鋭的とみなされるマイナーな雑誌にも、女性の表象はあふれている。保守や中道、革新等、立脚点に区別は一応ありながら、作家や編集者男性のジェンダー観に径庭はなく、とりわけあたりしさを任じる作家自身におけるきわめてふるい性意識は特筆される。たとえば、吉行エイスケ（栄助）が辻潤らとともに創刊した雑誌『悪い仲間』や『虚無思想』に女性の参加はみられず、むしろ一般誌、総合誌よりもホモソーシャルな紐帯はかたく、ジェンダー的には保守本流の位置を占める。ただし、当該の作家たちにその保守性が自覚されていたとは考えられない。

モダンな風俗をえがいたとされる「新興芸術派」作家のなかでも、ダダやニヒリズムを提唱した吉行は、女性をモチーフにえらぶ、という以上に「女」を一方的にまなざす行為につよい執着を示した。とりわけ、モダニズム全盛期よりも早い時期の関東大震災直後に、その作品群があらわれていること、買売春にかかわる女性がかならずといつてよいほど登場することが注視される。

たとえば、1924年の『売恥醜文』第4輯に掲載された「ローマンチックなダダの小説 カフェネズミ」は、「首を拾った ケイメイ マゾヒズムの患者はT市を出発しました」とはじまり「さてカフェマカレランの十間手前で わたしは自動車を雇つて見得美しく大玄関に下されました。「ところでこのカフェマカレランつて云ふのは例の池袋のロ

176 佐藤春夫「酒、歌、煙草、また女」『三田文学』第3巻第1号（1927）pp.2-3

シア女のいる私窩子を大きくしたやうなもので 吉原の大路を途中で折れて露地を四、五丁行つたところのホテル形式の大きなカフェなのです いはゞ我々が屢々キネマにおいて星にのぼるやうな心で幻をおふ支那娼家の圖です」とつづいていく。

従前、日本文学史上で、これらの意味をはぐらかした文体には「芸術的」であるとの半可な印象批評があたえられてきたが、露骨な同語反復性には労力をつかわずに書きながしていることがみとめられ、水増しや量産はいくらでも可能であったと考えられる。もとより代替行為としての言語表現は、彼にとって切実なものではなかったことが指摘され、奈辺に自由があるかを知りつつ安逸のなかでアウトサイダーを演じた吉行は、1934年には断筆し「おそらくは当初からの隠れた念願であった株式の世界のインサイダーに転身する」。¹⁷⁷

いわゆる「エロ・グロ・ナンセンス」の時代は、「モダニズム」の時代に重なっており、1930年から1932年のあいだにピークをむかえながらも、一過性のブームはあわただしく終焉していく。「エロ・グロ・ナンセンス」の隆盛は、プロレタリア文学の最後とも期をおなじくしており、進行するファシズムは、「安寧」と「秩序」の面から両者を牽制した。¹⁷⁸ 当該の語は、複合名詞であるが、実際に先行したのは「グロテスク」であったと考えられる。関東大震災直後の陰惨な状況は、都市空間の間隙にひそむ語りえないもの、それゆえに不気味なものを露呈させた。かかる状況においては、享樂的な気分よりも、生の暗部へとまず関心がむかうのは自然であっただろう。たとえば、1928年発行の雑誌『グロテスク』創刊号のテーマは「くかたち」、「文身」、「非人」、「セントエルモスの怪火」、「蘆原將軍」等であり、雑誌の名称からは意外なほど語り口はまじめである。だが1930年になるころには、すでに世俗のモダン相の裏側で軍部の大陸進出が進んでいたのであり、エロティシズムやナンセンスへの志向も、いかに表面的にはあかるくとも、そこには一体となった情念的な暗さがみとめられる。

200年以上のながきにわたり、一部分を除き国を閉ざしてきたことが、節穴から外部の世界を覗くやうな心性を醸成したのであれば、圧縮された日本の近代化は、かかる習性から抜け出る可能性をくじき、ひらきかけた空間がまた閉ざされようとするときふたび強化されたのは窺視症的な「視」だったといえよう。「エロ・グロ・ナンセンス」においては、「見世物」にごく「感覺的」に興じることはあれ、その対象を理解しよう、まして理解し合おうなどという態度はありえない。それは、閉鎖的な空間で展開される内側をむいた欲望の消費であり、反権力的心性はきざしたとしても、革命的な契機は終局おとずれずむしろ容易にパワーの側に回収されるものであったと考えられる。

吉行が断筆する1934年は、エロ・グロ・ナンセンスが後退していく時期であるが、彼においても、ことばからの離反がパワーに屈したのではなく回収されていったのであろうこ

¹⁷⁷ 和田桂子「吉行エイスケ——エロティッシュ・クンストの行方」『言語都市・上海』藤原書店（1999）pp.84-93

¹⁷⁸ 和田博文「エロ・グロ・ナンセンス」和田博文監修『コレクション・モダン都市文化 第15巻エロ・グロ・ナンセンス』ゆまに書房（2002）pp.628-629

とは、パワーが明瞭に可視化されるより早く開始された創作の志向にあきらかである。そこでは、現前する世界にありとある存在のなかで女性、それも娼婦のような存在があえてえられ、際限なく一方的な視線にさらされつづけている。自身が、いつのときにも優位に立たねばいられない衝迫は、男性中心の世界においてルサンチマンがいだかれていることの証左であろう。それゆえ、パワーとの手放しの共振は、彼には抑圧からの解放でもあったと想像される。吉行は、日本が戦争をはじめたことを生前予期していたという。¹⁷⁹

それでは、一方的にまなざされる機会の多かった「女」の意思は、どこに存在したのか？ また、彼女らは、いかに主体としてまなざしたのであるか？ たとえば、ささきふさは、1931年『婦人公論』に発表した随筆で、はなやかな風俗のうちにはりめぐらされた鏡の内側のような都市に住む人間の表情を「即」偽装である、と書いている。世界の転変は間断なく、1920年代後半と現在とでは、「近代人の神経」にもよほど変化があると指摘し、3、4年まえ世をにぎわした映画・クララ・ボウ（Clara Gordon Bow）主演『It』の問題にかんがみても、天真爛漫の美と魅力はいつの代までものこるのであるが「それは童話としてだけである。或ひは童話劇の中にだけである。或ひは又、『何が何だか判らないのよ』といふ俗謡の中にだけである」、それゆえ、1930年代において「アクセントセられるものは、自意識に根を下した感情或ひは表現でなければならない」というのである。

表情が既に対象を意識したものであり、表情の美が相手の気持に準ずることによって生ずるものだとすると、其處に表はされた感情はありのままではあり得ないのが當然だ。いや寧ろ、八方にスパイヤスキャンダライズの眼の光つてゐる中で、誰が偽装なしに安閑と生きて居られるものかといひたい位だ。¹⁸⁰

ささきは、モダン相の奥にひそむ緊張感をはらんだまなざし——ときとして「死」をもまねく——のやりとりを浮かびあがらせる。そこには、窃視症的な「視」とはきわめて対照的な、まなざしを投げかけられるばかりでなく主体的にまなざす「女」が、姿をあらわしている。

第3節 不在のモダンガール

女が職業につけば、貞操問題で火傷をします。それも指先だけのやけどでは治まらず、真赤な赤嘘で真黒の黒焦げに焼き残されてしまひます。中傷の墓穴に投げ込んで侮辱の土をかぶせます。戒名はモダンガール、お経は恋愛小説、墮落女の見せしめといふ吊鐘を撞いて、一家親族まで不名誉の香煙に巻いてしまひます。

¹⁷⁹ 吉行和子「後書き」吉行エイスケ『吉行エイスケ 作品と世界』国書刊行会（1997）p.266

¹⁸⁰ ささきふさ「表情即偽装」『婦人公論』第16巻第3号 婦人公論社（1931）p.8

本論の取りあげる5人が成人するころに登場した「モダンガール」の表象は、つかのま社会をにぎわせながら、1931年の満州事変以降、ファシズムの台頭とともに姿をけしていく。同時期に、「モダンボーイ」もごく一部では語られたが、時代の主役はあくまでもモダンガールのほうであった。理由としては、前述したまなざされる「女」が、不可分の存在に考えられる。

後述するようにささきは「断髪」第一号といわれたりしたが、それは1919年の成人後(22歳時)であり、震災後に衆目をあつめる風俗としての「モダンガール」より時期的には早い。一方、金子文子は、母の実家である山梨へいったとき断髪をしていたという証言があるが、ファッションではなく単に簡便だからという理由であったことがうかがえる。¹⁸²彼女の場合、髪を短くしても和装ですごしており、ふたたび髪を伸ばすようになるのは、ブルジョア的な風俗と同一視されるのを忌避したためではないかと推測される。

「モダンガール」の語は、北沢秀一の「近代の女——日本の妹に送る手紙——」(1922)におけるものが嚆矢とされている。『読売新聞』に掲載された北沢の文章は、彼が記者としてロンドンに滞在したときの見聞を「S子」に語りかける形式ですすめられる。ゲーテ座でモーリス・メーテルリンク作「青い鳥」の続編、「ベトローサル」を観劇した北沢は、登場人物の娘たちに日本女性とはことなる美をみいだした。彼女たちは、青年となったティルティルに愛情をおぼえるとためらわず告白をするが、おなじ感情をいただくほかの女性たちに対立感情をいだかないどころか、無邪気にたがいをみとめあう。かかる態度を、北沢は高く評価する。自分の感情をかくさず、思うままに行動することは「モダン・ガール」のあかしである。「純真な心から出た表現は、何時でも美しい。それを教養に依って磨けば、もっと美しくなる」だろう。はるか以前にも「新しい女」は存在したが、知識階級だったり自由主義者だったりする特別な存在だった。しかし、今日のモダンガールとは、どこにでもみいだすことのできる普通の女性なのだ、という。モダンガールとは、それゆえ伸びやかであっても不躰でなく、自他を尊重しうる存在である、とあらためて定義される。「キビキビとして町に行く彼女達の後姿を見ても、喜びに充ちて始終スマイルしてゐるやうな彼女達の顔を見ても、私は本統に美しいと思ふ」。¹⁸³

しかし日本人の顔の筋肉は、先祖伝来で固まってしまっているのだから、笑えばおかしい顔になる。愛情をゆたかに表現しようとしても、日本語の語彙は英語に比しても「貧弱」であるから、紋切型の表現しかできない。それゆえ彼女たちの「母や祖母や曾祖母は」愛を告白するのに「私はあなたのお云付ならばどんな事でも聞きます」というしかなかった。だが、そ

¹⁸¹ 北村兼子「恋愛小説のお経と殺人光線以上のもの」『婦人』第4巻第1号(1927) pp.50-51

¹⁸² 瀬戸内寂聴『余白の春』新潮社(2001) p.358

¹⁸³ 北沢長梧「モダン・ガールの表現——日本の妹に送る手紙——」『女性改造』第2巻第4号(1923) pp.83-87

れは日本人女性の「とがではない」。なぜなら、不要なことばは発達しないのだから。そして彼はこうむすぶ。「S子、お前達はおもつと顔と言葉とで表現するが好い。さうすればお前達の顔はおもつと美しくなり、お前達の言葉はおもつと豊富になる」。¹⁸⁴

つづく「モダン・ガール」(1924)において、北沢は、女性にとどまらない若い世代全般の開明性を指摘しつつ語る。「ヤング・ジェネレーションはもう、弱者としての女性を、或ひは劣者としての女性を求めてはゐない。彼等の求むる異性は、仲間としての女性である」。旧来の「たしなみ」とされるヴェールをかぶっていながら、都合のわるいときだけ弱者ぶる女性よりも、男性と同等に人間であることを意識して精神的に独立している女性をさがしたい若者は「モダン・ガールの群」へ行ってさがすよりほかはない、とまでいう。何千年もの間、女性の大部分は妻であり、母であり、主婦であったため、労働の範囲はほとんど家庭に限られていた。かくして女性が「社会的無能力者」になったのは、自然の帰結である。そして服従道徳的教育は、女性自身に「本質的劣者の如く思はせ終つた」。ときに皮肉すれすれの大仰な表現がとびだす、女性尊重というよりは文明礼賛的な論考だが、旧来の女性像をやぶり社会参加をしていく役割が、大筋ではモダンガールにもとめられている。

一方、1925年に書かれた新居格の「モダン・ガールの輪郭」は、対象との距離をおいた比較的冷静な考察が特徴的である。新居はまず、彼の青年時代に欧化は形式であり表面的であったが、現在は欧風の情緒が柔軟に取り入れられていると述べる。そして彼は、アナキストとして独自の観点から、彼女らに期待をかける。「利那的享楽主義の女性も許してもらえ。これも解放と自由の表現の一つのあらはれなんだ」。1888年生まれの新居は、やはり年長者らしく、彼女たちは論理を盾に「組織を結んで運動する」「社会婦人」ではないが、今は成長をみまもろうではないかと提言する。

社会婦人の立場から、男もかくあるべく女もさうであつていゝと論議するところをモダン・ガールはシガレットの煙を吐くよりも安易にやつてゐる。モダン・ガールの行き方は男のある状態に應じて行くものであらう。今の時代にさうしたモダン・ガールが既成道徳から見て破倫に見えたり放縦になつたりしてゐるならば男性がさうである事の反證だと云へやう。モダン・ガールは自由に囚はれないで動かうとする事だ。それをまがらせるのは男性のこしらへた軌道が曲つてゐることになるのだ。曲つてゐない滑らかに軽快に通つて行く男女両性に共通したルールを欲しがつてゐる譯ではないか。¹⁸⁵

北沢は1884年生まれであるが、モダンガールへの言及の嚆矢となった文章では、語りかける相手を「妹」に設定している。新居は、1888年生まれであり、やはり対象を年の離れ

¹⁸⁴ 北沢長梧「モダン・ガールの表現——日本の妹に送る手紙——」『コレクション・モダン都市文化 第16巻 モダンガール』ゆまに書房(2009) pp.87-91

¹⁸⁵ 新居格「モダン・ガールの輪郭」『近代心の解剖』至上社(1925) pp.159-174

た友人のようにみなし、親近感をともないつつ語っていることが注視される。ここで、年長者が論じる年少者という構図の連関により想起されるのが、序章で引用した『中学世界』（1906）の「青年修養百選」である。第3期がはじまるころに唱えられた修養論において、論者は近世の1830年代から近代が明ける前後の生まれで対象とされた「青年」とは30年以上の年齢差を有しながら、論者たちの掌握したパワーは絶大で、そこには近代の間断ない転変も存在していた。当該の懸隔は、「青年」を理想と現実のはざまにおいて煩悶させるが、それから約20年を経て変化したのは、正面から論じる対象に女性が加えられたこと、また年長の論者のより寛容な態度である。

しかし、新居の論から4年を経て書かれた「百パーセント・モガ」（1929）で、「モダン・ガール」とはほぼ同世代である1900年生まれの大宅壯一は、彼女らを「モダン・ガール」と「モガ」に区別する。まず、モダンガールの原型とされるA夫人は、外見も内面も徹底して技巧的で隙がないという。「したがって、彼女は非常に理知的である。だが、その理知は感覚化した理知である。刻苦的な努力や深い思索に耐え、それを通じて現れる理知ではなくて、せつな的に、突発的に、線香花火のように出てくる理知である」。彼女はけっしてお世辞をいわない。直截な表現は「ときにはバルガーで、ときにはバーバリスティックでさえある」。¹⁸⁶

それと比較される大宅の知人女性は、裏日本の寒村で生まれ、小学校の代用教員をしていたが、結婚問題で地元を飛びだし東京でカフェの女給になった。大宅の友人と結婚した彼女は、内職をしながら夫の社会運動をささえ、自身も「婦人闘士」となった。後輩が夫と関係を持つと、彼女は家を出る。彼女が大宅に語ったのは「家庭を破壊することはちっともかまいませんが」、うわさが漏れると組合の刷新運動が停滞するおそれがあるのです、ということだった。のちに後輩と夫は反省し、彼女はもとの生活にもどることとなる。その夫人の外見に「モダン」なところは少しもなく、化粧もしなければ衣類ももらいものしか着ない。だが、A夫人にはない集団主義的、生産的、意志的な「運動本位」の「生活指導原理」を大宅は称賛する。

さらに、唯一の「百パーセント・モガ」と賞されるのは、両親の思想活動のため、警察や監獄、街頭が家庭のかわりであった17、8歳の少女である。従来「モガ」は、因襲的な婦人道徳や、男女関係、生活様式を破壊しようとしたが、彼女は生まれながらにしてとらわれようがなかった、という理由により「極めて自然に、百パーセントに新時代を露出している」とされる。しかし、「モガ」の明確な定義はなされないまま、「モダン・ガール」の上位に置かれている。

つまり、これらはモダンガール論のかたちを取ってはいるが、共産主義にコミットした大宅の理想の「社会婦人」論なのであった。女性らしい「つつましさ」を全然持っていないA夫人が断罪されると、可視的な「社会運動」に従事する知人女性や、両親がプロレタリア解放運動の「闘士」であるため無条件でその素質を受けつぐとみなされる少女が、「個

¹⁸⁶ 大宅壯一「百パーセント・モガ」『大宅壯一全集』第二巻 蒼洋社（1981）p.12

を前面に押し出さないがゆえに称賛されるのは、表裏一体の事態といえる。すなわち、女性自身に「理知」や「意思」が属することは断罪される。「容貌や風采の点では反動的だとまでいわれるほど時代おくれ」で、A夫人とは散歩したりお茶を飲んだりする勇気もない、という大宅は、「ブルジョア」の「女性」であるという理由で、彼女たちを批判せずにはいられない。なにより、「同業」の文筆家に「モダン・ガール」のいることが許容できない彼の論調は、露骨な攻撃性をおびていく。

つづく「女性先端人批判」(1930)で、大宅は、彼女たちが「新」であっても真や深ではないときめつける。なぜなら現在は「末期社会であり、追新性が病的もしくは狂的の域に達している」からだという。ここで、かかる「新」の代表として名前があがるふたりは、最初の「断髪婦人」と形容されるささきふさ、そしてA夫人と称された大井さち子である。¹⁸⁷大宅がブルジョア的な物質性をきらうのは、生育の過程で父親が放蕩したことが原因とされるが、女性の「先端人」ばかりがきびしく糾弾されるのは、新芸術派文学のプチ・ブル層のなかでも「女性インテリゲンチヤは概して男子よりもプチ・ブル的である」という主観的理由による。「女性先端人批判」では、大宅により、同時代の作家女性がつぎからつぎへと俎上にのせられていく。評価の基準は、ブルジョア的かどうかという一点にほぼ尽きており、なかでも「フランス的教養」のもちぬしとされるささきと大井は、排斥の度合いが高い。最後に、彼は「市川房江や金子茂などの婦選獲得運動や婦人公民権運動などは、婦人矯風会あたりの廃娼運動とともに、完全なるブルジョア婦人運動で、時代はすでにそういうものの進歩性を剥奪してしまったといえるだろう」。「さらにまた、宇野千代、山田順子、原安阿佐緒、真杉静枝などの娼婦型先端人の活躍については、いまさらいふべきなものもない」とむすぶ。¹⁸⁸

「反権力」的立場を自認しながら、言論により女性を踏みしだこうとする大宅は、戦後には「マスコミの帝王」とよばれるほど言論界における影響力をつよめていく。だが、問題は、戦前の当時や戦後大宅が生存していた時代に限られるのではなく、彼が手中にしたドミナンスが、後述するように今日まで文学史その他の方面にまで影響力をもちつづけていることにある。¹⁸⁹

1926年、雑誌『婦人の國』が「近代的女性批判」という題でひらいた座談会に出席したささきは、周囲が饒舌に「モダン・ガール」を語るのに対し、自主的な発言は少ない。ささきによる次世代のモダン・ガールに対する評は「今まで圧迫されていた自我が起きあがってきたのではないか」、「機智と同時に、いつでも心理的にアッパーハンドを握っているという所がありはしないか」というもので、彼女たちはさらに将来ユニークな存在になっていく可能性がある、と肯定的に捉えている。「モダン・ガール前派」として発言を請われた彼女は、「いろいろ言はれても、それは人の見る眼で、自分ではモダン・ガールぢやなくつてクラシック

¹⁸⁷ 大宅壮一「女性先端人批判」『大宅壮一全集』第二巻 蒼洋社(1981) pp.18-20

¹⁸⁸ 大宅壮一「女性先端人批判」『大宅壮一全集』第二巻 蒼洋社(1981) p.23

¹⁸⁹ 大隈秀夫『マスコミ帝王 裸の大宅壮一』三省堂(1996) pp.10-12 pp.450-491

なやうに——寧ろ世紀末的な人間のやうに思つてゐるんですから」と、みずから分析している。¹⁹⁰

モダンガールの概念は、特定の年齢を設定してはいなかったが、少女や学生よりは職業に従事する成人女性、既婚女性をもふくんだ層を示しており、ほぼ同時期には「職業婦人」という名称も登場している。1920年の日本労働年鑑によれば、当時の女性たちの職種は(1)産婆、看護婦、医師、教員、美容師などの技術職や専門職(2)事務員、店員、タイピスト、交換手、記者など企業や官庁の職員(3)料理店、飲食店、待合、遊興施設、宿泊施設等の女中や女給(4)音楽家、画家、書家、ダンサー、女優等芸術・芸能関係者のほぼ4分野に分けられる。¹⁹¹実質的には、工場などでの肉体労働も多く存在するなか、人気があったのはマネキンガール、ショップガール、タイピスト等カタカナであらわされる職業であった。これらの職業には、学歴も資格も問われず、小学校卒業程度の能力で就けるため希望者が殺到した。第一次世界大戦後に急成長した企業は、低賃金で雇用できる大量の人員をもとめていたため、つい10年以前には白眼視されていた「職業婦人」は、社会における女性の存在感を増すことに貢献したのである。

冒頭の「恋愛小説のお経と殺人光線以上」(1927)を書いた北村兼子は、安井仲治とおなじ1903年、大阪で漢文学者の家系に生まれ、大阪府立梅田高等女学校卒業後、官立大阪外国語学校を経て、関西大学でドイツ法学を専攻した。同校は、1922年の大学令による大学昇格後、女性の入学を許可していたが、教育制度上の制約から北村の資格は聴講生であり、全課程を修めても学士の称号はあたえられなかった。1924年、大学2年の北村の論文「爆弾事件と法の適用」が『大阪毎日新聞』に掲載される。同年末、北村は、教育の男女機会均等を掲げて女子学生聯盟の演壇に立った。翌1925年、彼女は大学に在籍したまま、『大阪朝日新聞』の記者として採用され、2年間の在職中5冊の著書を出版する。しかし、神戸の歓楽街における体験取材を書いたのち、20種ほどの新聞雑誌から「不良」、「淫婦」等の非難をあび、退社を余儀なくされた。その後は政界進出を目標にかかげ、準備期間中の1928年に汎太平洋婦人会議、1929年に万国婦人参政権大会に出席する。1930年には、飛行機のパワーに魅せられ、立川の日本飛行学校で訓練を積み単独飛行に成功したのち、三菱航空機会社に発注した飛行機でヨーロッパを再訪しようとしたが、1931年に病を得て急逝した。¹⁹²

大宅が、無名のまま自己を犠牲にして集団に尽くす女性や、みずからの意思を未だ表現しない少女に好意を示したのは、彼女たちが言論人たる自身の位置をおびやかす存在ではなかったことが基にあるだろう。たとえば、ささきや大井、北村が、表面上はいかにそれ以前の日本女性とはことなつた装いをこらし「モダンガール」然としていようとも、女性が、切望しても男性と同等に教育の機会があたえられない時代にあり、言論の場に登場してくる

¹⁹⁰ 石井満・新居格・佐々木ふさ・山田わか他「^{モダンガール}近代的女性批判『婦人の国』座談会『婦人の国』第2巻第5号(1926) pp.4-29

¹⁹¹ 大原社会問題研究所『日本労働年間』大原社会問題研究所出版部(1920) p.581-583

¹⁹² 大谷渡『北村兼子——炎のジャーナリスト——』東方出版(1999) pp.10-13

までの間、大宅がいうような「刻苦的な努力や深い思索に耐え」なかったはずがない。むしろ、そこを超えて浮上してきた彼女らに自然にそなわった力は、大宅のような立場の男性には、脅威に捉えられていたと想像される。

大宅のように教育を受けた男性が、面識もない知識人女性を一方的に娼婦よばわりするような時代にあり、職業に就く女性をふくめた「モダンガール」が、あこがれと同時に失墜をまちかまえる好奇心な目にさらされたのは社会的な事象であった。新聞社を退社後に、北村は『婦人記者廃業記』で書く。

退社してから今までの御主人さまに悪聲を放つほどの小さな女ではない。不平がなくなつたら活力の耗^{ちび}つた老衰者である。私の不満は今日の社会制度に対するものであるから、その點は誤解のないよう、しょつぱなに断つておく。首にせらたてれ隠しにこれを書いてたものとは思ひちがひ、男だつたら首にせられると、ちよつときまりも悪からうが、そこは女のありがたさ、もう年頃だから結婚もしなければならぬからといへば、心でお座なりをいつてゐるなど思ひながらも、それを通つて行く。

やめたといへば、では結婚なさるのですかと打ち込む。何ともまだ考へてはゐませんといへば、でもどちらなんです結婚なさるんでしようと、ぢろりと顔を覗き込んで、顔の何處かに自白の一點を見出さうと、考へてもゐないといふのに結婚ときめてかゝる。
(中略)

職業の持合せもなく、静かに考へてみれば、失業して生活難にちやぶつくといふのは、必ず職業の選擇に無理のあるのが原因で、自然は人を餓えしめない。黙坐して頭を冷させば、自然に興へられた職業は自分を呼びかけてくる。力よく漬もの石をあげるものは下女になれ。耳の近いものは交換手になれ。速算のうまいものは貯金局へ行け。便器の取扱いを好むものは准看護婦會へ行け。らくして浮れたくば女給になれ。學問あつて醜きものは婦人運動に携はれ、賢母良妻の近みちはダンサーになれ。苦勞して失業したくば婦人記者になれ。どれもこれも一齊安で紹介所は求職者の年の市だ。¹⁹³

当初は、一部の知識人により肯定的に捉えられたモダンガールが、好奇のまなざしをあびながら否定的に語られていく過程は、都市化とモダニズムの隆盛に歩をおなじくしている。北沢のモダンガール論が語られた都市化の途上にある 1920 年代前半に比して、大宅の論が出た 1920 年代後半は軍事的な色彩がつよまっていくな時期であり、彼のミソジニックな口吻は、かかるジェンダー規範の反動化と共振を示している。

モダンガールとは、みずからモダンガールだとは宣言しない存在で、その名称は外側からあたえられる、つまりはまなざされる存在なのであった。大宅が、みずから身を置く作家、ジャーナリスト業に女性が参入すること、すなわち「ことば」による既得の領域が犯されることを忌みきらう態度をさらけだしたのと対照的に、北沢は、むしろ余裕で、己が置かれた

¹⁹³ 北村兼子「あなたも失業か」『婦人記者廃業記』大空社（1992）p.5 p.7

場を客観的にえがきだしてみせる。

モダンガール時代が凋落したら、次いで来るものは女浪人時代であらう。

男の粒が小さくなつて、その機嫌を取つて暮さうといふ氣になれない女性は浪人するより仕方がない。賣残りものといつても老嬢といつても一種の浪人であつて家庭地獄へ墮ちるのが嫌やなら、どうしても職業に就く。職業にはぐれたら浪人となる。これが浪人道への行進であるが、婦人の職業は機械の延長と見なされてゐるから新しい機械が発明されると女浪人が束になつて街頭に投げ出される。自動式電話のために交換嬢が大量的に浪人となつたが、彼女等の多くはそれぞれ巢を求めて家庭へ落ち着いた。少数は女給に身をかはしたものもあつた。しかし左様に手軽に巢を造れないものに美術家や音楽家や婦人記者などの敗残者がある。これは機械の延長でなかつたゞけに始末が悪い。(中略)

人ごとぢやない。私も失業してから1年と3カ月になる。浪人のみじめさと浪人のありがたさを骨身にこたへて體得した。氣に向いたら稼ぐ、氣に向かなかつたら寝轉んでゐる、これが浪人のいゝところである。職業を持つてゐた時代には氣が前に向かうが氣が横を向かうが、筆を持つて日課だけは書かねばならなかつたから筆と氣とは別々の途を辿つてゐたものだ。それが浪人となつてから筆と氣とは同一の方向に向いてきたことは失業のありがたさ。(中略)

日本では離婚と同時に妻は失業するのである。何となれば彼女の生活資料は「結婚」といふもの以外に何もないからである。換言すれば生活の本據が「結婚」である。民法ではどうの戸籍ではどうのといふような論據を捜さなくとも實生活がさうなつてゐるのである。娘さんの浪人もある。これから澤山にできる。花のような美しい浪人さんもあつてほしい。

何でもいゝ。モガの次には女浪人時代だ。私たちの仲間がふえるのである。お互に賑やかに暮ませう。¹⁹⁴

第2節 ダンスブームとダンサー

近代にあたらしく登場した女性の職業のなかで、とりわけモダンガールとむすびつけられ語られたのは、ダンサーであつた。この職業が「時代の花形」とたたえられることになる発端は、1920年代から30年代にかけ「都市化」とともに起こつた一大ダンスブームであり、それは大衆を巻きこみ各地へとひろがっていった。

日本のダンスホール発祥の地は、神奈川県・鶴見に造成された花月園である。実業家の平岡廣高・静子夫妻は、欧州旅行でパリ郊外の遊園地を訪れ、児童主体のありかたに感銘をうけると遊園地経営を決意した。帰国後ふたりは、鶴見にある東福寺の荒廢した観音堂再建を

¹⁹⁴ 北村兼子「女浪人」『女人芸術』女人芸術社(1928) p.76 p.78

条件に、10万坪の境内を借用する。そして1914年5月、東洋一の規模と設備をほこる遊園地・花月園が開園の運びとなった。同年7月には、歌舞伎役者で新劇運動にも身を投じた二代目市川猿之助主演の野外劇が上演される。翌年には、山田耕作の指揮で東京フィルハーモニー会管弦学部による演奏会がひらかれ、1917年には、日本のモダンダンスの始祖・石井漠による近代舞踏が演じられた。

そして、1920年、同園に日本初の本格的な営業用ダンスホール・花月園舞踏場がオープンする。ダンスを専門とする「穴倉バンド」の生演奏も、日本では初のものであった。それまでも、帝国ホテルや横浜のグランドホテルなどで週末にダンスパーティーがひらかれてはいたが、ほとんどが外国人のサークルからなるもので、日本人の出入りは少なかった。欧州を見聞した夫妻は、ダンスが健康上、社交上ともに有益なものと感じ、日本人も気軽に踊れる舞踏室をひらきたいと考えたのである。

1922年に来日したアンナ・パブロワは、各地での公演の合間に、花月園で「瀕死の白鳥」を踊った。また「日本バレエの育ての親」と称されるエリアナ・パブロワは、ロシア革命の影響で亡命しており、花月園でダンスを教授することとなる。さらに妹のナデジダ・パブロワも加わり、花月園舞踏場は、日本社交ダンスの中心的存在となっていく。1920年の開園当時、東京にも小規模なダンスホールがたくさんつくられていたが、いずれも会員制で会費も月10円以上と高額であったため、踊り場は閉鎖的になる傾向があった。ダンスシューズもないところで、蓄音機からながれるダンス音楽は、靴の摩擦音でかきけされてしまったという。

日本の社交ダンス教師の草分け的存在であった玉置真吉は「社交ダンス十年の想ひ出」(1936)で回想する。1920年代のはじめに、玉置たちはたよるべき文献もなく、欧米から帰国した官吏や音楽家が踏むステップをみては「之を批判解剖し」踊ってみた。関東大震災では、ダンスホールも崩壊するが、震災後後の1924年にバラックが建ちはじめると、有楽町に『大和』という鰻屋がひろい食堂をつくり、ダンスの心得のある女給をあつめた。ここでは、鰻定食を食べるとダンスの相手をしてくれるというので、「踊場を失った連中がよく集った」。¹⁹⁵

震災前は、本格的にコーヒーを飲むなら銀座、日本橋、浅草の10店にみえない場所しかなかったが、震災後には汁粉屋とミルクホールが一斉にカフェに転向し、カフェとダンス、レコードはセットとして欠かせないものとなる。「その女給たちはみなよく踊って客の相手をしたので、東京市中ダンス狂時代といふ一期を成した」。また当時の横浜では、グランドホテルが横浜居留地の外国人青年からなる「ムーンズバンド」を擁し、最新式の楽器でスマートな演奏をし、内外の人気を博していた。ダンスホールは、社交ダンスを踊るためにだけつくられており、飲酒やほかの余興の舞台ではなかったことが、踊ることに関心を集中させた。ダンサーとの接触も、当初は基本的に、ホール内では曲が演奏されている時間に限ら

¹⁹⁵ 玉置真吉「社交ダンス十年の想ひ出」『コレクション モダン都市文化』第4巻 ゆまに書房(2004) pp.183-233

れていた。

しかし、当初健全な児童の体育教養を重視していた花月園は、やがて「有閑階級たちが高級車などで乗りつけ」、ダンスそのものにとどまらない成人の愉悦的な社交場の観を呈し、パブロワ姉妹たちをなげかせた。彼女たちのような職業としてのダンス教師のほかに、いわば踊れる女給の延長として登場したのが専門の「ダンサー」である。

「新社交ダンスと全国舞踏場教授ダンサー案内」の「ダンサーとなるには」の項には、この職業に就く方法がふたつある、と書かれている。ひとつは純素人から舞踏場へダンサーとして入る方法、他方は教授式で正式に習いおぼえてから入る方法である。「現在日毎に激増しつつあるダンサーは、純素人から舞踏場でダンサーとして入るものが大部分である。これはダンサーも経済戦線への進出である以上、教授所で習ふのは経費がかかるから、自然無資本でいきなりダンサーになる方法を選ぶからである」。いずれも7割が高等女学校卒業で、ほとんどが独身であるという。「独身時代の女性には、職業婦人として最も美しく、上品であり高尚であり、而して健康的であり経済的であり、其上異性に対する知識を深め、実際の修養と訓練を積むことになるから好個の新職業である」。¹⁹⁶

だが、この職業に就く理由が本人にとって真摯なものであっても、基本的にソロでないため踊りながら男性と身体が接触することから、彼女たちにはしばしば好奇心まなざしがそそがれた。維新前の封建時代に、社交に該当するものは「家」単位の交際であったが、近代が明けたのちには、男性同士の公務を通じた交際の場にしばしば遊郭や待合が利用されるという慣習が存在したため、芸者は職業的ホステスで、やがてカフェが流行すると女給がホステス役をつとめ、さらにはダンサーにその役割が自明のごとくもとめられたのである。

たとえば吉行エイスケの「マリーは未来まで踊るつもり」(1930)には、同時期に数多の男性作家により、同語反復のごとく記述されることとなるダンスと女性の「性」が直截にむすびついた典型が示されている。「僕」は、中国で出会った「アメリカとニグロの混血」ダンサー・マリーを、それが当然の権利のごとく一方的にまなざす。「なにしろマリーのいる上海では舞踏手税までかからうと云ふ貧困時代ですから、彼女も白人賣笑婦のやうに安閑とオデトリアムのハイ・アライ世界的チャンピオンのテオドラに夢中になつて、薄絹を絡ませるやうなことをするまには、踊場の片隅で抹香くさい香油を塗つた煙草でも燻らしてみた方がましなのです」。¹⁹⁷

第5節 転落する女子学生

モダニズムの隆盛期には、モダンガールと職業婦人のどちらにもふくまれながらより性的な存在としてまなざされたダンサーと踵を接して、「転落する女子学生」の言説が繰り返され語られていった。対象となる女性たちは、概して学歴があり、家柄も中流以上であるこ

¹⁹⁶ 高橋桂二『新社交ダンス』高瀬書房(1933) pp.213-225

¹⁹⁷ 吉行エイスケ『新種族ノラ』ゆまに書房(2000) p.180

とが特徴である。つまり、社会的「下降」に際しては、出発点と着地点の差がよりおおきいことが、暗黙裡に期待されたのだった。

とりわけ、「異教」と高等教育のまじわる場であるミッションスクールの女子学生は、転落のモチーフとしてこのまれる存在であった。たとえば、北林透馬原作の映画『^{ハブ}港の日本娘』(1933)では、メロドラマの体裁を取りながら、典型的な転落する女子学生の「物語」が展開される。横浜の港をみおろす居留地にあるミッションスクールに、主人公の砂子と親友のドラはかよっている。砂子には、不良仲間と行動するボーイフレンドのヘンリーがいるが、彼は年上らしい女性・シェリダン燿子にひかれ、砂子とは疎遠になる。みかねたドラが、ふたりの仲を修復しようとするが、砂子は追いつめられ、燿子をピストルで撃ってしまう。数年後、彼女の姿は別な港町にあった。娼婦となって長崎、神戸とわたりあるいた砂子は、横浜にもどり、更生したヘンリーに会うが、彼はドラと結婚しており彼女は出産間近だった。砂子のアパートの隣室には、偶然かつての恋敵である燿子が住んでおり、苦界に身をせずめたようすの彼女には死期がせまっていた。燿子は、ふたりの幸福をこわさないよう、はやくまじめな生活にもどるよう砂子を諭すと息たえる。砂子は、ヘンリーへの想いを断ち、ふたたび横浜を去っていく。

ドラは、ジェンダー的規範からはずれず良妻賢母となり、ヘンリーにおいては、過去に貞操をまもらなくとも更生が可能であるのにひきかえ、生きるためとはいえいったん己の「性」を売った砂子は、「堅気」の社会から永遠に追放されることとなる。キリスト教において、女性だけに貞節が要求されることはありえないのだから、作者の意図をこえ、ここではアイロニーが強調される。¹⁹⁸映画には、砂子が勤める横浜のチャブ屋が出てくる。後述するようにチャブ屋は、日本式の遊郭とことなり、客は、酒を注文すれば女性とダンスをすることができた。チャブ屋のインテリアは、港町らしくすべて洋風であり、非日常的な空間では、女性たちと客とのあいだに、つかのままであれ恋愛と買売春の境界上にあるような関係がむすばれたのだった。ヘンリーは、砂子に会うため同所を訪れるが、「更生」を願う彼に彼女はそのような話を聞きたくはないといい、別な客と踊ってみせる。

『^{ハブ}港の日本娘』とおなじく 1933 年には、大阪毎日新聞社がイニシアチブをとり、現職の陸軍大臣・荒木貞夫をかつぎだし、軍の後援下で製作された満州事変後のプロパガンダ映画『非常時日本』がある。「非常時」事態を、日常生活にたもつべく企図されたもので、現在進行中の都会的・西洋的モダン日本の諸相はゆきすぎたものとして、「内なる危機」がさげられる。

「純粋な日本と汚染源・西洋という内外二分法では、モダン・ガールも共産主義も“外”からの刺激の結果としてひとからげ」にされる。そして、映画中で「大衆化」は、しばしば「女性化」として批判される。無骨ながら「善良そうな明治の紳士」に対し、家父長制と良妻賢母の規範から逸脱した「驕慢なモガ」は、敵役にすえられる。ホーム・パーティーでの

¹⁹⁸ 清水宏監督 及川道子出演『^{ハブ}港の日本娘』松竹 (1933)

ダンスに飽き、モボをさそって夜の銀座に出たモガは、明治世代の男性に「足を踏まれた」とさわぐ。相手が帽子を取り、頭をさげて謝っても承知せず、みずからを「ボク」、男性たちを「君たち」と呼び、明治男性を「時代錯誤」とののしる。しかし相手もだまったままではいず、一喝をする。「ここは日本だぞ。銀座といえども日本帝国の一部じゃ」。

荒木の声が、男女を区別せず、ひろく社会全体を叱咤しつづける一方で、物語は「退廃の階級」を恣意的に創出し、女性を非知性的な悪役にしたてあげる。『非常時日本』が、作品として反響を呼んだ形跡はなく、PR 映画として成功しているようにもみえない。だが、当該映画の位置は「小春日和の平和」に咲いた特異な仇花のように見えながら、むしろきたるべき時代の不吉な先駆けであったといえる。¹⁹⁹ 一見まるでおもむきをたがえた 2 編の映像作品は、しかし女子学生のなれのはて——墮落が運命づけられている「女」——の表象において、一致しているのである。

第 3 章 まなざす「女」——Spleen de Tokio 1930 の自照精神——ささきふさ (1897-1949)

はじめに

ささきふさは、現今の日本「文学史」に名を記されることのない作家である。1920 年代から 30 年代にかけ精力的に作品発表をおこない、そのかわら多様な媒体で活発な発言をおこなった彼女が、今日わすれられた存在であることには、当時から現在にまでおよぶ「文学」批評のドミナンスとジェンダー規範の問題がかかわっている。すなわち日本文学史上の「新興芸術派」への分類、ジェンダーに規定された「女」の位置——未婚時は「モダンガール」、結婚後は「大手出版社の編集者の妻」——、さらにはそれとの連関によりささきの活動を「余技」とするみなしである。

かかる状況を反映してか、ささきに関する学術的研究は、従前ほとんどおこなわれてこなかった。だが近年、モダニズムをテーマとする過去の文学作品や雑誌の復刻があいついでおり、その経緯で一部に言及がみられる。ただし、彼女が同時代的にこうむった「モダンガール」言説から踏みだしたものは少なく、むしろ関心は彼女における「モダン」なるものに集中し、考察は表層的なものにとどまっている。水谷真紀「モダンガールの断髪と自我——さ

¹⁹⁹ 宜野座菜央見「“小春日和の平和”における非常時 映画『非常時日本』のイデオロギー」岩本憲児編『日本映画とナショナリズム 1931-1945 日本映画史叢書①』森話社 (2004) pp.30-55

ささきふさと『婦人グラフ』の東京モード——」(2011)²⁰⁰、江黒清美「ささきふさ『春浅く』と『ある対位』——モダニズムとフェミニズムの視点から——」(2016)²⁰¹は、当該のながれにおける論文といえる。

また論文以外に、廣津和郎のエッセー「ささき・ふさ小論」(1956)、紅野敏郎による作品紹介「大橋房子——ささきふさ——『断髪』『出港』など——」(2000)があり、菅野昭正の『憂鬱の文学史』(2009)では、「新興芸術派」に関する章において部分的な言及がなされている。紅野、廣津、菅野によるささき評は、前述したような「文学」批評のドミナンスとジェンダー規範の問題を多分にふくみ、そこにおける主張は正面から再検討されねばならない点で一致する。

なかでも、もっとも早くに書かれた廣津の「小論」は、その後のささきの評価に決定的な影響をあたえている。廣津は、作家における「女性」としての生きかたをまず俎上にのせたのち、彼女の作品に評価をくだす。冒頭では、正宗白鳥が銀座を洋装であるく独身時代のささきをみかけ、かたわらの妻に「決して幸福な顔じゃないぜ」といったエピソードが共感をこめて紹介されるが、それは、廣津が、結婚という規範におさまったあとの「佐佐木(茂索)夫人」の身分に安堵する態度と表裏一体である。

彼は、結婚後の作家同士の生活がささきの作品に反映されているのではないかとの興味をいだきながら、当初彼女の作品を「結局佐佐木夫人の余技に過ぎないといふやうに思はれてならなかつた」と述懐する。「作家同士」といったんは称しながら、私生活の仕事への反映を女性のうえにのみうかがおうとする態度は、既得領域への女性の「侵犯」を排除せんとする前出の大宅壮一の態度とも一致をみる。この「佐佐木夫人の余技」というフレーズは、後述の紅野も引いており、正宗の言「決して幸福な顔じゃない」と併せてささきが語られる際にはかならずといってよいほど参照されていくこととなる。

その一方で、廣津は、結婚から4年後に書かれた小説「思ひ合はす」(1929)の読後、余技ではなく作者が全身を打ちこみ立ちむかっている重量感があり自己の宿命的性格との苦闘があると「始めて思つた」というのだが、ここで熱をこめて語られるのも、主人公である「女性」の「男に與へるばかりで、男から取ることを知らない」という「苦渋に充ちた自己憐愍」なのである。²⁰²

廣津同様、紅野の文章中ささきはあくまで「女性」作家であり、好奇心な視線は「女性」性に集中し、「作品紹介」はその文脈において語りつくされることとなる。そこでは、対象の分析をおこなう客観的態度は放棄され、言説の寄せあつめと臆見に終始した論が展開される。

²⁰⁰ 水谷真紀「モダンガールの断髪と自我——ささきふさと『婦人グラフ』の東京モード』『東洋学』第48号、東洋大学東洋学研究所(2011)

²⁰¹ 江黒清美「ささきふさ『春浅く』と『ある対位』——モダニズムとフェミニズムの視点から——」『昭和前期女性文学論』新・フェミニズム批評の会(2016)

²⁰² 廣津和郎「ささき・ふさ小論」ささきふさ『ささきふさ作品集』女流文学者会編 中央公論社(1957) pp.331-340

「ささきふさ」の墓が、田村俊子や真杉静枝とともに、鎌倉の東慶寺にある、ということもあってか、三悪女の典型というふうに見られているようだが、田村俊子や真杉静枝にはあてはまるが、「ささきふさ」の場合は、悪女のイメージのみを強調するのはゆきすぎではあるまいか。²⁰³

おそらく紅野は、吉屋信子がささきの死から14年後に書いた「東慶寺風景——ささき・ふさと私——」（1977）を読んだと推測される。当該作品の冒頭には「縁切寺の三つの墓」という項があり、1963年に吉屋が同寺を訪れ、彼女らの墓を詣でたことが記されている。北条時宗夫人・覚山尼の創建による寺の由来が語られ「その寺の墓地に三人の作家が永遠の眠りに憩っているというのも、なにかの因縁だろう」とされたのち、吉屋は、いまは亡き作家たちにいたわりと親愛をこめ語りかけている。²⁰⁴

紅野は、いわばシスターフッド的な紐帯を反転させいったん低位におとしめたのち、ささきのみを掬いあげてみせる。おなじ墓所に偶然埋葬された3人のうち、真杉は、前述した通り大宅が「女性先端人批判」のなかで、理由を示すこともなく「娼婦型先端人」と称し、指弾した作家であることが注視される。紅野は、ささきが、平林たい子や林芙美子のように捨て身のあらあらしさ、アナーキーな生命力はないながら、都会人としての繊細な感覚、モダンでナイーブな発想、バランスのとれた感受性などの点でこの時代の「先端」人だと称する。²⁰⁵しかし、自明のごとく彼女の作品が比較されるのが、すべて女性作家同士に限られることには、男性作家との差別化——双方は対等でないという意識——が露呈している。

そして菅野は、ささきの作品に対し、もう一方の低評価にかかわる「新興芸術派」のみなしを強調する。『憂鬱の文学史』では、先行する横光利一に代表される「新感覚派」は、感覚活動本位でありながらも果敢にあたらしい表現を開拓しようとした、と一定の評価があたえられながら、後発の「新興芸術派」は、対照的に「風俗のモダニズムへの抵抗を放棄した」、と断じられる。印象批評的手法により、「新興芸術派」は現代小説の「軽いノリ」にも通じるところがあるとされ、ささきの「ただ見る」も代表的な作品にあげられる。さらに、横光以外にも「田園の憂鬱」の佐藤春夫や「モダン日本辞典」の室生犀星、「水族館」の堀辰雄らは、かかる「軽躁」な「モダン」に陥らなかったと高評価を付されるのだが、それは

²⁰³ 紅野敏郎「大橋房子＝ささきふさ——『断髪』『出港』など——」『解釈と鑑賞』第833巻 至文堂（2000）

p.212

²⁰⁴ 吉屋信子『自伝的女流分断史』中央公論社（1977）pp.161-173

両者の初対面の場面——ある出版祝賀会において牧師で作家の沖野岩三郎からささきを紹介されたこと、ささきが、すでに親交のあった有島武郎を吉屋に紹介したことから、結婚後のささきの生活、死の直前のようなすまだがつづられている。

²⁰⁵ 紅野敏郎「大橋房子＝ささきふさ——『断髪』『出港』など——」『解釈と鑑賞』第833巻 至文堂（2000）

p.212

一冊をつらぬくトーン、「純文学」優位の自明視に対応している。²⁰⁶

評者は、全員「戦前」生まれ（廣津 1891 年、紅野 1922 年、菅野 1930 年）の「文学」関係者で「男性」である。なかでも廣津は、結婚後のささきふさと佐佐木茂索の家に出入りしており、紅野や菅野も、ささきの生存中に青少年期を送っている。²⁰⁷ そして、彼らの文章が書かれたのは、戦後ささきが死去する 1950 年代から 2000 年代後半にかけてであることが注視される。すなわち、三者は同時代的言説を引きつぎながら、ながきにわたりその状態には外的な力が加わっていない。

これらの「評」と対照的に、佐光美穂による「大橋房子／ささきふさ研究のために——付、著作目録・参考文献目録——」（2008）は、詳細な調査報告であり、研究課題に対しても一歩踏みこんだ提言がなされている。佐光は、当時メジャーな雑誌が、大家による作品のほかに「正道」からはずれた中間欄をもうけ「コント」など気の利いた読み物を必要としたため、多くの書き手が膨れあがる需要のなか「都合のいい書き手として消費されてい」ったといい、ささきも「こうした構造の中で、その資質を蕩尽した書き手の一人であることは間違いない」と分析する。

さらに、佐光は、ささきが「作家としての自己実現と作家の妻という性役割との間で葛藤し」、それが「極私的な場に持ち越された文学のジェンダー構造を示唆する」とみなしつつ、一方で「モダンガール」が「新しい女」のようにことあげせず、ささきにとってもそれが表現の主体となりえなかったのはなぜか？ と問う。²⁰⁸

だが、大状況における「正道」の文学作品と「気楽に読める気の利いた読み物」という二項対立では、当時と変わらず文学の正典が自明視されている。とりわけ長編をものする作家を大家とし、その他を群小作家として配置する構図は、旧来の文学史観の枠を出るものではない。それゆえ、ささきのピーク時における種々の作品が、文章の短さ——正典の対極的形式——や、それが付された位置——埋め草的体裁——から「売文」に映るのだとすれば、そこにこそ受容する側の問題があろう。

また、第 2 章で考察したように「モダンガール」は、みずから宣言をおこなった「新しい女」とはことなり、外側から名指された存在であるという点にかんがみても、ささきが、そこに立脚する表現主体であったとは考えにくい。それゆえ佐光の分析は、近代における出版という社会的背景に着目しながらも、最終的には廣津や紅野によるジェンダーバイアスのかかった作家観や、菅野における純文学——職業作家に占められた——至上主義の「評価」と大枠でかさなっている。

一方で佐光は、ささきにおけるキリスト教の問題が、従前取りあげられてこなかった点を指摘する。実際に、当時の宗教活動や社会運動は「文学」と切りはなされてはおらず、むしろ

²⁰⁶ 菅野昭正『憂鬱の文学史』新潮社（2009）pp.11-46

²⁰⁷ 紅野は日本近代文学研究者、廣津は作家、菅野はフランス文学者で日本近代文学への言及が多数ある。

²⁰⁸ 佐光美穂「大橋房子／ささきふさ研究のために——付、著作目録・参考文献目録——」『名古屋近代文学研究』第 22 巻名古屋近代文学研究会（2008）pp.83-111

ろキリスト教的精神や社会主義を根底においた非職業作家による創作は少なくなかった。ささきも、のちには商業雑誌に寄稿するようになるとはいえ、当初から職業作家をめざしていたわけではなく、彼女が書く行為に就いたのもキリスト教信仰が契機となっていた。かかる事実にもかかわらず、ささきに関する論考には、彼女における書くという行為とキリスト教の関係がまったく言及されていない。

本論は、ささきふさが、彼女の生きた時代から現在にいたるまで、古い文学批評のドミナンスとジェンダーに規定されたままの状態であることをまず注視した。しかし、一面まなざされる「女」の表象そのもののような存在であるささきは、みずからにそそがれるまなざしをつよく意識しつつ、主体的にまなざす「女」たることがその著作からは看取される。

そこで、本章は、従前取りあげられなかったささきのキリスト教信仰とそこからの離反に焦点をあてながら、彼女がいかにして 1930 年——日本のモダニズムと彼女の作品のピークが重なる時期——の作品「ただ見る」にあらわれた自照精神を獲得するにいたったのか、その経緯をさぐる。第 1 節では、両親の晩年に生まれた末子であるささきがいただいた家族という存在への違和、第 2 節では、モダンガール表象にむすびついた断髪と周囲の反応、それがみちびく「書く」行為におけるアマチュア的出発、第 3 節では、養女となって移り住んだ横浜でのキリスト教的気圏、第 4 節では、初の外遊と結婚までの経緯、そして時期を前後する周囲の男性たちの自死、第 5 節では、「ただ見る」ということばにあらわれるカメラ・オブスキュラと夢の関係に覚醒した「視」が、他者との *solidarity* にむけられるまでを考察する。

第 1 節 ふたしかな「私」の位置

ある人は私を評して、過渡期の生んだ皮肉な存在だ、と申しました。

生えぬきの江戸つ子を母に持ち、殉情的な南國生れの父の血を多分に受け、而も両親の老年に *extra* として此の世に送り出された私は、生れながら一種の皮肉な存在であるべく運命づけられてみたのかもしれない。現に私自身さへ、自分の内部に、小憎しいほど透き通つた理性の光りと、それを裏切るやうな狂ほしい情熱の焰とが異様にもみあつてゐるのを、どうすることも出来ないのです。

大橋房子『愛の純一性』序文 (1922)²⁰⁹

ささきふさは、1897 年に長岡安平、とらを両親とし東京市芝区に誕生した。本名は房子。彼女は安平が 55 歳のときの第 6 子である。第一子は長女・八重子、第二子は次女・繁、第

²⁰⁹ 大橋房子『愛の純一性』アルス (1922) p.1

三子は長男・隆一郎、第四子は三女・とめ、第五子は次男・義雄。長男・隆一郎は、帝国大学法律科を卒業後、内務省に入り都市政策および社会政策を専門としていたが、のちに平田東助内相の長女・卯江と結婚し、1929年に警視總監を経て貴族院勅選議員となる。満州事変から戦争終結までのあいだに関東州関東局総長、1935年には満州国国務院総務庁長に就任しており、戦後は公職を追放された。次男・義夫は東京外国語学校の露西亜語科を卒業後、陸軍經理学校、陸軍大学校でロシア語教官を務め、ゴーリキーの「母」等の翻訳で知られる。²¹⁰

当時の日本は、結婚年齢が低く多産傾向にあり、長子と末子の年齢がはなれているのは特殊な事象ではなかった。きょうだいがおおい場合、長子と末子に親子、親と末子には祖父母と孫ほどの年齢差も存在した。社会的転変のめまぐるしい日本近代にあり、何番目の子として出生するかということは、個人のアイデンティティ形成にすくなからぬ影響をおよぼす。ささきと父親の年齢差は55歳であったが、のちに養女となる次女・繁とも17歳の年齢差があった。

1842年に大村藩の剣術方茶屋番・長岡右衛門の五男として生まれた長岡安平は、少年時代に多病を得て、武芸よりは文をこのみ自然にしたしみながら成長する。両親が放任主義だったこともあり、彼は、花卉草木の栽培や小鳥鶏類の飼育に余念がなく、後年、身体が健康になってから造園を知る。しかし、戊辰の乱や廃藩置県後には、世情が騒然としており師につくことがかなわなかったため、みずから自然のなかに分け入りながら造園家としての感性をみがいていったのだった。近代が明けたのちには、封建時代の後処理として公園化の需要が全国に生まれるが、日本ではこの分野の専門家がおらず、庭師のような徒弟制度を経ぬまま長岡はただちに任を負う身となる。同郷の先輩である東京府知事・楠本正隆に東京府土木掛の公園業務をまかされた彼は、東京の多数の公園のほか、全国の公園の設計をおこなっていく。²¹¹

後年、ささきは実父に対し、養父には感じられなかった慈愛をおぼえていたと回想している。時代の転換期にあり、幼少期から愛着した手仕事を相当の自由度でおこない、それを社会に還元しえた長岡はまれな存在であり、士族出身で官僚の道に進んだ者とはことなる教養の持主であった。報酬の有無にかかわらない行為としてのしごとへの愛情は、近代のアマチュア精神に通じるものがあり、それを通し社会にかかわろうとする姿勢を、ささきは父により示されていたと想像される。家庭における家父長的存在感も希薄だったであろうことから、彼女にも社会的対抗は意識されつつ、天皇や天皇制に対する直截な批判はみうけられない。

以上の事情から、誕生時は病弱で神経質であったというささきは、物質的な窮乏とは無縁のまま周囲からこまやかな配慮を受けて生育したと想像される。彼女は11歳のときに、当

²¹⁰ 横浜市中区役所福祉部市民課『横浜のおんなたち』横浜市中区役所福祉部市民課（1977）p.39

²¹¹ 長岡安平顕彰事業実行委員会編『租庭 長岡安平——わが国近代公園の先駆者』財団法人東京農業大学出版会（2000）pp.48-51 pp.62-70

時子がなかった 28 歳の次姉・繁の家庭で養女となる。生活の場が移ったとはいえ、帝都とは水でつながった港都・横浜の都市としての成長期に歩を合わせるごとく、ささきは思春期を送ることとなる。成人するまで彼女は、家庭内のみならず私的な領域においても、限られた人員からなる知的なグループの内側でほとんどの時間を過ごすこととなった。換言すれば、自身の存する気圏のそとへ出る機会を有さず、末子的な心情をかかえたままおとなになったともいえる。

たとえば、1921 年に発行された単行本『断髪』に所収された小説「初秋の高原」には、当時ささきが置かれた環境が反映されている。物語は、軽井沢を舞台に、都会からきた文化人たちの彼らだけの交流を中心にすすんでいく。風雅な世界は、しかしラストシーンにいたり、ふいにその調和をみだされる。

晩秋の冷気に追われ帰路についた「私」と姉は、駅の待合室で「づんぐりした加藤総裁の一行を見出す」。避暑客たちには「買ひ切りの一等車が接続される」が、「赤切符の老女を追ひ出す同乗の婦人のつんとした顔を見た」私は「自分が恥しくてたまらなかつた」。だが、高崎までの車中で乗りあわせたこども連れの夫婦は、少女の眼に「すさみはてた顔をしてゐるのに」「子供たちはどれもこれも細面のいゝ顔をしてゐる」と映る。「無智なあゝの母親に悪く癖づけられぬうちに、私の手で大事に育てゝみたい。——私はそんな大人ぶつた気持ちになつてゐた」。

女らしい羞恥ややさしみのこれんばかりもない、焼砂のやうにざらざらした、醜い中年の女が此の子を生んだのかと思ふと、何だか少し妬ましい氣がした。²¹²

自身が属する階層の年長者が、下層の弱者をしいたげるのをはずかしくてたまらないと感じる「私」は、一方で、器量のよいこどもの醜い母親を冷静に値踏みしながら嫉妬をおぼえている。そこには、社会的階層へのまなざしとジェンダー規範の反映が看取される。

車中の「他者」はつかのまあらわれ、すぐにきえるが、それは語り手の抑圧のありかを語っているかにみえる。私生活のなかでささきは、彼女の姉にこどもが生まれないことを、姉自身のみならず両親からも受けいれがたい現実としてたびたび聞かされてきたのではないかと想像される。車中の光景は、持てる者と持たざる者の階層的ねじれをともないつつ、規範的「家族」が現実にはさきだつて存在するのではないことを暗示する。

しかし、かかる生の偶然そのままに、小説「断髪」の序「後髪を切り棄てゝ」では、結婚 10 年目をむかえた姉に女兒が誕生したことが告げられる。それを機に彼女は、姉を「おかあさん」から「ちい姉さん」に、姉は彼女を「ふうさん」でなく「小さい叔母様」と呼びかえる。そうして「私」は独語のように姪に語りかける。

たあさん、あなたに譯の解らぬお話しを吹きかけてゐる、髪は短い、背の高い、男

²¹² 大橋房「初秋の高原」『断髪』警醒社書店（1921）pp.335-337

だか女だか、子供だか大人だかちよつと判らない妙な人は、あなたの一番小さい叔母さんなのですよ。(中略) 小判なりの大きな盥を御座敷の真中に据ゑて、上品なミツドワイフと看護婦二人がゝりて、ガーゼに包んだ小さいあなたをお湯につかはせるのを見てみたら、赤ん坊といふものはこんなに大騒ぎされるものかと、少し妬ましい氣がしました。そして末つ子の私が生れた時にはきつとこんなに騒いでくれなかつたにちがひないなどゝ、妙な追想を掘つて寂しがつて居りました。²¹³

待望の女兒には、名前の候補がいくつもあがつた。しかし、「私」は、義兄(元義父)にあまえるようにして、「民子」という名前をつよくすすめる。結果的にそれが通つたのは、その名前が女兒の両親や周囲の氣にいったのではなく、居場所の微妙になつた彼女への配慮からではないかと推測される。

『ホラ、名附親の叔母様が入らした。』

その翌る朝早速飛んで行つた私は、生れて初めてほんたうに温いウエルカムを受けたやうな氣がして、あまりの嬉しさと羞しさに思はずも涙ぐんでしまいました。²¹⁴

姪につけられた名前は、その誕生前に書かれた設定の「断髮」の主人公とおなじ「民子」だつた。

『たみちゃん。たアさん!』

私はおつかなびつくり綿のやうなあなたをぶきように抱き上げながら、誰にいふともなくかう叫んでみて、今更のやうにあなたのものとも私のものとも思はれぬ漠然とした名前といふものゝ抽象性に驚いたことでした。²¹⁵

名前というものの抽象性——長岡姓から大橋姓へと自身の意思にはかかわりなく名をかえられた作家自身、ほどなく「佐佐木」の姓を付されるだろう。だがそれは、家族制度に規定されたものであり、もとより人間の本質をあらわすものなどではないということ、ささき自身がだれより痛感していたのではないか。そして、序章の後半、語りにはにわかな逸脱の様相を呈する。彼女は、赤子の神々しさにうたれ拝跪したいやうな気持ちになりながら、その澄んだ眼の白さに対してははずかしくないほど透明なうつくしいものをのこして「死にたい」というのだ。

姪が誕生したことであつてなく「子」の場所を追われたにもかかわらず、彼女に対する嫉妬心もなく、むしろその無垢さをあがめているのは、赤子に象徴される当人の意思ではま

²¹³ 大橋房「断髮」『断髮』警醒社書店(1921) p.1 p.4

²¹⁴ 大橋房「断髮」『断髮』警醒社書店(1921) p.8

²¹⁵ 大橋房「断髮」『断髮』警醒社書店(1921) pp.8-9

ならない人間存在が人生へふみだす一步に昔日の自身をかさねているからであろう。

叔母様はね、この頃よく不可抗な死の魅惑に捕へられるんですの。それは誰かさんの云ふやうに、少女期のセンチメンタリズムと云つた風な、根のない、底の浅いものではないらしいのですよ。と云つてそれはリーザの死でも、ミハイロフの死でも、ましてクラウゼの死でもなく、強いて類型を求めるなら、魔酒を飲み乾した瞬間に於けるイゾルデの死とでも云つた風なものなのです。(中略)

どうかして一度でも全的に酔はう酔はうとして、酒杯の底の滓まですゝつたあげく、やつぱり酔ひどれる事も出来ずに盃を投げ棄てた新しいイゾルデの失神にも似た暗闇の中に、私は自分で自分の血脈を断ち切らうとする事があるのです。

『藝術が何です?』

とミハイロフは云ひました。²¹⁶

運命に翻弄され居場所をなくしたかのような主人公と対照的に、ささきは、養父母から必要とされる存在だったようである。小説の「主人公」を「作者」とすると錯覚すれば、上述したような場面が実際に存在したのではないかと信じてしまうが、ささきの実姉にこどもがうまれたという事実はない。事実と虚構はそのままに対応しないながら、その後の経緯を考えあわせるとき、「血脈を断ち切らうとする」という部分には意識の深層がうかがえる。

ここでやや唐突に引かれている複数の人物の「死」は、「トリスタンとイゾルデ」のフィクショナルなイゾルデの死の希求を除いては、アルツィバーシェフの小説「最後の一线」におけるそれであることが注視される。従前言及されてこなかったが、きょうだい中でささきと精神的にもっともつよくむすばれていたことのがえる 3 歳年長の次兄・義夫——きょうだいのうちでは第 5 子と第 6 子にあたる——は、「最後の一线」を 1922 年に翻訳、出版している。『断髪』はその前年に出版されたため、彼は翻訳の作業をおこないながら、この作品について彼女に語っていたのではないかと推測される。

本論が取りあげる 5 人のうち、金子文子も「最後の一线」を愛読し、終局生を決するほどの影響をそこから受けている。同書を各人が手に取ったのは、時代の思潮としてそれが存在したという理由にもよるが、当時の日本でアルツィバーシェフの作品中、圧倒的に人気があったのは「サーニン」であった。退廃的で破滅的な志向は共有されているものの、「サーニン」のほうがより生命力にみち、男性的視線に占有されているのに対し、「最後の一线」には、より虚無的な心性と、同時に美的な陶醉がただよっている。ささきと金子が、なぜ「最後の一线」にひかれたかについては、のちの章であらためて考察するが、ささきにおいては、養女となったのち「家族」の問題がすでに生の虚無にむすびついていたことがうかがえる。

第 2 節 「断髪」のとき

²¹⁶ 大橋房「断髪」『断髪』警醒社書店(1921) pp.13-15

事後の波紋など想像せず、ささきが長い髪を切るときめたのは、友人となにげない会話をしているときのことであった。その相手である望月百合子によれば、話のながれで、いっそ断髪洋装にしない？ と意見が一致したのだという。ほどなくアナキストとなる望月は、当時、読売新聞社の記者としてはたらいていた。ふたりは早速、木挽町にある「マリールーズ」という外国人女性行きつけの美容院で髪を切ると、麴町の紳士服屋で洋服を仕立てたのち横浜の元町まで足をのばし靴と靴下、下着もあつらえた。それは、ささきが青山学院女子高等学校英文科を卒業する 1919 年で、「断髪」の序文と時期的に一致している。²¹⁷

これとは対照的に、小説の主人公は、ひとりの部屋でみずから髪にはさみを入れる。

と、大きく口を開けた鉛色の裁物鋏みが顔を横切つて右から左に……女の大きな黒い眼は一層冷い凄みを含んだミステリアスな微笑に輝いて來ます。交叉した二つの刃物の間に、黒い、弾力のある髪の毛は食ひ入るやうに挟まれて行きます。女はふと刃物を持った手をもどして、鏡から眼を反らしました。女の眼の落ちた所には一枚の原稿用紙が擴げられてあります。²¹⁸

「私」は、はじめての自著の出版記念にホテルでひらかれた宴に出席する。近親の者とささやかなよるこびを分かちあいたいと考えながら、不慣れな彼女は、諸事を「世間の事にも文壇の事にも通じてゐる」岩谷牧師にまかせてあつた。だが岩谷は、彼の同郷人で恩人の、彼女とは個人的に関係のない文壇の元老株・長野を發起人にする。当日の客の過半は口をきいたこともない人物たちで、彼女をいたたまれなくさせた。しかし上機嫌の長野夫人は、唐突に、紹介したい人があるからうちへ遊びにくるよにという。

後日岩谷からとどいた手紙には、長野夫妻と自分があいだに立ち「世話をしたい」ひとがいたので、都合のいい日に長野家を訪ねるよにとあり、相手の履歴と「条件」が書かれていた。「男、三十歳 学歴、K大學卒業後外遊数年、日本文學を下田博士に學ぶ 職業、某私立二大講師 財産、五六万 先方の條件、女がクリスチャンになること」。彼女は、早速返事を送った。「——結婚は恐い事です。私はまだ世間的に公然許された娼婦の獸的生活を是認するほど墮落してはゐないつもりですから、今暫くさうした問題を忘れさせておいていたゞき度うございます。あんまり凡てがめんどくさくなつたので、今日はあのロシアの女のやうに頭を襟足でフツツリ切り落としてしまいました」。後日ある宴で、彼女は岩谷に出くわす。だが困惑する相手を見てみると、ふしぎと心がしずまり、なにごともしなかつたかのように問いかけるのだった。「髪を切つてはもうお嫁入りの世話も出来ないし……感慨無量でせう？」

当座こそ身辺に波紋を起こした「断髪」も、一夏を越してからは周知の事実となり、過剰

²¹⁷ 森まゆみ『断髪のマダンガール 42人の大正快女伝』文藝春秋（2008）pp.13-14

²¹⁸ 大橋房「断髪」『断髪』警醒社書店（1921）p.217

な反応もなくなる。しかし、それに反して彼女のころには、あらたな痛みが湧きおこるのだった。

私といふ婚期にある若い女が、不具に生れてゐるのでもなし、又別に醜いといふ譯でもないのに、何故か頑強に結婚を回避するといふ事がさうした問題を手軽に常識で、片付けてしまはうとする世間の人達に異様な感じを與えたとみえ、此の縁談と断髪との間に何か深い、不可解な因縁でもまつはりついてゐるかのやうに思ふ人が多いのでした。²¹⁹

縁談に対し、断髪してそのすがたをさらすことは、返答の可否そのものにとどまらないつよい意思表示である。彼女は、意識のあさい部分では、いたずらに近い反抗心でそうしたと思つてゐるが、深層には抑圧が存在する。「尊厳」の喪失は、二重のものであり、彼女をして自失状態にさせたのだった。記念パーティーと称しながら、主役の無視された空疎な席では、「文壇」的虚飾に幻滅をあげわうが、真の屈辱は、その「文壇元老」の社交における贈与のモノのようになつかわれたことであつた。そして、いたずらどころか「ロシアの女のやう」と称してみせるほどに意を決した断髪は、自身のなかでは正当な異議申し立てであるのに、「世間」は彼女の側に問題があるとみなし排除の視線をなげかけたのである。その後、岩谷は禁忌にふれるのを避けるかのように、彼女の頭から視線をはずし、長野もおなじ場にいあわせながら、彼女がそこにいないかのようにふるまう。

彼女は、「よわい性格でありながらつよい自我ももっている」という己の矛盾に気がついている。それゆえ、女学校を卒業しても、その自我をころしてまで「世間と妥協する気にはなれなかつた」のだと述懐する。

殊に義務や技巧で埋めなければならぬ間隙に満ちた所謂結婚生活といふものが、私には醜く、退屈に思へて仕方ありませんでしたので、条件から云つたら竹本氏のなどゝは比べ物にならぬやうな縁談にも耳を貸さない位だつたものですから、岩谷氏の手紙を見た時には實際ひどく腹を立てたのでした。²²⁰

ここには、語りえないものがひそむと考えられる。彼女が堪えられなかつたのは、結婚話をすすめられたこと自体でなく、その「状況」である。「芸術作品は作れないまでも」芸術家のところで自我を生かしていきたいという理想は、真向から否定された。長野にとって、「女性」作家の創作は、内容の吟味以前に、男性作家と同等にあつかうべきものとはかんがえられない。しかし、女学校を卒業して本を出版するというような文化的活動は「アマチュア」＝余技としてなら趣味がよく、夫の職業を理解する能力が高いであろうとみなされ、文学者

²¹⁹ 大橋房「断髪」『断髪』警醒社書店（1921）p.248

²²⁰ 大橋房「断髪」『断髪』警醒社書店（1921）p.249

の妻として候補にあがったのである。

しかし、自身の立場を明示する行為としての断髪に、悔恨の情がこみあげてくるのはなぜか？ 「拒婚と断髪の関係を」「実際あとから考へてみると、その何處からが自分の行為であり、何處までが自分を動かした外の力であつたかといふ事が、自分ながらはつきりとは解らなくなつていました」。重要なのは、語り手が、彼女の側に全面的に寄りそっているのではないことである。「私はまだ世間的に公然許された娼婦の獣的生活を是認するほど墮落してはゐないつもりです」という信念を彼女に堂々と語らせながら、いったん周囲と齟齬を生じさせたのち、混乱におとし入れる。それは、社会をかたちづくる男女の関係において女性の意思や「表現」が——女性であるかぎり——あらかじめ無視され、「個人」の尊厳もかえりみられないような世界で、あえておこなう「文学」や「結婚」に、いかなる意味が存在するのだろうか？ という「問い」を引き出すために必要であつた。

「断髪」は、しかし、単純な女性の抑圧とそこからの解放を謳った物語ではない。問題が己の外側にのみ存在するような告発的語りは、ここでは慎重に回避される。そして、徐々に彼女の内側からわきおこってくるのは、悔恨ほどつよくない、だが「落し物でもしたような」空虚さなのである。現実の生活で、洋服を着て帽子をかぶっている分には、みじかい髪はかえって調和してみえるのに、日本式の家屋では純然たる洋風の生活もできない。かなり「とらわれぬ」気持ちでいたつもりなのに、ときおり着物の長い袖がひどくなつかしく、しかし着てみると頭と調和しない。そこで彼女は「習慣の浸潤」を痛感する。「バランス」をとろうと工夫をこらし、斬新な黒と赤を基調にした着物に埃及的な花鳥の帯で出かけた講演会で、顔を合わせた男性の知人たちは、洋服を着ていないことにのみ関心を示し「何故？」といぶかしむのだった。

『着物を着ると何だか變だよ』

『さうですか。』と小聲で云つて、機嫌よく笑ひながら俯向いてしまつたものゝ、いさゝかの悪意もないかうした無邪氣な言葉のはしくれにも、傷ついた私の胸は、裏切られたやうな、蹴落されたやうな痛みを感じられないでは居られませんでした。²²¹

縁談を持ち込んだ人間と、ここでの知人の態度は、一見対照的でありながら表裏一体である。彼らにとっては、縁談に断髪行為で応えるような態度も異様なら、断髪に着物をあわせるといふ選択も異様に感じられている。すなわち、そこにもまた、長い時間の「習慣の浸潤」が存在するのである。

日本近代において、すでに存在した文化的な様式の浸潤とあらたに流入した様式の齟齬は、矛盾や葛藤を引きおこさずにはいなかった。かかる問題に関する考察は、『断髪』の1年後に出版された随筆『愛の純一性』(1922)でも、主要なテーマとしてあつかわれている。ささきは、「私の結婚観」で、現今の結婚の内実はコンヴェンショナルで盲目的な方便生活

²²¹ 大橋房「断髪」『断髪』警醒社書店(1921) pp.259-260

にすぎないと主張する。彼女は、男女のセクシャリティやジェンダーについて、さまざまな場で発言をおこなうが、コンヴェンションの乗りこえは、性的領域にかぎらない生の根幹にかかわるものとして、以降もながく意識されていくこととなる。

未だ確信をもつにはいたってないながら、「断髪」には、作家がすすもうとする道が暗示されている。髪にはさみを入れた彼女が、視線を鏡から床に落とすと、そこにはひろげられた原稿用紙がある。「みなれない不格好な髪」と「書くための紙」。不可視の暴力は、自傷のごとく、いったん可視的に身にきざまれた。だが、外側から加えられたと感じたそれが、じつは己のうちにも作用していたのだと気づいたとき、混融したまなざしを「分化」させる——物語を断つ——ことで、彼女はあたらしい世界にみちびかれるだろう。かかる暴力とは、求心的に続べようとはたらく彼我の消去であり、「私」の身体を取りもどすことが、切にもとめられていたのだ。当該のときにおいて、それは外貌にかかわるささいな行動ではなく、ひとつのコンヴェンションの乗りこえなのである。

「断髪」の序は、つぎのようにむすばれる。

『断髪』は去年の秋、コスモスの美しい頃、丁度懊悩の極にあつた時に稿を起して、そのまゝ半年も手をつけずにあつたものです。それが最近になつて不思議にすらすらまとまつた為か、私にはこの小さな所産が私をほんたうの明るみに導き出してくれる戸口のやうに思へてならないのです。耳をすますともう扉の向うに新しく生れ出るものゝ産聲がほのかに聞え初めて居るやうな氣がします。今こそほんたうにうるさい後髪を切り捨てゝ、暗室の扉を押し開けるべき時が來たのです。²²²

第3節 プロテスタント的精神——港都に射す光——

(1) 洗礼と親密圏

²²² 大橋房「後髪を切り棄てゝ」『断髪』警醒社書店（1921）p.3

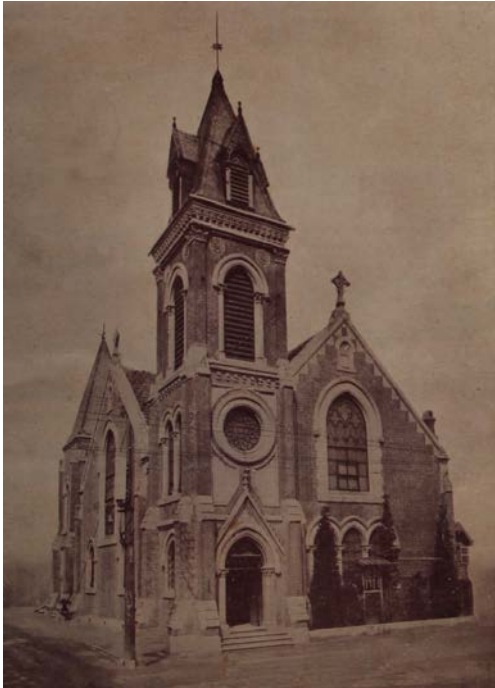


fig. 11. 1892年に建設された指路教会堂

ささきにおける芸術観や両性における理想のありかたの基は、10代のはじめから宗教的な気圏によりはぐくまれたものである。それは、穏健な市民教会における一信徒の宗教生活から、より先鋭なプロテスタント的精神の実践へと移っていった。横浜へ移住後、養父母にともなわれ自宅近くの「指路教会」へかようようになった彼女は、1915年に神奈川県立高等女学校を卒業後、青山女学院英文専門科に進学する。近代キリスト教、とりわけプロテスタントが横浜に根づきはじめるのは、ささきがこの地に住むほぼ半世紀以前のことであった。

1858年、日米修好通商条約がむすばれると、下田、函館、につづき神奈川も、長崎、兵庫とともに開港し、その第8条により居留地においてアメリカ人の信仰の自由、礼拝所の建物がみとめられる。翌1859年の10月には、早くも日本での宣教をめざしJ・C・ヘボン（James Curtis Hepburn）、11月にはS・R・ブラウン（Samuel Robbins Brown）とシモンズが（Duane Simmons）、1861年にはJ・H・バラ（James Hamilton Ballagh）が神奈川に到着する。そして、1870年代には横浜バンド、熊本バンド、札幌バンドの「三大バンド」が興り、プロテスタント教会の形成におおきな役割をはたしていく。なかでも横浜バンドは、すでにキリシタン禁制の高札が撤去される前年（1872）に結成されるはこびとなった。

宣教の胎動は、しかし日本の開国以前、すでにアメリカの地ではじまっていた。『ミッシヨナリー・ヘラルド』誌には、1825年に日本関連の記事が登場している。その背後には、早い時期からアメリカ人読者のあいだで、日本に対する関心が持続されていた事情があった。そして1859年1月、同誌に「日本から届いたすばらしい知らせ」と題した記事が掲載

される。「アメリカ合衆国総領事タウンゼント・ハリス氏 (Townsend Harris, Esq.) が、実に完全で満足のいくものと思われる、新しい条約を結ぶことに成功した。(中略)私は確かな筋から聞いているが、条約は日本にいるアメリカ人に自由な宗教活動を認めている。彼らは教会を建てるのが認められ、十字架を踏みつける行為は撤廃される。(中略)このようにして日本が広大な活動領域に加えられる。私たちが、国家として、彼らの拒絶の壁を通る道を開き、しかも流血を見ないでこれを成し得たということ、この条約は軍事による強要を用いなくて結ばれたと思えることは喜ばしいことである」。²²³

医師のヘボンは、横浜の外国人居留地でヘボン塾をひらき、宣教や英学の教授にとどまらず、生活困窮者への施療や『和英語林集成』と『聖書』の翻訳、出版を精力的におこなった。ヘボンは、30年以上のたゆみない活動の最後に、あたらしい教会の設立を希望する。そうして1892年、当時の横浜の中心地・横浜駅(現・桜木町)と海に近く「福音宣教の場としては申し分のない」尾上町に、赤煉瓦の教会堂が完成し「指路教会」と名づけられた。「指路」は、ヘボンの母教会(Shiloh Church)の名をとったもので、イエス・キリストの救いの路を指し示すという意味である。²²⁴

ささきの養母・繁は、指路教会で1909年から1951年にわたり、執事、長老を務めた熱心な信徒であった。日本の教会内で、女性も平等に長老職を務めるべきであるという声は早くからあがっていたものの、教会内の保守派や慎重派の意見は根づよく1921年まで実現がかなわなかった。そして同年、繁は指路教会において、佐藤園とともに女性の長老第一号となる。

ささきが受洗する1910年には、大逆事件が起きており、社会主義運動が弾圧されたのを契機に教会は社会主義や労働運動との接触を避け、労働者に対する伝道は消極的になっていった。一方、同年には、イギリスのエディンバラで世界宣教会議が開催され、エキュメニカル運動の開始が決定される。1913年には、同会議で議長をつとめたJ・R・モット(John Raleigh Mott)が来日し、継続委員会が発足した。前年に神道・仏教・キリスト教の会合が実現したことにより、キリスト教は、政府から他の宗教と同等にあつかわれるようになっていたが、同時に、内務省は各宗教の代表に対し「国民道徳」の振興を要請する。日本のキリスト教は、次第に外国ミッションから独立し、日基、組合、バプテスト、メソジスト等の諸教派が、独自の発展を遂げるなか、各教派がまとまり超教派的運動を展開した。全国協同伝道は、その典型であり、1914年から1917年にかけて展開された。²²⁵1915年、御大典記念伝道が各地で展開されるが、指路教会は、日本基督教会の中心的人物であった毛利官治牧師のもと、積極的な伝道を展開していく。かかる歴史的経緯から、1915年は「大量受洗」の年となり、その数は指路教会において151名にもものぼった。同年には、ささきの養父・大

²²³ 塩野和夫『禁教国日本の報道——「ヘラルド」誌(1825年-1873年)より——』雄松堂出版(2007) p.2 p.4 pp.37-38

²²⁴ 佐々木晃「J・C・ヘボン 施療・辞書編纂・聖書翻訳」『横浜開港と宣教師たち——伝道とミッションスクール』横浜プロテスタント教会編、有隣堂(2015) pp.21-34

²²⁵ 岡部一興「全国協同伝道の研究」『キリスト教史学』第59集 キリスト教史学会(2005) pp.64-65

橋清蔵も洗礼を受けている。

さらに教会内部では、各部をこまかく分け「事務の実」をあげようと奮闘した。中心は伝道部であったが、そこに大橋家もかかわっていたことの方がえる記述がのこされている。

「男子青年会はこの年の夏婦人会と共催で『清興会』を開いて、マンドリン演奏により夏のひとときを楽しむ会を催した。8月7日から9月4日まで毎週土曜の夕べに大橋清蔵と福田甚二郎宅において開催された。大橋清蔵は弁護士で家は当時尾上町五丁目、教会の道路を隔てた右隣にあった」。そこでは、各人が自由な題でスピーチをおこなったようであり、大橋のそれは「犯罪狂」となっている。

そして第一次世界大戦が終結すると、自由主義、個人主義の影響のもと、キリスト教はエキュメニカルな運動のなかで各教派が協力して伝道を展開していく。指路教会の内部では「家庭集会」が重視され、午後は主として婦人が中心となり、夜は特別伝道に際し、信者が一般人を同伴した。その場にわりふられた20の家庭には、常磐町へ移った大橋家もふくまれている。当時の特別伝道には、教会の外部から外村義郎牧師がまねかれたが、彼の伝道に対する情熱と福音を語るよろこびは会衆につたわっていき、リバイバル的状况が生みだされたという。²²⁶

ささきの受洗時のようすは、当時の指路教会の会報にくわしく記されている。「四十三年七月三十一日午前九時より小會堂に於て臨時小會を開き入會志願者左記十二名の試験を行ふ出席者毛利牧師塚田八戸川田の三長老にして塚田長老開會の祈祷を捧ぐ」とあり、以下12名の氏名が並ぶなかに「常磐町三ノ八二清蔵長女 大橋 房 明治三十年十二月六日生」²²⁷の文字がみとめられる。養女になった翌年で、彼女は12歳であった。

指路教会は、商業地区に位置することもあり、隣接する区域の日本人による最初のプロテスタント教会「海岸教会」では学生や社会主義者などの信者も交じっていたのに対し、中流階級以上の市民がおおくかよってきていた。社会主義者にとっての冬の時代の開始は、しかし、キリスト教の伝道にとってはひとつの転換点になっており、穏健な市民的宗教活動の圏でささきが思春期を送ったようすが想像される。後年、彼女は随筆で、当時の住居を回想している。「辯護士といふ職業柄、表は銀行や醫院の並んだ大通りだつたが、奥は藝妓屋や待合と背中合せになつてゐた。そしてまた、長細い庭に面した二階の廻縁には、隣家の土蔵の鬼瓦が影を落としてゐただけで、あとは朝から日暮方まで日脚の絶えることがなかつた」。²²⁸

のちに「新興芸術派」の作家と目されるようになるささきであるが、同時代的に「国際光画協会」を発足させ（1929）、独逸国際移動写真展を企画、成功させる（1930）岡田桑三は、少年期に母につれられ、指路教会へかよっていた。「岡田屋」の創始者である曾祖父・勘七は、近代が明ける直前、泉州・堺から横浜へ移り生糸商として成功する。しかし娘のせきは、

²²⁶ 日本基督教団横浜指路教会 125年史編纂委員会『横浜指路教会 125年史 通史編』日本基督教団横浜指路教会（2004）pp.209-222

²²⁷ 横浜指路教会『指路』第112号 日本基督教団横浜指路基督教会（1910）

²²⁸ ささきふさ「一服」『文藝時代』金星堂（1927）p.41

オリエンタル・バンクに出張勤務していたイギリス人のロバート・ロードとひそかに交際し、未婚で女兒を生む。婚外で外国人と自由な恋愛をした祖母と対照的に、当人の意思を無視した結婚をしいられた母・よねは、教会に精神的ありかをもとめたが、キリスト教的気圏と人脈は、岡田の「感受性に方向を与え」ることとなる。岡田家も、当時は大橋家とおなじ横浜市尾上町に居をかまえており、1911年、執事に就任したよねを先輩の繁が指導している。

岡田より6歳年長のささきは、次兄の長岡義夫、おじのように慕っていた山田耕作、のちに夫となる佐佐木茂索を彼に紹介したという。以後の岡田にとって、長岡は、陸軍におけるロシア通として初期社会主義とロシア文化に関する情報源となり、山田は、近衛文麿や土方与志をひきあわせてくれたため、彼は土方が伊藤熹朔とひらいた模型舞台研究所に出入りするようになる。当初フランスへ留学するつもりであった岡田に対し、時流をみるならドイツにするべきだと、変更をすすめたのは山田であった。

また、1920年ごろクロポトキンを愛読していた岡田に、長岡は、故幸徳秋水夫人・諸岡千代子を紹介する。そして神田錦輝館でひらかれた大杉栄講演会に、村木源次郎にともなわれ参加した岡田は、大杉と面識を得る。幸徳、大杉と最後まで行動をともにした村木は、横浜の貿易商の家に生まれたが、家の没落後、海岸教会に出入りするうち社会主義者たちと知りあいアナキストとなった。大杉虐殺の報復として、和田久太郎らとともに福田雅太郎暗殺を計画して失敗、逮捕後に獄中で病死している。

よねは、息子が留学先のベルリンで退廃的な生活におちいらないようにとの配慮から、教会の人脈をたどり、森戸辰男に身元引受人を依頼した。しかし森戸自身、クロポトキン研究により大学を追われての留学であったため、わかい社会主義者たちを岡田にひきあわせている。ささきとことなり、受洗しなかった岡田は、留学後に無神論を唱え母のいるキリスト教の気圏から離反したのだった。²²⁹

従前、ささきを論じるとき、引きあいに出されることがなかったキーワードに「社会主義」がある。20世紀初頭に、キリスト教とそれにかかわる女子教育の世界に身を置き、近代知をくぐりぬけた彼女に、社会主義は、本人の志向にかかわらず縁遠いものではありえなかった。とりわけ彼女の周囲には、ロシア文学専攻の次兄や、ロシアの前衛思想をじかに見聞した岡田などがいたため、むしろその色は濃厚だったといえよう。

前述したように、ささきの父は元藩士の知識人であったが、彼女とは年齢が祖父と孫ほど離れていたため、難波や金子のように真正面から思想的衝突をすることはなかった。しかし彼女は、立身出世的価値観を体現するかのように官僚の道をあゆんだ13歳年長の長兄には、反発をおぼえていたと告白する。「明日の空漠」(1936)には、「帝大の独法」を出て「内務畑」に入った兄が、すぐにのぞまれて「そこの大臣の女婿となり」順調に地位を築いていくようすを、ひややかにながめる昔日の妹の姿がえがかれている。²³⁰

²²⁹ 川崎賢子・原田健一『岡田桑三——グラフィズム・プロパガンダ・科学映画——』平凡社(2002) pp.40-45 pp.51-59

²³⁰ ささきふさ「明日の空漠」『輝ク』輝く会(1936) pp.142-143

(2) キリスト教女子青年として

1918年、ささきは、『女子青年界』に「仙臺修養會の日々」と題した体験報告を寄せている。青山学院在学中のこの年、彼女の文章は活字化されはじめるのだが、同誌のほかにも寄稿先は『我等の宗教』、『護教』、『六合雑誌』、『婦人新報』等すべてキリスト教系雑誌で、形式はレポートや随筆にかぎられている。

仙台での修養会を主催したキリスト教女子青年会 (YWCA) は、産業革命期の 1855 年イギリスに発足し、日本では 1905 年に津田梅子を会長として設立された。初期の活動は、わかかい女性の自立と彼女たちの信仰、友情をはぐくむことをめざしており、1906 年に青山学院で開催された第 1 回の大会から、「修養女子労働者」の問題を重要視している。急速な産業化にともない、非人間的な環境で労働を強いられた女子工場労働者や農村の女性をささえるべく、東京 YWCA につづき 1910 年代には横浜・大阪・京都・神戸 YWCA が誕生し活動を開始する。

たとえば 1905 年、『明治の女子』に掲載された一学生の投稿「学校の歸途思へること」には、早くも彼女らにおける連帯精神のめばえがうかがえる。「しのぶ」という名の筆者は、学校帰りの電車内で、砲兵工廠から弁当箱をたずさえ列をなし乗りこんでくる工女の大群に出会ったことをつづる。

近来女子にして諸製造所、會社、商店等に通勤し、自活するものゝ増加したるは、誠に驚くの外なし。蓋し現時の女子に、有為の氣象の生じたるによるならん。おのれ、決してすべての女子は、神より附與せられたる天職を外にして専ら自立すべきものなりとは信ぜざれど、従來の如く、男子の寄生蟲となりて、自己自ら何等の實力も備へず、一朝事あるの日は忽ち活計の道にまよひ、為めに種々好きしからぬ行をなし、或は徒らに他人の袂にすがりて助を求むるが如き、あさましき境遇に陥らざるやう、豫て自立し得るの潜勢力を養ひおくの必要あるを認むるのみ。²³¹

そして彼女は、ことばを交わしはしないながら、工女たちの存在を理解しようと努める。労働する女性たちのけなげさには感じ入るばかりで、「世の所謂 高襟^{ハイカラ}的令嬢」のおく及ばざるものがある。ただし、彼女らがなにを理想としているのかは、正直知りえない。だが、キリスト者である「我等女子青年」は、虚栄の巷に彷徨することなく任の重さをみとめて「宜しく心を一にして」神恩の萬一に報いねばならない。未だ連帯への途はとおいと一方で冷静にみとめつつも、「女子青年」同士の分けへだてないきずながつよく意識されていることが注視される。

²³¹ しのぶ「学校の歸途思へること」『明治の女子』第 2 卷第 3 号 日本基督教女子青年会 (1905) pp.23-24

日本 YWCA 結成から 15 年後の 1920 年夏、ささきは、仙台の尚炯女学校で開催された修養会に参加し、レポートを『女子青年界』に寄稿する。尚炯女学校は、1890 年に来仙したアメリカの宣教師ラヴィニア・ウィードがひらいた家塾が前身であり、1899 年から寄宿舎つきの女学校として認可、設立された。

はじめての東北行で「夢の様な希望と知らぬ地にゆく不安」に、寝苦しい車中をすごした一行をむかえたのは、講堂の白壁にかかげられた標語「信仰もし行を兼ねざる時は死るなり」であった。しかし「修養」の実践それ自体は、厳格な規則づくめではなく、真摯ななかにも教師と学生、学生同士のこまやかな交流が企図されていた。開会後には哲学者・笹尾条太郎の講演があり、標語の学術的諸解釈が列挙されるが、「冷い哲理や神学の上に」立ちながら「燃ゆるが如き信仰生活を力説する」彼の「学者らしい」顔はかがやいてみえた、とつづられる。その後は、芝生にすわり「西洋の方々は手に手に編み物を携えながら」ミス・ブリンガーの矢坂丸（正確には八坂丸）沈没談をきいてから、ミス・オルチン指導の下クワイヤーの練習。夕食後には、ふたたび芝生のうえで「夕陽會」がひらかれ、夜には講堂でミス・マクドナルドの流暢な日本語の話聞く。

3 日目の昼には、郷土史家兼土木技師・菊池武治の女工問題に関する講演、夜は当校教授・吉川起行の「よき行為」と題する説教がおこなわれる。ソーシャルサービスのみをもってクリスチャンの途と考へ、金銭をもって慈善の真意をくみとるとき現代の通弊への指摘をし、結果のいかんによらずただ神の御心のままにまかせるところに真の「信」と「行」との一致があると説くのを、ささきは「痛快な程」と共感しつつ記す。4 日目は、「信仰と^{はたらき}働」と題された新渡戸稲造の講演後、ミス・オルチンにさそわれた一行は息を切らせながら城山へ登る。眼下にひろげられた「大きな絵巻物」にみとれていると、「あの赤いのが学校よ、学院も見えるでせう」と宮城女学校の学生がいう。縁台に腰かけ「話しながら笑ひながら」夕飯を食べるうち、「貴女のフエボリツトは？」とたずねられ、席順にすきな讚美歌をえらんで「心の限り」唱和をする。帰途のようすを彼女は「餘光淡く西の空をぼかす時、はずむ様に急坂を下つてゆく私の唇には、いつかテニソンの『砂州をすぎて』が顛へて居ました」と書く。そして最終日には、会衆全体が二列になりマーチの足拍子を取りながら、花文字で Y・W・C・A を真青な芝生にえがき「天にもとどけ」と青年会歌をひびかせる。最後に、その日ささげられた献金がお茶一杯も飲めないジェネバの学生のためにもちいられるという報告がなされ、燈火をもった全員が星空の下クワイヤーをうたうと「さようなら」の声がしばし鳴りやまなかった、とむすばれる。²³²

この文章の前後にも、ささきは「送別會の夜」（1918）、「蓆の上で見物」（1918）、「かがやくみすがたを」（1919）、「自由と責任」（1920）を同誌に寄稿している。「蓆の上で見物」は仙台修養会のある日のプログラムを切りとったもので、「送別會の夜」は新渡戸夫人のマリー・エルキントンとミス・ペーヂの帰国に際しひらかれた送別会の報告、「かがやくみす

²³² 大橋房子「仙臺修養会の日々」『女子青年界』第 15 卷第 8 号 日本基督教女子青年会（1920）pp.52-55

がたを」と「自由と責任」は随筆である。

「送別会の夜」のアトラクションでは、50年後の女子青年会が演じられ、未来の修養会場まで登場する。本部の事務室では、事務服を身につけた少女^{おとめ}が、機敏に対応をしている。「去る所で負傷者があつたと助けを求めてくる、すぐ救済用の自動車を命ずる。八百人ばかり入り入る様な結婚式場を貸してくれと言ってくる。第3号が手頃だらうと話がきまる。飛行機で朝鮮支部から人がくる。臺灣から夕涼みに飛行機で行くと言ってくる、工女がくる。アイヌが来る。待合のおかみさんが『ほんの少しですが』三萬圓ばかり寄附したいと言ってくるが『こちらではいかゞはしいお金をお受けすることはできません。』とはねつけられる」といったようすである。²³³

「かゞやくみすがたを」では、一転文章のトーンが変わり、友愛・連帯・無上の「信」は青年の煩悶と真理の希求に切りかわる。「人間も初めは自分をとりかこむ外界の事物に眼を注ぎました。萬物は水より成るとか、いや空気だとか、地水火風だとか、いろんな理屈をつけて尤もらしく説きたてたものです。けれどかうした物質考究時代にも、物象の背後に神を見んとする宗教的運動が芽していたやうでございます。「而かも人間は次第にその眼を自分自身に注ぐやうになりました。萬物の存在を我に帰せんとする説きへ現れて、昔はあんなに真面目くさつ考へた外界の事象をも、懷疑の眼を以て見ずには居られなくなりました。そして彼女は、自由をつよく希求しつつも、それが神の意にかなわないものであるなら「すみやかに棄ててしまいたい」という。「もはや我生けるにあらず、キリスト我にありて生けるなり」とさけんだパウロのように、「白熱境」をあこがれ「小さな自我を殺して、御旨のままに生き度い」。しかし、それでは何が真理であるか、「御旨」のままになるか、問うほどにいつでもいきづまってしまうのだと吐露する。²³⁴

また「自由と責任」では、自由が行使されねばならない最後のおおきな事業こそ婦人解放運動であるとしつつも、責任をとまわらない好き勝手なふるまいを自由とはきちがえないように、と語りかけられている。たとえば交戦諸国における行きすぎた暴力のように「自分の意志を空しうしてまで」祖先の復讐をなさねばならないものだろうか？ 最後は「興へられた目的を善用し得るものこそ、真に自覚ある、醒めた女性であると思ひます」とむすばれる。生硬な文章ではあるが、これが書かれたのは彼女が長い髪を切った直後であり、モダンガール表象と個人の精神的内実との懸隔があらためて確認される。²³⁵

同時期にささきは、『婦人新報』に「フランシス・ウ井ラード」(1919-20)を連載する一方で、単行本の『イスラエル物語』(1919)、次兄・義夫への献辞がある『葡萄の花』(1920)が出版され、新聞紙上には童話が掲載されるようになる。²³⁶『葡萄の花』以外

²³³ 大橋房子「送別会の夜」『女子青年界』第15巻第6号 日本基督教女子青年会 (1918) pp.23-25

²³⁴ 大橋房子「かゞやくみすがたを」『女子青年界』第16巻第3号 日本基督教女子青年会 (1919) pp.35-38

²³⁵ 大橋房子「自由と責任」『女子青年界』第17巻第2号 日本基督教女子青年会 (1920) pp.32-33

²³⁶ 読売新聞に『「失敬」のお人形さん』『小さな小さな精霊の話』(1919)「さかさまの世界」「なんきんだま」「花のベル」(1920)「霜柱御殿」「フィレオとユリアのお話」「シュークリーム」(1921)「おもちゃの家」「提灯と蛸」(1922)「角二郎と鼠」(1923)を掲載。

は、平易な文章で書かれており、年少の読者まで意識したものと考えられる。キリスト教信仰が書くことの契機となった彼女にとって、読み手のため表現の形態を随時かえることは、むしろ「発信」のための基本であっただろう。なかでも『イスラエル物語』や「フランシス・ウイラード」は、聖書や婦人解放運動の先駆者についての史実を基本としながら文学作品のおもむきをたたえ、ひろく読まれうる資質をそなえている。

たとえば『イスラエル物語』が、静謐で荘厳な筆致であるのに対し、「フランシス・ウイラード」は、のびやかで清新な文体によりウィラードの青少年期がえがかれる。19世紀末から20世紀初頭にかけての転換期に、アメリカ社会は労働者階級と上流階級に分裂し、そこから生じた拝金主義や個人主義に対する懐疑は、ひとびとを社会的行動に駆った。ウィラードは「何事でもひとからしてほしいと希望することは、ひとにもその通りにせよ」と唱え「福音社会主義」をかかげたが、それは同時代の社会改革運動家や労働組合運動家に共通した姿勢であった。²³⁷

女性解放運動の偉業を達したウィラードをあつかいながら、ささきの関心は、彼女を通して人間の成長期の環境にむけられる。それを反映してか物語は、理解ある両親にめぐまれ、己の信じる途をまっすぐにあゆむ「フランシス」の1861年の受洗の場面で完結している。当時ウィラードは21歳、執筆時のささきとはおなじ年齢であった。最終回でえがかれなければならなかったのは、しかし受洗そのものではなく、そのまえにおとずれた「恐ろしい懐疑の旋風」とその後の「回心」なのである。

当時のささきにも、信仰に対する同様の「懐疑」がおとずれていたのではあるだろうか？ いわば文学的想像力で、彼女はウィラードの危機をえがく。「フランシスは今まで無反省に受け容れて来た基督教の教義に先づ疑ひの眼を向けました。其處には若い彼女の智性を以てする明瞭に指摘する事の出来る矛盾が、恥しげもなく顔をさらして居りました。そうした矛盾を事もなく鵜呑みにして来た自分の習慣に墮した宗教生活が、フランシスには今更のやうに恥しくてたまらなくなりました。と云つてうるほひのない無信仰の生活の寂しさ、物足りなさには到底堪へられませんでした」。²³⁸

1859年、チフスにかかって病床についたウィラードは、かつて読みあさったあたらしい哲学や科学の本を思いうかべながら、自身がそれに問題の解決をもとめているのではなく、そのなかに自身を満足させる弁証をもとめているのだと確認する。その年の冬、エヴァンストンにリバイバル運動の波が起こると、彼女もそこに加わり、日々懺悔と法悦の涙をながしながら、自身の限界を一変するような「奇蹟」をまちのぞむ。しかし、かかる「期待」があやまりであることを悟ると、回心して求道者のひとりとなるのだった。²³⁹

ウィラードにとっての至誠すなわち良心の実践は、キリスト教原理にささえられたもの

²³⁷ 寺田由美「フランシス・ウィラードと社会的福音」『北九州市立大学文学部紀要』第81巻（2012）p.48 p.52

²³⁸ 大橋房子「フランシス・ウイラード」『婦人新報』第279号 日本キリスト教婦人矯風会（1920）p.8

²³⁹ 大橋房子「フランシス・ウイラード」『婦人新報』第279号 日本キリスト教婦人矯風会（1920）pp.8-9

であったため、彼女は信仰においてのつまづきを経験しながらも、それを乗り越え、確信にみちた生へとみちびかれえた。「小さな自我を殺して、御旨のままに生き度い」と心中でさげばずにはいられなかったささきにとっても、それがどれほど理想的な生であったかは熱情のこもる筆致からうかがえる。だが、ひるがえって、かかる宗教的背景をもたない日本の風土で、己はどう生きていくのか？ 学生時代をおえたのちの外国での経験は、精神の深奥で、彼女を文化と文明の葛藤に直面させることとなる。

(3) 共闘する男性たち

1915年、ささきは、青山女学院に入学すると「東京婦人矯風会」（以下「矯風会」）に入りするようになり、ガントレット恒の秘書となる。幼時に親につれられかようこととなった女性の役職をみとめるのにもごく慎重な市民的教会と、女性解放を前面に掲げた会とでは、キリスト教精神を基としながらもイデオロギー的な懸隔が存在した。しかし、青年期に入ったささきは、よりラディカルな後者の気圏に親和していくのである。

ガントレット恒（旧名・山田恒）が、キリスト教に接近したのには、敬虔なクリスチャンである母の妹・かねと夫の大塚正心の存在が影響していた。²⁴⁰だが、それ以前に幼時から眼前によこたわる家族の問題は、彼女をして精神的な世界を渴望させたのだった。『七十七年の思ひ出』で山田は、まるで「暴露」のようになってしまっているのではないかとためらったのだが、と断わりおきつつ「けれどもこれなくしては恐らく私の一生は全く他の道を辿つて来ただらうと思ふ」と語りはじめる。維新時に藩士であった父・山田謙三は、商人に転じてのち「分限者」となるが、豪放な性質のゆえに「紅灯の巷」で「おほびらに」に放蕩するようになった。あるときには、実家に「若い綺麗な」ふたりの女性が住みつき、母が彼女たちの食事をつくり「女中」に部屋まで運ばせていたという。相つぐ乱行にたまりかねた母がなにかいうと、猛獣のように荒れくるった父は、彼女を打擲したり髪をつかんで引きずりまわしたりしたので、山田はそのたび「胸をどきどきさせ泣きながら」神に助けをもとめたと回想している。妹夫婦の影響でクリスチャンになった山田の母を、父は最初うとんでいたが、破産を経験し実子を亡くしたのち、キリスト教信仰にいたった。「不安と恐怖で満たされた幼児期の家庭の思ひ出」は、しかし彼女にとって、女性解放運動の「原動力」となっていく。

山田がエドワード・ガントレットと結婚する1898年当時、日本人妻はみな「らしやめん」とよばれ白眼視されていたが、彼女は、外国人の妻として法的に正式な手続きを経た第一号となった。「結婚生活のなかに一切を閉ちこめて小さい安逸に生きるくらいなら」生涯孤独でもなにかをうったえつづけたいと願っていた山田は、信仰を通じ理解あるパートナーに出会ったことで初志を貫徹する。²⁴¹

²⁴⁰ 大塚は、医師兼牧師で、救癩事業に生涯をかたむけた。かねは、女子神学校の第一期生の社会事業家であった。山田は、実子におとらぬほどふたりから愛情をそそがれたという。

²⁴¹ ガントレット恒『七十七年の想ひ出』大空社（1989）pp.3-21 pp.52-54 pp.62-63 pp.70-71

日本における矯風会は、1886年、矢島楯子を初代会頭として設立された。矯風会運動そのものは、1873年ヒュールス・ボローでの運動に端を発しており、1883年には、フランス・ウィラード (Frances Elizabeth Caroline Willard) が「万国キリスト教矯風会」を設立。1887年には、留学中の根本正を通じ、東京婦人矯風会の設立が、万国本部会頭のウィラードに報告されている。当初は禁酒運動をかかげた団体であったが、創立直後には「一夫一婦・男女の道德標準の違い」がより重要視されることとなった。²⁴²

それに関連して、ささきが横浜に移った1910年代には、矯風会における廃娼運動が最高潮に達している。1914年、同会はカリフォルニア州での排日運動に対し、家庭の紊乱や国家がもうけた公娼制度が世界に対する面目をうしなわせる²⁴³のだとして「一夫一婦制度」徹底の宣言をおこなう。翌1915年、京都で開催された御大典記念の大会において「一、公会の席上に醜業婦を侍せしめざる事、其他凡ての風俗を紊乱する行動の取締りを嚴重にする事。二、精神的記念として、今後六年間に、公娼制度の廃止を期する事」との決議がなされると、全国の支部はいっせいに立ちあがった。

そして1916年には、大阪飛田遊郭設置をめぐり、はげしい攻防戦が展開されることとなる。1912年の難波遊郭の火災による消失後、矯風会、廓清会が再建反対運動をおこない成功をおさめていたが、飛田指定はその代償といわれ、大久保利武府知事が内務省の諒解のもと建設の決定をくださったのだった。しかし難波遊郭の火災後から、大阪では『廓清』が愛読され、飛田問題が突発したときには「朝日」「毎日」の二大新聞が反対運動を支持し1年ものあいだ必勝を期するというような「道義戦」が起こる。そこには、各教会の牧師や宣教師たちの協力体制が反映されており、青年男子が、個人的に反対運動を支持した稀有な例もあった。²⁴⁴

1917年、矢島は来阪し、千数百名の母親の署名をあつめたのち、会衆300余名とともに祈禱会をおこない、二別艇隊となり肅々と大阪府庁に請願にむかう。近代の婦人デモとしては初のもので、当時公認された「直訴」の方法で決行したにもかかわらず、最終的に、運動は水泡に帰した。1914年に組閣した大隈重信は、夫人が矯風会の終身会員であり、自身は廓清会の顧問も兼ねており、飛田の周辺には学校がおおいため青少年にあたる影響が深刻であるとの訴えに「調査をする」と請けあったものの、最終的に設置取りけしを断行しなかったのである。

また、同1917年に起きた「三沢千代野事件」²⁴⁵で、矯風会は、少女の転売と貞操蹂躪を、

²⁴² 日本キリスト教婦人矯風会編『日本キリスト教婦人矯風会百年史』ドメス出版(1986) p.315

²⁴³ それにより「同胞姉妹が到る所の外国に賤業を営むのだと非難している。

²⁴⁴ 土佐の青年・中川藤太郎は、設置に対して憤慨に堪えず、2回東京、3回大阪へきたが、3月7日の夕方小指を根元から切断し、指定地の板壁一面に血書をした。5月1日には、アメリカの飛行家アート・スミスが、大阪市民に対し「日本から立派な飛行家を出すためには、酒と婦人に近寄るべからず」というピラを上空からまいた。

²⁴⁵ 横浜の貧家の少女・三沢千代は下女奉公にでたが、幹旋業者のために転売される。母親は、少女が通っていた日曜学校の宣教師に救いをもとめるが、茨城県の料理屋に転売された娘は、すぐに客の酌にだされた。約束がちがうと逃げだそうとすると殴打され、またほかに転売される。3回めの家で精根つきて主人の意にしたがってしまうが、6回めの家にいるとき、矯風会が彼女を救いだし慈愛館に収

水戸区裁判所、東京裁判所に告訴するも「罪状軽微にして」取りあげる価値なしとの判断で却下される。1918年の矯風会第26回大会中には、あたらしく建築された飛田遊郭をみおろす阿倍野の外国人墓地の高所に一同があつまり、「暗涙を呑み」つつ祈禱をおこが、ここでの久布白落実の提唱²⁴⁶により、「婦人参政権運動」がつぎの主要な目標となったのである。²⁴⁷

矯風会と共闘を展開した「廓清会」は、1911年に火災で吉原遊郭が全焼した際多数の芸妓が死亡したのを契機に、キリスト教系知識人たちを中心に公娼制度廃止をめざし結成された。廓清会趣意書は、政治改革である維新の事業は多方面に影響をおよぼしたが、思想の涵養は少数先覚にかぎられているため「奴隷の遺制儼として今日に存し、世之を怪まざるが如きは、是豈文化の不進社會の不紀律なる一適例にあらずして何ぞ」と語りはじめる。社会改善は内発的に人心の奥底から発する場合もあるが、それは政治の達せない領域なので、宗教教育の力で解決すべきなのだが、奴隷廃止や阿片禁止のごときは、外部からまず制止することが肝要なのである。公娼制度における公娼も、婦女みずから墮落しているのではなく、無知からきているものがおおい。醜業を一般の職業と同一視し、税を徴収することで、主人は「得々として社會に飛揚し、甚きは公職を帯びて良民を代表するに至る」。公娼廃止は外科的一方法であり、制度の外的改革にとどまらず、男女の徳操をすすめることが終極の目的である、と書かれた。

会長の安倍磯雄は、創刊号の「公娼制度と社會の風儀」で主張する。(1) 公娼全廃説に対する誤解——公娼制度を廃止したらかえって密淫売が増加するのだから必要悪としてみとめるべきだし、どこの国でも売淫はあることだというのが、あらゆる醜業の廃絶には力がおよばずとも、公然と売淫をゆるさないよう公娼制度を廃してしまえ、というのである。(2) 人道上より見たる公娼——全体われわれは多数者の利益のために少数者の大事の権利を傷つけることができるか。それでは昔の「人身御供」とおなじである。「たとひ社會の風儀を維持する上に利益があると云つても、数萬の婦人を奴隷扱にすると云ふ事は、人道より考へて一日も堪ゆる事の出来ないことではあるまいか」。(3) 貞操問題としての公娼——「我國の幾萬という婦人が、朝に夕に壓制的に其生命とも云ふべき操を破られて居る。而して立派な政治家教育家もそれを見て黙つて居て即ち小の蟲の殺されるのを見て日本國民の為だと云つて居る」。(4) 風紀及衛生問題以上——われわれは、アメリカにおける奴隷廃止運動に尽力した人間とおなじ精神で、何十年かかろうともこの奴隷制度にひとしい公娼制度全廃のため、奮闘する覚悟である。(5) 公娼の風儀に及ぼす影響——もし公娼制度を廃したならば社會の風儀はあらたまるかもしれないが、公娼制度が存する以上風儀は容易にあらたまらない。なぜなら一体男女間に風儀がみだれるということは、たがいが尊敬心を欠いてい

容したのである。矯風会による司法へのうったえは5年間にもおよんだ。

²⁴⁶ 「泣くのは止めよう。私どもは法治國家の民です。法治國にあつて参政の權利をもたないのは、兵器なしの戦争でしょう。勝利はまことに得がたいことです。今後私どももこの参政権を獲得することを、われらの目標として立ち上がろうではないか」と説いたという。

²⁴⁷ 日本キリスト教婦人矯風会編『日本キリスト教婦人矯風会百年史』ドメス出版(1986) pp.325-350

るからである。男が女をみれば威厳が感じられないし、女が男をみれば品格が感じられない。男が金銭で女を買うことができるという思想が、すべての障害の根本をなしている。日本では、女郎買い、芸者買い、「畜妾」というように女性を物品のようにあつかうので、尊厳の生じようはずもない。(6) 国務大臣と芸妓——一国の政権をにぎる大臣が、国民のまえではいばっても、待合を利用したりするので、威厳もなにもあったものではない。(7) 青年男女私通以上の罪悪——大臣が長官をあつめて、青年男女の仲を清潔にしなければと説くが、一方で女性を金銭で買うことを公許しては説得力がない。金銭で女性の節操をやぶるといような脅迫的行為を放置して、男女が愛し合いいわゆる不義をむすんだとて、前者よりはるかにゆるされる余地があるだろう。この軽重をかんがえない当局は、前後緩急を誤っているといわざるをえない。²⁴⁸

同会長の島田三郎は、「維新後の革政」として穢多の解放、拷問制度の廃絶とならぶ公娼制度の全廃を力説しており、幹事の益富政助は、「此罹災者を救へ」で、われわれが「醜業婦」と呼んでいるのは、現実には「罹災者」であり他動的にむごい運命におちいった者だのだと指摘し、貧困のため家族をたすけるため苦界にしずんだり、詐欺にかかったりしたのが実情なのだから、救済されてしかるべきであると語る。²⁴⁹また、「青年」を日本語訳した牧師の小崎²⁵⁰や幹事で「日本力行会」の島貫兵太夫からは、海外における日本人の「醜業」に関する報告——一般女性誘拐の手口や彼女たちの生活の惨状に関する——がおこなわれている。²⁵¹

一方、山室軍平は「廢業娼妓の身の上」で、「飛んでもない忠孝主義」の内実を明かしている。楼主は、折々僧を呼び娼妓に説法させるため、その解放は彼女たち自身の内面からはばまれることを指摘する。「娼妓になって親を助けるのは孝行である、沢山客を取つて楼主に儲けさせるのは忠義であるといふ様なことをさへ教へる由に聞及ぶ。忠孝もこゝまで濫用せらるゝに至つては真に沙汰の限りである」。²⁵²

ここで注視されるのは、「大隈伯爵談」と題された聞き書き「待合の大都市」である。大隈は、実際に実地経験をしなければ議論ができないという理由で、5、6件の高級待合を訪ねたというが、そこで「なに」を「どう」検分したのかは、一切語られていない。「如何なる文明國に於ても、又嚴肅なる社會に於ても、必ず一面に闇黒界の存在するもので、好んで個人の闇黒をめぐるのはよろしくないが、今日の如く、當局者が聲を大にして風紀問題を叫び、種々の手段を講じて取締りつつあるに關らず、社會は常に當局者の訓令と背馳しつつある、この奇異なる現象のもとには、必ず或他の原因の伏在してをる為であつて此場合に處して、我等は當局者若くば社會に刺激を與ふる必要を認むるのである」。他の論者に比して、論調もどこか他人事のように温度差がいちじるしく、公娼制度を真向から否定していると

²⁴⁸ 安部磯雄「公娼制度と社會の風儀」『廓清』第1巻第1号 廓清会（1911）pp.23-29

²⁴⁹ 益富政助「此罹災者を救へ」『廓清』第1巻第1号 廓清会（1911）pp.29-35

²⁵⁰ 小崎弘道「海外醜業婦の惨状」『廓清』第1巻第1号 廓清会（1911）pp.51-54

²⁵¹ 島貫兵太夫「米國と娼業と風紀」第1巻第1号 廓清会（1911）pp.54-57

²⁵² 山室軍平「廢業娼妓の身の上」『廓清』第2巻第1号 廓清会（1912）pp.10-11

はみとめられない。かくして、飛田遊郭設置を最終的に不許可としなかった大隈は、廓清顧問の任を解かれることとなる。²⁵³

公娼制度全廃の提言においては、公娼と私娼の差別化もあり、家庭の清浄をたもつことを一義とする既婚の同性論者からは娼妓への蔑視もみられ、²⁵⁴運動自体の限界はいなめない。だが、そもそも売春に従事する女性たちの諸問題に、一般人はおろか国政をおこなう者までが無関心か積極的にかかわることを避けた時代、当該の制度を奴隷制度と同等にとらえ得た男性がキリスト者を中心に存在し、彼らが当事者の性に属する女性と共闘した事実は公正に評価されねばならないだろう。

時代はさかのぼるが、1885年に『女学雑誌』を創刊した巖本善治は、誌上で英米の教会婦人組織を紹介しつつ、それにならう各種婦人会の設立を推奨し、1886年の万国婦人矯風会の遊説委員メアリー・レビット来日を契機とする日本キリスト教婦人矯風会設立の際には、みずから書記を務め事務所も女学雑誌社においた。同年に島田とともに明治女学校を開校した木村熊二、田口卯吉、そして巖本においても、田口以外はキリスト教の洗礼を受けている。

初期キリスト者の男性には旧士族がおおかったが、彼らは、前世代の明六社の官僚・学者とはことなり、知識人でありながら社会階層としては周縁的なキリスト教徒の立場から、より裾野のひろい社会改革を実践していく。経済資本はとぼしくとも、それに反し社会的逆境のなかで得た「信仰」は精神的な支柱であり、洋学や聖書を理解するための「漢文」の知識は、固有の文化資本であった。そしてキリスト教のもとの「平等」という原理において、女性をも取りこむことにより、旧来の士族の「縦」の関係とは異なる「横」のネットワークを確立していくのである。²⁵⁵

しかし天皇制確立期には、女性解放運動にかかわる紐帯が、理想と現実のあいだでそのありかたを問われた「日本の花嫁」事件のような事件も起きている。発端は、1893年に渡米した田村直臣が、同タイトルの本を出版したことにあつた。田村は、当時東京教寄屋橋教会の牧師であり、基督教青年会の創立や『六合雑誌』の創刊と編集などに、植村、小崎たちと協働してきた仲間である。本の内容は、日本における結婚は愛を媒介にするものではなく、家存続のためにおこなわれること、女性は、おさないころから男性に劣る者とおしえられており異性と人格的、精神的にむすばれることなどありえず、親によってととのえられた結婚により、父親の所有物から夫の所有物となること、絶対君主国の国民と同様に隷属を要求されるため、結婚後に夫が外で別な関係をむすんでも抗議はかなわず、笑顔で忍耐せねばならない、夫や姑への不服従は、離婚を意味し、逆に夫は意思通りに妻を離縁させられること、夫の死後も財産は長男にすべてゆずられ、老年になって隠居とよばれるようになるまで女

²⁵³ 大隈重信「待合の大都市」第1巻第3号（1911）pp.33-34

²⁵⁴ 井深花子は「娼妓の解放と相俟つき家庭の廓清」で、上流階級の男性と結婚した元娼妓のなかには貴婦人といっても「いかゞはしい、醜業婦上りの人」がすくなくないと語っている。『廓清』第2巻第11号（1912）廓清会 p.16

²⁵⁵ 岡田章子『女学雑誌と欧化』森話社（2013）pp.113-114

性にはやすらげるときがないこと等が述べられている。²⁵⁶

田村は、アメリカ留学から帰国の際には、ヨーロッパに立ち寄りパレスチナまでまわる大旅行をこころみた。帰国直後に、数寄屋橋教会の牧師に復職がきまり、教会堂も再建されて信者はふえていった。だが、平凡な日常にあまんじることのできない彼は、青少年と女性にかかわる問題に、キリスト教の立場から取りくむ道をえらぶ。ジョン・スチュアート・ミルに影響をうけた田村は、女性の権利への関心が留学前からたかかったが、帰国後には、彼と婚約した峰尾纒を自身同様にアメリカ留学させている。しかし、田村が日本を離れているあいだ、欧化の時期は過ぎさり、ナショナリズムが高揚していたのだった。²⁵⁷

同書に、最初反対の声をあげたのは、新聞『日本』、『万朝報』であり、その他全国 200 以上の新聞もこれに関する記事を掲載した。キリスト教界では、植村直久の『福音新報』が最初に批判を開始する。田村が書いているのは、日本の社会の中流以下の野卑な者たちのことで、日本の国の恥を外国に吹聴しているのはかなしむべきことだ、というのが基本的な主張であった。植村指導下にあり、のちに政治家となる青年会の代表・田川大吉郎は、仲間とともに田村を訪問し、批判的会見記を「福音新報」に載せている。

やがて、日本基督教会の大会が、田村を宗教裁判にかけることになり、1894 年、彼の教職を剥奪することが 14 対 20 で可決されたのだった。当該時の告訴委員長は、植村、巖本らと明治女学校を創設した井深梶之助で、成立したばかりの日本のプロテスタント教会にとって、伝道がひじょうに困難な時期にあり、日本国民の恥辱になることを軽佻な表現で外国にしらせ、よき習慣もあるのにあげない、と批判している。一方、バラ、フルベッキ、ワデルらの外国人宣教師は、大会の決定には承服できないとの意思を表明したのだった。

ささきの「貞操論」が、矯風会の機関誌『婦人新報』上で、懸賞論文 1 等に当選するのは、久布白の提唱により「婦人参政権運動」が目標にすえられる 1918 年のことであり、その内容には彼女自身が実際に身をおいた当時の環境が反映されている。²⁵⁸やや生硬な文章ながら、ささきは明快に論を展開する。

かつて家長制度における経済的弱者たる女性は、夫が多妻主義をとっていても、無条件に男性につかえ、ひとりの夫に貞操をささげねばならなかった。女性が男性の配下に盲目的にしたがっているあいだは、男性の貞不貞は問題にならなかったが、ひとたび女性が覚醒すると、男性はなるべく自己に都合のいいように、従順と貞節を基準にしたいいわゆる女らしい女を、みずからの手で養成した。貞操がゆるがせになる要因は、ふたつある。ひとつは、そもそも男女が質の差こそあれ価値に上下はなかったのを、進化のある段階で男性が「力」を得、女性を壓迫するのにもちいたため、女性が男性にとって精神的につりあいのとれた存在とみなされなくなり、霊化をともなうむすびつきにたどりつけなかったこと、他方は、家、地

²⁵⁶ Naomi Tamura ‘*The Japanese Bride*’ 『横濱バンドの女性観』 明治学院大学キリスト教研究所 (1997)

pp.33-76

²⁵⁷ 梅本順子『闘う牧師 田村直臣の挑戦』 大空社 (2010) pp.55-59

²⁵⁸ 2 等は西本量一 (慶応大学) 「男女の貞操」。

位、財産をまもるためのごとき、「誤まてる」結婚の存在である。かかる現実は、当事者の愛情の有無にかかわらず、周囲が離婚を強いることや、後継者を得るという理由のため男性の貞操が公然やぶられることをみとめた。

不合理な結婚を改良するために必要なのは、「家系本位」の誤った思想をしりぞけること。男子には職業教育以外に、人として紳士としての教養をあたえ、女性にはより高等な教育をあたえ真の半身をみいだすまで自活できるだけの職業をもたせる必要がある。離婚は、望ましいことではないながら、不合理な結婚の解決には必要である。ただしその場合、法律上、男女は平等であること。また世のなかに半身をみつけえない者に、結婚を強要すべきではないし、宗教、芸術、哲学に半身をみいだす者は、それが尊重されるべきなのである。²⁵⁹

前近代の形骸化した儒教道徳が、民の上下を問わず意識下に根をひろげ人権を押圧するなか、ささきが社会「構造」からジェンダーの問題を理路整然と説きえたのは、言と行が一致したキリスト教的実践によるといえる。矯風会と時期をおなじくして1911年には青鞥社が結成され、1913年には「大正政変」が起き、1917年にはロマノフ朝がたおれる。そして1918年米騒動の勃発と、一連の革命的胎動の線上にささきの「貞操論」も置かれよう。

廓清会趣意書にあるとおり、政治改革である維新の事業がおよばず、開化とはほどとおい状態であった婦人の人権を宗教の方面から改革しようところみた元士族たちは、旧くから持された矜持を、いわゆる立身出世とは別な方向であたらしく生かしえたといえる。数のうえでは劣勢でありながら、女性解放運動ひいては両性のよりよいありかたを模索する途は、先覚した男女の共闘なしでは展開しえなかつただろう。

日本近代に、ささきが養女となった地である横浜は、西洋文明を他の地にさきがけいちやく摂取しつつ発展の途にあった。個別な事情で、養女となった身に違和感をおぼえつつも、一方で港都に射しかけられる「光」をささきは享受し、己の「視」を強靱なものにしていく。そうして、10代はじめから身を置いた宗教的精神圏は、のちにかたちをかえながらも「書く」行為を継続していく彼女に、ゆるぎない文明論的視座をあたえたのである。

第4節 コンフォーミティ・夫婦・虚無

一つの夢想——それに凡てを賭すことの出来る一つの夢想にかちりついて居られる人が、私は羨ましくてならない。夢想があればこそ生きて居られる世の中なのかも

²⁵⁹ 大橋房子「貞操論」『愛の純一性』アルス（1922）pp.187-206

知れない。とすると夢想さへ持ち得なくなつた私自身にとって、生きてゐることのたまらないのも至當といふべきだらう。

ささきふさ「行乳薬求死」(1927) 260

(1) 万国婦人参政権大会と関東大震災

ささきは、書くことにおいて種々の問題を精力的に論じたが、ウィラードのごとく集団の先頭に立って発言し、みちびいていくタイプではないことを自覚していた。それゆえ、矯風会の基をつくったウィラードの活動に理想をみいだしながらも、眼前の現実とそれとの懸隔が意識されるにつれ、内面的停滞が引きおこされていく。「行く所まで——ある會での感想——」(1921)でささきは吐露する。「私は、聲はやかましくなつても、いつかうにはかどらうとしない日本の婦人解放運動をはがゆく思つた。それと同時に、その運動の當面に出る勇気もなく、又先覚者と名乗り出るほどの力も資格も自覚もない自分を恥ぢもした」。²⁶¹

だが、そうもらす彼女が、はからずも世界の婦人解放運動とじかに接する機会がめぐってくる。1923年3月、ささきは『読売新聞』、『改造』、『婦人公論』の後援により、ローマでひらかれた第9回万国婦人参政権大会に非公式ながら唯一の日本人女性として出席し、本国へレポートを書き送ることとなった。南欧の古都では、日本人がめずらしいのと前日の夜会で注目をあびたことから、あくまでも「私人」として見学にきたのだとことわったにもかかわらず、代員席があたえられる。だが、年長のフェミニストたちにかこまれ「ここかしこから好奇と好感にみちた」、「母らしい」微笑をなげかけられるほどに、彼女には「毛色の変つた自分の存在」が「みょうにはかなまれ」るのだった。開会式に先だちいくつかの研究會がおこなわれ、「結婚と戸籍の問題にかなり懐疑的な眼を注いでいる」ささきは、国籍問題研究會に参加する。問題解決のためには「国際法の新設によるほかはない」という方向で、議論は円滑に進行した。

しかし、すでに女性に参政権をあたえた国はもとより「得るべくしてまだ得ていない」フランス、イタリアからルーマニア、「シャムのごとき小国まで」政府の選定した代表者をこの大会に送っているのに、「極東の日本ばかり」はひとりの正式な代表をも送っていない。そこでささきは書く。日本は、文化、教育面で、全体的にフランスやイタリアより下位にあるとは思えない。しかし、「婦人の学識、教養殊に組織的、団体的活動や純理性の配下にある法律及び政治の理解力に於いて」は数歩おくれしていることを痛感せしめられた、と。それゆえ、体調不良で発熱していたにもかかわらず、壇上で各国の代表者とならび挨拶することを乞われると、彼女は即刻承諾するのだった。その後、代表たちがベニト・ムッソリーニと握手するとき、議長の「マクミラン女史」がささきを紹介すると、「年中しかめつらばかり

²⁶⁰ ささきふさ「行乳薬求死」『不同調』不同調社(1927) p.30

²⁶¹ 大橋房子「行く所まで——ある會での感想——」『愛の純一性』アルス(1922) pp.117-118

してゐると思つてゐた怪相」も「搦つたさうな微笑をもらし」たという。

矯風会にとって、女性参政権の獲得は最優先事項としてかんがえられていたが、世界のデモクラシーの大勢をまのあたりにした彼女は、以前の見解に修正を加える。あせって権利を獲得しさえすればよいのではなく、日本人女性も、欧米人女性のように「どこまでも透徹した理性の力で組織的に段階的に」「一步一步建設していく」ことが必要ではないか、と。それまでささきは、自身をコスモポリタンであり、ボヘミアンであるとさえ思っていたが、壇上で「母国のでない言葉を放ちながら」はじめてはっきりと、自分は日本人であると実感するのだった。最後のレポートは、「1923年6月6日、巴里の屋根裏にて」と記されており、イタリアを後にした彼女はフランスに滞在することとなる。²⁶²

パリでの7か月間は、生の芸術に接する一方外国人と交流する日々であり、ささきは多数の知己を得た。スウェーデン舞踊で人気を博していたジャン・ポーランの自宅を訪問しながら、後日には彼の舞踊団で作曲家兼振付をしていたアンゲルブレックが、ポーランに寵愛されていたダンサー、カリナ・アリと暮らす隠れ家——ふたりは失業していた——を、そうと知らずにおとずれたり、名優と評判のたかいスザンヌ・デプレの楽屋にまでいき、ことばを交わしたりしている。そのときのデプレは、私生活と「芝居」の世界がかさなるような「三角関係」にあり、舞台をおいた彼女は「至極面相のよくない」「づんぐりした」たたずまいであったが、演技は「渋いながら直接心情に迫る底深い力を持って」いた。終幕で、「嫉妬から双手をなくし夫の愛をもうしなってしまうスイルヴィア」に、ささきは涙をおさえられず、デプレの「人」と「芸」に愛情と尊敬の念をいだいたという。²⁶³フランスでの見聞は、自身がもと親和していたより禁欲的なプロテスタント世界とことなる文化の内で、ささきを魅したことがうかがえる。

フランス滞在の期限はあらかじめ決められていなかったが、関東大震災が起こったことにより、ささきは予定を変更し帰国する。震災は昼に起こったため、横浜でも各所で火事が発生し、市内は甚大な被害を受けていた。読売新聞に掲載された「旅装のままで 横濱本牧にて」は、帰国後まもない談話である。国内の状況をおもんばかつてか、語りのなかでパリでの見聞は半分くらいにとどめられており、変化のおおい1年だったことを振りかえりながら、最後はつぎのようにむすばれる。「巴里で初めて震災の電文を目にした時、咄嗟に浮んだ考へが、いろいろのものを見るにつけ、聞くにつけ、又私の胸を襲うて来ます。が、幸か不幸か、その当時の辛酸をよそに生き残つたからには何とかして此の生を悔いないものに生きたいと張りつめた心に考へて居ります」。²⁶⁴

万国婦人参政権大会への出席と関東大震災の発生は、偶然にも時期をあけずして起こったが、ふたつのできごとは、ささきに自身が「日本人」たることをかさねて意識させたようである。前者では、みずからキリスト教の気圏にあり西洋「文明」から積極的にまなんでも、

²⁶² 大橋房子「第9回万国婦人参政権大会に臨みて」大阪朝日新聞夕刊1923年7月17-21日

²⁶³ 大橋房子「巴里で遇つた舞踏家・女優・其他」『女性改造』(1924) pp.102-110

²⁶⁴ 大橋房子「旅装のままで 横濱本牧にて」『読売新聞』1924年3月16日

それを日本の現実に「具体的」にどう反映させるかを認識していなかった態度がつよく反省されたと思像される。後者では、あらためて日本社会のなかで、いかに行動するかというそれ以降の生の可能性が問われたのではないだろうか。いったんはくじかれた自信と、災害後の周囲につよくはたらく求心的コンフォーミティは、ささきをして「文化」のほうにひきつけたかもしれない。

帰国の翌年、『婦人公論』の特集「断髪婦人の感想」に、ささきは「舊きを懐かしむ」を寄稿する。渡欧前、「これという特別の理由もなしに」手早く髪を切り服をあらためた「彼女」は、取りつきやすい西欧文化のはしりを摘むことを覚えた。そうして文学、音楽、生活様式等すべて日本よりも西欧のそれになじんでいたのだが、日本を一步出たとき、「はしり」とはまったく相反した好みに「はっきりとめざめる」。すなわち、イタリアでは、未来派や文芸復興の「餘薫」でなく歴史をさかのぼった古羅馬時代の遺跡を、フランスでは「米国仕込み」の新式設備やいたずらにまばゆい「シャンデリエール」の暈を着た近代的一面でなく、「蠟燭の火影やもえさしの丸木」などひなびたラテン民族の生活のニュアンスに、こころをひかれたという。

そして外遊後、彼女は「好事」でない「敬虔な愛心」から日本の粹をたずねるのに骨惜しみをしなくなった。だが「例の断髪洋装」で「助六」を觀にいき、「仲良しの妓」と幕間にお茶を飲んでいるとき、どんな「眼の包圍」を受けねばならなかつたらうか？ ここには、白眼視を送る者の側に立ち、彼女をみる彼女自身が存在する。のみならず、彼女は「物見高い」ゆきずりの人間と彼女らのあいだに湧く「一種妙な」気もちをも瞬時に理解できてしまい、こころにもなく「僻んで」別世界に退場したい気持ちになるのだという。

とにかく舊きを懐かしむ情の切なるにつけ、肝心な鑑札を落して来てしまつたやうな気持ちになる——最近短い髪が私に與える意識は、まアそいつたものです。心から愛してゐるものと此の髪故に何處か相容れない——片戀をするものの物足りなさとはこんなものでありますかしら？……²⁶⁵

断髪・洋装のような「あたらしもの好き」の人間が古典を鑑賞する珍奇さが、第三者の眼を借りて意図的にクローズアップされているが、ささきの側に単純な被害者意識はなく、むしろ状況に興じてさえいるようすがつたわる。「彼女」は、あたらしい文化の表層をそぎおとしたところに「おなじくみえてくる」舊き「生活」に、おのずと敬意をはらうのだ。そこには、コンフォーミティに正面から反旗をひるがえすことないながら、普遍的な知の総体を尊重しうる理性的なまなざしがはたらいている。

(2) 馬脚

²⁶⁵ 大橋房子「舊きを懐かしむ」『婦人公論』婦人公論社（1925）p.184

1925年3月、大橋房子は佐佐木茂索と結婚したのち、「ささきふさ」のペンネームをもちいはじめる。独身時代のささきには、結婚への懐疑があったが、この時期それを決意したのには、前述したふたつのできごとが関係していると想像される。日本のなかでいかに生きていくかという問題に対峙したのち、異性のパートナーとともに在ること、「規範」とされる生の一形態を理論のみにより否定するのではなく、実体験することが選択肢に加えられたのではないだろうか。

当時のささきが結婚において重視したのは、家系や体面本意でないという「条件」であり、恋愛を経てのむすびつきは自然な選択だった。当時帝国大学の仏文科に在籍した高橋邦太郎は、結婚のすこしまえ、フランス語を勉強しなおしたいと希望するふたりに、新潮社ちかくの佐佐木が住んでいた洋館でレッスンを半年ほどおこなったと回想している。²⁶⁶

彼女は「貞操論」で、女性が贈与されるような形態に異議をとнаえていたが、他方で、結婚という「機会」に上昇志向をいさぐよな姿勢にも反発した。結婚の翌年『映画時代』に寄稿した「ことよせて」には、当時の彼女の結婚観がかいまみえる。前年に公開されたクララ・ボウ主演「It」を、観客がクララの「デリシアスな表情に」陶然となるような「快味」はあっても、「そばから一つの影を落すもの」があり、それはストーリーの底をながれている「玉の輿」思想なのだと断じている。

it が身上で、玉の輿に乗せられることになる、——それだけならそれでいい。だが it だけを身上に玉の輿に乗らうとする——女にあるその意識が、潔癖な私とは相容れないのである。it は unconscious of なものでなければならない、と作者はタイトルの中でいつてゐる。が同時に作者は作中の女主人公に、店主の妻にならうとする野心を與へてゐる。而も一賣娘^{うりこ}のその野心の根據となるものは、彼女自身の魅力、——彼女自身に在ると意識してゐる魅力以外の何物でもない。²⁶⁷

結婚に「成りあがる」行為をみいだし、他のあらゆる成りあがりの行為とともに排せずにいられない態度には、前述した長兄のように立身出世的な価値観を有する世代とのことなりが明確にみとめられる。

彼女のパートナーとなる佐佐木茂索は、1894年、京都、西陣の種油製造業の家に誕生。父親の代に家業がかたむき、朝鮮の仁川に住む叔父に引きとられ、高等小学校を卒業すると当地の英国系銀行で16歳から21歳ごろまではたらいだ。その後、久米正雄との文通が縁で、日本へ帰国し新潮社に入社し、のちに中央美術へ移る。編集業のかたわら書いた「おぢいさんとおばあさんの話」が、芥川龍之介の推薦で『新小説』に掲載されるが、ほどなくスランプにおちいり、芥川に相談をするも当の芥川自身が創作にいきづまっていた。彼が佐佐木を評価した理由は、佐佐木に自身にはないあたらしさやオリジナリティをみとめたわけ

²⁶⁶ 大屋典一「ささきふさ年譜」『ささきふさ作品集』中央公論社（1956）pp.146-147

²⁶⁷ ささきふさ「ことよせて」『映画時代』（1928）文藝春秋社 p.23

ではなく、自作との相似——それがよりちいさくまとまっている——に困っていたとかんがえられる。佐佐木は、1929年、文芸春秋社に入社したのち作家を廃業し、編集に専念することとなる。²⁶⁸

弟子格をおおくもちながら佐佐木をとくに懇意に遇した芥川は、結婚式の媒酌人を引きうけたが、ふたりが報告にいったときには結婚に難色を示したという。1927年9月発行『婦人公論』の特集「女から観た芥川さん」に、ささきが寄稿した「返さなかつた五十銭」には、その経緯が語られている。芥川は、佐佐木に「作家生活のためには、ふささんとは今までのように結婚しないでおいたほうがよかったね」とあっさりいった。その一方で、結婚までの段取りを親切にすすめてくれるが、ふと彼女に「馬の脚」は読んだか? ときく。

「あれを読むと結婚なんか——」

「その通りです。」²⁶⁹

ささきはことばにつまりながら、あらためて「澄江堂」が結婚した人であり、また自身とおなじく「もらわれてきた」人であることをかんがえた。「私は鬱屈の底でその針を想ひ、そのだめを苦く嚙んでゐた」。²⁷⁰

死の前月、芥川は2年ぶりでふたりの住居をおとずれる。ささきは、家庭内の問題で「ひどく泣いた」あとだったので、彼に顔をみられるのがたまらないと感じていた。帰り際に、芥川は、ふと彼女の脚に焼きつくような眼をそそぐ。不安で薄気味悪く感じられたが、彼の死後にささきは、その行為の意味に気づくのだった。

「馬の脚」は、1925年『新潮』に掲載された作品である。芥川自身は、小説ではなく「大人に読ませるお伽噺である」とことわっているが、出典は『聊齋志異』の巻一「王蘭」の転生譚とみられている。北京の商社ではたらく平凡な男が、媒酌結婚した平凡な妻とありふれた生活を送っていたが、ある日あっけなく脳溢血で頓死する。その後、幽霊がみえる病院の「支那人」が、馬の脚を接いで彼を蘇生させる。彼は、身体にたかる蚤や異臭になやまされながらもしごとと家庭生活をつづけるが、黄塵の舞ったある日、いななきのような叫びをのこしそのなかへきえてしまう。順天時報の社説には「わが国体は家族主義の上に立つものなり。家族主義の上に立つものとせば、一家の主人たる責任のいかに重大なるかは問うを待たず。一家の主人の妄にして発狂する権利ありや否や? 吾人はかかる疑問の前に断固として否と答うるものなり」と書かれていた。

「馬の脚」は、古典に題材をとった数多の作品に類似するものであり、「家」の重圧の部分にはアレンジが加わっているが、作品自体としてのオリジナリティはうすい。もともと芥川の作品には同様な傾向があるが、ここでは、語り手がとくに冗舌であり、銜気を露呈させ

²⁶⁸ 松本清張『形影 菊池寛と佐佐木茂索』文芸春秋社（1982）pp.87-118

²⁶⁹ ささきふさ「返さなかつた五十銭」『婦人公論』第12巻第9号 婦人公論社（1927）p.239

²⁷⁰ 芥川は、生年に母が精神疾患におちいり、母の実家の芥川家にあずけられ伯母に養育される。母の死後は、叔父の養子になった。

ている。芥川が、「大人に読ませるお伽噺」といいながら作品への注視をうながしているのは、そこに死の理由を託す意図がはたらいているためではないかと推測される。

廣津は「ささき・ふさ小論」で、ささきには、芥川のような「東京生まれのインテリの敗北感」があると評している。²⁷¹宮本顕治「敗北の文学」からの借用だが、芥川が東京生まれの東京そだちであり、故郷の喪失感を自身で述懐しているのに対し、ささきは、東京でうまれながらも幼少時に横浜へ移り、結婚後は鎌倉、戦時中は伊東でも生活しており、ひとつの場への帰属感はみうけられない。震災後に、「日本人」である自身を意識したとはいえ、ささきには芥川がそのとき喚起されたような「江戸っ子」意識——帝都・日本の中心・愛国と、原理主義につらなっていくような——もみあたらない。なにより芥川の自殺の理由には、深刻な創作のいきづまりがあったが、ささきは、生涯を通じ健康上の理由以外で書けなくなるという事態を経験しなかった。

文筆のみで生きていきたいとねがった芥川は、早い時期に自身の才能をうたがいはじめながら、菊池寛に用意された文壇の場では、大作家たるポーズを取ることもこぼまず、そこでの地位を築いていった。折からの出版ブームにはささえられたが、外側からの評価につねにおびやかされ、芸術への理想と眼前の現実のあいだで疲弊していったのだった。²⁷²

たとえば『戯作三昧』には、彼が当時置かれた状況の反映がみとめられる。主人公・馬琴は、公衆浴場で、自身の読本が「古典の焼き直し」と悪口をたたかれているのを聞きつける。その読者は、作者が同所にいることに気づかず、ことこまかに欠点をあげつらう。一方で、編集者は、早く書けない馬琴のペースにかまわず仕事を入れようとし、ほかの作家は「健筆」だとあてつけるようにいう。それが自身の無能を証するようでさびしくもありながら、彼には、芸術的良心を計る物差しとして「遅筆」を尊びたい気持ちがある。馬琴は、自身の創作が「先王の道」の芸術的表現であることをうたがわない。そして最後は、孫による「浅草の観音様がやけにならず」精進するようにといったということばが、老戯作者を勇気づけて終わる。

ここで、澁んだ世俗の声と無垢なこどもの口を借りた聖なるものの語りは対立させられ、後者に「芸術」の采配はあげられる。芥川は馬琴でないが、作者は馬琴のありかたを芸術の「正典」に置くことで、みずからの芸術をも直截同列に置こうとこころみる。そこに対話は存在せず、終局、作品は「お話」——まったき「物語」に閉じられてしまう。

たがいの境遇が似ていることを話し合った形跡はないが、「澄江堂」は、結婚後のささきに、弟子格の佐佐木に対してよりもこまやかに接してくれ、彼女は感謝の念をいだいていた。しかし、ひとりの天才が「傑作」をうみだすというような旧来の芸術観は、ささきの世代には自明のものとして信じられなくなっていた。それゆえ、職業作家をひたすらめざし勝ち抜いていくことなどには価値をみいださず、かかる価値観を排しつつ文壇周辺に

²⁷¹ 廣津和郎「さき・ふさ小論」『ささきふさ作品集』中央公論社（1956）pp.338-339

²⁷² 篠崎美生子「モダニズム——『大きな物語』は解体されたか」『国文学解釈と鑑賞別冊』学灯社（2004）p.168

在ったささきには、彼の立ち位置も才能の限界もよくみえていたと考えられる。

芥川の死は、事後夫婦にそれぞれ質のことなる衝撃をあたえる。佐佐木は、それが呪縛のようになりいっそう書けなくなっていくが、ささきのほうは、精神的な衝撃を受けながらも、そこにいったん沈潜することで覚醒した「視」をさらにとぎすましていく。ささきは、以後も掌編を中心に多数の作品を発表しつづけ、1930年から翌31年にかけて創作のピークをむかえる。

(3) 「行乳薬求死」

十年前の私はイエスと共に、神の國の夢想を持つてゐた。がその夢想の——その夢想に限らず夢想といふものの凡てが破れた今は——今はイエスも内心神の國を信じてゐたわけではあるまいとさへ考へられてくるのである。

ささきふさ「行乳薬求死」(1927) 273

「返さなかつた五十銭」でしづかに芥川の死を悼んだささきは、同年末、一見随筆のようでジャンルの境界上にあるともみなされる「行乳薬求死」を発表する。「はじめに」で述べた通り、文章の長さや置かれたスペースから、従前ささきの掌編は雑誌の埋め草のごとくみなされ、それ自体言及をされてこなかった。しかし、先にかかげた「行乳薬求死」には、当該の時期に存在した貴重な形式がみとめられる。

「行乳薬求死」で語られる10年まえの1917年は、ささきが青山学院に入学して2年目で、キリスト教女子青年として日々を送りつつ、書く行為に就こうとするころにあたる。ささきは、それより早い時期からキリスト教との関係で、文学の世界の人間ともつながりを得ていた。「初秋の高原」に実名で登場する正宗白鳥や有島武郎はクリスチャンであったが、正宗はのちに棄教をし、有島は小説の舞台となった軽井沢で波多野秋子と心中する。波多野は、結婚後に進学した青山学院英文科をささきより1年早く卒業し、『婦人公論』の編集者をしていった。

両親の晩年のこどもであったささきは、20歳ほど年のはなれた有島とは「パパ」「ベビ」と呼びあう仲で、彼はよく手紙を送ってくれたという。それを裏づけるかのように、小説には、主人公と彼が「思ひきつた手紙のいたづら」をする場面がえがかれている。

「——Dear Miss Baby 赤坂見近くで又お前の姿を見かけた。大變沈んで、元気がない顔をしてゐたが、何處か悪いんぢやないか。あんまり過激な勉強をしてはいけない。よく食べて元気におなり。影弁慶より」そんな英文のお手紙が、此の三月横濱

273 ささきふさ「行乳薬求死」『不同調』不同調社(1927) p.30

で寝ついてみた時の倦怠を破った。²⁷⁴

このときから約 10 年後の 1929 年、ささきは有島武郎全集の月報で、生前の有島が彼女に「素の身上」を伸ばすようにとアドバイスしてくれたことを回想する。1923 年、関東大震災が起こる 3 か月まえの有島の死の報を、ささきはパリで受けとったであろう。直後に彼女がなにをかんがえたかは明かされていないが、時間を経たためか文章はおだやかであり、感謝といつくしみのことばにみちている。「私は亡き氏のその身上に接する為、御生前には殆んど読まなかつた氏の作品が、有島武郎集となつて世に出るのを、ひとへに待ちこがれてゐる」。²⁷⁵

その後も、キリスト教の信仰を試されるかのように、彼女の周囲では男性たちの自死がつづくのだが、ささきの結婚後には芥川よりも早く身近な人間の死があった。結婚の年に書かれた「人間以外」(1925)には、養家からの転出と、その背後の複雑な事情が示唆されている。ささきが去った直後、小犬がもらわれてきたことを彼女は他所で知らされた。「養父母と、女中達に抱かれたその小犬との寫眞を見て、思はず涙ぐまされた。ふとした行違ひから私は今義父母と、行來のまゝならぬはめにある」。²⁷⁶

芥川の死の 2 か月まえにあたる 1926 年 5 月、『文藝時代』に「一服」掲載されている。結婚の翌年、健康を害した彼女のために夫婦は鎌倉へ移るが、病床の夢に養父があらわれたという内容である。彼は、本牧の海に突きでたふかい山にある 1 本の古木——変事のあとすぐにきられたという——をゆびさす。夢からさめたのち「私」は、思わず敷島に手をのべした。「だが、気付けに喫した敷島の煙りの中には、意外な死人の匂ひがあつた。いや、それは茶毘所の匂ひかもしれなかつた」。²⁷⁷

一読しただけでは、これも創作なのではないかとうたがわれるが、「返さなかつた五十銭」も、注意して読めばむすびの会話には含意が感じられる。「人あたりのいい人は皆神経衰弱で死ぬね。澄江堂にしても、大橋清蔵さんにしても。」「するとさしあたり君なんかなかなか死ねないことになるわね」。²⁷⁸

また 1930 年、『新潮』に発表された短編「あれも私」には、冒頭に横浜の中華街らしき場所における故人追悼の会がえがかれている。青年牧師の演説中「私」の夫は、それを中断させるべく、いきなり席を蹴ってさげふ。罵声は四つの円卓にひびきわたったにもかかわらず、一同はなにもきこえなかつたかのように、ほがらかに故人の思い出を語り合う。はっきり記されてはいないが、この席では、夫だけがキリスト教信者でないことがほのめかされる。

——馬鹿、馬鹿、馬鹿野郎。

²⁷⁴ 大橋房「初秋の高原」『断髪』警醒社書店(1921) p.332

²⁷⁵ ささきふさ「素の身上」『有島武郎全集』月報第一号 右文書院(1995) pp.196-197

²⁷⁶ ささきふさ「人間以外」『不同調』不同調社(1925) p.59

²⁷⁷ ささきふさ「一服」『不同調』文藝時代(1927) p.42

²⁷⁸ ささきふさ「返さなかつた五十銭」『婦人公論』第 12 卷第 9 号 婦人公論社(1927) p.243

それでよかつたのだ。だがよかつたと思ふ私は、彼になつて彼の気持を追ふ私だつた。此場の私は養母の身になつて養母の気持を追ふ私でもなければならなかつた。私は養母の立場に立つて、来會者一同の思はくをまで氣遣つた。お嬢さんは先生や奥さんを棄ててあの男の所に嫁つた。あの男は先生のお寫眞の前で、馬鹿野郎と席を蹴つた。先生を自決に導いたのはお譲さんとあの男だつたのではなかつたか。——(中略)

が養母は櫻木町方面へ引きあげる一團にさよならをすますと、「あなたも御一緒に歸つたら？」と無理のない冷さで私を促した。それから凡てを押さへきつた笑顔になつて、「風邪をひかないやうにね。」といつた。²⁷⁹

帰宅後、風邪でふせっている夫をいたわりながら、非礼を養母に詫びてくれともいえない「私」は、突然の父の訃報に縁者から縁者へと「走る電話の綾」を目にうかべている。

そして、決定的に養父の死が語られるのは、前述の「明日の空漠」(1936)においてである。場面は墓地で、「私」は親族と墓参りをしており、ふたりの「父」が立てつづけに亡くなったこと、明日は養父の11回忌であることが告げられる。長寿をまっとうして「ぼくりと死んだ」実父には、「時どきいとしさがこみ上げる」だけだが、「養父の遺影は、いつも疑問の黒點に遮られてゐる」。自殺の真因は？ と問いかえせば、いまでも慄然と鳥肌立つ氣持ちなのだ、と彼女は書く。

「行乳葉求死」を發表したとき、ささきの脳裡にあつたのは震災から自身の結婚前後にかけての自殺者の群れ、なかでもそこには登場しない養父と、そこで言及される芥川の死までのつらなりではないかと想像される。結婚を決してすすめなかつた「澄江堂」は、しかし結婚後も、夫よりは妻のほうに「こまやかなあたたかさ」で接してくれていた。恋愛期間中はみせなくてもすむ馬の脚が、ながく一緒に生活することで、かくしようがなくなる。彼の最後の凝視は、そのメッセージであり、神経衰弱であっても正気をたもっているがゆえの「演技」が示されていたのであつた。彼女の脚にそそがれた「焼きつくような」視線には、死の計画の途上にある彼の生への執着が露呈しており、おそらくそれが戦慄をおぼえさせたのではないだろうか。

その二重性に気づいた彼女は、翌年の「ことよせて」で、映画にことよせはつきりと語る。

人間生きてゐる以上は何らかのアフエクテーションなしには居らない。藝術のいかなるブランチをたづねてみても、アフエクテーションは到る所に在る。アフエクテーションも藝術であるうちは——それに眞實味の感ぜられる間は、決して悪いものではない。生きる上に於いても——芥川龍之介の死にも、或アフエクテーションがなかつたとはいへない。だが、それは幾分の皮肉味と共に、妙に我々の心にアピールするところさへある。²⁸⁰

²⁷⁹ ささきふさ「あれも私」『新潮』第27巻第11号 新潮社(1930) p.25

²⁸⁰ ささきふさ「ことよせて」『映画時代』(1928) 文藝春秋社 p.23

ささきは、ここでは「澄江堂」ではなく「芥川龍之介」と呼んでいるが、同業者同士であるいはその他にも、芥川のアフェクテーションの内実をみぬいた人間が、同時代的にまたその後どれほど存在したかとかんがえるとき、ささきの観察眼のするどさは特筆される。

「馬脚」に関するやりとりを芥川と交わしてから5か月後、ささきは、「行乳薬求死」で故人に応える。タイトルとなったこの語も、「馬脚」とおなじく『聊齋志異』から引かれたものである。小説、散文詩、随筆のどれにもあてはまるようであり、ジャンル分けの不可能な作品であるが、それぞれの項は、独立し——基本的にべつな内容で文体もことなり——ながら、一連の「組み写真」のように成っている。また、文章のスピードは後半にいくにつれあがっていき、最後は達筆の跡をひきながらフェイドアウトしていくようである。

若年の彼はその時光栄の絶頂に在った。同時に貧乏のどん底にあつた。²⁸¹

だが、彼は巨額の小切手をさしだされても、芸術的墮落を拒絶してサインしなかったのである。

彼は中年に於いて一つの戀愛を得た。戀愛と同時に又一个の夢想を得た彼はその夢想を實現しよう為、彼の戀愛の歩みを敢へて遅遅たらしめた。²⁸²

だが、夢想にこだわるうちに、彼は恋愛をうしなう。

壮年の彼は今スクリーンの前でバトンを振つてゐる。²⁸³

彼の夢想はいまだに實現せられず、しかしいつかはちかい将来、いや明日にも土地と建立の費用さえできたらたちどころに地盤をかためるだろう。その翌日大地震でくつがえされるかもしれない、この土をかためて。

一つの夢想——それに凡てを賭すことの出来る一つの夢にかかりついて居られる人が、私は羨ましくてならない。夢想があればこそ生きて居られる世の中なのかもしれない。とすると夢想さへ持ち得なくなつた私自身にとって、生きてゐることのたまらないのも至當といふべきだらう。(中略)

滅びる。滅びる 凡て滅びる。滅びよ。滅びよ。凡て滅びよ。私の壽命がどれだけあるにしても——明日死ぬ壽命であるにしても、私には生きてゐるのが永すぎてなら

²⁸¹ ささきふさ「行乳薬求死」『不同調』不同調社（1927）p.30

²⁸² ささきふさ「行乳薬求死」『不同調』不同調社（1927）p.30

²⁸³ ささきふさ「行乳薬求死」『不同調』不同調社（1927）p.30

ないのだ。284

「私」は、人間は生れなかつたらいちばんよかつた、それに次ぐいちばんよいことはできるだけはやく死ぬことだ、と語るアナトール・フランスの長寿を想い、戦慄する。そして後半、文章は突然文語調にきりかわる。

頃日「聊齋志異」を繙くに、「行乳薬求死」の一句あり。譯して曰く「ソレハダメ
デスヨ。」人生何事も行乳薬求死には候はずや。生活又生活、生活の為に勞して報いら
るところのものは、痛き Box on the ear のみ。やぶれかぶれの一文を草して僅かに
鬱憤に散ぜしも束の間、生活又生活、その生活も詮ずるところ、行乳薬求死にはかな
らず。想ひて茲に到れば——

T君の誘ふまま、景色すでに濃き幾哩をY港へ、P洞に遊びて久しぶりにスピリツ
トの味をしめ申候。わがスピリツトも衰へし故にや、火酒ならぬ花酒にさへえたへで、
昏倒數刻。(略)

さればとて、醒めて想へば酒も亦畢竟するに行乳薬求死の例にもれず。醒めざる酒
こそは——これはまた眞に行乳薬求死に候哉。285

ささきの虚無のきわまりは、文の「内容」よりも、その「スピード」により看取される。
三分割された最後の部分では、自動筆記のようにして、猛スピードで書いた痕跡——推敲を
経ない——がみとめられる。それは、なかば彼女の無意識がそうさせたのだともいえるが、
たとえば自動筆記において半睡状態でスピードをあげていく書き方は非常に危険で、くり
返していくと狂気に近づくという。その後、「私はかんがえている」のではなく、「私にかんが
えられている」、「だれかが私をかんがえている」という状態に支配され、ほどなく死への欲
求に接続されるとみなされている。286

自動筆記にかかわるシュールレアリズムの運動も、芸術としての運動があらかじめ存在
したのではなく、第一次世界大戦の衝撃が契機となっていた。社会のなかでのそれまでの価
値観がくずれさるとき、書くという行為も自明のものではなくなっていく。空間や個別の状
況をたがえながらも、世界全体がつぎの戦争の萌芽をはらんでいた時期、同時代的な精神が、
自動筆記に熱中した1896年生まれのアンドレ・ブルトンと、無意識に同様な行為に没入し
た1897年生まれのささきに共有されていた事実が指摘される。

第5節 「ただみる」という行為

(1) 窃視／傍観者

284 ささきふさ「行乳薬求死」『不同調』不同調社(1927) pp.30-31

285 ささきふさ「行乳薬求死」『不同調』不同調社(1927) p.31

286 巖谷國士『シュールレアリスムとは何か』筑摩書房(2016) pp.36-46

「はじめに」で書いたように、菅野は『憂鬱の文学史』の「“軽いノリ”と新興芸術派」の項において、ささきふさの「ただ見る」を取りあげている。

ここには、女性の解放、女権の拡張など先進的な思想に関心をもち、モダンな娯楽の粋たるダンスを趣味とする女性作家が、語り手として登場する。そのほかの登場人物はダンス好きのモボ、モガたち。小説の舞台はあるブルジョワの邸でのパーティーや、流行の先端をゆくダンスホール・フロリダである。(略)そして、モダンな消費と享楽を生き甲斐とする、若い男女の演じるあわたたしくも空虚な都市生活の断面が綴られてゆく。²⁸⁷

作品紹介として、まず奇妙なのは、ここに複数の誤情報が書き入れられていることだ。なぜなら「私」が「女性の解放、女権の拡張など先進的な思想」に関心をもっているということ、ダンスを趣味とすること、女性作家であるということは、小説中にひとつも書かれていないからである。「私」がつきあう人間たちの階級や彼女自身が身につけているものからは、彼女が裕福であるらしいとは想像できるが、職業については不明で、ダンスに関してはさそわれても踊ることは決してない。

さらに、作中の主たる人物は「若い男女」たちではない。彼らは、壮年にさしかかった者たちであり、享楽を能動的に消費するというよりは、すでに享楽に倦んでいる態である。湯浴みをする「私」を知人宅でのダンスパーティーにさそいにきたのは、学生時代からの友人で既婚者の麻子と、夫ではない彼女のパートナー・道家であった。

「しかし僕は絶対に躍りませんよ。」

「私だって、——」

「此お嬢さんのいうことは、あてにならないからな。しかし僕は、——どうです。踊らぬ仲間にお出かけになりませんか。」

「ウォール・フラワーになりね。」

「誰も貴女をウォール・フラワーだとは思いませんよ。」

「もうフラワーでもありませんものね。」

「どうや。——」²⁸⁸

彼から「お嬢さん」とよばれる麻子には、夫と似つかない容貌の深刻な顔つきをしたおさない娘がいる。ここでは、淡々と社交辞令をしりぞける「私」の態度が注視される。

会場の鎌倉邸では「粋な」ジャズが演奏されており、私たちは白手袋の下僕にみちびかれ、

²⁸⁷ 菅野昭正『憂鬱の文学史』新潮社（2009）p.28

²⁸⁸ ささきふさ「ただ見る」『モダン都市文学Ⅰ モダン東京案内』平凡社（1993）pp.127-128

まぶしい舞踏室にたどりつく。「が集まった男女は決して夢の中の男女ではなかった。もう短すぎるスカート、音楽をこなしきれぬ脚、土の着いた靴底、——フィリッピン等の六白の目には、無遠慮な軽侮の嗤いが浮んでいる。“Thats you Baby!” だが踊る男女は踊る事其事に夢中だ」。

また他日、「私」が知人たちと出かけたときに、メンバーのひとり・久我の主張で一行はダンスに向かうが、ホールではなくK倶楽部をのぞきに行くことで一致する。「何式というのか、とにかく統一のとれた建築の内部は、やはり整然とした感じだった三階の舞踏室では老年に近い壮年の紳士達が、此処でだけはさも自信がなさそうに、インストラクターに曳きずられて歩き廻っている」。

「あれは今度函館から出た、——」

「H君は政友会だろう。」

「政友会も民政党も此処では、——」

「ダンスはインター・ナショナル、——インター・パーティーかな。」²⁸⁹

もし「私」が、あらかじめ「女性の解放、女権の拡張など先進的な思想」に関心をもっているのであれば、知人同様に着飾り享楽に興じるのは欺瞞になるのかもしれないが、彼女はなにごとにも興じるようすがない。むしろ「私」自身がどういう人間なのかは、前面にあらわされていないのである。それゆえ、菅野の見立てには、作家個人に関する言説があきらかに投影されている。

——胸を病む身でダンスに明けくれ、遊び相手の男をつぎつぎに替える若い女性。賑やかなホールで忙しく働きながら僅かな報酬しか稼げない多数のダンサーたち。贅沢なドレスで着飾っていても、じつは無理な辛いやりくりを強いられる花形ダンサーたち。

しかし、そうした人工的な華やかさの光景を前にしても、「私」はそのなかに入りこもうとしない。いわば縁辺に身を置いて、ただ見るだけの位置にとどまっている。そして傍観者ふうの視線をめぐらすうちに、屈託をつもらせたあげく、モダン・ライフの頂点のようなフロリダの歓楽の情景を前にして、ひどく場違いなところにいる感じに襲われ、「Spleen de Tokio」をふと意識することになる。わざわざ横文字で書いたこの「東京の憂鬱」は、モダン・ライフを演じる者ではなく、ある距離を置いてその浮薄さと虚飾の裏の悲哀を見る者のなかに、ふと忍びこむ気分である。だが、いずれにしる、そこには、「私」の精神生活をゆるがすほどの重みは感じられない。偽の憂鬱は言いすぎであるとしても、とにかくその印象は軽い。ただ見るだけの「私」の心の表面にはしばし落ちかかる程度で、間もなく跡をとどめず消えてゆくような種類の憂

²⁸⁹ ささきふさ「ただ見る」『モダン都市文学 I モダン東京案内』平凡社（1993）p.131

「私」が、ともに行動するグループのなかに全面的に入りこもうとしないのは事実であるが、問われねばならないのは、彼女の「ただ見る」という行為が、否定的な意味で解釈される「傍観者」的な性質のものかどうかということであろう。

そもそもこの小説への言及は、おなじシリーズに収録された堀辰雄の「水族館」を、菅野が「新興芸術派」の典型としたささきの当該作品と比較し、前者を、文学史的評価の低い「新興芸術派」から切りはなした上で、あらためて高く評価しようという企図によっている。菅野は、「《新興》をめざした折角の試み」が、「脆く軽量化した感触につつまれる結果に終わった要因」のひとつを「軽躁」な文体にあるといい、堀の文章には対照的に「軽快」な精神があらわれているという。

だが、どちらの文章が「軽躁」か「軽快」かという判断は、あらかじめ文学史上の派自体の固定された評価に負っており、印象批評の範囲を出ない。菅野は言及していないが、堀もごく初期の作品においては実験的なところみをしており、『新青年』に寄稿した「ネクタイ難」のような推理小説風の作品もある。

そこで、あえて文体ではなく「視点」に着目すると、「ただ見る」と「水族館」には明白なことになりがうかびあがる。ところみに、当該作品の一部分をここに書き出す。

ふと私はイヴニング・ドレスの肩に、莫迦にひやつこい風を感じた。風はさつと、寄木の床を撫でて、向うの窓へ吹き抜けた。木立の向うには、大きな雲が不穏な速度で走つてゐる。芝生に落ちた明暗の斑点も、——私は危うく聲を立てるところだつた。ばさりとまともに私の顔を打つたものがあつたからだ。私は狼狽して窓から首を引込めた。ばさばさと、黒い蛾はシャンデリアの近くまで昇つたかと思ふと、突然急な角度を描いて、踊る男女の上に落ちた。棄身な蛾の運動は、飛ぶよりは打當つて行く感じだ。腕を掠めて又一匹、又一匹、——蛾は豪華な室内装飾を完全に無視して縦横に走つた。踊る男女も亦完全に蛾の横行を知らずに踊り狂つてゐる。²⁹¹

ある夜、私は公園の中を散々にうろつきまはり、ひどく疲れて、やつと自分の家に歸つてきたのは、もう一時近くであつた。私は自分の部屋にはひるや否や、私の机の上に通の、切手も貼つてなければ、差出人の名前もない、手紙が置かれてあるのを見出した。私は封を切つた。そして私は讀んだ。誰だか分らないが、私にすぐ、いま彼のゐる駒形の「すみれや」まで来てくれといふ、まるで警察からの呼出し状のやうな簡単な走り書きを。その手紙を書いたものは、よほど取亂してゐたと見えて、自分の名前を書き落したばかりではなく、その亂雑な走り書は、それが誰の字であるかを、

²⁹⁰ 菅野昭正『憂鬱の文学史』新潮社（2009）pp.28-29

²⁹¹ ささきふさ「ただ見る」『モダン都市文学 I モダン東京案内』平凡社（1993）pp.129-130

到底私に判讀させないほどであつた。²⁹²

8行からなる各文章中、前者に「私」は3、後者には7もかぞえられる。すなわち、女性主人公の眼は、カメラのようにあちこち移動するが、男性主人公の眼は、自分自身に固定されている。

「水族館」は、「なんとも説明のしようのない浅草公園の魅力」が、現実の背景だけを借り「私の空想の中に生まれた一個の異常な物語」として「私」に語られる形式をとっており、語り手のまなざしは物語の虚構を支配している。一方「ただ見る」には、語り手以外の視点が反映されており、短編小説でありながら「蛾」、「隅の少女」の二章から構成されている。

「ただ見る」の舞台が、赤坂や都心らしい場所であるのに対し、「水族館」では、震災後にすたれゆく浅草がえらばれているが、そこで描かれるのはカジノ・フォーリーとその踊り子、踊り子をめぐる恋愛とその結末というように、両者が時代の風俗をモチーフにしている点においては一致している。にもかかわらず、菅野が堀の作品のほうにたかい評価をあたえるのは、「卑俗な色調の小説になってもおかしくない要素」をあつかいながら、「そちらの方向へ流れてゆくどころか、ある種の品格をそなえた物語」、良質の新鮮なモダニズムを思わせる感触がある、とされるからである。だが、なにをして「良質」または「新鮮」とするかは、共約不可能性の問題にかかわっており、絶対的な基準はもうけられない。そこで注視されるのは、なににも優先して「物語」として完成された作品が、文学的に正統なものともみとめられている点である。

そして、男性の語り手が支配する物語空間においては、ジェンダー的他者が排除されている。それは、たとえばつぎのような場面に顕著である。意中の少女となぞの少年が宿屋に入るのを目撃し、隣の部屋を取り「私」を手紙で呼び出した友人は、明け方とうとう彼女らの部屋に侵入し電気をつける。

そこには、二個の女の裸體が、手足をからみ合つたまま、異様な格好で、ころがつてゐるのであつた。同じくらゐに白いその四つの手足は、それがどちらの ^{からだ}身體 のだか、分らないほどだつた。これらの海岸に打ち上げられた二個の抱き合ひ心中の溺死體は、彼女らのすぐ傍に一人の男がいくらあつけにとられて長い間突立つてゐたところで、到底息を吹き返しさうには思はれなかつた。²⁹³

事実を知った彼は「女だと知れりあ……」と「気をとりなおす」ものの、やはり相手を「手に入れることが出来ない」。そのライバルであり、みずからを「子爵令嬢」と「騙る」美少年とみえた少女は、じつは「女記者」だという評判であつた。しかし彼女も、花形ダンサーとの恋に破綻をきたし、踊っている相手をピストルで撃ちそこねたのち、屋根の上で衆目に

²⁹² 堀辰雄「水族館」『モダン都市文学Ⅰ モダン東京案内』平凡社（1993）p.110

²⁹³ 堀辰雄「水族館」『モダン都市文学Ⅰ モダン東京案内』平凡社（1993）p.116

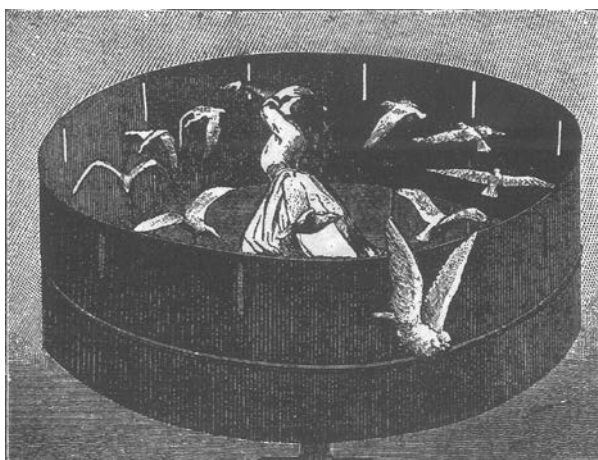
狂態をさらし転落する。ラストシーンで、それを目にした「私」は、思わず眼をつぶる。そしてたえがたい嘔吐をこらえながら「まだ生きてゐるぞ」とひとびとが叫んでいる声を背後にききながら、その場を去るのである。

教育を受けた女性、「女記者」のように男性の既得領域を侵犯する女性、異性愛の規範からはずれた女性は、生きていても溺死体のようにまなざされ、いったん「正体」を可視化されたのち、みえないように狂気の側へ追いやられる。それは、転落する「女」の言説をそのままなぞるかのようである。

ホモソーシャルな紐帯でむすばれた主人公の友人男性が、彼女らの部屋に無断で侵入し当人たちが気づかないのを一方的にながめる状態は「窃視」ともいえ、前述した吉行エイスケの作品との共振がみとめられる。菅野は、「ただ見る」の主人公を「傍観者にすぎない」と評したが、むしろヘテロセクシャルの性規範以外には、嘔吐をおぼえ目をむけようともせず、みずからの立場からは一歩もふみださない「水族館」の主人公こそ「傍観者」といえよう。

(2) カメラ・オブスキュラと「夢」の知覚

fig. 12 マックス・エルンスト「カルメル修道会に入ろうとしたある少女の夢」



前述した「行乳薬求死」に顕著なように、ささきの作品には、統一された世界を脱臼させるような、多元的でありながら対象と切りはなされた「視」が、しばしばみとめられる。とりわけ「ただ見る」にあらわれるカメラ・オブスキュラ現象の場面は、他に類をみないものである。

現在のカメラの基をなす写真鏡「どんくるかあむる (donkere kamer)」が日本に輸入されたのは 1646 年と早く、オランダからはこびこまれた望遠鏡、万華鏡、千里鏡、玻璃鏡、遠眼鏡、拡大鏡などにまじっていた「暗室鏡」の名称をもつ機器がそれであったとき

れる。²⁹⁴

一方、カメラ・オブスキュラ現象は、葛飾北斎画「富嶽百景」(1834)中の「^{ふしあな}崧穴の不二」にみられる。そこには、閉ざされた雨戸の節穴から光が差し込み、障子に富士山の倒立像が映っている。この絵からは、北斎が、風景画習得時代に写真鏡を利用していたと推測される。²⁹⁵だが当時、一般にこの現象は、一定の場所でのみ偶発的に起こるものと考えられていた。そこから約100年後に書かれることとなった「ただ見る」で、当該の場面は、前章の中盤に現れる。

私の家はごみごみした凹地の一隅に在る。が四辺の高台は有名な、かと思うと名も聞かないブルジョア達によって占領せられている。私は富の高低に土地の高低を加えて考えさせられるのが不快だったので、二階の窓は断然開けて見ぬことにしていた。だが彼等の生活の外郭は、開けぬ窓の戸の節孔から、逆さになって朝の寝室へ闖入して来る。寝起きの私の目に豆ほどの逆さな風景は、夢の続きのようで、うれしかった。²⁹⁶

「私」は、部屋の節穴から、ひとびとの生活を「窃視」のごとく直接かつ一方的にのぞいているのではない。そうではなく、部屋の壁面上にうつろう彼らの「リフレクション」——倒像を間接的にながめている。寝起きの目は、夢のつづきのような映像に興じるのだが、一方で、それが「夢」ではないことが知覚されている点は重要である。

近世に西洋のインパクトを受けて変動を開始した日本の「視」は、近代において西洋のそれに接近したのであろうか？ カメラ・オブスキュラ現象における反応として、「^{ふしあな}崧穴の不二」で倒立した富士に興じる男性たちの絵姿と「私」の知覚に関する表象を比較対照するとき、かかる問いが喚起される。たとえば、マックス・エルンスト (Max Ernst) が、コラージュ小説「カルメル修道会に入ろうとしたある少女の夢」を発表するのは「ただ見る」とおなじ1930年であるが、作品中主人公の少女はズートロープの中心に置かれており、それは夢のなかでの「知覚」を象徴するものである。そこで「観察者」は、ことなるふたつの「視」——ズートロープの内側と外側——を所有することとなる。すなわち、感性を夢の世界にひたされながらも、一方で理性を覚醒させているのである。²⁹⁷「夢をみている間」と「夢から覚めた直後」ということなりはあれ、「私」とある少女は相似的である。なによりまなざしの主体は、どちらもまなざされる女性なのである。

ここでは、「ただ見る」における当該場面の「私」の状態が、半覚醒的であることをおさえておこう。場面は以下のようにつづいている。

²⁹⁴ 中川邦昭『カメラ・オブスキュラの時代 映像の起源』筑摩書房 (2001) p.52

²⁹⁵ 中川邦昭『カメラ・オブスキュラの時代 映像の起源』筑摩書房 (2001) p.206

²⁹⁶ ささきふさ「ただ見る」『モダン都市文学 I モダン東京案内』平凡社 (1993) p.128

²⁹⁷ Rosalind Krauss, *The Impulse to See: Vision and Visuality* Edited by Hal Foster, The New Press, 1999. 54-59.

道家の運転するクライスラーが、坂を上りきって一曲がりすると、樹々の葉越しに輝く数層の窓が現れた。今しがた出た月の光りを濾して白く浮いた雲の間で、お城のような高樓の外郭は、——正しくそれは豆ほどの逆さな風景の中の城だった。²⁹⁸

さらに重要と考えられるのは、寝起きにおいて夢のような感覚にひたされつつ、現実には覚醒している「視」が、はっきりと意識された現実——パーティーへ向かう途上の——のなかで、今度はその現実の光景のほうを、「夢」の領域にスライドさせようとしていることである。

エルンストにより、芸術と非芸術の境界を取りはらわれようとしたコラージュ小説は、小説という「形式」を信じようとする社会への批判をふくんでいる。それは「未知の秩序への冒険物語」——到達点があらかじめ存在するのでない——ともいえる²⁹⁹が、「ただみる」にも、部分のみならず、全体にかけて小説の形式を脱臼させるような「ずらし」が散見される。たとえば当該の箇所では、自身の家の立地が説明されたのちに、寝起きの暗室現象が引かれ、そこからダンスパーティーに向かう現在の場面が描写されるが、文章の「接続」はなめらかになされてはいない。そこには、エルンストがこころみた脈絡のつらなりや、完結性への回避と通底する構造がみとめられる。

麻子らと同様に上流の階級に属すとみなされる「私」は、さそいを受ければこぼまないが、階級の型におさまった生活を享受することには抵抗がある。「私の家はごみごみした凹地の一隅に在る。——」の段落には、「私」が、私的な空間においてブルジョアを忌避するようすがつづられている。菅野が誤情報として記述した「モダンな消費と享樂を生き甲斐とする若い男女」中の「モダンな娯樂の粹たるダンスを趣味とする女性作家」はそこにいない。

対照的に、「家」に居場所を確保しつつ、つきあう相手をつぎつぎと取りかえていく同性の友人は、婚姻制度そのものをうたがう外部からの視点を有さない。周囲の男女たちも、享樂の渦中にありながら近視眼的であり、強迫観念に駆られるごとく資本にささえられた「快」を瞬間ごと消費しつづける。

私は、物質的生活を真向から否定してはいないが、場の求心性には警戒があるようにみえる。それは、関東大震災から復興後の帝都ではりめぐらされていたコンフォームィティに、取りこまれまいと身を離そうとする意思ではないだろうか。菅野がいう「縁辺に身を置いて、ただ見るだけの位置」は、対象の間近における直視を想定している。だが、テキストを冷静に読めば、「私」の視は、直接ではなくカメラ・オブスキュラに象徴される「外界の光」をいったん通した観察者の「凝視」であることがみとめられるのである。

²⁹⁸ ささきふさ「ただ見る」『モダン都市文学Ⅰ モダン東京案内』平凡社（1993）p.128

²⁹⁹ 巖谷國士「コラージュ・シュルレアリスト」『カルメル修道会に入ろうとしたある少女の夢』河出書房新社（1984）pp.223-238

(3) 踊る彼女たちと踊らない「私」の solidarity

一行が向かったダンスホール、当時はなやかな風俗の最先端の場でもあった「フロリダ」で、スポットライトをあびるダンサーたちのようすを仔細に観察するうち、「私」の眼はある「発見」をすることとなる。「ただ見る」の前年(1929)に刊行された『新版大東京案内』には、「ダンス・ホール」の項があり、赤坂に開店したばかりの「フロリダ」に関する情報も掲載されている。ダンサーには「猛者」がおおく、演目はジャズが主たるものと紹介される一方で、客の男性たちは「歓楽を一手に引き受けたやうな顔をして晴々しく踊つてゐる」と報告されている。³⁰⁰

だが小説中では、彼らと対照的に女性ダンサーたちは、およそ「美的でない」セーターを着て汗にまみれ踊る。違和感をおぼえた「私」は、対象を凝視するうち、不可視の相を浮かびあがらせていく。ダンスの報酬は、一曲につきわずか「八銭」だった。「私」は、思わず手まわりのものをその金額で割る。

靴下五〇回 靴四〇〇回 手提五〇〇回 手袋二〇〇回 帽子二〇〇回
ペティコート一〇〇回

イヴニング・ドレス、外套等に至っては、換算の限りではない。私は茫然とした。³⁰¹

彼女たちの生活相に達した私の眼に、そのセーターは「決してもう見にくいものでは」なくなっていた。「基数を八銭において、彼女等は食べなければならない。寝なければならない。着なければならない」。それらの背後には、「いったいどれだけのいたづきと、どれだけのやりくりと、どれだけの屈辱とが隠れているのであろう」。³⁰²

やがて「私の目はふと一点に止つて、そして一杯に見開かれ」る。プロのダンサーたちが居並ぶなか、男性客だけでなく、同僚からも相手にされない少女ダンサーが、部屋のすみにすわったままている。私は、同行の久我に彼女と踊るようせがんだ。

臆しがちに立ち上つた少女は、少しの遊び気もなく、習つた通りのステップを踏んでいた。ダンス振りまで楚々たる感じだ。私は何か涙に似たものを呑み下しながら、彼女がいつまでもあのスウェーターを着ていてくれればいいと思った。³⁰³

ズートロープのなかの少女のように、「私」は内側に立つ「女」でありながら、それを外側からまなざす「視」を獲得する。まなざされる「女」でありながら、その場に立つ機会は、

³⁰⁰ 今和次郎編集『新版大東京案内』中央公論社(1929) pp.159-162

³⁰¹ ささきふさ「ただ見る」『モダン都市文学Ⅰ モダン東京案内』平凡社(1993) p.132

³⁰² ささきふさ「ただ見る」『モダン都市文学Ⅰ モダン東京案内』平凡社(1993) pp.132-133

³⁰³ ささきふさ「ただ見る」『モダン都市文学Ⅰ モダン東京案内』平凡社(1993) p.135

性差による視覚を、転覆あるいは変換させる可能性を暗示するのである。³⁰⁴

同時に、二重の「視」をそなえる私によって、男性たちはするどくまなざしかえされていく。みずからがまなざされていると気づかないまま、彼らはその欲望に、光をあてられることとなる。「フロリダ」は、他よりもおおくのダンサーを擁していたが、踊り場のこちらで虎視眈々と待ちもうける「男性たちの夥しさは、それとは段違^{ダマシ}」なのだった。久我は、映画女優を「しきりに口説きながら」、曲がはじまった途端、本能的に「まだ壁の裾に残っているダンサーの一人にレゾリュートな歩みを向け」る。後日、偶然出会った兄の友人・伊沢は、ダンサーの労働争議にマネージャーとしていかに対応したか——「不良組」に秋波を送られ抱きこまれそうになった等——を喜々として語る。

「しかしダンスはお上手になったでしょうね。」

「どうやらチャールストンの出来そこないぐらいはね。」

「チャールストンよりシミーの方が貴方には、——」

「ぴったりし過ぎているので却って気がさして踊れませんよ。」³⁰⁵

それでは、「私」が女性ダンサーたちのいたづきや、やりくり、屈辱を可視化させたとき口にされるキーフレーズは、いかなる意味をもつのであろうか。

私は既に *Spleen de Tokio* の中にあった。³⁰⁶

スプリーンは、沈潜する内向的な憂鬱のメランコリーではなく、菅野が分類した「鳥渡 顔をしかめる」程度の「軽いノリ」の憂鬱でもない。ネガティブな諸感情の複合体に、おどろき傷つきながらも、絶えず問いを発しつつける執拗な自照的精神における憂愁=*spleen* なのである。³⁰⁷

たとえば「ただ見る」と同年に書かれた前出の「あれも私」を照らしあわせれば、主人公の女性は、前者における冷静な観察者とは一見ことなっている。父亡きあとの養家へ20年ぶりにやってきた「おろく」は、当時すでに破産しかけていたが、「私」の養父と近づきになりたく養家によく出入りしていた女性だった。あいかわらず不運をかこつおろくに、一向同情できない「私」は、相手を帰そうとして彼女の息子・久能男の就職を夫にかけあうと約束する。だが、おろくはすわったまま、髪や服をほめてくるので、真意に気づいた「私」は、必要な額を聞きとると紙幣を手渡す。

³⁰⁴ Jacqueline Rose *Sexuality and Vision : Some Questions Visuality* Edited by Hal Foster, *The New Press*,1999. 120.

³⁰⁵ ささきふさ「ただ見る」『モダン都市文学 I モダン東京案内』平凡社（1993）p.135

³⁰⁶ ささきふさ「ただ見る」『モダン都市文学 I モダン東京案内』平凡社（1993）p.134

³⁰⁷ 山田兼士『ボードレール《パリの憂愁》論』砂小屋書房（1991）pp.238-239

おろくの真意に気づかぬふりをした己があさましくなった「私」は、彼女がたのんだより数倍いいにくいことを、夫に命ぜられるまま養母に申し出た過日を思い出す。「その彼は間もなくその養母から金を借りて来いと私に迫った。そして私も、いつそ餓死した方が、或ひは別れた方がと思ひながら、養家に足を運ぶよりほかない窮境だつた」。

翌朝、飄然とたずねてきた兄を「私」は逃がさじと相手にする。

「結局我我は、」と兄は私の話のすむのを待つて思ひ深そうにいつた。「冷酷になるか、運動に身をぶちこむか、二つに一つね。」

私は思はず、前夜のおろくを真似て、目をくりりとさせた。兄の結論は私には唐突過ぎたのだ。

「可哀想だ可哀想だと思つて分け與へてみたら、忽ちおろくと同じ様になつてしまふでせう。だから可哀想だけど冷酷になつて與へずに自分の立場を守るか、でなければ自分も裸になつて、こんな裸ん坊ばかり作る社會組織が間違てみると吠え出すか、——」（中略）

私は弱蟲なくせに冷酷でせうといふ顔で兄の目を窃いた。すると兄はふと目を反らせて、「僕だつて久須男さんと同じことだな」と唐突にいつた。「シャツ一枚になつたら、きつと着物を貰ひに出て行かれないな。」

「そんなこといへば私だつて、——その通性が中間階級没落の皮肉なのかも知れないわね。」³⁰⁸

そういつてしまつてから「私」は、おろくの目がああまで怖かつたのは、その目が私自身の目である気がしたからだと気づく。今は、かろうじておろくよりは、持てる者でありながら「家や筋骨の代りに教養だけを與へられた我我が、その教養を喰ひつぶした後は、——」。³⁰⁹

「私」は、現在「どん底」にいるわけではないが、安定のない生活であり「惨状からふと浮かびあがってきたばかり」なので、「教養」を売つて生活が成りたっていることを、心から信じることができない。「おろくに與へたあの金は、ことによると、私が私自身に與へた金なのかも知れなかつた」。³¹⁰

ふたつの作品が書かれた1930年は、日本を恐慌がおそい失業者は250万人を超え、大学を卒業しても仕事に就けないような状況が出現した。没落していくおろくも「私」なら、「ただ見る」の前章に出てくる自身が置かれた場を直視せず疲弊するモダンのただなかにいるブルジョアと、一見はなやかながら労働者そのもののダンサーのあいだにあつて、「私」はどこにいるのか？ ふたつの章のタイトルは、双方が「私」の心性を象徴しているかにみえる。前章の「蛾」のおおいかぶさる黒い影は、現時から臨む将来そのものに不吉な予感をい

³⁰⁸ 「あれも私」『新潮』第27巻第11号 新潮社（1930）pp.31-32

³⁰⁹ 「あれも私」『新潮』第27巻第11号 新潮社（1930）p.32

³¹⁰ 「あれも私」『新潮』第27巻第11号 新潮社（1930）p.32

だかせる。だが、後章の「隅の少女」には、「私」が、女子青年のような少女に未来を託す想いがうかがえる。

たとえば、初期の傾向において新興芸術派に分類されることもありながら、純文学の正統と菅野がみとめる堀の小説は、一枚の絵画のように完成され、夾雑物が丹念にとりのぞかれている。³¹¹対照的にささきの作品は、一筆書きのようで推敲の跡があまりうかがえず、一見通俗的でもあることばづかいが随所にちりばめられている。だが、その核心には、ボードレールの当為に通じる「正典」形成への叛意が看取されるのだ。少女ダンサーの姿に涙ぐんだ私は、ほどなくかかる感傷など役に立たないことに気づく。

次に行った時隅の少女は、——それを書くことは十九世紀の巨匠達に任せておくことにしよう。³¹²

ひらかれたエンディングで、「私」は、今・ここから別などこかへ一歩ふみだそうとしている。彼女は、「書く」行為から離れるかもしれないが、観察の眼をうしなうことはないだろう。小説の最後に置かれたこの一節は、1930年というモダニズムのピークにあり、主体的にまなざす「女」の「自己照応」の精神をわれわれにつたえる。

第4章 開港と国家売春

³¹¹ 立原道造「風立ぬ 堀辰雄論」『現代詩読本』思潮社（1978）pp.210-226

³¹² ささきふさ「ただ見る」『モダン都市文学 I モダン東京案内』平凡社（1993）p.134

第1節 アメリカの要請に応える

日本近代の「開港」というできごとは、当該の地に、他に先んじた文明の摂取をもたらすと同時に、今日まで表の歴史には浮かんでこない異なる部分をももたらした。日米修好通商条約がむすばれるのに先だち、アメリカ側の要請により、横浜には遊郭の建設が計画されることとなる。ただしそれは、文言として書きのこされない「1条」であった。『横濱市史稿』の「風俗編」には、「開港条約の締結に因り、都市建設に伴ふ必須条件であり、社会的施設の一要素であつた遊里の設置は當然起るべき事であつたと同時に、其設置が條約面にあつた譯では無いが、幕府の當事者と某領事との間の非公式折衝に成つたものと傳へられてゐる」³¹³とある。

横浜に日本初の写真館をひらく下岡蓮杖は、この経緯をじかに見聞する機会を得たひとりであった。彼は、幼時から絵師をころごしていたが、1枚のタゲレオタイプをみたことから写真に関心を転じる。そして、技術をまなぶため外国人と接触しようと、浦賀で改船方をつとめていた父のしごとを手伝う名目で、平根山の台場に毎日のぼり黒船が入港するのを監視していたという。やがて下岡は、下田で、アメリカ領事タウンゼント・ハリスと通訳のヘンリー・ヒュースケンに接触することとなる。当時の経験をつづつた「黒船来」には、下岡がふたりに依頼され、日本人女性のおきちとおまつを紹介したことが述べられている。このことがきっかけとなり、彼はヒュースケンから写真の技術を習う。1857年、信頼を得た下岡は、茶やたばこの火を世話する「下番筆頭」として、下田奉行・中村出羽守とハリスによる開港交渉の場にも同席する。ハリス 53 歳、ヒュースケン 25 歳、下岡は 34 歳だった。³¹⁴

ヒュースケンは、1857年2月23日の日記に、本会議の前祝いとして二台の「ノリモン」が参上し、送り届けられた家で縁起物をかざったテーブルにつき歓待の食事をふるまわれ、身分の高い人物に敬意を示すための茶の儀礼がおこなわれたこと、しかし日本酒は口に合わず「恐るべき飲み物」と感じられたこと等をつづる。奉行は、通訳・森山多吉郎を介し、会談をおこなった。ヒュースケンはまだ、井上信濃守と岡田備前守は下田から 1 マイル離れた屋敷に召使とともに生活しているが、当地にいる限りきびしい法度が「彼らに独身生活を強いている」と書く。「日本の政府は、女性は国家の機密を洩らすからというので、その法律を公布した。可哀そうなのは女性である。男性にとっての慈愛の天使である女性がいなのは、奉行たちの宴席に一種の空虚な、もの悲しい感じを与えていた。かりに誰か身分のある日本婦人がこの席に侍っていたり、奉行の娘たちとポルカを踊ることができたりしたら、どんなに楽しかったらう」。³¹⁵

さらに、1857年2月25日の日記には、ヒュースケンとハリスが警察官の付き添いなし

³¹³ 横濱市役所『横濱市史稿 風俗編』横濱市役所（1932）p.384

³¹⁴ 下岡蓮杖「黒船来」『横浜どんたく』有隣堂（1973）p.15 pp.17-18

³¹⁵ ヘンリー・ヒュースケン『ヒュースケン日本日記』青木史朗訳 岩波書店（1989）pp.140-142

には一步も屋外に出られず、出たとしても彼らから影のようにつきまとわれるため、ヒューズケンが杖をふりあげると姿をかくすが、また樹や家の影からあらわれること、それについて幕府に苦情を入れると「儀仗兵」として欠かせないといわれたことが記される。「可哀そうなのは日本の民衆である。役人たちは、日本の民衆がそれほど印象強く、おそろしいものとしてわれわれの眼に映るようにしむけているのである。日本の民衆は、顔をあげてわれわれを見ることもできないほど、自由を束縛されているのである」。「とくに婦人は、われわれが近づくと大急ぎで走り去る。若い娘などは、まるで人類の敵に追われているかのように逃げ去るのである」。ハリスは、何度か奉行に手紙を送ったが、文書で回答をもらうことはできず、「その非礼を責めるたび」それは日本の習慣である、または保護のための措置である等の返事がかえってきたという。しかし、監視のみでなく、文章で行動を逐一報告されることを「スパイ行為」と怒ったハリスが、つよく抗議をおこなうと彼らは姿をけし、以後ヒューズケンは、自由に民家に入出入りするほどになったという。³¹⁶

この日から公式の会談がはじまるが、交渉は何度も挫折し、とりわけドルの価値が銀とつりあっていないことは問題となった。その一方で、長崎港がロシア同様アメリカにもひらかれることとなり、日本に在住するアメリカ人の治外法権がみとめられる。ヒューズケンは、1857年2月25日の日記に記す。日本側から得た情報によると、日本は将軍がえらんだ5人からなる閣老会議によって統治されている。この帝国の最大の大名でも彼らのまえには膝を屈しなくてはならず、閣老会議を通過した法律でも将軍の認可は必要である。だが、その法案が将軍に拒否された場合、さらにふたたび提案しても拒否されると、その閣僚は提案をした廉で「気の毒にもハラキリをしなくてはならない」。10か月にわたる交渉後、協定がいったん成立するが、日本政府は延引策を多数回講じ、ここでの外交のもつれで失脚した備前守にかわり、上述の中村出羽守があとを引きつぐこととなる。³¹⁷

「黒船来」には、談判所には一方に奉行・組頭・目付等がならび、対する一方にはハリスとヒューズケンのふたりがかまえ、そのあいだを通弁が双方の「申し条」を訳してはつたえたとある。ハリスが激怒したとき、その場に立ち会った下岡は、彼が「何か一言大声で叫んだその刹那、眼の前の火入を取り、日本側の方へ向つて抛り投げ」それが奉行の背後の襖にあたり落下し「灰神楽」が日本人たちのうえに散りかかったのを目撃している。通弁がその一言を「バカ」と直訳してつたえると、彼らは切齒をして刀に手を掛けかけるが、中村は部下の怒りを制止した。ハリスが去ったあと、茶を差しだした下岡に中村は、さぞかしよわい侍だと思っただろうなと語りかけ、「忍ぶべし」「忍ぶべし」と嘆声を発したという。当時入港していたイギリス軍艦の艦長まで動員して、談判は再開され締結にむかったため、ようやく将軍への謁見の段階となり、下岡はハリス、ヒューズケンとともに九段下の藩所調所に移ったのだった。³¹⁸

³¹⁶ ヘンリー・ヒューズケン『ヒューズケン日本日記』青木史朗訳 岩波書店（1989）pp.144-151

³¹⁷ ヘンリー・ヒューズケン『ヒューズケン日本日記』青木史朗訳 岩波書店（1989）p.154

³¹⁸ 下岡蓮杖「黒船来」『横浜どんたく』有隣堂（1973）pp.21-22

以下の下岡の証言は、『横濱市史稿』の文章と一致している。「これはもとより条約文にはないことで、談判書にも載せてないことですが、横浜開港の談判をする間に、ハルリスの希望として、奉行に内輪談うちわがしをしたのは、遊女屋建設の一条でした。日本政府も早速ハルリスの希望を容れて横浜が開港になると早々、いろいろな普請作事の忙まわしい中にお貸長屋といふものを政府の入費で建築して、宿場女郎みたような遊女を公許しました」。ハリスからの要請は、「日米両得の仕儀」という認識で合意にいたったという。換言すれば、長い航海で女性に接触しなかった船員が、上陸後に一般の女性を襲ったりするより「金銭で女を自由に出ることが出来る途があれば、まったくその患いを絶つことが」できるという共通の認識のうえに齟齬の生じる余地はなかったのである。³¹⁹

また、おなじ開港交渉の場では、キリスト教布教に関する問題も話しあわれることとなった。下岡は、こちらも「難なく解決済み」となったと語る。「横浜が開港になつて、米国始め英仏などの領事が神奈川へ乗込むと同時に、第一番に米国からブラウンとバラとの二人が来て、神奈川の成仏寺に宿泊して、ひそかに伝道をやつていました。しかし、そのころは諸国の浪人共が徘徊して、西洋人といえども非もなく狙つていた時代ですから、宣教師の宿泊しているお寺の周囲にまで、嚴重な竹矢来が出来て、日本政府から護衛の士卒が付けてありました」³²⁰。

下岡の証言をうらづけるごとく、マーガレット・バラ著『古き日本の瞥見』には、1861年に以下の記述がある。「現在のように外国人がこの国に入れたのは二度目のことで、宣教師は長崎と神奈川に住むことを許されていますが、私たちの宗教がローマ・カトリックと違う点を日本人に分かってもらうには、これまでの倍ほども注意深く接する必要があるでしょう。祭壇やローソクや十字架の像などを持ちこまず、聖書の飾らない真実をはっきり示すことだと思ひます。不吉な高札はいまもなお『邪悪な宗派』を禁じていて、イエスの名は誤解されたままです。私たちの宗教が平和と愛の宗教であることを伝えるためには、そのまえに大きな偏見を乗り越えて信頼を獲得しなければなりません。宣教師の周辺にはきびしい監視の目が光っています。この寺の境内には二つ三つ小屋がありますが、そこに数人の役人が詰めていて、私たちの行動をもらさず書きとめては報告しているようです」。³²¹

だが、護衛をきらい、日米の交渉にかかわったことで相応の地位を得てサラブレットまで購入し、1857年5月21日の日記に「日本にきて、まず下男を雇った。こんどは馬持ちだ！この調子だと、自分の馬車を持って皇帝の一人娘に結婚を申し込むことにもなりかねない。そうなる俺は植民地総督だ！」と書いたヒュースケンは、バラたちが日本に到着する10か月まえの1861年1月に、東京・芝で攘夷派の薩摩藩士、伊牟田尚平らに暗殺されていた。『古き日本の瞥見』にヒュースケンの事件に関する記述はないが、翌1862年の「生麦事件」にはふれており、バラは、薩摩藩の武士に襲われたイギリス人チャールズ・レノックス・リチ

³¹⁹ 下岡蓮杖「黒船来」『横浜どんたく』有隣堂（1973）pp.22-23

³²⁰ 下岡蓮杖「黒船来」『横浜どんたく』有隣堂（1973）p.23

³²¹ マーガレット・バラ『古き日本の瞥見』川久保としお訳 有隣堂（1992）pp.50-51

ヤードソンのほうに非があったと述べている。事件発生後にヘボン博士が呼ばれたが、被害者は重症の状態であり、直後に死亡したのであった。³²²

同書にはまた、翌1962年、ハリスがこの古寺を訪れたことが記されている。「公使のお話しぶりは快活で、気さくで親しみ深い物腰をしておられました。私はこの方に強い関心を持ちました。ずるくて駆け引きのじょうずな日本の役人を相手に忍耐力と自信をもって交渉にあたり、アメリカや諸外国に多くの貢献をしてくれた人ですから」。彼は、日本に最初の教会を建てるためあつめられたハワイ諸島からの献金1000ドルにさらに1000ドルを追加したので、基金は利息を生み、他の献金と合わせ5年後に7000ドルを投じ、日米和親条約がむすばれた地の近くに「横浜海岸教会」が建てられることとなった。³²³

また、のちにクリスチャンとなる下岡は、開港後の「基督教信者」の第一号が、成仏寺のまえで櫛を売っていた高齢の女性であったと証言する。ブラウンの説教に接して洗礼を受けた彼女は有名になり、葬式のときには、「米国人といえば男でも女でも残らず出て、野辺の送りに立った」という。攘夷派の志士が外国人の命をつけねらうような状況にあり、信仰をまっとうすることには高い精神性が必然的にもとめられたため、それに応えた宣教師の情熱は、当地に住む日本人にうったえかけたのだった。

従前、最初の日米交渉の場で、国家売春と宗教の自由が同様に容認されたことは注視されてこなかった。ハリスは双方にかかわっていたが、キリスト教を信仰する外国人たちは、後日その事実に気づくだろう。『古き日本の瞥見』には、日本女性に関する記述も散見するが、すでに営業を開始していた大規模な遊郭には言及がない。

開港当初のいわば文明の光と影の領域に関して、科学技術や宗教等は正史に記述されながら、国家が積極的にかかわった売春のような政策は捨象されてきた。公的には宗主国と植民地という関係ではないにもかかわらず、日本人女性をいわば「開港慰安婦」として差しだすことに日本側からの異存がまったくなかったのは、後述するように江戸時代すでに公娼制度が敷かれたことがおおきく影響していると考えられる。主として政治、経済、軍事面における当時の日本の外交能力への評価には、現在みなおしがもとめられているが、当時「日本には日本の国風がある」と幕臣たちが漸進的開国路線で対応した点を肯定的にとらえるとしても、一方で、開港のための「慰安婦」を躊躇なく相手国に献上する姿勢に国家的「自立」はみとめられない。³²⁴

『横濱市史稿』は、1932年の時点で、来し方を振りかえり「惟ふに、土地生成の盛衰は古往今來の數に於て、全く其多くが花街を中心として繁華を招來したものとするとき、横濱

³²² マーガレット・バラ『古き日本の瞥見』川久保としお訳 有隣堂（1992）pp.69-70

³²³ マーガレット・バラ『古き日本の瞥見』川久保としお訳 有隣堂（1992）pp.80-81

1861年から1865年にかけて、夫のジェームス・ハミルトン・バラとともに日本に滞在した間、アメリカの友人に充てた書簡から成る。

³²⁴ 井上勝生「幕末期、欧米に対し、日本の自立はどのように守られたか」岩波新書編集部編『日本の近現代史をどう見るか シリーズ日本近現代史⑩』岩波書店（2011）pp.1-26

井上は「江戸日本の自立は、売り込み商の蝟集に見られるような日本の経済の成熟と、幕府の漸進的開国路線によって守られた」と主張する。

のそれは、開港以後、先づ遊郭設置に依り、交易場開放の殷盛と相俟ち、舶來文化の華と融合し、茲に横濱が建設され、爾來駸々たる進展に恵まれたと云ふべきである」³²⁵と、遊郭の存在を否定せず、横浜発展の基となったと評価している。

第2節 港崎遊郭

1858年11月に、幕府は横浜における遊郭の設置を発表し、営業を希望する者の出願をつのった。指定されたのは、太田屋新田の内にある1万5千坪の土地で、現在の横浜公園の場所にあたる。神奈川、品川、日本橋から出願者があったが、同地は沼沢を埋め立てた場所であったため工事は遅々としてすすまず、1859年7月1日の開港当日までには完成しなかった。そのため幕府は、同月、駒形町に建築した応急施設の外国人貸長屋24棟中の一部に「御免遊女町假託」の名称をかかげ仮営業を開始する。

当初幕府は、「遊女」に「飯盛り女」以外の「宿場女郎」を充当する予定であったが、はじめて外国人に接することへの拒否感等から、志望者は皆無という状態であった。そこでやむをえず、奉行所の諒解を得て神奈川県宿旅籠屋の飯盛り女を充当し、急場をしのごうとする。横浜市史稿は、そのころのようすを「かくして異國人の遊興者で賑ひ外國商館行のらしやめん女郎も」「多数異國人の需要に應じて供給され、過渡期に属する假宅営業は、開港場横濱に特異の風景を現じたのであった」と記している³²⁶。

そして1859年11月11日、駒形町の假託は引きはらわれ、「港崎遊郭」は開業のはこびとなった。市の南に位置する遊郭は、波止場から見通すことができ、この道筋の繁盛ぶりは江戸の人形町や浪花の順慶町にもおとらなかったという。なかでも、岩槻屋佐吉が経営した「岩亀楼」は、廓内でもっとも壮麗で、遊客でない者も昼間やってきて見物をおこなうほどであった。

横浜開港後は、尊王攘夷論がとくにかまびすしく、当時港崎遊郭は「憂国志士の策源地」の観があり「すこぶる恐慌勝ちの立場」にも置かれていた関係から、「縁起名」としてよりも彼らに迎合する屋号をつける傾向があった。その代表的なものが「神風楼」、「伊勢楼」、「五十鈴楼」、「二見楼」などである。だが文明開化期になると、「四海兄弟の和親ぶり」を実現した結果、1869年発行の『横濱市原細見記』には、大小の妓楼をはじめ局見世にいたるまでの楼名と遊女名には、すべて傍訓にローマ字がもちいられ、外国人に「便した」といわれる。³²⁷

王政復古直前の日本に、フランス海軍の一員として滞在したデンマーク人、エドゥアル

³²⁵ 横濱市役所『横濱市史稿 風俗編』横濱市役所（1932）p.398, p.383

³²⁶ 戸伏太兵『洋娼史談』鱒書房（1956）pp.106-107 開港の年に、イギリスの捕鯨船ゼンクス号が神奈川沖に投錨したとき、ふたりの日本人娼婦が乗船しているのが目撃されたが、彼女たちが船員からもらったものらしい羅紗綿をまとっていたことから、この名称がつけられたという。のちに、外国人相手の娼婦を全般的にさす蔑称となった。

³²⁷ 横濱市役所『横濱市史稿 風俗編』横濱市役所（1932）pp.385-392, p.397, pp.522-524

ド・スエンソンは、24歳で横浜を訪れたとき目にした岩亀楼の印象を書きのこしている。当地は、四方を運河でかこまれ橋が一本かけられており、警察がその住人と訪問客をきびしく監視していた。「地上2フィートくらいの高さの欄干が通りから格子窓を隔て、その中には若い女たちがシバツツ（煙草盆）を前に並んで座っている。みな高価な絹の衣装をつけ、髪には金銀のヘアピン（簪）をさし、首も顔もべったりと厚化粧をしているので、生き物というより蠟人形である。なんだか気味が悪いという印象は、女たちがほぼ不動であることによっていっそう強められる。不動の姿勢がくずれるのは、湯呑を口に運ぶときと、煙管に煙草を詰め、煙の柱を二、三度吹き上げるときだけである。しかし、日本人の目には気味悪いどころか、これらの厚化粧の女の一群は、その美と醜、豪華な衣装で男たちを惹きつけてやまない」。³²⁸

スエンソンは、アメリカにとどまらない外国公使館が、日本政府に遊郭の要請をしたと証する。それ以前には、日本人と外国人のあらしごごとがおおかったが「茶屋は当時は町中に散在しており、そのために警官が監視の目を十分に光らせることができないでいた。日本政府は提案に賛成し、日本の大都会ならどこにでもあるのと同程度に趣向の良い施設を、現在の場所に建てさせた」。その結果「日没から真夜中ごろまで、ヤンキロー（岩亀楼）とその周辺の通りの人ばかりといったらたいへんで、日本人、中国人、欧州人を問わず、横浜中の男の住人が集まってきたような盛況」であったという。³²⁹しかし、1866年10月に起こった大火により、港崎遊郭は消失する。その後も火災が頻発し、公娼を擁した遊郭は、移転を繰り返すこととなる。

スエンソンはまた、芸妓たちの置かれた境遇を冷静に観察している。「日本のゲーコは、ほかの国の娼婦とはちがい、自分が墮落しているという意識を持っていないのが長所である。日本人の概念からいえば、ゲーコの仕事はほかの人間と同じくパンを得るための一手段にすぎず、[西洋の]一部の著述家が主張するように、尊敬されるべき仕事ではないにしろ、日本人の道徳、いや不道徳観念からいって、少なくとも軽蔑すべき仕事ではない。子供を養えない貧しい家庭は、金銭を受け取るのと引きかえに子供たちを茶屋の主人に預けても別に恥じ入ったりするようなことはないし、家にいるより子供たちがいいものを食べられ、いいものを着られると確信している」。³³⁰

一方、1915年、夫の住む日本へ幼児2人とともにやってきたアメリカ人、セオダテ・ジョフリー（ドロシー・ガッドフリー・ウェイマン）は、最初にグランド・ホテルに投宿した際、遊郭を見学する機会を得る。1893年、カリフォルニアのサン・バーナディーノのオレンジ農場に生まれた彼女の先祖は、両親ともに1600年初頭のピューリタン入植時代にまでさかの

³²⁸ エドゥアルド・スエンソン『江戸幕末滞在記 若き海軍士官の見た日本』長島要一訳、講談社（2003）pp.71-72

³²⁹ エドゥアルド・スエンソン『江戸幕末滞在記 若き海軍士官の見た日本』長島要一訳、講談社（2003）pp.76-77

³³⁰ エドゥアルド・スエンソン『江戸幕末滞在記 若き海軍士官の見た日本』長島要一訳、講談社（2003）pp.74-75

ぼる。プロテスタントでありながら、よりたかい教育水準をのぞんだ母により、カトリック信者の地位がひくい当時尼僧院経営の寄宿学校で厳格な教育を受けたドロシーに、グランドホテルにおける外国人社会の混沌は、違和感をいだかざるをえないものだった。

ある蒸し暑い晩、夫と彼女はホテルのダンス・フロアから席にもどると、どこかへ出かけるひとびとに合流し人力車に乗る。「勢いよい掛声と共に車やは煌々と賑やかな大きな二階建ての日本家の玄関で止まった」。2階の広間に案内された一同にはかき氷や飲み物がはこばれ「鮮やかな色彩の着物と巨大な帯をつけ髪飾を満載した髪型の二人のゲイシャ」が、三味線の伴奏で踊りを披露する。「人工的で人形の様な化粧をした女の子達が、短調の調べにあわせて踊り始めた。動作は固苦しく、表情もなく、とりとめもなかった」。彼女の退屈を察したイギリス人にうながされ、同伴した母とともに廊下に出ると、幾十もの小部屋が中庭に面して並び開いた障子のなかに「日本の娘が座って待っているのが見えた」。ひとりの日本人男性が部屋に入り、障子を閉めた。別な外国人男性が、廊下をあるいていくと「中から小さな娘に招き入れられた。イギリス人は何か獣が肉をなめでもするような顔つきで私達の反応を見ていた」。

グランド・ホテルに帰ると私は夫に怒りをぶちまけた。

「貴方はみんなが何処に行くか知っていたのでしょうか？」

「怒ることはないだろう。みんなナンバー・ナインにはちょっと見物に行くだけなのだから」³³¹

このときはちいさな齟齬であったが、横浜滞在中に一子が生まれたのちも、白人社会の内側にとどまらず日本人と交流をつづけた彼女は、1922年、夫とわかれこどもを連れて横浜を去ることとなる。³³²国家を超えたホモソーシャルな紐帯は、買売春を否定するどころか、容認し享受したが、この時点で、彼女が端的に「姦淫」を拒絶したとしても、それ以上の女性同士のシスターフッドは未だ築かれえない状況であったことがみとめられる。

fig.13 市街・港を一望できるチャブ屋「横濱随一の歓楽場 大丸谷ビジネス案内」

(上段左から2番目に No.9 の名称がみえる)

³³¹ セオダテ・ジョフリー『横浜ものがたり——アメリカ女性が見た大正期の日本——』中西道子訳 雄松堂出版 (1998) pp.3-4 pp.14-21

³³² セオダテ・ジョフリー『横浜ものがたり——アメリカ女性が見た大正期の日本——』中西道子訳 雄松堂出版 p.192 原著は帰国後『サタデー・イヴニング・ポスト』に一部連載されたもの。1926年には小説『灰燼——近代日本のものがたり——』を執筆している。



第3節 遊歩道・茶屋・チャブ屋

ちやぶやは外国人専門の私娼窟を稱して斯く呼んだものである。近時は日本人をも客として居る。横濱に於ける此存在は、啻に横濱としての名物であるばかりで無く、日本の名物として世界的に其名聲を響かして、東洋の開港場情緒を濃くして居る事は言ふ迄ないが、此施設は初め國際的條約に其端を發して、爾來開港時から明治初期、明治中葉から大正へ、更に震災後の昭和時代へと推移して、其時代時代の變遷と繁栄とを繋ぎ、愈々益々殷盛を加へ行く徑路を辿り、將來への因縁を結んで、特異な情景をいやが上に濃厚味を浮べ、且つ世相風俗の上に強い獨尊的な權威を把握する唯一の横濱繁昌記の尖端を受持つものである。³³³

日米通商修好條約の第7条には、外国人の遊歩地域は、東は多摩川まで、他は10里までとさだめられていた。当時、外国人にとっての娯樂はすくなかったため、彼らは居留地から徒歩での散歩や馬での外出をしばしばこころみた。1864年には、アメリカ、イギリス、フランス、オランダの公使と幕府のあいだで「横浜居留地覚書」がかわされ、第11条に外国人のため遊歩道の造成が取りきめられる。

1865年にあたらしく開通した遊歩道は、北方は本牧から根岸の八幡橋付近にまでおよんでいたため、幕府は監視の目的もふくめ沿道に外国人用の「茶屋」を開店させた。そのなかで、給仕を表むきとして身売りをする女性が出てくる。同年には、居留地にちかい元町の谷

³³³ 横濱市役所「ちやぶやの起源」『横濱市史稿』横濱市役所（1932）p.315

戸界限に外国人相手の私娼が頻出したため「賣淫女及余多嫁と唱ふる汚業の者取締之事」という禁令が出され、さらに1869年には「賣淫女取締及處分方之事の令」が出された。当時、元町4、5丁目辺の裏町および箕輪坂、御代官坂付近の家には、遊女屋に類する稼業をいとなみ、国内外の男性を顧客とする者がいたという。しかし、居留地は治外法権の区域であり、官憲には取締りの自由がなかった。

1872年6月に起こったマリヤ・ルス号事件³³⁴により、同年9月に芸娼妓解放令が出されると、外国人のいわゆる妾は鑑札を必要としなくなる。居留地に出没する私娼は、日本街より少数であったが、顧客は下層船員によって占められていたという。横浜在住の外国人は、漸次数を増してきていたが、なかには異郷の無聊をなぐさめるため酒びたりになり、浮浪者となる者も出てきた。そこで政府は、外国人相手の「銘酒屋」や居留地の私娼の取締りに密接な関係があるとかんがえ、厳重な監視をおこなう。

しかし1885年、かかる取締りをくぐりぬけ、翁町に外国人専門の飲酒店が開店し「チャブ屋」とよばれるようになった。かくて居留地においても、この種の外国人経営者による銘酒店が簇出し、それは関内にまでおよび、真金町、永楽町の「異人女郎屋を地理的に連絡し」、「一脈の系統線を形成するにいたった」という。「即ち銘酒屋は一箇の淫賣窟であり、ちやぶやでもあつた。而して波止場に稼ぐリキシヤマンは銘酒屋への外人（主として船員）の案内者であつた。彼等の上陸を迎ふるや、車上に招じて、徐歩しつゝ、所謂マドロスを引き廻し、果ては遊郭の異人女郎屋に送り込むのであつた」。³³⁵

チャブ屋の語源は、一説には、食事をあらわした長崎や横浜の港ことばで、正午の号砲が鳴ると「ちやぶだ」「ちやぶろう」「ちやぶした」などといったらしい。また英語の「Chop House」すなわち簡易食堂に由来するという説もある。廉価な料理を提供するといっても、畢竟は銘酒を売り女性を酌人としたもので、それが酒場の類をよそおい「売春」をさせたということである。

外国人遊歩道沿いの休憩所は最初13軒であったが、営業は不拘束であったため、それを模倣して、居留地にちかい本牧付近に店が続出し、1882、3年ごろには、本牧天徳寺の楼屋付近の水田を埋めたて「春木屋」と称する銘酒店が出現した。ついで小港の「大黒屋」、「時川」、上台には「梅木」、北方には「大野屋」などという店が、女性をかかえて組織的な営業を開始した。1893年ごろ、本牧には30軒、北方に10余軒、石川町の地蔵坂、根岸、柏葉の桜道にかけて7、8軒、元町裏通りに10数軒の店ができた。それらは、1910年ごろから、某ハウス、さらに1912年ごろからは某「ホテル」と称するようになり、純然たるチャブ屋の元祖となった。すると、上流階級の外国人も馬車を駆って乗りつけるようになり、「千

³³⁴ 1872年、ペルーの汽船マリヤ・ルス号が、清国で買いいれた奴隷231人を積んで帰航の途中、横浜へ寄港した。そのうち1名が虐待に耐えきれず脱走したのを、外務卿・副島種臣は、奴隷売買は無効であると判決をくださった。船側の弁護士フレデリック・ヴィクター・ディキンズは、日本がもっとひどい奴隷売買をおこなっているとして、遊女の待遇を指摘した。ロシアのアレクサンドル3世の仲裁により、奴隷は全員本国に送還されることとなった。

³³⁵ 横浜市役所『横浜市史稿 風俗編』横浜市役所（1932）p.290

客萬來の繁昌を描く様になつた」のである。³³⁶

佐藤惣之助著『蠅と蚩』中の「横濱懷古」には、日英同盟（1902）の祝祭が横浜市中でおこなわれたとき、公園でもよおされた余興におけるチャブ屋の女性たちのすがたが描写されている。「當時、らしやめんたちの群れや、又外國人に接近してみた女たちは、日本人街の藝妓の余興に對抗して自轉車行列を催した。半外国風のチャブ屋女たちは、ふしぎな色めりんすの洋服でイギリス卷の頭、そして手に櫻の花の造花の枝をもつて自轉車で市中を練り歩いた。當日の余興としてはそれが一番人気に投じたチャブ屋女萬歳、人々は横濱らしく、全く何らの理由もなしにうれしがつて喝采した」。³³⁷

チャブ屋の建物の名称が、某屋から某ホテルにかわってからは、場所も本牧と大丸谷³³⁸に二分され、前者には上流の客が訪れ、後者は主として外国の下層船員等の享樂場となつていったという。營業形態は、一面にはバーであり、他面ではダンスホールであり、なおかつ私娼を擁するというものであった。「チャブ屋女」と呼ばれる女性は、旧式の酌婦や遊び相手にとどまらず「皆ダンサーとしての教養は勿論、現代智識の富裕なる所持者として、談論の出来る新人も尠くない」と記されている。³³⁹

チャブ屋は、当時の歓樂地案内の書にも掲載されており、とりわけ本牧は、モダニズム最先端の地といわれた銀座に対してもひけをとらないばかりか、それとことなる新鮮な魅力があるとみなされ、遊び方の「作法」も逐一紹介された。「どんなに大きな面をして銀座のペーヴメントを歩いて、本牧を知らないやうな奴はモボの資格を有しないと云はれる程、こと程左様に現在では東京人と本牧とは切つても切れぬ腐れ縁だ」。「どこの馬の骨だらうと牛の骨だらうと、お金さへもつてゐれば誰でも遊ぶことが出来る。だゞ、頭のコチコチにかたまつた道学者、貯金の通帳をいつも神棚に祀つてをくやうなケチンボ、モガの嫌ひなバンカラ男、そんな連中は決して本牧あたりをウロウロしてはいけない」。第一キヨホテルのように人気のあるホテルは「往来から玄関まで約七八間もある堂々たる構へ」で、建物は第一、第二があり、第二のほうには馬場がそなえられているほどで、來客の5、6割は外国人であったため「的外れのモボなどが、銀座裏のバーなどに行つたつもりで、下手に女を揶揄つても彼女たちは頭から問題にもしない」と説かれている。³⁴⁰

チャブ屋の店内は、キャバレー、喫茶店、洋食屋をミックスしたような内観で、インテリアも高級ではないが洋風に統一されていた。客は1階で女性とダンスをし、ビールを注文すれば、無料ですきなだけ踊れる。また、2階にあがり宿泊することも可能で、つまり売娼はメニューのひとつにすぎなかつたともいわれる。³⁴¹

³³⁶ 横濱市役所『横濱市史稿 風俗編』横濱市役所（1932）pp.302-303

³³⁷ 佐藤惣之助『蠅と蚩』新作社（1924）pp.94-95

³³⁸ イタリア山庭園のあたりにあつたが、現在は瀟洒な觀光地になり、面影はまったくない。

³³⁹ 横濱市役所『横濱市史稿 風俗編』横濱市役所（1932）pp.309-312

³⁴⁰ 酒井潔『日本歓樂郷案内』彩流社（2014）p.282 p.286 pp.289-290

³⁴¹ 檀原照和『消えた横浜娼婦たち——港のマリーの時代を巡って——』データハウス（2009）p.41

第4節 港と感染

開港後、横浜に駐屯していたイギリス海軍の海兵のあいだに梅毒が蔓延し、日常の軍務にも支障をきたすようになった。³⁴²1863年付けの公使館付医師ウィリアム・ウィリスの手紙には「梅毒や淋疾の総数は恐ろしいほど多く、午前中から診療しなければならないでしょう。若者も老人も女郎買いをして性病になるのには全くうんざりしてしまいます」、「公使館関係の職員の若い連中は、多かれ少なかれ性病にかかっている。公務員は優秀だが、体は非常に虚弱だ」とある。1862年の生麦事件により、1863年5月からイギリス、フランスの陸戦隊が横浜に駐留したが、それ以前から梅毒が流行していたことをウィリスの手紙は証している。³⁴³

近世末から近代初頭にかけて、横浜在住の医師は、漢方医8名、蘭方医1名をふくむわずか10名あまりであった。それ以後の医学、医術全体のおおきな変化は、ヘボンとウィリスに代表される英米医学の進出である。前者は、キリスト教団体の資金で、日本人への医療ボランティアをおこない、後者は、公使館員として英国人中心の医療をおこなったのである。

ヘボンの仕事に感心した「丸善」の創始者・早矢仕有的は、自身も医師であり、1871年、医療団体「両幸社」をつくり、財界人から浄財をあつめ、鶴見の市場村の金剛寺で無料の日曜診療をおこなった。1867年、G.B.ニュートンが吉原町に仮の診療所をつくり、街娼たちを半強制的にあつめ検梅を実施し、翌年に横浜梅毒病院が創立されると、早矢仕はそこに勤務し、真砂町に住んで週1回遊女を検診する。彼は岐阜県の出身で、慶應義塾にまなび福沢諭吉とは子弟というより同志のようであったというが、横浜移住後は世界の情勢により敏感に反応し、同窓の松山棟庵を横浜に呼んだ。両者は、同時期に、ヘボンやオランダ人医師・マイエルに医学をまなんでいる。

本国に送ったニュートンの覚書によると、1. 検梅制度のなかった1867年ごろには、遊女の罹患率は80%であった。2. 1868年に検梅4か月、治療9か月をおこなった結果、遊女の梅毒は51%に減少した。3. 1869年も、検梅、駆梅に努めたところ、36%に減じた、という。彼をたすけたのは、前橋藩医の松山不苦庵であった。³⁴⁴ニュートンは、1870年までのあいだに2千名あまりの患者を治癒させ、長崎にも梅毒病院を建てようと同地へおもむいたが、建設にはおおくの困難がともない、いわれなき中小誹謗をうけ、失意のうちに1871年没した。³⁴⁵

また、ニュートンが検梅をおこなうのをたすけた松山不苦庵（富久庵、藤原義定）は、その名が松山棟庵に似ていることから、彼自身の業績を棟庵のものとされているが、のちに慶應義塾医学部長となる棟庵とは対照的に、生没年、出生地、死亡地すべてが不詳で「足跡をみずから消しているようなところがある」。前橋藩に在ったということは判明している不苦

³⁴² 井出研、杉田暉道編集『横浜区史跡めぐり』横浜総合医学振興財団（1995）pp.3-4

³⁴³ 神奈川県保険医協会編集『仙花堂医史往来』「横浜における梅毒」の史的研究 p.133

³⁴⁴ 神奈川県保険医協会編集『仙花堂医史往来』「横浜における梅毒」の史的研究 p.136

³⁴⁵ 井出研、杉田暉道編集『横浜区史跡めぐり』横浜総合医学振興財団（1995）p.4

庵は、ニュートン死後に同僚のあいだで浮きあがり、東京・芝に新設された海軍病院への移籍を希望したが、神奈川県から拒否をされると、「大阪の駆梅院設立の噂のみで」横浜を去っていった。³⁴⁶

かかる経緯から、遊郭内の娼妓は検徴が義務づけられたが、私娼にはそれがなかったため、1880年、各国の総領事があつまり決議がおこなわれ、取締りの強化がはかられた。しかし、この前後から居留地内に勃興した20余軒の外国人専門の酒場内において、秘密裡の買売春がはびこったことから、防止は困難となったのである。

第5章 初期映画の衝迫と「彼女」たち——Incoherentな系譜—— 渡辺温（1902-1930）

³⁴⁶ 中西淳朗「近代横浜医学への歩み——松山棟庵と松山不苦庵義定まで——」『郷土神奈川』第39号
神奈川県立図書館 pp.1-4, pp.6-7, pp.9-10

松山不苦庵は、自身では不苦庵と名乗り、公的文書には富久庵と署名している。

はじめに

渡辺温は、ささきふさ同様、文学史には名をきざまれることなく、主たる活動の場であった雑誌『新青年』の作家兼編集者として、関係者や同誌の愛好者を中心にその存在を知られてきた。近代の雑誌全盛時代に活動をしていたことも、ささきとの共通点であるが、彼女が外側からの要請を基本的にこぼまなかったのと対照的に、渡辺は、みずから望むところがなければ執筆をおこなわない芸術至上的姿勢を生涯持した。しかし、前途を嘱望され充実した活動をおこなっていた彼は、1930年、交通事故により急逝する。³⁴⁷

従前、渡辺個人に関する本格的な学術論文は存在しない。一方で、渡辺がかかわった『新青年』の研究は、1980年代以降進展している。³⁴⁸本論は、同誌の気圏に渡辺が身を置いたことをふまえつつ、一方で『新青年』周辺の探偵小説作家というイメージが、渡辺の可能性の射程をえがきだすことをせばめる方向にもはたらいたのではないかと考えた。そこで、この点にかんがみ、『新青年』の研究が今日までいかに展開してきたかをいったんおさえていくこととする。

『新青年』への言及が、戦後も評論家や愛好者たちによって占められてきたなか、鈴木貞美の「プロブレマチック：装置としての『新青年』」（1984）は、研究の現状と問題提起を正面からおこなった初のものである。鈴木は、『新青年』以前に、雑誌それ自体が学術的研究の対象とされてこなかったこと、とりわけ純文学の同人雑誌をのぞけば研究の視点も方法も確立していないことを指摘する。そして、そもそも文芸作品の相対的価値を測定する制度が確立していないのだから、最終的には純文学と大衆文学、「正統」と「異端」のシェーマも取りはらわれるべきだと主張する。³⁴⁹

一方、池田浩士は、1926年から34年にかけて最盛期にあったプロレタリア文学運動の相当数の作家が『新青年』に寄稿した事実に言及し、「表現」の規制にかんがみ彼らは書く媒体をえらばなかったのだが、結果として読者との関係までは深慮できなかったと分析している。当該誌のあたりしきは、それまで受け手であった読者が雑誌に参加することで主体になりえた点であったのに、プロレタリア文学の作家たちはその可能性を活かすことを放棄したのだという主張は一定の説得力を有する。³⁵⁰

その他では、1987年に雑誌『ユリイカ』が、『新青年』とその作家たち」と題した特集を組んでいる。なかでも『新青年』の精神世界を「マイクロコスモス」と総括した中野収の論考は、鈴木の「装置」論と通底しつつ、雑誌の規模の必然性にまで言及している点で他

³⁴⁷ 1930年2月9日、原稿依頼のため長谷川修二とともに谷崎宅におもむき、その帰路西宮市外夙川踏切で乗っていたタクシーが貨物列車に衝突、重傷を負った渡辺は翌朝逝去した。

³⁴⁸ 「児童文学特集」のなかで、『新青年』の同期の作家ふたりと渡辺をあつかった論考に浜田雄介「童心と探偵小説——水谷準・渡辺温・横溝正史」『ユリイカ』青土社（1997）がある。

³⁴⁹ 鈴木貞美「プロブレマチック：装置としての『新青年』」『昭和文学研究第1集』笠間書院（1979）pp.22-36

文学史上では、正統派の文学とみなされている北川冬彦の「秋は豊かなる哉」と、渡辺の「氷れる花嫁」の表現形態における同一志向がみじかく言及されている。

³⁵⁰ 池田浩士『大衆小説の世界と反世界』現代書館（1983）pp.86-113

に類をみない。また、その超時代性と同時にモラトリアムの陥穽を、当時の青年の死生観とのかかわりから論じている点が注視される。³⁵¹

1980年代に、学術レベルで『新青年』が考察の対象となったのは、1960年代にイギリスで開始されたカルチュラル・スタディーズが、1980年代に日本で受容された状況と関係があるだろう。その後も同誌に関する考察は散発的におこなわれてきたが、「近代」やモダニティの問題とからめながらも、大多数は個々の作家と作品内世界の分析か、同類の作家、作品同士をむすびつけたものに限られている。そこには、「異端」が、正統的な学術研究から忌避されたのと逆な方向で、カルチュラル・スタディーズをふくむ現代思想から「承認」されて以降、堂々とそれをあつかうことにより、逆な差異化をおこなおうとする意図もうかがえる。だが、かかる姿勢は別な権威の創出にはなっても、文芸作品の「価値」の再考や現状の革新にはなりえないだろう。

上述したような大状況にも関連し、『新青年』研究において決定的に欠落しているのは、ジェンダーの視点である。制度としての文学を論じるにあたり、「純文学——正統」対「大衆文学——異端」という単純な図式は、権力と反権力のような二項対立にとどまり、多元的な視点を捨象してしまう。とりわけ男性性に占められたまなざしが、ジェンダーバイアスを隠匿している問題は、第2章、第3章でふれた通りである。

その意味では貴重なものとして、川崎賢子の論考『『新青年』は横断する——久生十蘭ふう“少女と戦争機械”』がある。同論では、1939年に主人公が「新青年賞」を獲得した久生の小説「キャラコさん」の分析がこころみられているが、それに先だち、彼女が登場するまでの誌面の変遷がつづられる。川崎は、初期の『新青年』は「まぎれもない女嫌いの文化」であったと端的に指摘する。だが「大時代な硬派ぶりは、関東大震災を境にモ・ボ、モ・ガにとってかわられる」。とりわけ、渡辺が編集にかかわる1927年からモダニズム全盛時代にかけて、紙面は「少女からアンドロギュニスまで誰にも遠慮なく」飾られ、「じゅうぶん女性読者を意識した誌面づくりがなされ」たという。³⁵²

だが基本的に「非」総合雑誌としての性格を持し、「統一的な意思を感知できない」メディアたることに特徴があった『新青年』では³⁵³、女性の登場もモダニズム全盛時代の要請といえ、イメージが消費される側面がつよく、まなざされる「女」の位置はほぼ不動であったといえる。

本論は、この点にかんがみ、渡辺の作品における女性と主人公の関係が同誌においては例外的であることをみとめた。なかでもしばしば登場する「娼婦」的存在は、ステレオタ

³⁵¹ 中野収「メディアとしての『新青年』——浮遊するマイクロコスモス」『ユリイカ』青土社（1987）pp.140-147

³⁵² 川崎賢子『『新青年』は横断する——久生十蘭ふう“少女と戦争機械”』『ユリイカ』青土社（1987）pp.148-157

1925年ごろから女性のファッションやあそびに関する記事がふえ、女性執筆者や女性名をペンネームにもちいる男性作家が登場したことが指摘される。渡辺も「赤い煙突」（1927）で「奥村みさ子」、「風船美人」（1928）「十年後の十字街」（1929）で「霧島クララ」を名のっている。

³⁵³ 中野収「メディアとしての『新青年』——浮遊するマイクロコスモス」『ユリイカ』青土社（1987）pp.142-144

イブな造型でなく、彼女たちと主人公の関係は、買売春とも恋愛とも判じかねるものである。かかる描写を、男性側の罪悪感を軽減するための装置と読むのは可能だが、一方で、彼の作品にえがかれる「家族」もいっこうにそれらしくない。「青年」が創出される時期に敷かれた教育勅語により強化されていく家族国家観からへだたり、ここでは「血」を媒介にした「家」の内なる関係と「性」を媒介にした他者との関係の親疎が入れ替わる現象が生じている。

また、本論は、渡辺の創作における「みじかい形式」への徹底したこだわりを注視した。渡辺は、探偵小説と称されるジャンルから出発しながらも、他の探偵小説作家とは一線を画した態度で、文学作品の形態にこだわらない実験的表現をこころみた。そこで、ことばをみじかく裁断する手法は、「物語」の形成からのがれる創作の生命線として、無意識にとらえられていたのではないかと想像される。³⁵⁴あるとき渡辺は、博文館の同僚である横溝正史に、自分には5、6枚のながさがいちばん適して30枚では「長編のような気がする」と嘆息したという。³⁵⁵

従前指摘されてこなかったが、本論は、かかる創作スタイルの基を、渡辺が少年期に出会った「初期映画」によりインスパイアされたと考えるものである。首席で高校に入学したのち、小説に耽溺して勉強が手つかずになるほどでありながら、いわゆる正統の文学形式に自身でむかわなかったのは、長くつづいたその衝撃が、彼をしてよりあたらしい可能性のある表現形式を志向させたからであろう。

後述するように、渡辺の少年時代から青年時代にかけて、日本映画は転換期をむかえていた。そこで渡辺が、理論を経ずに「映画のもつ固有の、純粹に視覚的な表現手段がきわめて豊富になったので、その他の表現手段はすべて棄て去るという傾向が、ますます強くなった。とりわけ、文学的なもの、叙事的筋を棄てる」³⁵⁶というような同時代的「知」の潮流に、共振していた事実は特筆される。作家活動を開始する契機となった懸賞も、そこでもとめられていたのは、映画のストーリーではなく「筋書」であった。³⁵⁷そうして、書くことと並行して、渡辺が舞踏や声楽、楽器を習っていたのは、支配的な表現からの「解放」を模索していたためではないかと考えられる。

初期映画の影響は、彼に、意味の生成や物語的構造を回避するため、みじかく区切られた形式をえらびとらせるだけでなく、あらかじめ馴致されていない自生的な芸術表現にたかい価値を置かせるだろう。外国映画を受容した日本映画の黎明期に成長し、映画につよ

³⁵⁴ ベラ・バラージュ『映画の精神』佐々木基一、高村宏訳 創樹社（1984）p.109

³⁵⁵ 横溝正史「昭和11年温の七回忌に当りて」『渡辺啓助・渡辺温・渡辺濟「W・W・W・年譜」『W・W・W・長すぎた男・短すぎた男・知りすぎた男 渡辺啓助、渡辺温、渡辺濟——「新青年」とモダニストの影』ギャラリー・オキュルス（2008）p.89

原本は直筆色紙。渡辺は、かつて「世に出」という5人の男女が出世するシナリオを書いたが「実に12枚」だったと語った。みじかくて「金」にならないという彼に対し、横溝はたわむれに——だの…だのをつかい行数をふやすようすすめたが「温、微笑して肯んぜず」というようすだったと書く。

³⁵⁶ ベラ・バラージュ『映画の精神』佐々木基一、高村宏訳 創樹社（1984）p.109

³⁵⁷ 1924年11月「プラトン社」の映画筋書懸賞募集に「影」が一等で当選。選者は谷崎潤一郎と小山内薫。

くひかれた青年たちのひとりでありながら、渡辺がその大勢と別に持っていたのは稀有な視点だったといえる。以前に記述された「映画史」との連関もあり、彼における初期映画——初の「線画映画」——体験は、それ自体としては考察されてはこなかった。だが、現在のアニメーションの先駆的存在である 1906 年以前の映像作家たちが、観客とのあいだに設定した関係は、それ以後の物語映画によってうちたてられる関係とは、作品内容ではなく「ありかた」において決定的な相違をみせる。³⁵⁸この点をふまえれば、渡辺における映画の影響も、再考されねばならない時期にきているだろう。

本章は、渡辺におけるみじかくも自生的で脈絡の一貫しない表現が、いかにして獲得されたか、またそれとのかかわりから、作品にあらわれる「性」を媒介にした他者との関係をさぐる。第 1 節では、渡辺における初期映画体験が「活動青年」の大勢とは別な途をあゆませることとなった背景、第 2 節では、近代雑誌王国の凋落が生み出したものと「趣味」、第 3 節では、「兵隊の死」における兵隊の表象と天皇制、第 4 節では、「父を失う話」、「可哀想な姉」、「或る母の話」にあらわれた「血」と「家族」、そして第 5 節では、港が媒介する他者との超越的な関係について考察する。

第 1 節 スクリーン・プラクティスとしての活動写真

(1) ものがたられない映像

渡辺温は、1902 年 8 月 26 日、渡辺伊太郎とツ子^{おん}の三男として北海道上磯郡に誕生した。³⁵⁹父は、旧秋田藩領白岩村の庄屋・渡辺家の出身で、高等工業高校を卒業、母は、佐竹氏秋田藩の家老職・梅津家の出身で、女子高等師範学校を卒業している。きょうだいには、長姉に由子、次兄に啓助、弟に濟がいる。国語と漢文の教師を務めた母親は、1917 年にラビンドラナート・タゴールが来日したとき、率先して子どもたちと歓迎の群れに加わったという。当時の一般的な既婚女性とはことなり、文芸を愛好し家庭でものびやかにふるまう彼女は、渡辺の女性観にすくなからぬ影響をおよぼしたものと想像される。北海道セメント会社の技師であった父の転勤のため、1903 年に一家は東京市本所区太平町に超越し、さらに同年、深川区猿江町に移る。³⁶⁰1 歳ちがいということから双生児のように、幼少時のみならず成人してからも行動をともにした兄・啓助は、一家が当時スラムとよばれた場所に居をかまえた時代を回想する。

³⁵⁸ トム・ガニング「アトラクションの映画」中村秀之訳 長谷正人・中村秀之編『アンチ・スペクタクル 沸騰する映像文化の考古学』東京大学出版会 (2003) p.305

³⁵⁹ ペンネーム「渡辺温」で知られるが、本名は渡辺 温。

³⁶⁰ 小林伸一編集「珠玉の短編を残した夭折の作家——渡辺温と日立市・水戸市——」『常陽藝文』No.182

(1998) pp.4-5 pp.10-11

しかし、厳密に云うと、僕らの家は、ひんみんくつの中にあつたと云え、それとは一線を画するセメント工場の敷地内の社宅の一軒であつた。父は貧しい安サラリーマンに違いなかつたが、ともかくもその工場の幹部社員であつたから、周囲の貧民街とくらべたら、ほんの僅かばかり、ましな生活であつたろうとは思われる。しかし、僕ら自身がやっぱり貧民街そだちだつたことには、いささかの違いもない。僕は今でもあの頃がひどくなつかしい。人間の性格が、もっぱら幼年期に形成されるとすれば、よくも悪くも、僕らはあのスラム街に負うところが少なくないわけである。³⁶¹

1909年4月、渡辺は、深川区東川尋常小学校に入学する。その後、小学5年生の兄と3年生の弟は、両親に内緒で片道2時間をかけ、深川から本所の第七福宝館へかよう。³⁶² 1926年6月、「渡辺裕」名義で雑誌『劇と映画』に掲載された「想出すイルジオン」には、そのころの体験がつづられている。

明治四十年頃の話。その時分黒地に白線で画いた線画映画が流行した。始も終もなただ変な骨格だけの戯画^{ボンチネ}が一つ一つ気儘に動廻っているに過ぎない。兵隊、紳士、交番、娘。兵隊の体が突然横に吹き流されて交番と衝突すると兵隊の頭から星が飛散る。それから紳士と娘とが手を敲くのである。……幼孩にして既にイカモノ喰いの僕の眼に、それ等の出鱈目が如何に嬉しく映つたことであろうか。³⁶³

おさない兄弟の映画体験は20世紀初頭にあたっているが、そこでは、現在の映画体験にふくまれる要素は、決して当然のものではなく、同時に存在したさまざまな可能性を有する体験の一部にすぎなかつた。

初期映画の歴史は、ながきにわたり映画史一般と同様「物語映画」のヘゲモニーのもとで理論化されてきたが、その後、異論が唱えられた。当時の映画は、「物語を語る手段」であるよりも観客に向けて「一連の光景を提示する」手段だつた、というものである。すなわち1906、7年ごろまで映画を支配した概念「アトラクションの映画」では、ストーリーテリングの魅力よりも、なにかを「みせる」能力に基礎がおかれ、「自己完結」的な虚構世界は亀裂を入れられた。そこでは、ストーリーは、映画のさまざまな魔術的可能性をならべて誇示するための「枠組み」を提供するにすぎない。

アトラクションの映画は、心理的動機や個人的人格を備えた登場人物を創造するこ

³⁶¹ 渡辺啓助「温という弟」『アンドロギュノスの裔』薔薇十字社（1970）p.364

啓助は、九州帝国大学法学部西洋史学科で西洋近世史を専攻、1930年に福岡県立八女中学の歴史科の教師となり、並行して『新青年』に小説を発表していく。1936年、「亡霊問答——渡邊温七年忌に——」を書いたのちは作家業に専念し、多数の推理小説、随筆を発表した。

³⁶² 渡辺啓介「温という弟」『アンドロギュノスの裔』薔薇十字社（1970）p.365

³⁶³ 渡辺温「想出すイルジオン」『アンドロギュノスの裔 渡辺温全集』創元社（2011）p.563

とにエネルギーを費やすことはほとんどしない。フィクションとノンフィクションの双方のアトラクションを活用することによって、そのエネルギーは、古典的物語には不可欠である登場人物本位の状況へと内向きに作用するよりも、そこに居合わせていると想定された見物人に向けて外向きに作用するのである。³⁶⁴

上述したような以前に記述された「映画史」との連関もあり、従前、渡辺における初の「線画映画」体験は、それ自体としては考察されてこなかった。だが、現在のアニメーションの先駆的存在である1906年以前の映像作家たちが、観客とのあいだに設定した関係は、それ以後の「物語映画」によってうちたてられる関係とは、作品内容ではなく「ありかた」において決定的にことなる。³⁶⁵

渡辺がみた線画映画には、当時日本に輸入されたフランスのエミール・コールの作品がふくまれていると考えられる。1910年に、福宝堂が続々と輸入をした「凸坊新画帳」のシリーズは、「ファントージュ」という主人公が活躍するもので、爆発的な人気を呼び、「凸坊新画帳」といえば漫画映画の代名詞のようにいわれたという。³⁶⁶この逸話は、小学生の渡辺兄弟が、映画館にかよったころと時期的に一致している。

風刺画家、コミックストリップのパイオニア、アニメーションの創作者として知られるエミール・コールことエミール・ウジェーヌ・ジャン・ルイは、1857年、パリで上昇志向をもつブルジョア家庭に生まれた。街中に住んでいた彼は、1871年、友人とあそんでいるときバリケードに待機する兵士たちをしばしば目撃している。進行中のパリ・コミュン直接目にした経験は、彼の初めての政治的風刺画を表出させる契機となった。政治の白熱した時期に、パリの腕白少年らしく路上で日々をすごした彼は、大量の「稚気ある」風刺画が陳列された書店のウィンドーのまえで長い時間たたずんだのである。1878年、第二帝政期の政治風刺画にみられる地下芸術を活性化させた風刺画家、アンドレ・ジルの知遇を得たコールは、彼に定義された肖像画の革新をこころみる。³⁶⁷

ジルに紹介されたサークル「水治療法派」は、文学や演劇関係者のボヘミアンたちであり、彼らとのつきあいは生涯つづく。「水治療法派」は、乱暴に不変不満を体現するような抵抗の方法よりも、形式やジャンル、上品さをくつがえすことによりブルジョア秩序への拒否を表明した。ボヘミアンの芸術家たちは、社会的な下層階級とまじわることで、いりみだれ流動的な大衆を形成したのである。グループの名称は、実際の水治療法とは無関係であり、「(水をきらい) 酒を愛する」精神のアイロニカルな表明であった。彼らの前任

³⁶⁴ トム・ガニング「アトラクションの映画」中村秀之訳 長谷正人・中村秀之編『アンチ・スペクタクル 沸騰する映像文化の考古学』東京大学出版会(2003) pp.304-308
ガニングによれば、物語が支配するようになったのちもアトラクションの映画は完全に消えさることなく、アヴァンギャルド的表現に潜伏したという。

³⁶⁵ トム・ガニング「アトラクションの映画」中村秀之訳 長谷正人・中村秀之編『アンチ・スペクタクル 沸騰する映像文化の考古学』東京大学出版会(2003) p.305

³⁶⁶ 山口且訓・渡辺泰『日本アニメーション映画史』有文社(1978) p.8

³⁶⁷ Crafton, Donald. Emile Cohl, Caricature, and Film : Princeton UP, 1990 3-12.

者は、ボードレー、マラルメ、ランボー、ヴェルレーヌ等だが、後生がことになっていたのは、あたらしい時代の多元性が、過去の「公式」であるシリアスさ、内向、病的な状態に対抗したことである。それゆえメンバーのひとりジュール・レヴィのモットー「兄弟よ、われわれは笑わねばならない」は、過去の象徴主義者のキャッチフレーズ「われわれは皆死なねばならない」への暗黙の拒絶だったのだ。³⁶⁸

1908年、コールは、フランスの映画会社「ゴーモン」に作家として雇用されるが、その年に制作した「ファンタスマゴリー」は最初期のアニメーション映画で、渡辺もみたであろうと推測される作品である。コールの創作には、19世紀のグラフィック芸術が、いかに20世紀の映画芸術に影響したかの過程をみることができる。初期映画は、ひじょうにインターテクスチュアルなシステムで、さまざまなテクノロジーの雑種であり、他の大衆芸術から派生した異種の審美的モデルなのである。たとえば、映画とコミックは、同時代的に19世紀に誕生しているが、ストーリー構築はコミック・ストリップが完全に先であり、それがフィルムに統合された。そして両者は、「知識人からの軽蔑」と「公衆からの絶賛」を受けながら、おなじ文化的美的目標を志向する。映画的と呼ばれるものの起源の一は、コミック・ストリップにあり、ショットやシークエンス、アングル、パースペクティブ、前方や後方への「視」の追跡の制限されない可能性といった概念において両者はほぼ同一なのである。³⁶⁹

初期映画のみじかさは、当初一般的なフィルムの長さが約20mだったことにもよるが、それは発達史観にみなされる「技術的な限界」ではなく、そこにみじかさの秘める「可能性」がみとめられる。映画表現にかんがみれば、それはひとつのユーモラスなシーンをつくることができたのだともいえるが、同時にみじかい区切りに「物語」に回収されない自在性がのこされていた点は看過できない。かかる「みじかさ」は、渡辺の創作にとっても命であり、時間的にはコールよりも20年ほどおくれた20世紀初頭の日本で、創作の結晶をみたのだった。コールに限らず、当時は著作権など考慮せずに、グランギニョールやコミック・ストリップ、演劇、童話、小説等目に入るものすべてから触発された創作がおこなわれていたが、渡辺も、メディアの「内爆発的状况」³⁷⁰から影響を受けつつ、そこを踏破する表現を模索していた。

コールの映画は、「脈絡の一貫しない」稚気あるアナーキーを復活させ、それは、みる者に反ブルジョアジー、反アカデミズムを想起させた。「Incoherent」は、たかい価値を、馴致されていない自生的な芸術表現に置いていた。彼らは、ルールや因襲、標準的な外聞に順応して牙をぬかれることを断じて拒絶したニヒリストだったのである。日本の近代は、西洋的「知」を積極的に取り入れながら、性急な摂取は表層にとどまりがちで功利

³⁶⁸ Crafton, Donald. *Emile Cohl, Caricature, and Film* : Princeton UP, 1990 19-20.

³⁶⁹ Crafton, Donald. *Emile Cohl, Caricature, and Film* : Princeton UP, 1990 255-266.

³⁷⁰ 前田良三「キルヒャーと可視性のメディア——メディア文化史的注記——」『19世紀学研究』第9号 19世紀学学会（2015）p.74 17世紀ヨーロッパの先駆的状况にもちいられた語で、映画のようなあたらしいメディアが誕生しただけでなく、既存のメディアが他のメディアとの関係で、あたらしい機能や意味をおびはじめた状態を指す。

にながれやすかったが、立身出世主的価値観の崩壊したのちの世代にとって、学知が学知そのものにとどまるようなまなびは、あらかじめ意味をなさなかった。たとえば、渡辺における己自身のパロディをもあえて演じるような心性は、ブルジョアまがいの格好をしながら、それを嘲笑してみせることすら可能であった。あからさまな反抗の態度など、むしろ冷ややかに排した彼は、「Incoherent」な稚気あるアナーキーの後裔だったといえる。

「ファンタスマゴリー」では、最初黒板上に白線と手が現われ、スケッチをはじめると主人公のクラウンになる。悪戯者の冒険は三つのエピソードから成る。クラウンは、みえかくれしつつ、自在に空間を破壊したりかたちづくったりする。みじかいフィルムは、タイトルの意味をみたしており、イメージは夢のようにはかなく、現実の合理化を拒絶している。生きた線画は、未来を志向し、シュールレアリズムの自動筆記への期待を萌芽するかのようなのだ。そこには、黎明期の *motion picture* があざやかに息づく。

近代の「日本映画」も、あるときに完全なかたちで「誕生」した——起源が明確に知れる——のではなく、当初は基本的に雑多なライブ・パフォーマンスであり、演劇体験に近いものであった。その場所では、観客の目前で、弁士の解説や楽隊の演奏がおこなわれていた。俳優は無名もしくはアマチュアで、白黒のフィルムは数分の長さであり、典型的なプログラムとはそれらを組みあわせたものを指した。また上映の場では、暗黙のルールもなく、観客は飲食しながら大声で話したりさけび声をあげたりしたのである。³⁷¹ 渡辺が兄とともに映画館へかよったころには、輸入された外国作品とともに、ジャンルの境界線上にある「連鎖劇」やキネオラマなどが上演されており³⁷²、1年たらずですたれてしまったキネトスコープを模造した「一銭活動」が、遊園地や勧工場の遊歩場にそなえつけられ、こどもたちの感興を呼んだのだった。³⁷³

日本映画の「起源」が再考されたのは近年においてであり、進化論的なパースペクティブは、ながいあいだ正当なものともみなされ疑問がいだかれなかった。長じてのち、渡辺がなげくこととなる世にも「いみじい夢」の喪失は、映画における制度の発達と密接にかかわっている。彼が価値を置いた初期映画の時期は、「シネマトグラフがまだ存在しない世界、そして、初期のフィルムが制度化された映画に置き換わりもはや存在しなくなった世界、この両方と隣接している」。その境目の時期にこそ、視覚的实践とそれにもなう多義性、開放性、不確定性が、「放逐されず」に存在したのであった³⁷⁴

³⁷¹ ローランド・ドメーニグ「映画の誕生」再考——映画の起源に関する見解と日本のスクリーン・プラクティス」 碓井みちこ・大傍正規訳『映画史を読み直す 日本映画は生きている第二巻』岩波書店 (2010) p.24 p.26

³⁷² 大久保遼『映像のアルケオロジー 視覚理論・光学メディア・映像文化』青弓社 (2015) 第6章「連鎖劇とキネオラマ——活動写真の1910年代」にくわしい。

³⁷³ 田中純一郎『日本映画発達史 I 活動写真時代』中央公論社 (1980) p.37

1896年神戸に輸入されたキネトスコープは、つづいて横浜へも輸入されたが、シネマトグラフやヴァイタスコープが相次いで輸入されると、覗き穴のちいさいこと等から人気は急落した。

³⁷⁴ ローランド・ドメーニグ「映画の誕生」再考——映画の起源に関する見解と日本のスクリーン・プラクティス 碓井みちこ・大傍正規訳『映画史を読み直す 日本映画は生きている第二巻』岩波書店 (2010) p.31

初期映画には、撮影者が複数ショットを使用して「物語」を織りなしていく——コントロールする——手法が存在しない。「単数ショットはプリミティブな構造において、意味の曖昧さを意味する、開かれた意味をもっている。この特徴が意味化されるために、一つの命題を作り難い初期の映画は、後に現れる仕方とは異なったモードを形成した。それは映される対象が動くという、映画にとってはあまりにも明白な仕組みに向けられている」。³⁷⁵

渡辺が、理論ではなく直観として、初期映画に「物語世界を創造することからの自由」³⁷⁶をみとめていたのは、当時において稀有な視点であるといわねばならない。芸術の「正典」に拝跪しなかった彼は、線画映画のような作品をこどものみが興じる幼稚なものなどとはみなさず、長じてのちもそこからの衝迫を胸にとどめおいたのだった。物語の構造をもたない「始も終もない」骨格だけの戯画が、個の単位で「気儘」にうごきまわる映像の痛快さは、彼に生の偶然性——現前する世界のありようが絶対ではないこと——を暗示したのではないかと想像されるのである。

(2) 技術と評論

前述したような発達史観に占められた映画史は、進化の到達点という観点にもとづき、「同時代における技法の択一」という事実や、「別な形式」をながきにわたり無視してきた。それゆえ、映画存在自体を捉えかえし、映画史を再記述するためには、「初期映画史の各段階で何が起こったかを学問的に知る」べく、「慣習的な映画史記述の進化論及び目的論をまず捨て去らねばならない」。³⁷⁷

たとえば、日本映画に関して「放浪見世物から常設興行物として多少でも定着性を持つようになったのは日露戦争前後からで」、観客数の増加は映画業界の経済状態を急激に好転させるが、事業の根幹は外国映画に負っていた。「いくつかのスタジオで作られる日本映画の幼稚さは、技術も、製作設備もお粗末であり、その多くは製作に対する研究や調査が手薄であった」。「そこには、普通写真師の中からでてきた好事家や、その徒弟、舞台出の作者や役者、大道具、小道具係りなどがいて、もとより映画専門の技術を身につけた一人の芸術家もいなかったのである」³⁷⁸というような同時代的「証言」からは、かかる言説が諸種の偶然からドミナンスを得「正史」を築いていく事跡が看取される。

しかし、昨今の映画研究においては、「歴史を垂直にではなく水平に」みようとする姿勢から、かかる発達史観に対しても自由な批判が提出されるようになった。³⁷⁹たとえば

³⁷⁵ 小松弘『起源の映画』青土社（1991）p.78

³⁷⁶ トム・ガニング「アトラクションの映画」中村秀之訳 長谷正人・中村秀之編『アンチ・スペクタクル 沸騰する映像文化の考古学』東京大学出版会（2003）p.310

³⁷⁷ 小松弘『起源の映画』青土社（1991）pp.14-15

³⁷⁸ 田中純一郎「映画製作・興行の創始者たち」『講座 日本映画 2——無声映画の完成——』岩波書店（1986）p.87

³⁷⁹ 小松弘『起源の映画』青土社（1991）p.17

1910年代の日本映画の評価を、評論家の観点によるのではなく一般の声をも通じて再考して
いこうとするところみ等、現在では多元的な映画史の再考がおこなわれている。³⁸⁰

以上の経緯をふまえれば、初期映画の体験が同時代的に多数の子どもたちに共有されな
がら、長じてのち、渡辺とその他の映画青年たちのあいだに懸隔が生じたのはなぜか？
という疑問がわく。たとえば、田中純一郎（松倉寿一）は、渡辺とおなじ1902年の生ま
れであるが、前述の回顧にうかがえるごとく日本映画の「後進性」は容易に改善されな
かったとし、「映画芸術に無知蒙昧の一部野望家によって、映画興行と映画芸術結実の芽が
つみとられてしまった映画創始期にあって、さらに映画の発達を阻害、衰頹させたのは、
わが国独特の活弁（活動弁士）とよばれる映画説明者の野放図な跋扈であった」と述べて
いる。³⁸¹渡辺、田中と同年齢で、戦前から戦後にかけて評論活動をさかんにおこなった飯島
正も、当時の映画は「弁士のため」存在するかのよう感じ「これではどう考えても映画
が発達しっこない」と、彼らを「蛇蝎のごとく」きらったという。³⁸²

対照的に渡辺は、「想出すイルジオン」（1926）で、イタリア映画の「さらば青春」
（1918）のラストシーンに、弁士が「汽車は出て行く煙は残る、残る煙が癩の種——」と
いった「そのいみじき文句が殊の外身に沁みて聞かれた」と悠揚たる態度で語ってい
る。³⁸³「活弁」によるオリジナルの「フレーズ」へのすなおな反応は、同期の彼らの態度
ときわめて対照的であり、「制度以前」の形態を真向から否定しようとしぬ態度が注視
される。

しかし、活動写真が映画に移行する過程では、それを浅草のレビューや数多の見世物のひ
とつとして享受していた大衆とことなる観点において、そこに積極的に「芸術」をみだし、
まなび、論じていこうとする青年が増加しつつあった。飯島によれば、彼が当時住んでいた
品川に娯楽館という「二流か三流の小屋」があり、弁士の練習のために試写会がおこなわれ
ていたが、彼と友人たちは出入りをゆるされていたという。そこで発行されている『娯楽館
ニュース』は、映画の筋書でなく、「映画論」ばかりを載せており、彼には「愉快」だった。
映画においては「表現技術」がもっとも重要だとかんがえていた飯島は、府立一中の同級生
と「あれは映画になっていたとか、なっていないとか」語りあい「実をいうと中身なんかどう
でもよかった」のだと告白する。飯島によれば、当時1学年に1割は、同様な関心を共有でき
る学生がいたという。³⁸⁴

（3）純映画劇運動／プロキノ

³⁸⁰ 小川佐和子「外国映画との対峙——大正初期日本映画のダイナミズム——」『映画史を読み直す——
日本映画は生きている——』第二巻 岩波書店（2010）pp.92-94

³⁸¹ 田中純一郎「映画製作・興業の創始者たち」『日本映画の誕生 講座日本映画1』岩波書店（1986）
pp. 98-99

³⁸² 飯島正「日本映画の黎明——純映画劇の周辺——」『無声映画の完成 講座日本映画2』岩波書店
（1986）pp.98-100

³⁸³ 渡辺温「想出すイルジオン」『アンドロギュノスの裔 渡辺温全集』創元社（2011）p.565

³⁸⁴ 飯島正「日本映画の黎明——純映画劇の周辺——」『無声映画の完成 講座日本映画2』岩波書店
（1986）pp.107-113

当時、映画館にかよいつめていた東京高等工業学校の学生・帰山教正は、1913年に映画の同人誌『フィルム・レコード』を創刊、同年末には雑誌名を『キネマレコード』に変更し、誌上で映画評論を展開していく。同誌は当時、知識人学生たちによる唯一の謄写版刊行物であった。彼は、1917年、天然色活動写真に入社すると、映画ジャーナリズムのなかでさらに発言力を高めていく。そして、旧来の日本映画に「純粋な」映画の定義を設定するため、映画的分析を経た編集、クローズ・アップ、女優の使用、細部まで計算された演技の必要性を説き、純映画劇運動を展開するのである。

前述したように、日本映画の「後進性」にいらだちをおぼえ、それを指摘せずにはいられなかった高校生の飯島は、あちこちの新聞に「純映画劇運動に賛成」と書いて送った。すると同様の行為が「日本全国に散らばって」大勢力となり、それらを統率する『活動之世界』の主幹・井出鐵處が、純映画劇運動を後押しした。そうして受身の観客ではなく一家言を持つ映画通たちが、この運動を促進することになったのだと述懐している。³⁸⁵

会社からの出資を取りつけた帰山は、1918年に『生の輝き』つづけて『深山の乙女』を製作するが、弁士たちの反対に遭い両作品とも公開は翌1919年となった。飯島は、『生の輝き』について、「中身」は語るほどのものはないが「形式が完備している普通の外国映画と同じような映画というのが唯一の望みだったから、それが実現するだろうということが大変な喜びだった」と告白している。以前の女形でなく女優・花柳はるみを起用し、主要なセリフをスポークン・タイトルとして挿入し、弁士が説明しなくともストーリーがわかるようにしたこと、クローズ・アップやロング・ショットなどサイズのちがうショットにシーンを分割して、舞台の引きうつしでない場面の変化をはかったこと等は、日本の映画界においては画期的なことであった。³⁸⁶

しかし、重要なのは、それらの映画研究がいかなる「問題」を創出したかを認識することである。映画研究の支持者は、社会問題としての映画の定義づけに立ちふさがり、ほかの映画読解のモードを削除しようとした。そして映画の地位を改革するため、メディアムの正統な話者としてほかの人間が映画について語ることを否定しようと、彼ら自身の権威を断固として主張する。みずからのポジションを守り、「敵」におけるほかの映画実践を、「映画的でない」とみなし排斥する。だが、否定された日本映画や下層階級のテイストを反映させた映画は、それ自体に、日本社会における当該の階級のダイナミクスがきざまれていたのである。³⁸⁷

純映画劇運動のピークは、関東大震災前の1920年代前半であったが、1920年代後半に

³⁸⁵ 飯島正「日本映画の黎明 純映画劇の周辺」『無声映画の完成 講座日本映画 2』岩波書店（1986）pp.107-108

³⁸⁶ 飯島正「日本映画の黎明 純映画劇の周辺」『無声映画の完成 講座日本映画 2』岩波書店（1986）

³⁸⁷ Gerow, Aaron. *Visions of Japanese Modernity: Articulations of Cinema, Nation, and Spectatorship, 1895-1923*. U of California. 131-132

は、プロレタリア運動と関連した「日本プロレタリア映画同盟」＝プロキノが創設される。1928年、ただひとりのプロレタリア劇場映画班員であった佐々元十は、映画といえば既成の35mmの商業映画しか認知されていなかった時代に、小型映画とよばれ有産階級の玩具とみなされた9.5mmあるいは16mmのフィルムを武器とし、思想的表現を開始した。あらたな非劇映画のこころみと集団製作という点では、先行のソビエト映画が参照されたが、そこでは、現地でソビエト映画を実際にみて映画人と接触した「岡田桑三がインフォーマントとしての役割をはたしたであろうことが推測される」。³⁸⁸

前述したように、教会を通しささきふさとは幼時からの友人で、『新青年』における映画関係の企画等から渡辺ともつきあいがあった岡田は、1929年、プロキノの作品として『山宣告別式』を撮影している。同年3月5日、開催中の議会において、孤塁を守る意志で治安維持法改悪に反対していた京都の労働農民党代議士・山本宣治は、宿泊先の神田光栄館で、右翼の黒田保久二に刺殺された。それへの抗議として、3月8日に本郷の東大仏教青年会館で告别式がおこなわれることとなるが、情報を入手した岡田はただちに撮影を決意する。そして、首尾よく撮影を完了すると、松竹鎌田の撮影所に直行し現像を済ませた。岡田は「松竹映画の映画俳優・山内光という立場を利用して、みずからの政治的信念に基づき、蒲田スタジオのフィルムを盗用し、現像するという私的利用を大胆におこない、公的政治活動をおこなった」のだった。彼は、それから4か月後『山宣告別式』のフィルムをたずさえ、ベルリン、モスクワを再訪し、エイゼンシュテイン、ティッセ、プドフキンらと交遊する。³⁸⁹

プロキノは、思想を伝達するため、階級闘争の現場を報道するニュース映画として『山宣告別式』(1929)のほか『野田醤油争議実況』、『第12回東京メーデー』(1931)、ドキュメンタリー映画『こども』、『隅田川』(1931)、『アスファルトの道』(同)や、思想を平易にえがいたアニメーション『アヂ太プロ吉消費組合の巻』(1930)、またアジ・プロ宣伝映画である『俺達の広告』(1930)を製作した。³⁹⁰

全日本無産者芸術連盟＝ナップに所属するプロキノは、準機関誌『新興映画』の刊行に力をそそいでおり、組織の拡大強化と映画の批評に活動の支点があった。1929年の同誌には、石井勝「腐ったパン スタディオのからくり」、西川章三「映畫殿堂とはこんなものだ——果然武蔵野館楽員を解雇15名の内7名を」、長谷川騏之「河合映畫と一族郎黨主義」、田中純一郎「映畫検閲の研究・1」、瀧田出「地方小都市農村と小唄映畫」等の記事がならぶ。

石井は、会社へ見学にやってきた上層部が「君達俳優諸君は藝術家だ」といいながら、暗

³⁸⁸ 川崎賢子・原田健一『岡田桑三 映像の世紀——グラフィズム・プロパガンダ・科学映画——』平凡社(2002) p.174

³⁸⁹ 川崎賢子・原田健一『岡田桑三 映像の世紀——グラフィズム・プロパガンダ・科学映画——』平凡社(2002) pp.23-24

³⁹⁰ 川崎賢子・原田健一『岡田桑三 映像の世紀——グラフィズム・プロパガンダ・科学映画——』平凡社(2002) pp.172-173

に給料など問題ではなく「一心に芸術に精を出せばいい」と説く態度を、そんなことばをいつまでもありがたがりはしないと拒絶し、「藝術家なんて犬に喰はれて了へ！」とつづる。「スターや監督達の艶話ばかりより知らない世間の人間よ。俺達だつてさう何時まで眠つてやしないんだ。プロレタリアの一員として、三人五人十人二十人、俺達兄弟は眼覚めつゝある」。³⁹¹

また長谷川は、社員のつくった派閥が会社にはむしろ利をもたらし、それをたくみに駆使し多大な搾取が可能であることに注意を喚起しつつ、工場法の適用も把握していない従業員にむかい、諸君は自身は何であるか知っているか？ と問う。³⁹²そして瀧田が糾弾するのは、『波浮の港』、『君戀し』、『からたちの花』、『東京行進曲』、『沓掛時次郎』、『紅屋の娘』等の「小唄映画」が、小都市農村におよぼす影響である。常設館は、独唱、小唄ジャズと安価な情愛、性的本能の当て込みと観客の吸引に「血眼」になっているが、たとえば地方の女工が活動写真にひさしぶりの慰安をみいだそうとしたらどうだろう？ 彼女らは、みずからえらぶのでなく「支配階級の政策に依て自由を抑壓され」、気づかずそれらを見せられているのだ。だが、そうであるからこそ、その「小唄」に労働歌を入れるべきではないか。

そうだ俺達は俺達で映畫を作つて俺達で見るんだ。³⁹³

1930年、すべての映画評論家を包摂する「大衆」団体である「映画批評家協会」の設立がもくろまれるが、その案は後日批判にさらされ、プロレタリア映画の製作、上映の強化が優先されることとなる。プロキノの政策転換すなわちボルシェビキ化により、商業映画全否定の論調が明確になると、商業映画に出演する山内光＝岡田桑三はむずかしい立場に置かれた。岡田は広告塔としての価値があったため、プロキノは、同盟員でなく理解を示す進歩的知識人の役割をあてたのであり、プロキノ友の会結成以後、「山内光は、その旗振りをする」にとどまる。³⁹⁴

だが、プロキノ側からの評価にかかわらず、1932年、岡田は日本共産党に急接近していた。当時、党員でない岡田に、『赤旗』が定期的にとどけられただけでなく、夫婦でみずからその配布にたずさわっていたという。これらの事実から、岡田は各運動に有効性をみとめつつも、「主義」に随従するのではなく、自身を最大限に活かしながら態度を保留していたものと想像される。

³⁹¹ 石井勝「腐つたパン スタディオのからくり」『新興映画』第1巻第1号 新興映画社（1929）pp.38-41

³⁹² 長谷川駿之「河合映畫と一族郎黨主義」『新興映画』第1巻第1号 新興映画社（1929）pp.46-49

³⁹³ 瀧田出「地方小都市農村と小唄映畫」『新興映画』第1巻第3号 新興映画社（1929）pp.45-47

³⁹⁴ 川崎賢子・原田健一『岡田桑三 映像の世紀——グラフィズム・プロパガンダ・科学映画——』平凡社（2002）pp.181-183

(4) 「いみじい夢」の奪還

渡辺は、1924年、雑誌『女性』の「懸賞募集映画劇ストーリー」において「影」が1等で当選した——審査員は谷崎潤一郎と小山内薫——際のコメントで、おさない時分から2、3年前まではよくみた「活動写真」をちかごろあまりみない、なぜなら飽きさせられたからだと言っている。最後にそれをみた1921、2年ごろは、純映画劇運動が展開されていた時期にあたる。帰山たちの純映画劇運動にも、そのながれにおいて谷崎が同時期につくった映画「アマチュア倶楽部」(1920)、直接師事をした小山内作の映画「路上の靈魂」(1921)についても、渡辺は公的な言及をしていない。飯島が、「(谷崎は)映画の見方がわれわれと同じ」であるためおおいに期待していたという同作品を、アメリカ喜劇の模倣であるが「そういう真似はあまり気にならない」、「新派悲劇のようなラブ・ロマンスの真似は気になるけど、中身がない」と語弊があるけど、中身がなくて形式に影響されているというのは、むしろ気持ちがいい」としながら、スラップスティック向きの音楽的なリズム感を出すにはテンポがおそい等さかんに評しているのと対照的である。

当時の映画をめぐる渡辺の文章からは、個々の映画が名作かどうか、価値のあるものなのかどうかということ以前に、映画の置かれた大状況に対する彼の苦悩がうかびあがる。文中で彼は、来し方と未来に考えをめぐらせることにより、あたかも現在を逆照射しようとしているかにみえる。

たとえば1926年、『劇と映画』に掲載された「想出すイリュージョン」では、ちかい過去が、あたかもとおいそのように回想されつつ語られる。アメリカの「連続映画」も「なかなか面白かった」し、^{ブルーバード}青鳥映画、^{レッドフェザー}赤羽映画にも相当感心させられた。しかし、この程度の「感心」は、以後現在にいたるまで数限りなくあり、その一部分をさえただしく思い出すのは容易なことではない。また「新時代の産物」と称された『カリガリ博士』は、5、6年前にみせられたときにはまことに驚嘆し讚美したのであるが、あらためてみると、もはや「途方もない感激はみあたらない」。そこには、漠としたおおきな疑問——感興はなぜうしなわれたのか？——がなげかけられている。

この思いは、同年の12月に「オン・ワタナベ」名義で『映画時代』に発表した「オング君の説」では、批判へとはっきりかたちをかえる。ただしそれは、冷静な「評論」形式でなく、とりとめのないおしゃべりのなかに核論をしのばせた渡辺独自のスタイルである。

この間私はカフェ・ホノルルでオング君に出会った時、私の編輯している映画雑誌に何か書いてほしいと頼んだ。すると、少し酔っぱらいであったオング君は次のようなことを言い出したのである。

僕はこの頃すっかり活動写真が嫌いになりました。活動写真がちっとも活動写真的でなくなってしまったからです。それと云うのもみんな活動屋がいけないせいです。ですから僕は活動屋を憎みます。銀座通を縞リボンの帽子をかぶって、フオアインチをはいて闊歩しているすべての活動屋は灰色の猥で、活動写真がもっていた世にもいみじい夢を悉く食べてしまったのです。ファンタジイの無い活動写真程愚しいものはまたとないと思います。³⁹⁵

調子は、はげしくないながら、臆せず持論を展開しているのが大手出版社の発行する映画雑誌上であることには渡辺の姿勢がうかがえる。

純粹の活動愛好家と云うものが、若し奥山の覗き眼鏡やパノラマを見ていた子供達はその儘大きくなったものとしたなら、彼等は最も懶惰な荒唐無稽を愛する品質の人間である筈だと思います。阿片に酔い痴れた人々にとっては、阿片の製造方法についてよりも、真夜中の蒼ざめた海に浮かんだ幽霊軍艦の物語の方が遙かに興味深いものです。

よき映画雑誌はつまり、活動写真の本質が観客に与えるところの興味と一途に共通した興味を読者に与えてくれるのが本当なのです。たとえば魔法ランプ、メスメリズム、ナルチスムス、競馬、巴里の流行、それから強盗や Lustmord の新聞の三面記事のたぐい或はすぐれた探偵小説……そんなものが映画雑誌に満載されていたとしたならば、そして若し役者のゴシップとか撮影餘談を書くにしても、それ等がみんな有りもしない出来るだけデタラメなイカサマばかりであったならばどんなにか素晴らしい事でしょう。³⁹⁶

彼は、「でたらめなゴシップ」を載せても、本人からは抗議が出るわけがないという。なぜなら、「活動の役者は芝居の役者とは違って」、「僕がちょっと映写窓の光の中に手をかざしさえすれば」、「はかなく消えてなくなってしまうところの」もともと「影坊子」の存在にすぎないのだから、とむすぶ。

翌 1927 年、渡辺は、ふたたび同名義で『映画時代』に「古都にて」を寄稿する。「僕」は、京都の若草山のいただきに寝ころび、昔日のおさない分身に話しかける。「僕はも早や、君の倍も年をとってしまったし、ただもう少しおいしい物が喰べられて、季節季節の着る物に事を畝かさない程のお金さえあえあつたら、今日のような日和にこんな雅びた草むらに、こんな風にしてひっくり返っていられることは、まことに何よりも申し分のないことだと思うよ」。しかし、未だ貧乏な「僕」は、遺産がころがりこんできたら興業価値などかんがえ

395 オン・ワタナベ「オング君の説」『アンドロギュノスのちすじ齋』東京創元社（2011）p.572

396 オン・ワタナベ「オング君の説」『アンドロギュノスのちすじ齋』東京創元社（2011）p.576

ずに信じるままの映画をつくるのに、と空想にふける。そして、できあがった映画を皆が排斥するなら、最後にひとりになってもかまわない、といいきる。「僕は、若草山のとっぺんへ陽が射している一日中、とりとめもない設計図や見積書で胸をふくらましなが、殆ど我をわすれている」。³⁹⁷

当地へ取材におとずれた彼は、紹介状をたずさえ、おもだった撮影所はすべてまわった。そして、会社の規模はおおきいほうが、一直線に商売に精進するような「世知辛さ」がなく、いいと感じる。しかし「市場へ売出す映画」と「撮影所の内実」とを切りはなすことができるのは、皮肉な現実でもある。

『我々と交際^{つきあ}って下さるのなら、我々の映画なんか絶対に御覧にならないようにして下さい。』と一人の少壮監督が僕に向ってそう云った。彼等は決して、君達に彼等の映画を見せようと思って作りはしないに相違ない。それを、君達が勝手に観に行つて、そうして勝手に悪口を云うのだ。

彼等が、本当は君達ばかりでなく日本中の出来るだけ沢山の人が彼等の映画を見逃してしまうことを望んでいないと、どうして云えよう！

彼等は郊外の住みなれた撮影所で、楽しく水入らずの撮影所の生活をする。街の常設館でフィルムが映ろうが映るまいが、結局それは自分の係り合うべき問題ではないのさ。³⁹⁸

理論を語る映画青年の「君達」を牽制する一方で、「僕」は、映画を愛しながら自由な意思をとおせない撮影所の「彼等」に、むしろ近親的感情をいだいている。「僕」は、活動写真が「今更容易に取り返しのつかない」まちがいをしてしまったのではないかと、思わずにはいられない。彼らと親密になればなるほど、「僕」の目にはその人物たちが「活動屋」らしくなく映る。そこで彼は叫ぶ。「活動写真なき撮影所！」冒頭からは想像できないはげしさで文はむすばれる。

日本のカメラよ！ 今や僕は、お前の歯車の一つ一つが、とっぺんにぶち壊れてしまうことを望んでやまない！……³⁹⁹

ここで、渡辺が批判しているのは、主として資本主義と評論優位の映画界のありかたであろう。理論化の形式を経ないまま、彼は、映画が「技術」的「制度」的には「発達」しつつも、数ある可能性をせばめていく途にあるのではないかと洞察している。

それでは、映画の置かれた現状を否認する渡辺自身は、主体的にどのような映画をつく

³⁹⁷ オン・ワタナベ「古都にて」『アンドロギュノスの裔^{ちすじ}』東京創元社（2011）p.584-585

³⁹⁸ オン・ワタナベ「古都にて」『アンドロギュノスの裔^{ちすじ}』東京創元社（2011）p.587

³⁹⁹ オン・ワタナベ「古都にて」『アンドロギュノスの裔^{ちすじ}』東京創元社（2011）p.588

ろうとしていたのでしょうか？ 彼の語りには、韜晦がしばしば看取され、真意が奈辺にあるのかが把握しづらいが、友人の「画かき」Pの画室で弟子である「女学生」と「僕」が展開する軽妙な会話「続アルペエヌ嬢の話」には、1928年当時における映画づくりの青写真がそれとなく語られている。

外国映画ファンの彼女と映画俳優の話をしているうち、ふいに彼女は日本の「活動写真」が「みっともない」から大嫌いだといいはなつ。なぜ？ と問うても、「知らない」と答える彼女に、その理由を「僕」は分析してみせる。「全く日本映画程、黠くとも僕の憶えているだけの映画ならばこんなに愚劣なものはないね。西洋の大映画を如何に巧妙に真似て、安い経費のベカベカ物を製作して見せようかとばかり企んでいるんだからやり切れない」。すると彼女が、見物人がわるいのでは？ と指摘するのに、「僕」は反論する。「嘘だよ、大衆を指導することを知らないまでのことさ」。たとえば、戦争映画や剣劇映画の「ヤマ場」に代わるべきものを発見しさえすればいい。ただ、興行成績を考えると皆勇気がないのだ、と。「僕に少しばかりのお金があれば直ぐに日本中の見物の迷信を破ってみせるんだがな。カメラなんか一番安い奴で充分だ。役者だって、おじさんにしろ、先生にしろまたと得難い役者じゃないか」。

——おじさんや先生は社会主義者なの？

——藝術家のつもりだがね。

——マルクス・ボーイが流行るって本当？

——餘計なことを云ってはいかん！ 二十世紀の次は二十一世紀さ。二十一世紀に生きてるボーイは二十一世紀ボーイだよ。⁴⁰⁰

さらに彼女が、何かの本で日本人の風貌は活動写真にむかないと読んだというのに、彼は自説を披露する。「僕達の会社ではそんな問題大したことじゃない」。タキシードを着てコンフェッティをなげたり、チャールストンを踊ったりする夜会の光景など撮影しながらない限り「少しも困りはしない」。

日本人には日本人で、顔にも体にもなかなかいい素質がある。日本人は沢山の日本人に最も重大なる関係のある映画を作ることが何よりも必要なのだ。活動写真のお客様が誰であるかを考え、その最大多数のお客様である日本人の生活がスクリーンに映る新発見のヤマ場に依って非常に品質を上等ならしめるように企てるのだね。そうすれば西洋人の美男美女なんか居なくなつて、日本は容易に世界一の映画をつくること出来るんだぜ。⁴⁰¹

400 渡辺温「続アルペエヌ嬢の話」『アンドロギュノスの^{ちすじ} 裔』東京創元社（2011）pp.599-600

401 渡辺温「続アルペエヌ嬢の話」『アンドロギュノスの^{ちすじ} 裔』東京創元社（2011）p.600

ここにおいて、「西洋の大映画を如何に巧妙に真似て、安い経費のベカベカ物を製作して見せようとしている」といわれる日本映画には、技術を偏重した外国基準の純映画劇もふくまれるだろう。この作品は『新青年』に掲載されたが、池田浩士が指摘したように、当時は書ける場をもとめプロレタリア系作家たちも同誌に寄稿をしていた。しかし、既存のプロレタリア作家だけが社会問題をかんがえていたわけではなく、渡辺の映画をめぐる小品にも、安井やささきのそれにも通じる社会主義的視点が確実にきざまれている。だが同時に、友人の岡田が、ひとつの主義につきしたがうことをいさぎよしとしなかったように、ここにえがかれた内容は、渡辺自身が達成しようとした唯一の目標などではないだろう。むしろ、時代の声を反響させながら、映画のありかたの理想の一角が語られているといえてよい。

そして、渡辺の死の1年前に書かれた「十年後の映画界」(1929)は、安井仲治の「10年後写真家はいなくなる」よりちかい射程で描かれながら、未来の予言という点においては一致している。1939年1月×日、街裏の酒場の隅で、酔っぱらいの「私」は、やはり酔っぱらいのオング君を10年ぶりにみいだす。不惑にちかく、海豹あざらしのように無口になってしまった「私」に、彼は変わらないようすで話しかけた。あそこ、君はひとかたならぬ映画ファンで、いつでも僕に嘆いていましたね? 「今時の映画と来たら、単なる機械製産品以外の何者でもあり得ない。それに映画批評家たちの眼目とする映画の価値はひたすらカメラワアクに依って決定されるスピード第一、アイモの移動、云々。映画の内容は? 内容とは筋ストーリーではない、映画が若しも如何なる意味に於てか藝術で有り得るとするならば、その藝術自身の姿だが、そんなものは全く「蔑ないがしろ」にされ忘れられてしまっているではないか」と。その意見に、おおいに賛成していたオング君は「この不幸な藝術の正系を守るために」映画撮影所を建設しようと「心を砕いていた」。ところが、父親が亡くなり、三千万円の遺産が全部自分のものとなったため、興業政策を無視しても撮影所の経営が可能になったのだという。それは「何と永い間の夢でしたらう……」。402

しかし、10年前からみることをやめた「私」が知らない現在の映画の世界は、まだ10年前のほうがましであったほどの愚劣さかげんなのだ、とオング君はいう。一昔まえのような音のない映画はまれで、ほとんどが「トーキーという馬鹿げた仕掛けのフィルム」になってしまった。そして映像技術が進歩したことにより、刺激的な題材をあつかったものは、みるだけで卒倒してしまうほど暴力的な効果を示すようになったのだ、と。検閲制度は、あるにはあるが「御存知の4、5年前のあの反動時代のお蔭で」、そんなあぶなげな脚本を書こうという男は「根こそぎ滅ぼされてしまったし」、映画製作は大産業として「我国第一の資本家の手一つに収められてしまってみれば」まったく検閲の必要はないことになったのだと教えられる。

402 渡辺温「十年後の映画界」『アンドロギュノスの裔ちすじ』東京創元社(2011) p.609-610

「そこで、僕のマキアベリ理想映画撮影所は勇ましく旗上げをしました。市場にどれ程売行きが悪くても僕はビクともしません。また、検閲も恐れませんが、僕たちは当局の忌諱に触れるような映画を憚りなく作って、そして会員ばかりでこっそりと見て楽しむことができます——」⁴⁰³

市場に売り出した第1回作品は、うらぶれた老優の「チャール・チャップリン」を起用した「非金儲主義^{アンコロロージャリズム}」、第2回作品は、「私」が昔提供した台本による風景映画で、「諸君の故郷」。俳優は、トーキーにわざわざされる以前の俳優、チャールズ・ファーレル、ウィリアム・パウエル、ジャック・クーガン、ゲイリー・クウパア、ドロレス・デルリオ、ルイス・ブルックス、フェイ・レイ、山内光^{やまのうちみつ}、龍田静枝^{たつたしづえ}⁴⁰⁴たちをあつめ、彼らの故郷の風景を収めた。第3回作品は、撮影中であるがジャン・ジャック・ベルナルの「旅の誘い」を自身で書きなおしたものだという。この映画では、すべてフル・シーンとロングばかりで、アップはおろかバスト・ショットもいっさいもちいない。もともと彼のカメラは高等技術に不向きな機材で、「何故と云って、僕の考えでは最も効果的に活動写真の本質をしめすのは、なるべく上等でないカメラに限るようです」と説明する。そこまで聞いた私は、無言のまま席を立つ。⁴⁰⁵

純映画劇運動以前には、女優ではなく女形が出演していたことから、身体性より所作をきわだたせる必要があり、また表情の演技が未発達等の理由から、主としてロング・ショットがもちいられていた。かかる状況に不満をいだいた映画青年たちは、他のことなどは考慮せず「旧劇の何とかいう映画にはクローズアップが一つあった」と日記に書いたり、「手紙がインサートされると、出た出た」とよろこんだりするといった調子で、技術や技巧をなにより「待ち望んでいた」という。⁴⁰⁶ なるべく上等でないカメラで、フル・シーンとロングばかりで、アップはおろかバスト・ショットもいっさいもちいないというオンブ君のこだわりは、彼らとまったく逆の方を向いている。

従前、注視されなかったが、ここで「風景映画」にこだわりがもたれているのには、渡辺における最初の映画体験との連関があきらかである。初期映画には、単数ショット映画のみならず複数ショット映画にすら、プリミティヴィズムの枠内で、はじまりもおわりも存在しない映画が一般に存在した。初期の興行形態として、フィルムはループ状につながれ繰り返しかえし上映されたために、「小説や演劇にあるような」プロローグとエピローグが、フィクション映画であってもほとんど必要とされなかったのである。「とりわけ、ノ

⁴⁰³ 渡辺温「十年後の映画界」『アンドロギュノスの裔^{ちすじ}』東京創元社（2011）p.611

⁴⁰⁴ 実在した俳優は山内光^{やまのうちみつ}（岡田桑三）、龍田静江^{たつたしづえ}であるが、前出のチャール・チャップリンのように、虚構性を設けるためか読みを一部分変えている。

⁴⁰⁵ 渡辺温「十年後の映画界」『アンドロギュノスの裔^{ちすじ}』東京創元社（2011）p.612

⁴⁰⁶ 飯島正「日本映画の黎明——純映画劇の周辺——」『無声映画の完成 講座日本映画2』岩波書店（1986）p.107

ンフィクションと見られる風景映画については、始まりと終わりといった他ジャンルに存在するような完結性の印は、全く必要とされなかった」。街路を撮影したフィルムは、ある状態からはじまり、約1分間同一ショット内で持続したのち、別の状態でおわる。この変化は、映画の構造の基本的組織のひとつであり、対象である動体がうごいた結果によるものである。⁴⁰⁷

カメラがうごく——撮り手が世界を支配する——のではなく、そこに在るものがうごく——虚構世界があらかじめ完成しているのではない——ことへの等閑視は、渡辺の欲するファンタジーを容易に追放しうるだろう。そして、レンズのヴィジョンの枠内に入っている視野＝champ は、ちかづけばちかづくほどせまくなる——全体がみえなくなる——のである。⁴⁰⁸

「十年後の映画界」のリアルタイムである1939年、渡辺のいなくなった日本では「映画法」が成立し、翌年からは「文化映画」の劇場強制上映が始まる。映画館の上映プログラムは、長編「劇映画」、短編の「文化映画」、「時事映画」と呼ばれるニュース映画の三本立てが基本となった。「映画法」も「文化映画」も、当時のナチスがモデルであり、ドイツでの映画法はヒトラー内閣成立の翌年に公布されている。この種の文化立法の多くがそうであるように、映画法もまた、政府による干渉・抑圧と保護・助成というふたつの顔をもっていた。⁴⁰⁹それゆえ、写真家たちがそうであったように、映画にかかわる人間たちも政府に恭順することにより、映画界で生きながらえていくこととなる。

ふたりの登場人物、オング君と「私」は、渡辺の分身ともみなされる。横溝は、鎌倉時代の渡辺が「いつも淋しそうであった」と回想しているが、それは「十年後の映画界」が書かれたころにあたる。理想に踏みだしたい気持ちと、それにかなう創作を实践する場が稀少なことのジレンマにあって、ふたりの人物には己の未来が投影されたのではないだろうか。「私」は、すでに人生につかれきっており、オング君は、最後のひとりになろうとも意に介さないという決意で映画づくりに臨んでいる。

正統派の映画理論をもちいず、一見とりとめのない語りのうちに核論をしのばせる渡辺の手法は、意識的に採られたものと推測されるが、そのためのわかりにくさもあり長きにわたり真意が理解されてこなかった。だが、彼の「イルジオン」をあつかう繊細な手つきには、同時にエミール・コールのアナーキーな稚気にも通じる硬派な底意が看取される。

「十年後の映画界」のトーンには悲壮感がただよっているが、日本全体が求心力をつよめていく空間で、映画においても同心円を描くようにドミナントな趨勢——傑作主義と資本主義、評論による価値のわがもの化——が場を占めていくなか、「世にもいみじい」夢の奪還に、ひとりでも立ち向かう意志が表明されているのである。

⁴⁰⁷ 小松弘『映画の起源』青土社（1991）pp.79-80

⁴⁰⁸ 小松弘『映画の起源』青土社（1991）p.25

⁴⁰⁹ 吉原順平『日本短編映画史——文化映画・教育映画・産業映画』岩波書店（2011）pp.33-34

第2節 「主義」から「趣味」へ

(1) 作家兼編集者の創作性

渡辺は、父の昇進にともない東京から茨城県に引っ越し、中学校の課程を修了した1920年4月、慶應義塾大学予科文科に入学すると上京して下宿生活に入るが、1921年4月には同科を中退している。彼と家族の関係は良好で、はげしい反抗期も経験しなかったようだが、文科への進学には父をはじめ周囲の反対に遭うこととなった。あらためて経済学専攻を志望したものの、1922年慶應義塾高等部に入学し、1926年に卒業する。

1925年に「影」が懸賞に当選した学生時代、渡辺はほぼ無名であったが、この作品は大阪在住の横溝正史や、江戸川乱歩（平井太郎）主宰の「探偵趣味の会」のメンバーのあいだで話題にのぼっていたという。1926年、上京し江戸川宅に遊びにきていた横溝は、大阪薬学専門学校卒業後に当地で薬局を営んでいたにもかかわらず、森下雨村（岩太郎）に勧められ、そのまま博文館に入社する。『新青年』の編集をまかせるのでよいパートナーをさがすようにといわれた彼が、反射的におもいうかべたのは、「影」の作者であり慶應義塾高等部を卒業したばかりで同齡の渡辺だった。

旧編集者が総退陣した後とはいえ、純日本家屋の座敷へモーニングにシルクハットで出社する渡辺は異彩を放っていた。だが彼は「奇を衒っているのではなかった。ただそうしたいからそうしているだけであった。だから気障でもなんでもなかった。むしろ板についていた」。「私はただニヤニヤしながら、この子供のような純粋な魂をもった人物を見守っているだけだった」と横溝は当時を回想する。

こうしてめくら蛇に怖じずというのか、恐れを知らぬふたりの若者は、気随気儘に『新青年』のカラーを塗りかえていった。森下先生の重厚な色彩はすっかり失われて、いやにモダンでダンディーな雑誌になってしまった。⁴¹⁰

入社後の1927年、渡辺は、編集と並行して「嘘」、「氷れる花嫁」、「赤い煙突」、「どぶ鼠」、「可哀相な姉」等の作品をつぎつぎと同誌上に発表していく。早稲田大学の仏文科に在籍しながら、友人の横溝をたすけるため博文館に出入りしていた水谷準は、渡辺が編集者としてはたらくようすを目撃したひとりだった。

オンチャンは押入れの中からひきずりだしたアメリカ漫画雑誌をひろげ、自分で翻訳した文句を特徴のある字でていねいに墨書きし、その紙切れを英語の活字の上に糊で貼りつけていた。それをやるだけで一日の仕事になるような緩慢さと念入りな動作

⁴¹⁰ 横溝正史「惜春賦——渡辺温君の思い出——」『アンドロギュノスの裔』薔薇十字社（1970）pp.347-353

がわたしの目を引いた。編集者というものは、しょっちゅう電話をかけたり、煙草をのんだり、面会人に会うため席を立ったりするちょこまかした動きが習性となるものだが、それらの連中のなかでオンチャンはまるで牛がねそべっているみたいだった。⁴¹¹

当時、『新青年』につどったのは、作家兼編集者の青年たちであった。そこで横溝や水谷が「編集者としての通俗性をもちあわせていた」のに対し、渡辺は「あくまで作家的な偏向性」の所有者だったという。だが、実務の方面はともかく、編集において彼が創造性をいかに発揮したことを水谷は証言する。たとえば、完全な翻訳でなく原文を無視し己の解釈による説明をつけることで「その漫画に新しい価値を与えたというような例」を、彼は間近で何度もみていた。『新青年』が、時代の「文化的な雰囲気」のなかで「前衛の役割をもちはじめたのも「そういう微小な頁作り」がきっかけになったのだと述べる。⁴¹²

しかし渡辺に声がかかったとき、博文館はすでに危機をむかえていた。作家としてスタートしながら、ほどなく編集者としても博文館に欠かせない存在となる横溝は、当時を回顧して語る。「古い暖簾のうえにアグラをかき、特権的商法をもってよしとしていた博文館は、雑誌出版社としてしだいに取りのこされかけていた。あらゆる面で委靡沈滞し、なにかにつけてジリ貧状態であった。だれかが立って刷新を断行しなければならない状態になっていた」。だが、そのことを森下が横溝に打ちあげたのは、彼が入社してから3か月後のことだったのである。⁴¹³

(2) 雑誌王国の凋落が生みだしたもの

博文館は、近代の一時期に、雑誌王国と呼ばれたほど隆盛をほこる出版社だった。本論で取りあげる5人のうち、金子は博文館から発行された『少年世界』や『婦女界』を、難波は『武俠世界』を読んでいたことがつたえられている。金子は、朝鮮の養家にいた14歳のころ古本となった『少年世界』を友人から借り、家人に隠れて読む。『婦女界』は、近所の知人から借りしばらくは公然と読むことができたが、ほどなく祖母に取り上げられた、と手記にある。⁴¹⁴難波は、裁判の過程において、18歳のころ「馬賊の王」というペンネームで国粹主義的な主張を同誌に投稿したことを述懐している。⁴¹⁵

博文館経営者の大橋佐平は、1835年、越後・長岡に誕生した。生家は代々油商をいとなんでいたが、父の代に材木商に転じる。幼名は熊吉であったが、家業をこのまず軍学にひかれ藩士に剣をならい、長じて酒蔵家の株を買うと三国屋佐平と称した。さらに、住職で

⁴¹¹ 水谷準「記憶の断層」渡辺温『アンドロギュノスの裔』薔薇十字社（1970）p.358

⁴¹² 水谷準「記憶の断層」渡辺温『アンドロギュノスの裔』薔薇十字社（1970）pp.358-359

⁴¹³ 横溝正史「惜春賦——渡辺温君の思い出——」渡辺温『アンドロギュノスの裔』薔薇十字社（1970）pp.348-349

⁴¹⁴ 金子文子『わたしはわたし自身を生きる——手記・調書・歌・年譜』鈴木裕子編 梨の木舎（2013）pp.125-127

⁴¹⁵ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（一）』専修大学出版局（2006）pp.155-156

ある叔父の遺志にしたがい、長岡市称徳寺の檀家になるため大橋姓に転じる。

大橋は、近世末には勤王派として奔走しながら、近代があげると信濃川の利権をもつ船道ふなどうになり、士族の知人をふやし、1869年には新政府の越後・水原府に奉職した。そこで彼は、新潟に多数あった寺子屋をまとめ、学校にすることを提案し受諾される。大橋の関心は、教育だけでなくあらゆる方面にむけられ、長岡では人力業を開業、さらに当地で初代の郵便局長となる。また商工業研究団体を立ちあげ、自由民権運動に参加すると、演説会をひらくほどの権勢を示した。

そうして数多の職を経験後、大橋は東京市内の書店をつぶさに見学し、すくない元手で事業を起こすには雑誌の発行が適していると考え「大橋書房」を開店する。当時の東京において、仏教改革運動がさかんであったこと、また長女・時子を女子高等学校に入れるため東京に呼んだことから、仏教雑誌と女子教育雑誌の発行計画を長男・新太郎に相談する。息子は、雑誌の発行自体は時宜にかなうが、宗教者や女子学生が対象では採算がみこめないだろうから、外国の集録雑誌を薄利多売方式でおこなうべきだと父に提案した。そこで、1887年、専門雑誌から主要論文の抜粋を編んだ『日本大家論集』を発行したところ、売りあげは三版にもおよび、その際、社名は「博文館」に変更される。⁴¹⁶戊辰戦争時、長岡藩が官軍に抗するのを不可能とみなし、薩摩藩、長州藩と恭順派の仲介につとめた大橋は、薩長両藩が官界のポストを独占したのと対照的に、文化産業に貢献するべく藩閥と関係なく人材を登用したという。⁴¹⁷

『日本大家論集』の成功後、さらなる佐平の企画力と新太郎の経営手腕により、事業は急速に拡大された。『日本大家論集』出版後、同年には、『日本之教学』、『日本之女学』、『日本之商人』を、翌年には、『日本之商人』、『日本之殖産』、『日本之法律』、『日本之兵事』を立てつづけに発行し、やがて32種類もの雑誌を同時にかかえることとなる。1893年、シカゴの世界大博覧会が開催されたとき、佐平は、視察がてら世界一周をこころみた。8か月後に帰国すると、事業報告はみごとになされ経営面においても新太郎の指導力がいかんなく発揮されていたため、彼は安心して営業に専念し、品川弥二郎、勝安房、福沢諭吉、大隈重信、石黒忠恵らに後援をもとめる。⁴¹⁸

たとえば博文館を代表する雑誌『太陽』は、1895年の発行当時、日本初にして最大規模の総合雑誌であった。その出発は日清戦争時であり、『日清戦役実記』50編を発行し、10数版をかさね多額の収益をあげたことが創刊の契機となっていた。⁴¹⁹発刊の辞で、新太郎は、戦勝の意気がみなぎり世界が注目するなか「五大州に闊歩する大日本人」による「第二の維新」のときにあり、「大に智識を世界に求め、我邦文明の真相を発揮して之を宇内に宏にせんこと、蓋し国民の任務たり」と述べている。やがて博文館は、政界、経済界と

⁴¹⁶ 博文館は、他の出版社からクレームがでると、講演や演説の速記をまとめて発行した。一連の経緯により、1887年出版条例が急遽改正されることとなる。

⁴¹⁷ 山口昌男『「敗者」の精神史(上)』岩波書店(2005)p.364 p.382

⁴¹⁸ 彌吉光長『未完資料による日本出版文化 第5巻 近代出版文化』ゆまに書房(1990) pp.431-477

ふかくむすびつきながら、出版コンツェルンを形成していく。『太陽』は、1928年まで継続されながら、創刊時の姿勢を引きついだ誌風は自由主義的な世情と相いれなくなり、とりわけ関東大震災後には、モダニズム的風潮と決定的な懸隔を生じる。最後期の編集者であった長谷川天溪（誠也）と平林初之輔は、その後、間接的に『新青年』にかかわっていくこととなった。

1911年10月、博文館発行『冒険世界』の主筆である押川春浪（方存）は、「東京朝日新聞」紙上の野球撲滅論に反駁したことから社の方針と対立し、辞職して『武侠世界』を創刊する。押川は、桜井鷗村（彦一郎）の紹介で『少年世界』主筆の巖谷小波（季雄）に「海底軍艦」をみとめられデビューすることとなり、その縁で博文館に入社していた。彼は、日露戦争開戦の翌年に『日露戦争写真画報』の主任となる。そして戦争終結後、同誌を『写真画報』と改題し、さらには1908年『冒険世界』とあらため、主筆のかたわら冒険小説を発表していた。父の押川方義は、松山藩士の家に生まれたが、1869年に横浜英学校でキリスト教に出会い、J・H・バラより洗礼を受け、横浜バンドの形成に加わる。『冒険世界』は、父のキリスト教伝道の傘下にいた人間たちによりささえられていたが、そのなかで前述した廓清会のメンバーでもあった牧師の島貫は、「日本力行会」を結成し、海外雄飛のイデオログとなっていた。

一方、師の長谷川から推薦され『冒険世界』を引きついだ森下は、「冒険」ということばが引きずる「明治」的な「立身出世」色を払拭すべく、あたらしい世代への期待をこめ後身の雑誌に『新青年』と命名した。たとえば森鷗外の「青年」は、1911年に完結したいわゆる教養小説であるが、それは『冒険世界』が岐路に立った時期とかさなる。「青年」のなかでシニカルに展開される「成功」論は、『新青年』の誕生日夜をものがたるかのようなものである。時代の変化は、1902年に創刊された雑誌『成功』が1916年には中断されていることから看守され、同版元から出版された『探検世界』（1906）や『殖民世界』（1908）等、国家の膨張策と連動し海外雄飛をテーマにした雑誌も、時代のながれにはのりきれなくなっていた。しかし『新青年』は、博文館主の意向を反映させ、あくまでも「堅実な地方青年むけの雑誌」という編集方針でスタートを切る。

(3) 新時代の地方青年に期待する

創刊号の冒頭にかかげられた白鳥省吾の詩「新しき青年に檄する歌」は、「国際聯盟よ、デモクラシイよ 世界改造の聲は潮のごとく 極東のわが日本の岸邊を打ち われら青年の血を湧かしむ。」「げに大正維新の叫びは われら青年に重き任務を告ぐ、世界の前に立てる日本のいかに人材乏しきを見ずや」とうたう。山崎新雨の小説「南洋の混血児」において、ボルネオで農園を経営する斎藤達也に、某国人・タルバンの悪略を告げにくるのは「土地の有力なる酋長」と「日本賤業婦」との間に生まれた混血児・ギードーである。クライマックスで、敵側の毒槍を受けた彼をかかえながら、斎藤は彼の骨を「必ず日

本の國に葬つてやるぞ」と約束する。

齋藤はギードーの掌を確と握つて強く振りながら言つた。

「おまへは立派な日本人だ。」

「齋藤様。私は日本天皇陛下の下臣^{けらい}であります。」

ギードーは嬉しげに瞳を耀かして答へた。⁴²⁰

その他にも、「日露戦争の裏面に活躍せる明石將軍」（山本江東）は日本人の武勇をたたえる訓話であり、「一、遂に日米戦争實現す」とはじまる「第二次世界大戦 日米戦争未来記」（樋口麗陽）の想像力は、現実世界に約 20 年もさきんじていることが注視される。背景には、前述した日清戦争以降の帝国主義列強間で起こった排日思想が存在したが、大局をかんがみてか『新青年』は、対立感情をあおることを全面的には肯定していない。そして、日本力行会の会長・永田 稔^{しげ}によってかたられる「海外新成功者列傳」では、「借金二千圓を引き受けて海外に成功せる」はた光重による体験談。

読み物以外でも、種々の広告には、当時の青年たちが置かれた状況が反映されている。最初のページにかかげられているのは、官立以外では日本でただひとつという通信中学校のキャッチコピー「大正九年の立身出世の首途は此の學校」。また、大隈侯指導「早稲田大學講義録」は、月謝 75 銭～90 銭で 1 か半月修了となっている。他に「小學校教員養成講義録」や「最新簿記講義録」等、教育関係の広告が多数みうけられる。狩猟用「空気銃」のカタログは、当時の主たる読者である地方青年を意識したものであろう。それらにまじり、肺病治療に関する広告は「現代最善の権威ある療法として同胞患者の幸福の爲めにお勧めします」とうたっている。雑誌のスタート時点では、広告も、勉学や病氣治療等に関するまじめなもの、もしくは趣味に関する男性的なものばかりで、冒険世界から引きつがれた誌面の内容に対応している。

混沌とした新世界のはじまりでもあった第一次世界大戦後にあり、『新青年』は、生きる指針を読者に提示すべく、倫理的な姿勢に重きをおきつつ、各種の社会問題に沿った議論を展開している。世界を視野に入れつつ日本を考えるためには、漠然と時代の思潮にそまっていべきではない、というメッセージとともに問われるのは「次代における青年の地位」であり「自己省察と判断力の蓄積」なのである。

また、創刊の年にロシアのニコラエフスクで起こった尼港事件を、『新青年』は大々的に取りあげた。「尼港問題を論ず」で、浅田江村は、政府の責任をきびしく追及する。第一に、政府は、誤れる対シベリア政策のため 700 人の同胞を犠牲にした。第二に、用兵の途を誤って帝国軍隊の武を冒瀆した。第三に、危急を知らながらじゅうぶんに救援策を講じる誠意を欠いた。これらが、もし政府になんらの反省もあたえず、うやむやに葬り去ら

⁴²⁰ 山崎新雨「南洋の混血児」『新青年』第 1 卷 1 月号（1920）pp.20-30

れるならば「一國の政治は到底國民の信賴を繋ぐに足らざるものである」。⁴²¹一方で、シベリア出兵の惨憺たる帰結は、日露戦争時に活躍した軍人たちの説く修養訓話の權威をかげらせていく。

雑誌のスタート時に読者として想定されたのは地方の青年たちであったが、近代都市の発展と反比例するように進行する農村の疲弊が憂慮され、決定的な解決法のみいだせないまま誌面にも揺れがうかがえる。安成二郎の「外國へ行つて歸つて來ない人々」(1920)は、在外日本人の消息をつたえる。最近のニューヨーク通信によれば、米国にいる日本人はみな米国をよろこび、誰も日本に帰ることを欲しない。ある料理屋の女中は「日本は実に嫌な所です」と呪うようにいった。また、帰期を予定しない外遊の途につく近衛文麿なども日本には、「愛想をつかしたような口吻」である、という。⁴²²

1920年代初頭のデモクラティックな状況が、ナショナリズムにゆさぶりをかけ、海外に希望をむけさせても、雑誌の基調は硬派な路線であり地方青年の優位はうたがわれない。創刊年の第3号に載った「時事漫画三等当選」読者による「労働者の進歩？」には、後年その対象をかえつつ顕著になるアイロニカルな笑いの萌芽がみられる。ここで俎上にあげられているのは、「都市」労働者であることが注視される。

車夫「ストライキつて一體何の事だい？」

職工「ストライキつてえのはデモクラシーの事よ。」

車夫「ぢやあそのデモクラシーつてのは何だい？」

職工「デモクラシーつて、サポタージュといふ事だ。」

車夫「そのサポタージュたア何だい？」

職工「しつこく聞くなよ。人様が笑つてらア、サポタージュとはプロパガンダの事ぢやアねえか。」

車夫「するとそのプロパガンダつてのは何だい？」

職工「えゝうるせえ奴だなア、つまり賃金値上げといふ事だよ。」⁴²³

『新青年』が創刊される1920年、難波は、郷里から東京に出てきていた。受験勉強のため上京したにもかかわらず、それをなかば放棄したまま、普選運動に単身合流する。

「青年」の誕生から20年ちかくが経過していたにもかかわらず、1920年に『新青年』が地方青年にもとめたものも基調は修養的なものであったが、一方で普通選挙に関する議論もあつかわれている。南木摩天楼の「解散より総選挙へ」は、検閲を意識したためか迂回をかさねた表現がもちいられているが、急進的すぎる思潮を牽制しながらも、「普通選挙は真実の意味に於て國民全般をして立法上の権利に與からしむる」ものと結論づける。「一

⁴²¹ 浅田江村「尼港問題を論ず」『新青年』第1巻1月号(1920) pp.10-17

⁴²² 安成二郎「外國へ行つて歸つて來ない人々」『新青年』第1巻4号(1920) pp.10-17

⁴²³ 「労働者の進歩？」『新青年』第1巻3号(1920) P.51

一資本家の利害は常に資本家外の利害と背反し齟齬する事が非常に多いではないか。利害関係の相反する限り、資本家階級のみによって代表せられつゝある無産階級は、永遠にその正当なる権利を主張する事が不可能ではないか」。そして、筆者は語りかける。「——吾人青年は飽迄も普選を要求しなければならない。諸君よ起て、而して正義と自由との為に普選実現の為に奮闘せよ！」⁴²⁴

めまぐるしく転変する世界と連動する日本の政治状況を沈思することは、いったん帝都へ出た難波のような地方青年には、もはや不可能であったことが想像される。1920年2月、芝公園での普選国民大会終幕後、だれからともなく原首相邸へ押しかけようという提案があがると、なだれうつような人波にまじり難波も身をはこんでいく。⁴²⁵この時期に、彼が特別なひとりでなかったことは、後日の労働者街における同様な境遇の地方青年たちとの出会いが証明している。凋落をみた出版社で、編集のセンスが時代と懸隔を生じたことによりあらたな青年向け雑誌が企図されながら、先行する世代の価値観は、青年のまわりに立てた囲いを容易に取りはずそうとはしなかった。だが、現実の青年はそこからとうにはみだし、急旋回しつつ予想不可能な動きを示していくこととなる。

(4) 哄笑する浪漫趣味者

死のリアリティの前で、メディア体験が幻視のマイクロコスモスをその主観の中に形成してゆくという内面の営みを、誰も奪うことはできない。

中野収「メディアとしての『新青年』——浮遊するマイクロコスモス——」⁴²⁶

『新青年』の約30年の歴史を仮に5期に分けると、雑誌の誕生から関東大震災の発生までを第1期(1920-1923)、震災後に都市化が加速するなか探偵雑誌として名をはせる第2期(1923-1927)、モダン色を前面に打ちだした第3期(1927-1937)、戦時体制への迎合を余儀なくされる第4期(1938-1945)、そして戦後に、雑誌としての活力をうしない廃刊にいたる第5期(1945-1949)となる。⁴²⁷

前述したように、統一された意図を誌面から読みとりにくい『新青年』は、一般的な総合雑誌とはことなる性格を持っていた。中野収はそれを「歴代の編集担当者にしろ、執筆者にしろ、あるスタイルをもった雑誌、文学の正統の系譜からはずれた作品、その達成、にのみ執っていたのではないだろうか」。「変容するスタイルというスタイルを『完成』し、正統性を少なくとも相対視する作品群、しかし新たな様式を確立したとはいえない作

⁴²⁴ 南木摩天楼「解散より選挙へ—解散の意義外三項」『新青年』第1巻5号(1920) pp.112-115

⁴²⁵ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件(一)』専修大学出版局(2004) p.160

⁴²⁶ 中野収「メディアとしての『新青年』——浮遊するマイクロコスモス」『ユリイカ』青土社(1987) p.140

⁴²⁷ 江口雄輔『『新青年』とその時代』『ユリイカ』青土社(1987) pp.228-229

品群を産出し続けた、という意味で都市空間的なものかもしれない」と位置づける。⁴²⁸1923年の関東大震災がもたらした大状況の変化は、その復興とあゆみをおなじくして『新青年』の関心を都市文明的諸現象へとむけることとなった。わずか数年のうち、読者の対象は、農村の青年層から都市文化を享受する学生や若いサラリーマン層へと転換される。渡辺が、『新青年』にかかわったのは、かかる転換後の第3期前半にあたる1927年から1930年までである。

『新青年』を、前時代の『冒険世界』的ジャンルから決定的に脱皮させたのは、進行する都市化ともかかわる探偵小説の登場であった。1924年から1927年にかけて、同誌はライバルとされた講談社の『講談倶楽部』や『キング』を創作、翻訳、探偵小説論において引き離すこととなる。さらに従来の探偵小説のイメージを刷新するような科学小説、ユーモア・ナンセンスもの、幻想小説をも取りこみ、誌面は多彩さを加えていく。しかし「探偵小説の読者」なる者があらかじめ一定数存在したのではなかったところから、大勢を取りこむべく、誌上では「科学的教養に裏打ちされた知的読み物」という啓蒙性が強調された。たとえば、『新青年』草創期の執筆陣には、自然科学や法医学、精神病理学、警視庁鑑識課技術官といったメンバーがそろい、専門性を駆使した科学的思考を提供したが、第2期に、それらはいわば新種の知的青年であるための「教養」であり、公私にわたり功利的なものではなくあくまでも「たしなみ」であることが確認されたのだった。

このながれにつらなり、1927年から渡辺の企画した「新青年趣味講座」が開始される。予告編は「モダン・ボーイは他の如何なる要素に代へても教養だけは失つてはならない。明快なる教養は諸君をしてノックスの中折帽子よりもバァーベリィの春外套よりもバッキンガムのネクタイよりも更に有効にスマートならしめる。インテレクチュアルであることはモダン・ボーイの持つ最大なるチャームであるに違ひない」と謳う。講師は「第1回 社会科学 平林初之輔」、「第2回 進化論 石井重美」、「第3回 天文学 古川籠城」、「第4回 演劇 小山内薫」、「第5回 美術 村山知義」、「第6回 音楽 伊庭孝」、「第7回 考古学 鳥居龍蔵」、「第8回 物理 石原純」、「第9回 美学 村松正俊」、「第10回 文学 千葉亀雄」、「第11回 建築学 堀口捨巳」、「第12回 法医学 小酒井不木」といった各界の一人者たちであった。

『新青年』は、文化現象としての雑誌の受け手と送り手に双方向性が持されていることが特徴だったが、この点にかんがみれば「モダン・ボーイ」に「教養を」と呼びかける渡辺自身にも、「モダン・ボーイ」たることは意識されていたか？ という疑問がうかぶ。それを解くかぎは、1929年、『新青年』11月号の特集「モダン大学」シリーズの「イストたるべき心得」に寄せられた渡辺の「浪漫趣味者として」^{ロマンステイスト}に示されている、と考えられる。

そこでは、主義者ではなく浪漫「趣味者」のうわべだけを身につけようとする青年の話

⁴²⁸ 中野収「メディアとしての『新青年』——浮遊するマイクロコスモス」『ユリイカ』青土社（1987）p.144

が、徹底してアイロニカルにつづられる。青年のあいだで名高いロマンティストの H——氏に、「私」は「ロマンティストの思想について概念的な智識を得たいと思い」、読書のアドバイスを乞う。すると彼は、皮肉な調子で答えた。「ティークの『蒼海万里の夢』だのユイスマンスの『さかさ物語』だのアイヒベルクの『学生ロマンティスト』だのゲーテの『ウェルテルの悲嘆』だのを読みたいのですか？ お止しなさい。文学青年じみているのは、ロマンティストとしてこの上なく恥ずかしいことです」。そして、「読書のために、読書する」には、ボドレイアン図書館の蔵書ほど読まねばならないし、1冊も読まないことも、かなりロマンティストらしいのだという。

また、ボヘミヤの侯爵のように鳥の羽根をさした青羅紗の帽子をかぶった H——氏をまねた服装で散歩をこころみた私は、不良少年たちから「生意気」だと暴力をふるわれたのちに、H——氏のアドバイスにより、身ぎれいすぎないように計算されたファッションに凝る。

私は、段々ロマンティストの様子に慣れて来た。適度の無精髭を蓄えて、ゆったりとした厚地の服に、洗濯の行き届いた縞シャツを着て、始終ネクタイをゆるく横っちょに滑^ずらかし加減にして、百姓持ちの様な大きな煙管^{パイプ}を啣えることにした。そして、外出の時には、ステッキの代りに、どんなお天気の日でも木綿の雨傘を携帯する位の技巧を会得した。⁴²⁹

しかし H——氏の奸計により破産した「私」は、そうとも気づかず「ロマンティストの友情にかけて」、おそろおそろ彼に夜逃げの旅費をほんの少し貸してほしいと頼む。すると返ってきたのは、ロマンティストは、金の工面に奔走したり友情を強要したりするよりも、自分ひとりで牢屋に入ったほうが「ずっとロマンティック」ではないか？ という答えだった。「そこで、私は、^{フィジカル・エコノミー}身体組織に変化を生じない限り、ロマンティストとしてあらゆる努力が空しいことを知った」。⁴³⁰

1927年に、「モダン・ボーイ」かくあるべきと説いた渡辺は、1929年には、かかる「趣味者」の型を身につけようとする青年をシニカルに描出する。そして、それは『新青年』の編集後記に横溝正史が記した「現代人は當に各瞬間に於て、總ゆるイズムを手玉にとる」の辞とも共振している。「總ゆるイズムを手玉に取る」の謂いは、「いかなる主義にもつきしたがわかない」と解釈することも可能であり、この時代にかかるポスト主義の青年が登場したことが示唆される。そこでは、「主義者」や「主義」でなく、先述の「イスト」および「イズム」がもちいられていることが注視される。同号には、博文館の凋落から出発した『新青年』が売れ行きを順調に伸ばし、それまでの記録を破ったことが報告されて

⁴²⁹ 渡辺温「^{ロマンティスト}浪漫趣味者として」『^{ちすじ}アンドロギュノスの裔』東京創元社（2011）pp.241-244

⁴³⁰ 渡辺温「十年後の映画界」『^{ちすじ}アンドロギュノスの裔』東京創元社（2011）p.248

いる。⁴³¹

中野は、同誌の発行部数が、それでも数万部を超えなかった事実をふまえ、数万の読者のつくる文化現象は「ネグリジブル」でありながら、その規模は「必然であった」と分析する。⁴³² マジョリティを形成するにはいたらずとも、「ミニ・メディア」としてこの時期に一定数を占めた読者は、「経世済民というエリートイズムを離脱した知的インテリゲンチヤ。家郷から逃亡し都市空間の浮遊を選び、オーソドキシヤをとりあえずカッコに入れた青年たち」だという。

経世済民のエリートイズムは、イデオロギーと世界観の左右を問わない。エスタブリッシュメントのヒエラルヒーを上昇するエリートも、イデオロギーに拠って体制に挑戦するエリートも、象牙の塔にこもるエリートも、野にあつて思想と芸術の達成にかかわる多くのエリートも、その精神構造において等しかった。経世済民は、この種の精神構造の当時における異名とって差支えない。

人間の性癖の相当に普遍的な分布状態からすると、このエリートイズムのいずれにも同調できない知的な精神態度・姿勢があつても不思議ではない。この精神の持主は、おそらく多数ではない。⁴³³

だが、当該の少数者たちが依拠とした「虚」の場が、想像力の空間においてリアリティをまとったのは、その背後に破局の予感がしのびこんでいたからであった。

たとえば、極めて近い将来に、死の高い蓋然性を予感した時、人の心象風景と主観のみる社会的景観は、一変するはずである。そこで、虚は虚であり続けながらあるリアリティを獲得する。この「たとえば」の状況は、戦前・戦中の青年に共有されていた。だからこそ経世済民、だからこそ紅旗征戎、だからこそ芸術的営為、ということはある——虚にはかけないということだ。同時に、だからこそすべての価値の相対化、があつてもおかしくない。⁴³⁴

それゆえ、「總ゆるイズムを手玉にとる」という表現は、一見ポジティブで「主義」よりも自由度が高いようでありながら、相対化を繰り返しかえし態度を決定しないでは、モラトリアムの陥穽が待ちかまえる。『新青年』が、以前には存在しなかった時代精神を創出したとしても、守旧的なパワーを突破する決定打に欠けていたことは、「虚」の場が

⁴³¹ 横溝正史「戸崎町より」『新青年』博文館（1929）10月号 p.296

⁴³² 中野収「メディアとしての『新青年』——浮遊するマイクロコスモス」『ユリイカ』青土社（1987）p.142

⁴³³ 中野収「メディアとしての『新青年』——浮遊するマイクロコスモス」『ユリイカ』青土社（1987）pp.144-145

⁴³⁴ 中野収「メディアとしての『新青年』——浮遊するマイクロコスモス」『ユリイカ』青土社（1987）pp.145-146

やがては「中心」に回収されていく経緯が証している。

渡辺には、『新青年』で編集をおこなうときと個人で作品をつくるときの態度に、微妙な差があらわれる。中野が「戦前・戦中の青年に共有されていた」と指摘する「たとえば」の状況は、渡辺が亡くなるころには、未だ決定的なものにはなっていなかった。しかし、後述するように、彼は作品において「全体」以前の「個」の淘汰を先取りしている。渡辺においても、時代が破局に傾斜していく途にあり「せまりくる非日常性の執行を前にして、主観的・心理的に猶予期間を設ける」⁴³⁵部分が存在しなかったとは考えられない。それゆえ、誌上で「モダン・ボーイ」に「教養を」と呼びかける渡辺自身に、そのとき「モダン・ボーイ」たることが意識された可能性はある。

だが、彼は、そこで「モダン・ボーイ」の紐帯を完全にむすんでしまうことなく、当該の場に亀裂を入れていく。「新青年趣味」とは、徹底した世界の相対化をふくみながら、渡辺のなかでは、それを外部にのみ適用させるのでなく、己の上にも敷くことが「新青年」たることの「趣味」として意識されたのではないかと想像される。それゆえ、金の工面に奔走したり友情を強要したりするよりも自分ひとりで牢屋に入ったほうが「ずっとロマンティックだ」との断言は、アイロニカルな様相を呈しながら、そこには厳然とした一人一党の自覚がみとめられる。

旗幟鮮明で行動に出た前時代の「主義者」には、そのまえに「共産」、「マルクス」、「無政府」等の名詞を冠することが可能であったが、あらたな文脈で生まれた「趣味者」は、それらの名詞を冠し複合名詞をつくろうとすれば既成の意味は無化される。すなわち、主義には確固たる「思想」的主張があるとされるのに対し、趣味は余剰の時間でおこなう道楽とされるため、複合名詞をつくる際にも、主義には硬い語が、趣味には軟らかい語が合わされるからである。そもそも、「主義」に対置される「趣味」の語は存在しても、「主義者」に比して「趣味者」の語は定着していない。その人格の帰属が表される名詞を冠した真摯な「主義者」は存在しても、同様な「趣味者」は存在するとみなされないのだ。そうであるがゆえに渡辺は、一見取り澄ました態度で、しかし確たる対抗を新語に込めたと想像される。さらに、そこから派生した「イズム」、「イスト」は、単独で使用が可能となり、主義や主義者の集団性に対し、朋党からの自由が表現されている。かかる創造性は、水谷が証言したような、渡辺が、雑誌の編集においてころみたコラージュの手法そのものである。

「明快なる教養は諸君をしてノックスの中折帽子よりもバァーベリィの春外套よりもバッキンガムのネクタイよりも更に有効にスマートならしめる」との辞は、青年が先見する破局の予兆とともに吐かれるだろう。そうして強度のある反俗性を秘めながら、ブルジョア然とした身なりで、はなもちならない台詞をあえて弄し、浪漫趣味者は哄笑する。それは、水治療派のジュール・レヴィが、過去の「主義者」のキャッチフレーズ「われわれは

⁴³⁵ 中野収「メディアとしての『新青年』——浮遊するマイクロコスモス」『ユリイカ』青土社（1987）p.146

皆死なねばならない」に対抗し、「兄弟よ、われわれは笑わねばならない」といった態度を彷彿させるものなのである。

第3節 兵隊の死——カタストロフ以前の「個」の死——

作家兼編集者として創作を開始した渡辺は、ミステリーや気の利いたコント、洒脱なショート・ショート形式に独自の世界を模索していった。「影」のような初期の作風は、重厚で時代がかった前時代的な精神の乗りこえという意味においてあたらしかったかもしれないが、一方で「類型」に墮すような陥穽もひめていた。かかる型からあたらしい領域に踏み出すこととなる「兵隊の死」は、1927年の『探偵趣味』に掲載された。

たのしい春の日であった。

花ざかりなるその広い原っぱの真中にカアキ色の新しい軍服を着た一人の兵隊が白い毛布を敷いて大の字のように寝ていた。⁴³⁶

兵隊は、街へ活動写真をみにいく小遣い銭がなかったので、しかたなく野原にやってきたのだった。

兵隊は人生の喜びのありかがやっと判ったような気がした。

兵隊はふと病気にかかっているのではないかと思った。

兵隊の額の上にはホリゾントの青空の如く青々と物静かな大空があった。

兵隊は何時しか口笛を忘れて、うっとりとの青空に見惚れた。

兵隊は青空の水々しい横っ腹へいっぱつ鉄砲を打ち込んでやりたい情慾に似た慾望を感じたのだ。ああ一体それはどういうことなのだ。⁴³⁷

聯隊きつての射撃の名手である彼は、その姿勢で真上の空を狙い引金をひくと、手近な花を摘み胸に抱いて眠ってしまった。何分か経つと、弾丸はすこしの拋物線も画かずに落下して彼の額の真中を撃ちぬいたため、兵隊はそのまま永遠の眠りに就く。

シャアロック・ホルムスが眼鏡をかけて兵隊の死因をしらべに来たのだがこの十九世紀の古風な探偵のもつ観察と推理とは、兵隊の心に宿っていたところの最も近代的なる一つの要素を検出し得べくもなかったので、探偵は頭をかいて当惑したと云う。⁴³⁸

436 渡辺温「兵隊の死」『アンドロギュノスの^{ちすじ} 裔』東京創元社（2011）p.350

437 渡辺温「兵隊の死」『アンドロギュノスの^{ちすじ} 裔』東京創元社（2011）p.350

438 渡辺温「兵隊の死」『アンドロギュノスの^{ちすじ} 裔』東京創元社（2011）p.351

兄・啓助が証言した「新しい短詩型の表現」は、ここでその方向性を示している。作品は、ストーリーの「骨格」を有しながらも、同時に物語の「解放」へとほたらきかける。すなわち、話の筋らしきものは、始点から終点へとリニアにすすもうとはしない。とりわけ注視されるのは、「兵隊」が主語の行が、軍の隊列のように並置された箇所である。その外容は整然としながらも、内容にはあきらかに脱臼が生じている。兵隊は人生のよろこびのありかを理解したように感じたにもかかわらず、つぎの瞬間病気にかかっているのではないかとうたがう。だが、すぐに眼をあおい大空にむけてみほれ、そうかと思うと鉄砲を打ちこみたい欲望に駆られたあげく、かろやかにそれを実行するのだ。最後のあっけない死まで、スピーディーで *incoherent* な軌跡は、物語の完成を志向しない。

また古風な探偵は、困惑したままであり、それは動作の完了ではなく「死因」が割りだされて落着をみるわけでもない。完結をもたない構造からは、あるいは兵隊は死んでおらず、探偵が去ってのち目をあけて起きあがりそうでもある。初期映画的手法を援用しながら、読む者に特定のジャンルを意識させないところに、創作の手腕がうかがえる。



fig. 14 渡辺温の奉公袋

渡辺と間近に接していた水谷は、この作品を「現実への批判から生れたもの」とみなしている。「彼が送っていた青年期は、日本が一つの頂点に達しかけているときで、表向きは平和で繁栄の時代といえただろう。その首都で彼は生きながら、矛盾とか虚偽とか軽薄などの世相を眺めて、懐疑的な反感を覚えた」。だが、彼の死後 10 年ほどして、日本は軍国主義一色になったため、そのとき「この作が再び発表されるようなことがあったら、彼は即座に憲兵につかまって暗いところへとじこめられたにちがいない」⁴³⁹と述べる。

1922 年、渡辺は徴兵検査に合格し、補充歩兵となっている。徴兵の現実そのものについて、他のほとんどの作家同様渡辺も、同時代的な記述をのこしてはいない。当時の徴兵令において、補充兵役は陸軍で 12 年 4 月、海軍で 1 年とされた。1918 年の徴兵令の改正を受け、中学校またはこれと同等以上の在学生の猶予制が全廃され、適齢期に達した者は全員検査を受け、合格者に対しては卒業まで各学校のレベルに応じた年限だけ入営を延期する「徴

⁴³⁹ 水谷準「記憶の断層」渡辺温『アンドロギュノスの裔』薔薇十字社（1970）p.359

取猶予制」が敷かれていた。ここにはすでに、総力戦を意識した特権廃止と兵の均質化がなされている。第一次世界大戦の影響により、陸軍からは大戦研究の成果である調査報告書が数次提出され、一方では、米英の動向に影響された「大量動員論」が貴族院を中心に説かれていた。⁴⁴⁰

兵役経験は、しかしひとつの抑圧のありかであったと同時に、創作の源泉でもあったことが想像される。「青年」であること自体が、天皇の名のもと国家に生をささげられることを約せられた存在であるという現実、自身が自身のものでないというアイロニーを彼によく意識させたのではないだろうか。かかる時代背景にかんがみれば、主語の「兵隊」は「青年」に置きかえることも可能であり、むしろ職業的な兵士のみをさすのではなく帝国の男子を包摂する概念となる。

「青年」は青空の水々しい横っ腹へいつぱつ鉄砲を打ち込んでやりたい情慾に似た慾望を感じたのだ。ああ一体それはどういうことなのだ。

渡辺が兵役につく 1922 年の 5 月、安井は、東京でおおきな石のうえから皇太子をながめる。1923 年、難波大助は、将来の天皇であり自身と同様若年の天皇の息子にむけ引き金をひき、翌 1924 年に刑死する。そして、「兵隊の死」が発表された 1927 年、大逆罪を宣告された金子文子、独房で自死をする。20 世紀初頭の藤村操以来、青年が彼の「神」を同定しようとする行為は、「天皇」が「神」に置換されえる空間において際限なくつづいていく。

近代天皇制の疑似宗教性は、このときすでにほころびを露呈していたが、破局のきざしは渡辺にそれ以前の「個」の死をえがかせたのかもしれない。しかし、兵隊の「最期」に、自由意志による可能性が設定されていることは重要である。作品に、残酷さをこえた清澄感がただよるのは、そこに自由な死による生の「尊厳」がみとめられるからだろう。

時相や兵役経験が、彼に生の不条理をおぼえさせたことは想像にかたくないが、詩的表現と映画的表現のあいだで結晶した稀有なこの創作は、かかる不条理をこそエネルギーにしたものと考えられる。1930 年 4 月、『新青年』は、渡辺温追悼号の二面見開きいっぱいに「兵隊の死」を掲載した。

第 4 節 まったき「家族」の欠落——父子・母子・姉弟——

前述したように渡辺は、一般的な意味で家庭にめぐまれ、とくべつな反抗の契機も有さないまま成長したようである。だが、創作において彼のえがく家族は、ひとりとして近代的「家族」の規範におさまろうとはしない。たとえば「父を失う話」（1927）では、近代天皇制の下位にあつては家父長に規定されている父親が、白昼堂々子どもを捨て去って

⁴⁴⁰ 加藤陽子『徴兵制と近代日本』吉川弘文館（1996）pp.163-173

くという内容が注視される。

冒頭、いつもとかわらぬおだやかな朝は、不吉な予兆を微塵もふくんでいない。「私」にとって悲劇というべき日常の転換は、きわめて唐突におとずれる。

こないだの朝、私が眼をさますと、枕もとの鏡附の洗面臺で、父は久しい間に蓄えた髭を剃り落としていた。そよ風が窓から窓帷をゆすって流れ込んで、そして新鮮な朝日のかげは青々と鏡の中の父の顔に漲っていた。

おもてで小鳥が啼いた。

「お父さん、いいお天気だね」と私は父へ呼びかけた。

「上天気だ！ 早くお起き。今日はお父さんが港へ船を見物に連れて行ってやる。」⁴⁴¹

うれしくてたまらない私は、なにげなく父が髭を剃った理由を聞く。

「髭がないとお父さんみたいじゃないだろう。どうだ？……」と父はくるっと振向いて私を見たが、その次に細い舌をぺろりと出して眉根を寄せてみた。

「どうしたのさ!!」

「こうなれば、ちょっとお父さんみたいじゃなくなるだろう。……今日お前を連れて遊びに行ったところで、お前を捨ててしまうつもりなんだよ。うまく考えたものだろう……」

父はそう云って笑った。

「嘘だい！」と私は寢床の上に身を起しながらびっくりして叫んだ。⁴⁴²

とまどう私にかまわず、父はみたこともない麦わら帽子をかぶり赤いネクタイをむすぶと、人気のまだない通りをステッキを振りまわしながら歩いていく。「なぜ？」と追いつがる息子に、父はまともに答えず独語する。

「ほんとにいやな息子だ。十ちがいの息子だなんて！ ああ俺も倦き倦きしたよ。」⁴⁴³

かさねて問うても、にやにや笑うばかりの父の腕に私は腕をからませるが、邪慳に振りはらわれてしまう。汽車に乗ると、窓外をみながら「ヤングマンファンシイ」の口笛を吹きつつ、父は一層冷淡な態度をとる。そして、胸のかくしからコティの香水がむせ返るほどふりまかれたハンカチを出すと、悪くもない眼に鼈甲ぶちの眼鏡をかけるのである。

⁴⁴¹ 渡辺温「父を失う話」『アンドロギュノスの^{ちすじ} 裔』東京創元社（2011）p.91

⁴⁴² 渡辺温「父を失う話」『アンドロギュノスの^{ちすじ} 裔』東京創元社（2011）pp.91-92

⁴⁴³ 渡辺温「父を失う話」『アンドロギュノスの^{ちすじ} 裔』東京創元社（2011）p.92

「お父さん、どうして、そんな眼鏡かけんの？」私は父の不似合な顔の様子を気にかけて、そうたずねた。

すると父はひどく慍った。

「お父さんだって？ 莫迦だな、君は……僕がどうして君のお父さんなもんか！もしも、も一度そんな下らない間違いをすると、なぐるぞ！」

「……」⁴⁴⁴

港の駐車場で大きな赤革のスーツケースを受けとった父は、サクソニヤ号という船に乗り込み、甲板からにこやかに挨拶する。

「どうも、ありがとう。お丈夫で！」

「——お丈夫で！」と私は甲板を仰ぎ見ながらそう叫んだ。⁴⁴⁵

波止場の石垣に腰かけて半日も我を忘れていた私に、税関の役人が、身投げでもするのではないかと心配して声をかける。私はむせび泣きながら事情を話す。

「——そう、恰度あなたみたいな人です。髭がなくてつるつるした顔をしていました。

(略) ああ、ほんとにあなたとそっくりです！」と私は叫んだ。⁴⁴⁶

税関の役人はうろたえ、「髭のない貧しげな顔」を両手で抑えたが、人相書をつくりサクソニヤ号のつぎの寄港地に照会をこころみてくれた。

不条理という点において「兵隊の死」に通じるものがありながら、「父を失う話」には、前者のようなカタルシスや美的な要素がみあたらない。子捨てをモチーフにするにしても、父をより悪人らしく、暴力的に描くことも可能であろう。だが、彼は父親である以前に未だ青年のようであり、解放感にみたされたようすでほがらかに去っていくのである。子の側に奇妙に覚醒した視点があることは、悲哀を宙吊りにし、それはさらにアイロニーとナンセンスな気分を将来する。

私はそして、到頭その朝、そんな風にして父から見捨てられてしまった。これから私は全くたった一人ぼっちで、この堪え難い人生を渡って行かなければならないのだ……

それにしても、自分の父の顔位は、よしやその髭がなくなったとしても決して見忘

444 渡辺温「父を失う話」『アンドロギュノスの^{ちすじ}齋』東京創元社（2011）p.93

445 渡辺温「父を失う話」『アンドロギュノスの^{ちすじ}齋』東京創元社（2011）p.95

446 渡辺温「父を失う話」『アンドロギュノスの^{ちすじ}齋』東京創元社（2011）p.96

れない程度に、よく見憶えて置くべきことである。⁴⁴⁷

冒頭に父らしくふるまっていた人物が、次第に若やいでいくのと反対に、「私」は一気に年齢を重ねたようで、なげきかなしみながらも、おとなそのものの落ちつきをみせる。

私は眼をさました時に、大きな見まちがいをしてしまったのかもしれないと思い返してみた。私は父と子の関係について——しかも、私の父は、私とはたった十年^{とお}しかちがわないのだが……それらがみんな今更大きな誤だったように思われて……私はだんだん、強か酔っぱらってしまった時のように、信じ得べき存在はただ自分一個だけになって途方に暮れた。⁴⁴⁸

1927年は、前年の12月に「国父」とされた天皇が死去して間もないころである。1912年から1926年まで在位であった嘉仁は、父の睦仁とはことなる近代的価値観を体現した天皇であった。彼は、父親の正室ではなく権典侍の柳原愛子を生母としていたが、以前のしきたりに追従せず一夫一婦制をつらぬき、自身のこども3人はすべて妃・節子とのあいだに誕生していた。率先してこどもたちとあそび、食事のあとには妃が得意なピアノの伴奏で、家族に侍従や女官を加え合唱することもあったという。彼は幼少時から病弱であったが、結婚後には体調を回復し、全国巡啓に出る。巡啓中には、天皇としては初の肉声を発し、地方の風物に関して饒舌に質問をし、自身の写真が載った新聞をほしがり、果ては演習の合間にひとりで旧友を訪ねることもした。また、侍従に告げず、当時はあまり品のよくない場所とされていた蕎麦屋に足をはこぶなど、前代や次代の天皇とは対照的に予測不可能な行動で、周囲を当惑させることがままあった。

一方、みずからの意思で韓国語を勉強し、韓国のおさない皇太子・李根に親愛をよせる。ヨーロッパの王室に倣い、皇太子時代から洋装の機会がおおく、行啓の場では軍服姿であったが、公式の場ではしばしば睦仁が着ることのないモーニングに山高帽という装いであった。また、閑暇文化である乗馬やヨット、ビリヤード、テニスに熱中し、避暑や避寒の旅行をこのんだ。睦仁や裕仁が、天皇としての生活様式をあらかじめ受けいていたのに対し、嘉仁は、監督者や侍従の目に束縛される東京の生活を、皇太子時代から極端にきらい、抵抗したのである。

だが、自由な環境をもとめたがゆえに、即位後から公務に追われるのと比例し、心身とも病気がちになり、1920年にはすでに公務をこなせないほどになっていた。⁴⁴⁹ そのため、皇太子が、1915年から本格的な巡啓や行啓を開始し、1921年には摂政に就いてい

447 渡辺温「父を失う話」『アンドロギュノスの^{ちすじ} 齋』東京創元社（2011）p.96

448 渡辺温「父を失う話」『アンドロギュノスの^{ちすじ} 齋』東京創元社（2011）p.94

449 原武史『大正天皇』朝日新聞社（2001）pp.4-11 pp.74-76 pp.86-92 pp.104-105 pp.127-129 pp.140-141 pp.162-163 pp.176-178

る。つまり、その「父」は没するより早く、姿をみせなくなっていたのである。生存しているにもかかわらず、息子に「父」の代役が務まるのであれば、あらかじめ付された権威もゆらがざるをえない。くるっとふりむいて、舌をぺろりと出し、眉根を寄せる「父」は、民間に流布していた「遠眼鏡事件」を連想させる。

次第にわかやいでいく「瀟洒たる青年紳士」の「父」は、いつのまに、どこかでだれかと入れ替わったのではないか。現実には、万世一系の「神」はあっけなく脳**の**病気で亡くなり、あたらしい国父は、どこからみても若者の姿をしている。「私」とはだれか？ という問いを喚起させ、父はあっけなくきえてしまった。だが「信じ得べき存在はただ自分一個だけ」という気づきは、のこされたのだった。

「父を失う話」で、「父」は血がつながっていない可能性を露呈したが、「或る母の話」(1929)には、娘をそだてあげながら、みずからの命と引きかえに血縁でないことを告白する「母」が登場する。写真1枚しかのこさず、死んだと娘が聞いていた父親は、母親のむかしの婚約者で、彼がアメリカで結婚したと知ったあと、独身の彼女は知人から娘を養女として引きとったのだった。娘を、彼とのあいだのこどもだと自身にいきかせるうち、相手への「因果な思慕」もわすれられるほどふたりきりの生活に充足していた母は、娘が偶然、元婚約者——9年前に亡くなったという——の息子と知りあい結婚を希望するようになると、にわか**に**自失する。

「私が死ななくともよかりそうなものだ**と**、あなたは思うかもしれませんが——あの人が死んでしまっ**て**、そして斯う打ち明けてしまえば、可愛いあなたとも、やっぱり他人同士に返らなければなら**ない**し、これ以上年寄りの寂しさを我慢して望み少い世の中を生き延びて行くのには疲れ過ぎてしま**い**ました。それでは、誰よりも仕合せにお暮しなさい」。

一生、いじらしい処女であった母！

智子は書置を信ずることが出来た。

そして、二十年の永い間、慈愛深い母親として自分を育て上げてくれた、^{きよ}浄らかな童女の死顔の上に、永いこと涙に暮れていたのだった。⁴⁵⁰

「或る母の話」が、それ以前の作品よりもストーリー性がつよくなり、メロドラマに接近しつつもまったき「物語」とならないのは、個人対制度への「問い」が読みとれるからであろう。たとえ血縁の事実がなかろうとも、ひとりとひとりの人間が、ともに生きることへの可能性はひらかれてあった。そうして、制度としての結婚を乗り越えたかにみえた「母」が、娘の結婚のまえにみずからの存在を否定してしまわなければならないのはなぜか。すなわち、婚姻制度を正式にふまえた「家族」——われわれ——か、「他人」——彼

⁴⁵⁰ 渡辺温「或る母の話」『アンドロギュノスの^{ちすじ}裔』東京創元社（2011）pp.233-234

ら——かという、いずれかの関係しか存在しえないのか。

片方が解放されることで、もう一方が不幸になるような「家族」のドラマは、「可哀相な姉」(1927)でその対照をよりきわだたせる。

すたれた場末の、たった一間しかない狭い家に、私と姉とは住んでいた。ほかに誰もいなかった。私は姉と二人きりで、何年か前に、青い穏かな海峡を渡って、この街へ来たのであった。⁴⁵¹

実際には彼女の母は、私の従姉であり、私の父は姪に子をませたのである。「姉」は、「唾娘」として生まれてきた。「だが、もう私達の父も、姉の母も、私の母もみんな死んでしまって、今はふるさとの海辺の丘に並んだ白い石であった」。

彼女は、病を得ながらも懸命にはたらき、私をそだててくれる。しかし、私が半ズボンのにあわないほど成長してしまうと、かなしそうな顔で首をたてに振るのだった。それは「愚な父と母」が、幼い彼女に「アベコベ」に教えてしまった「いやいや」の動作だった。

姉は幾度も私の脛を撫でて、幾度も首を縦に振った。

——姉さん、どうしたの?』と私は訊ねた。

姉は長い間に、私と姉との仲だけに通じるようになった、精巧な手真似で答えた。

——ワタシハ、オマエガ、キライダ!』

——なぜです?』

——オマエハ、モウ、ソレヨリ、オオキクナッテハ、イケマセンヨ。』

——なぜです?』

——ワタシハ、オマエト、イッショニ、クラスコトガ、デキナクナルモノ。』

——なぜです?』⁴⁵²

「眼に一丁字もない」姉は、筆に墨をふくめ、私の顔へおおきな眼鏡と髭を描くと、鏡のまえへ連れていく。

——立派な紳士ですね。』と私は鏡の中を見て云った。——

——ゴラン! ソノ、イヤラシイ、オトコハ、オマエダヨ。』

姉は怯えた眼をして首を縦に振った。

私は姉をかき抱いて、涙ながらに、そのザラザラな粗悪な白壁のような頬へ接吻し

451 渡辺温「可哀相な姉」『アンドロギュノスの^{ちすじ} 裔』東京創元社(2011) p.104

452 渡辺温「可哀相な姉」『アンドロギュノスの^{ちすじ} 裔』東京創元社(2011) p.106

た。

姉は私の胸の中で、身もだえして唸った。⁴⁵³

夕方になると草花の空籠を風呂敷につつみ、病みおとろえたからだを引きずりながら出かけていく姉を見送る私は、彼女の留守中に「媾曳」のため毎晩やってくる女優らしい女性を窓からみかけ恋をする。相手の男性は、くろいおおきな眼鏡をかけ「みごとな髭」をはやしていた。私の髭も青草のようにのびていき、それとともに以前にはなかった反発心がそだっていく。

……私は、姉の体を喰べても大きくなる事が必要だったのだ。して見れば今になって、唾娘の気紛れな感傷のために、大人になることを妨げられなければならない理由はどこにもない筈だ。……人生の曙に立って、私に価値あるものは、哀れな片輪者の涙ではなくして、立派な髭と、そしてあの美しい娘の恋だけである！ と。⁴⁵⁴

ひとり立ちするまえに姉の「正体」をつきとめようとあとをつけ、彼女が『フラワー・ハウス』という電飾文字が明滅する軒に入ったのをたしかめた私は、部屋に身をひそませる。だが、やってきた客が「見るに堪えない侮辱を姉に加えた」のを目にしておもわず飛びだし、相手を短刀で突きさしてしまう。そして、気をうしなった姉に短刀をにぎらせると、おちついた態度で部屋を出るのだった。

何と云う思いがけない幸福が向いて来たものであろう！

私の勇気は、あらゆる人生の不幸をうち亡ぼしてしまったではないか。(中略)

可哀相な姉よ！

だが、私は髭もすでに立派に生えだし、これからは誰にも憚るところもなく、一人前の大人として世を渡って行くことができるのだ。⁴⁵⁵

前述した作品のなかで、それぞれの父子と母子は、ふたりきりの家族とはいえ同性同士のいわばタテの関係で、相手のなかにはたがいの過去や未来が投影されていた。しかし、ここでの姉弟は、年の差はあれ親の不在により、ヨコの関係のなかでふたりの時間をすごしている。姉には身体的障害があるが、自身が弟をやしなうことに存在意義をみいだしており、弟は成人するまでは姉にたよらざるをえず、愛情と嫌悪の入りまじる精神的相姦関係にある。だが、このつよい共依存は、弟が成長することで破綻をきたさざるをえない。姉が悪疾を得、身体が朽ちていくのと反比例し、弟はすこやかに成長する。

渡辺にとっての「映画」とは、トーキーではない活動写真を意味したが、そのなかで身

453 渡辺温「可哀相な姉」『アンドロギュノスの^{ちすじ} 裔』東京創元社（2011）p.106

454 渡辺温「可哀相な姉」『アンドロギュノスの^{ちすじ} 裔』東京創元社（2011）p.113-114

455 渡辺温「可哀相な姉」『アンドロギュノスの^{ちすじ} 裔』東京創元社（2011）p.119

振りのもつ表現力は、無声であることにより最高度に高まる。19世紀末から20世紀にかけての「身体」の復権に際し、ひとびとは、無声映画のなかで身振りの言語をまなんだ。渡辺が、舞踏を本格的にならったのも、声をとまわらない表現に魅せられ、そこに可能性の一をみだしていたからではないかと考えられる。しかし、身振りが語りえないものを雄弁につたえるとき、ときにそれは狂気の相貌をうかびあがらせる。⁴⁵⁶ ここでの「姉」の描写にも、非合理的な情念の横溢として、映画的手法が意識されている。

父子と母子には、「血」のつながりがもとめられていたが、姉弟においては、「血」は最初からつながっていないことがあかさされており、より「性」を媒介としたむすびつきに接近している。ここにあらわれる「抒情」と「おぞましいもの」は、統一された物語の視点にみちびかれることをこぼむ。それゆえ、その美と暴力性は、遠心的に一層つよまるのである。

たとえば「可哀相な姉」は、つぎのような「読み」をされることがある。「夕方になると、夕風の吹いている街路へ、姉は唇と頬とを真赤に染めて、草花の空籠を風呂敷に包んで、病み衰えた軀を引きずって出かけた。——もし、あらゆる小説の中から、いちばん美しい文章を一つ選べと言われたら、私はほとんどためらいなく、このフレーズを挙げるだろう。『可哀相な姉』というタイトルと、これだけの文章を見ただけで、私たちはまず〈感傷〉という言葉強くイメージする。ここから浮かんでくる絵には、私たちがほんとうは大好きな〈感傷〉が、みんな整えられているようだ」。⁴⁵⁷

これは、「抒情」——美的なものにフォーカスした読みであるが、もう一方の「おぞましいもの」——暴力的なものに同時に目をこらすとき、渡辺の「公式的コミュニスト」の面目は、はじめてあらわになるだろう。彼は、姉弟のエゴイズムを自然主義的に描写したり、社会的弱者で被搾取者たる彼女をプロレタリア文学の手法で書いたりしなかった。前述したように、ポスト主義者である彼は、当為としての「趣味者」に賭け、未だ生まれいでない表現を追及したのである。

第5節「シルクハット」／「ああ華族様だよと私は嘘を吐くのであった」

——港が媒介する関係——

(1) 買売春か恋愛か

前述したように、渡辺の作品にはしばしば娼婦が登場する。しかし、彼女たちは、ステレオタイプな娼婦のイメージとはへだたった存在である。たとえば「アンドロギュノスのちよじ齋」(1929)には、主人公の下士官・Y君が、窓下にかよいつめる女優の家の女中をよそ

⁴⁵⁶ 宇和川雄「バラージュ、コメレル、ベンヤミンと無声映画の時代——動物の身振りのなかで——」
『研究報告』第25号 京都大学大学院独文研究室研究報告刊行会(2011) p.92

⁴⁵⁷ 久世光彦『美の死 ぼくの感傷的読書』筑摩書房(2006) pp.40-42

おった街娼が登場する。「一目でそれと判るような、小奇麗なエプロンを胸にかけた可愛いらしい」女中は、アーク・ライトに濡れながら、自身も女優のように涙ぐんでみせる。彼女は、みずから正体をかくしたまま関係をむすぼうとするが、彼も途中でだまされたことに気づきながらそれにつきあう。

彼女の伯母の「家」は下等な下宿屋で、階段ですれちがったのは、以前の晩、彼に「云い寄つた」「病気もちらしい」うすくなった髪に鶉色のリボンをむすんだ女性に似ていた。Y君は、逃げ出したくなるのをようやくこらえ、彼女に電話をかけてくることをいいつける。そしてひとりになると、寝台のうえにひっくりかえり大声でわらってから、鏡台のうえの酒をとり「幾杯も幾杯も」たてつづけに祝盃をあげた。「青春との別れのために——」。

翌朝、軍服にブラシをかけてくれている彼女に、彼は、いくらほらえばよいかと尋ねる。すると、彼女は微笑し「いくらでもない」と答える。じつは、「辻君」たちのあいだで、だれが純真な彼を「口説き落とす」かが賭けられていたということだった。Y君は、「薄い紙入れごと」彼女に手渡して帰り、ほどなく帽子工場ではたらく幼なじみの娘と結婚し、「最も善良な夫になったと云う」。

一見かるやかなストーリーには、「読み」がひとつの中心に収斂されないよう、慎重に亀裂がいれられている。耽美なタイトルも複雑なふくみを有し、読後には、それへの印象が変じるようなしかけがなされている。

——たとえば、アメリカの機械靴の左右を合わせるのに、ほんの^{サイズ}寸法^{きそく}だけで^{やま}左足の^{うそく}堆積^{やま}と^{うそく}右足の^{やま}堆積^{うそく}とから手当り次第に摺り取りして似合の一对とするように、人間が肢を八本もっていたアンドロギュノスの^{むかし}往古^{かえ}に^{むかし}復り^{かえ}度い本能からばかりならば、幾千万の男と幾千万の女との^{フロバビリテイ}適^ふ偶性^{てい}もまた幾千万と云わなければならない。思うに天のアフロバイテを讃える恋の勝負は造化主の意思の^{ほか}外^{ほか}にあるのであろう。神様は、ただ十文半の黄皮の短靴の左足は十文半の黄皮の短靴の右足こそ応わしけれ、と思召すだけに違いない。458

かかる「偶然」により、平生の娼婦と客の関係は容易に入れかわる。彼女にとっては、金銭を得ることが目的ではなく、彼もそこに金銭的關係が介在するなどとは思わないまま、一度は彼女にひかれたのだった。しかし、自明な性の取引に関する合意以前の意思が、双方にはたらいているのであれば、その関係を「買売春」、「恋愛」いずれかの関係に二分することもできないだろう。重要なのは、ふたりが会おうのが、遊郭のような女性が囲いこまれた場ではなくひらかれた都市の路上だという点である。

また「巷説『街の天使』」(1929)で、銀座をあるくほろ酔いの私に「はろお！ はろ

458 渡辺温「アンドロギュノスの^{ちすじ}齋」『アンドロギュノスの^{ちすじ}齋』東京創元社(2011) pp.192-193

お！……」と声をかけてくるのは、「年のいかない女学生みたいに」、「活発な足どりで」あるく「女」なのである。洋装の彼女に「遊んで下すって？……」ときかれた私はとっさに「幾許？」と問いかえすが、相手には意味が通じない。「取引」をきめるまえに、顔を見たいという彼の気持ちを察したかのように、彼女は帽子をとり「ジョセフィニベエカーのような」かわいい顔でわらってみせ、彼は「いや、ありがとう」とおじぎをする。霞ヶ関のマロニエをみてから、ふたりはタクシーで彼のアパートへとむかうが、そのまえに翌日の朝食の材料を買う提案をした彼女は、「宿屋に泊まるんじゃないから」食費は自分がしはらうといいはった。

郊外の安手のアパートメントの一室で、彼女はその晩から翌日の午前まで、まことに善良な主婦として振舞った。⁴⁵⁹

翌日には、彼女がこしらえた朝食——うどんに挽肉とトマトを入れたマカロニ・アラ・ミラネエズで「全く楽しい食事をした」が、昼になると、なごりおしく思う彼をよそに彼女はさっさと帰っていく。

「アンドロギュノスのちすじ 裔」に登場する街娼は、互助的な理由からグループで行動をしているが、ここで「西洋風の辻君」と称される女性は、完全な単独行動である。「契約」を、みずからの意思でおこなう自由もあれば、中間搾取も受けず、自身の判断で「身銭」を切ることもある。さらに特徴的なのは、両者がともにすごす時間に、散歩や花見、食事をたのしむといった恋愛的な要素が濃くなっている点である。

たとえば、遊郭以外にも妾宅等人目のとどかない場での性的接触は以前から存在したが、ここでの関係はよりオープンになっており、しかもそれは1回ずつ完結している。

「余分の金がない」ため、残念ではありながらそれ以上の時間はすごせないと思いこんでいる彼に対し、彼女が去っていくのは単に金銭のためではないようにもみなされ、関係の始まりも終わりも、女性のほうが主導権をにぎっている点が注視される。

(2) 「良妻賢母」でも「職業婦人」でもなく

チャブ屋の女性たちは、前出のダンサー同様、男性たちからまなざされ語られることの多い存在であったが、主体みずからが語った林禮子の『男』は稀有な作品といえる。木村毅の序文によれば、「ある時、ある友人の紹介で、新橋の待合の女中をしていると云う女性が、一堆の原稿をもちこんだ」。無名であるにもかかわらず、感心するできばえだったので、改造社に推薦したところ一度は出版のはこびとなった。しかし、モデル問題等からひろく発売されるにはいたらず 20 年ほどそのままであったのを、モデルと目された人物

⁴⁵⁹ 渡辺温「巷説『街の天使』『アンドロギュノスのちすじ 裔』東京創元社（2011）p.253

が全員亡くなったため、ふたたび出版が検討されたが、作者のゆくえはすでにわからなくなっていたという。彼女と最後に会見したとき一緒だった改造社の高平始も、フォックス映画会社の寺田鼎も物故したため、木村は、この書を世に出すことにより長年の懸案を解消するにいたった。彼は、林を、文学の「習練」などは特別にしたことのない女性であると説明しながら、作品は文学としてりっぱに成立しており、自叙伝とみてまちがいないと思う、と語る。⁴⁶⁰

かかる情報の信憑性には、うたがいが無いわけではないが、少なくとも女性の側からチャブ屋をえがいた作品は稀有であり、そこにいたる経緯も例外的とかがえられる。冒頭からいきなり告白調のモノローグで、小説は開始される。

丁度、自分で自分の體をどこかのはきだめへでも棄てゝしまひたく思つてた時だった。幸か不幸かあの男と知り合つてしまつたんだ。それから男の云ふがままに、反省もなく突發的に同棲を始めたんだが幾日もたゝないうちに、もう二人居る事は苦痛になつてしまつた。⁴⁶¹

つめたい家庭から逃避するように上京した「私」森雪子は、女子医学専門学校に入学後、気がゆるんだようになり学業にも身が入らなくなる。ドイツ語の単位を落としそうになり、50代で独身のドイツ語教師に泣きついて試験範囲を教えてもらうが、交換条件のようにして愛人となる。しかし学校が関係に気づき、ふたりは放校に処される。その後、女優をしながら、偶然出会った会社員の男性と同棲をするが、刹那的なむすびつきはつづかず、かねてから関心をもっていた芸妓の世界にみずから足を踏み入れることとなる。

芸妓の世界で、女優時代に弟のように感じていた吉三郎に会うが、置屋の主人の嫉妬に遭い、妨害をされる。そして、主人からなかば強引に囲われるが、妻に気づかれ置屋に居づらくなったことから、道玄坂にある芸妓屋の経営をまかされる。渋谷は、場所柄もあり客足がつかず、経営難におちいった主人をたすけるため、客のひとりである富豪の老人に身請けをされる。

平穩な数年が過ぎたが、関東大震災が起こり、老人は財産をなくす。「私」は一時的に本郷の学生街に住み、雑誌社に勤め、そこで知り合った記者（女性）の弟・昇が彼女の部屋に入りびたるようになる。老人が、私に手切れ金をわたし去っていくと、その金で「私」は昇とふたりで暮らしはじめる。金で身を買われた生活を一新し、飄々とした彼に癒されながら、はたらくことをともに放棄した生活であったが、それもながつづきはしなかった。

昇が自分を大連へ売ろうとしている相談を立ち聞きしてしまった「私」は、4、5日後、新聞広告の求人を目にして本牧のチャブ屋にむかう。「ママさん」は、すぐに70円を立

⁴⁶⁰ 林禮子『男』白鯨社（1948）pp.1-5

⁴⁶¹ 林禮子『男』白鯨社（1948）p.3

ててくれたが、直後から客をとることとなる。私には、客の指名がつづき、わずか2日間
で70円以上の金を得ると、東京にもどりひとりでの生活をはじめると決意する。

かわいた筆致でものがたりは淡々とすすむが、端的な疑問は、当時相当に高い教育を受
けた女性が、強制されてもないのになぜいわゆる身売りをつづけていくのかという点であ
る。それを解くかぎは、冒頭にえがかれた家庭にあると推測される。彼女は、おさないと
きからいつも母に、「男」の横暴さと「女」の自活の必要をいいかされていた。母自身
が17歳のときに、14歳年長の父に「かたづいて」不平のうちに、「もっと学問したい、え
らくなりた、自活したい」という気持ちをつのらせながら、誕生した私への「愛に引き
ずられて」年をとってしまったのだった。一方、昼でもうすぐらい手術室で、「膿盤のな
かに膿や血にそまったガーゼを製造する」父の仕事には、墮胎が暗示されている。「しか
し女學校を卒る頃までは、ともかくもおとなしい、はにかみやの娘であつた。學校をでる
と同時に結婚をうるさく勧める親達に、懇願して東京の女子醫學專に入学した。だが、私
は醫學など決して好きなのではなかつた。それどころではない、醫者といふ名を聞いた
けでさへ、身震ひするほどきらひなのだ」。⁴⁶²

1928年に持ちこまれた原稿が、いつ書かれたのかは特定できないが、そこから計算すれ
ば「私」は、本論が取りあげる5人とほぼ同世代であると推測される。女子学生の卒業後
の「進路」に「良妻賢母」、のちに「職業婦人」が選択肢として比重を占めたころ、「私」
は両者を忌避する。彼女は、自暴自棄でも男性に依存したいのでもなく、人間の欲望がう
ずまく世界に身を置きつつ、冷静に彼らと自分自身を「観察」している。

たとえば、チャブ屋ではじめての客をとらされたとき、帰っていく彼が「またくる」と
いいながら「だが、そのときにやお前はもう、いろんなお客をとつてゐるだらう、あぶな
いからな」とつづけるのに、つかみかかりたくなるが、同時に「賣りもの、買ひものだ。
買ふ買はぬは向ふの自由にあらう」と思ひなおし、「男」の背中へ冷笑をなげかける。ま
た「異人」の客が、翌朝去りぎわに青い紙幣がつまった弗入れから料金とは別に1枚を抜
きだしてくれたのに、すばやく手をのぼし10枚以上をつかむと「これだけね」とっこ
りわらってみせる。すると相手は、「ヨロシイ」と怒るでもなくうなずいた。⁴⁶³

彼女にとって身を売る仕事は、女優や雑誌社での仕事と同様、選択肢として存在する
が、「結婚」はありえない。各々の仕事は最良ではないにしても、自身で選択しているの
であり、なにがしかの尊厳が感じられるからだ。チャブ屋の女性も、借金や苛酷な環境に
しばられていなかったとはいえないが、すくなくとも遊郭でのように外出も禁止されると
いうようなことはなく、実際に彼女も短期間で必要な金と自由を手にする。えがかれた対
象が、木村のことは通り作者をモデルにしているのかどうかは不明だが、近代に高い教育
を受けた少数者である女性が、「良妻賢母」でも「職業婦人」でもない途へ、不定見では
なく就く姿にはリアリティの手ごたえがある。

⁴⁶² 林禮子『男』白鯨社（1948）pp.10-12

⁴⁶³ 林禮子『男』白鯨社（1948）pp.293-302

この小説が書かれたのとおなじ 1920 年代には、朝鮮でも「モダニズム」が興り、「新式女性」と称された存在があらわれる。1923 年の『時事評論』には、「妓生^{キーセン}生活も神聖というなら神聖です」という論考が掲載されている。筆者の花中仙人は、「何不自由ない」^{ヤンベン}両班の家の出身でありながら妓生になった理由を、社会的制約に対する抵抗であると述べる。男女 7 歳にして席をおなじうせずという教えは、時代的な要求で緩和され女性にも学校教育がうけられるようにはなったが、家にもどれば外出はゆるさず、結婚すればアン^{ベン}房という主婦の部屋にとじこもらねばならない。それゆえ独立して営業をおこなう彼女は、女性を自動車や酒のようにあつかう特権階級の男性を虜にし、彼女への所有的な衝動から犬馬に成りさがらせるため、復讐戦士の一員になるつもりであるという。語調ははげしいが、こころを売る紳士に、肉体を売る妓生である生きかたがどうして劣っていく、と主張する彼女には、『男』の主人公との精神的な共振が看取される。⁴⁶⁴

妓生は「官妓」と「私妓」に分けられたが、とりわけ前者は時調の朗吟、歌曲、舞踊、楽器の演奏をし、詩や書画にもすぐれた者がおおく「総合芸術家」といわれた。彼女たちは、国に属した官婢ではあったが、売春を目的とせず、あくまでも芸芸で接待の席をもちあげた。そこで教養が必要とされたことから、学問もそなえていなければならず、「解語花」とも呼ばれたのだった。1914 年に『毎日新報』が「藝檀百人」で、1918 年に『京城新報』の青柳網太郎が「朝鮮美人宝鑑」で妓生を紹介すると、妓生学校が各地につくられ日本式の剣番制度が組織される。彼女たちは、結婚制度から自由であったため、恋愛を実践することもできたが、一方で結婚制度の外部に存在したため、そのさきにある結婚にはゆきつかなかった。かかる状況で、姜香蘭という妓生は、青年文士との出会いをきっかけに妓生を辞め、近代教育を受けることを選択する。男性とおなじように生きていく決心をした彼女は、理髪店で髪を切り、男性のスーツを着用したが、培花学校では断髪した女性は退学処分であったため、正則講習所に通うこととなった。⁴⁶⁵

後述するように、金子は、最初まなぶことを切実にもとめたにもかかわらず、そこに意義をみいだせないことから主体的に学校をはなれるが、近代に学知を自明視しなかった女性たちにとって、それへの「問い」はまなぶ行為と不即不離に存在した。渡辺の作品に登場する娼婦や「街の天使」たちは、ソフトな造型をほどこされており、学知とのかかわりを直接えがかれてはいないが、固定された性役割からの自由を持っているという点において同時代的な「知」の共振がみとめられるのである。

⁴⁶⁴ 花中仙「妓仙生活も神聖だというなら神聖です」『ソウルにダンスホールを』（2005）法政大学出版局 pp.225-231 初出は『時事評論』（1923）

⁴⁶⁵ 金多希「韓国の近代化と女性——『妓生』と『遊女』、そして『女給』を手がかりとして——」『宇都宮大学国際学部研究論集第 36 号』宇都宮大学国際学部（2013）pp.103-114
一方で 1876 年の日朝修好条規後、釜山や仁川、元山のような主要都市が開港されると、西日本各地から商人や海運業者、白木綿業者が渡航し、日本居留地がつくられる。とりわけ居留民のおおい釜山で遊郭の設置が許可されると、他の地にも遊郭が設けられ、それが韓国における公娼制度のはじまりとなった。

(3) ディエジェーシス——点睛をのこした——

横浜の波止場に近くバフチサライと云うカフェ。窓から青い海と赤い船腹と、ひるがえる船旗とが見えます。よっちゃんがお客にプロレタリアの唄を教えてください。僕はそこの一隅で夕方、キャナディアンクラブを沢山飲みます。

「私の好きな一隅」(1928) 466

「男」が出版社にもちこまれたのとおなじ 1928 年、渡辺は「シルクハット」を『探偵趣味』に発表する。翌 1929 年に「ああ華族様だよと私は嘘を吐くのであった」を『講談雑誌』に発表するが、両者は、タイトル以外はひじょうに似通った作品であることが注視される。とくに作品の骨格はほとんどおなじでありながら、最後の場面における「私」と女性の関係性には、決定的なことなりが存在している。



fig. 15 渡辺温のシルクハット

シルクハットは、青年たる私にはヴァニティの象徴である。給料が 10 円あがった私は、ふるい山高帽子を 10 円で中村にゆずり、それに 15 円を足してシルクハットを買った。シルクハットのもつ「贅沢な気品」を、青年時代に「頭の上に載せて」みたかった私に、それはなかなか似合った。一方、山高帽子をかぶった中村は「ムッソリニのような顔にみえた」。「私共は、それから、行きつけの湊の、砂浜にあるパブリック・ホテルへ女を買いに出かけた。その日は給料日で、私共は乏しい収入をさいて、月にたった一度だけ女を楽しむことにきめていたのである」。

シルクハットは、ホテルの女たち、とりわけ私の「女」を驚かす。もともとから病気もちら

466 渡辺温「私の好きな一隅」『アンドロギュノスの裔』創元社(2011) p.618 初出は『猟奇』(1928)

しかった彼女は、ひと月のあいだに見違えるほど蒼くやつれていた。私は彼女とダンスするが、相手が息ぎれして身ぶるいするので、すぐにやめることにした。中村は、男刈りにした「眉根の険しい悪党みたいな人相の」肥った娘をかえってそこが気に入ったといい、彼女をパートナーに怪しげな身ぶりでアルゼンチン・タンゴを踊った。「寝室に入る前に、私達はめいめい金を払う」。私は紙入れを、女の目のまえでいっぱいにかけてみせながら、「今夜は未だだいぶ金があるぞ」といった。

女が、「活動役者の写真をベタベタ貼りつけた壁に」ケバ立たないようこわごわとかけたシルクハットは、「私達の頭の上で、夜中艶々しく光っていた」。のどをぜいぜい鳴らしながら「たすからないかもしれない」という彼女に「君が死ぬなら僕も一緒に死ぬよ」と私は答える。「……あなた、華族様なの?」「本当を云うと、僕の家は伯爵だけど。」「あたし、華族様と二人で死ぬのは、嬉しくってよ。」「そうかな——」

女の四肢は、なめし皮のように冷めたくて、不愉快に汗ばんでいた。
風が出て、窓の外の浪の音が烈しくなって、私は寝苦しかった。⁴⁶⁷

翌朝、波止場で沖のほうに停泊している西洋の軍艦をながめながら、中村は私に「君の女は、かさかきだって話だぜ」と告げる。「僕は一緒に死ぬことを受け合っただよ。そして僕は、肺病のばいきんをロ一杯の引き受けてやったんだが。」「君は、西洋の水平のかさを引きうけたわけだ。」「そいつは弱ったな。」私はふかいショックを受けて、うっかりシルクハットのケバを逆さにこいでしまう。取りかえしのつかない後悔の涙は、シルクハットのうえにも落ちた。

「けれども、それは男と女との関係だから仕方がないさ」と中村は云った。

「そのかさはもう何百年もの間に、世界中の何千万と云う男と女とを一人ずつつないで縛って来たんだね。」と私は云った。

「男と女との愛と同じ性質のものさ。それに、君はシルクハットをかぶっているのだし、誰だって君をかさかきなぞと云って蔑みはしないよ。」⁴⁶⁸

「私」と中村は、同僚でありときに行動をともにするが、こころからうちとけているわけではない。チャブ屋のような場所で、無防備にふるまい失敗をおかす「私」を、中村は元気づけるふりをして冷笑している。だがここでは、チャブ屋の女性は単に「女」とよばれることで、彼らのホモソーシャルな紐帯は確認される。

シルクハットとフロックコートは、イギリスから日本に輸入されたものであるが、20世紀の初頭に本国ではすでに時代おくれになっていた。時間差で、フロックコートとシルク

⁴⁶⁷ 渡辺温「シルクハット」『アンドロギュノスの裔』創元社（2011）p.132

⁴⁶⁸ 渡辺温「シルクハット」『アンドロギュノスの裔』創元社（2011）pp.133-134

ハットが日本に定着したのは、国家的行事の参加にそれが欠かせないものだったからである。たとえば記者は、陸軍特別演習を取材するとき、シルクハットがないと入場することができず、ただしそれは借りものであってもよく「持参」していることが重要であった。また日清戦争後宮城に建設された「振天府」には、1925年にはじめて「黒山高帽」が許可されるまで、シルクハット以外を身につけて拝観することはゆるされなかった。シルクハットは、男性にとって公的な場での必需品であり、とくに「皇室」関係の行事にはかかせず、かぶらなくても所持することに意味があった。一方、ムソリーニもこのんだというフェルト製の山高帽は、より庶民的で略式のものであった。⁴⁶⁹

天鷲絨^{ビロード}のちいさなクッションで何度もシルクハットをなでる私にとって、シルクハットとはちがい、「女」は替えがきくものでしかない。それゆえ「君が、死ぬなら、僕も一緒に死ぬよ」とは、恋愛の気分で興じた台詞であり、以後彼が、病気に感染した彼女を指名することはないだろう。

この小説が書かれた1920年代末、日本で爵位にある者の数は954名にのぼっており、公爵18名、侯爵40名、伯爵108名、子爵379名、男爵409名となっている。さかのぼって約40年間のうち公爵、侯爵の数はほとんど変わらないのに対し、伯爵は約1.5倍、子爵は約1.2倍、男爵においては4倍以上にふえている。とりわけ男爵の増加は、日清、日露戦争後の論功行賞を反映しており、彼らは新華族的な地位を手に入れたこととなる。よほどの功績がないかぎり、一新後に華族に列せられた者は男爵からスタートしたのであり、逆にいえば当該の爵位は一新前から公卿、諸侯だった華族にはあたえられなかった。

社会的地位はたかくとも、政治、軍事の世界での公卿、諸侯の能力はふるわず、報道写真家の草分けである亀井茲明など芸術、学問の分野で活躍した者も存在したが、ノーブレス・オブリージュの義務をはたせない前時代の遺物のような存在もすくなくなかったという。華族とはいっても、時代の転換期に下級武士出身で、かつては公卿、諸侯をあおぐ存在であった新権力者たちは、短期間で彼我の力関係を逆転させた。そのうえ新華族だけには、さらなる収入があたえられたが、これは反政府勢力に対抗するため新華族を創出する「グランドデザインによるもの」だったといえる。彼らは窮乏には無縁であったにもかかわらず、家門永続資金がしはらわれたため、芸術家のパトロンになる者もめずらしくなかった。⁴⁷⁰「シルクハット」で私が詐称する「伯爵」も、新華族としての恩恵で公債の利子を毎年受けとっていたが、爵位をあたえられるのは個人であるため、「僕の家は伯爵」ということばには虚偽が露呈している。

「ああ華族様だよと私は嘘を吐くのであった」においても、「私」は横浜へでかけるが、はじめてのことであり、案内してくれるのは隣室のコーカサス人・アレキサンダー君である。桜木町の駅に9時に着いた「私」たちは、波止場を通り、山下町の支那街^{チヤニコヴダ}へい

⁴⁶⁹ 小山直子「近代日本におけるフロックコートとシルクハットの紳士像の普及——『通常服・黒高帽』に示された国家表現」『国際服飾学会誌』国際服飾学会（2013）pp.35-36 pp.43-44 p.45

⁴⁷⁰ 浅見雅男『華族誕生——名誉と体面の明治——』講談社（2015）pp.160-161 pp.170-171 pp.300-305

く。「インタナショナル酒場」でビールを飲み、その後元町へ抜けて、「バンガロオ」に寄り12時になるのを待つ。12時にそこを追いだされた「私」たちは、元町通りを徒歩で、腕をくみながら「大丸谷」へむかう。坂道をのぼっていくと、左側にホテルのなまえをしるした軒灯りが立ちならんでいた。めあての^{ニューナンバーナイン}新九番館はくらくらしていたので、東京ホテルの玄関をたたくと「何国？——」という声とともに、小窓があいた。「支那人^{チキニス}。」ととっさにこたえると「満員^{フルハウス}——」のことばとともに窓はしまる。

しかたなく「私」たちは、本牧へタクシーをはしらせながら、十二天と小港のどちらにするか相談するが「キョ・ホテルはブルジョワ・イデオロギイであるというので」後者にきめる。私たちは、数あるなかで「エトワール」というホテルをえらぶ。あかるい広間に、6月の牡丹のごとく絢爛たる女性が10人ならんでいたが、「私」はいちばんうしろで蒼い顔をしてそっぽをむいている女性を指名した。2人分で25円をはらった私たちは、それぞれの^{ねま}寝室に入る。彼女は、私に「あなた、偉い方？」とたずねるが、その声はしわがれており、のどはながいためいきのような音を立てていた。私は、彼女のちいさな頭を胸にいだく。彼女は、わるい病気だからといいのがれようとするが、彼は「いいよ、いいよ」とこたえる。

ここには、「女」の病気に感染したと知り、己のために後悔の涙をおとすシルクハットをかぶった「私」はいない。微妙な差ながら、伯爵から男爵へと嘘の度合いもひかえめになっており、なにより女性は、「女」ではなく「彼女」とよばれ、彼は彼女をいたわるのである。「シルクハット」では、女性は「呼吸病」だと申告したが、ここではもっとわるい病気なのだともみずから真実をほのめかしている。

「シルクハット」では、はじまりもおわりも、場面には男性がふたりであり、買売春を媒介とした男女の関係に変化はおとずれない。一方、「ああ華族様だよと私は嘘を吐くのであった」において、はじまりの場面では、男性がふたりであるが、同伴者は外国人になっている。そして、ラストシーンで、「私」は彼女といる。「私」は、彼女が病気であっても、関係を断とうとしない。

渡辺は、あいだに1年を置いて、なぜ類似した構造のディエジェーシスを並列してみせたのだろうか？ たとえばクレショフ効果は、ショットの組みあわせによりことなる意味が生成することを示すものだが、ふたつのストーリーも、パーツや人物のうごきを変えながら並置することで、思いがけない効果が生みだされている。作者が意のままに空間を支配するのでなく、そこでは作者自身も思いおよばない場面が、みずから生成するごとく出現するのである。「ああ華族様だよと私は嘘を吐くのであった」において、点晴はえがかれていない。その^{ストーリー}筋は、内向きに物語として閉じてしまうのではなく、あたかも初期映画のように、みる者に対し外向きにひらかれているのだ。

第6章 二都港湾史

第1節 対抗する都市

中世の江戸湾には、海上交通の拠点となる湊が点在していたが、そのなかでも品川と神奈川のふたつの湊は、重要な位置を占めていた。中世後期における太平洋海運の展開で、品川湊には、伊勢大湊の船が多数寄港したことが確認されている。当時、伊勢湾内の流通

で中核をなした大湊は、古代から伊勢神宮領の製塩地・大塩屋御園の湊として繁栄し、伊勢神宮属の湊としての機能もそなえていた。伊勢神宮は、御厨や御園を全国各地に有しており貢租が各地からはこばれたため、それらを軸に全国的な流通が展開された。また、大湊等の伊勢の湊は畿内と「陸の道」を通じ、直接むすびついていた。かかる事由により、中世の東国は、伊勢を介し全国的な規模での流通体系に組みこまれ、とくに経済的先進地域の畿内とは密接な関係にあった。そのなかで品川と神奈川の湊は、江戸湾の深部に位置し、霞ヶ浦や利根川など内陸水系をつたい北関東につながるため、西国にとっても重要な拠点となっていた。

近世にはいると、1657年の大火を契機に江戸市域は急激に膨張し、参勤交代による武家人口の増大は総人口を爆発的に増加させ、江戸は大量の物資を消費する都市となる。その結果、大坂など上方から江戸へ送られる物資も急増し、菱垣廻船や樽廻船といった定期船が就航することとなり、上方―江戸間の海路は全国流通の大動脈となった。幕府は、幕領米を廻送するための東北―江戸・大坂への東廻り航路や、瀬戸内―大坂間の西廻り航路を整備し流通システムを確立しつつ、「廻船改め」や「極印改め」等の法令により統制を強化していく。⁴⁷¹

前近代における湊は、自然の地形を利用し波のおだやかな内海にひらかれたが、神奈川湊も帷子川河口の江戸湾に面した入江にひらかれており、師岡保に属していることから、その外港として出発したと推測される。師岡保は、元来荘園に属さない国領で、久岐郡師岡郷をはじめいくつかの郷村（現在の港北・鶴見・神奈川区から都築・橘樹郡・多摩郡までにおよぶ）をふくんでいた。領主・師岡氏は、武蔵国に特徴的な党的中小武士団の一であり、熊野信仰を奉じる集団であったといわれている。国・郡司の私領的色彩が濃い「保」は地方行政とのかかわりがあったが、師岡氏が土地を開拓し在地領主化していくための精神的な紐帯として、中央貴族のあいだで盛行をきわめていた熊野信仰がもとめられたのだった。しかし、それが市域にはいりこむ前時代、湊がすでに機能していたことから、神奈川湊の成立はすくなくとも古代末期にまでさかのぼりうる。

中世に、神奈川湊は鶴岡八幡宮の支配を受け、その後関東管領・上杉氏や戦国大名・北条氏からの影響をつよく受けた。戦国時代には一時衰退するが、江戸が一大消費都市に変貌したのち、魚介類や年貢米を江戸に送り出す拠点となる。18世紀から19世紀にかけ神奈川屈指の廻船問屋であった紀伊国屋は、尾州廻船と活発な取りひきをおこなっていた。江戸時代後期、神奈川湊には、伊勢湾を中心に活動していた新興の海運集団が寄港するようになり、江戸を中継する正式なものでない「対抗的な」物流ルートが形成される。

1857年、日米修好通商条約をむすぶに際しハリスが提出した条約の草案には、開港場および開市場の候補地として、函館・大坂・長崎・平戸・京都・江戸・品川・本州西海岸・九州炭鉱付近の港があげられ、横浜・神奈川の名はまったくみられなかった。それに対し

⁴⁷¹ 江戸の内湾に出入りする廻船は、浦賀に入港させられ、浦賀番所の命を受けた廻船問屋により積み荷の数量がしらべられた。

積極的な開港論者であった目付・岩瀬忠震は、外国が最終的に大坂開港を希望していると看破し、それを阻止することを強調しながら横浜開港を推進する。すなわち、大坂は京都にちかいため朝廷に不都合が生じるばかりでなく、地の利によりすでに商業の大中心地となっているのに外国貿易の理が加われば、江戸をはじめ全国が衰微し大坂のみがさらなる繁栄にあずかるだろうと危惧したのである。

そして、大坂とことなり人力を以て繁栄をなした江戸は、運輸の便にめぐまれないため、特別な措置がとられねばならなかった。その後、水野忠徳により江戸からはなれた人口密度のひくい紀伊・伊勢・志摩辺をあげる意見や、ハリス側からの江戸・大坂・京都のような大都会を希望する主張もあったが、最終的に「神奈川」の開港が公式に記されることとなる。

岩瀬は、条約に神奈川の港および町をひらくとあるので、神奈川の土地を外国人に貸さないことはできないと述べたが、大老・井伊直弼は、交通の頻繁な宿場に外国人が居留すると通行への支障が懸念されるし、神奈川は遠浅で停泊が不便であるのに対し、横浜は錨地としてすぐれていると主張した。一方ハリスは、横浜の地勢は港としてすぐれているが、交通の便がわるい横浜は商業に適さないとして、神奈川のほうを所望した。しかし開港となれば移住出願人の住宅から料理屋・飲食店・日用品店・遊興の場まで建設する必要があり、かつ多額の貿易品のほか日用品の輸送には舟運の便が要されるので、宿場からへだたっていてもさしつかえないこと、また外国の軍艦・商船・漁船が渡来すると混雑を生じやすいためそれらを横浜に集中させようという取り締まり上の見地が重視される。ハリスの反対意見にもかかわらず、終局、横浜開港の既成事実をあらかじめつくり外国人を誘致しようという外国奉行の計画は実現していくのである。⁴⁷²

そして、日本の近代があけるまでに9年をのこした1859年、横浜は、早くも国際貿易港として誕生する。開港と同時に、首都・江戸には外国公使館が設置され、外交官たちは江戸に常駐し外交問題を幕府と交渉する一方で、横浜には領事館が設置され、貿易に関する職務をつかさどった。「外交都市＝江戸、貿易都市＝横浜」という性格のちがいは、外国側の置いた職掌により明確になったともいえる。近代以降「東京は築港と開港を志向するようになるが、幕末期のこの排外的な姿勢は鮮やかに対照的である」。1868年、天皇・睦仁が入京し、当地があらためて首都に選定されたことには、港湾都市としての将来も考慮された可能性が指摘される。1869年には、延期されていた東京の開市が実施され、築地鉄砲洲が開市場にえられた。だが、開市場に外国貿易船は入港できず、外国人も、商用のためにのみ逗留が許可される。そして1872年、鉄道開通により横浜から東京までの日帰りが可能になると、築地では当初期待されたほどの取引はなされず、東京開市が、開港地・横浜に打撃をあたえることはなかったのである。

1880年、田口卯吉は「東京論」で、横浜の国際貿易港としての機能を江戸に移すことを主張する。しかし田口案に賛成であった東京府知事・松田直之が急逝をしたため、築港計

⁴⁷² 横浜市『横浜市史第2巻』横浜市（1970）pp.157-165 pp.195-201

画はいったん頓挫することとなった。次期都知事の芳川顕正は、市街地の改良のほうに重点を置いたが、渋沢栄一の主張により東京築港がふたたび浮上し、1886年には審査会で審議がなされる。そこでは、東京築港により、横浜が衰退することはやむをえないという見解が多数であった。しかし、この情勢に敏感に反応した横浜側の猛烈な反対により、東京築港はいったん棚上げされることとなる。

同年、内務省はオランダ人技師・デレーケに、横浜港内で船渠を築造するのに適当な場所を調査させた。一方、神奈川県は、横浜築港の調査計画を、4か月後にイギリス人技師・パーマーに依頼する。1888年、外相の大隈重信は、1883年にアメリカから返還された幕末の下関事件の賠償金を、横浜の築港にあてることを首相に提言し、受けいれられる。ここに「帝都」東京と「帝都の関門」横浜という位置づけが、一応の確定をみることとなった。

1897年、横浜における第一期築港工事は完了し、1900年には居留地制度が撤廃される。外国人は、日本国内を自由に居住し、商業活動をいとむことが可能になったが、外国商人が東京に移動するよううごきはほとんどみられず、引きつづき横浜での貿易におおきな変化はなかった。当時、貿易額において横浜を抜いていた神戸の脅威を受け、1900年から国と市の費用分担により横浜港の第二期築港工事が開始され、1917年に新港埠頭が完成する。東京築港はたびたび企図されたが、横浜港の充実もあり、ながきにわたり本格的な港湾が築造されることはなかった。⁴⁷³

しかし、関東大震災後の復興にともない、東京はようやく本格的な港湾の建造に取りかかる。1924年に日の出埠頭、1932年に芝浦岸壁、さらに1934年には竹芝栈橋が完成した。1932年、着々と整備されていく東京港に脅威をおぼえた横浜は、開港以来あらゆる犠牲をしのび港湾を整備してきたことが水泡に帰すと陳情をおこなうが、東京からは、貿易でなく市民にとっての必需品を取りあつかうのだという反論が出る。横浜は、対抗措置として、1930年から1934年にかけて国内貿易専用の山内・高島埠頭を完成させた。両埠頭には、国内貨物船が横づけできるようになり、埠頭内まで敷設された鉄道により、東京の山の手などの新興住宅地に直接貨物をおくることが可能となった。それ以降も、横浜を客船専門港とするべきだという意見が東京側からあがる一方で、横浜港の修築には、東京に向かう貨物を横浜港に吸収することも意図されていたのである。

1938年、東京の工業生産額が日本で1位になり、東京港の取扱い貨物量も第5位になると、東京市は、東京港の一部を外国貿易区とするよう政府にはたらきかける。横浜側は、はげしい反対運動を展開し、1938年の開港記念日には、市民の代表1000名をのせた橘丸が視察をおこない、東京に圧力をかけた。

しかし東京側の促進運動の結果、東京開港は国策と位置づけられ、1941年には横浜・東京港を京浜港として統一し、東京港区にすることが閣議で決定された。ただし、入港でき

⁴⁷³ 吉崎雅規「港をめぐる二都関係——江戸・東京と横浜」『水都学V』法政大学出版局（2016）pp.294-301

る船舶は、満州・中華民国・関東州のみという限定つきで、外国貿易は横浜に重点が置かれ、東京はこの補助港とする政府の方針も表明されたのである。近世末からすでに、開港がもたらす利益をめぐり対抗していた横浜と東京は、当初は想像し得なかった相補関係を得て、あらたに並びたつ国際貿易港として発展していくこととなる。

第2節 近代化の先鞭——海から陸へ——

神奈川湊の対岸に位置した開港前の横濱村は、細長い砂州のうえに位置し、その先端には弁天社のある洲乾島と洲乾湊が存在していた。『江戸名所図会』にも取りあげられている弁天社に参拝するため、旅人は対岸の神奈川宿から渡船場まで船に乗り、のちの「馬車道」を利用して目的地にたどりつく。当時の横浜は、主要な街道筋からもはなれた、九十戸ほどからなる半農半漁のしずかな村であった。

しかし、開港がまちかくなると、当地には運河や道路などの交通路が着実に整備されていく。開港場には、国内商人が大挙して移住し、生糸を中心とした輸出も活発化した。1859年、神奈川運上所の完成後、その西側には日本人居住地、東側には外国人居留地が造成され、1860年には、堀割川の開削後四つの橋が架けられる。それぞれにもうけられた関門の内側は「関内」、外側は「関外」と呼ばれるようになった。関外と総称される吉田新田の範囲は、港にちかい東側より、順次水田から都市へと変貌していく。こうした都市化の過程で、港湾機能を強化するために、堀割川をはじめとする運河が、各所で開鑿されるが、それは同時に低地であった新田部分に盛り土をして町場化するために必要な土砂の供給源でもあった。

横濱村は、近世までその大半が入り海であった。江戸で材木商として成功し幕府御用達となった吉田勘兵衛は、1656年に幕府の許可を得て、「洲乾の湊」の埋め立てに着手する。洲乾は、「秀閑」あるいは「宗閑」とも書き、秀閑寺という寺があったところから起こった名称らしい。しかし以前の入江が漸次干潟になったため、洲乾の名をもちいるようになったという。工事は難航したが、結果として土地面積は116町歩にも達し、ちょうど鐘の形状をしていることから「鐘新田」ともいわれた。埋め立てにあたり、沿岸住民への影響も難じられたが、そのつど吉田は将来の利を説き、反対者を納得せしめた。そして、新田開拓に際しこの地に住むようになった部落民に対しても、心を尽くし遇したという。吉田により投じられた私財は、当時で8038両余りにおよび、この偉業を激賞した徳川家綱は、そこを「吉田新田」と命名した。ひきつづき横浜新田、太田屋新田と一連の開発がおこなわれ、もとの広大な海はすっかり陸地と化す。そして太田屋新田の成立直後、横浜は、正式に開港のはこびとなった。

初代・吉田勘兵衛良信は1686年に没するが、吉田家は、長男・吉太郎良春の家系（「勘助」を世襲名とする南吉田家）と次男・吉郎常政（「勘兵衛」を世襲名とする吉田家）に分かれながら、協力し合い新田の経営を進め明治維新にいたった。だが、1870年から

1874年にかけておこなわれた掘割川開削工事に関連し、南吉田家は没落してしまう。

1923年に起きた関東大震災により、横浜市は壊滅的な被害を受けるが、翌1924年、初代吉田勘兵衛に対し、従五位が追贈される。これを契機に、横浜開港の前史として吉田勘兵衛と吉田新田の開発があらためて注目されるようになるが、そこには昔日の「開発」と現前の「復興」が、港都の精神的紐帯として意識されているかのようである。⁴⁷⁴

第3節 焦点のないヴィスタが意味するもの

他の地にさきがけ開港をした横浜であったが、開港場建設の出発点において、当地はまぎれもなく伝統的な「近世都市」であった。⁴⁷⁵1858年、幕府の外国奉行が、開港場建設の実地見分として横濱村をおとずれたとき、すでに運上場を境として市街地を「異国人町」と「日本人町」のふたつにわけることが協議されていた。「波止場を中心として市街地を二分する方針は、以後、横浜の都市構造を大きく規定することになる」。

開港場建設の第一段階は、広大な新田である原地形のうえに、市街地を建設していくことからはじめられた。居留地に住む外国商人は、開港直後から取りひきをはじめており、開港場の承認とともに、各国の領事館が横浜へ移転すると、横濱村の住人たちは立ち退きを強制され、山手の丘のふもと（現・元町）へ移住させられる。同年に、警備上の問題から、山手の丘と横濱村のあいだに堀川が開削され、横浜は長崎の出島とおなじように水路でかこまれることとなる。

横浜は、事後承諾的に開港場になったこともあり、統一された都市計画にもとづくことなく、一貫して幕府が建設主体になり「断続的に」都市建設がすすめられていった。そのため、日本人街の「正方形街区」や平入りの二階建て商家が街路に沿って建ちならぶようすからは、江戸との近似がうかがえる。一方、江戸とはことなる都市としての性格に1. 江戸城下町の計画に際しメインストリートのヴィスタを形成した富士山や江戸城天守のような「焦点」が、横浜には存在しないこと2. 太田屋新田のなかにもうけられた遊郭の特異な存在、が挙げられる。どちらも、横浜が「波止場」を基点とし、海岸線に沿って街区が築かれたことと関係する特徴であるが、遊郭それ自体が海の外にむかってひらかれているとみなしうる点は特徴的である。

たとえば、神奈川でなく横浜の開港を主張した井伊直弼の像は、横浜市西区の紅葉坂上にある掃部山公園内に、海のほうをむいて立っている。1881年、旧彦根藩士たちは、井伊における開港通商の功績と内政の評価を顕彰するべく、銅像の建立を計画した。そして、開港から50年目の1909年、銅像の除幕式がおこなわれることとなる。太平洋戦争時の供出や、開港100年目の再建立を経て、像は同地に立ちつづけることとなる。

さらに、同じ坂の上、海にむかい右手側には、伊勢山皇大神宮がある。1930年に書かれ

⁴⁷⁴ 横浜市歴史博物館編集『横浜の礎・吉田新田いまむかし』横浜市歴史博物館（2006）pp.5-6

⁴⁷⁵ 青木祐介「幕末・明治初期の横浜」『伝統都市Ⅰアイデア』東京大学出版会（2010）p.158

た『濱の以佐古』は、地勢上あたかも市の中丘に皇大神宮が鎮座しているのが、アテネのアクロポリスのようにと讃えているが、海との関係は言及されていない。創建の年代は不詳であるが、「新興」横浜の総鎮守とさだめ、1870年に皇大神宮を現在の境内に奉還したという。⁴⁷⁶

遊郭と神社、掃部守像等は、海を臨む中区から西区にかけて近隣の場に位置している。江戸のような都市計画によらず、そのつど事物が歴史的に派生するように成っていき、しかもそれが海の方角を意識しているのは港都らしい性格といえよう。

第7章 都市をよぎる視線——揺籃の港都から死の帝都へ——金子文子（1903-1926）

はじめに

いわゆる大逆事件にかかわった人物のなかで、金子文子への言及は、これまでさまざまな

⁴⁷⁶ 龍山親祇『濱の以佐古』龍山親祇（1930）pp.187-202

場でおこなわれてきた。たとえば、同時期の「大逆犯」難波大助が、研究はもとより他の場でも言及されることが少ないのに比し、金子が論者からしばしばつよい思い入れをともない語られることは、いちじるしい対照をみせている。「大逆」とされた両者の行為には、基本的に「既遂犯」と「未遂犯」という形態上のことなりが存在したこともあり、金子がかかわった「朴烈事件」も、幸徳事件同様に官憲のフレームアップであったという意見が大勢を占めてきた。また、金子が女性であったことには女性「でありながら」というよわい「性」への同情がよせられつつ⁴⁷⁷、それと反する行動力への賛美が、一体化した評価としてあたえられている。

ただしかかる言及は、アカデミックな論考よりも、在野の研究者や作家、社会運動家等の発言によることが特徴的である。⁴⁷⁸「朴烈事件」は、裁判進行中のいわゆる「怪写真」の流出ともあわせ、直後に一部の知識人や弁護士、運動家を中心に論じられていた。しかしできごとの性質上、隠蔽された部分が少なからず存在したにもかかわらず、この「事件」にまたそれ以上に金子個人に対する関心が戦後まで持続されたことは、ひとつの現象として注視される。

無名の個人として生きてきた彼女は、ふたつの理由により、にわかには日本社会の注目をあつめることとなった。すなわち、関東大震災後の混乱時に検束され、「大逆犯」として死刑判決をうけたこと、そして没後に、彼女自身の生涯をつづった「手記」が出版されたことである。収監中に執筆が開始され、金子の死後5年を経て1931年に発行された『何がわたしをこうさせたか』が、金子の存在をひろく社会に知らせたことには意義がある。だがその反面、同書が金子のイメージを決定づけ、テキストがひとりあるきしているかのような状況がながくつづいているのも事実である。本論が注視したのは、『何がわたしをこうさせたか』に対する私小説的な「読み」の大勢であった。そこにおいて、語る「私」と読み手は、一体化することで「対話」を欠き、個人による思考は終極放棄される。

しかし、確認されねばならないのは、この「手記」が成立した経緯である。金子の同志・栗原一男によれば、彼女の死から数年後ようやく宅下げされた原稿は、検閲によりはさみがいれられ「簾のような」状態になっていたという。栗原は、それを出版するに際し、加藤一夫とともに原稿に加筆、添削をほどこしたことを証言する。『何がわたしをこうさせたか』には、「添削されるに就いての私の希望 金子ふみ」という文章が記載されている。

栗原兄

一、記録外の場面に於ては、かなり技巧が用いてある。前後との関係などで。しかし記録の方は皆事実に立っている。そして事実である処に生命を求めたい。だから、どこ

⁴⁷⁷ 「かわ繊弱い女性の子で大逆犯人の金子ふみ子の数奇の半生 暗い家庭に生まれ遂に大罪を犯すまでの彼女の涙の生立記」『主婦之友』東京家政研究社（1926）に代表される意見。筆者は無記名だが同志の記者。

⁴⁷⁸ かかる状況において、山田昭次の『自己・天皇制国家・朝鮮人』影書房（1996）は、研究の基本に欠かせない詳細な情報をふくむものである。

までも「事実の記録」として見、扱って欲しい。

一、文体に就いては、あくまでも単純に、率直に、そして、しゃちこ張らせぬようになるべく砕いて欲しい。

一、ある特殊な場合を除く外は、余り美しい詩的な文句を用いたり、あくどい技巧を弄したり廻り遠い形容詞をかぶせたりする事を、出来るだけ避けて欲しい。

一、文体の方に重きを置いて、文法などには余り拘らぬようにして欲しい。⁴⁷⁹

この文章自体は、おそらく金子自身によるものと推測されるが、本文に関しては、もはやどこからどこまでが実際彼女により執筆されたのか、判読は不可能な状態にある。かかる経緯をふまえれば、今日目にすることが可能な『何が私をこうさせたか』は、1926年の死のまえ個人によって書かれた文章ではなく、死後数年を経て成った金子と彼らの「合作」といえる。

注視されるのは、金子が「技巧」をもちいたと明白に語っている点である。すなわち、オリジナルの原稿においても、彼女自身による現実の「解釈」は意識されており、さらに複数の加筆による現実の「解釈」が混然としている事実は看過できない。そのなかで、記述の混交がはっきりと区別されるのは、ひときわ印象のつよいタイトルにおいてである。『何が私をこうさせたか』は、現在では知ることのかなわない金子によるオリジナルに替え、栗原と加藤が相談しあとからつけたものだという。⁴⁸⁰だが、このタイトルこそが、テキストに決定的な性格をあたえたものと考えられる。

本章は、閉じられたテキストをひらくべく、これまでとはことなる角度から金子の生の軌跡を考察しようところみるものである。まずは、上述した「手記」のタイトルとコンテキストの関係から、当該の文章の成立が精査される。そして2点目は、金子が幼少期を過ごした場に関する考察がおこなわれる。

従前、彼女の生涯においては山梨県と朝鮮における経験が重要なものとみなされてきたのに対し、横浜での経験は、まったくといっていいほどかえりみられてこなかった。山梨は、金子の母親の出身地であり、金子自身8歳から9歳にかけての1年あまりをそこで過ごしている。『何が私をこうさせたか』のなかで、当該の集落・小袖は、物質的には潤沢でないながら、当地では暴力的な父親が不在であり自然としたしみつつ自由に山谷をかけまわったことが、人生における数少ないたのしい思い出として語られている。⁴⁸¹朝鮮では、養女として祖母の家へ引きとられながら、同家で極度の家庭内暴力をうける。そのとき近隣の朝鮮人からいたわりのことばをかけてもらい、しいたげられる朝鮮のひとびとを目のあたり

⁴⁷⁹ 金子文子『わたしはわたし自身を生きる 手記・調書・歌・年譜』鈴木裕子編 梨の木舎（2006）p.12

⁴⁸⁰ 瀬戸内寂聴「余白の春」解説『瀬戸内寂聴全集』新潮社（2001）p.577

⁴⁸¹ 金子文子『わたしはわたし自身を生きる 手記・調書・歌・年譜』鈴木裕子編 梨の木舎（2006）pp.51-56

小袖には横浜で母が引き入れた男性・小林の実家があった。その後彼女は諏訪村で叔父に引き取られる。

にしたことが、のちの朝鮮人との協働につながった。

家庭内で暴力をふるう父親と、それをなすがままにした上彼女を売りとばそうとした母親の態度は、金子により裁判の過程できびしく糾弾されるが、死刑判決後に母親は、周囲のサポートにより刑務所を訪れている。瀬戸内晴美が、小説『余白の春』執筆にあたり山梨を訪れ、山梨県東山郡牧丘町に顕彰碑——当地を生誕の地と記した——が建てられることとなった経緯は、事後に同地での経験を強調することとなった。⁴⁸²また、晩年をともにすごしたパートナーである朴との関係からは、朝鮮での経験が重視されるのは、自然なこととかがえられる。

だが収監の3年を引けばわずか20年の社会生活のうち、金子が最初の8年間をすごした土地での経験が、看過されるべきではないだろう。開港から半世紀ほどを経た横浜での生活は、彼女にとって、むしろ重要なものであったといわねばならない。前述したように、当時の横浜は近代化の途上にあり、ひとやものの流動と交錯がはげしく、安定性よりも「循環」がより土地の性格を規定していた。彼女が、自身の望む教育をうけられなかったのは事実であるが、その教育を「うける権利が己にもある」とつよく意識したのも、横浜における少女時代だったのである。⁴⁸³

金子文子は、わずか23年の転変する生を、近代に可能となった「移動」のうちに送った人物といえる。いくつもの土地を通過しつつ、ただひとつの場所に安住しようとはせず、それ自体が近代の生氣的「循環」や「運動」と共振しているかのようでもある。本章は、この点にかんがみ、金子の精神を形成した基が近代都市における幼時の経験にあったと措定する。都市の内に定住するのではなく、そこをよぎっていく視線は、彼女を求心的な非「理」への陥穽からまぬがれさせるだろう。そして、他の土地に転じながらも、あたかも渡り鳥が帰巢するごとく、金子は自身の運命を決することとなる揺籃の都市とは水でつながった都市の「中心」へともどってくる。本章は、その経緯を第1節では、「手記」成立の経緯とテキストの亀裂、第2節では、近代横浜における幼児期の経験、第3節では、「怪」写真と都市的空間、第4節では、女性と学知、その限界がもたらす虚無、第5節には主体的にえらばれる自由な死、から考察をおこなう。

第1節 ものがたる「私」とはだれか

(1) 「懺悔」の内実

上述したように、手記の出版が金子自身の遺志であったことにうたがいは容れられないが、それが世に出るに際しては、当時の社会事情や個人の思惑が反映されていた。『何が私をこうさせたか』の版元・春秋社は、古館清太郎と神田豊穂が資金をあつめ、企画をつのる

⁴⁸² 金子文子『赤いつつじの花』黒色戦線社（1984）pp.65-70

⁴⁸³ 金子文子『わたしはわたし自身を生きる 手記・調書・歌・年譜』鈴木裕子編 梨の木舎（2006）p.26

ため前述の加藤と直木三十五（植村宗一）に参加をもとめ、1918年にスタートさせた出版社である。『トルストイ全集』が大成功し、西田天香の『懺悔の生活』、中里介山の『大菩薩峠』がベストセラーになったことから、牧師であり自由人連盟を結成しアナキストへ転身した加藤により、古田大次郎の『死の懺悔』（1926）や金子の著書の企画が実現する。⁴⁸⁴従前考察されてこなかったが、死刑囚である古田の手記の出版が好評をもってむかえられたことが、同様にかかる企画の一環として、金子の手記が出版を検討されるながれにつながると断定される。

『死の懺悔』は、発売されたのち増補版、改訂縮冊版まで刊行されたが、いずれもベストセラーとなった。古田自身は1925年に刑死しているが、加藤のもとにながく保管されていた彼の草稿があり、そのなかから1931年、『死刑囚の思い出』が、田戸正春の編集により出版された。田戸は、『死の懺悔』にかなりの「改竄」がほどこされていたことを証言する。両者には、内容的にはかさなる部分もありながら、文体や構成はおおきくことなり、別物と呼びうるような様相を呈している。

前者は、逮捕の場面からはじまり、収監中のモノローグは家族に対する心情で占められている。また『何が私をこうさせたか』にも通じる、文脈の齟齬が随所にみうけられる——複数の書き手の存在を感じさせる——点が注視される。一方『死刑囚の思い出』の冒頭にかかげられた「はしがき」には、「自叙伝は大げさすぎる。述懐は言葉がいやだ。それより簡単に『思い出』としておく。その方が可愛くっていい」とある。⁴⁸⁵この言にかんがみれば、「懺悔」などというタイトルが、筆者自身によってつけられることはかんがえづらい。当該のタイトルは、先行したベストセラーのタイトル『懺悔の生活』との類似があらわである。田戸は、『死刑囚の思い出』の構成や内容には手をいれず、読みやすさを考慮し前後を2章に分けたというが、同書は、『死の懺悔』のように時間がしばしば前後したり、劇的な展開をみせたりはしない。古田の幼少時から青年期、そして事件にいたるまでの経緯が時系列で、平面的に淡々と書かれている。

とりわけ両者の決定的なことなりは、古田の犯した殺人が、『死の懺悔』からは完全に抜きさられていることである。対照的に『死刑囚の思い出』では、当時の状況が具体的に述べられている。ギロチン社の仲間らと銀行の出張所へ侵入した古田は、もっていた短刀を警備員につきつけ、おどしてみせる。

ひとしきり組んず、ほぐれつ争ったが、トランクを胸に抱えたまま年寄りの男は、打伏しとなった。僕は彼の背中の上に前屈みとなり、小川は彼の頭近くに立って、二人とも、そのトランクを引き出そうと思った。その時、ふと気が付いて見ると、僕の右手に持っていた短刀が、彼の腰の上部に突刺さっていた。⁴⁸⁶

⁴⁸⁴ 小田光雄「春秋社と『何が私をかうさせたか』」 叢書月刊（2006）pp.22-25

⁴⁸⁵ 古田大次郎「死刑囚の思い出」『日本人の自伝 8』平凡社（1981）p.375

⁴⁸⁶ 古田大次郎「死刑囚の思い出」『日本人の自伝 8』平凡社（1981）pp.482-484

1900年、麴町の隼町に誕生した古田は、東京出身であることに矜持をもっていたようである。『死刑囚の思い出』は、「こんなことでは、今時あまり自慢にもなるまいが、僕は江戸っ子である」。「ご丁寧至極に江戸ばかりででき上がった人間」だが、「臆病な因循な江戸っ子」でありながら「負けず嫌い」でもあったため、「こいつらが種々いたずらをしてとうとう僕を牢屋にまで持って行ってしまった」と書き出される。古田は、1917年、麻布中学校卒業後、早稲田大学高等予科を経て大学部英法科に入学し、のちに政治経済学科に転部する。学内の民人同盟会、建設者同盟に参加し、渡辺善寿、長島新たちと小作人社を結成。機関紙『小作人』の編集責任者となった。1920年に神田でひらかれた日本社会主義同盟創立記念演説会に、早稲田の建設者同盟を通じて参加し、自由人連盟を通じて同演説会に参加していた中濱鐵（富岡誓）に出会い、「ギロチン社」を結成する。

中濱を中心としたギロチン社は、機関紙やまとまった刊行物もなければ、所在地も一定しない住所不定の非公然グループであった。彼らは、「リヤク」という隠語で称される略奪行為（大企業の経営者、政治家、富豪などをゆする）をこころみていたが、関東大震災を前後して、その場を東京から大阪に移す。震災直後の9月12日に、庄司乙吉（東洋紡績取締役）襲撃事件を起こしたが、ひとちがいによる誤射でおわる。同年10月4日には、大杉栄虐殺への報復として甘粕正彦の実弟・甘粕五郎を襲撃。さらに10月16日に、前述の小阪事件を起こす。主犯は、古田、共犯は、小西次郎、河合康左吉、小川義雄、内田源太郎、茂野栄吉。運動にいきづまりをおぼえていた彼らは、多額の現金を一挙に獲得することを企図し、大阪府の第十五銀行小阪出張所を襲撃したのだった。しかし、殺人まで犯したにもかかわらず、現金の強奪には失敗し逃亡、指名手配される身となる。⁴⁸⁷

冒頭で、どこか他人事のように淡々と自身を素描したのとおなじく、なりゆきとはいえ無実の人間の命をうばったにもかかわらず、その後古田の態度におおきな変化はみられない。逃亡するときにも「僕は走りながら何となく物足りなかった。また馬鹿らしくなった」「自分は何をするために、今の乱闘をやったかをハッキリ思い出して、あまり逃げるのが早すぎたと考えた」と、かんがえるだけの余裕をみせている。事件後、震災によってひさしぶりに顔をあわせた父や兄妹には、真実をかくしたまま「非常な罪を犯したもののよう」思いながら、それとは別に、殺人をともなった銀行強盗の件は肯定的にとらえられている態度が注視される。

しかし、こうした僕の不徹底から相当苦しみも起ったが、また一面には言い知れぬ誇らしさを感じた。今までの社会運動に、その例を見なかった運動資金強奪の企てを、僕はやって来たのだ。小さいながらも、第一人者の誇りを感じないではいられなかった。そして、それは僕に非常な勇気を与えたのだった。⁴⁸⁸

⁴⁸⁷ 廣畑研二『大正アナキスト覚え帖』アナキズム文献センター（2013）pp.39-44

⁴⁸⁸ 古田大次郎「死刑囚の思い出」『日本人の自伝8』平凡社（1981）p.486

『死刑囚の思い出』にみられるなまなましい心情の吐露は、『死の懺悔』で「許して下さい！」と「懺悔」を繰り返し口にのぼらすために、あらかじめ排除されることが必至であった。後者のなかで、彼は独房において、懺悔のかたわら、家の引越しのせいで「親しいお友だちと別れなければならない末の妹」や隣家の仲よしの猫とわかれねばならない飼い猫を「可哀そうである」と憂い、運動場の庭に咲く菊やコスモスの詩を妹に送る。既遂の行為をたびたび後悔する過去志向の態度——「どうして〇〇たんだろう」といいながら答えを出さない——は、アナーキーな精神とはむしろ対蹠的である。なにより、同書で彼が「懺悔」を繰り返すのは、被害者に対してでも超越者たる神に対してでもなく、自身の家族、とりわけ父親に対してなのであった。

父は手紙でこう教えて来た。「祈れ。その時汝は神になる。」と。僕もそうだと思う。そして父の教えに従っている。今僕は朝と夕きまって、父や兄妹や友人の健康と幸福を祈りまた懺悔する。⁴⁸⁹

『死の懺悔』がベストセラーになったのは、求心的な家族国家観の磁場がつよまっていくときであり、そこでえがかれた「家族愛」は罪のありかを隠蔽し、感傷の共同体にうったえかけたのではないか。つまり「懺悔」は、衆目のまえでなされることに価値があったのだ。好評につき縮刷版が発売されるにあたり、出版社は、父の談話をつたえている。古田の死亡後、当該書に感動する者がいる一方で、墓標を蹴倒す者もでてきた。こころを痛めた父は、これ以上『死の懺悔』を世間に流布させたくないと語ったが、最近読売新聞上で「良書」として推薦されたことから、父親を滔々と説いたところ、とうとう許可を得たというものである。キャッチコピーにいう。「涙光る。死で詩を綴った人は若かつた。その人の戀は清く優しく深く悲しかったその人は涙光る心の持主だつた。紙鶴と遊ぶ心のいぢらしさ冷たい牢獄の生活はどんなに親朋輩の住む温かい家庭を思はせたか——」。

「リヤク」は、主義者たちの資金調達のため、ギロチン社にかぎらずおこなわれていた⁴⁹⁰が、現実に民間人の命をうばったうえでそれを堂々肯定する立場は、無差別テロの容認にひとしい。たとえ未熟であっても、現今の社会をかえていこうとの理想から、いったんはひらかれた世界へとむかった個としての自我は、終局、他者の存在しない文化の内部に帰着する。そこに、神の似姿をした「父」の無限抱擁がある。読者が欲したのは、殺人を犯した青年の直截かつ驕傲な告白——殺人行為が真正面から否定も反省もされることはない——などではなく、無垢な青年がなにかのまちがいで身をあやまってしまう感傷的な「物語」なのであった。

⁴⁸⁹ 古田大次郎「死の懺悔」『ドキュメント日本人 3 反逆者』学藝書林（1968）pp.85-86 p.91

⁴⁹⁰ 大杉が後藤新平から活動資金を引きだしていたことはよく知られているが、栗原によれば金子は神近市子や有島武郎からたびたび金を受けとっており、恐喝的な略奪でなく彼ら自身が「シンパ」であったらしいと説明されている。瀬戸内寂聴「余白の春」解説『瀬戸内寂聴全集』新潮社（2001）p.330

『死の懺悔』を編集した加藤は、10代でプロテスタントを信仰するようになるが、明治学院神学部在学中にめばえた信仰への懐疑を断ちきれないまま、副牧師の職に就く。しかし、26歳でキリスト教から離反すると、強烈な自我主義を展開しつつ、関東大震災後の逼塞期を経て農本主義へと変貌する。キリスト教を信じたころ、「見神」の到来をまちつづけた彼は、一方で生身の女性を眼前にしながらか恋愛を忌避していた。しかし、「奇蹟」は起こらず、彼は棄教と失恋にいたる。殺人を犯した古田が、無宗教でありながら女性とのプラトニックな恋にとどまった態度に対し、加藤がたかい評価をあたえたのは、昔日の自己をそこにみいだしていたからであろう。だが「父」への恭順と引きかえの免罪は、超越者の存在しない世界においてのみ可能な神への挑戦ともいえる。キリスト教から遠ざかったのちも、加藤は「血」の問題をこえることができず、「天皇信仰」を肯定する日本的基督教を唱えることとなる。⁴⁹¹

(2) 傾向映画の時代

『何が私をこうさせたか』という「手記」のタイトルに関して、同時代的に連想されるのが、1927年に発表された藤森成吉の戯曲『何が彼女をそうさせたか』である。同作品は、発表の年に築地小劇場で上演、1930年には鈴木重吉監督で映画化され大ヒットをした。それにより、「なにが……を、……させたか」という句が流行し、その現象は数年間つづいたようである。⁴⁹²同作品で、まずしくも純真な少女・すみ子のあゆんでいく先々には、つぎつぎと不幸がおそいかかる。最後に収容されたキリスト教の女子感化院も、内側には欺瞞がうずまいており、精神を病んだ彼女は、ついに建物に火を放つと狂喜する。あわれなヒロインと偽善的なブルジョアという対比は、戯画的なほどでありながら、労働運動の隆盛した当時は観客を熱狂させ、映画のクライマックスでは掛声がかかったり履物が画面に投げつけられたりしたという。

『何が彼女をそうさせたか』は、当時のムーブメントの一であった「傾向映画」を代表する作品である。傾向映画の先駆は、伊藤大輔監督の時代劇『長恨』『忠次旅日記』

(1927)『斬人斬馬剣』『一殺多生剣』(1929)等で、娯楽とさげすまれたいわゆる「チャンバラ映画」に「思想性と政治的な主張を込めて、権力への抵抗と反逆」を謳ったものであった。それに対し、内務省はきびしい検閲をおこない『一殺多生剣』や溝口健二監督の『都会交響楽』(1929)は原型がそこなわれるほどだったが、片岡鉄兵原作・内田吐夢監督の『生ける人形』(1929)は、上京した野心家の青年が資本主義うずまく都会で翻弄される内容が評判を呼んだ。

傾向映画には、「それまでの日本映画が持ち得なかった」「為政者に対する対立姿勢とい

⁴⁹¹ 大和田茂「〈棄教〉の文学——加藤一夫『見神』への挫折」『大正宗教小説の流行 その背景と“いま”』論創社(2011) pp.133-158

⁴⁹² 茨木憲『何が彼女をさうさせたか』——と、その周辺——『悲劇喜劇』(1986) p.36

う明確な主張が込められ、「時代劇映画の場合は、権力の対象が徳川幕府とすることで一つのカモフラージュがあったにせよ、体制との対立構造を持ち、底辺からの視点を描こうとした点で、現代劇も時代劇も同様の思想を持っていた」とも評される。⁴⁹³一方で、傾向映画には、社会主義や左翼的な思想が反映されていたが、その名にうかがえるとおり、作者の側にはそのような「傾向」があるというレベルにとどまり、革新性はむしろひくいものだったという評もある。たとえば『何が彼女をそうさせたか』の監督・鈴木に左翼思想はなく、ヨーロッパの前衛映画への関心から、社会問題的モチーフを利用してアヴァンギャルドな表現をこころみただという。⁴⁹⁴

1930年、プロキノ発行の『新興映画』は、「所謂傾向的作品に就いて」という特集を組んでいる。以下に代表的な意見を書き出す。「それがジャアナリステイツクに制作者を動かした結果であつたとしても、かうした傾向が日本映畫にあらはれて来たことは喜ぶべきことです。然し『都會交響樂』の検閲保留を機として日本映畫は再び大反動期に戻らうとしてゐます。これは映畫會社が検閲を恐れる為の政策であると同時に、かうした作品を作つた制作者の意識水準がさうした作品を必然的につくらせる程にまで達してゐなかつたからです」(八田元夫)。「尖端的傾向と云ふのがプロレタリア的傾向を意味するものだとすれば、さう云ふものを日本映畫に於て見ることは出来まい。『斬人斬馬劍』とか『都會交響樂』とかに、さう云ふ『都會交響樂』傾向を見ることの出来る人は、學校を出て本を読んで、左翼ファンになつた、と云ふ、さう云ふ幸福な青年男女に限られてゐる」(袋一平)。「ますます大衆は『大衆』自身の姿を、殊にその力を見る事を欲してゐる。ブルジョア映畫は顧客であるところのこの大衆の欲望にそはねばならず、正に自らの墓穴を掘つてゐる譯。かうした『傾向』を押しよめるために、墓穴を掘る彼等の手元に新興映畫人はさかんにたいまつをたくべきであらう」(松山文雄)。「その種映畫は得てして陰惨な感じや悽愴な味を迫力要素としがちですが、もつとほがらかな、所謂尖端的傾向を期待することはできませんか」(田中三郎)。「プロレタリア文學が讀み憎いののに反して、プロレタリア映畫は、面白く見られる」(如月敏)。賛否入りまじりながらも全体に肯定的な意見がめだつ。⁴⁹⁵

しかし、満州事変(1931)をきっかけに、内務省の検閲はさらにきびしくなり、表現の自由は大幅に規制されるようになる。そして当初は、上述のごとく作品に一定の評価をあたえていたプロキノも、一切の商業映画をみとめないという立場をとりボルシェビキ路線に転じると、傾向映画は急速に下火となつていった。

藤森は、文学作品創作の過程で社会主義思想に接近し、1920年には「日本社会主義同盟」に参加している。有島とも親交のあつた彼は、関東大震災発生時の官憲の暴力に抗議し、日

⁴⁹³ 太田米男「非常時の少年たち(1)——映画『僕らの弟』をめぐって——」『Journal of Osaka University of Arts (21)』大阪芸術大学(1998) p.184

⁴⁹⁴ 佐藤忠男『日本映画史I』岩波書店(2006) pp.299-303

⁴⁹⁵ 「所謂傾向的作品に就いて」『新興映画』第2巻第1号 新興映画社(1930) pp.81-86

本フェビアン協会を結成する。己の属する階級は「無産者階級にはなりえない」というのが有島の結論であったが、それに与しなかった藤森は、妻とともに亀戸の「花王石鹼工場」や北海道の牧場での労働、東京市松沢病院での豚飼いを経験し、話題を呼んだ。

面識はないながら藤森の「実践」に共感と尊敬をよせていた難波は、決行直前、藤森宛に手紙を投函し、彼はひそかに受けとっている。プロレタリア作家の金子洋文が藤森宅を訪問しているとき「探索の刑事が来て訊ねるのに、成吉は平然として『そんなものは来ていません』と返事した。刑事の帰った後でそれを炬燵から取り出したのを見て洋文は大いに驚いたという」。⁴⁹⁶

みずから労働者街に身を投じた難波に、「リヤク」をおこなうような発想はなかったが、ギロチン社や金子は有島から資金を提供されていた。また、朴烈事件はメディアにより大々的に報道されたので、藤森が金子の存在を知らなかったというには無理がある。戯曲「何が彼女をそうさせたのか」が、金子自死の翌年に発表されているのは、偶然ではないだろう。幼時から家庭のなかに居場所をもたず、身ひとつで社会をわたっていき、悲劇的な結末をむかえる主人公の少女のすがたには、金子の過酷な人生経験が反映されているとみて相違ない。

(3) テクストの亀裂

『何が私をこうさせたか』出版に際し、先行する『死の懺悔』と『何が彼女をこうさせたか』の存在が、同書に影響をあたえたことはほぼ確実である。ただし、前者が一方的に他方に影響をあたえたのではなく、そこには相互的な連関があるといえるだろう。関係が複雑なのでいったん整理をすると、『何が私をこうさせたか』が獄中で金子により書かれるのは1926年、藤森が『何が彼女をこうさせたか』を出版するのは1927年である。彼女の自死以前から、彼は、裁判中であった朴烈事件のニュース、新聞、雑誌をたびたび目にし、金子の存在に関心をもっていただろう。難波の件にかんがみれば、知識人や社会主義者の知己を通じて、青年活動家・金子に関するより個人的な情報をもえていたと推測される。

だが、金子自身は1926年に亡くなっているのに、彼女が『何が彼女をこうさせたか』を読む機会はなかった。にもかかわらず、つぎのようなフレーズにであうとき、読み手は当惑をおぼえないだろうか？

何が私をこうさせたか、私自身何もこれについては語らないであろう。私はただ、私の半生の歴史をここにひろげればよかったのだ。心ある読者は、この記録によって十分これを知ってくれるであろう。私はそれを信じる。(傍点は筆者による)⁴⁹⁷

⁴⁹⁶ 藤森岳夫『たぎつ瀬』中央公論(1986) pp.60-64

⁴⁹⁷ 金子文子『わたしはわたし自身を生きる 手記・調書・歌・年譜』鈴木裕子編 梨の木舎(2006) pp.288-289

前述した通り、オリジナルの文章と加筆部分の完全な区別は、もはや不可能となっている。しかし、傍点の部分には、あきらかに加筆の痕跡が露呈する。すなわち『何が彼女をこうさせたか』が書かれるまえに亡くなった著者が、『何が私をこうさせたか』においてその影響をうけるという事態が、そこには生じているのである。

そこで当該書と『死の懺悔』では、おなじ編集者が加筆、修正をおこなっている点があるため考察されねばならない。両書が別な「著者」によるものであるにもかかわらず、文中に前後の脈絡が繋がらない部分が散見されるのは、共通した特徴であり、同様な「痕跡」とみとめられる。そして、それらは、ある視点において同心円をえがく。すなわち、物語の焦点は「家族」にあてられているのである。「手記」のなかで、彼が「懺悔」をおこなう身ぶりは、つねに家族愛と一対のものであり、対照的に、家族にはぐれた彼女は、社会にもはぐれ罪を「犯させられる」。それゆえ、彼らの「犯罪」はことなる性質を有するにもかかわらず、そのことなりは消去され、各人の「個」も最終的には捨象されようとする。天皇制を基にすえた家族制度の強化される近代にあり、家族の物語の発動は、社会主義に無関心な一般にも、多大な共感をもって受け入れられたのであり、そこに編集者の企図もあったといえる。

だが、そもそも「手記」のベースになっているのは、裁判の過程での彼女による自分史の語りであり、担当検事・立松懐清にうながされ、開始されたものであった。立松は、もともと確たる証拠もないまま検束した大逆犯の日本人女性——「共犯者」は朝鮮人男性——を、天皇の命をねらうようなだいたいそれた凶悪犯でなく、社会の「殉教者」として公に提示しようとしたところみた。金子自身は、つよい意思を有し意識の表面では懐柔されようとしなかったが、社会の下層で生きてきて自立の途をさぐりながらも冤罪で収監され、同志とも隔離された状況で、ことばを吐きだす——語る行為は、かろうじて生きながらえることだったであろう。その意味においては、立松の誘導は功を奏したといえる。

かかる経緯をふまえ、当該のテキストのなかからいかに「彼女」の声を聞きとるかは、至難の作業にかんがえられるが、ただひとつのゴールはないので、まずは仮説を立て開始せねばならない。ふたりの編集者中、とりわけ金子と朴が検束される以前から生活をともにしてきた栗原は、金子の経験した基本的な事実に関し事実そのものを書きかえてはいないと推測される。彼女が裁判で語っている彼女自身のプロフィールと、「手記」の基本的な内容の一致は、それを証している。

それゆえ、「何を」が書かれているかという部分は、客観的な事実をひろい出すことができる一方「どう」書いているかに焦点がしばられる。個々の表現を、すべてあらい出すことには不可能性がつきまとうが、本章が注視するのは、上述した「手記」の最後の部分である。本文のあとに「手記の後に」と題されたみじかい文章が置かれている。全体のむすびのようになっているが、上述した当該箇所は、おそらく編集者により加筆されたものであらうとみさなれる。

「何が私をこうさせたか」には、金子自身はその存在を知りえない藤森の「何が彼女をそうさせたか」が反響しているが、看過されてはならないのは、「何が彼女をそうさせたか」で主人公の女性が最後に放火という罪を犯すのに対し、金子は「大逆罪」を「着せられた」のであり、現実に罪は犯していないという「事実」である。にもかかわらず「こうさせた」の「こう」の部分には、あきらかに不在の「罪」を彼女みずから示すという倒錯がおこなわれている。そして、豊饒な語りをくりひろげながら、私自身はこれ＝罪については語らない、物語の読者が判断してくれると信じる、というのであるが、禁忌が暗示されながらも罪の「行為」は存在したことが、前提になっているように読める。

彼女を社会的殉教者にまつりあげる場で、権力と反権力は、むしろ親和的にむすびつき、国民の、家族の物語は「物語」として消費される。だが、そうみられることは、金子の意思であっただろうか？

第2節 港都を移り住む家族

(1) 未来を臨まれた町

『夜明けの航跡——かながわ近代の女たち』は、黒船来航を契機とする横浜開港を経た近代の開始から第2次世界大戦終結までの時代を、従来の「中央」と「男性」中心でない「地方」と「女性」の視点からつづったという著書である。文中にかかげられた年表の1926年の項に「金子文子のプロテスト」と題された文章が載っている。略歴に、彼女が横浜で生まれ、母の実家にひきとられるまで横浜市内を転々としたことが記されており「父母が離婚し、母に連れられてどん底暮らしをし、小学校にも満足に行けない少女時代だった」とむすばれている。⁴⁹⁸

金子の記憶がはじまるのは、4歳のときからであるため、彼女が横浜市内のどの区域で生まれたかは判明していない。⁴⁹⁹しかし開港からすでに半世紀ちかい年月を経た20世紀初頭、彼女の記憶の起点となる寿町は、居留地からもほどちかく外国商館、貿易商社、問屋が集中し、家内工業が発達し、近代横浜の経済的活力をになう地域となっていた。当地は、町名も一見して縁起のよいものであるが、そこには「未来」をことほぐ過去からの願いがこめられている。

⁴⁹⁸ 神奈川県立婦人総合センターかながわ女性史編集委員会 『夜明けの航跡 かながわ近代の女たち』ドメス出版（1987）p.92

⁴⁹⁹ 第二回被告人訊問調書には「物心ノ付イタ私ノ四歳ノ時ノ事テアリマシタ當時父ハ横浜市に住ンテ巡查トカヲ勤メテ居リマシタ」との記述があり、『何が私をかうさせたか 金子文子獄中手記』には「私の記憶は私の四歳頃のことまで遡ることが出来る。その頃私は、私の生みの親たちと一緒に横濱の壽町に住むで居た」とある。

前述した吉田新田には、埋め立て時に一か所だけ取りのこされた場所があった。「南一つ目沼」と呼ばれたその区域は、当初排水用の遊水地であったが、草の鬱蒼とした沼地でいくら埋め立てても水面がきえず、多数の人命が犠牲になったため足をふみいれる者もいなかったという。しかし開港後に外国貿易が急増したことから、あらたな更地がもとめられ、当該区域もついに埋め立てられることとなった。1870年から4年をかけた埋め立ての完遂後に誕生した7町——寿町、松影町、不老町、万代町、翁町、扇町、吉浜町は「明けく治る御世の春の日の豊かに都し横濱の市の衢^{ちまた}は縦横に 薨並へて錐の立^{たつ} 処も見渡す本町の北に南に^{なかとほり} 仲通 富貴の町と人の呼ぶ 弁天通り殊更に 夜を日に継て賑はしく^{なりはひ} 業 励む海岸は 日に千艘も万艘も 入船出船絶間なく 東西波止場輸入荷や 輸出荷物を運送の——」とうたわれる「横濱地名案内」(1875)のなかで、他の町とならびその繁栄をたたえられている。⁵⁰⁰

従前、金子の横浜体験はそれ自体注視されてこなかったが、幼少時におけるみじかくもしあわせな思い出は、彼女自身にはそうと意識されなかったものの、同地の発展期を背景にしている。彼女は、当時の生活について訊問調書で述べている。「父ハ細カイ事二気ノ付ク几帳面ナ子煩惱ノ性格ノ持主テアリマシタ夫レ故父ハ私ヲ肩車ニ乗セテ遊ヒニ伴レテ行ツテ呉レマシタ」。⁵⁰¹町の繁栄は、土地の性格が招来した開港というできごと起因するが、それは他方で、社会的なひずみをも生じさせることとなる。金子がすごした20世紀初頭、当地に「光」が当てられたのだとすれば、戦後の時代には「影」が射したのだともいえよう。ただし、負性の要因が存在しても、そこには旺盛な生命力がひめられていたり対抗的な可動性が存在したりしていたという点も看過できない。そこで寿町の推移をみることにより、あらためて金子が当時どのような環境で生きていたかを逆照射すべく、その後の当地の状況を概観したい。

第2次世界大戦で市街の半分ちかくが焼失すると、戦後に埋め立て地域は、戦火をまぬがれた港湾施設とともにアメリカ軍に接収されることとなる。それまでの貿易業者は転廃業せざるをえず、接収解除後もかつてのような繁栄はもどらなかった。進駐軍の物資荷役作業が始まると、沖仲士のしごとをもとめて、全国から失業者たちが横浜へ流入してくる。だが、警察による取締りが強化されたことにより、彼らは監視のきびしくない寿地区(寿町・松影町・扇町)方面へ散っていき、仮のすまいをさだめた。それにともない、市内をながれる河川の舢に「水上ホテル」がつくられるが、転覆事故が起きたのち簡易宿泊所が建設され、いわゆる「寄せ場」が形成されていく。そして、寿地区は、山谷、釜ヶ崎とともに三大寄せ場とよばれるようになるのである。1960年前後の寿地区では、麻薬が流行し、ちかくの大岡川からは連日のように死体が揚がり、いわゆる暴力団の出入りが日常的にあった。また「寿の中央には血液銀行があり、売血者の列がつづいた。血をとりすぎて、ロウのように白い顔になった労働者がよく路上で死んでいた」という。

⁵⁰⁰ 森田友昇「横濱地名案内」森田友昇(1875) p.28

⁵⁰¹ 再審準備会編集 大島英三郎『金子文子・朴烈裁判記録』黒色戦線社(1977) p.9

横浜市の職員として、寿町に住みながら子どもたちの生活をサポートした野本三吉（加藤彰彦）は、『裸足の原始人たち』（1974）のなかで、同地区の家族のかかえる問題を描出している。金子は、1920年17歳のときに独立を決意し、親元をはなれているが、半世紀を経た1970年代の同地区の子どもたちは、「狭いドヤの中」で「自らの暗い情念を晴らそうと」日常的に虐待をおこなう親に、期待自体いがかず、彼らを自発的に「捨てよう」とするのである。たとえば、酒を飲み暴力をふるう父親と、子に泣きつかれても夫をおそれるあまりそれに加担する母親のもとで、家出を繰り返した登英雄は、幼児の時期から小学校に入るまでを過ごしたエリザベス・サンダースホーム——そこでは同様の境遇のこどものあいだで「兄弟姉妹」のような関係がむすばれていたという——へもどることを切望する。そしてスタッフたちの助力によりねがいがかなうと、親のほうをふりかえりもせず意気揚々と去っていくのである。野本は、学校や家庭がうしなってしまったむすびつきを「地域としての寿の街がもつべきもの」であるのにそれが立ちいかない、と憂う一方で「なにがなんでも、親のところにはなくてはならないというこだわりは」寿の子どもたちと接触しているうち徐々にきえていく、と語っている。⁵⁰²

1968年には約7500人（うち子ども約1000人）いた寿町の人口は、1980年以降は6000人台にまで落ちこみ、以降は減少傾向にある。時代により構成人員にも変化があるが、1980年代に急増したのは、移住労働者のフィリピン人であった。カトリックである彼らは、毎日曜日「横浜港をみおろす丘の上」に立つ教会へ、身なりをととのえて出かけていく。彼らの生活をサポートする非フィリピン人のグループはいくつかあり、プロテスタントもカトリックも教会はまずしい境遇にいる者に食事を提供し、不法滞在者にも非公式なかたちで「精神と実際の両面」でのアドバイスをあたえていたことが証言されている。

マニラ市のセント・トマス大学を中退し、ケソン市のトリニティ・カレッジで政治学を修めたレイ・ベントゥーラは、在学中に左翼運動に参加するが、運動に疲弊し日本へ留学生としてやってきた。そして就学ビザ失効後の1988年からおよそ1年間を、寿町で、不法就労者としてはたらくこととなる。『ぼくはいつも隠れていた フィリピン人学生不法就労記』の最終章「われ出頭す」には、仕事のきびしさよりも「隠れんぼのくりかえし」に屈辱をおぼえたがベントゥーラが、入国管理局にみずから出むく経緯がつづられている。予想に反し、警備課の取調官はすこしも威圧的でなく、「コトブキ」の精密な地図をひろげると、あらゆる知識を示して彼を吃驚させた。彼は、逮捕も拘留もされず、手続きのおわった書類を受けとるとき、1年以内なら自由に日本にもどってきていいと告げられる。「みえない存在として生きていこうとするぼくたちの努力はすべて、ただのお遊びでしかなく、労働者と斡旋業者、ミグミグ⁵⁰³と警察は、みんなそれぞれの役割を演じているにすぎなかったのだ。」「ぼくたちはかくれて暮している。彼らは見て見ぬふりをする。そして世論が要求したときにだ

⁵⁰² 野本三吉『裸足の原始人たち』田畑書店（1974）

⁵⁰³ 「イミグレーション」の隠語

け、名ばかりの手入れをおこなう。それ以外のあいだ、ぼくたちは必要悪なのだ」。⁵⁰⁴

そして 1990 年代からは、韓国人が、寿町における外国人労働者のなかで最多数となり、1995 年以降外国人の数自体が減少傾向にあるものの、その比率はかわっていない。⁵⁰⁵韓国人が、当地に住みやすい理由のひとつに、簡易宿泊所の経営者のほとんどが在日韓国・朝鮮人だということがあげられる。そこには、戦前の植民地支配により強制的に移住させられた彼らが、企業へ就職しようとしても民族的差別の壁があったため、自営で起業するしかなかったという事由がある。

近代以前から港都はおおくの労働者をひきつけてきたが、その光と影の部分には、当地におけるキリスト教のありかたもかさなっている。渡辺英俊は「地べたに存す神——寿町」で、寿町から「山手」の山のうえにあったブラウン邸（現・共立学園）までが、坂をのぼれば 15 分、くだれば 10 分たらずであり、山の下の子橋ちかくに住んだ植村正久の住居や、ブラウン塾の塾生たちが共同生活をいとなんだ中島屋と寿町のあいだも 5 分とかからなかった事実を指摘する。日本基督公会の設立が 1872 年、7 町が命名され「亀の橋」が完成したのが 1873 年というように、横浜バンドの発足と埋め立ての完遂は、場所と時をほとんどおなじくしている。しかし、横浜バンドは、フルベッキの「宣教はたかい社会階層からはじめるべきである」ということばに象徴される立場をとった。そのため、労働者の存在に配慮してひらがなの聖書をつくろうという意見をしりぞけ、漢文の聖書づくりをすすめたのである。渡辺は、この経緯を「横浜山手という『表』に位置したキリスト教が、山の下の子川向こうに位置した寿地区とその周辺という『裏』の地域に生活していた労働者階層を完全に見失っていたことを意味する」と断じている。⁵⁰⁶

金子は、後年東京でキリスト者に出会い、一時は教会に通いながらも、のちに幻滅してそこから身を離している。横浜バンドの地で、彼女が、ささきのようにキリスト教にしたしく接する機会は、かかる状況からあらかじめうしなわれていたともいえる。

歴史的経緯にかんがみれば、金子の両親が横浜にやってきた当時は、横浜全体が近代化の途上にあり、彼らが住むこととなる寿町も、もっとも活気をおびた時期であった。のちに家庭内で暴力をふるい家族をかえりみなくなる父が、なぜ寿町時代には娘をいつくしんだのかについて、従前、正面から考察されることはなかった。本論は、その理由として、進取の気風に富み発展していくあたらしい土地で、わかい親たちが心機一転みいだそうとした希望が、そこに反映されていたからではないかと推測するものである。

⁵⁰⁴ レイ・ベントゥーラ『ぼくはいつも隠れていた フィリピン人学生不法就労記』草思社（1993） pp.173-178

⁵⁰⁵ 山本薫子『横浜・寿町と外国人——グローバル化する大都市インナーエリア』福村出版（2008） pp.29-31

⁵⁰⁶ 渡辺英俊「地べたに在す神——寿町」『低きに立つ神』コイノニア社（2009） pp.240-244
牧師である渡辺は、寿町にある「なか伝道所」を拠点に、同地区で外国人労働者の人権をまもることを目的とした「カラバオの会」と連携しつつ、「解放の神学」をかかげ活動している。

(2) 巡査と紡績工

金子の父・佐伯文一は、広島県安芸郡で代々庄屋をつとめる家に生育し、中学から単身上京、築地の中学校を卒業する。その後いったん郷里に帰ったが、1897年ごろ神奈川に出て、港湾埋め立て工事の事務員となった。だがそのしごとは長くつづかず、以後、頻繁に転職をくりかえすこととなる。生家の没落は、彼に将来の選択肢をせばめさせたのだが、何不自由なくそだてられた身にはその現実が受け入れがたかったことと想像される。佐伯が中学時代をすごした1890年代は、「遊学」がキーワードとなる門閥から「才能」の時代への転換期であり、彼の行動にも立身出世的な価値観が反映されている。可能であればさらに上の学校へすすんだのかもしれないが、経済資本の喪失により一獲千金的な機宜を模索するうち、発展いちじるしい港都にもどってきたのだった。

母・金子きくのは、1877年山梨県諏訪村の農家に誕生。生家は、土地所有において村では最初中程度であったが、次第にそれを減らしていったという。裕福な家庭とはいえないながら、地元を離れたのちも親族とのきずなはとぎれることがなかった。佐伯と知り合ったのは、彼がタングステン試鉱のため、近隣に滞在したことがきっかけだった。交際が村人の噂になった1902年ごろ、それを避けるように彼女は佐伯と横浜に出たという。

1890年代に、横浜の海岸通り一帯は、砂利運搬のための人夫部屋が建てられ、寿地区は、問屋街および市場となり、輸出用の繊維製品をつくる家内工業の家が存在していた。金子の父親は、最初に人足部屋の事務員、私塾の経営者、それから寿警察署の巡査を務めた。『神奈川県警察史』によれば、当時の神奈川県警察の職階は、総長、権総長、検官、部長、巡査となっている。巡査採用制度に関しては「体格 身幹五尺一寸異所ノ者 強壯ニシテ欠所ナキ者」の条件で、「法律・規則」「歴史・地理」「作文」「算術」「写字」の試験が実施され、対象年齢は「21歳以上35歳以下」、「5年以上の奉職を誓約」しうる者で、保証人を必要とした。規則遵守は無論のこと、上官の命令には絶対服従が義務化されている。給料は7円から10円。当時親子3人がふつうに暮らすことのできる額ではあった。⁵⁰⁷

当初彼は、新時代の制服をまとうて街を巡邏するしごとに、誇りをもって臨んだのではないかと想像される。警察内では最下位の職分であるとはいえ、詰襟に金ボタンという公僕の「正装」は、彼の内面をも律し、家庭でも模範的な父親たらんとさせたのではないだろうか。しかし、短期間の出世は容易でなく、市民に模範を示すべく課された規則もきびしいものであった。1905年には横浜騒擾事件が起こっており、警察は群衆を刺激せず暴動を収めるよう、対応に苦慮している。⁵⁰⁸

だが、ほどなく父は遊郭に入りびたるようになり、金子は、母に手をひかれ父をむかえに

⁵⁰⁷ 神奈川県警察史編さん委員会『神奈川県警察史 上巻』神奈川県警察本部（1970）pp.31-34 p.406 p.414

⁵⁰⁸ 神奈川県警察史編さん委員会『神奈川県警察史 上巻』神奈川県警察本部（1970）pp.621-626

いく。寝間着姿で出てきた彼は、母を突きとばしたり殴ったりした。6歳のとき、弟が生まれ、同年に母の妹が病氣療養のため同居するようになる。母の留守中に父が、叔母と関係をむすんだことを金子は目にしていた。

やがて、ふたりがことわりもなく出ていってしまうと、母は紡績工場に通い、内職のしごとを得る。母が勤めに出たのは、第一次世界大戦前に独占体制を確立した六大紡績のひとつである保土ヶ谷の「富士瓦斯紡績」工場（1906年生産開始）ではないかと推測される。1910年当時の横浜における紡績業の1日の就業時間は12時間、1か月の休業日数は2日、日銭が18.5銭となっている。1890年代以降の神奈川の女子労働を代表するもののひとつが「製糸」であり、「女工」は工場経営になくはならないものであったため奪いあいも多発し、就業時には契約書が交わされるほどであった。⁵⁰⁹

当時、特別な技術を身につけていない女性が、ふたりの幼児をやしないながら生きていくことは、きわめて困難であったと想像される。金子の母が工場ではたらきはじめる1909年には、富士紡保土ヶ谷工場の酷使が「活地獄」として告発されていた。この時期には、ほかにも工員や娼妓など異種の職業に従事する女性たちによる雇い主への異議申し立てがめだつ。前述の神奈川近代女性史年表の1906年1月には「横浜大黒楼娼妓、待遇問題で楼主と悶着起す」、7月「横浜の婦人服裁縫職人90名、労働時間延長に反対してスト」、12月「横須賀いろは楼の娼妓、待遇問題で楼主側と悶着」、そして1910年、きくのが富士瓦斯紡績に勤める年の1月には「女工阿部マス（16歳）逃亡」とある。

きくのは、同性の労働者間で連帯をこころみるような性格ではなかったようで、文一がふいにもどつてくると出勤をせず、刹那的な生活を送る。金子が、長じて母を「無頓着でだらしない」と形容しているのは、単に日常的なふるまいを指していたのではないだろう。彼女は、女性が、雇用主や男性に隷属せず意思をあらわしはじめたあたらしい時代のながれを、おさないながらも凝視していたのではないか。その「視」は、時代の大状況のみならず、港都という「場」の流動的で多種多様な生のリファレンスにより、一層複眼的になっていったと想像される。

（3）寺町に住む

金子の6歳時の記憶は、一家が「むやみに」引越しをしたことだという。叔母は、父と関係をむすぶようになった後、おなじ家にいづらくなり出奔するも、父に連れもどされる。2度めに叔母がもどされた後、引越したさきは「横浜の久保山で、五、六町奥に寺や火葬場を控えた坂の中程にあった」。

横浜市西区には、行政機関が集中し、各種の学校が存在する。近世には、隣接の保土ヶ谷宿と地つづきでひとつの地域となっていたが、1889年、東海道線がひかれたときに分断を

⁵⁰⁹ 神奈川県立婦人総合センターかながわ女性史編集委員会『夜明けの航跡 かながわ近代の女たち』ドメス出版（1987）p.45

された。久保山は、その保土ヶ谷区との境に位置する丘のうへの地域である。

ここには、1874年に自治体が管理する公営墓地として造成された面積126,213㎡、

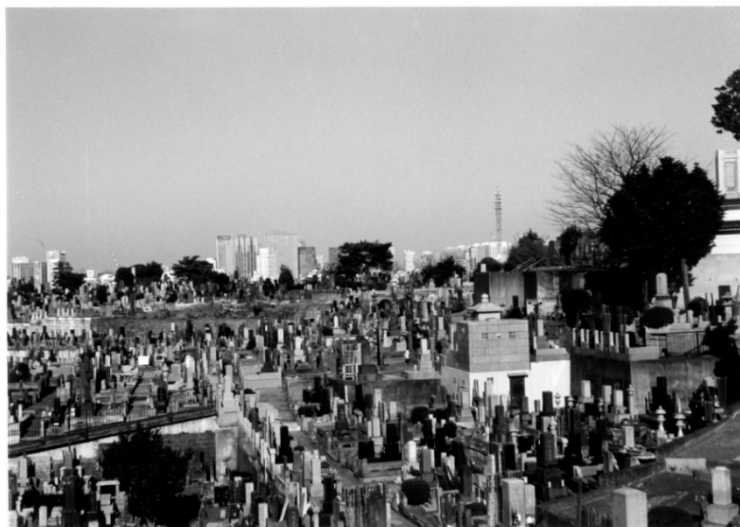


fig. 16 筆者撮影「久保山墓地」2016年2月

(画面右端に同西区海側に建つランドマークタワーがみえる)

13,940 墓の久保山墓地がある。神道国教化のための廃仏毀釈に際し土地を没収された寺の墓などが収容されたこともあり、市内でもっともひろい墓地となっている。『横浜市史稿』は、市街内にある墓地は、街の美観をそこねるばかりでなく衛生的見地からも問題があり「樞要の地を之に充つるが如きは、最早今日の現状に適する所ではない」という理由から、当地がえらばれた、と記す。⁵¹⁰それをうらづけるかのように、西区自体は中区とともに横浜の中心地でありながら、墓地はその端に位置する人目のつかない場所に存在する。

久保山——元久保町は、現在は、ふるい寺院、墓参り用の花や線香を売る店、キリスト教系の病院、セツルメントの診療所などが散在するしずかな住宅地となっている。2017年、筆者は当地をおとずれたが、目に入るおびただしい墓群のどこが「久保山墓地」なのかわからず、売店でたずねたところ、ここにある全体がそうであり「寺町だから」という説明を受けた。墓地内をあるくと、広大な斜面には陽光があふれ、壮麗な印象をうける。墓地の頂上部分からは、おなじ西区の海側に位置するランドマークタワーが眺望できる。

『パターン・ランゲージ』は、墓地を「公園の隅、歩行路の一角、庭、門口の脇など」に割りあて、「散在させる」ことを推奨している。「都市の外れやだれも訪れない場所にある巨大墓地、非人格的な葬式、死の事実を子供に覆い隠すタブー」は、遺された者が死と和解する機会をうばってしまうからだという。日本にかぎらず、過去100年以上にわたり、大工業都市などでは、死という事実日常的に接触できた墓地が消滅してしまった。

⁵¹⁰ クリストファー・アレグザンダー『パターン・ランゲージ』平田翰邦訳、鹿島出版会（1984）pp.185-187

しかし寺町のこどもたちにとって、死に関する種々の記号に接触する体験は、日常的で自然なできごとでもあろう。火葬場にほどちかい場所に住んでいた当時について、金子はそれ以上なにも記していないが、交差しながらふもとへとつづく大小の坂を擁する町で、活発であつたらしい彼女は、葬儀を横目にあそんでいたのではないかと想像されるのである。

(4) 丘のふもとの「学校」

私の七歳の初夏頃、父は職を辞して氷店を始めましたが、子供がいては店の邪魔になると、名義をつけて二軒の家を構え、一軒には父とおぼとが同棲し一軒には母と私ら姉弟とを住まわせて体よく私らを追い出しました。⁵¹¹

「手記」には、金子が母と弟と3人で坂の上の寺町にのこされ、父と叔母は「住吉町」に移ったと書かれているが「坂を降りたとつつき」にあるのは「末吉町」である。住吉町は、「関内」にあるずっと海寄りの場所で、久保山からは末吉町までの倍以上の距離がある。この事実は、これまで金子に関する論考からは見落とされてきた。

このころ、彼女は学齢期をむかえている。『横浜西区史』によれば、横浜市域には江戸末期に百を越える私塾・寺子屋があり、寺の墓地には、寺子屋の師匠の顕彰碑が建てられていることもあるという。「西区域は東海道に面する地域であり、神奈川奉行所が設置されたことから」江戸との交流にともない「開けた地として実学を教える学校が存在していた」。「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめんことを期す」べく敷かれた学制頒布の翌年である1872年から1911年、すなわち金子が学齢期になるころまで、西区には小学校が9校設立されている。当初就学率はあがらなかったが、日露戦争後には、日本の国力充実を図るべく、教育熱はたかまっていく。学校が文化や生活改善の場となるのにもない、西区では1911年から経済的に困難な就学児童のために、小学校の夜間部を開設している。

横浜はまた、キリスト者のブラウンたちによって近代女子教育・幼児教育が推進された地でもあった。久保山は、富裕層が住む地域ではなかったが、「文明」観にささえられ教育の重要性が説かれた港都にあつては、金子の遊びともだちのような女兒が学校へいくことの是は、親にとってもより受けいれやすかつたであろう。だが彼女はそれを、家の前の桜の木根元にしゃがんで見送るしかなかつたのだ、と述懐する。せめて本を読んでも「父には誠意がなく、母には眼に一丁字もなかつた」。同時期に、山のうへでは偕成伝道女学校が、共立女子神学校と名称を変え新体制でスタートしている。

父母が横浜へ移ってから8年が経過していたが、ふたりは入籍をしていなかった。母が、金子を私生児として届け学校にいかせようとしても、外聞を気にする父が制止した。それでも、彼女は、学校に行きたいとしきりにせがむ。父はある日、叔母の店の町内に、無籍のま

⁵¹¹ 金子文子『わたしはわたし自身を生きる 手記・調書・歌・年譜』鈴木裕子編 梨の木舎 (2006) p.295

ま通える私立学校をみつけてきた。学校というよりは、寺子屋のような長屋が教室で、「おっ師匠さん」と呼ばれる年配の女性が教えていた。彼女は、丘をくだってきては叔母の店のまえを通り学校へいき、また丘をのぼって寺町の母と弟がいる家へと帰っていった。

「氷屋」は、横浜開港後まもなくアメリカ人がボストンから氷を輸入し大利をあげているのをみた中川嘉兵衛が、種々の苦心の結果、富士山の裾野や諏訪、奥州南部、函館から天然氷を伐りだし、外国船で舶載し、1862年の夏に横濱馬車道で発売したのがはじまりだといわれている。金子がこの地に住んでいたのは、天然氷が機械製氷に切りかわる時期で、1908年には「横浜製氷株式会社」が創業を開始している。父と叔母が住んだ末吉町は、当時繁華街であり、父が経営する氷屋は一時繁盛したらしい。しかし、商売が「ひと夏もちこたえられなかった」というのは、業界全体の動向に対応できなかったためであろうか。

いずれにしても、学校の師匠に贈る授業料がわりの白砂糖2斤が捻出できなかったため、金子は早々に退校をする。その後も、彼女はいくつかの学校に通うが、無籍のためほかのこどもたちと同等な待遇を受けることはなかった。

(5) 8歳の彼女について値段

幽霊は末吉町へもでた。福富町へもでた。その噂の宵の灯のかげには有名な新富横町の矢場女や姿見町、雲井町、賑町あたりの夜の白首、密淫賣の女たちが流星のやうにあらはれた。

佐藤惣之助「横浜懐古」⁵¹²

紡績工場ではたらいっていた母は、2、3か月すると、中村という男性と同居をはじめ。弟は父親と叔母の家に引きとられることとなったが、別れを惜しんだ金子に立腹した中村は、彼女に猿轡をはめ手足を麻縄でしばって川にかかる木に吊るした。また、月謝袋から現金を抜きだして、学校の教師から金子が使いこみをしたごとく思われるよう仕組んだりもした。母はかばってくれないどころか、中村と気を合わせ、彼女につらくあたるようになったのだという。その後母は、中村と別れ小林という沖人夫の男性と暮らす。ふたりは、はたらきに出かけず一日中家でねそべっていた。ときにはふたりきりの時間をつくるため、母は金子を晩になってから遠くまで買い物に追いやったが、帰宅すると醜態を目にした彼女は、こどもながらに親を「あさましい」と思う。

ほどなく彼女は、以前からほしがっていた赤い梅花のかんざしを母から買ってもらい、立派な構えの家につれていかれる。母と先方はなにか話しあっていたが、相手は「人間売買」の仲買人であり、母は彼女を「女郎二賣ウト企テ其ノ交渉ヲシテ居」た。静岡の三島なら買い手があるというのに対し、母はもっとちかくに置いておきたいとかがえ、結局交渉は成

⁵¹² 佐藤惣之助『蠅と螢』新作家（1924）p.105

立しなかった。金子は8歳であった。

佐藤が回想するように、1900年代の横浜には幽霊事件が頻発し、それにつれ幽霊話が流行したらしい。原因として、宗派の不明な宗教の信者や祈祷者が各所に出没し「街中や場末」で「日蓮信者の太鼓の音」がつねに鳴りひびいたり、「地方土民の宗教結社の出張所」が存在したりしたこと、騒ぎに乗りわかい職人たちがいたずらを起こしたこと等があったが、その他にも日没とともにあらわれる街娼たちがそれと勘違いされ、一般に幻覚を生じさせたということらしい。つまり市中には、売買春にたずさわる女性たちが、それほど公然と存在し目撃されていたということである。

佐藤は当時を回想している。「はじめにも後にも、この海港場にはこれといつてふかい精神的なものがなかつたといふのはほんとうだらうか。街がひらかれてそこへ集まつた人は殆ど見知らぬ國々の人であつた。官憲から住宅地をあたへられ、又は労働して人人は今の時代の父になつた。市の富豪はみんな石炭かつぎであり日稼人であつた。この人人が五十年の間に市街の秩序と基礎をつくつた。商業の港、貿易の市場、そして古い日本の各地の風俗と、ただ外面だけの外國風俗がまじつてしまつた。その商人や船員や工人の街と港であるから、古い東京とはちがつて、人と人がおしゃべりをする事件といふやうなものも、へんにかかるく又少し怪奇な性質を帯びるのはあたりまへである」。⁵¹³

土着的な宗教や江戸の夜鷹を思わせる白首は、近代化の波に取りのこされた遺物のようでありながら、存在を消しつくされぬまま、開港場を去来する「影」のごとく一般には映ったのではないだろうか。そこには、過渡期の革新的な風潮と、守旧的な心情のせめぎあい投影されている。風聞は、関内から関外へと徐々に伝播していったらしいが、夜歩きをしないこどもであっても「幽霊」の話はしばしば耳にしたであろう。まして夜に遠くまで行かされた金子は、昼とはことなる街の風俗を目にしたかもしれない。

彼女は自身を早熟であつたとみとめているが、新旧の風物が併存する街で、ことなる種々の相はこどもにも、一見単純な現実が入りくんだ関係から成ることを感知させたのではないか。とりわけ実母によりわが身が、商品として値をつけられようとした経験は、その時点ではおさなすぎで悲哀やいきどおりをおぼえなかつたとしても、透徹したニヒリスティックなまなざしを醸成する契機になつたと想像される。だが、一方で、国際港を有する都市での原体験は、金子において、変革を志向し外国人との協働を容れうる都市的性格の萌芽をも形成したであろう。

第3節 都市と政治

(1) 写真の怪——読書する女性「犯罪者」——

写真は、近代的経験の「両義性」を象徴するものとして作動する。とりわけ近代資

⁵¹³ 佐藤惣之助『蠅と螢』新作家（1924）pp.99-100

本主義は、循環をなめらかで速いものにするため、以前の安定した形式を廃する力とかかる循環を管理することにより予期可能なものにして利益をあげようとする力の緊張関係をはらむ。こうして写真は、しばしば対立する力のいずれにも劇的に参入する。写真イメージの機械的な複製と増殖力が、アイデンティティに関する伝統的な理解の土台をくずす一方で、犯罪学の実践や探偵小説における写真は、アイデンティティの保証として、あるいは有罪や無実を立証する手段としてもつかわれる。⁵¹⁴

一般には情報が公開されず秘密裡にすすめられる裁判の進行中、はしなくも 1 枚の写真が流失したとき、それが喚起するイメージは、被写体の価値を決定づけた。いわば「犯罪者」としての被写体が写りこんでいながら、それは犯罪者が意図せずして「正体」をあらわしてしまった図でも、犯罪者写真台帳のような標本でも、ましてやいかにもそれらしい風貌をした犯罪人の「素顔」でもなかったのである。ガニングが指摘するように、写真イメージの機械的な複製と増殖力は、アイデンティティに関する伝統的な理解——犯罪者は犯罪者らしくしているもの——をくずしたのであるが、ここで循環を逆手に取り利用した者により、結果として政治には打撃が加えられた。

1923 年、関東大震災の混乱に乗じて、朴烈とともに保護検束をうけた金子は、ふたりが組織した不逞社が「其主義上（無政府主義）上必要ナル社会運動及暴力ニ依ル直接行動ヲ目的トセル秘密ノ団体」であるとされ、治安警察法 14 条「秘密ノ結社ハ之を禁ス」に違反したものであるとして、東京地裁検事局によって起訴される。朴は 22 歳、金子は 20 歳であった。取りしらがすすむうち、朴・金子および金重漢の 3 人は、さらに爆発物取締罰則違反として追起訴を受ける。1925 年、朴と金子は、それに加え 1923 年の秋に挙行されることとなっていた皇太子の結婚式における行啓に際し、爆弾を投擲する意図があったとされ、刑法第 73 条後段の「大逆予備罪」にあたりと認定された。

そして 2 回の公判を経た 1926 年 3 月 25 日、朴と金子は死刑を宣告される。判決は、朴が天皇または皇太子に危害を加えんとし、知人に爆弾の入手を依頼し、金子も、おなじ意図をいだき朴と共謀したと断定している。この判決が、法務大臣・江木翼につたえられると、若槻内閣は、臨時閣議をひらき「情状政策上」減刑することをきめ奏請する。そして 4 月 5 日、恩赦がつたえられ、両人は無期懲役となった。

ところが同年の 7 月 29 日、突如差出人不明の手紙が、東京市内各所へ配布される。なかには 1 枚の写真と文書が封入されていた。そこには、朴がくつろいで椅子にこしかけ、ひざのうゑに金子を乗せ、左手を金子の左胸あたりに置き、彼女は本を読んでいるようすが写っていたのである。文書の内容は、このような写真が存在するごとく、当局は両人に特別な優遇をあたえていると告げており、実際に恩赦が決定される以前にそれを公言し新聞等に発表したことについても、司法大臣・江木を攻撃していた。メディアにより「怪写真」と名づ

⁵¹⁴ トム・ガニング「個人の身体を追求する——捨身、探偵、そして初期映画」加藤祐治訳『アンチ・スペクタクル 沸騰する映像文化の考古学』東京大学出版会（2003）pp.98-99

けられた写真の存在について、当局は事実を否定し、偽写真であると断言する。だが 8 月 24 日に、国民新聞が、この写真の撮影者が事件の担当予審判事・立松懐清であり撮影場所は東京地裁予審調室であると報じたのである。⁵¹⁵

布施辰治は「怪寫眞事件の主点と批判」のなかで、「万有生物絶滅の虚無思想に誤られたという」朴烈・文子夫妻の怪写真が、政治問題に発展し、「根底から絶滅せられなければならない既成政党ブルジョア政局」の行きづまりに意外な急転打開の衝撃をあたえているのは、近来の一大皮肉であると指摘する。「立松豫審判事は被告の人間的感情を利用せんとする事には巧みな人間であつても、眞に被告人との間に、人間的感情を湧かし合ふ所の好意を持ち得る人間ではないと思ふ、尤も、それは獨り立松氏ばかりでは無く、今日の官吏の總てが左様なのだらう」。さらに、布施は、官憲の極端な秘密主義——たとえば公判といいながら傍聴人を閉めだす——が存在したため「之も一般的に言ふ事だが、被告人と云へば直ちに罪人、大逆犯人と云へば直ちに大悪人と決めて居る一般人は、所謂大逆犯人の朴烈文子が不逞だつた凶暴だつたといふ事を、無條件に受容れて居るらしい」と分析している。⁵¹⁶

大逆事件では基本的に、事件の性質上無期懲役、死刑等の判決いかんにかかわらず、まずは犯人が改悛している態度が公的に示されねばならなかつた。だが、この事件には決定的な証拠があがっておらず、震災後の混乱のなかで金子と朴はあらかじめ検束され判決がくだされたという状態で、「悔悟」をもとめるのは無理があり、朴は比較的冷静であつたが金子は憤怒していた。

それでは布施のように両者の身近くあり、彼らを支援していた者のほかに、知識人とよばれる人間たちは、この写真をどのようにみなしたであろうか。事件の翌年、『婦人公論』は、「問題の怪寫眞」を見た刹那の感想というテーマでアンケートをおこなっている。回答者は、すべて女性の作家、社会運動家、教育家等である。その内容は、金子に同情的あるいは好意的なもの、嫌悪感を示したりみくだしたりしているもの、特異な寫眞ではないとみなすもの、それに関連し写真を政治利用することへの批判に大別される。以下に代表的なコメントを引く。

あどけない寫眞でありました。可哀相に。 高群逸枝

ふと新聞を見たとき、變つた寫眞だなと思ひながらも、でも「モダン・ガールかな」と微笑したくらゐのことでした。それにしてもうしろの男性がモダン・ボーイにしては少しすど過ぎると思ひまして説明を見ると、それが朴烈氏だつたのです。なるほどこれが問題の寫眞かと私はもう一度微笑いたしました。 石丸喜世子

「これが最後だから思ひ切り仲の好いところを寫して貰はう」朴烈がかういつたら

⁵¹⁵ 許世楷「朴烈事件」『日本政治裁判史録 大正』第一法規出版（1969）pp.379-404

⁵¹⁶ 布施辰治「怪寫眞事件の主点と批判」『改造』第 8 卷第 11 号 改造社（1926）pp.18-24

うと思ひます。あれが西洋人なら接吻でもしたでせうが、さすがに文子は本を顔に掲げたりして、日本の女性のしほらしさを見せました。疲れたさまもなく可愛い顔でした。(略) あすこだけには法も掟も手を伸ばすことは出来ない。寫眞の二人はそんなことを思つたでせうあの時に。文子を抱^{いだ}いた朴烈の手には力が見えました。 杉浦翠子

なあんだ、こんなのだつたのかと思ひました。 網野菊

醜の醜なるものと思ひました。兩人の常軌を逸した姿態に就いては敢えて言はず、撮影者の變態的心理を思はずには居られなかったことを申し上げます。 八木さわ子

生憎、私は其の寫眞を見ませんでした。私、平生から機會があつてもああいふ事件に神経をふれるのをきらつて居ります。 岡本かの子

新聞紙に載つてゐる寫眞を見て、何とはなく凄惨な感じにうたれました。朴列の顔には、人間のドン詰りの泣き笑ひがあり、文子の顔は白痴の様でした。素人寫眞の光線の加減でもあつたでせう。とにかく、社會制度の上から、とやかくいふのも哀れな氣がしただけです。 三津木貞子

社會生活に對する本當の知識なく、自己の範囲内の生活に對する苦痛を十分に考へて見ないで、直ちに社會を、殊に、治者階級を呪ふ安價な人生觀に囚はれた人々の共通性としての、人を食つたやうな、判事などは眼中に無いと云つたやうな誇大妄想的な態度を如何にもよく表してゐると思ひました。 山田わか

一、所謂怪寫眞をば或る新聞は「性畫其儘」だと銘を打つてゐながら、其寫眞を大きく掲げて、全國の讀者に提供した。そのことそれ自體が風俗紊乱ではないでせうか。

二、文子のことが以前新聞で傳へられた頃は、罪は罪として、彼女の境遇に同情をしてゐた。處が、あの寫眞を見てから、其人柄に對して卑しみの反感をさへもたせられた。(略) 朴烈の顔にはさすがに凜とした表情があるけれど、文子はたゞもう捨ばちの女としか見えない。あの投出した足つきの下品なこと、何か手に持つて讀んでゐる風采のきざなこと。 帆足みゆき

こんなものを政治問題にして愧ぢぬ既成政黨の腐敗墮落を今更のように感じたばかりです。 山川菊枝

問題がやかましかつただけに、實物を見てむしろ案外な感じがしました。さうして

今更ながら多くの人の頭と口との間の距離といふことを考へさせられました。正直に自己の所信を表明することの出来ない人々を、軽蔑すると同時に氣の毒にも思ひます。あんなものを取り立てゝ大騒ぎするとは、ましてそれを以て政争の具にするなどは沙汰の限りだと思はれます。政治といふものゝ正體を、まざまざと見せつけられたやうな氣がして笑止千萬に存じます。 宮島麗子

全体としては、兩人に対し否定的な意見が多数で、肯定的な意見はその半数、写真を政治利用することへの問題視および政党政治の弊害を説く意見も否定的意見と同数ちかく存在する。

回答者は、1900 年生まれの網野（1903 年生まれの金子にいちばんちかい）をのぞき、1880 年から 90 年代生まれがほとんどだが、同年代であっても正反対の評価をあたえていることもあり、「新しい女」や「モダンガール」になぞらえた価値観の異同をみとめることができる。ここでもっとも注視されるのは、最初は同情をよせていたにもかかわらず、写真を見てから一転、蔑視におよんだ帆足の態度である。だが、ことばの情報においては許容されていたにもかかわらず、視覚情報がはげしい拒絶をうむこととなったのはなぜか。

事件に関する情報が慎重に秘匿される一方で、前出の「繊細な女性の身で大逆犯人の金子ふみ子の数奇な半生」に代表される「大逆罪」を劣悪な生育環境に直結させる論は、この時点で相当に定着していたようである。犯罪者として忌避される一方で、「両親の真の愛をも知らずに」のきまり文句は、当時の家族国家観に対し親和的に作動したであろう。しかし、それは彼女を理解しようとする態度ではなく、あくまでも上からの視線におけるあわれみであり、山田の「社會生活に対する本當の知識なく、自己の範囲内の生活に対する苦痛を充分に考へて見ないで、直ちに社會を、殊に、治者階級を呪ふ安價な人生觀に囚はれた人々」ということばにあらわれる「無知で無教養な」罪人というようなみなしと表裏一体のものだった。かかる固定観念は「読書」する女性の表象と齟齬をきたし、論者においては、同性であるがゆえのはげしい攻撃性をおびたものと推測される。

日本近代に開始された女子教育は、金子が就学する——松岡千代が自死する——ころ、すでに 30 年を経過していたが、当初は一部の女性しかその恩恵に浴することができなかったこともあり、金子の母親の年齢にちかい帆足や山田からは、貴重な学とむすびつく「読書」の行為を罪人である彼女がくつろいでおこなうなどとは、僭越であり「ポーズ」にすぎないと断じられたのであろう。それは杉浦が金子を、恋愛の解放者のように讚美しつつも、「本」を「顔に掲げたりして」「日本の女性のしほらしさを見せ」たと、小道具視していることにも通じる。知識人のあいだでも、ことばによるイメージが先行するなか、視覚情報にあらわれた金子における「読書」の内実に関心がよせられることはなく、同性の知識人からもせいぜい「ふり」とみなされたことが看取される。

後述する「観念的」行為という批判にかんがみ、法廷に金子が朴とともに朝鮮の民族衣装をつけ悠々とした態度で臨んだことなどをかんがえあわせれば、それは視覚にうったえる

「主張」とも受けとれなくはない。しかし、金子が本好きでかたときも本を手ばなさなかつたことには証言があり、⁵¹⁷当時の性別をこえた読書熱、女性の学習熱からも、彼女がそのようなひとりであったとかがえることは何ら不自然ではない。

金子の誕生は、初期映画が物語映画に移行するところにもかさなっているが、1904年、アメリカのバイオグラフ社が製作したショートフィルムには、詐欺師の女性が連行される場面が映っている。遠景ではおぼろげな表情がアップになると、彼女は表情をゆがめ素顔が判明できないよう、身元の特定に抵抗している。「Female Crook」の悲惨さは、むしろ衆目の欲望に応え、満足をあたえるものなのである。⁵¹⁸カメラは、そのとき暴力の装置に転じ、観客の欲望を喚起する。対照的に金子と朴の写真は、一般の「期待」をうらぎるようなものであったため、それを目にする者の拒絶反応を引きおこしたのであろう。その「怪」のうちには、しかし「女性」と「まなび」の問題がふくまれていたことが看過されてはならない。

(2) 既遂か未遂か

fig.17 法廷の金子文子と朴烈 (1925)



1924年の朴に対する第10回予審および金子に対する第12回予審で、訊問は、爆弾の「投擲対象」にしばられた。被告はなぜ日本の天皇、皇太子を爆弾の対象とするのか？ という問いに対し、朴は、日本の天皇、皇太子個人に対しては何らの恩怨を持っていない。しかし、日本の皇室ことに日本の天皇、皇太子を重要な対象のひとつに挙げたのは、「第一に

⁵¹⁷ 瀬戸内寂聴『余白の春』新潮社(2001) p.357

⁵¹⁸ Musser, Charles. *The emergence of Cinema : The American screen to 1907*. New York : Charles Scribners Sons. 358.

日本の民衆に対しては、皇室がいかにか彼らの膏血を搾取する権力者の看板であり、神様のような者ではなく実は幽霊のような者にすぎないことを知らしめる」、「第二に朝鮮の民衆に対しては、彼らが日本の皇室すべてを実際の権力を掌握する者として憎悪しているため、それを倒して革命的独立的熱情を刺激する」、「第三に沈滞しているように思われる日本の社会主義運動に対して革命的気運をうながす」ためであり、昨年の皇太子の婚礼の際に爆弾を使用することは世界に意思を表明するのに都合がよかった、と答えている。

金子もまた、皇太子への爆弾投擲計画について言明している。もともと国家とか社会とか民衆とかまたは君主とかいうものは、「一つ概念に過ぎない」。ところがこの概念の君主に尊厳と権力と神聖とを付与せんがために、ねじ上げたところの代表的なるものは、この日本に現在行われているところの神授君権説である、と。「歴代の神様たる天皇の霊の下に存在しているものとしたなら、戦争の折に日本の兵士は一人も死なざるべく、日本の飛行機は一つも落ちないはずでありまして、神様のお膝元において昨年のような天災のために何万という忠良なる臣民が死なないはずであります」。⁵¹⁹

従前、幸徳事件同様朴烈事件も、関東大震災に乘じ、思想犯の取締りを強化するための官憲のフレームアップであったという意見が大勢を占めてきた。たとえば、朴らが結成した「不逞鮮人社」のメンバーであり大正大学の学生であった崔凡述は、当時の体験を述懐する。関東大震災の発生を利用し「進歩的革新勢力を根こそぎにするため」、大杉のような社会主義の指導者が殺害され、「不逞」朝鮮人を退治するよう当時の内務大臣・水野錬太郎から布告が出されたことに応じた自警団らがおびたしい数の朝鮮人を虐殺した。それに対し、国際的な非難の声があがったことにより、証拠を示すため捏造されたのが「朴烈事件」であった。そのときの名は「崔英煥」であった彼は、連累者として検束され9か月間警察を「タライ廻し」にされたという。崔は、この事件が、朴を「専担した」立松予審判事により「国内外の沸騰していた輿論と視線を逸らすため」つくりあげられたものである、と結論づけている。⁵²⁰

一方、許世楷は「朴・金子は、ニヒリストとしての銜により、観念的なテロリストとなっていたようにも思われる。このような精神状況にある朴・金子に対し、予審判事立松は、技巧を弄し、朴・金子の口走る広範なテロの対象を大逆事件の要件に合せて、焦点をしぼっていつたと見ることができる」と分析する。⁵²¹岩村登志夫は、それをさらにすすめ、彼らは「観念の遊戯の虜になって官憲弾圧の誘因をみずからこしらえたとみるべきであろう」と述べる。⁵²²

崔が体験した官憲の謀略は、後世にその事実が立証されているが、それでは金子と朴らは、テロルをまったく企図しなかったのかという点が、問われねばならないだろう。そこで注視

⁵¹⁹ 再審準備会『朴烈・金子文子裁判記録』黒色戦線社（1977）pp.55-56 pp.59-61

⁵²⁰ 崔凡述「立松判事と朴烈大逆事件」尹青光編集『忘れ得ぬ日本人 朝鮮人の怨恨と愛惜』六興出版（1976）pp.46-59

⁵²¹ 許世楷「朴烈事件」『日本政治裁判史録 大正』第一法規出版（1969）pp.406-407

⁵²² 岩村登志夫『在日朝鮮人と日本労働者階級』校倉書房（1987）p.74

されるのが、ふたりが収監後も全面的なサポートをおこない、金子の死後に『何が私をこうさせたか』の出版にかかわった栗原の証言である。

埼玉の小学校を卒業後、岩倉鉄道学校の予科を卒業し、赤坂中学を3年で退学した彼は、文学をこころざしながら事務員や職工を経て人夫をしているときに雑誌『現社会』で朴の名を知り、不逞社に入会する。ほどなく失業し下宿代をはらえなくなった栗原は、朴と金子のすまいにさそわれ同居するようになった。不逞者のメンバーであることを把握されていた栗原は、震災後に治安維持法違反で逮捕されるが、1年で釈放されている。その彼が、戦後に瀬戸内晴美の取材を受けたときに語ったのが「しかし、あの大逆事件というのは、立松判事と朴列の合作というものだね」ということばで、栗原は「合作」ということばに含みをもたせ、二度くりかえしたのだという。

以上をかんがえあわせると、官憲の意図は意図として存在しながら、朴の側にも、事件が国内外に反響を引きおこすとの計算がはたらいていたであろうことが想像される。件の写真が撮影されたときには、栗原も立ちあっており、その日は予審が終了したあとで「カメラいじりがすきで」「いつでもカメラを予審廷に持ちこんで」書記が書いているあいだもカメラをいじっていた立松は「みんなくつろいで、ひとつ撮ってやろうということになって撮った」と回想する。その経緯が事実であれば、写真にみえる朴の鷹揚なかまえと余裕の笑みには、整合性がみとめられる。

だが、その写真は同時に、金子と朴の心情には懸隔が生じていたということをも示しているのではないだろうか。彼はそれから20年の時間を獄中で送りながら、戦後に生還をはたすこととなるが、彼女は写真撮影の翌年、ひとりで死に就く。写真のなかで、あたかも王族のごとくかまえ此方に微笑してみせる朴と、本に目をあて一心に文字を追う女子青年のような金子のまなざしは、このときすでにことなる方にむけられていたのかもしれない。

(3) 都市がみた「夢」

氏の殺人を、当局の意見としては痴情の果と断定して居る。だが私は——私はその原因が、氏の所謂「都會が生んだ現代の神秘」に依るものだと、堅く、信じて疑わぬのである。

城昌幸「都會の神秘」⁵²³

関東大震災直後の在日外国人や社会主義者の虐殺も、それを引き金にくわだてられる要人暗殺も、日本近代の都市という空間でこそ発生する性質のものであった。そこにおける匿名性は、人間を「犯人」にしたてあげ、また瞬時に「探偵」にも変身させる。「他者」とみなされた者の抹殺は、突発した有事に、人間の密集した空間で疑心暗鬼のまなざしが引きお

⁵²³ 城昌幸「都會の神秘」『新青年 復刻版』第7巻 本の友社（1998） 初出は『新青年』博文館（1926） p.103

こした惨事であった。

金子と朴の怪写真が流出した 1926 年から翌 1927 年にかけて、『新青年』には探偵小説のブームが到来し、うえに引いた「都会の神秘」も 1926 年、同誌上に発表されている。関東大震災で排除されたのは他者であったが、復興後の都市化の加速とともに、生きのこった人間もたがいにくるすところをゆるすことができないまま、密集した空間は異様な緊張感でみだされていく。交差してはすばやくはなれる視線は、やがて「表情即偽装」といわれるまで、人工的な生の様態を生みだすだろう。自意識に憑きまとわれた近代人は、表情にも己から打ちだされた「一つの音を見」、「更にその音が向うの胸琴に當つて」どんな響きを惹きおこしたのかをみさだめないうちには気がすまない。それゆえ、そこにあらわされた感情も、ありのままではありえないのが当然なのである。「いや寧ろ、八方にスパイやスキャンダライズの眼が光つてゐる中で、誰が偽装なしに安閑と生きて居られるものかといひたい位だ」とささきは書く。⁵²⁴

探偵小説の物語形式は、単になぞをとときあかさばかりでなく、あきらかに近代の循環の経験に依存している。循環は、たゆまなく時間と空間が合理化されていくことを必要とするが、移動と交換にともなう複雑さとスピードによって、安定性と予期可能性がおびやかされるという反動もつくりだしてしまう。それは、循環システムの複雑性を「食いもの」にし利用する犯罪者と、循環システムの暗部をあばき、犯罪のなぞを解き秩序をまもる探偵という近代の弁証法的なドラマにおけるふたつの立場を配置する。⁵²⁵

「都会の神秘」は、語り手が最近知己になったという「P—B—氏」の独語により、最後の場面まですすめられる。だが、それが語り終わるとき「事件はその発端を開いた」。いつのまにか背後に立って話を傾聴していたひとりの紳士が、氏の肩に手を置き厳とした声でいう。「私は、貴下を△丁目の売笑婦殺しの犯人として引致します」。理由は、氏が当局の人間以外知るはずのない凶器や刺殺の箇所を熟知しているから、というものであった。「その除かれた或るひとり、^{すなわち}即 犯人として！！」P—B—氏は、殺人の動機を、被害者に対する個人的な感情等からでなく、あくまで都会の神秘がそうさせたのだと説く。そして語り手は、加害者もまた「都會のみが能く知る神秘の哀れな傀儡人形」である、とむすぶ。

「都會の神秘」には、旧来の探偵小説のように巧妙なトリックやあざやかななぞときなどはなく、告白者の「夢」を終始みせられているごとき結構である。都市現象の加速するなか、あらゆる事象は流動的かつ可変的で、問い——結果に対する答え——原因もどこかひとつにもとめて落着くものではなくなった。ガブリエル・タルドは「社会状態は催眠状態である」という。精神生活を構成するある脳細胞から、別の脳細胞への暗示作用の内的性質についてわれわれはなににも知らないし、ひとりの人間から別な人間への暗示作用がどのようなものであるかも理解していない。だが「もし強度の高い純粋な状態における暗示作用を考え

⁵²⁴ ささきふさ「表情即偽装」『婦人公論』第 29 卷 3 号 中央公論社（1931）pp.70-71

⁵²⁵ トム・ガニング「個人の身体を追求する——捨身、探偵、そして初期映画」加藤祐治訳『アンチ・スペクタクル 沸騰する映像文化の考古学』東京大学出版会（2003）p.100

てみれば、そこにはまったく神秘的な現象があることに気付かざるをえない」。

社会状態とは催眠状態とおなじく「夢の一形式にすぎない。すなわち、それは強制された夢であり、行動している夢である。暗示された観念をもっているだけなのに、それを自発的な観念と信じることは催眠状態にある人の錯覚であるとともに、まさに社会的人間の錯覚でもある」。都会生活とは、社会生活を極限まで凝縮したものではないだろうか？ とタルドは問う。仮にあらゆる社会にヒエラルキーがあるとしたら、その理由は、あらゆる社会が催眠作用のような連結構造をそなえているからであり、社会が安定するためには、その連結構造とヒエラルキーが一致しなければならないと説くものである。⁵²⁶

社会が安定するためという表現を、ヒエラルキーを強固にするため、といいかえれば、自発的な観念と信じるものが、強制された夢であり、そのような「役割」が必要とされているのだともいえる。とりわけ、天皇制原理がつよく作動した近代の空間では、「供犠」の役割が必要とされたが、役割を振りわけることではたとえば帝都の人間たちは終極おなじ夢に就いたのではないだろうか。それゆえ栗原が「合作」と表現したように、都市の空間で演じられたドラマにおいては、犯人と探偵や敵味方のように対立するとみえた者同士が、実は相手の「役割」を必要としていたともかんがえられるのである。

第4節 学知・女性・虚無

金子は収監後も、教育を受けた囚人のおおくがそうであったように差し入れの本を希望し、読書をかたときもやめない一方で、短歌をつくりはじめている。それ以前に正式にならったり正統的歌人の作にふれたりしたわけではなく、自身がこのむ石川啄木の歌集を差し入れてもらおうと、自己流で大胆に詠歌を開始した。

歌詠みに何時なりにけん誰からも学びし事は別になけれど

派は知らず流儀は無けれ我が歌は^お庄しつけられし胸の焰よ⁵²⁷

栗原によれば、直接原稿用紙に書きつけた歌は104首、『自序』として特に自叙的作風のものは別記して67首あったが、「手記」と同様検閲で相当数にはさみがいれられたという。⁵²⁸

いかにまずしくとも不如意にみちていても、生自体が流動のさなかにあつたころにはほぼ無縁であった文学的な創作が、一か所にとじこめられ自由をうばわれてからは堰を切った

⁵²⁶ ガブリエル・タルド『模倣の法則』池田祥英・村澤真保呂訳 河出書房（2007）pp.123-140

⁵²⁷ 金子文子『わたしはわたし自身を生きる 手記・調書・歌・年譜』鈴木裕子編 梨の木舎（2006）p.359

⁵²⁸ 栗原一男「歌稿を見た後に」『赤いつつじの花——金子文子の思い出と歌集』黒色戦線社（1984）p.43

ようにあふれだす。

上野山へさんまへ橋に凭れ縋り夕刊売りし時もありしが

籠かけて夜の路傍に佇みし若き女は今獄にあり⁵²⁹

幼少時から文字につよい関心を示しながら、親に読み聞かせをせがむこともかなわず、本らしい本も周囲にみあたらないなか、金子が取りつかれるようにして読書にむかったのには、ふたつの理由がかんがえられる。すなわち、ひとつは時代的な背景によるものであり、他方は個人的な事情によるものである。出版全盛時代の折柄、書籍の種類は専門書から雑誌まで多岐にわたり、選択のはばも相当にひろくなったことから読者人口は増大していた。20世紀初頭の読書には、知識人の回想録等からの「濫読」傾向が指摘されているが⁵³⁰、一般にも同様な傾向はひろく存在した。

上述したように、金子は朝鮮にあった養家で、日本人の級友から借りた『少年世界』と『婦女界』を家人にかくれて読んでいる。女子教育が定着していくにつれ雑誌の世界にも男子と女子の棲み分けがなされていくが、活字にかついていた金子にとって、かかる区別に関係なく濫読をおこなったことは、長じてのちのジェンダー形成に影響したと想像される。『少年世界』は、児童を「ちいさなおとな」ではなく、独自の世界を生きる存在として価値づけ、言文一致運動を普及させる活字メディアとして機能していた。『少年世界』と同様に博文館から出版された『中学世界』や『女学世界』は、対照的に児童を学校で知識を獲得する功利主義的な学習者として、業績主義の文脈に位置づけようとした。⁵³¹一方、婦女界社から発行されていた『婦女界』は随筆、小説、人生訓、投稿、懸賞等女性に特化した内容を掲載している。購読はかなわなかったが、友人から借りるなどして雑誌にとどまらない各種の書物にふれる機会は、金子にも早くからあったとかんがえられる。

高等機関への進学をかんがえる者に対し、当時は東京でまなぼうとする青年のための生活指南書が多数出版されており「苦学」は時代のキーワードでもあった。たとえば、1921年に出版された『最新 東京苦学案内』は、立志の要件として、富豪に生まれ苦勞をしらないためかえって墮落するよりも、聡明さと気概があれば「黄金」をもっているのと同等的なことから、刻苦勉励したならばかならずや知名の学者、政治家、実業家、軍人に成りえることはうたがわれないと謳う。

ここで筆者が、ことに「気の毒」だと感じているのは「田舎の青年」である。明晰な頭

⁵²⁹ 金子文子『わたしはわたし自身を生きる 手記・調査・歌・年譜』鈴木裕子編 梨の木舎（2006）p.362

⁵³⁰ オータバシ・メレック「乱読の癖：明治大正のエリートと子供時代の読書経験」『明治学院大学国際学部附属研究所研究年報』Vol.19 明治学院大学国際学部附属研究所（2016）pp.69-75

⁵³¹ 岩田一正『『少年世界』が提示した少年像——国語読本との比較を中心に——』『大阪国際児童文学振興財団 研究紀要（29）』大阪国際児童文学振興財団（2016）pp.47-54

脳と強壯なる身体、完全なる立志の要素を有しながら、忠言をあたえてくれる人間がいないことから「煩悶に煩悶を重ねてゐる内に」3年5年は10年となり、雄々しい抱負も消えうせ、「田舎の草深い處に田吾作然として」食にもこまるみじめな日を送るのだと案じられる。苦学に適する年齢は、「17歳以後となればよろしく熟慮一番」志を決すべき時期であり、いかにおくれても25歳以上におよんではいけないという。

「生計方法及費用の概算」では自炊の方法、「友人の選択」ではいたずらに多数とまじわらず慎重に相手をえらぶこと、「職業紹介所」では中間搾取に遭わないよう、「精神の休養」では、寄席劇場は学生の本文には不可であり囲碁将棋はふかいりしやすく「親の死目に遭えない」ので、公園の散歩や郊外の佳境を訪ねること等が推奨されている。さらに実用的な情報として、最終章の「雑」では「市内の里程及区役所の位置」等が「宮城二重橋8丁」「浅草公園までが33丁」と記される。⁵³²

金子は朝鮮から帰国した翌年、山梨と静岡を行き来しながら、女子師範学校進学を真剣にかんがえる。そして翌1920年、前述の書では「苦学」に適するとされた17歳で、10円の所持金をたずさえ単身上京する。学費を自身で捻出しなければならない彼女は、下谷区三ノ輪の大叔父の家でひと月前後暮らしたのち、その後上野の新聞捌売り店に住込み、上野三枚橋で捌き売りをはじめ。女子医専大学を目標に、受験準備のため午前は正則英語学校、午後は研数学館にかよい、仕事はその後から深夜におよんだ。

金子より2年はやく受験準備のため上京していた難波も、もともと進学に反対であった父から支援が得られず、研数学館にかよいながら新聞配達のアルバイトをしている。苦学は、しかし日本人学生にかぎったまなびのための形態ではなかった。1908年生まれの家素雲は、「図書館大学」で関東大震災以後に経験した苦学生時代を回想する。

正面に不忍池を見わたす位置に私の〈みせ〉があった。ふだん二銭三銭で売っている新聞が、朝のうちには七、八円ぐらい、ある時など十円以上売り上げがあがる時もあった。

その一帯は、降旗というボスの縄張りである。一部幾らという利潤だが、売れ残った新聞を利潤から差引くという仕組みで、沢山売れる日でも、大した収入にはならなかった。⁵³³

金は、通りがかりの中学生たちが泥をはねあげ新聞が売り物にならなくなったのを、直接学校に抗議にいったが相手にされなかったため、『都新聞』の「読者と記者」欄に経緯を書いて投稿し掲載される。その日新聞を買いにきたひとりの芸者から「今日、みやこに書いたのあんたね——読んでて涙が出たわ」と3銭の新聞に5円を出され、つづけて同様

⁵³² 大生川志郎『近代日本青年期教育叢書・第IV期 第6巻』日本図書センター（1992）
pp.1-9 pp.24-42 pp.45-46 pp.100-226

初出は大生川志郎『最新 東京苦学案内』教成社（1921）

⁵³³ 家素雲「図書館大学」『天の涯に生くるとも』新潮社（1983）p.57

な女性がきてむりやり鰻屋に連れていかれたのを、どちらにも金は受けとらず返したのに、翌日はさらにそのような客が増え「ジリジリ」させられたのだった。同情されるのがたえられなかった彼は「東京でも幾番と下らないという良い席を他の仲間に譲ってやり、そこよりもずっと落ちる東京帝大の近くへ移」る。

金は、ほかにも納豆売り、卵売りなどをおこない、豆腐屋の二階で立教大学英文科の吉川一郎と同居生活をした時期もあったが、吉川もやはり苦学生で夜には人力車を引いていたという。「吉原まで酔客を乗せて行けば五十銭——。こうして稼いだ金でバナナを買って来て先に寝ている私の口に皮をむいたそのバナナを差し込むのである」。『最新 東京苦学案内』には、官費の諸学校から、就職しやすい実業学校、苦学に容易なる大学専門学校が紹介されている。金は、帽章に「鷺鳥ペン」のついた開成中学ではなく、その夜間部である「それにまた三日月を一つくっつける」開成中等学校に在籍していながら、かよえたのは1年にもみたなかったが、学校側は寛容だった。そして卒業しないまま、2、3の私立大学に聴講生や「幽霊学生」として入っても「誰ひとり文句を言う者もない、そんな時代だった」と語る。⁵³⁴

苦学する青年に対し、社会にはかかる理解が存在したが、そこで想定されていたのは基本的には男子であった。だが金子は、女性であるための引け目など感せず、男子学生にまじり積極的にまなび、同時におおくの朝鮮人と交流の機会を得ている。幼少時に他の女兒のような教育を受けられなかった経験は、むしろ彼女をして、あらためて主体的にまなぶ行為に矜持をあたえたと想像される。

朝鮮の叔母の許での思い出にふとそそらるる名へのあこがれ

は見よと云はんばかりに有名な女になりたしなど思ふ事もあり⁵³⁵

彼女は当時をふりかえりすなおに告白しているが、無籍のゆえにみくだされつづける身にとって、人間としてみとめられるべく「名」をなすための学知が男子以上にもとめられたのは自然なことであっただろう。

浜松で、一時的に父、義母（母の妹）、弟と生活したとき、のぞまない叔父との結婚の準備として、金子は実科女学校の裁縫専科に入れられる。東京に進学したいという彼女に、父は「馬鹿な、女じゃないかお前は」といいながら、勉強好きでない弟の賢には、大学で法律をまなばせ「家」の体面を保持しようとかんがえた。金子が接触した朝鮮人のなかにも、裕福な男子には、東京やヨーロッパに留学する者がいたが、朝鮮人留学生の部屋に彼女がいるのをみた女中は、「下宿廻りの淫売」ときめつける。

⁵³⁴ 金素雲「図書館大学」『天の涯に生くるとも』新潮社（1983）pp.58-61

⁵³⁵ 金子文子『わたしはわたし自身を生きる 手記・調書・歌・年譜』鈴木裕子編 梨の木舎（2006）p.362

怪写真に辛辣な評価をくださった帆足みゆきも、じつは金子よりも20年以上はやく、20世紀が明けるまえに「苦学」をした時期があった。北国の寒村で生まれた彼女は、「女には学問は無用である」との偏見に抵抗し、無断で東京に出たときには60銭しかなかった。女中職に就いた彼女は、ひろい家を掃除するのに、寒中の水仕事ではひびとしもやけで手足が腫れあがるほどだったにもかかわらず、「何の不満もなく、無邪気な希望に燃えていた」。「現代の青年男女が賢くて、敏感で、少しのことにも悲観したり、社会に不平を訴へたりするのに比べると、何といふ鈍感な素朴なものであつたでせう」と回想している。⁵³⁶だが、女性と生まれたからにはまず結婚し育児をまっとうすべきであると、その性役割を自明視し、教育者、評論家と社会的地位をきずいていった帆足には、若年の自身を思い合わせても、金子を理解することはかなわなかったのである。

金子にとって、最初は知的好奇心、のちにはよりよい社会的地位を得るためにおこなわれた読書は、明確な目標をいったん喪失したのちもつづけられた。むしろ功利的な目標からはなれたのちに、読書の意義はたかまっていくなか、そして収監後、読む行為は書く行為へとすみやかに接続されていくが、押しつけられ息もとだえがちな生を意識しつつ、そのゆえに最大の燃焼をもとめてえらばれたのは「みじかい」形式の言語表現であった。

とりどりに的を外れし想像で推し量られし私のさびしさ

ヴワニティよ我から去れと求むるは只我あるがままの真実⁵³⁷

第5節 自由な死

1920年代前半の東京で、社会運動にいったんは接近しながら「主義」に限界をおぼえ、別なありかたを模索することとなる金子と難波は、そこにいたるまでの経緯には共通点がありながら、両者がいきついた場所はことなっていた。だが、彼らによって書かれたものからは、当人は意識していなかったであろう文学的想像力のゆたかさがみとめられる。

最初は生硬であった金子の歌は、つくりつづけるうち、和歌的な発想からはみでるスケールをもって詠まれることになった。

ころころと蹴りつ蹴られつ地球をば揚子の水に沈めたく思ふ

水煙揚げて地球の沈みなば我ほほえまんしぶきの蔭に⁵³⁸

⁵³⁶ 帆足みゆき「私の青春時代」『婦人公論』中央公論社（1938）pp.259

⁵³⁷ 金子文子『わたしはわたし自身を生きる 手記・調書・歌・年譜』鈴木裕子編 梨の木舎（2006）p.373 p.375

⁵³⁸ 金子文子『わたしはわたし自身を生きる 手記・調書・歌・年譜』鈴木裕子編 梨の木舎（2006）p.382 p.383

観念的テロと指摘された問題について、自国の独立を切実な到達点とする朴たちと自由を希求しながら日本人である金子のあいだには、一時期虚無主義的な連帯があったとしても、それが文学的想像力にとどまるかぎりにおいて「夢」は共有されたのではなかっただろうか。金子が朴を知ったのも、彼の詩を読んだのがきっかけであり、彼女はその力づよさに魅入られ会うことを切望したのだった。上記の歌にみられるごとく、観念のうえでは、彼女は何度となく地球を蹴りとばし、躊躇なく爆破したのであろう。しかし、現実に行進中であつた爆弾入手の画策が成功したとき、朴たちとまったくおなじように、金子がそれを天皇以外の人間存在に対し投擲しえたとは想像しがたい。

難波が、基本的には1対1でテロルの対象たる未来の天皇にむかつたのはことなり、不逞団の暗殺対象は皇太子にとどまらず、政府の要人にまで適用が検討され、さらにはメーデーでの使用も計画にふくまれていた。戦争が元来そのような性質のものであり、侵略者が暴力をみずからとどめたりしないように、侵略された側の人間が行使する暴力にも、一線が引かれることはかんがえづらく、そのテロルは、実行にうつされたときかぎりなく無差別的な性格をおびただろう。

同志の栗原は、金子が彼とともに屋台のうどんを食べようとしたとき、ちかくにホームレスの男性がいるのをみかけ所持金をすべてあたえてしまい、なにも食べられなかったことを回想している。弱者への惻隠の情と表裏一体での感情で、ブルジョアを徹底的に忌避した点においても、金子と難波は共通しているが、眼前の彼らにおもわずたすけの手をさしのべる一方、彼女の被擄取階級に対するみなしには複雑な感情がうずまいていた。

士族の家の生まれで、ノーブレスオブリージュ的精神を身につけていた難波が、被擄取階級の人間たちと場をともしたのは成人後のわずかな期間でありながら、彼は相手をどうにかして理解し共闘することを希望した。しかし、被擄取階級の彼らとちかい境遇で生きてきた金子は、対象を美化することもなく、最初はそこから抜けでようとの気概をもち、学知にもあこがれたのである。彼女は、訊問調書で第一階級たる皇族を「牢獄的生活にある哀れなる犠牲者」で、第二階級たる政治の実験者は「私はじめ弱者を虐げる力の保持者」であるため、彼らに対し「恐ろしく憎悪の考えを持って」いる、そして第三階級の民衆は「救うべからざる無知」であると表現している。それゆえ、もはや共闘は不可能であり、同時にそのくるしみを知っている分、彼らを完全に切りすててしまうこともかなわなかつたと想像される。

ここに一つの理想がある。理想とは欲しいけれども、手の届かんところにあるもの、ということである。そして、その理想は実現を予想されえてこそ、はじめて理想であり得る。ゆえに客観的にいってこそ、いわゆる理想と空想の区別はつこうが、主観的にはそんな区別はつけられない。つまり、アイデアリズムとリアリズムの区別は、現実そのものにはない。

私は今、自分の今を充実に生きたい、といった。ではその行為の基礎をどこに求めるか？ 私らの行為はこれと同じように、過去に背景づけられ、将来を想うことによって、はじめて確実性が備わる。そして私たちの目が前についていて、前に進んでいくように、私たちの行為は常に時間的にも前へ前へと進んでいく。

そこで将来が一つの理想を認める。が、どんな理想も、それが現在において行為されるためには現在の欲求と合致することが必要である。それはだれも同じである。ただ相違するところはアイデアリストは、将来に理想を掲げることによって現在を行為し、リアリストは現在のために行為する——と私は解釈している。

そこでなぜ私がある理想は否定し、ある理想は肯定するか？ それを選択するものはすなわち私の理想である。長く書いた。たいがい私の考えていることは解ったからと思うのでこの辺で切り上げる。そして一ついうことがある。私たちがやろうとしたことはテロであった。しかし、それはいわゆるテロリズム運動ではない。ニヒリズムに根をおいた運動である。そしていわゆるテロリズム運動は一つの政治運動であるが、ニヒリズム運動は哲学運動である——と私は思う。⁵³⁹

すなわち彼女がおこなおうとしたテロは、難波が目したそれ一個により目標が一気に達成される可能性をもつものではない、より不定形な理想を基にした運動だったのである。

金子は、法廷でも翻訳小説の本を手にしていたといわれるが、彼女が影響をうけたものに、ミハイル・アルツィバーシェフの作品がある。アルツィバーシェフの『労働者セキリオフ』は、当時アナキストの愛読本であり、『サーニン』は、日本では一時期ひろくよまれた。アルツィバーシェフの『サーニン』というより『サーニン』のアルツィバーシェフというほどで、同時期にはロシアでも、サーニン主義を自称する「スザニスト」が生まれていたという。彼らは、他人の幸福とか、社会の福祉とかいうものはどうでもよい、人間は自由恋愛に生き、生理的情欲を飽満せしめ、そのなかに生活の全意義を発見すべきものであるとの主張をなした。ただし、そこで主体となるのは男性であり、「婦女子は奴隸的地位に引き下ろしざること」がドグマとして唱導されたのだった。⁵⁴⁰

アルツィバーシェフが活動したのは、1905年の第1次革命においてプロレタリアートが主役を演じ、50万の労働者が一斉に蜂起し、ナロードニキの後身たる社会革命党のテロリストたちが各地で支配階級を暗殺しながら、1906年にはそれらが完全に鎮圧された時代であり、反動政策により社会は重苦しい空気につつまれていた。知識階級の一部が、道徳的退廃の途をたどると、それまで革命の理想にもえていた青年たちも、自身の無力さを意識して道徳律の反逆者となり、感覚的享楽に耽溺していったのである⁵⁴¹

⁵³⁹ 金子文子『わたしはわたし自身を生きる 手記・調書・歌・年譜』鈴木裕子編 梨の木舎（2006）
p.349

⁵⁴⁰ 昇隆一「後書き」ミハイル・アルツィバーシェフ『アルツィバーシェフ名作集』昇隆一訳 青娥書房（1975）
pp.415-416

⁵⁴¹ 塚原孝「日本におけるアルツィバーシェフ——「サーニン」翻訳以前——」早稲田大学ロシア文学会

金子は裁判の過程でアルツィバーシェフの『作者の感想』からひいた「生きる事を欲する人間に、生きる事を欲しないやうに説教する事は滑稽である。人生が直接の満足を与える人間に向つて、彼には生きる事が極めて不愉快であらうと語る事は誠に滑稽である」を判事の立松に書き送っている。本論で取りあげる女性ふたりが、『サーニン』でなく『最後の一線』にひかれているのは、偶然の一致であろうか？ ささきは、兄が翻訳していた関係で当該書に出会ったが、それ以前に築地藤子から『サーニン』をすすめられていた。アナキストの大杉や作家の廣津をはじめとする日本の男性知識人は、まったき欲望の肯定を是とした生の躍動に、陶酔をおぼえたのであろうことが想像される。しかし、ささきや金子がひかれたのは、『最後の一線』における脱俗的な特化された「死」のほうであった。

青年技師・ナウモフは、人生は何の意味もない醜い苦痛の連続に過ぎないという確信により、すべての人間をかかえる生から救済するために、人類滅亡のちかいをたて「死」の福音を伝道しはじめた。舞台のいなか町におけるのどかな自然や、生活を享樂する場面は色彩ゆたかにえがかれ、唐突に伝染していくありえないような「死」とふしぎな調和をみせている。そこには、『サーニン』とは異質な「美」が看取される。

1926年2月29日、金子は「手記」を脱稿する。そして同年4月5日、金子と朴に無期懲役の「減刑」が通知される。『何が私をこうさせたか』は、時間をさかのぼり朴との出会いの場面で回想は閉じられ、最後に彼女ひとりが死を眼前にしている。だが、金子の生がそこで終わったわけではない。4月5日をもって、彼女は、あたらしい「生」をいきはじめたのではないだろうか。天皇制原理主義が機能する空間で、命を翻弄し、「死」を押し付けたのちに「生」をたまわろうとする「神」、とめどなく供犠をもとめる疑似宗教に、どうしてつきしたがうことができるだろう？

朝来れば此の屍に意識戻り鉄格子見ゆ暗く明るく

手足まで不自由なりとも死ぬといふ只意志あらば死は自由なり⁵⁴²

「移動」それ自体を住家とし、近代の循環そのもののように小止みない転変を経た生は、それ以上の収奪を断つため、おわりを凝視する。「何」かが「私」をそうさせたのではなく、最後にひとりになったとき、「私」がそうしたので。

編『ロシア文化研究』早稲田大学ロシア文学会（1994）pp.24-35

⁵⁴² 金子文子『わたしはわたし自身を生きる 手記・調書・歌・年譜』鈴木裕子編 梨の木舎（2006）p.376 p.383

第8章 ことばの獄

ささきふさの友人であり、彼女が17歳の春パラチフスにかかったとき「毎日ほど手紙をくれ」、「サーニン」や「水の上」、「即興詩人」を読めと貸してくれたという築地藤子⁵⁴³は、1896年、横浜の居留地へ上る途中の谷戸坂にある外国人向け商店の家に生まれ、23歳の春までをそこですごした。兄の影響で20歳から短歌をつくりはじめた築地は、「アララギ」に入会し、島木赤彦、斎藤茂吉の指導を受ける。結婚後、夫の転勤により神戸、香港、シンガポール、インドネシアを転々としながら、詠歌をつづけた。⁵⁴⁴

歌集『椰子の葉』の巻末記で、彼女は、帰国後に関東大震災に遭遇し、子どもや姉を早くに亡くしながら「さうした生活の苦しみを歌に表すだけの力は無」く、「むしろわづかの逃がれ場所として歌を得ていた」のだと述懐する。⁵⁴⁵彼女の歌は正式な和歌のまなびを経たものであり、生活詠がほとんどを占める。1880年にH.G.ブリテン（ ）により山手の居留地に創立された英和女学校に進んだ築地が、同時期、青山学院に通っていたささきのように洗礼を受けていたかどうかは不明だが、1915年の作品「折々の歌」には女子青年らしい歌が散見される。

木々の上を煙行く見ればこころ悲し煙の下に働く人はも

この朝け働く人ら戸を出づる軒に白くも羽蟲とぶ見ゆ⁵⁴⁶

対照的に、1918年結婚後のシンガポールでの詠歌は、感傷的でモチーフは身近のものにかぎられているが、それは彼女にとって生きるよすがとなったという。「もしもこの恐ろしく寂しいひとりぼつちの朝夕に、歌が無かつたら私は辛抱するのにもつと苦痛を感じたにちがひない」。⁵⁴⁷

⁵⁴³ ささきふさ「私の青春時代」『婦人公論』（1938）p.261

⁵⁴⁴ 築地藤子『椰子の葉』岩波書店（1931）pp.269-276

⁵⁴⁵ 築地藤子『椰子の葉』岩波書店（1931）pp.282-283

⁵⁴⁶ 築地藤子『椰子の葉』岩波書店（1931）p.1 p.3

⁵⁴⁷ 築地藤子『椰子の葉』岩波書店（1931）pp.274-275

うらがなし窓辺に近く 南^{みなみ}の十字星見ゆる國に来しかも

椰子の葉の重なる 遠^{とほ}に落つる日のはろぼろにしも心悲しき⁵⁴⁸

そして 1923 年、帰国した築地は、横浜で家族とともに関東大震災に遭う。彼女の家は、隣家から飛び火し短時間で焼失してしまった。

這ひ出でて見れば目の前は平なり見ゆるかぎりの家は壊れつ

ふるさとは焼野が原となりにけり生ありとてもまたを見ざらむ⁵⁴⁹

1924 年に長女を亡くした築地は、そのときに住んでいた大森を離れ、蒲田に移る。不幸のつづいたのちの 1925 年、彼女はつぎのような歌を詠む。

梅屋敷

蒲田に残る名所「梅屋敷」はそのかみ明治天東上のみぎり梅花を賞し給ひしといふ

時うつり荒れにし園にかしこしや御手植の梅の花盛なりけり

皇祖^{すめおや}の古き京を出でまして 東路^{あづまぢ}の梅を見ましけむかも⁵⁵⁰

これらの歌が詠まれたのとおなじ 1925 年、雑誌『原理日本』が創刊される。源流は、根岸短歌会の機関誌として伊藤左千夫の『馬酔木』を継いで刊行された三井甲之の『アカネ』であり、当該誌はながいあゆみを経て『原理日本』にいたったのであった。三井は築地の所属した『アララギ』同人と齟齬があり、『アカネ』は主流の歌人からは黙殺された存在であったが、それは短歌誌全般がアララギ同人、とりわけ斎藤茂吉に書かれていたことに起因していた。⁵⁵¹

天皇制下において『原理日本』は、その疑似宗教性を補完すべく、ひたすら実感的、体験的な生々しさに密着してゆけば、人間の生の可能性はそこに発揮されつくすのだと説き、日本人に「今」の時間にだけ目をむけさせようところみる。すなわち、現実の彼方にユートピアを構想したり、日々の現実を合理的に解釈して科学的展望をあたえたりするなどもつ

⁵⁴⁸ 築地藤子『椰子の葉』岩波書店（1931）p.71 p.81

⁵⁴⁹ 築地藤子『椰子の葉』岩波書店（1931）p151 p.162

⁵⁵⁰ 築地藤子『椰子の葉』岩波書店（1931）pp.204-205

⁵⁵¹ 米田利昭「抒情的ナショナリズムの成立——三井甲之（一）——」『文学』Vol.28 岩波書店（1960）p.6

てのほかで、すべては眼前の「今」につきるとされる。かかる「信仰」に入れば、人間に可能なのは「無極生成」を追うのみで、その心理をささえるのは「血」により自身を限定する場所、すなわち「日本」が無限に継続されるとの信心にいたるというのである。⁵⁵²

1934年出版された『しきしまのみち』で、三井が唱えるのは、延々とつづく区切りもなければ出口もみいだせないようなことばの獄である。「學術的に『日本ノミチは時代の進運に伴つて開展するのでありますが、それと同時に『神代ながら』の傳統を繼承するのであります。シキシマノミチは人生そのものゝ如くに複雑でもありまた人生そのものゝ如くに統一せられてをります。シキシマノミチは一切の自然科学的又は物的法則を攝取しますが、それら物的諸法則のみによつて規定せられぬところの創造的開展を生成する人生の不可思議に信順するのであります」。

この異様に不明瞭な主張には、しかし、近代に分断された「個」のありかたへの反発や、理性の光に対する嫌悪と同時に、全体性を回復しようとする心性があらわれている。彼は、明治天皇のような「大歌人」を模範とし、天皇の御製を拝承することを国民の勤めとするよう主張した。この勤めこそが「しきしまのみち」であり、そうすれば、天皇のおおいなる写生歌人としての「精神」が国民にいきわたり、皆がありのままにいられるようになることで一致するというのである。三井は「一首一文の歌を、讀誦する時は途中で休止を置かずに一氣に、それ故にゆるやかによみ下すのであります」と書いているが、現実には、実修会では「手つなぎのりと」を奏上し、全員が手をつないで誓いの歌をうたうという方法がとられたりした。「この同一文句の繰返し発声や身体的動作は、連帯感の昂揚に、シャーマニズム的エクスタシーに人々を導いた」のである。⁵⁵³

魚住とおなじ1883年生まれの子三井は、日露戦争後に成人するが、仏教を信仰しつつ当時の青年のうちにあつては政治意識が稀薄であつた。一高生であつた彼は、本郷求道学舎の近角常観から指導を受けるが、近角の説く実験の宗教とは、一見内発的でありながら終極は修養論と共振するような既存価値への依存帰属から成っており、最終的には体制との協力関係に墮することがさだめられていた。

三井により説かれる「天皇の国の無窮」とは、万世一系とむすびついた「永遠の今」を意味する。永遠の今——「中今」とは、国文学者の山田孝雄によれば、文武天皇の宣命に由来しており、「現在を過去と未来との中と観ずるもの」ながら、「今」のうちに永遠をふくむものである。かくて神国の自覚を有し、血族的一団に基づく愛を力の源とする一精神が、この中今の思想によって一步一步現実性を確保しつつ進んでいく、とされる。⁵⁵⁴1939年現在の日本において、血族の愛の力が確認される現今の時間は、しかし日本人の「視」をそこに集中させるために人工された概念であつた。

「中今」は、現在をあらわす「今」とはことなり、「中」を経ての「今」と解釈され、

⁵⁵² 片山杜秀「写生・随順・拝誦 三井甲之の思想圏」『日本主義的教養の時代』柏書房（2006）p.97

⁵⁵³ 米田利昭「抒情的ナショナリズムの成立——三井甲之（二）——」『文学』Vol.29 岩波書店（1961）pp.125-126

⁵⁵⁴ 山田孝雄『肇國の精神』教学局（1939）pp.73-77

「中」は「今」と異質なのではなく、連続融合しているものとかんがえられる。だが、日本における時間の概念は、西洋とことなりリニアに進むものではないため、「中今」を「永遠の今」「永遠の過去と永遠の未来を含む今」と解釈することはできない。超越者をもたない日本の文化のうちで、「今」は直線状の点のごときものではなく、「肥厚した点、漠然たる縁量をもつ点」である。したがって、「今」を生きる、ないし「今」に生きるということは、現実至上主義的な立場を将来することとなる。しかし、時間を超えたものにつつまれ、浸透された「今」が、とりとめようもない漠然としたときであることから、現実否定的心情、あるいは「漂う生」的感情も存在する。「ここには一層直進的時間における『未来』に対する積極的生は存在しない」。⁵⁵⁵

「中今」の解釈は諸説あるが、絶対的な「中今」なるものが存在するのでなく、日本文化のうちで、現在をもっとも重んじ、未来への視座を容易に持ちえなく機能する時間感覚が存在してきたことが指摘される。平時であれば、おおきな問題として可視化されることはないかもしれないが、有事の際、かかる時間感覚は人間存在を滅しさるほどの力をふるう。

この時期、三井が『原理日本』で唱えたありのままの自然に随順し、写生を理想とするような詠歌の態度は、眼前の世界に対する思考停止の状態へとたらしめかける。天皇御製の歌を唱和したところで、天皇自身、なにか国民をみちびくための決定的な展望を示すわけではなく、不可測な日本の現実に随順し歌を詠み「ひとびとと共感共苦する」のみで、すなわち彼からして無窮の「現在教」の世界に嵌った存在でしかないのだった。⁵⁵⁶

築地の歌は、最初は他者をまなざしていたのが、時間の経過とともに「みる」世界が徐々にせばめられていくのは偶然ではないだろう。自由に創作をおこなっていると感じていても、和歌を正式にまなんだ彼女が、震災を経て「梅屋敷」のような創作をおこなうのは自然な帰着であったともいえる。彼女は、和歌の型のなかで自然をたたえ、天皇をたたえ、「今」をたたえている。

一方、和歌の手ほどきも、正式なまなびも皆無である金子が、おなじころ——亡くなる前年につくった歌はつぎのようなものである。

谷あひの早瀬流るる水の如く砕けて砕く叛逆者かな

叛逆の心は堅くあざみぐさいや繁れかし大和島根に⁵⁵⁷

これらの歌には主情があらわで、反抗の精神をむりやり型に押し込んだようであり、おそらくは作者の意図に反しインパクトは殺がれてしまっている。しかし、つぎのような歌には、

⁵⁵⁵ 田中元『『中今』について——日本人の時間意識』『理想』No.584 理想社（1982）pp.34-44

⁵⁵⁶ 片山杜秀「写生・随順・拝誦 三井甲之の思想圏」『日本主義的教養の時代』柏書房（2006）pp.91-128

⁵⁵⁷ 金子文子『わたしはわたし自身を生きる 手記・調書・歌・年譜』鈴木裕子編 梨の木舎（2006）p.371

伝統的な文化の型をもちつつ、きわめて理知的な、その意味では和歌らしくないオリジナリティのたかい作品がすがたをあらわしている。「蔭」のありかを、禁忌を撥ねかえし凝視しようとする態度は、中今の陥穽から自由たらんとするのである。

光こそ蔭をば暗く造るなれ蔭の無ければ光又無し

照る程に蔭濃く造る××よ我は光を讃むる能はず⁵⁵⁸

第9章 「視」の自律——青年は未来へつらなる——難波大助（1899-1924）

はじめに

難波大助は、「虎ノ門事件」の犯人として一般に知られている。彼は、いかなる組織にも属さず、仲間ももたずに個人で決行に出た。近代の日本には要人暗殺が頻発することとなるが、政党や結社等の集団にまったく依らない例は、他に類をみない。行動の結果として死が予想される一回性の行為を、関東大震災から3か月後の1923年12月27日、難波は意志的にえらびとった。

戦前の「大逆事件」に、1910年、菅野スガ、幸徳秋水らによる「幸徳事件」、1923年、朴烈、金子文子による「朴烈事件」、同年、難波大助による「虎ノ門事件」、そして1932年の李奉昌による「桜田門事件」がある。最高裁は、4件すべてに対し刑法第73条「天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子又は皇太孫二対シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタルハ死刑ニ処ス」を適用し、幸徳事件では12名が、虎の門事件、桜田門事件では、難波、李がそれぞれ絞首刑に処せられた。

新井勤は、これらの措置を日本法制史に照らしあわせ、大審院は明治40年刑法第73条を「律」の「謀叛」の概念で解釈したのだと説く。新井は、それゆえ幸徳事件、朴烈事件を「悲劇」であったと語る一方、暗殺自体には失敗しながらも決行された虎の門事件、桜田門事件を「大逆罪の既遂犯そのもの」として、それ以上の分析をおこなっていない。⁵⁵⁹実際に、幸徳事件に対しては当時から刑の執行に疑問の声があがっていたが、その関心はながく第二次大戦後までつづき、ついに「事件は国家の捏罪であった」と判断されるにいたった。12人の刑死者中、計画に肯定的意見を示したのみの人間が半数以上存在した事実は、一般の「良識」にひろくうったえたことと想像される。朴烈事件に関しても同様、前述したように捏罪の指摘にとどまらず、金子文子個人へのつよい関心が現代まで持続されている。

一方で、「大逆罪そのもの」＝確信犯という認識の回路は、他の2件と比しつつ、ふた

⁵⁵⁸ 「××」の部分は、伏字もしくは削除されたものと推測される。

⁵⁵⁹ 新井勉「近代日本の大逆罪」『日本法学』第74巻第4号日本大学法学会（2009）p.32-33

りの人間の死刑処分を、彼らの「行動につりあったもの」と思いこませるのであろうか。結果的に暗殺の対象が「無傷」であった点は、事件直後はともかく、現在にいたるまで議論に付されていない。そうであれば、殺人「未遂」という行為そのものでなく、実行の「対象」がどのような人物であったかが主たる判断となり、われわれの意識裡に個人の存在を「抹殺」させるのだとも考えられる。すなわち、そこには、未だ変わらぬつよい「禁忌」が共有されているのではないだろうか。ただし「桜田門事件」に関しては、当時帝国主義により侵略された外国の人間の愛国的な決起行動として、一般には理解されるのだろう。⁵⁶⁰対照的に「虎の門事件」は、既遂であることは共通していても、「日本人」の「単独犯」によるものであるという事実から、忌避は最大限にはたらいたものと想像される。

かかる事情を反映してか、難波に関する学術論文はひじょうに少ない。おもな著書に、中原静子『難波大助・虎ノ門事件 愛を求めたテロリスト』（2002）、原敬語『難波大助の生と死』（1973）、岩田礼『天皇暗殺』（1980）がある。いずれも難波の幼少時から事件の経緯にいたるまでを時代背景とともに丹念に追っている。なかでも『難波大助・虎ノ門事件 愛を求めたテロリスト』は、第2次世界大戦終結から3年目に17歳であった中原自身が、難波家の親戚にあたる高校の同級生から、難波の妹・安喜子が同校を中退した話を聞いた経験が執筆の契機となっている。中原は、1970年代から難波の地元・山口県や関連の地で資料集めや聞き書きをおこなうが、当時は事件の関係者も一部存命であり、生きた証言を得たのだった。

本論は、あとがきで中原が「執筆中に最も強く感じた」と語る2点「大助はテロを手段としたために目的がテロであったかの如く印象づけられてしまった」、そして「大助が目的とした貧しい人々の解放は遠くへ去り、彼の行動は大正デモクラシー終焉のきっかけになってしまった」⁵⁶¹を、それぞれ性格のことなる重要なものと考えた。すなわち、前者は客観的な事実だが、後者は、それ自体が当該の時代から現代まで引きつがれた言説である。難波にとって、テロは目的ではなかったにもかかわらず、事後の経緯から、理想的な運動全体がたったひとりの人間の行動により終息させられたとする把握には、異なる「歴史」を排除しようとする意識が看取される。それゆえ、中原は、難波を匿名な凶悪殺人犯でなく、志をもちながら道を誤った青年として描出しようとしながら、その限界は言説に回収されてしまう。

だが一方で、中原が、従前、存在自体を忌避されてきた難波の遺書から「人間を可愛がっておやりなさい」の一節を掬いあげた態度は、きわめて貴重であった。それは、ながきにわたりドミナンスを占めてきた「いつの時代にあっても、テロ行為は本人の凝り固まった異常な心情に起因する」⁵⁶²というごとき言説に、いったんは亀裂を入れる。だが、難波

⁵⁶⁰ 李は上海で金九が組織した抗日武装組織「韓人愛国団」のメンバーで暗殺もそこからの指示による。

⁵⁶¹ 中原静子『難波大助・虎ノ門事件 愛を求めたテロリスト』影書房（2002）pp.347-350

⁵⁶² 石村修「国法から見た『虎の門事件』」専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）p.380

が「道を誤った」原因を、おとなの「愛情」が不足していたためとするとき、裁判で慈父をよそおいつつ「改悛」を迫った審判者たちの態度は、自明のごとく免罪されてしまう。それゆえ、かかる巨視的な眺望を欠いた一般論へのすりかえは、日本近代の理性の不在を容易に隠匿するのである。

本論は、序章で、テロリストの一語であらわされ、特殊なものとしてあつかわれ、今日までそうみなされつづけている存在が、同時代的な普遍性とむすびついていることを積極的に提示したいと述べた。決行の前日に、難波は、親友への手紙で「俺にとって最後の日が来たのだ。青年共産主義者の一人として、テロリストとして立つ日が来たのだ」とつづけている。そこでの「テロリスト」とは、凶悪な無差別殺人者などではなく、「青年革命家」であり、彼が己ひとりを持んで行動に出たのも「天皇の息子」たる若者と1対1で対峙しようとしたためではないかと考えられる。つづけて書かれた「不信行為を断行する勇気が始めて俺についたのだ」の辞には、外に対してではなく自己が、虚無を創出しつづける非「理」の時空間で、不本意なかたちで存在することへの断罪が示されているのである。

難波が感銘を受けたロシアの青年革命家は、皇帝を倒すという直截な使命をおびたが、日本の特殊事情は、「神」の不在を示さねばならぬというより困難な使命を担っていた。さらに彼は書いている。「神秘と虚偽で固めたる呪ひの日本帝国よ」。それゆえ、彼に意識されたのも、虚無の源泉の「虚」を引きはがし、その罪過を白日のもとにあばく行為であった。

かかる事実にかんがみ、1923年の時点で、天皇は「現人神」とされていたことが、考察の前提に置かれねばならないにもかかわらず、「罪」を担い命を落とした難波における暴力性ばかりが裁かれつづけているのはなぜか、問題の所在があきらかにされねばならない。「語る」生き物を人間として再生産するため、交わされることばを宰領し理性を制定すべき「超越者」の置かれる場に、生身の人間が据えられ、それにより生じる「狂気」の代償がもとめられたのだとすれば、未遂犯とされる金子同様、難波もまた当該の供犠に付されたのだといえる。戦争直後に、裕仁の発した「人間宣言」(1946)は、ひるがえって日本近代に、疑似宗教としての天皇制が敷かれていたことを証している。だが、その際に、かかる「虚」を基として戦争を遂行し、破局をもたらした責任がつまびらかにされることはなかった。

その罪過が、今日においても未だただされない事態は、「神」が人になろうとも連綿たる非「理」を産出しつづけ、以下のような言辞を許容する。

事件の間接的な責任を負って、山本権兵衛内閣は辞表を提出し、皇太子はこれに慰留を求めたが、結局総辞職となった。普選に手をつけない山本内閣が、この事件を契機にして切られたことになる。同時に、警視総監湯浅倉平を筆頭とする治安当局者も免官となっている。難波大助の意思は、尊敬する堺利彦の社会主義者からは賛同をえ

られることはなく、逆に、平沼麒一郎はこの事件に衝撃を受けて、「今にして国民精神を涵養振作し国体を固くし智徳の竝進に努め国体の精華顕揚するに非ざれば国家及民族の前途亦終に知るべからず」という意図をもって、「国本社」を設立していた。歴史は難波の意思とは別の方向に舵をとったことになる。⁵⁶³

だが、たとえ「歴史」が、難波の意思とは別の方向に舵をとったとしても、それが難波個人の「罪」に帰せられるものであってはならない。さらに、「歴史」はある地点で区切りをつけられ、終わったわけでもないのである。

そこで本章は、従前、捨象されてきた弁護士の今村力三郎や大審院長の横田正俊、教誨を担当した宗教者、その他裁判にかかわった年長の者たちと難波の関係を注視した。「虎ノ門事件」の裁判の過程においては、確立された天皇制に依拠し家父長の威光をまとった修養論者が「青年」を圍繞する図——20世紀が明けるところの——が、再現されている。なかでも、悔悛をしたところで死刑はまぬがれないにもかかわらず、それをおこなえば免罪されるかのようにみせかけ紐帯をなす彼らのうちに、序章で取り上げた修養論者・近角常観がふくまれていることが注視される。しかし、20年のときを経て現れた青年は、煩悶の果てにみずからの生と引きかえ、「神」の不在とそれゆえの非「理」を同定したのだった。

本章は、難波が先鋭な個人行動をすすめた理由に、「視」の自律がかかわっていると措定する。難波は、25年の生涯のうち18年間を生地にとどまりながら、国体につよい疑問をいだかず、勤王の家系に親和して暮らした。だが、同時にその生育環境は、幼時から彼に公的な理想精神の実現に重きを置かせたのだった。長州という近世末から中央へ多数の人材を送り出した地の士族の「家」に生育した彼にとって、「公儀」は空気を吸うかのごとく存在し、志士の矜持は未だ生きていた。しかし青少年期をむかえる1910年代後半から20年代には、前述したような雑誌文化の隆盛もあり、郷里にありながら革新的な思想にふれる機会を得る。そして、進学のための準備にはじめて上京をするが、学業と社会的実践のあいだでゆれながら、東京と地元を列車で行き来することとなる。金子のような幼時から繰り返された「移動」とはことなりつつも、青年期の凝縮された往復運動は、歴史がもたらした「断層」をよりあざやかに目に映じさせ、多様で多量のリファレンスを得たことは、対象化のまなざしを一気にすすめたと思像される。

現今の学知に対する意義がみいだせないことを、都市において痛感していく過程は金子と類似しながら、武士としての曾祖父の生き方に尊厳をおぼえ実践に重きを置いた難波にとって、あらかじめことばの裡に沈潜する態度は警戒されていた。同時に、武士的身体にとって「観察」は、かつてそれに応じた鋭敏な行動力とともに、生死を決する根幹だった。また、目標実現のためには、朋党から離れ単独行動をなしえる習性は、転じて他者と

⁵⁶³ 石村修「国法から観た『虎の門事件』」専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）p.393

のまじわりをも容易にする。

そして、5人のなかでも商人の「知」の伝統につらなつた安井がそうであったように、難波も士族の伝統に身体的、精神的につらなることで、過去、現在、未来と流れてやまない時間を意識したものと想像される。近世末の志士たちが、勤王や佐幕といった主義や立場を超越しおおいなるものをまなごうとしたように、終局、難波がつらなろうとしたのも子孫たちの生きる未来であった。

以上を踏まえ、本章の第1節では、近世末の志士的精神を受けつた難波が、理想主義と行動主義に重きをおいた経緯、第2節では、学校知を去つたのちの労働者としての出発、第3節では、娼婦との出会いとそれが決意させたもの、第4節では、「虎ノ門」事件の裁判の内実と彼が到達した「子孫崇拜」について考察する。

第1節 志士の後衛

(1) 向山文庫と顕彰碑



fig. 18 筆者撮影「難波邸」2016年8月23日

山陽本線の無人駅「島田」から、田にかこまれた上り坂の道を40分ほどあるいていくと、東荷川沿いに一軒の古い邸宅が建っており、門の近くに額をかけた土蔵がある。その「向山文庫」を擁する「山口県熊毛郡周防村257番屋敷」（旧住所）に、難波大助は1899年11月7日生まれた。彼は6人きょうだいの4男で、他に長男・正太郎、三男・義人、弟・健亮、妹・安喜子がいる。

難波の曾祖父による「難波覃庵履歴書覺書」には、「周防國熊毛郡立野村拝領以来覃庵迄十一代清水家奉公仕候」と記されている。藩政期に、立野村の知行をはじめ光市域に給領地を有した清水家は、1582年、備中高松城の戦いで羽柴秀吉から水攻めを受けたのち、毛利、織田両氏の和解をはかるとともに味方の兵を救うため、秀吉側より贈られた酒を船中で酌み交わし切腹したといわれる守将・清水宗治を遠祖とする。

難波家は、清水家を通して直接間接に本藩「毛利家」に尽くしてきたが、覃庵は、幕末

に際し、主家である清水元周、親知、親春の三代に仕えることとなった。彼は、三丘宍戸家の徳修館にまなぶと、元周の命でわかくして萩に出て世子・親春の相伴役となる。1834年、立野に牧馬場をひらき、1859年には樟脳製造所を設立し、主家の財政をたすけた。また、1862年には、自宅に私塾「養義場」、翌年には長徳寺境内に「慕義場」を開設し、文学、西洋銃陣、槍術、弓術を子弟の青年に教授する。同年には、藩主・毛利敬親の密使を受け、周布政之助とともに江戸・京都間を奔走し諸藩の志士と連携を図るが、1864年「禁門の変」が起こり、長州藩の藩命により親知は自刃する。覃庵も殉死の覚悟であったが、当の親知からとどめられ、後事を託されることとなった。「覚書」には、その後「元治三年六月十五日主人親春第二奇兵隊総督被仰付候中大島郡戦争主人親春林半七殿水谷周蔵覃庵一同出陣仕候」とあり、彼は、親春とともに奮闘のすえ幕府軍を撃退したのである。

覃庵は、隠居後、自家収集の書籍に清水家の蔵書を加え、親知の法名「仁沢院殿向山義雄」に因み「向山文庫」と名づける。文庫内の中央正面には、祭壇を設け、孔子と親知の木像を安置した。文庫の文字は三条実美の書で、下方の「仰高」の額は 藩主・毛利元徳の筆によるものである。「向山文庫」は、覃庵の死から 20 年を経た 1908 年に、一般公開の運びとなった。また、難波家の隣接地には、1917 年に建てられた「覃庵翁顕彰碑」がある。鬱蒼とした樹木が祠状になり、一段高い場所から見おろすように立つ碑は、高さ 3.6m、横幅 1.7m で、手前の石柱には「贈五位」の文字が刻まれている。のどかな田園風景のなか、その威容は人目をひく。

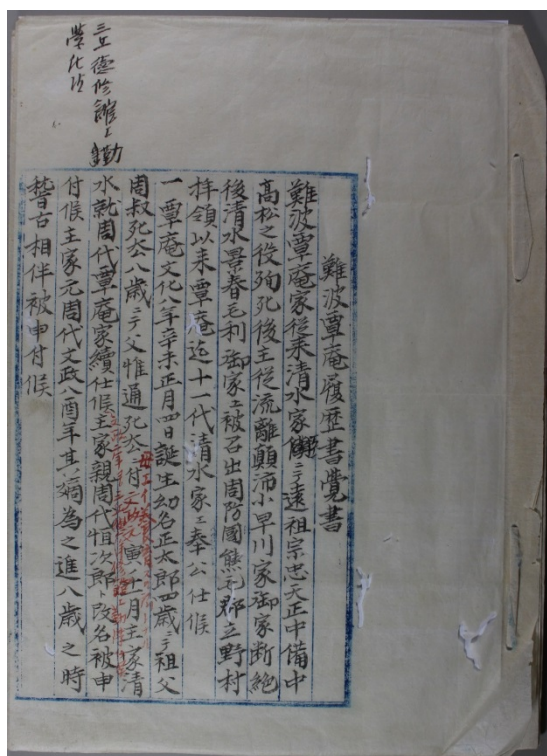


fig.19 「難波覃庵覚書」

ながくつづいた武士の治世において、主人に対する従者の没我的献身は、ときに無私の極限を示した。「主従の契より外には何もいらぬことなり」というような武士道の理想の型は、覃庵の行動にあてはまる。「武士的性格」とは、かならずしも主従関係におけるものではなく、そこからはみだす部分に「歴史を形成する原動力があった」。⁵⁶⁴しかし近代が明けたのちには、立野でしづかに余生を送った覃庵は、江戸末期に武士として主君とともに過ごした時代を最上のものとしたがゆえに、かかるアイデンティティに矜持を置いたまま一生を終えたのではないかと想像される。

(2) 外様の位置

覃庵は、終生勤皇家であったが、それは長州藩の歴史的あゆみと軌を一にしている。15世紀末から16世紀末にかけ、局地的な戦乱が頻発したのち関ヶ原の戦いで勝利をおさめた徳川家は、より広い「忠誠」原理を創出すべく、相競合する大名連合間の対立を正当化するような「忠」の復活を封じこめようとした。その際に、完全な中央集権化がしりぞけられたのは、徳川家康が、長期的な内乱の可能性を避けるべく、忠誠と権力は唯一不可分の構成単位に融合される必要はないとみなしたためと考えられる。幕府との関係において、将軍家の血統をたもつための三つの「親藩」、血のつながりはないながら信頼をおかれた家臣たちの「譜代」、関ヶ原で敗れたのち忠誠を誓った大名たちの「外様」が設けられたが、長州藩は、薩摩藩とともに最後者に該当していた。

『防長回天史』の「毛利氏と朝廷の関係」の項には、「防長の地は物産の富工業の盛なしと雖も歴代の勤儉貯蓄以て能く不虞に應ずるの資力を備へ加ふるに文武の素質は能く其士人の志氣を激励し以て有為の人才を輩出せり凡そ此等は皆防長後日の基礎を為すと雖も此他に猶一大原因ありて存す何ぞや曰く毛利氏の朝廷に對する関係是れなり」とある。毛利氏は元來京都の出身で、宮禁に出入りし天皇近くに侍っており、そこで優遇されていたという。廣元以後、武門に列してからも、徳川の諸侯が京都の朝廷に出入りすることがかなわなかったのと対照的に、参勤上下の途次は京に入り有栖川宮及び鷹司近衛一條西園寺の諸卿を訪問することを恒例としていた。同書は、近代以前の関係が、近代が開始される際奇貨に転じたことを「常に勤皇の大義に仗り率先して維新の大業を翼賛せしもの豈其故なからんや」と賛美する。⁵⁶⁵

その途上の1863年、奉勅攘夷の名を借りた下関での外国船砲撃事件は、長州藩における封建家臣団の無力さを暴露するとともに、尊攘改革派が軍事力形成の一転機をなしたの

⁵⁶⁴ 相良亨『武士の倫理・近世から近代へ』ペリカン社（1993）p.88

⁵⁶⁵ 末松謙澄『防長回天史』柏書房（1980）pp.32-36

であった。以後、尊攘改革派は「正義派」と称し、幕府に恭順する保守勢力「俗論派」との対決をおこなう。一連の過程で、上述したように覃庵の主人であり「正義派」の代表的人物である親知は命を絶つこととなるが、「俗論派」による「正義派」の追討命令に、農民全体への影響力をもつ豪農・庄屋層が応じることはなかった。高杉晋作の呼びかけに応じた庄屋同盟は、主体的に正義派を支持する。そして、天保期以降の藩政改革の帰結である正義派の藩権力ヘゲモニーは、倒幕へのおおきなうねりとなっていくのである。

(3) 理想主義と権謀術数

万国に生れしか、或は外国へ渡らば、王に成るを以て心とすべし。日本にて《は開闢より天子は殺さぬ例なれば是ばかりは生けて置べし。》將軍とかいふ者に成る心を工夫すべし。《天子と同様なり。》

「英将秘訣」⁵⁶⁶

1811年生まれの覃庵は、現前する武士文化のうちに生の規範を見いだしたがゆえに、近代的自我の葛藤や社会的矛盾にまみえることなく、その意味では終始一貫した生涯を送ったといえる。それはしかし、動揺を見せはじめていたとはいえ、身分や役割が固定されていた鎖国体制の内ならではの在りかたでもあった。一方、彼より約20年後、長州に生まれた吉田松陰は、成人するころまさに体制の動揺に立ち会うこととなる。彼は愛国者でありながら、そのゆえに国禁を犯し外国文明と接触しようところみ、危険思想の持ち主とみなされた。⁵⁶⁷理想に生きた愛国主義者であることは共通しているものの、主君に仕えることを第一義としてうたがわなかった覃庵とことなり、近世も残りわずかの外圧にさらされた日本で吉田が発揮したのは、「非常の大事」の尊王心であった。それは、儒教的な君臣の名分論とは異なる「実践」的性格のつよいものである。もとより吉田にとっての「学問」とは、体制と齟齬をきたさずむしろ体制を補完する「おかかえ」のものではなく、「非常の大事」に一直線に行動に出られるようにと、自己の意志をきたえるための理論であった。

1858年、彼は、「覚書」によれば覃庵がともに行動をしたという藩の手許役・周布に、「国交断絶は国家の事業で幕府の仕事であり藩の仕事ではないという俗論を唱える者がいるが、アメリカとの交際を断じ天皇の勅を仰いで藩論を統一せよ」と要求する。だが藩はうごかず、逆に投獄されることとなり、ほとんどの門下生も吉田との共働を拒否した。孤

⁵⁶⁶ 鹿野政直編「英将秘訣」『日本の思想 20 幕末思想集』筑摩書房（1969）p.304

「英将秘訣」の作者は坂本龍馬であるという説がながくあったが、現在では平田派国学者との説が有力。

⁵⁶⁷ 国の未来にそなえ見聞を広めるため藩の正式な許可を持たず東北へ遊学し士籍を剥奪され、下田踏海ではペリーのポーハタン号に無断で乗船しアメリカ行きを希望するも受け入れられず野山獄に収監された。

立した吉田にあたえられたのは、彼の尊攘運動に対するみなし「狂」の形容だったのである。

歴史の転換期にあっては、思想的ヘゲモニーも容易に入れかわる。1850年代から60年代にかけて、吉田にかぎらない「反逆行動」がしばしば政治過程を中断させたが、それらは組織された反乱の勃発ではなかった。幕藩政治における官僚的諸関係が決定的な崩壊をみると、政治的混乱のなかで知的不安は急激に醸成されていく。そして、大塩平八郎らに代表される「救民」という理想化された目標は、外圧からわが国を守らねばならないという喫緊の課題に置きかえられることとなり、「攘夷」の名で語られた国防の問題は、倫理的原理として復活した「尊王」の規範的地位にまでたかめられる。かくてそれらがむすびついた「尊王攘夷」の語は、「幕府に代表される政治的現状の否定ならば、制度的変化を求める言論活動であろうと暴力的行動であろうと、正当化」されることとなった。⁵⁶⁸

冒頭にかかげた「英将秘訣」にうかがえる権謀術数的言辞は、変革期の志士たちの表向きの理念でない真情を語ってなまなましい。善悪の彼岸に立ち「牛割に遭ふて死するも逆磔に会ふも、又は席上にて楽しく死するも、其死するに於ては異なる事なし。されば英大なる事を思起すべし」、「方今の江戸を目玉とし、京都帝王の玉座を腹腸とす」⁵⁶⁹とうそぶくマキアベリストにとっては、天皇もまた術策の対象のひとつでしかありえなかったのである。

しかし、あたらしい制度を模索する志士らの革命的主張のなか、幕府の没落が目前に迫るにつけ、功利主義的な態度が復活してきたことは、尊王派のなかに深い「自己分裂」を生じさせた。そして、維新主義は、功利主義的官僚的思想と理想主義的活動に半身ずつ分かれたれながらつながることとなる。結果として、理想主義はついで、性急な近代化の要請はきわめて現実的な方法を採用させる。終極、維新政府がみずからの正統性を主張するためには「天皇の神権的絶対性」以外によりどころがなく、その根拠づけのため国学等に由来するさまざまな非合理性を随伴させた国体神学が動員されたのだった。⁵⁷⁰

難波が生まれたのは、廃刀令布告後に起こった最後の武士たちによる新政府への反乱から約20年後、覃庵が亡くなってからは10年が過ぎたばかりで、向山文庫や顕彰碑にあらわれる曾祖父の「偉業」はおさない彼にとっての誇りであった。自己の誕生前から存在した勤王の「文化」に親和した難波は、「白虹事件」⁵⁷¹が起こった1918年に18歳であったが、「不敬」な記事を載せた大阪朝日新聞の不買運動を父とともに説いてまわっている。やがては、節約を通りこした父の吝嗇と「専横」にストレスをおぼえていくこととなるのだが、長じてのちも彼の意識の深層には、近世の武士的な規範が、明治の功利主義的官僚的思想に背反しながらもたれていたようすがうかがえる。それは、吉田にみられる純度

⁵⁶⁸ テツオ・ナジタ『明治維新の遺産』坂野潤治訳 講談社（2013）pp.106-107

⁵⁶⁹ 鹿野政直編「英将秘訣」『日本の思想 20 幕末思想集』筑摩書房（1969）p.304

⁵⁷⁰ テツオ・ナジタ『明治維新の遺産』坂野潤治訳 講談社（2013）p.118

⁵⁷¹ 「白虹日を貫けり」という表現による筆禍事件。

のたかい「理想主義」と伶俐な「行動主義」を、根底におくものであった。

第2節 労働と懷疑

(1) 「紙上遊戯」

あの知識といふしろ物が——無智といふ低級動物を勝手に製造して——無智な人間に対して威張り始めたのは果して何時の頃からであつたか。(中略)

絶対高位? ——即汝知識が無知識に滅されることを! 孤立的知識の所有(知識の独占)——知識の栄耀栄華それは絶じて許すべからざるなり。滅亡せんとしつゝあるインテリゲンチヤ、知識の平等へ水平へ大波は寄せんとす。

歌川克己宛書簡(1923年5月12日午後3時) 572

事件後に回をかさねた調書のなかで、難波は問われるまま、皇太子襲撃にいたった理由を明瞭に語っている。権力に最初違和感を覚えたのは中学時代、田中義一が帰郷中に、小中学生をいきなり整列させたときであった。授業が中断され、呼びあつめられた彼は「軍人と云うものは非常識極まるものであると頻りに憤慨」をする。⁵⁷³中学卒業後は、受験勉強のため上京し、勢いを増す普通選挙運動に共感すると、示威運動に参加するようになった。しかし、はじめての議会傍聴では、議員のあいだに罵声と野次が飛び交い、まともな議論がいつこうにおこなわれない。「議員が如何に議場で醜体を極めていかと云う事を痛感」した難波は、彼らへの期待をうしなう。また、同会場で突然の「詔勅」により解散が強行されるが、その直前に首相の原敬が述べた「普通選挙は国体の基礎を危うくする」との辞はながく耳にのこった。だが、こともあろうにほどなく父親が地元から議員に立候補、当選を果たす。難波は「親爺が何等の大した主義政見を持って居」らず、単に「家」の名誉の為に打って出たのだとみなすと、地元を挙げての派手な支援に冷めた目をそそいでいく。⁵⁷⁴

そのころ新聞の記事で、桜田門では一般自動車は通行できないが、皇族の乗っている自動車は通行できるのだと知り、「交通の場所まで皇族と一般人民と区別せなければならぬものであろうか。之は間違つた事である」と感じた。「其のときからぼんやりと皇族に対して今まで抱いて居った尊敬と云う事が漸く薄らいだ様に覚えて居ります」。⁵⁷⁵

そして1921年4月、発売直後禁止となる『改造』の巻頭に、河上肇の「断片」が掲載された。ロシアにおける青年テロリストの悲壮な行為は難波の胸に迫り、ツァーの暴政は

⁵⁷² 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件(三)』専修大学出版局(2006)p.183

⁵⁷³ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件(一)』専修大学出版局(2004)p.159

⁵⁷⁴ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件(一)』専修大学出版局(2004)pp.161-162

⁵⁷⁵ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件(一)』専修大学出版局(2004)p.163

当時の日本にあてはまると感じ、専制が報復を受けるのは当然であるとかんがえるようになる。現実に革命後のロシアでボルシェビキが政権をとっていたことも、成功の大部分といかずともテロリストの行為に負うところがおいと判断された。⁵⁷⁶

さらに同年の4月、上野図書館で幸徳事件の判決を知ると、「一個の吾々と同様な人間に過ぎぬ天皇を殺さんと陰謀をしたと云うだけで」、未だ行為に及んでいない24名に死刑をくだした事実に「実に暴虐と云うか非人道と云うか夫れ以上に残念な法律が世界の何処にあるだろうか」と感じる。一方で、そのときの同志らが奮闘しなかったため日本の社会革命運動は屏息したのだという確信はつよく、「実に意気地のない極まりである」と痛憤し、「私が死を決してテロリストとなって遣つてみよう」と其とき初めてテロリストとなる事を決心したのだ。⁵⁷⁷

加えて、関東大震災発生時の官憲による労働者や社会主義者、朝鮮人をはじめとする外国人の虐殺は、「言論」による抵抗の「不可能性」を決定的に彼に認識させた。そして、決行への最後のひと押しをしたのが、友人に影響され出かけた娼家での体験だったのである。自我のめざめからわずか5年ほどのあいだ、転変しつづける世界と連動するような種々の経験が積みかさなっていたが、難波は、決行の「目的」について検事に問われると明瞭に「社会革命を遂行する」ためと答えた。⁵⁷⁸

だが、革命の「手段」に関しては、事前にその是非がくりかえしはげしく論じられた形跡が、友人宛の書簡中にみいだされる。その相手である東北出身の歌川克己は、難波が早稲田高等学院入学後に得た親友であった。難波は、供述で、歌川は「余程真面目で」かつて丸の内ビルディングの工事に従事したこともあると知ってから、彼のことが気に入りましたしくするようになったと語っている。⁵⁷⁹ U君、親愛なるU、Comrade 歌川と呼ばれ、死の直前まで書簡を送られた歌川は、決行をほのめかず難波をそのつど制止しようとした。

(暗殺は卑怯者のすることである) 等とブルの手先共がよく新聞やなどで言っておる。そして彼等の道徳から見れば天皇の攻撃なら一言一句も云はせない。権力者の処置は眞に堂々たるものであり、言論に失望し腕で行く(殺す前に前以て…对手が特に権力の覇持者である場合…お前を殺してやるからなんて深切な注意をするのろまが世界の何処に居るか) **terrorist** の行為は実に卑怯極まる次第なのだ。(中略)

未だ何事の行為に出でず唯陰謀だけで相手が天皇であるばつかしにプロレタリア解放運動の勇敢なる先駆者達が廿四名も若き生命を断頭台の露と消ゆるを余儀なくされた事があつたのは眞に陰惨の極みであり、且つ権力者の処置は卑怯至極とはUには考

⁵⁷⁶ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (一)』専修大学出版局 (2004) pp.164-165

⁵⁷⁷ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (一)』専修大学出版局 (2004) pp.165-167

⁵⁷⁸ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (一)』専修大学出版局 (2004) p.29

⁵⁷⁹ 専修大学今村法律研究室編『今村力三郎訴訟記録第35巻 虎の門事件 (三)』専修大学出版局 (2006) p.57

へられないか。

敵の暴虐と卑怯の前には眼を蔽いプロレタリアの決死の逆襲を卑怯と云ふ。君の言葉をや借用する。俺は（嘔吐したくなる）よ。

（テロリストは太陽の直射する下を歩き得ない）——大警句だ。

メーデーに検束せられて留置場で一労働者が労働歌を唄ったと云つて二日間程梁に吊下げられたそうだ。（東京日日記載）

労働歌を唄ってさへ——（民衆の見て居らぬ世界）ではこんな芸当が行はれて居る。（俺はテロリストである）と大威張りに歩いてみよ。どんな目に遭うか君には想像できない。かくしてのろまでない限り誰だつて（テロリストは太陽の直射する下を歩き得ない）——尤もたとへだろうが——段取となる。やましきに非ず。唯 *tactic* に過ぎざるなり。⁵⁸⁰

この文章が書かれたのは、決行の7か月まえである。「思想対銃剣」の状況に関して、両者の議論に決着がつくことはなかった。ついに根本的な意見はぶれなかったが、難波もその過程では己を絶対視することをあやぶみ、友人に語りかけることで現前する世界に対する「問い」を繰り返している。

友よ、落ちついた冷酷さで以つて俺の思想を、それから本体を見抜いてくれ。俺は俺を激怒さす様な痛撃が君の鉛筆に依つてせられることを、どれだけ感謝するか分らぬ。⁵⁸¹

忌憚のないやりとりのなか、1923年12月初旬、決行がそこまで現実味をおびてくると気づかない歌川は、難波の行為が「反逆のための反逆」ではないかと指摘した。それに対し、難波は、さかのぼること2年まえに幸徳事件の真相を知りテロリストとして立とうとしたときには、たしかに「かっとのぼせていた」とふりかえりつつ、現今の「理性」を確認している。

ブルジョア新聞の一評論子は斯ふ云つておるではないか、「秋水・すが（女）等傲岸不遜神聖なる公判廷に於て無政府主義万ザイを三唱す。衆目カン視の前にて八裂きにしてその醜灰を遙かに国外に放擲せよ！」——人間へ対する最大の侮蔑！ 人間の首領へ対する盲目的信仰の斯くも軽蔑すべき激烈さ！（中略） 生れて初めて泣いてもわめいても飽き足らぬ憤激と憎悪との最大限を俺れは味つたのであつた。（中略）

——俺れは彼等の呪ひを呪ひとして猛然テロリストとして立たんと決心したのだつて、然しそれは「反逆のための反逆」が應々ばけ込む *Nihilism* の穴へ落ち入つて俺れ

⁵⁸⁰ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）pp.198-202

⁵⁸¹ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）p.123

かつて情念の発露の一手段として衝動的にテロリストになろうとした己を、難波は客観的に分析しているが、過日の自身を突きはなせるようになったのは、まがりなりにも労働者としての経験を得てのちのことであつた。

早稲田高等学院入学以前に、予備校に通うため四谷の鮫ヶ橋で下宿をするようになると、周囲にひろがる貧民街の生活が彼の目に映じた。自身が生の尊厳をうばわれていると感じていた身に、生活苦にあえぐひとびとの存在は、切実に迫ってくる。その強烈な経験は、質素儉約を旨としながらも使用人をやとう名家で「大旦那」と呼ばれてきた生活から、彼を引きはなすのに直接はたらきかけた。そこで難波は、まずしい無産者階級に対し、ことなる階級から同情をあたえるのではなく、共闘しようと決心するのである。関東大震災から7か月まえの1923年2月、難波は早稲田学院を退学し、身ひとつで労働者街へ入っていく。

俺は人間だ。

無産者の大群が食ふや食はずに生活をして *bourgeoisie. i.e. working class* と死を賭して戦ふ時、遊んで食へる下宿住ひをして勉強といふ革命と直接縁のないことをし、六年ぶらぶらすれば、無産者と明瞭に区別される肩書きがつき、そしてプチ・ブルジョアの生活が待っている。

俺は人間だ。故に俺は自身を充分信ずることが出来ぬ。生活苦に根拠を置かざる革命意識の如何にたよりにならぬかを痛切に知っているから。⁵⁸³

当時の学生青年にとって、学業か革命かという命題は、程度の差こそあれ身につけられたものであつた。

歌川は、出会いから1年たらずのあいだに、難波がひとりで行動に踏みきったようすを「難波君と私」で語っている。

わたしの記憶に残っているかれは、無口な、どちらかというとき控え目な男だつた。いつも教室の片隅にすわって講義をきいていた。友人も少なかったようだが、別に淋しそうにもみえなかつた。まっ黒な顔に、小さい身体ががっしりとまとまっていた。それでいて全体から受ける感じにはどこか人の心に呼びかける力があつたことを覚えている。

読書欲の旺盛なことはおどろくばかりで、原書なども特に思想的なものはよくあさっていたようだ。当時海外のものは未紹介のものが多かつたし、来ているものも

⁵⁸² 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）pp.270-272

⁵⁸³ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）pp.220-221

大抵の書籍となると買う金がなかったから、われわれが手に入れたのは多くはパンフレット類だった。そして買えない本は図書館で、倦むところを知らなかった。下宿などでも別に悲憤慷慨するというふうではなく、一つのことを話すについても静かに言葉少なに口を切った。

そのかれが、二学期半ばすぎたころから、バッタリ教室に現れなくなった。(中略)翌年三学期の始まったころ、わたしの下宿へぶらりと訪ねてきたかれは、つれだって神楽坂を散歩しながら、突然こんなことをいいたした。

「学校を止す決心を親父に告げてきた。親父は涙を流して諫止したが、自分は思想と在学の矛盾を解決するために学校をよすほかないと考える。君はどう思うか—

—? 」⁵⁸⁴

多読の一方で、ひとつの影響にとどまろうとしない難波は「主義なんて大体嫌いな性分だ」と歌川に書く。「資本主義が爛熟した揚句でなければ **Social revolution** は達成されない?

マルクスのたわ言はロシヤで立派に破られている。「学理が革命の根源である?」、「マルクスが何だ、バクニンが何だ、レーニンが何だ。偶像をかつぐ時——その人間は一個の奴隷だ。「学理等というものは革命運動の一部的参考になるかもしれないが、君の云う如く学理が革命運動の根源になる等とは夢にも思っていない」。⁵⁸⁵

難波は、ことばを費やすほどにもがきあがく自身のすがたに無力感をおぼえ、おぼろげな像をむすびつつあった行動の具現に駆られた。

くどいから——もう云はぬ。俺はあくまでも或る **motiv** から革命が深刻化せられ速生せられる事を信ずるものである。

(重ねて云ふ、テロリズムは卑屈だと、陰険だ)

俺は大声を挙げて云ふ。(悪辣暴戾陰険譎詐之テロリストの生命なり。)

⁵⁸⁴ 歌川克己、「難波君と私」『自由の狩人たち 反逆と革命』三一書房(1973年)pp.152-155

「難波大助君の私信は20数年来筐底に秘めていたもので、これを世に出すべきか否かについて、終始迷いつづけてきたのだが、こんにち偶然の機会から公表することになって、地下のかれに対する義務をようやく果たしたような気がする。それはほかでもなく、かれの品性と思想を、こじつけや歪曲のまじらない、かれ自身の生のままの姿によって直接わかってもらえるからである」とはじまり、「かれの手紙のうちに最も頻りに現れる言葉の一つは〈呪い〉である。しかしそのことから、かれを冷徹無残の非人間のように考えることは非常な誤解のように思われる。無残どころか、かれはむしろ、わたしの知るかぎり、情誼に厚い、純情な、いつも人間愛にあふれた男だった。かれの社会的功罪は、人それぞれの観点から批判されるであろう。わたしとしてはただ、はじめてありのままのかれを世に出すことをもって、地下の友へのひそかな餞けとするのみである」とむすばれている。

⁵⁸⁵ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (三)』専修大学出版局 (2006) pp.143-144

臆病者の陰険呼ばりたるや眞に笑止の至りなりだ。

(現在は 事は大? だ。思想を以て銃剣に対される)

おい U 君は本気で言つてゐるのかい。

非科学的思想の持主たるプロレタリアの人々に (天皇などと云ふ代物はプロレタリアートの生活にとつて無用の長物であり且つプロレタリアの生命の略奪者である。) と云ふ様な事を宣傳する自由があるなら尚君の言ふ思想を以て銃剣に対される) 余地があるだらう。しかし日本の現状に於ては眞理の思想は皆銃剣の為に存在を隠されてゐる。君がなほ (思想を以て銃剣に対される) なんて華族のお坊ちゃんが云ひそうな事を言ふとは俺の意外千万とする所である。(中略)

俺は **terrorist** であるかどうかは知らんが俺れを **terrorist** として取扱つた君への手前 **terrorist** になつた気分君の **Anti-Terrorism** へ俺れの嫌いな紙上遊戯を試みた次第だ。⁵⁸⁶

(2) 富川町スケッチ

今朝だ。ガラス障子の外を見れば雨が降っておる。全くうんざりした。寝ながら二人の話を聞いていた。賢所が出る、二重橋が出る、衛兵が出る、吹上御殿が出る、皇后の散歩が出る。殿下、宮様、曰く何々。皆んな宮城内のことだ。二人とも近衛兵であつたらしい。二人の近衛兵とアナーキストとが枕を列べて寝たわけだ。

歌川克己宛書簡 (1923 年 2 月 20 日) ⁵⁸⁷

都会では、ことなる出自の人間の生活が交差しては離れ、また、からまるそばからほどけ、二度とかかわりをもたぬこともまれではない。労働者として出発するべく、はじめて泊まった木賃宿で、難波は元近衛兵と相部屋になった。雨に降りこめられて仕事がなく、浅草に遊びに行く相談をしている彼らを傍目に、難波は図書館へ出かける。

途々考えた。彼等の生活は極めて単純だ。働く、食う、遊ぶ、楽しむ。彼等の生活

⁵⁸⁶ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (三)』専修大学出版局 (2006) pp.206-209

⁵⁸⁷ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (三)』専修大学出版局 (2006) pp.79-80

は享樂の二字で盡くる様だ。現行社會制度の呪詛もなければ反逆もない。こんな連中がプロレタリアならブルジョアも天下泰平だろうが、單に二人の人間の觀察に依つて多くの労働者を意久地なしと断ずる早計は俺はせぬつもりだ。これから出来るだけ労働者の多くを觀察して、彼等の生活、主義の奥底迄もつきとめて見るつもりだ。⁵⁸⁸

かかる労働者へのまなざしは、前述したキリスト教女子青年「しのぶ」の率直で公平な意見と通底している。労働者に対する難波の視線にみくだしたところはなく、世俗の生活に興じるようすにも性急な判断はおこなわれず、彼らを理解しようと努める姿勢がうかがえる。その一方で、彼にとって労働者の世界は、おおくの面で異質なものであった。『決定版 昭和史』の「難波大助の家族たち」には、難波が小学5年生のときに描いた絵が掲載されている。木の台にのせた洗面器のうえにかがんで顔を洗う横向きの男児は、難波本人と想像される。⁵⁸⁹木賃宿を探していたとき、無意識にすこしでもきれいなところをもとめていた彼は、悪い「潔癖」の性分だと友に自嘲した。⁵⁹⁰妹の証言によると、最後の帰省中にも彼は、読書のかたわら座敷の掃除を日課にしていたという。

木賃宿

(手めい！労働者の面を朝からしゃぼんで洗ふ奴がおるか！)
だしぬけのどら声
(……………)
ドンドンドン ジャージャー ガラッ ガラッ
(労働者 人間の道具 被搾取 貧窮)
そんな抽象的御題目は止せ
must work! get up!
寝過ぎた 遅い
割引きにもう五分だ かけろ！⁵⁹¹

ことばを「弄する」ことを嫌悪した彼だが、前述の絵のデッサンや、手すさびのように友への手紙に書きつけた詩からは、場面をあざやかに切りとる能力がうかがえる。

⁵⁸⁸ 専修大学今村法律研究室編『今村力三郎訴訟記録第35巻 虎の門事件(三)』専修大学出版局(2006) pp.80-81

⁵⁸⁹ 毎日新聞社、『決定版 昭和史』毎日新聞社(1984) p.225

⁵⁹⁰ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件(三)』専修大学出版局(2006) p.74

⁵⁹¹ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件(三)』専修大学出版局(2006) pp.230-231

テクで朝ホテルを出て、テクで晩帰る。無賃程安いものはない。切りつめた生活では一度の電車賃で半月の生命を持続することが出来るので、電車に乗るのは気が引ける。歩いておると機械文明が呪わしくなる。交通機関が如何に発達し、電車、自動車、汽車等の設備が如何程よく整おうと、無産者はこの恩恵に少しもあずかることは出来ぬ。プロレタリアはブルジョアの専有である文化・文明の上に呪いがあるばかりだ。と云つても何でも **negative** ガンジー式に文明を否定はせぬ。⁵⁹²

適応するだけで精一杯でありながら、もともと奢侈をこのまない彼には、むだのない労働者の生活が一種すがすがしくもあった。しかし当時の難波は、運動といえどときおり友人たちと好きなテニスをするくらいで、大病こそしていないものの腎臓の機能がわるく脚気ぎみだったのである。

——初めての労働日には重い金物を船に引っ張りなして積むのだ。労働者に対する幽かなる憧れ——それは一撃の下に粉碎せられた。力の不足と肉体の酷使——労働者生活の幻滅は立ち所に来った。⁵⁹³

翌日から仕事はすこしらくになるが、分配される仕事量は一定しないため、毎日仕事にありつくことは容易ではない。一週間つづけて閉めだしを受けると解雇同然の状態になった。

俺の信ずる——そして熱愛する U、願わくは俺を激励してくれ。朝から雪が降る。空腹と寒さと生命の短縮。どん底生活を美化して戯らにセンチメンタルな空想を逞うする勿れ。どん底が現実である人間に取っては、どん底生活は呪詛であり憤激であるばかりである。

俺は体験の真只中にある。俺は弱くても強いぞ。俺は飽く迄進まなくてはならぬ。⁵⁹⁴

彼は、エリートコースに乗りわきめもふらず「成功」の途をすすむ学生が目をむけようとしない生な労働の世界を友に書きつづりながら、「観察」をつづけていく。

権力者、ブルジョア及びその手先共が、こゝ富川町の労働者の御機嫌を取ることよ！何時から何時迄の間にたゞで飯を食わせるの、髪をただで刈ってやるの、國技館の特等席でやはりたゞで活動寫眞や浪花節を御馳走するの、富川町の労働者も御馳走攻めで何んのことやらと、さぞ面喰うことだらう。(略)

592 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (三)』専修大学出版局 (2006) pp.98-99

593 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (三)』専修大学出版局 (2006) p.111

594 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (三)』専修大学出版局 (2006) pp.91-92

——悲しい哉。そして呪うべき哉。たゞと特等席のわなに引つかゝり、それでなくても箔思想のここのら労働者の思想は、いやが上にもブルジョアの毒手に依り箔化せられ——どどのつまりは去勢された馬同様の無反抗者に。⁵⁹⁵

歌川への手紙のなかで、難波はそれを「富川町スケッチ」と名づけた。生の尊厳をもとめ彷徨した彼は、東京の労働者街でみずから「場」に対する愛情をおぼえる。描写は活気にあふれ、ときにユーモアさえうかがわせるものであるが、同時に1920年代の社会の貴重な記録となっている。

夕食の代りにかけを一杯食うつもりで、ソバ屋に入った。量は山の手よりは少し少ない。十銭では一寸高過ぎるかと思っで見出しを見れば、かけ、もり五銭と書いてある。五銭なら全く安い。物價の総てが安いのはここの特徴であり、頗るプロ的で氣持ちが好い。活動も三十銭、四十銭、五十銭と等差が総て十銭である。

六時から七時頃の木賃ホテル通りの賑やかさ。支那人、朝鮮人、日本人の労働者が呑むためと食うために、酒屋、飯屋、ロダイ（露台）に蟻の如く密集して騒音雑音の異様な *symphony*——その光景たるや正に痛快なる壯觀ぞ。俺は今晚本当に富川町の *charming* なのを知った。⁵⁹⁶

この場所では、基本的には階級も国籍も関係なく、「人間」同士のつきあいがいとなまれる。土地の有力者の家で、意識せずとも地元民に対しては祖先の威光にまもられながら、家庭内では格差のある待遇を余儀なくされてきた難波は、労働者街における「平等」をただししいものと感じた。だが、上述したようにかかる場にも権力は介入し、そのとき不可視の階層はあらわになる。ホテル通りで博奕を打っているところへ刑事がやってくると、張本人の日本人は賭金全部をつかんで「矢の様に」逃げ、その瞬間「ヨボヨボした」朝鮮人ふたりに縄がかけられた。ひとりが「なにもしていないよ」といい、ひとりがぼんやりしていると、潔白を証明したほうの朝鮮人の足を刑事が蹴りつける。下層社会においても、最下層の人間をつくることで社会が回転していく光景を、難波は凝視しながらつづる。「正直者がひどい目にあい、ずるい奴はうまい汁をすう。人間の野郎がいやになる」。⁵⁹⁷

安井が労働する朝鮮人の表情を「正直そのもの」と評し、金子が朝鮮人と共闘したように、難波もまた、彼らに魅せられ「Unite」を唱えている。

メーデーに於けるサーベルの朝鮮人に対して行つたあの暴圧と圧政振りはどうであ

⁵⁹⁵ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）p.102 p.104

⁵⁹⁶ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）pp.105-106

⁵⁹⁷ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）p.127

つたか。東京の真中で白晝衆目環視の中で——あの半島に於ける文化的善政（？）振りが想像出来るではないか。

踏む、蹴る、擲る、——東京ではせいぜい負傷で済むのだ。それがあの海一つへだてた半島では秘密裁判の下に首が飛ぶのだ 独立から階級戦へ当り前の事だ。いやしくも人間であるからには——誰だつて ND 特権階級に対して desperate が反逆がせずにおられるか！ 爆裂弾が飛ぶよ。赤旗が走るよ、勇敢な朝鮮人、水平人と共に

Proletariat Emancipation Movement 最前衛だ。人道的線香臭い同情を朝鮮の人々に——被圧政者達に與へるのはお互に止そう。(中略)Unite は唯だ。たゞ時機の問題——

サーベルの妄動度々見せつけられるに従つて良心が人間にみんなあれば他所事と見られぬ様になつてしまふ。⁵⁹⁸

ある時期から決行を念頭に置いていた難波は、累がおよぶことに加え、行動が制限されることをおそれ、交際の痕跡を極力消去していたことがうかがえる。それゆえ逮捕後に事情聴取を受けたのも、親族以外ではわずかに中学からの友人と歌川くらいで、彼らは拘留されることもなかった。かかる事情から記録にはのこされていないが、木賃宿や労働者街には、当時多数の外国人や苦学生、アナキストが滞在しており、彼らとの接触が推測される。

たとえば難波より4歳年長の山田作松は、名古屋で生まれ、小学校卒業後に専売局ではたらいたのち上京、新聞配達をしながら岩倉鉄道学校にまなんだ。その後、鉄工場ではたらきながら、友愛会を創始する鈴木文治らの雄弁大学に加わり、中国、満州を放浪し1920年に帰国するとアナキズム運動に参加し、1922年、富川町で自由労働者となった。山田は、黒幽会、自然児連盟を結成し、サッコ・ヴァンゼッティ事件の救援活動のため各地を遊説するも、1928年に病没する。1924年、処刑された難波の遺体を引きとりにいった自然児連盟のメンバーたちは全員検束されるが、山田は、おなじ時期に富川町に滞在した難波とは面識があったのではないかと推測される。⁵⁹⁹

マルクスの資本論にどう書いてあろうと、自分は自分の必要から起こった要求に依り自由にすすむ考えである⁶⁰⁰と述べる山田は、難波よりも実地の運動に通じていたが、学理を廃した行動重視型で「未来志向」の両者にはアナーキーな共振がうかがえる。

——だから、支配階級者が、何處からか見つけ出した権力で、いゝ加減に造り上げて、無産階級に飲ませ、酔はそうとする死盃は、もはや、彼等自身の口もとに、運ばれてゐる時とはなつた。勝誇つてゐるつもりの暴君も、遠からず祖先のように醜怪な

⁵⁹⁸ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）pp.179-181

⁵⁹⁹ 日本アナキズム運動人名事典編集委員会『日本アナキズム運動人名事典』ばる出版（2004）p.676

⁶⁰⁰ 山田作松「階級的立場より」『自然児』自然児連盟（1925.3）p.9

残骸を、路傍に曝し、来るべき善き世の人々から、嘲笑を以て物語られることであらう。吾等は、過去の歴史に囚はれず、自分自身達の社会生活を建設しなければならない。

そこに人間の、絶対価値が存在する。⁶⁰¹

山田が中心となり発行された『自然児』は、「定価表」に「一冊 15 銭 直接読者：金持ち 5 円以上 貧乏人 2 銭」とあり、大真面目にかかる取りきめがなされている点に、時代状況の反映がうかがえる。

歌川への手紙にも記されることのなかった彼らとの出会いは、難波に、社会改革の可能性を確信させ、勇気をあたえたことと想像される。しかし彼は、彼らと全面的に行動をともにはせず、最後にひとりいくことを選択した。未来を臨みつつも大状況はきびしいものであり、精神的な「Unite」は有しつつも、彼がいう「最前衛」の場において身を挺することが最善と考えられたのではないだろうか。

貨物自動車

走る 走る

自動車が走る

大速度で走る

そうして俺が自動車に乗っておる

(金鎖り下げた紳士とでも合乗り？)

ゆれる ゆれる 身体が宙になる

スコツプ シヤベルがはね返る

前歯の欠け目から 栄養不良のひげ面か

ら時々もれる黙々の苦笑ひ

貨物自動車は暴君の如く疾走す

(何処へ？ 何をしに？)

馬鹿な！ (人生の墓場) へ穴掘りにさ。⁶⁰²

(3) 桜の山を越える兄弟

ささき、金子、渡辺は、横浜の地と浅からぬ縁をもったが、難波も死去する前年、この地で偶然弟と出会い、ふたりだけのみじかい時間をすごしている。一労働者としての出発から 2 か月目、未来を模索しつつけるなか、労働運動はまとまりを欠き全体の方向性がみ

⁶⁰¹ 山田作松「死盃はお手もとへ」『自然児』自然児連盟 (1925.7) p.4

⁶⁰² 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (三)』専修大学出版局 (2006) pp.225-226

えず焦燥をつのらせていたころのことであった。「家」の存在に反発し、辛辣な形容をすることはあっても、難波は家族の成員に真底否定的な感情をいだいたことはなく、各々を人間として尊重していた。だがセンチメンタルな情愛は、単独の行動をにぶらせると警戒し、意識的に距離を置こうとしたのである。

4月1日の朝、上野へいき2、3紙の新聞を買って読むと、今日は示威運動がないとあり、罷工団の幹部は銚子へ応援演説に行くはずだとかんがえた彼は、移動を中止し公園の「ロハ台でcherryのつぼみを見ながら」現在の己自身を分析する。

無活動、不緊張、優柔不断の生活が、そもそも何に原因するか。革命意識の薄弱のためか、階級斗争の中へ飛込むのが恐ろしいためか、no、no——然らば、やつつけろ、然し……

極端の極端、過激の最過激、……要するに最も猛烈にして然かも十分に徹底した思想及び行動を好む御本尊が、なまじい黒を赤や黄でごまかして置こうとするから、總ては破綻に破綻をきたし、広い自己独特の世界を闊歩することが出来ず、喪家の犬の如く重箱の隅の方をうろつかねばならぬ仕末、無活気、無決断に対して自己自身から絶えず放たれる残忍なる嘲笑を跳我に対して眼をつぶつて我慢。最も嫌悪する non-Resistance の息の根をねこぎに止めてやらねばならぬ。そうして……

徹底謀反者たる俺は bourgeoisie や権力階級の手先共又はキリスト教的博愛主義者や涙もろい humanist や更に斗争を抜きにして平等を夢想する道化屋たる democrat 共の悪罵の的となり、彼等の所謂「極悪非道の人間」に喜んでならう。親、兄弟、朋友、姉妹、骨肉の俺に対する永久の憎悪と憤激に対して石の如き冷酷と嘲笑とを返してやろう。……認める、然し……友よ、兄よ、弟よ、御前達は自分が卑怯者であり、利己主義者であることが御分りかい？⁶⁰³

東京駅にむかった難波は、「動揺せる思想」に「最後の判断を下すため」、しずかな鎌倉の海岸をめざす。汽車が横浜を出たとき、彼はふと、真前にめがねをかけた学生が立ったまま弁当をたべているのに気づく。

それが君は誰と思ふ？ 運命の悪戯？ は一瞬にして俺を人間中の最弱者にしてしまった。前の奴は未だ俺を知らずに頻りと弁当をぱくついておる。

「オイ、○○」

俺は初めて俺の声に依り、俺の存在に気がついた。親父が今日鎌倉を出発して田舎へ帰るのを送るため、且つ久しぶりに兄に出会うその俺の弟は東京の養子先きから鎌倉なる兄の家に向ふ所だ。奇遇と云へば余りに奇遇である。同じ汽車で、そうして眼

⁶⁰³ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）pp.150-152

の前に。⁶⁰⁴

ふたりは鎌倉駅で下車したが、兄の家へ寄るようにとしきりにすすめる弟に応じず、難波は海岸のほうへ逸れた。

決断の鼻柱は弟を見た瞬間にくじかれてしまつておる。汝、弱き者、汝、意気地なきものよ。いくら地團太を踏んでも残忍にして強き意志は蘇生しそうにない。ままよ、ままよだ。俺は砂浜にころがつて golden-bat を空にとどけよとばかり、やけに吹き上げたが、くじかれた気分はちつとも回復しそうにない。⁶⁰⁵

躊躇しながらも、最後になるかもしれない面会を断行した彼に「どんなにか喜んだ」父は、上機嫌で「自重して決して無茶なことをせぬ様に」「身体を充分気をつけて」「今晚は是非兄の所へ行つて泊れ」という。

「骨肉の愛のとりことなり」父を大船に送り、兄の家に一泊し 12 円の「最後の」生活費を受けとった難波は、鎌倉横浜間が景色がよいので歩いてみてはどうかという兄のすすめで、弟とふたり「徒歩旅行」に出た。

人の通らぬ山道を、のどかな春日和、鳥の声、谷間の桜花、——⁶⁰⁶

プロパガンダを披露するまでもなく弟は理論の上でのボルシェビスト、わるくいえばカフェ・レボリューショニスト、と皮肉な口吻で形容しながら、いかにもたのしげな兄と弟は大声で革命歌をうたいながらあるいていく。「Ana と Bol とが景色に、景色に酔い、議論に疲れ横浜へ着いたのは午後三時」⁶⁰⁷。現在の鎌倉—横浜間は、県道 21 号線をたどれば徒歩で約 4 時間であるが、当時の山間をぬけるルートをとると、ふたりは 7 時間半かけ踏破している。実家にもどれば、鉄砲をかつぎ山間を渉猟し、東京では乗り物を一切使用せず毎日市中をあるきまわっていた難波は、地理的な勘も発達しており、その程度の道のりは苦もないものであったと想像される。

彼は、3 歳年少の弟・健亮ときょうだい中でいちばん仲がよかった。のちに京都大学へ進学する弟は、退学した兄を案じ、学校へもどることをすすめている。牛島秀彦は、1970 年代、黒川健亮に直面での取材を申しこんだ。黒川は、直接会うことには応じなかったものの、電話では凜として語ったという。事件に関することは、兄ふたりもなにもしゃべっていないので、話をする心境にはない。ただ自分としては、50 年後のいまも当時とまったくおなじ感情で生活しているし、責任も感じている。そして、河上肇の書いたものが「い

⁶⁰⁴ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (三)』専修大学出版局 (2006) p.153

⁶⁰⁵ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (三)』専修大学出版局 (2006) pp.156-157

⁶⁰⁶ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (三)』専修大学出版局 (2006) p.160

⁶⁰⁷ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (三)』専修大学出版局 (2006) p.160

ちばん真相に近い」ので、参考にしてほしいと希望したのだった⁶⁰⁸

河上は、随筆「断片」で、事件当時を回想している。震災後まもなく、交通機関が正常に機能しておらず、罹災者が金の無心をしてきたり物情騒然としているころ、ひとりの青年が河上宅を訪れ「自分は山口縣熊毛郡岩田村の難波といふ者だが、東京からの歸國の途中、旅費がなくなつて困つてゐるから、一時取り替へてくれぬか」と告げた。取次ぎに出た妻は、気づかなかつたのだが、岩田村は弟が養子にいつている村で、その親戚が難波家だったのである。

この難波大助といふ青年は、——後年の共産黨員が、一たび検挙されると、有名な巨頭から無名の末輩に至るまで相次いで轉向の誓約を敢てしたのとは反對に、——最後までその自信を曲げず、徹頭徹尾、毅然たる態度を持した、世にも珍しい、しつかりした男であつた。⁶⁰⁹

事件後の家族には、社会的に有形無形の制裁が加えられ、天皇制原理主義の機能した戦前のみならず象徴天皇制に移行した戦後になつても、彼らはひっそりと暮らしていくことを余儀なくされた。しかし、当時とまったくおなじ感情で生活していると語つた弟は、兄と革命歌をうたつた50年まえの春の1日をわすれはしなかつただろう。

父や年のはなれた兄たちよりも、先進的思想に影響を受けた自身と同世代もしくは年少の世代に、難波は親近感をいだいたようである。歌川も、難波より3歳年少であつたが、最初無思想にちかかつた彼が思想に関心をいさくようになつても、彼は決して同調を強くなかつた。弟とそうしたように議論は忌憚なくたたかわせながら、己とおなじく行動に出ずとも「歌川はそれでよいのだ」といい、しゃべりすぎたあとには「君のしづかな時間をじゃましてすまない」とわびた。一方で、意気込んで労働者街に入りながら、仕事にありつけない状態で、実家では経験したことのないような「恐ろしい緊張感」をおぼえつつも、歌川とは精神的につながっていたいようすが文面からは看取される。

俺は俺の書くことが、自然の美と人間の純真の愛とに包まれた平和な別天地に静かに暮しておる君の平静なる心を乱しはしないだろうかを恐る。俺の書くことは君に取っては余りに醜くうつるかも知れぬ。(略)

歌川克己宛書簡（1923年3月6日）

⁶⁰⁸ 牛島秀彦『昭和天皇と日本人』三一書房（1989）p.116

難波家は作之進が廢家届を出し、1926年に「黒川」姓となつた。

⁶⁰⁹ 河上肇「断片」『思ひ出』月曜書房（1947）pp.219-223

河上は難波が法廷でコミンテルン万歳といったとつたえられていることに対し、コミンテルンは早くか

ら個人に対するテロを排斥しているのに当時日本には政策もじゅうぶんに知らされていなかったため、難波がもっと後の時期に出ていたら別種の行動をとっていたにちがいない、と分析している。

日) 610

中原静子は、1980年代に歌川本人に会っており「彼（難波）の事で事件後、被害を受けた事はなかった」という貴重な発言を記録している。⁶¹¹

また、阿部葆一は「はじめに大秘事ありき」で、虎の門事件から3週間後の1924年1月15日、山口市に生まれた自身の幼少時の経験をつづっている。小学1年生のとき、クラス担任の教師が、配付した用紙に「みんなが日本で一番偉いと思うお方のお名前をお一人書きなさい」と命じた。片仮名をやっと習得したところで、阿部は「テンノウヘイカ」と書いて提出した。答案のなかには、乃木大将、東郷元帥、総理大臣のほか白紙も多少あったのだが、それから教師の1時間にわたる話が始まった。大臣も元帥も勉強すればなれるが、陛下は、神様の御子孫でみんながおがむ神社の神様より偉いお方であり、大変お情けぶかく、いつもみんなのしあわせばかりおかんがえになっているという内容であった。

帰宅後、阿部は2歳年長の友人宅へあそびにいき、今日はばかな連中が天皇と書かないため、ながい説教を食ったと報告した。すると彼は怒りだし「天皇がどうして偉いんだ。難波大助の方が偉いんだぞ。いいや、誰が偉い、誰が偉くないという考えが間違いなんだ」と顔をあかくして語ったという。阿部がおどろいて、難波についてたずねると「今の天皇を虎ノ門という所で殺そうとした大変勇気のある立派な人だ。惜しいことに失敗して大逆罪ということで殺されたんだ」といい、難波家は彼の生家ちかくにあること、天皇も、われわれとすこしもかわらぬ人間であること等を教えてくれたという。⁶¹²

「兄」は、独立不羈で、死にいたるまで純度のたかい理想を追求し、後進の「弟」たちは、理想は理想としてころにとどめながらも、現実の世界で別な途をたどった。しかし彼らの心中には、鮮烈な「兄」の行動が、止まない問いのごとくきざまれていたことがうかがえるのである。

(4) 白色テロルとコンフォーミティ

1923年9月1日に起こった関東大震災は、物質的な被害そのものにとどまらない、性急な近代化のかけにかくれていた日本の暗部を露呈させた。「虎の門事件」は、それから3か月後に引き起こされることとなる。震災そのものが難波をして決行に駆ったとはいえないまでも、それが彼をして、体制に異議を申したてるおおきな契機となったことは事実であった。

⁶¹⁰ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）pp.122-123

⁶¹¹ 中原静子『難波大助・虎ノ門事件——愛を求めたテロリスト——』影書房（2002）p.330

⁶¹² 阿部葆一「天皇制と山口県人（その二）はじめに大逆ありき——「虎の門事件研究ノート」（一）——」『自衛官合祀拒否訴訟にゆうす 通巻9号』自衛官合祀拒否訴訟中谷康子さんを支える山口の会（1983）

震災が起きて数時間後の夕方、人心の不安をさらにかきたてる「流言」が、飛び火のごとくひろまっていく。朝鮮人や社会主義者が時節に乗じて破壊行動をおこなう、という内容に呼応して、在郷軍人と青年団による自警団が結成され、各所に設けられた検問所ですこしでも怪しいとみなされた者は、呼びとめられ「訊問」をうけた。平時に深層心理としてよこたわっていた意識は、有事に強力な「他者」の排除となって噴出する。震災直後に判明しているだけでも、約 6600 名の朝鮮人と 500 名の中国人、外国人とまちがえられた数名の日本人が虐殺された。また 9 月 3 日、亀戸警察署では平沢計七らの労働者 10 名が刺殺され、9 月 16 日には社会主義者の大杉栄が、自宅近くからパートナーの伊藤野枝、甥の橘宗一とともに麹町憲兵司令部に連行され、扼殺されている。

第一次世界大戦後、世界平和会議を契機に「民族自決主義」が提唱され、欧州では少数民族がたてつづけに独立宣言をおこなう。その過程で、朝鮮半島では 3.1 運動が起こり、ロシアでは革命が達成され、史上初の社会主義国家が誕生する。日本国内でも、民本主義が台頭、反戦思想が拡大し、米騒動にあらわれる民心の離反やストライキの頻発、アナキストの直接行動は政府を悩ませていた。なにより天皇が病気で、公的空間に姿をあらわさなくなってから「中心」のパワーは低下しており、不意の震災に乗じ、仮想敵をつくり軍隊が存在その感をしめすのにはまたとない好機であったといえる。

震災から 3 か月後、事件の 24 日まえの 1923 年 12 月 3 日、難波は歌川に宛ててながい手紙を書く。

震災に依り俺れの決意が本当であることを痛感せずにはおられぬ。

×社会主義者、無政府主義者、プロ作家——これ等の「勇者」達が震災以後権力階級の暴虐と反動青年の無智な暴力の前に如何に無力にして惨めなりしことよ！ それは組合労働者の無力なりしとは御話しによらぬ無力さであった。日頃革命を叫び暴力を主張するこれらの大將連が官憲の保護を自ら願ひ出でたり「本城」から雲を霞と迷亡したり——それは正に地震喜劇の真中に加へられ得べき価値ある滑稽なる悲惨事であると云はねばならぬ。(中略)

彼等はつまづいたのだ。

何等の確たる言葉も主張もない。烏合の衆に過ぎぬ自警青年にすら彼等は最大限度に見くびられ軽蔑せられたのだ。暴力を主張する大將連があいにく暴力の持ち合せがない。反動団体の奴共は定めし「化物の正体見たり社会……主義者」と呵々大笑し醜い一時現象の Reactionism の前にとり酔しておることであらう。(中略)

一人でもよい二人でもよい。死を覚悟してその主義のために盡す人間があつたらこれは主義を「商賣」として主義を弄ぶ数万人数千人の々々主義者の有象無象にまさること万々。⁶¹³

⁶¹³ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (三)』専修大学出版局 (2006) pp.278-284

志士の「後衛」として出発した難波は、このとき反動の暴威に一撃を加えるべき「前衛の最前衛」としての己をつよく意識するようになる。

彼により「権力階級の暴虐と反動青年の無智な暴力」と形容された官民一体のテロルを糾弾しえたのはむしろ少数者であり、多数はそれを傍観するか、積極的に肯定する側についていたのだ。たとえば、当時、東洋大学の学生であった勝承夫が『新興』の創刊号に寄稿した「新興時代の中堅たる青年学生」には、かかる心情がうかがえる。

智識——豊富なる智識——とは、人間を非行動的にする杖であると云つたならば、それを獨斷であると罵る人が多いかもしれない。多くの場合に於て非常識であることがその人々を行動的にしてゐる。例へば今度の甘粕事件の如きを見ても、甘粕が正義の観念の前に、常識を失なつたためにかくの如き極端な行動も敢てせられたのである。甘粕大尉の強い主観が、自らもはや思想以上となつた。そこにあの惨虐が行はれたのである。客観すればこそ彼は笑ふべき國士ではあるが、正義と信じる所に殆んど非常識に盲進した甘粕は、最も徹底したしかも行動的な國家主義者として愛すべき一人物と私は思ふ。⁶¹⁴

ことばによる陥穽を忌避しながら、手紙を書きつらねる己の行為を「紙上遊戯」と自嘲した難波と、知識に懐疑をいだいてみせる勝は、逆の方をむいているようであり「行動」に価値を置いている点では一致している。しかし勝は、そう主張しながらも、一方で自身の行動に自信がなく態度には揺れがうかがえる。

私は今青年の避けがたい猛烈な智識欲と、その智識がもたらした智識回避の欲望との間に嵐のやうな苦悶を感じてゐる。そして私は教養なきモツブへの復歸が望ましい最大のものである。(教養は人間を批評的にするが、モツブは非批評的である)そして自分のこの苦悶は近代の青年學生が一樣にもつ悲しい炎ではあるまいか。

新興時代とは、もはや常識の時代ではない。正義の時代であり、行動の時代でなくてはならない。この時に當つて中堅たるものは何であるか。教養ある人格者か、それとも机上の空論に思索の花を咲かす思想家か、しかしそれよりも尚吾々の恐るべき者は正義のために徹底しようとする勇壮なしかも悲痛な犠牲者の群である。けれども彼等は幸福である。彼らは眞實に行動に徹する喜びをもつ人々であるから。⁶¹⁵

東京・四谷出身の勝は、毎日焼跡を通過して家に帰るが、「学業や野球やカフェーでの雑談に疲れた心をもつて一人夕暮の電車のなかに長い黙思をつづけ」、「やがて來たるべき新興の時代に於て、吾々は果して潔く行動してゆく勇氣があるであらうか」とみずから問う。

⁶¹⁴ 勝承夫「新興時代の中堅たる青年學生」『新興』第1号 新興社(1924) p.54

⁶¹⁵ 勝承夫「新興時代の中堅たる青年學生」『新興』第1号 新興社(1924) p.60

詳細はあかさされていないが、勝はなんらかの理由で学長に暴行をはたらき、入獄することとなった。手錠編笠の「傷ましい姿」になっても、当初は信念に徹したことをよろこんでいたのに、時間の経過とともに後悔におそわれ、知識にとらわれない存在を賛美することで間接的に自己弁護におよんだのである。そして、甘粕のような軍人にとどまらない「教養のないモップ」とみさげた「自警団員」の態度が、彼には羨望されることとなる。「彼らはそれを永遠に恥じはしないであらう」。「彼らは彼等の信念に潔く生きた自分をいつまでも愉快地思ふだらう」。⁶¹⁶

勝の文章は、明快な難波の文章ときわめて対照的であり、核心を迂回しつつ、そのあげく隘路にまよいこんでいる。難波は、富川町で寝食をともにした労働者たちを決してみくたすことはなく、権力階級と反動青年の側を糾弾した。彼にとっては、教育を受けた人間、より富める人間には、ノーブレス・オブリージュがあり、すすんで責任を負うことが当然と考えられたのである。

教養主義にもマルクス主義にも完全にはなじめない、しかし当時比較的高い教育を受けた勝のような青年は、少数者ではなかった。ふいの天災とそれにより引き起こされた他者排除の壮絶な白色テロル、復興を合言葉にしたコンフォーミティは、彼のような青年を多数取りこんで求心的な磁場をつよめていく。勝の文章は、以下のようにむすばれている。

今日の苦悶を逃れて私はもう一度勇敢な自警団員の心に歸りたい。信念のために飽くまで強く進める彼らの一員となりたい。むしろ新興の時代は、正義に徹する勇敢な人々こそ中堅のものではなからうか。⁶¹⁷

震災後兄のもとに身を寄せていた難波は、一時的に実家に戻るが、すぐにでも東京へ出ることを画策していた。家人のてまえ、狩猟などしてのんきそうにふるまっていたが「逃避三昧はがらにない」と自覚している。

ピストル・サーベルにかこまれた懐かしの東京よ。日本刀・トビロ・槍——反動主義を守る「道具」共の意気天をつく。今は一時を永久と信ずる「道具」共をして凱歌を挙げしめよ。今に・今に。友よ。

(1923年11月21日歌川宛書

簡)⁶¹⁸

第3節 「女」から人間へ

そうして女と云うものに対しては実に軽蔑すべき人間であると許り考へて居った思

⁶¹⁶ 勝承夫「新興時代の中堅たる青年學生」『新興』第1号 新興社（1924）p.62

⁶¹⁷ 勝承夫「新興時代の中堅たる青年學生」『新興』第1号 新興社（1924）p.67

⁶¹⁸ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）pp.249-250

想が少し変わり且人間と云ふものは愈々徹底したら什んな事でも出来ると云ふ事を感じました。其徹底と云ふ事が淫売窟へ入ってから非常に心を動かされたのであります。

第三回訊問調書 619

(1) 「淫売婦」とはだれか

当時一般にもちいられていた「淫売婦」という呼称には、買う側の男性がいる——「淫買」の需要がある——からこの職業が存在するのではなく、売る側の女性のほうが全面的に墮落しているのだという「醜業婦」観が反映されている。江戸時代よりも、売春を国家が管理しつつ一方で「純潔」を対極に位置づけた近代にあって、囲いこまれた「性」は、女性たちを一層つよく縛りつけた。

江戸時代、幕府の集娼制度により全国 25 か所に存在した遊郭の数は、明治時代に入り 350 か所あまりに増加する。就業者の数の推移は、1884 年から 1924 年へかけて芸妓が 8651 人から 75365 人、娼妓が 28432 人から 52256 人、酌婦が（前回該当なし）48292 人。紹介機関の数は、1917 年が 191 だったのに対し、1925 年には 242 であり、震災があった 1923 年に一時的に減ったものの、翌年からは一気に増加している。

虎ノ門事件の翌年（1924）におこなわれた調査によると、娼妓の教育程度は、無学 818 人、尋常 1、2 年・931 人、同 3、4 年・1234 人、同 5、6 年・1962 人、高小 1、2 年・176 人、高女 1、2 年・18 人、同 3、4 年 13 人、同卒業 0 人。私娼の教育程度は、尋常 1、2 年・22 人、同 3、4 年・52 人、同 5 年 21 人、同卒業・95 人、高等小学中途・5 人、同卒業・9 人、高女並に実業中途 7 人、同卒業 3 人となっている。家庭環境に関して、実父母がある者は、娼妓が約 50% であり、私娼が 40% である。この仕事に就いた原因は、娼妓が「貧困なる家計補助のため」42.39% 「前借金整理並に家計補助のため」54.43% 「自己生計困難のため」3.18%、私娼が「貧困なる家計補助のため」42% 「父母兄弟医療のため」18% 「家庭借金整理のため」8% 「夫の病気医療のため」0.80% 「子女教育のため」3.20%、 「自己生活のため」18.80% 「家出誘拐のため」5.60% 「家庭不和のため」3.20%、その他となっている。⁶²⁰

近代日本の公娼制度は、芸娼妓稼業・貸座敷・芸娼妓酌婦斡旋業に対し、鑑札をあたえて「国家公認」をおこなった。1872 年の「芸娼妓解放令」は、いったんは彼女たちを解放したが、「自由意志」にもとづく稼業に座敷を提供するという「たてまえ」で同営業は存続される。1902 年の大審院法廷では、娼妓稼業は公認されており、この稼業を通じて債務を返済することは「公の秩序もしくは善良なる風俗に反する所なし」との判決がくだった。かかる判例は、返済困難な前借金による娼妓の人身拘束を継続させる原因となり、事実上の人身売買が「公然とおこなわれつづける」ことをうながしていく。裁判所とりわけ

⁶¹⁹ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（一）』専修大学出版局（2004）pp.176-177

⁶²⁰ 谷川健一編『近代民衆の記録 8 娼婦』新人物往来社（1971）pp.409-412

大審院は、約款の目的が、書かれていることを正直に目的としているのではなく、背後にかくれた違法の目的（女性の人身拘束をながびかせて就労させる）にあることを知りながら、「人身売買」に一定の法的保護を付与した。

前借金違法の判決がくだされたのは、戦争終結から 10 年を経た 1955 年のことである。「国家公認され、保護されていたのは、芸娼妓の人権や待遇ではなく、抱え主が芸娼妓の女性たちを人身売買する権利だった」のであり、「民主主義」が謳われた戦後にあっても、女性の人身売買が否定されなかった歴史的事実には、考察がかさねられねばならない。

（2） ことばの宰領へのあらがい——囚われの女性と「青年」の *solidarity*——

虎ノ門事件を担当した弁護士の今村力三郎は、戦後の 1950 年、『文芸春秋』に難波大助事件 虎ノ門大逆事件の真相」を書いている。そのなかに「淫賣婦とテロリスト」と題した項がある。難波が、娼家におもむいたのは、平生まじめそのものと考えていた友人がそこに足をはこんだと聞いたことがきっかけであった。当の友人とどのような話が交わされたのかは不明だが、場所だけおしえてもらおうと、彼はひとりでその場所をおとずれた。上述した第三回訊問調書における難波の言は、裁判の過程での部分的な聞き取りであるため、真意のつたわりづらい点がある。しかし、この経験が決定的になり、難波が学生をやめ、労働者の世界に入っていった事実が特筆される。

今村は、「如何に大助といふ人間が理知に乏しく、貧しい感情の持主であつたかよく分る話である」と述べている。つまり、彼女たちはすきこのんでその仕事をしているわけではないし、淫賣婦などにならおうという難波を愚か者であるときめつけているのである。今村が、「淫賣婦」と「テロリスト」を一对のものとしてあつかっていることには、戦前からかわらない固定観念が看取される。

だが、ここには、語りえぬものがひそんでいる。難波は、さきの言につづけ「ソレハ人間一般カラ見レハ淫賣婦ハ墮落ノ骨頂ト見ラレテ居リマス——」とも述べている。婉曲な表現ながら、彼は、淫売婦はかならずしも墮落した存在ではない、と彼女らを擁護しているのである。淫売婦という形容で彼女らが名指されるとき、「個」としての人間は存在せず、淫売婦は淫売婦でしかありえない。疑似的な神性のつよく支配する日本近代の空間にあり、彼は誤解のおそれを冒し、ことばの宰領にあらがおうとする。今村は、それをわろく解釈し、彼に非を被せたのだが、難波の真意は別なところにあった。

難波が、歌川に「俺は人間だ。無産者の大群が食ふや食はずに生活をして *bourgeoisie*. *i.e. working class* と死を賭して戦ふ時、遊んで食へる下宿住ひをして勉強といふ革命と直接縁のないことをし、六年ぶらぶらすれば、無産者と明瞭に区別される肩書きがつき、そしてプチ・ブルジョアの生活が待っている」と書いたとき、脳裏には、彼女らの姿がきざまれていたのではないだろうか。ささきが、ダンサーのなかに労働者をみいだしたよう

に、難波も過酷な状況ではたらく娼婦たちを、墮落者ではなく労働者——被搾取にあえぐ——とみなしたのだ。その後、難波が娼家に入り浸ったようすはなく、友人は、彼が異性に対して相当につつしみがあつたことを証言している。⁶²¹

ことばをまともに交わすまえから、難波が女性を「軽蔑すべきもの」ときめつけていたのは、武士文化のうちに生育したことが理由の一にかんがえられる。たとえば武士の規範を説く『甲陽軍艦』は、「ありのまま」の精神が美德の根源であり、その欠如として「偽り飾る」精神が悪徳の根源であるとみなす。悪例とされる商人は、商売のためにこびへつらい、女性は他人によく思われたいため飾りたてる。それでも商人には、地震がこようと微動だにしない「欲得の意地」があるが、女性は、庇護者にたよって生きるしかない——非自律なので、最悪の存在だとされるのである。

同時代性にかんがみれば、難波が処刑される 1924 年に『売文恥文』を発行する吉行エイスケは、ダダやニヒリズムを自称し「前衛」をよそおいながら、ジェンダー意識に関してはその後進性をあらわにしていた。対照的に、金子文子の死亡時に追悼をおこなおうとして検束されることとなる『自然児連盟』の椋本運雄は、アナキストと呼ばれた男性たちのなかでは「両性」の権利について主張している態度が稀有であり、難波との精神的な共振が注視される。

二つの大きな差別が、強大なる力を持つて、吾々人間の世界を支配してゐる。両性と貧富との二つがそれである。両性の差別！ そこには女性に対して男性の暴力的家長権が、厳然と規律されてゐる。貧富の差別！ そこには、貧者に對して富者の強権が、これも亦暴力の獸面に、美男クリームを塗りたてて、恐ろしく光る組織と統一の目を布いてゐる。

けれど、それは二つながら、人間の手によつて、造られたものである。云ふなかれ、自縄自縛と。

自然児が要求する自由と平等は、常に同一の世界に呼吸してゐる。平等を伴はない自由はない。自由を伴はない平等がないやうに！

自由を放縦に考へ、生命を欲張の如く考へたり、考へ様としたりすることは、餘りにも愛らしい誤謬である。

友愛は吾々自然児の生命である。限りなき大自然を前にして、友愛を視ない奴は、人間のニセ物である。⁶²²

近代の「青年」にさきだち、志士の最前衛であつた吉田松陰は、1854 年、野山獄に収監されたとき、同時期に幽囚されていた唯一の女性・高須久子に出会い、俳句や和歌を交換しことばを交わす。高須が捕らえられたのは、藩士の夫を亡くした身でありながら、被差

⁶²¹ 今村力三郎「難波大助事件 虎の門事件の真相」『文芸春秋』第 28 卷第 4 号 文芸春秋社（1950）p.55

⁶²² 椋本運雄「有無空」『自然児』自然児連盟（1925）p.10

別民の男性と交際したことが理由であった。彼女の罪状を知った吉田は、最初は抵抗をおぼえたかもしれないが、やがて彼自身の純粹さと通じる偏見のない一途さにひかれていったと想像される。それ以前に、恋愛の経験をもたなかったらしい吉田は、彼女に愛情をいだくとともに、対等な人間として相手を尊重したようすが記録からは読みとれる。その経験を経た出獄後の1857年、彼は被差別民である宮番の女性・登波の20年にわたる苦心のすえの仇討『討賊始末』を著すこととなる。⁶²³

今日のようにジェンダーという概念も存在しない時代に、男性優位の士族の家に生育した吉田や難波が、女性を平等な人間としてまなざすことが可能であった事実は特筆されねばならない。戦後になっても「淫売婦」という呼称がもちいられていたことにかんがみれば、それは当時において真にあたらしく、未来を志向した行為ではないか。彼らは、他者の排除をなすことで成り立つホモソーシャルな紐帯につらなるのをいさぎよしとせず、囚われの女性と「青年」の *solidarity* を体現したのだといえる。

(3) 自由廃業の日——読書する遊郭の女性——

娼業に就いた女性は、当人の意思を無視され「淫売」としてまなざされる存在であったが、虎の門事件と同時期に、主体みずから語った記録として「光明にめぐむ日」は貴重な資料である。森光子は、生家の困窮から父亡きあとの1924年、母によって斡旋屋に売られ、浅草で「春駒」という名の娼妓になる。おとなたちにだまされていたと知り、いったんは死を考えながらも、彼女は日記を「神」と名づけつづりはじめる。

ある日彼女のもとに、「変わった」学生の客が訪れた。彼は敷いてある布団をさっさとかたづけてしまうと、彼女の身の上話を聞かせてほしいとたのむ。学生はクリスチャンであり、彼女をいたわりながら「家のためにここに入ってしまったのは理解できるが人間の尊さを忘れないように」というと、もう絶対にこのような所へはこないと言って帰っていく。無邪気に好感をいただいた彼女は「随分面白い人だ。けれど、客の中でもあんな人はほかにない」と思う。かかる行為を偽善的ではないかと非難することは簡単だが、このようなかたちで当時娼家をおとずれる学生がいたことは「学業か革命か」の命題と無関係ではないだろう。

難波の処刑から2年後にあたる1926年、森は娼家を脱走して、自由廃業にいたる。日記の最後にあたる「脱出記」に彼女は記す。「自分を虐げた、あらゆるものに対する復讐の首途(かどで)の日」。しかし失敗した場合は、手ひどい折檻にさらされることも知っていた。

「失敗なんかするものか、死んでも出て見せる。彼等に対する常平素の憎しみの感情を強いて呼び起こして自分の元気を付けた。(失敗したときは)死ねばいゝのだ。死の勝利!」「もう二度と楼(みせ)へは生きて帰らない、と、かう決心して此処まで来たのではないか。死ぬまで! 死ぬまで! さう思ふと神は自分を励ましてくれるやう」目白で電車を降りた彼女は、以前手紙を出してあった柳原白蓮(宮崎燐子)の自宅に駆けこむ。そこには「あれ

⁶²³ 布引敏雄「高須久子と吉田松陰」『地方史研究』地方史研究協議会(1977) pp.58-63

程御苦勞なさつた方だから、御同情してくださるかもしれない」という希望があった。⁶²⁴

時代の転換点で明暗をわけた「公武」の血を引く柳原の父親は柳原前光伯爵、母親は没落した士族の家の娘で柳橋芸者の奥津りょうである。前光の妹である叔母の柳原愛子は、大正天皇の生母であった。彼女は、養家に出され婚約者から暴力を受けながら、15歳で強制的に結婚をさせられ翌年出産するが、4年後には離婚を経験する。2度目の結婚相手は、九州の炭鉱王と呼ばれた24歳年上の伊藤伝右衛門であった。しかし、価値観の極度なへだたりから、いわゆる「白蓮事件」が起きる。富豪の妻として暮らしていた柳原は、夫に公開絶縁状を送り、帝大生であった7歳年下の宮崎龍介と出奔する。⁶²⁵

宮崎の父親は、孫文への支援で知られる宮崎滔天である。彼は、「民本主義」を唱えた吉野作造を中心とする「新人会」のメンバーで、雑誌『解放』の編集者でもあった。柳原家は、世間体のため彼女を幽閉するが、出口王仁三郎⁶²⁶により京都の尼寺にかくまわれた柳原は男児を出産する。結婚後、彼女は病弱な夫に代わり、講演や文筆活動で一家をささえることとなる。その後ふたりは、娼家を脱走してきた女性や社会主義者たちを、家にかくまった。

天皇を頂点とするヒエラルキーの最下層からも娼婦を除外することによって成り立つ「帝国」にあって、森のような女性たちが柳原に救われたのは、しかしその厚意だけでなく、彼女の「血」ゆえもある。すなわち、そこに危害を加えることはなんびとにとっても容易ではない、という事情が背後には存在した。かかる二重の意味——排除と威光の作用——で、天皇は、禁忌の源泉となっていたのである。柳原は歌人として活動しており、出自をうかがわせるみやびやかな歌も詠んだが、一方で自己の「血」や性をもそのうちにみすえている。

王政はふたゝひかへり十八の
もみちする頃われは生れし

女とはいとしかられて憎まれて
ねたまれてこそかひはあるらし

邪執の子われにみとかめあらはあれ
神より人をうやまひおそる ⁶²⁷

金子が生涯読書を習慣としていたにもかかわらず、戦後にいたってもその意義が直視されなかったように、ジェンダーや学知に関連したバイアスにより、女工、職業婦人、女学生といったわずかでも教育を受けた者のみが読書をするとの固定観念はながくかわらなかつ

⁶²⁴ 森光子「光明に芽ぐむ日」谷川健一編『近代民衆の記録 8 娼婦』新人物往来社（1971）pp.239-345

⁶²⁵ ふたりの出会いは『解放』に白蓮の書いた戯曲「指鬢外道」が掲載されたことがきっかけだった。

⁶²⁶ 出口なおとともに新宗教・大本教の教祖

⁶²⁷ 伊藤白蓮『白蓮自選歌集』大鏡閣（1921）p.102 p.110 p.150

たが、近年かかる態度へのみなおしから、近代読書に関するより広範な研究がおこなわれるようになった。なかでも、遊郭における調査では、「新聞・雑誌・教養誌を読む娼妓たち」の報告がなされている。⁶²⁸森も、金子が愛読したのとおなじ石川啄木などの文学書に幼少時からしたしんでおり、日記、手紙をよく書いた。そのことが結果的に、獄のような囲いの外側とつながるチャンスを彼女にもたらしたのである。

第4節 「大逆」の内実

(1) 社会と狂気

近代における国民国家創出の過程において、国家がとりわけ関心をはらったのは、国民の「質」であった。たとえば、日本の内務省衛生局の官僚たちは、近代化にともない生活が複雑化することによる精神疾患の増加を案じている。かかる懸念のもと、当事者たちは、治療の対象である「病人」とはことなる「国民の質を低下させる」者というイメージを付されていく。

1900年に発令された「精神病者監護法」は、私宅監置の手続きをさだめていたが、入院の際にも、監護義務者は行政庁に許可を得ることになっていた。私宅監置にしばしばもちいられた座敷牢は、牢獄さながらの構造であり、精神病者の危険という通念に依拠しつつ権力から貸与された制度を「自発的におこなう」という名目によりその利用は推進された。精神病者のステレオタイプ化されたイメージは、やがて実像を離れ、単なる被差別者にとどまらない「他者」の徴を刻印されていく。

1901年、ドイツ留学から帰国し、東京府巢鴨病院院長に就任した呉秀三は、「暗黒界」と称された精神病院の改革に着手する。呉は、拘束具の廃止を実行し「精神病者のなかには監置の必要がない者がある」と発表するが、その翌年には、東京府から患者の逃亡に関する警告文書が出されることとなる。当時、この法律のもとで精神病者の処遇を取り仕切ったのは「警察行政」であった。

事件発生後の1924年2月、呉は、難波の精神鑑定にあたることとなる。岡田靖雄は「体制側は難波が精神病者であると宣伝し、そう期待した。だが、先生は難波が精神病者であることははっきり否定した。(中略)体制側の期待にそわなかったことは先生の晩年にある影を投げかけているようである。世間に騒がれた事件で犯人の病状が微妙なとき、診断などをまげた精神鑑定がおこなわれることを、わたしは見聞してきた」と証言している。⁶²⁹

事件発生時に、警視総監であり懲戒免職処分を受けた湯浅倉平と同郷の医師・福士政

⁶²⁸ 山家悠平「ものを読む娼妓たち——森光子と松村喬子の作品に描かれる『読書』を中心に——」『女性学年報』第38号 日本女性学研究会(2017) pp.80-105

⁶²⁹ 岡田靖雄「呉秀三先生に学ぶもの」第87回日本医史学会総会抄録(1986) p.5

一⁶³⁰は、湯浅が「難波の遺体を押さえて官憲の手によってこれを解剖し、その所見に基づいて難波を精神病患者として葬り去ろうとする計画に同意をあたえた」ことを述懐している。⁶³¹今村力三郎は、湯浅が恩命により要職に復することを「不臣の罪において択ぶ所なし」とはげしく批判する一方で、難波を「殆んど精神異常者に近きもの」と形容している。専門家による精神鑑定の結果が出ているにもかかわらず、対立する両者が、難波を「精神病」であるときめつけようとしている点で一致している事実が注視される。

難波大助の父・作之進は、過去における息子の異様な行動を、積極的に「証言」した。中学生のとき「狂言」を起こしたこと等が針小棒大に語られ、「うたがわしい」ふるまいはすべて俎上にのせられる。実際には、母が急死したことで心がやすまる場所をなくした少年は追いつめられ、狂人のまねをすれば一時的にでも父から解放されると思ったのだった。

しかし一連の反応は、あらかじめ難波が予測していた通りのものであった。彼は、自身が精神病患者であることをうたがわれたりその行動が政治利用されたりすることを避けるべく、決行直前に声明文を新聞社と社会主義者たちに送付していたのである。決行の9か月まえ、その時点で具体的な計画があったか否かはさだかでないが、歌川に宛て彼は書いていた。「正気のある人間を精神病患者とすることに依つて、主権者の絶対神聖を一般民衆に示さんとするずるい苦策——それは過去に於て権力共が屢々用いし所のものであつた。将来も又……」

難波の眼に映っていたのは、「狂気」を囲いこんで、その刻印を押そうとあわてふためく四方の「父」たちの姿だったのではないか。遺書のなかで、彼は父にいう。「あなたの威光に恐れていた私は曾て狂人の真似をすら敢てした。此度の事件に於て——あなたの結構なる陳述の御蔭に依り——私は再び狂人扱いにされんとした。眞に滑稽千万のことと云はねばならぬ。然し御安心ください——私は曾て狂人でなかつた同様今も尚狂人ではありませぬから」。

(2) 囲繞する「父」

我日本国民は摂政宮殿下を敬愛する。その殿下に対し恐れ多くも大逆の罪を敢てした自暴自棄無頼の狂犬彼難波大助が不埒を怒らぬ者はない。国法を手ぬるしとして私

⁶³⁰ 文身（刺青）の研究者。人体から皮を剥がしなめしたものをコレクションした。

⁶³¹ 林茂『湯浅倉平』三彩社（1969）p.191

刑を加えかねまじい者もいる。国法によって死刑となるを無理とし不当とする者はない。しからば私は何故に彼難波大助の死一等を減ぜらるる事を願うか。

徳富健次郎「難波大助の処分について」⁶³²

「大逆事件」とよばれた事件すべてにもちいられた刑法第73条が、新井の指摘するように「律」の「謀叛」の概念で解釈されたのだとすれば、日本の近代法は「形式」を西欧に倣いつつも、法の実行の内実には、近世の「理」をかわらず引きついでいたこととなる。2度の「大逆事件」の弁護にかかわった今村による『芻言』は、それが露呈する例である。当該書は1925年、すなわち難波処刑の翌年に書かれた「芻言」をふくむ大逆事件に関する文章が収められており、「大助の悔悟——犯行より刑死に至るまでの大助の言動——」の章には、日本近代の迷妄と残酷さが、むしろ筆者の意図をたがえて披瀝されている。

そこでは裁判の裏側に存在したという——一般には知りえない——難波の「悔悟」に焦点がしぼられつつ、いささか唐突に、板垣退助が語ったという「土佐の美談」なるものが登場する。江戸時代の土佐に、父を殺して捕らえられた青年がいた。彼は、生来勤勉であったが、やっと貯めた財産を父親が酒色のために蕩尽してしまう。いくら貯めても同じことがくりかえされるため、「家」自体が立ちいかなくと悲観した彼は、「不倫にも」父を殺めたのであった。法廷で青年は、「我父は父として為すべきことを為さずして父に非ず」と、敢然と抗弁する。当時は罪人が首服しない場合は刑を執行できなかった。そこで監察が「彼が教育なく為に倫常を知らざるを「憫み」獄中で論語を講じる。数十日経つと、青年は涙を流して罪を悔い、従容として刑せられた、というものである。⁶³³

だが、なぜこの時期に、かかる美談が引かれることになったのか。それは、事件後に今村や横田が難波を改悛させようとしたことに、批判——改悛したとしても死刑は免れないものを、改悛すれば死刑をまぬがれるようによそおうのは非があるのではないか等——があがったからである。そこで、弁明として持ちだされたのが、「鎖国」時代の教訓噺であった。私選弁護士の松谷與二郎は、難波が改悛したらいったん死刑を宣告したのちに無期懲役に変更する動きがあったと語る。一方、今村と知己であり、幸徳事件の再審請求を担当した森長は、もともと難波は改悛ののちに処刑される計画であったろうと推測している。⁶³⁴今村による「土佐の美談」の主張を読めば、森長の推測はただしいといわざるをえない。

「芻言」で今村は、明治の幸徳事件から10数年後の大正に同様な事件が起きたのは、第一の大逆事件で強引に審理を進めたせいであり、そのようなやりかたが「火種」を残すのだと主張する。しかし裁判の「進めかた」が強引であるか否かでなく、たとえ合法の体裁をと

⁶³² 徳富健次郎「難波大助の処分について」『謀叛論』岩波書店（1976）pp.41-43

⁶³³ 今村力三郎「芻言」『大逆事件と今村力三郎』専修大学出版局（2012）pp.298-307

⁶³⁴ 森永英三郎「史談裁判第四集 4 難波大助事件——革命のための大逆」『法学セミナー』No.205 日本評論社（1973）pp.112-116 「悔悟させて処刑の計画」の項に詳しい。

ろうとも、近代化を推進しようとする一方で強引に近世の「理」に基を置く姿勢そのものが、日本を破局へと傾斜させていったのだという歴史的事実が看過されてはならない。

難波の死刑処分については、『謀叛論』で幸徳らを擁護するかたちをとった徳富健次郎も、1924年10月、自説を展開している。「幸徳らが大逆の企を私は恐ろしい罪悪と見た。しかし大逆の企を罰するに死刑を以てし、殺を以て殺の企に報ゆるは、要するに報復の繰り返えしを惹起する因と考え、皇室のおんため、日本のため、また逆徒自身のため、死一等を減ぜらるるの必要性を痛感し、時の総理大臣桂太郎侯爵まで窃に意見の一書を提出した。(中略)私は後を恐れた。十三年にして難波大助を出してしもうた。私は二たびこの大逆者のために死一等を減ずぜらるる恩命を願うべき運命に遭遇する」「大正は明治を以て鑑とせねばならぬ。幸徳処分の失敗は事実がこれを証する。大正はいたずらに明治の蹤を踏んではならぬ。」「これは過激思想に媚びるためではない。かくして過激思想に根本的打撃を与えんがためである。悪に克つは善、暴に克つは仁の外にはない」⁶³⁵個として人間存在の尊重ではなく、「狂気」に属する思想犯らの「教化」——国民の「質」の向上のため、難波を寛大にもゆるしてやろうとする態度は、教化後の死刑をもくろんでいた司法側と終局かわらない。生かすも殺すも、みせしめの「処分」をとることで、両者は一致しているのである。

幸徳事件でも弁護を担当した花井卓蔵は、虎の門事件の弁護を依頼されると、難波を「我国民としての心境に立ち帰らしめ、無道の大罪を自ら浄化せしめた上で」なければ引きうけられないといい、最終的には弁護を辞退をする。当時大審院長であったため、「不幸にも」裁判にあたらなければならなかったという横田秀雄は、難波の「情」にうったえようと「我が日本の国民と皇室とが如何に不離の関係において繁栄を続けてきたかを切々として説き聞かせ」た。横田は、難波を「日本人に立ち帰らせたい」という姿勢で、「恵まれぬ境遇に育つた」、「片意地で負け惜みの強い」彼について家族にも話したので、横田家ではその報告により「一喜一憂する」という状態であったという。⁶³⁶彼は、難波に「おまえ」と呼びかけ「慈父」のごときおだやかさで接した、と今村はその態度をたたえる。

しかし、当初「私選弁護士」を申し出てようやく官選で承認された松谷は、その裏に複雑な経緯があったことを明かしている。すでに担当は、官選弁護士の今村、花井、岩田宙蔵と決まっていたが、大助の友人から匿名で依頼があったため、松谷は「この弁護は當然私選でなければならぬ」とかんがえた。「然るに官選弁護人といふものは重罪犯でありながら、被告に弁護士を依頼するの資力が無い時に裁判所から附されるものであつて、此の官選弁護は実際にはお座なりが多いのである」。そこで検事長に打診すると、官選をすすめてきたので、被告の難波に直接意思をたしかめたいと提案したが、予審後何の通告もなしに官選弁護士たち3人が選出されてしまったため、松谷は抗議書を横田に提出する。横田はひどく困惑しにがい顔をしたが、もし松谷が私選弁護士として選出されれば法規上3人の官選弁護

⁶³⁵ 徳富健次郎、『謀叛論』「難波大助の処分について」岩波書店（1976）pp.41-43

⁶³⁶ 横田正俊『父を語る、巖松堂書店（1942）pp.201-206

士を解任せねばならないから、是非「官選」でと懇願され、彼は任を引きうけたのである。⁶³⁷

裁判官、最初の官選弁護士たち、徳富および後述する難波の父の生年は、維新前後に集中している。近代のはじまりに、共通の体験を持った「父」たちの意思決定は、互いに齟齬がなく、有形無形の紐帯は強固だ。禁忌を絶対視し、権力を行使しつつ、体制維持のためには徹底して無慈悲であることをかえりみない。近代の日本が、「血」に依る国民国家を創出しようとしつつ、現実には生物学的な親疎の関係でなくあくまでも「象徴」的な関係が重視されたことは、ここでの「父子」関係にも顕著である。

たとえば今村と幸徳との年齢差は5歳であり、知識人で人望もあつた彼に対して今村は、思想上の相違はあれ、尊重の余地があつた。なにより、幸徳に「直接関与」の事実がないことは、己の発言の自由の「限界」が守られることでもあつた。一方、30歳以上年少の難波は、今村にとってあくまでも「息子」なのであり、目下——「既遂犯そのもの」の——に「虚偽」を指摘されることなどは、一生の恥辱に等しく感じられたのではないか。⁶³⁸それゆえ今村は、戦後の1950年にあつてまで、自身が死をくたすべく努めた「テロリスト」の排撃に執着していたのだろう。そこで「淫売婦」が一对の者とされていることと、買売春が未だ国家公認されていたことには、連関がみとめられる。

花井の発言「無道の大罪を自ら浄化させる」には、汚れたものには触れたくないという日本人の生理的感覚とともに、もう一方には「禁忌」に触れて厄介ごとくにまきこまれたくないという現実的判断が看取される。双方の意義をみたすように、横田らは、難波の教誨に「あらゆる努力を惜しまなかつた」。そのため仏教やキリスト教系、諸宗派の人材があつめられたが、おおがかりな懐柔策を難波は冷静にしりぞけるばかりだった。

たとえば、三井も私事した真宗大谷派の近角常観は「聖徳太子の憲法を土台として説」くが、難波は「謎のようなことをいわれるが、もっとはっきりいって下さい」と相手にしない。ついに脅しをかけるように「お前はいよいよ一週間後に死ぬのだとしたらどう考える」と問うが、返ってきたのは「私はまだ一週間生きられると考える」という答えであり、仏教者は長太息して退散してしまう。前述したように、1870年生まれの近角は、藤村が自死するころ雑誌上で、青年に修養を説いていた。当時、鎌倉時代をみならうようと青年に語りかけた近角の基調は、20年ちかくを経てもかわっておらず、難波がみじかい生涯のうちに、勤皇派から180度の転換をなしたことはきわめて対照的である。

また正統派のキリスト教を離れ、「日本教会」、「道会」を創設した松村介石も、教誨を依頼されたが、難波は、おおがかりな動員に対し短歌で応えてみせた。「介石や泣土鳴土や青嵐の従者を借りて御用を^{つとめ}力三郎」。松村は、「存娼論者」であり、廢娼の実績はわるい結果を生む、公娼制度は社会の安全弁の一である、と語った。⁶³⁹社会的地位も肩書もない難波

⁶³⁷ 松谷與二郎「難波大助大逆事件」『思想犯罪編』世界犯罪叢書第一巻、天人社（1931）

⁶³⁸ 今村は『平易なる皇室論』を差しいれたが、難波は「批評する価値だになかれ“皇室論”役人殿の独りぎめ哉」の歌を返したりした。

⁶³⁹ 油谷治郎七「松村介石先生の存娼論を評す」『廓清』（復刻版）第6巻第5号 竜溪書舎（1980）pp.24-27

や、椋本のような青年たちが、さらに非力な娼婦や女性をかばい、同等な人間としてむかいあおうとしているのに対し、社会的地位や権威を得た「父」世代の人間が、彼女らを切りすてようとしてかえりみないことは、あざやかな対照をなしている。

一方、20世紀初頭、日露戦争に際して「非戦論」を唱えた堺利彦は、難波の死刑の前月、今村への書簡で自身の見解を述べたえている。おそらく、今村から意見をもとめられてのことと推測されるが、かつて自身が「青年」前派的な位置にいたことなどなかったかのように、「僕は共産主義者として、テロリズムの運動方法に反対している」と書くのである。テロリズムそれ自体に反対するというだけではない、難波とかかわることを避けるような一線の引きかたにもみえ、最後は「大逆事件の時と云い、今回と云い、貴兄の御骨折を感謝します」とむすばれる。⁶⁴⁰

虎ノ門事件の公判に、弁護士として立ち会った檜橋渡は、当時21歳で難波より3歳年少であった。農家に生まれ、師範学校を受験するも色盲のため不合格となり、煩悶のすえ炭鉱夫としてはたらいたのち上京し、事件が起きた1923年に独学で弁護士試験に合格した彼の脳裏に、「父」と「息子」の窮極の対決は焼きついた。難波は居ならば裁判官たちに三つの問いを発した、と檜橋は証言する。「あなたがたは天皇を恐れおおい懼れおおいとまるで神様のようにいわれるが、ほんとうに天皇は神様のように懼れおおいのか。もしそのような気持ちが湧けば幸福と思うが、私にはどうしてもその気持にはなれない。本当にそういう気持ちが湧くのかそれを心から尋ねたい」と詰めよるが、答えはかえってこない。彼は首を転じて問う。「然らば天皇は神様ではないが、国家生活を為す上に国の中心象徴として扇のカナメの如く認めその存在を尊敬し一種の有機的機関としているのか？」ふたたび答えはない。「然らば天皇に対しては不敬罪その他恐るべき刑罰を以つてその存在を示している法の威力に屈してその態度をとっているのか？」これにもだれも答えようとしない。陰鬱な沈黙が法廷を蔽ったとき、彼は「われついに勝てり。君らが答え得ないところに自己欺瞞がある。君らは卑怯者だ。われ真実に生きるよろこびをこれで実証したり。われを絞首刑にせよ」と叫び、満場のひとびとをして色をうしなわせしめたのだという。⁶⁴¹

事件後に難波の父・作之進は、衆議院議員を辞任し、家の正門を青竹の十文字でむすび蟄居する。一切の食を拒否して家のそとに出ないまま、息子の死から約半年後の1924年5月に死去した。彼はみずからの命だけでなく「家」をも断絶しようとして、徳山裁判所に「廢家届」を提出したのである。

(3) 子孫崇拜

⁶⁴⁰ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）p.348

⁶⁴¹ 檜橋渡『人間の反逆』芝園書房（1959）pp.41-46 難波のことばづかいが文語調であったり、ややドラマめいているのは、まったくそのままでないにしても当時それほどつよい印象を残すだけのできごとがその場に展開したのだと想像される。

祖先を崇拝せられるあなたは又（神様）というものを拝まれる。毎朝の柏手（かしわで）——時々の御灯明。神という（絶対の権威者）への信仰のききめが果してありましたか？ あなたは（紙（神）様）を毎朝拝まれる代りに一度位人間を拝まれた方がよかつた。

「遺書」 難波大助（1924.2.13）⁶⁴²

歴史の偶然性から生じた「文化」によって、奪われようとするひとつの「生」は、死を目前にしたつかのま「理」のことばをきざんでいく。かかる状況で「父」と「息子」は容易に入れかわる。作之進があたかも非力な息子にかえっていきのと入れ替わるようにして、息子たることから解放される大助は、遺書で彼を「あなたは」と叱咤しながら同時にげますのだ。法廷での慈父の劇はここで糺され、演じなおされることとなる。

一切は判然した。——従順なる羊共は、あなた又は先祖の名誉にすら値しなかつた。あなたに取つては生きてゐる子孫よりも死んでしまつて土と化しておる祖先の方が大切であつた。（中略）

一切は終つた。——そして、息子の一人は死刑の宣告を受けるべく牢獄の中に横つてゐる。又しても息子は先祖の名誉の犠牲であつた。——犠牲に過ぎなかつた。

（あの極悪者をりつばな家の籍に置くのはけがらはしい。先祖のイハイに対して恐れ多い。）——斯くして本家は数万圓以上の財産家であるにも拘らず分家⁶⁴³は純然たる無産家——その戸主の家は監獄の鉄窓内の三畳の室という珍無類の現象が発生して来た。

（略）然し要するに兎に角——私に取つての一切は終つたのだ。終つた人間が今更ら自分のことを云々云つたと追いつく語ではない。未だ終らざる生きた人間が残つておる。

この残つておる生きた人間のために、私は敢て極悪非道者たるの本性を發揮して（りつばな家）の戸主に対して毒づかざるを得ぬのである。（中略）

あなたの今の態は何ですか！

精神に異常を呈する程衰弱しておる。——世間の頑迷輩はこれを聞いて益々感心するであらう。（あの人は良心の鋭い高潔な人だ）と。然し困るのは誰です。迷惑するのは誰です。私は今あなたが昔息子共を大声にて叱咤されし時の様な元氣澆刺たる状態にかえることを要求します。

あなたのせられることは親族等の馬鹿者共の口車に乗つて、祖先の名誉のためとか世間への遠慮とかのために、私という生きた遺骨を戸籍から除くという様な形式的の

⁶⁴² 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）p.331

⁶⁴³ 家制度における自身の立場を皮肉っていつている。

ことではなく——生きた人間をより幸福にさすために努力することです。⁶⁴⁴

天皇と祖先に象徴される過去に縛りつけられ「現在教」にすぎること、未来を描きえない日本人が現前する。これは一「家」の問題ではない。難波は明晰に論を押しすすめ、ついには「子孫崇拜」を主張していく。

管見によれば「子孫崇拜」なる概念は、それまでの日本の歴史に存在しない。前述したようにことばによる陥穽を忌避した彼は、理論のなかに閉じこもることを避けるがゆえに、「実践」を模索しつついわば濫読のかたちで書を渉猟していた。これまでに難波について書かれた文章は、どれもこの語にふれていない。だが、これが日本近代につかのま存在した自律の精神を解くキータームなのではないか？ と考えた筆者は、語の出所をさがした。難波は、中央公論を購読していたが、1923年の1、2月号に小野俊一の「子孫崇拜論」が連載されている。入獄してからも、差入れのなかに当該の雑誌を希望した彼は、この文章を決行の前に読んでいたと推測される。

小野は、ロシア革命の当時現地に滞在して、その進行過程をまのあたりにした希少な日本人である。飛び級を偽り、17歳で東京帝国大学理科大学動物学科に入学した彼は、大学の講義に飽きたらず三年次に大学を中退すると、当時無脊椎動物学では最先端であったドイツのマルブルク大学に進学すべく1914年に日本を発つ。だが、シベリアを経てモスクワに着いた日に、第一次世界大戦が勃発する。銀行家で名を成した父への反発もあり動物学を専攻した彼は、ドイツ留学も猛反対されていたのだが、さらにアメリカへ行けという国元の助言を振りきり、ペトログラード大学の動物学教室に通うことを決意したのである。当時のロシアの学問的水準は、ドイツにひけをとらない高いものであった。ジャポノロジストであるセルゲイ・エリセーエフの紹介で、日本語講座を担当した小野は、アンナ・ブブノワと出会う。そして、1917年ロシア帝国大学における最初のスタッフとして任を得るが、革命によりレーニンが権力を掌握したロシアで、最後の日本人となった小野は、駆け落ちのようにしてブブノワと日本へ向かう。小野の父は、外国人と結婚しないこと、社会主義思想には染まらないことを厳命したが、息子はそのどちらにもそむいたのだった。

「過去と現在は全て、未来の為めの奉仕なり。子は親よりも敬ふ可く門人は師よりも尊かるべし」と唱える小野の真意は、たとえば思想上の親および祖先と時空間を超えた交渉をもった結果、肉体的生命の永存および発展が子孫のなかに祖先よりも優秀なる変異の現れることによってのみ遂げられるごとく、師たる者も己が思想上の子孫すなわち門人のなかにより優秀な者が現出することによってのみ、その精神的生命を永存、発展することができるというものである。⁶⁴⁵ここで動物学者の小野に「進化論」が意識されていることは、指摘するまでもないだろう。

⁶⁴⁴ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）pp.318-325

⁶⁴⁵ 小野俊一「子孫崇拜論」『中央公論』第418号 中央公論社（1923）pp.27-66

小野が滞在した当時のロシアは、のちにロシア・ルネサンスと呼ばれるかつてないほどの思想的豊饒の時代であった。近代日本における主たるロシア思想の受容は、狭義の「文学」と現実的行動をともなう政治の分野、とりわけ労働運動に関するものにほぼ二分されたが、ロシアにおける運動の指導者たちは、ひとつの専門分野でなく、異分野を横断して異彩をはなっていた。そこには上述した二分野ともかかわりあうかたちで、宗教と科学の独自の融合がみとめられる。

たとえば「建神主義」は、初期ボリシェビキにレーニン以上の影響力をふるったアレクサンドル・bogダノフの哲学に共感を寄せたアナトリー・ルナチャルスキーらによる、プロレタリアートの宗教創造のくわだてである。そこでの神は「社会主義的人類」である未来に顕現すべき「あたらしい人間」とされた。彼らは「あらゆる社会意識の底には、神と関係なしに聖なるものへの憧憬によってよこたわる世界観がよこたわっている」と考え、教条主義に陥ろうとするマルクス主義から離反したのである。「子孫崇拜論」のエピローグには、われわれが食するのは一刻でも長く生きようとするためであり、そうであれば単に生を貪るのでなく一歩でも向上や進化を遂げ、より完成した宇宙を眺めたい、そして進化が行き詰ったときには最も「賢明に」死去することをしらなければならないとある。「舊い自己を以て徒らに新しい自己の育つ可き途をいつまでも塞いでゐてはならない」。⁶⁴⁶小野の言は、bogダノフの小説『赤い星』で、技術者のネッティが語ることばと響きあっている。「人間はどうせ晩かれ早かれ死ぬものです——だが、人間の仕事は無限に発展して行く生命のうちにその存在を続けて行きます」。⁶⁴⁷

小野が、より科学的に「子孫崇拜」を唱えたのに対し、難波の「子孫崇拜」は、無神論的な宗教性ともいべき精神を宿しているといえるだろう。それは、日本的な「神」の存在自体をするどく問うことのない「世俗」しかないという意味の無神論でなく、神存在に徹底的にこだわることでついに「神」を否定しようとするロシアの無神論者たちと共鳴する。民族や宗教を超えて、日本近代にもながい伝統をもつ宗教ではない「世直し」をもとめる「新宗教」が民間にひろまっていたことは、世界的な思潮の進行を示す。それらは、国家宗教の体裁をとった天皇制原理主義によりきびしく弾圧されることとなるが、決定的な信仰のかたちをとらずとも、「神」への希望は、多様なフラグメントとして近代の空間にちらばっていた。

虎ノ門事件に関する動機として、幸徳事件の真相や、河上の「断片」を読んだことが行動の直接の引き金として重要である、とこれまででは考えられてきた。しかし、本論は、死刑決定後に生の最終局面で語られた「子孫崇拜」を、難波における精神の到達点としてみとめるものである。そのことばは、彼が放った実弾よりも的確に、神の似姿をした父を頂点とする国家の「虚構」をつらぬいている。

⁶⁴⁶ 小野俊一「子孫崇拜論」『中央公論』第418号、中央公論社（1923）pp.27-66

⁶⁴⁷ アレクサンドル・bogダノフ『赤い星』大宅壮一訳 新潮社（1929）

時代は滔々として進みます。そうして一切の不正と搾取と専横が、漸くあなた方が軽蔑しておる人間共に依り審判されるであります。(中略)

一時的流れ——反動の潮にびくつく前に人間を可愛がっておやりなさい。⁶⁴⁸

終章 20世紀初頭精神の可能性

⁶⁴⁸ 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件 (三)』専修大学出版局 (2006) pp.334-335

本論は、大枠で日本近代の再記述をこころみ、そのなかに非主流の精神的系譜を抽出しようとして企図した。序章で述べたごとく、「不在」の歴史の側に振りわけられた異なるものを、意識的に記述する行為はあたらしく、またそれにより従前とはことなる角度から当該の時空間をとらえかえす態度に価値がみとめられたところからの出発であった。

日本近代の諸事象中、最大の危機である第二次世界大戦への突入は、圧縮された近代化の帰趨ともいえるが、その道程上の限界と可能性にかんがみ、本論は、王政復古から第二次世界大戦開始までの71年間に、日露戦争勃発の年を中間地点として17年ごとの区切りを設定した。それに則れば、近世と隣接する第1期(1868-1885)、第2期(1886-1903)、そして戦争直前の第4期(1922-1939)に、社会の磁場が求心性をつよめた一方で、狭間に位置する20世紀初頭の第3期(1904-1921)には、かかる求心性に対抗する遠心的「個」のはたらきが存し、その発露は若年層に顕著であったことがみとめられる。

国民国家の基盤形成と並行するように、近代教育をさすけられた「青年」——語の由来は「基督教青年会」を嚆矢とする——が姿を現してくるが、あらゆる制度の根幹に置かれた天皇制の確立するころ、「理」の発現を封じ込められた彼らの煩悶はきわまることとなる。日露戦争前年の1903年に起きた16歳の一高生・藤村操の自殺は、それが可視化した事件といえる。前世代の人間たちが、「青年」の煩悶に逸脱の烙印を押そうとしたのに対し、当事者たる「青年」は、そこに至誠の源泉をみいだしていた。従前言及されてこなかったが、キリスト教の世界では男子同様女子にも、早い時期から「青年」意識がすすんでいた。第3期の1906年に起きた岡山の女子高校生・松岡千代(15歳)——キリスト教会に通う——の自殺は、男子のみならず女子においても同時代に「青年」の煩悶が持された事実を示す。

本論は、「青年」の煩悶の根本に、現前する世界の虚構をささえることばへの不信を指摘した。疑似宗教としての天皇制が機能する日本近代の時空間で、超越者の位置すべき場所に生身の人間が坐する現実は、「狂気」の「代償」を要求する。かかる状況で、死に踵を接しながら、「青年」は彼の「神」にまみえようと「理」を模索していく。藤村の友人であった魚住折蘆(影雄)は、キリスト教を信仰しながら藤村の辞を継ぎ、「万有の真相」を徹見するには、あらかじめ宗教を斥け、知識を棄てねばならず、自身が恥じることなくえらびうるものが「狂」、「自殺」、「信仰」であるといいきった。天皇制を「其帝王は人為的神聖を装ふて上より壓迫し」と記した魚住は、ことばに沈潜せず、神を「見ん」とする営為により「青年」存在の沸点に達する。

しかし、近代初の大逆事件である幸徳事件が1910年に起きると、自由思想には弾圧が加えられ、病を得た魚住も同年に27歳で死去する。本論は、かかる曲折を経ていったんは姿をひそめたかにみえた遠心的「個」が、20世紀が開始されるころ、すなわち青年の煩悶がきわまるころ日本に誕生した人間のなかで先鋭化していった、と措定した。いわば「青年」前派たる藤村や魚住が、哲学や信仰に至誠のありかをもとめたのに対し、あたら

しい青年たちは、より一層「ことば」による陥穽を忌避し、自身の「視」をきたえつつ彼ら自身における至誠を模索するのである。

彼らが成人する時期には、加速する都市化や交通整備による可動性、それにともなう多量かつ多様なリファレンス、他者とまじわる機会の増加等が、より動的な身体と複眼的な視点をもたらしていた。また、天皇の代替わりによる「虚構」の求心力の低下、ロシア革命の成功や国際協調路線の影響は、青年をふたたび強度のある理想へと駆る。近代の循環そのもののように、土地に定住せず、帝都のような「中心」をもよぎっていく青年は、都市の観察者としてその「視」を強靱にする。1910年代からは「大東京」の構想が進められていくが、天皇という「中心」の象徴を戴いた場に露呈する皮相のデモクラシーを、彼らは凝視した。そうして、日本近代に諸矛盾をきたさざるをえなかった非「理」を同定せんと、求心的な勢力に対し、遠心的な「個」の力を発揮しながら生の軌跡をえがく。本論は、その一に「アナーキー」と「アマチュア」の共振を措定した。

従前、日本近代に関する研究は、しばしば文化・思想の運動や主義、芸術における派、特定の雑誌につどったグループといったマスをあらかじめ措定して分析をおこなってきた。本論は、それとはことなり「点」としての個人から出発し、各人の生涯を評伝のようにまとめるのではなく、媒介する事象により彼らをふくめた同時代の精神的なミクロコスモスを描出しようところをみる。そこで、不在の歴史を記述すべく、当該の時代に生きたありとある人間のうち、無名の個人が優先的に取りあげられる。

以上をふまえ、本論が各章であつかう安井仲治、ささきふさ、渡辺温、金子文子、難波大助は、一見つながりがないものの、各人は20世紀初頭に青少年期を送り、何らかのかたちで帝都・東京をよぎっている。彼らは、ときに近接した都市空間において、居住したり行動を起こしたりしながら、顔を合わせることは終生なかった。しかし、魚住が「先づ假定を棄てよ、假定は時代と周囲が與ふる妄想なり」と語ったアナーキーな精神、また、超越者不在の時空間にありながら、神への無償の行為のようにみかえりを欲せず、朋党からも自由なアマチュアの精神が、彼らのうえにはみとめられる。

アナーキー、アマチュアのキーワードに合致する同時期の青年は、彼ら以外にも存在するだろう。だが5人を選定したのは、今日からみてもあたらしい「視」の優位が、彼らの行動や創作に反映されていることによる。そこで、彼らの「視」は、疑似宗教としての天皇制がことばを宰領する「理」の容易にはたらきえない近代の時空間にあり、日本近代の「物語」をいかに断とうとしたか、を以下にみていく。

第1節 各章のまとめ

(1) カメラオブスキュラの「眼」——近代アマチュアが有したポテンシャル——

安井仲治 (1903-1942)

近世に日本全国の中央市場の役割をになう大坂の心臓部・船場に誕生した安井は、土地とそこにかかわる家のゆたかな文化資本・経済資本を享受して生育した。江戸に比して武士がわずかにしか居住しておらず、自治の根づいた大坂で、町人は被支配者身分でありながら、経済においては武士の将来を左右するほどの実力をそなえていた。知恵と才覚で社会進出した町人は、江戸の官学に対抗する「懐徳堂」を設立する。そこにまなんだ山片蟠桃が著した『夢の代』中の「無鬼論」は、万世一系の神話をもふくむあらゆる神話を喝破するものだった。生業を有しつつ、学問のなかで天理から人理への転換を図り、その成果を社会に還元しようと努める町人たちの姿勢には、西洋のアマチュアに通じる精神がある。

近代に入ると、第一次世界大戦を契機として工業を飛躍的に発展させた大阪は、関東大震災で打撃を受けた東京を抜き、「大大阪」と称せられるようになった。そこでは近世からの自治の精神が引きつがれており、政治にたずさわるのであっても、職業政治家はかえってプロフェッショナルとはみなされず、市井の人間としての公的貢献が評価された。そして、一個人から地域全体にまでつらぬかれる独立精神は、東京の中央集権を、もはや適切でない、と主張するまでにいたる。

しかし、公害が深刻になると、富裕層は郊外に別宅をかまえ、ユートピア的な田園都市を阪神間に築く。そこでは、さまざまな新時代の娯楽施設が造成され、和洋を折衷した形式の「阪神間モダニズム」が展開された。安井の家は、人口比率からはごく少数であった富裕層にふくまれたため、活気あふれる経済活動の中心地・船場と夾雑物を遮断した瀟洒な郊外・宝塚を自由に行き来して暮らす特権を持っていたのだが、彼はあたえられた環境を享受するのみでなく、観察者の視線でことなる階層を凝視する。

日本でアマチュア写真家がふえはじめるのは1880年ごろと早く、1904年には東京の「ゆふつゞ社」と、大阪の「浪華写真倶楽部」——のちに安井が属することとなる——が結成され、東西を代表するものとなっていく。同年に起きた「芸術」と「技術」のいずれを優位に置くかという論争で、最終的に支持されたのは「芸術」としての写真だった。写真家団体は全国にわたり散在したが、関東では中央集権的な様相を呈していたのに対し、関西では序列をつくらずむしろ後身を前面に押し出し、一人一党の自覚で切磋琢磨しながら写真界全体の向上を意識した。かかる彼らの矜持は、アマチュアが主導する時代の到来を確信するほどになっていた。

幼時から病弱であった安井は、大学受験失敗後に結核をわずらったが、そののちも近親者をあいついで見送ることとなる。前時代からのゆたかな資本にめぐまれながら、少年期

に「生」の有限性と対峙した安井は、その状況においてこそあたる限りの自在な生をもとめ、行為としての写真に就いたのではないかと考えられる。安井は、朝鮮人、労働者、実験動物、老画家、女性といった社会的マイノリティをしばしば撮影している。他者の尊厳に光源を有するそれらの作品は、今・ここでの一回性の生の切実さにより、みる者を逆照射する

しかし1930年代に入ると、軍国主義の台頭とともに、帝都の職業写真家は報国の写真を主導していく。その際、アマチュア写真は教化の対象となり下位に位置づけられるが、なかでも大阪のアマチュア写真家による写真は、真剣さを欠いた「趣味」のようなものとみなされた。「芸術」の駆逐されていくときにあり、安井は才知をはたらかせ、写真表現の自律を追求し、報国写真の対極に置きうる作品『半静物』(1932)、『惜別』(1939-1940)等をのこす。一方で、現時点における写真表現の可能性と同時に限界をみきわめるため、死の直前である1941年、写真の歴史に関する講演でみる者を大胆に啓発するのだった。

(2) まなざされるもの

安井が、「寫眞家四十八宜」のなかで「女性の写真家もつと増えてよろし」と詠んだように、近代に一大ブームを引き起こしたアマチュア写真家のうち大半を占めていたのは男性であった。卯月会、レディス・カメラ・クラブなど女性のみのアマチュア写真家グループは関西を中心に存在したが、現存する作品はすくない。レディス・カメラ・クラブ所属で、『アサヒカメラ』の座談会に参加し、同誌上に写真に関するエッセーを書いた溝口歌子は「女性にのみによってつくられ得るような感じを盛った」写真を提唱している。

だが、日本の近代が明けるまえ写真に接触した女性が、身近な存在である男性を撮影したとき、その作品はいかにも女性により撮影された「感じ」とはかけはなれていた。日本初の女性写真師とされる島隆は、全国に藩校や郷校が存在しながら女性の入学が許可されなかった時代、田村梶子の寺子屋・松声堂にまなび18歳で一橋家の右筆にあがる。その後、幕府の開成所で絵図調出役に就いた島霞谷と結婚し、彼から写真術を習った。今日からみてもあたらしい彼女の生き方は、すでに流動を開始した固定的な社会の磁場を、凝視することから得られたものと考えられる。たがいなたかめあうパートナーとの関係において、隆の撮った霞谷の肖像には、無限にゆたかな知の創造とむきあう「人間」が姿をとどめている。かかる痕跡は、ひるがえって近代に、ジェンダー規範の再編と強化がおこなわれたことを推測させる。

本論が取り上げた5人が生育する20世紀初頭は、雑誌全盛時代であり、雑誌を通じた文化の送り手と受け手という双方向的なありようは、青少年の自我形成に影響をあたえた。1923年の関東大震災を経て、1920年代も後半になると、女性の表象が誌面にふえはじめた。そして、1930年のモダニズム全盛時代には、まなざされる存在としての「女」

が、文章のみならず写真や挿絵等にも氾濫する。なかでも 1920 年代前半にあらわれた「モダンガール」は、モダニズム全盛期に、種々の言説を生み出す。主として作家や評論家、教育者等が「モダンガール」を語っていくが、積極的な論者は男性であり、女性からの発言も年長者からのものに占められる。すなわち「モダンガール」は、「新しい女」のように、みずからことあげしない存在であった。ほぼ同時期に登場した「職業婦人」の語は、概して肯定的にもちいられながら、そのなかでマネキンガール、ショップガール、ダンサー等カタカナであらわされるあたらしい職業は、女性の社会進出に対する排除と好奇の視線にさらされ、しばしばモダンガールとの重なりが自明視された。

とりわけ、1920 年代から 30 年代前半にかけ日本に起こった一大ダンスブームから生まれた職業のダンサーは、それ自体男女の区別をとまなう名称ではないにもかかわらず、ダンサーといえば女性を指し、ソロではなく相手と密着して踊ることから、一面職業的ホステスのようにみなされた。たとえば、1933 年の映画『^{はま}港の日本娘』には、「身を誤り」風俗業の世界に身を置く横浜のミッションスクール出身の元女子学生が登場する。彼女は、流浪の果てにもどった横浜のチャブ屋で、彼女の親友と結婚したかつての恋人に出会い、その目前で他の男性とダンスを踊ってみせる。彼は、男性であるがゆえに、過去に不特定多数の異性とあそぼうと「更生」が可能であるのに対し、彼女は、仕事として、不本意ながら同様な行為にしたがったが最後「転落」の道以外のこされていない。

同時期に公開された『非常時日本』(1933)でも、銀座で温厚な老紳士に足を踏まれ怒りを爆発させる驕慢なモダンガールは、非知性的な悪役としてえがかれる。時代が戦争へと傾斜していくときにあり、メロドラマとプロパガンダ作品という形式を超え、容易に「墮落」し転落していく女子学生の表象が一致していることは注視される。エログロナンセンスの時代に、彼女らは窃視的な視線をそそがれたが、軍国主義の時代になっても、「女」はまなざしつづけられながらその内面を理解されようとはしなかった。

しかし、同時期には、困難な状況において教育を得た女性たちのなかで、まなぶことそれ自体に対し、間断ない問いが発されていく。かかるまなざす「女」の登場は、男性の既得領域に脅威をいだかせ、それゆえにあらたな排斥も起こるのだが、男性性に占められたジェンダー的視線を分化しようとはたらきかけていく。

(3) まなざす「女」——Spleen de Tokio 1930 の自照精神——ささきふさ (1897-1949)

両親の晩年に末子として誕生したささきは、年のはなれた兄姉にかこまれ、経済・文化資本を享受し生育する。彼女は 10 歳のとき、18 歳年長の姉の養女となるため、横浜に移った。そして、熱心なクリスチャンであった姉に連れられ指路教会に通い、12 歳で洗礼を受け、青山学院入学後はキリスト教女子青年らしい生活を送る。信仰とのかかわりで、1918 年、書く行為に就き、翌年に長い髪を切ると「断髪一号」と称された。小説『断髪』(1921)で、「女」にもとめられる役割が文壇においてもかわらないことを悟った主人公

は、ながい髪を切り、混融された外部と内部のまなざしを分離させようと努めたのち、アマチュア的出発を切っている。

のちに付されるモダンガール表象の影響もあり、この時代のささきの動向については関心ははらわれてこなかったが、彼女の精神形成に、キリスト教信仰と当時の親密圏はふかくかかわっている。近代の開港という歴史的イベントがもたらした「光」は、横浜に文明の優越をあたえ、キリスト教信仰のもとでの男女のへだてない人権意識は、女性解放運動とりわけ廃娼運動を促進した。ささきも、穏健な市民的教会の信仰生活から、先鋭な女性解放運動を展開する矯風会に活動の比重を移す。同時期に身を置いた親密圏には、幼時に指路教会に通っており、のちに安井仲治とは『光画』、渡辺温とは『新青年』を通じかかわっていく岡田桑三や、ささきが秘書を務めたガントレット恒の弟・山田耕作、ささきの次兄・大橋義夫たちがおり、そこで彼女は最新の社会主義思想にふれたのだった。

1923年、ささきは、日本代表として万国婦人参政権大会に出席するため渡欧する。同地でかいまみた女性たちの組織立った行動力と実行性に圧倒された彼女は、日本人に欠落した部分のみとめつつ、完全に委縮してはしまわなかった。そして、以前には西洋文化の「はしり」を摘むことに熱心だった自身が、そとなる文化のうちに入ったときに、民族の古い生活のニュアンスに美をみいだしていることを発見する。同年に起こった関東大震災により急遽帰国したささきは、当時の日本にひろがっていた文化的コンフォーミティに同化はしないまでも、日本人としてのアイデンティティを自問させられる。佐佐木茂索との結婚は、そのような状況において決められたものであった。だが、震災後から結婚後にかけて起こった身近な男性たち——有島武郎、養父・大橋清蔵、芥川龍之介の自殺は、結婚生活の困難さとあいまって、彼女を信仰から遠ざけたと想像される。

彼らの死が、精神的衝撃をあたえた一方で、虚無の透徹は「行乳薬求死」(1927)のような掌編に無二の精彩をあたえた。最後となった対話で、「芸術家」の「狂気」にみせかけた芥川のアフექテーションを、ささきは冷静に書き記す。キリスト教信仰を契機に書く行為に就いたささきにとって、形式はあらかじめ存在したのではないが、従前、雑誌の埋め草のごとく捉えられてきたみじかい形式の作品は、純文学然とした長編小説の「物語」とは対極的な、ひとつの意思に収斂されることを拒否するときオートマティックな筆跡を示す。

日本のモダニズムがきわまったとされる1930年から1931年にかけて、ささきは創作のピークを迎える。同時期に発表された『ただ見る』(1930)で、主人公が独語する「Spleen de Tokio」には、まなざす「女」の自照精神がきざまれている。前半の章に出てくるカメラ・オブスキュラ現象は、主人公に半覚醒状態のまま意識されており、かかる「視」はマックス・エルンストのえがいたズートロープのなかの少女ともかさなる。たとえば、同年に書かれた堀辰雄著『水族館』の男性主人公における窃視／傍観とは対照的なそれは、むしろ「女」が一方的にまなざされることの多かった当該の時代に、生成された「視」ともいえる。後半の章で、上流階級に属すると思われる女性主人公が、安手のセー

ターを着た女性ダンサーたちの不可視の生活相を浮かびあがらせるのも、傍観視ではない凝視によるものなのである。そこで、決して踊ろうとしない——求心的な磁場と距離を置く——「私」は、踊る労働者たる「彼女」たちのほうへ一歩を踏みだそうとしている。

(4) 開港と国家売春

日本近代が明ける直前の「開港」というできごとは、横浜の地を港都に変じさせるが、それは同地に、他にさきがけた文明の摂取をもたらすと同時に、今日まで表の歴史には浮かんでこない異なる領域をも将来した。1858年の日米修好通商条約がむすばれるに際し、アメリカ側の要請に応え、条約文には記載されない遊郭の建設が決定される。開港から4か月後の1859年11月11日に開業した「港崎遊郭」は、現在の横浜公園に位置する壮麗な施設で、波止場から見通せ、江戸の人形町や浪速の順慶町にもおとらないにぎわいを呈した。開港交渉の場では、同時に信仰に関する問題も話し合われ、居留地におけるアメリカ人の宗教の自由とそれにとまなうキリスト教会の建設が認可される。

日米修好通商条約の第7条で、外国人の遊歩地域はさだめられていたが、1864年に「横浜居留地覚書」の第11条で外国人のための遊歩道が造成されることになると、幕府は監視の目的で沿道に茶屋を開店させた。そこで、表向きは給仕をよそおい、身売りをする女性が現れる。さらに、居留地の元町にちかい谷戸界限に、外国人相手の私娼が頻出し、近隣の箕輪坂、御代官坂付近の家では、国内外の客を取る遊女屋がいとなまれるが、居留地は治外法権であったため、官憲には取り締まりの自由がなかった。

1872年のマリヤ・ルス号事件により、同年には芸娼妓解放令が出され、外国人のいわゆる妾は鑑札を必要としなくなる。1885年、翁町に外国人専門の飲酒店が開店し、チャブ屋と呼ばれるようになり、車夫は、波止場に着いた船員を同所へとはこぶ。チャブ屋は、1910年には某ハウス、さらに1912年ごろからは某ホテルと称し、上流階級の外国人や日本人までも客として取りこむようになった。いつしかモダニズムの中心地であった銀座と比較的高級なチャブ屋を擁する横浜の本牧はつながり、銀座で遊び慣れた者も東京の流儀をそのまま持ち込むことはできず、日本式の遊郭とはことなる「作法」がそこでは要求された。

かかる事情で、横浜には開港直後から買売春が横行し、当時すでにイギリスやフランスの駐留部隊から公使館関係者にまで梅毒が蔓延していた。ウィリアム・ウィリスやG.B.ニュートンらの尽力により、娼婦には検梅が義務づけられたが、私娼にはそれが適用されなかった。1880年に各国の総領事が決議をおこなったものの、前後して外国人専門の酒場内において秘密裡の売買春がはびこり、防止は困難なものとなる。

(5) 初期映画の衝迫と「彼女」たち——Incoherentな系譜——渡辺温 (1902-1930)

渡辺温は、父の仕事の関係で東京・本所、深川と転居をし、高校時代を茨城で過ごしたのち大学進学で東京に出た。小学3年生のころ、初期映画に邂逅した経験は、彼の創作に決定的な影響をおよぼす。のちに「想い出すイルジオン」で回想される線画映画は、稚気にみちた Incoherent な系譜であった。初期映画には、撮影者が複数ショットを使用して「物語」を織りなしていく——コントロールする——ような手法が存在しない。その基本的なモードは、映される対象のほううごくという映画にとってはあまりにも明白なくみであった。たとえば、渡辺がみる機会を得たと推測されるエミール・コールの『ファンタスマゴリー』で、生きた線画は、未来を志向し自動筆記への期待を萌芽するかのごとく空間をかたちづくる。彼は、少年期における初期映画体験を、こどもであるがゆえに興じたものとは捉えず、その衝迫はながくとどめおかれたのだった。

初期映画を体験した同世代のうち、映画青年となった者が、技術を論じることや理論をあつかうことに熱中し日本映画の「後進性」を排斥したのと対照的に、渡辺は制度以前の形態を否定しようとはしなかった。彼は、純映画劇運動のような日本映画のありかたに対し直截な言及をおこなっていないが、「オング君の説」(1926)、「古都にて」(1927)、「続アルペエヌ嬢の話」(1928)には、かかる趨勢が映画の可能性を殺いでいくことへの批判がしのばされている。同時期にはプロキノのような映画製作も存在しており、彼は公式に社会主義的立場を表明しなかったものの、そこに近接した思想——資本主義に依拠せず検閲をかわすべく、個人で映画をつくり個人で映画をみることで、既成の制度を拒絶する——が「十年後の映画界」(1929)にはうかがえる。

渡辺は、高校で成績を急落させるほど文学に耽溺したにもかかわらず、自身では、既成の形式におさまらない表現を志向していく。1924年に、プラトン社の懸賞において「影」が一等で当選するが、そこでもとめられていたのも映画の「筋書」であった。彼は、同時期に声楽、舞踏を習い、楽器の演奏をおこないながら、あらたな表現を模索する。

1927年から渡辺が編集にたずさわる『新青年』は、近代に雑誌王国と称された博文館の凋落のときに誕生した。日清戦争時に『太陽』を創刊し、第二の維新を謳った博文館では、多数擁する雑誌の愛国、立志、成功といった前時代的キーワードが世相との懸隔を生じていた。そのながれを汲み『新青年』も、1920年、堅実な地方青年向けの雑誌として出発を切る。しかし1923年の関東大震災後、復興と加速する都市化の影響を受け、対象は都市文化を享受する学生やわかいサラリーマン層へと転換された。

渡辺が『新青年』にかかわるのは、探偵雑誌の全盛期からモダン色を前面に打ち出した時期にかけてであり、当時、同誌は部数を着実に伸ばしていた。彼は、誌面を刷新するような企画にかかわりコラージュ的实践をおこなうが、なかでも「新青年趣味講座」における「趣味」の語は、一見かるやかでありながら複雑な含意を示す。前時代に場を得た「主義」を意識しながら、前例のない脈絡で語られる「趣味」は、モラトリアムの陥穽をはらみつつ、将来されようとする破局のまえに構築された「虚」の場においてのみ有効な対抗であった。

渡辺は、おとずれべき破局の先取りを、全体以前の「個」の死——死へと跳躍することにより自由意志に生きる——として、「兵隊の死」(1927)にきざんでいる。「天」にむかい引き金を引く兵隊に象徴される世界の把握は、同時に、虚無の源泉たる近代天皇制が強調する家族国家観における「血」のむすびつきを解体していく。渡辺がえがく「家族」の「物語」は、どれも欠損をそなえているが、なかでも嘉仁が没し「新青年」と同様な若者である裕仁が「国父」となるころ書かれた「父を失う話」(1927)で、陽気に子を置き去りにし港から船出する父は、子に「父との関係がもともとから誤りであったのではないかと自問させるのである。

『新青年』は、当初の路線を変更しつつ、ミソジニーの性格は引きつがれていったが、渡辺の作品における主人公と女性たちの関係は、そこでは例外的なものと考えられる。たとえば、しばしば登場する娼婦的な存在は、ステレオタイプの造型とは懸隔があり、彼女たちとの関係も、恋愛とも買売春とも判じかねる。かかるモチーフをあつかったものとして、渡辺が事故死する直前に書かれた「シルクハット」(1928)と「ああ華族様だよと私は嘘を吐くのであつた」(1929)は、作品の骨格が類似しながら、組み合わせられるものによりディエジェーシスが性格を変じさせている点が注視される。舞台は、当時全盛期にあった横浜のチャブ屋であるが、ラストシーンにおいて、前者ではホモソーシャルな紐帯とナルシスティックな自己保身が確認されるのと対照的に、後者では、主人公は弱い自己を認識しつつ他者のほうへ接近しようとしている。そのとき、おぞましいものとして排除されようとした「感染」は、一方で「人類」をむすびつけるものとして意識される。

(6) 二都港湾史

関東圏を代表する二大都市・東京と横浜は、近代以前から、競合の関係を持っていた。中世の東国は、伊勢を介し全国的な規模での流通体系に組みこまれ、経済的先進地域の畿内と密接にむすびつく。そのなかで品川と神奈川の湊は、江戸湾の深部に位置し、内陸水系をつたい北関東につながることから、西国にとっても重要な拠点であった。

近世に入ると江戸市域は、1657年の大火を契機に膨張し、参勤交代による武家の移住は人口を増加させ、江戸は大量の物資を消費する都市となる。その結果、大坂などの上方から江戸へ送られる物資も急増し、定期船の就航により上方—江戸間の海路は全国流通の大動脈を築く。幕府は、航路を整備し流通システムを確立しつつ、法令により統制を強化した。

神奈川湊は、師岡保の外港として誕生し、成立はすくなくとも古代末期にまでさかのぼる。中世には外部からの支配を受け、戦国時代には衰退するが、江戸が一大消費都市に変貌したのち、魚介類や年貢米を江戸に送り出す拠点となった。江戸時代後期には、神奈川湊に、伊勢湾で活動していた新興の海運集団が寄港するようになり、江戸湾を中継しない非正規の「対抗的」物流ルートが形成される。

1857年、日米修好通商条約がむすばれる際、開港場や開市場の候補地に神奈川および横浜の名はなかった。しかし、岩瀬忠震は、アメリカが大坂開港を希望していると看破し、すでに繁栄をはこる同地への経済の一極集中を避けるべく、横浜開港を推進する。最終的には神奈川の開港が公式に記されるが、井伊直弼は、交通の頻繁な宿場に外国人が居留することを懸念し、遠浅の神奈川より横浜のほうが錨地としてすぐれていると主張した。1859年、横浜が、国際貿易港として誕生すると「外交都市＝江戸、貿易都市＝横浜」という性格の相違があきらかになる。1880年からは、「東京論」で横浜の国際貿易港としての機能を東京に移すことが主張されながら、実現にはこぎつけず、帝都・東京と帝都の関門・横浜という位置づけが確定された。

1923年の関東大震災後、復興にともない東京港は整備されていくが、脅威を感じた横浜も埠頭を築き対抗をこころみる。1938年、工業生産額で全国1位になった東京が、東京港の一部を外国貿易区にしようとする、横浜は反対運動を展開する。しかし、1941年、横浜・東京港が京浜港として統一され、あらたな相補関係から両者は並び立つ国際貿易港として発展していくこととなる。

開港以前の横濱は、細長い砂州のうえに位置し、先端の洲乾島に弁天社を擁す半農半漁の寒村であった。しかし、開港間近になると、国内の商人が蟄集し生糸を中心とした輸出が活発化する。1859年、神奈川運上所の完成後、西側は日本人居住地、東側は外国人居留地となり、1860年には堀割川の開削後に四つの関門がもうけられ、「関内」と「関外」に区分された。横濱村は、近世まで大半が入り海であったが、1656年、江戸で材木商として成功し幕府御用達となった吉田勘兵衛により洲乾湊の埋め立てが開始されている。工事は難航したが、結果的に土地面積は116町歩に達し、偉業をみとめた徳川家綱は、同地を「吉田新田」と命名した。引きつづき横濱新田、太田屋新田と一連の開発がおこなわれたのち、広大な海は陸と化し、開港のときをむかえる。

他の地にさきがけ開港しながら、開港場建設の出発点において、横濱はまぎれもない「近世都市」であった。開港の前年、当地をおとずれた外国奉行が、運上所を境として市街地を「異国人町」と「日本人町」に分けようと企図した経緯は、以後、横浜の都市構造を規定する。同地は、統一された都市計画にもとづくことなく、幕府が主体となり断続的に開発を進めていったため、街並みには江戸との近似がうかがえる。だが、一方で横浜には、江戸のようなメインストリートのヴィスタを形成する焦点がない。また、太田屋新田の内側にもうけられた港崎遊郭は、それ自体が海の外にむかってひらかれている点の特異である。港崎遊郭は、現・横浜市の中区に建設されたが、隣接する西区の紅葉坂上に位置する掃部山公園に立つ井伊直弼像も、また、道路をはさみ反対側にそびえる伊勢山皇大神宮も、時期を前後して造成されながら海の方角を意識しているのは港都らしい性格といえよう。

(7) 都市をよぎる視線——揺籃の港都から死の帝都へ——金子文子 (1903-1926)

金子文子は、横浜で誕生し8歳まで横浜市内を転々としたのち、母親の故郷である山梨県で1年を送り、その後養女として朝鮮へ渡った。同地では、養家ではげしい暴力を受け、16歳で帰国し、17歳で東京へ出て予備校に通いながら苦学する。父親に入籍を拒絶されたまま生涯を過ごした彼女は、勉学に対し燃えるような情熱をいだきながら、一般と同等の教育を受けることがかなわなかった。だが、そこから生じる葛藤は、学知とはなにか？ という根源的な問いをもたらす。金子が、自身にも教育を受ける権利があると確信したのは、彼女の人生の出発点となった横浜においてであった。

金子が、両親と最初に住んだ横浜・寿町は、開港から約半世紀を経た20世紀初頭、居留地からほどちかく、外国商館や貿易会社、問屋が集中し、家内工業が発達していた。未来を臨み埋め立てられた寿町をふくむ7町には、縁起の良い名前がつけられたが、のちにはネグレクトと暴力に墮する父親が当時金子に愛情をそそいだのは、進取の気風に富み発展の途上にある環境に希望をみいだしていたからではないかと想像される。父親は、そこで巡査を務めながら、やがて母の妹と暮らすようになり母子をすてたため、母は紡績工としてはたらきに出る。広大な墓地を擁する久保山で、彼女は母と弟と生活しながら、坂をくだり父と叔母が経営する氷屋のまえをとおり寺子屋のような学校にかよった。

父が出ていったのち、母が引き入れた男性から金子は暴力を受けるが、母はかばってくれず彼女を遠ざけた。1900年代の横浜には、「幽霊事件」が頻発したが、それは夜間に白塗りをした街娼が見誤られたものと想像される。金子の住まいのちかくには花街がひろがっており、8歳のある日、母は娘を着飾らせ娼家へ連れていく。商談は成立しなかったものの、母と女将の相談は、彼女の眼前でおこなわれた。人身売買が己にふりかかってきた経験は、その時点ではおさなくて悲哀やいきどおりをおぼえなかったとはいえ、透徹したニヒリスティックなまなざしを醸成する。同時に、近代の港都における種々の原体験は、入り組んだ現実のリファレンスを金子にあたえ、変革を志向し外国人との協働をも容れうる都市的性格の萌芽を形成したのである。

そうして、渡り鳥が帰巢するごとく、いくつかの土地を経た彼女は、運命を決することとなる「中心」の象徴を戴いた「都市」——揺籃の地とは水でつながった——へもどってくる。1923年、関東大震災発生直後の東京で、金子は、朴烈とともに検束に遭い、1925年、大逆予備罪を認定され、1926年に死刑宣告を受ける。ほどなく恩赦が諮られ、両者は無期懲役となるが、同年には「怪写真事件」が起きた。写真は、裁判を担当した立松懐清により撮影されたものだったが、そこでの犯罪者の様態は一般の「期待」を裏切り、非難が殺到する。とりわけ、金子が本を目で追う姿は、学校知を得た同性の年長者からも「僭越」であると断じられたのである。

金子と朴烈に付された大逆罪は、捏造されたものであるという意見が、事件の直後から今日まで大半を占めてきた。一方で、彼らは、現実的な行為に踏み出さずとも観念的なテロリストであり、そこにはニヒリストの衝動がみとめられるという意見も存在する。金子

や朴らの不逞社に参加し、事件の経緯を間近にみていた栗原一男は、「朴烈事件」を朴烈と立松検事の「合作」だと証言する。それにかんがみれば、官憲は、「不逞」外国人の罪を国内外に示すため彼らを利用したが、朴の側にも、「事件」により自身の存在をひろくアピールする意図がはたらいていたといえる。

いったんは「血」を超えてむすばれた関係の朴であったが、金子が政治行動としてのテロリズムではなく、哲学としてのテロリズムをつらぬこうとしたのに対し、朴が向かわざるをえなかったのは、「血」でむすばれた祖国の独立運動であった。独房に収監された金子は、銜気を去り、憑かれたように短歌を詠みはじめる。『何が私をこうさせたか』の終章からは、「社会」が「私」をこうさせた、つまり「私」は社会の殉教者であるとのメッセージがつたわる。現実には金子の死後に加筆され、完成させられた「物語」には、複数の声が反響している。しかし、最後にたったひとりになったとき、ことあげされた「自由な死」には、なにかが私をこうさせたのではなく「私がこうしたのだ」という声が聞きとれるのである。

(8) ことばの獄

横浜・山手の居留地近くに生育し、英和女学校にまなび、ささきふさが病気のときにはほぼ毎日手紙を送ったという築地藤子は、20歳から詠歌をはじめ。「アララギ」に入会し、正式な手ほどきを受けた彼女は、結婚後、夫の転勤により神戸、香港、シンガポール、インドネシアを転々としながら、歌をよすがとして暮らした。

築地の初期の歌には、ささきと同様なキリスト教女子青年らしい心情が反映され、その眼は「他者」の「労働」にむけられている。だが、東南アジア移住後の生活詠には、漠とした孤独とつよい感傷がきざまれる。1923年の一時帰国中、関東大震災が起き、横浜にあった築地の家も焼け落ちてしまった。1924年、長女を亡くした彼女は、蒲田に住み、1925年、同地の「梅屋敷」を題材に歌を詠む。「梅屋敷」は、「明治天皇東上のみぎり」梅花を鑑賞したという由来があった。

この歌が詠まれた1925年に創刊された『原理日本』を主宰する三井甲之は、明治天皇のような「大歌人」を模範とし、天皇の御製を拝承することを国民の勤めとするよう説いた。三井は、この勤めこそが「しきしまのみち」であり、当該の行為により天皇のおおひなる写生歌人としての「精神」が国民にいきわたり、皆が「ありのままにいられる」ことで一致するのだと主張する。その異様に不明瞭なことばには、近代に分断された「個」のありかたへの反発や、理性の光に対する嫌悪と同時に、全体性を回復しようとする心性があらわれている。

三井のいう「天皇の国の無窮」とは、万世一系の神話とむすびついた「永遠の今」を意味した。永遠の今——「中今」とは、一説に文武天皇の宣命に由来し、今のうちに永遠をふくむものと解釈される。そこでは、血族的一団に基づく愛を力の源泉とした精神が、現

実性を確保しつつ進んでいくというものである。絶対的な「中今」なるものが存在するのではないが、日本文化のうちで、現在をもっとも重んじ、未来への視座を容易に持ちえなく機能する時間感覚が存在してきたと考えられる。平時であれば、可視化される問題ではないながら、有事のとき、かかる時間感覚は人間存在を滅しきるほどの威力をふるう。

築地の歌には、最初他者にも投げかけられていたのが、次第に内側に沈潜していくまなざしの軌跡がきざまれている。彼女は、和歌の型のなかで自然をたたえ、天皇をたたえ、現在をたたえる。一方で、和歌の手ほどきなど皆無である金子が自死の前年につくった歌は、かかる「中今」の陥穽をのがれ、近代日本の虚無のありかを同定する。

(9) 「視」の自律——青年は未来へつらなる——難波大助 (1899-1924)

難波大助は、山口県に代々つづく士族の家に四男として誕生し、勤王の家風に順応しながら少年期を送った。「向山文庫」や顕彰碑に表される曾祖父・覃庵の偉業は、おさない彼にとって誇りであり、使用人から大旦那と呼ばれる一方で、父からはきびしいしつけを受ける。近世の長州藩は、外様の位置づけながら、藩主の毛利氏は京都の出身で、朝廷とは親密な関係であったことが近代以降奇貨に転じた。1811年生まれの覃庵は、主家に一身を捧げつくすという一貫した価値観のまま生涯を閉じたが、彼より20年後に生まれ、幕末の変動期に成人する吉田松陰は、志士の最前衛たる政治行動に出て「狂」のみなしを受ける。1850年代から60年代にかけ、吉田に限らない「反逆行動」がしばしば政治的主流を中断させたが、それらは組織化されたものではなかった。「攘夷」の名で語られた国防の問題は、倫理的原理として復活した「尊王」の規範的位置にまでたかめられ、「尊王攘夷」の語は、幕府に代表される現状の否定であれば、手段を問わず正当化されることとなった。

たとえば「英将秘訣」にうかがえる権謀術数の言辭は、変革期の志士たちの真情を語ってなまなましい。善悪の彼岸に立つマキアベリストには、天皇もまた術策の一でしかありえず、彼らが最上としたのは、有限な生のなかでのより遠大な行動であった。だが、幕府の没落を目前に、功利主義的な態度が復活し、尊王派のあいだにふかい自己分裂を生じさせる。かくて維新主義は、功利主義的官僚的思想と理想主義的活動に半身ずつ分かれたれながらつながるが、結果として理想主義はついで、性急な近代化の要請は現実的な方法を採用させた。終局、維新政府がみずからの正統性を主張するため依拠したのは、「天皇の神権的絶対性」だったのである。

歴史の転換期にあつては、思想的ヘゲモニーも容易に入れ替わるように、個人のうちなる革命もすみやかに進行する。近世から政治意識のたかい地に生まれた難波が、己以前に存した勤王の文化に随順したのち、近代の「理」に覚醒し、非「理」の源泉を撃つべく翻身するのは決して不自然な行動ではなかった。それは、吉田に顕著な純度のたかい理想主義と伶俐な行動主義を根底に置くものであったといえる。

少年時代に目標としていた帝国大学卒業の長兄や京都大学に在籍する次兄に倣い、進学を希望した難波に、父は応じようとしなかった。友人を通じ東京に苦学生が存在することを知った彼は、四谷・鮫が橋の物置のような部屋に下宿し、自炊生活をはじめ。その周囲には貧民街がひろがっており、自身が生の尊厳をうばわれていると感じていた難波に、困窮にあえぐ彼らの生活を黙殺することはできなかった。

難波は、早稲田高等学院に入学し、歌川克己という親友を得るが、入学から半年後には授業に出席しなくなり、労働者の生活に入ることを決断する。そして、木賃宿に泊まり日雇いの仕事をおこないながら、そのようすを活写し歌川に送る。彼は、滞在した労働者街・富川町に愛情をおぼえつつ、階級や国籍の問われない場であっても、さらに下層の人間をつくることで社会が回転していくさまを凝視する。賭けの場で、日本人が要領よくふるまい、朝鮮人が官憲から虐待される場面に遭遇した難波は、朝鮮人の勇敢さをたたえ、彼らや水平社の人間との共闘を希望するのだった。実践を重視する彼は、あらかじめことばの裡に沈潜する態度を警戒したが、この時期歌川へ送った手紙には、「ペン対剣」の状況における前者の無力さがうったえられている。

関東大震災後、難波は、無実の人間たちが多数虐殺された状況を目のあたりにして、言論による現状改革の不可能性を一層痛感する。志士の「後衛」として出発した彼は、ここに至り、反動の暴威に一撃を加えるべく「前衛の再前衛」へと踏み出す。歌川は、テロルをほのめかす難波を制止しようとするが、難波は、そのつど自身の決断が情念的なものではないことを述べ、現今の理性を確認している。

難波はまた、武士文化の影響から、女性一般を非力な軽蔑すべき存在とみなしてきたが、理性的だと考えていた友人が未知の世界を見聞しようと娼家へ行ったことに影響され、同所へとひとり足をはこぶ。そこで彼は、劣悪な環境でも必死にはたらく以外生きるすべをもたず、社会から「淫売婦」として一方的にまなざされる女性たちに、心をうごかされる。難波は、「虎ノ門事件」後の訊問中にその体験を語ることで、両者を「淫売婦とテロリスト」と一括する弁護士から侮蔑を受けながら、彼女たちを水平な人間の位置に引き上げようとあらがう。

しかし、裁判の過程では、なにより天皇の神性が保証されるべく、難波の側に「狂気」がみとめられなければならなかった。それにもかかわらず、決行以前に事後を予測した彼は、新聞社や知識人に声明を送っており、精神鑑定の結果も正常であったため、圍繞する裁判官や宗教者はせめてでも「大逆犯」の「悔悟」を引き出そうと奮闘する。だが、難波は、かかる教誨を冷静にしりぞけるばかりだった。

国民国家の形成期に創出された「青年」は、近代天皇制が完成するころ、前世代の人間たちにより困い込まれ「煩悶」をつのらせたが、それから20年の時間を経て、往時の再現のごとく己を取り巻く「父」たちに、難波は最後まで屈しようとしなかった。彼は、死刑の直前に、非「理」から解放され一生のうちで今がいちばん幸せである、と述べている。そして、遺書のなかで、虚無を産出しつづける「父」の態度を糺し人間を愛するよう

励ますと、「子孫崇拜」を唱え未来につらなろうとしたのだった。

第2節 成果と課題

本論は、「点」としての個人から出発し同時代の精神的マイクロコスモスを抽出しようとしたところだが、20世紀初頭に誕生した5人と彼らが置かれた都市的環境に関する考察を終え、あらためて各人のあいだには不可視であった繋がりがみとめられた。

時代的に先行する難波と金子は、一般的にはアナキスト、ときにテロリストという呼称で認識されるが、反「学知」と超俗性において近似している。難波は、1924年に刑死、金子は、1926年に自殺したため、モダニズムの隆盛を経験しなかった。両者は、他の3人同様、雑誌文化全盛の時代に生育しながら、物質的な恩恵を受けず、徹底した反ブルジョア的精神を持した。理想にしたがうという態度においては、出自とのかかわりもあり、難波のほうにそれが一貫しているが、金子も一時は名を上げるような生きかたにひかれながら、終局、理想に死したのだった。

安井、ささき、渡辺は、ブルジョアの出自であり、モダニズムの全盛期を経験している。それゆえ対抗文化に浴しながらも、社会主義への関心やブルジョアに属するがゆえの反ブルジョア的精神を持しており、表現にも韜晦が多分にふくまれる。なかでも、ささきと渡辺は、直接の知己ではないながら、岡田桑三のような共通の友人がおり、両者の作品には掌編がおおく、初期映画や自動筆記といった芸術上の思潮においてもかさなる部分がある。従前、言及されてこなかったが、ささきの「ただ見る」と渡辺の「ああ華族様だよと私は嘘を吐くのであった」は、最後の場面で主人公が他者の側へ一歩を踏み出そうとしており、類似した構造がみとめられる。

渡辺が、事故で急逝するまでの3年間編集を担当した『新青年』は、創刊時には、難波のような地方在住の青年に向けられた硬派な雑誌であった。両者の相貌はことなりながらも、難波が、実際に第二次世界大戦がはじまるより約20年近く、近代の破綻を感知し焦燥をつのらせたのと同様、渡辺もそれから数年後、全体の破局以前の「個」の死をえがいている。

ささきと金子は、たがいの存在を知らないまま、横浜の関内と関外で幼少の一時期を過ごした。ふたりの愛読書も、当時人気があったアルツィバーシェフの「サーニン」ではなく「最後の一線」のほうであり、同書は、ささきの次兄・大橋義夫に翻訳され、金子は、最後までその本を手放さなかったという。当時の女性は、教育の有無にかかわらず、社会で生きようとすれば好奇と排除の視線がそそがれた。そのゆえにか、ささきと金子のうえには、他の男性3人よりもふかい虚無が看取される。

対照的に、安井と難波は、終局虚無の陥穽をまぬがれ、未来への志向を持している。商人と武士という相違はあれ、土地の伝統に根づく精神的、身体的「知」につらなれた両者は、有限な生における己の活かしかたをつよく意識した。自身を軸に過去と未来につらなることの自覚は、より遠大な世界をまなざさせ、子孫が住まうのちの世界に希望を繋がせたのである。

直接的な共通点でないものでも、たとえば、安井や難波が共感をいただいた朝鮮人と、金子は共闘している。また難波は、決行の直前に、信頼しうる知識人として新居格に声明文を送っているが、上述したごとく新居は「モダンガール」を肯定的に捉えた人物であり、雑誌の座談会等で顔を合わせるささきとは、芸術上の見解が一致していた。

一方、スケールをいったん縮小しての考察は、特殊なもののみならず一般的な事例の普遍性も提示しえた。たとえば、本論が設定した区分の第3期（1904-1921）がはじまるころ、確立された天皇制のもとで、自由な体達をはばまれた「青年」の煩悶はきわまることとなるが、同時期に誕生した者たちは、青少年期をむかえるころ、ふたたび「理」のありかを同定しようところみた。その意味で、1903年の藤村操と1923年の難波大助には、「青年」の系譜がみとめられる。すなわち、個々人における行動のきわまりは、自裁やテロルというかたちを取っていても、そこには日本近代の時空間における「神」の不在とことばへの不信がかかわっているのである。従前、言及されなかったが、「虎ノ門事件」の裁判過程における前世代の年長者たちによる難波の圍繞には、修養論者と「青年」の構図が再現されていることがみとめられた。

さらに、それにかんがみて、「青年」の直系の後身たる青年——難波やささきが、生命と引き換えに虚無の淵源を同定したのち、いわば「青年」の後裔たる安井、ささき、渡辺は、前述した通りブルジョア文化を拒絶せず、しかし一人一党の自覚を有したのであり、蔓延する世俗の間隙にしのお破局の予感を一層感じ取りながら、理を希求したと想像される。

安井における写真、ささきにおける自動筆記のような掌編、渡辺における初期映画の創作、金子における短歌、難波における詩は、基本的に生業とむすびつけられる創作でなく、そうであるがゆえに一層、そこにあらわれた「みじかい形式」は、時代との相関関係を示している。すなわち、そのみじかさは、圧縮された日本近代の求心的な磁場をのがれるべく採られたものであり、あらかじめ完成や完結をめざさず、統一的な意思をのがれるごとく生成していくのである。ほどなくおとずれるであろう破局が予感されるとき、息はながくつづけられず、しかし、そのみじかさを逆手に「視」は物語を寸断しようとする。

「不在」の歴史の側に振りわけられた異なるものの捉え返かえしは、結果として、そこからは約1世紀後の未来にあたる現在を逆照射するだろう。歴史が、その表面にあらわれた事物によってのみつくられるのでないにもかかわらず、あらかじめ記述された「歴史」の内実に疑問すらいだかれぬ現今の事態には、不当な慣性と諸種のドミナンスへの追隨が看取される。われわれは、彼らが予見した破局が明けたのちの未来にいるが、たと

えば彼らがまなざした天皇の存在は、「神」から「象徴」へと表面上は姿を変えながら、現代日本のうちに座しつづけている。「万世一系」の神話は、敗戦後に、天皇制護持を図るべく喚起されたのであるが、天皇の「退位」をめぐる、今日活力を取りもどしたかにみえる。

圧縮された日本の近代が、諸種の限界を生み出しつつ、求心的な磁場の一方に、破綻を捉える契機が存在したのだとしたら、現在はそのほころびもみえづらくなっているのかもしれない。彼らのあたらしさが、現今に存在しない「視」にあり、そこにことばへの沈潜がいましめられていたのだとすれば、われわれは、そこからなにをまなぶのだろうか。5人をむすぶ「アナーキー」と「アマチュア」のキーワードは、「神」不在の時空間で理を追求するのに有効なありかたの一であった。

以上を踏まえ、本論がこころみた日本近代の再記述は、大枠ではようやく一步を踏み出したかと考える。ただし、個々の人物や事象の記述に関しては、よりふかめられ、さらにそれらがよりひろい世界へと反映されていかねばならない。本論は、精神史の記述につき、極力、日本固有の年号をもちいなかった。しかし、2018年の日本にあり、次年に天皇の代替わりとそれにともなうあらたな年号が準備されつつあることを確認し、つたない論は閉じられる。20世紀初頭精神は、過去の歴史として把握されるのでなく、今後も、われわれのよりよい未来のために再記述されていかねばならないだろう。

参考文献

序章

- アラン・チャップマン『ビクトリア時代のアマチュア天文家——19世紀イギリスの天文趣味と天文研究——』角田玉青・日本ハーシェル協会共訳 産業図書（2006）
- 井上春雄『アマチュアリズム』逍遙書院（1968）
- ネルソン・グッドマン『世界制作の方法』菅野盾樹訳、筑摩書房（2011）
- 木村直恵『〈青年〉の誕生 明治日本における政治的実践の転換』新曜社（1998）
- クリフォード・ギアツ『文化の解釈学』吉田禎吾訳 岩波書店（1987）
- 小崎弘道『小崎弘道全集』第2巻 日本図書センター（2000）
- ジョナサン・クレリー『知覚の宙吊り——注意、スペクタクル、近代文化』岡田温司訳、平凡社（2005）
- ジョルジュ・パラント『個人のための戦い』久木哲・村田美奈子訳 ペリカン書房（1975）
- ジョン・アーリ『モビリティーズ 移動の社会学』吉原直樹・伊藤嘉高訳、作品社（2015）
- 鈴木裕子編『金子文子 わたしはわたし自身を生きる——手記・調書・歌・年譜——』梨の木舎（2013）
- 専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局
- 田嶋一『〈少年〉と〈青年〉の近代日本 人間形成と教育の社会史』東京大学出版会（2016）
- 多仁照廣『青年の世紀』同成社（2003）
- 綱島梁川『綱島梁川集』安倍能成編 岩波書店（1927）
- ネルソン・グッドマン『世界制作の方法』菅野盾樹訳 筑摩書房（2011）
- ピエール・ベール『ピエール・ベール著作集第1巻 彗星雑考』野沢協訳 法政大学出版局（1978）
- ピエール・ルジャンドル『ピエール・ルジャンドル第8講 ロルティ伍長の犯罪 父を論じる』西谷修訳、人文書院（1998）
- 平石典子『煩悶青年と女学生の文学誌』新曜社（2012）
- ヒロ・ヒライ、小澤実『知のマイクロコスモス：中世ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』中央公論新社（2014）
- 藤野裕子『都市と暴動の民衆史——東京・1905-1923年』有志舎（2015）
- フランコ・モレッティ『遠読——〈世界文学システム〉への挑戦』秋草俊一郎他訳 みすず

書房 (2016)

フランセスク・ムニョス『俗都市化——ありふれた景観 グローバルな場所』竹中克行・笹野益生訳 昭和堂 (2013)

『文語訳 新約聖書』岩波書店 (2014)

ヘイドン・ホワイト『歴史の喩法』上村忠男訳 作品社 (2017)

ミシェル・セルトー『ルーダンの憑依』矢橋透訳 みすず書房 (2008)

虫明丸 行安茂編『綱島梁川の生涯と思想』早稲田大学出版 (1981)

森涼子『敬虔者たちと〈自意識〉の覚醒』現代書館 (2006)

レム・コールハース『S,M,L,XL+:現代都市をめぐるエッセイ』太田佳代子・渡辺佐智江訳 筑摩書房 (2015)

和崎光太郎『明治の〈青年〉——立志・修養・煩悶』ミネルヴァ書房 (2017)

Gordon, Andrew. *Labor and Imperial Democracy in Prewar Japan*. California: Berkeley UP, 1991.

Rorty, Richard. *Contingency, Irony, and Solidarity*. Cambridge UP, 1989.

Seiberling, Gace, *Amateurs, Photography, and the Mid-Victorian Imagination*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 1986

Sho, Konishi. *Anarchist Modernity Cooperatism and Japanese-Russian Intellectual Relations in Modern Japan*. Cambridge and London: Harvard UP, 2013.

雑誌・新聞

魚住影雄「藤村操君の死を悼みて」『新人』第4巻第7号 新人社 (1903)

魚住折蘆「自殺論」『明治文学全集 50』筑摩書房 (1989)

魚住蒼穹「我が来世観と信仰観」『新人』第4巻第11号 新人社 (1904)

海老名弾正「青年思想界の暗流」『新人』第4巻第7号 新人社 (1903)

海老名弾正「健全なる人生観 (其一)」『新人』第4巻第9号 新人社 (1903)

海老名弾正「健全なる人生観 (其二)」『新人』第4巻第10号 新人社 (1903)

海老名弾正「『膨張的國民』の學徒に對する態度」『新人』第5巻第3号 新人社 (1904)

金近烈「彼は凝視する」『文章俱樂部』新潮社 (1929)

「山陽女學校生徒自殺」『山陽新報』1906年1月27日付夕刊

「山陽女學校生徒自殺」『山陽新報』1906年1月30日付日刊

安井仲治「鏡 (I)」川崎亀太郎『安井仲治の人とその業績 その3』日本写真会会報第11巻第4号 日本写真会 (1965)

安井仲治「鏡 (II)」川崎亀太郎『安井仲治の人とその業績 その4』日本写真会会報第11巻第5号 日本写真会 (1965)

渡邊半次郎「基督教青年に望む」『明治の女子』日本基督教女子青年会 (1905)

論文・その他

伊東久智「『院外青年』運動及び同運動出身代議士と選挙——鈴木正吾と西岡竹次郎を事例として——」『日本選挙学会年報』北樹出版 (2016)

尾形裕康「近世の元服と教育——庶民層を中心として——」『教育学研究』第20巻 日本教育学会

榛葉豊「王政復古期の科学と郷土階級——王立協会と好学者——」『静岡工科大学紀要』第18巻静岡工科大学（2010）

ジョヴァンニ・レーヴィ「ミクロストーリー」『ニューヒストリーの現在——歴史叙述の新しい展望——』谷川稔 谷川健治 他訳 人文書院（1996）

助川徳是「良心の実践（下）」『文學』第47巻第10号 岩波書店（1979）

高橋新太郎「『巖頭之感』の波紋」『文学』54（8）岩波書店（1986）

服部有紀「教育勅語の成立から終戦後の国会決議に至る経緯」国立国会図書館調査及び立法考査局編集『レファレンス』第800号（2017）

第1章

飯沢耕太郎『都市の視線1920-30年代』平凡社（2005）

伊奈信男『写真に帰れ 伊奈信男写真論集』平凡社（2005）

梅本貞雄『写真師たちの幕末維新 日本初の写真師家・梅本貞雄の世界』緒川直人編、国書刊行会（2014）

エベネザー・ハワード『明日の田園都市』長素連訳 鹿島出版会（1968）

大上泰弘『動物実験の生命倫理：個体生命から分子倫理へ』東信堂（2005）

大谷渡編『大阪の近代——大都市の息づかい』東方出版（2013）

小田康徳『近代大阪の工業化と都市形成——生活現場からみた都市発展の光と影』明石書店（2011）

勝野金政『凍土地帯』吾妻書房（1977）

川崎賢子・原田健一『岡田桑三 映像の世紀——グラフィズム・プロパガンダ・科学映画——』平凡社（2002）

木村伊兵衛「私の作画精神」『アサヒカメラ』（1952）

熊谷守一『へたも絵のうち』平凡社（2000）

桑田正三郎『月之鏡』出版元不明（1916）

小西来山『今宮草』天青堂（1925）

小林秀雄「故郷を失った文學」『小林秀雄全集第二巻 Xへの手紙』新潮社（2001）

米谷紅波『写壇今昔物語1』出版元不明（1936）

小山仁示、芝村篤樹『大坂の百年』山川出版（1991）

渋谷区立松涛美術館・名古屋市美術館・共同通信社編著『安井仲治写真集』共同通信社（2004）

白山眞理『〈報道写真〉と戦争 1930-1960』吉川弘文館（2014）

ジョナサン・クレーリー『観察者の系譜 視覚空間の変容とモダニティ』遠藤知巳訳 以文社（2005）

ジョン・パージャー『見るということ』笠原美智子訳 筑摩書房（2005）

末中哲夫『山片蟠桃の研究「夢の代」編』清文堂出版（1971）

- 鈴木勇一郎『近代日本の大都市形成』岩田書院（2004）
- 多川精一『戦争のグラフィズム——「FRONT」を創った人々』平凡社（2000）
- 東京都写真美術館編『日本近代写真の成立と展開』東京都写真美術館（1995）
- 鳥原学『日本写真史（上）幕末維新から高度成長期まで』中央公論新社(2013)
- 『浪華寫眞俱樂部会報』浪華寫眞俱樂部（1933）
- 奈良本辰也『日本の歴史 17 町人の実力』中央公論社（1984）
- 橋川文三『日本浪漫派批判序説』講談社（1998）
- 橋本紳也『京阪神モダン生活』創元社（2007）
- 濱谷浩『潜像残像』筑摩書房（1991）
- 葉山嘉樹『葉山嘉樹全集』新日本出版社(1984)
- 「阪神間モダニズム」展実行委員会『阪神間モダニズム』淡交社（2004）
- 藤本篤 編『大阪府の歴史』山川出版社(1996)
- 光田由里『写真「芸術」との界面に写真史 1910年代-70年代』青弓社（2006）
- 宮川康子『自由学問都市大坂 懐徳堂と日本的理性の誕生』講談社（2002）
- 宮本又次『大阪商人』講談社（2010）
- 宮本又次「大阪町人の家訓と気質」宮本又次編『大阪の研究 3』清文堂出版（1969）
- 宮本又次『船場』ミネルヴァ書房（1964）
- 宗政五十緒『近世畸人伝』平凡社（1972）
- 脇田修『近世大坂の町と人』吉川弘文館（2015）
- Harootunian, Harry. *Overcome by Modernity: History, Culture, and Community in Interwar Japan*. Princeton UP, 2010.

雑誌・新聞

- 秋山轍輔「空蟬」『寫眞月報』（1904）
- 伊奈信男「新體制下に於ける寫眞家の任務」『カメラアート』カメラアート社（1939）
- 江頭春樹「こだま」『寫眞月報』（1904）
- 大阪都市協会『大阪人』大阪都市協会（2002）
- 岡哲生「関西寫壇私録（二）」『寫眞月報』第34巻第8号 東京専門学校出版部（1929）
- 億川兆山『浪華寫眞俱樂部会報』浪華寫眞俱樂部会報（1933）
- 勝田康雄「不健全寫眞の排撃へ」『カメラアート』カメラアート社（1939）
- 木村伊兵衛「私の作画精神」『アサヒカメラ』（1952）
- 「寫眞家新體制順應」『カメラマン』カメラマン社（1940）
- 米谷紅浪「白洋仲治両子追悼記」『浪華写真俱樂部会報』浪華写真俱樂部（1943）
- 櫻屋銀詩楼「寫眞息子」『カメラマン』カメラマン社（1940）
- 高橋渡「所感一ツ」『カメラマン』カメラマン社（1938）
- 土門拳「名作解説 5 安井仲治の『犬』」『写真の教室』第1巻第8号 アルス（1952）
- 「内閣情報部と国策写真の座談会」『フォトタイムス』フォトタイムス社（1938）
- 鳴村生『浪華寫眞俱樂部会報』浪華寫眞俱樂部会報（1932）
- 前川修「アマチュア写真論のためのガイド」青弓社編集部編『写真空間1』青弓社

(2008)

- 光吉夏彌「アマチュアは何をすべきか」『カメラアート』カメラアート社（1939）
「安井仲治氏を偲ぶ座談会」『写真文化』第24巻第5号 アルス（1942）
安井仲治「春宵漫語」『カメラマン』第20号 カメラマン社（1938）
安井仲治「遺詠七首」『浪花写真倶楽部会報』（1943.6）
安井仲治「春宵漫語」『カメラマン』カメラマン社（1938）
安井仲治「拝啓」『カメラマン』カメラマン社（1939）
安井仲治「寫壇WHO'S WHO 4」『寫眞雜誌アサヒカメラ』東京朝日新聞（1935）
渡辺勉「当面の課題 雑誌統制について」『フォトタイムス』フォトタイムス社（1940）

論文・その他

- 笠原美智子「囚われの荒木——『荒木経惟 センチメンタルな旅 1971-2017』展に寄せて」『ジェンダー写真論 1991-2017』里山社（2018）
後藤優子「関東大震災とアナキストと作家 和田久太郎と芥川龍之介の場合」『翰林日本學第24輯』翰林大学校日本學研究（2014）
後藤優子「アマチュア・アウラ・アナーキー ——安井仲治（1903-1942）の近代——」『日本研究』第41輯 韓国中央大學校日本研究所（2016）
今榮蔵「來山」『国文学解釈と鑑賞』第20巻第2号 至文堂（1955）
竹葉丈「安井仲治——他者の描写、静物の表象」『安井仲治写真集』共同通信社（2004）
辻野増枝・青木祥子・白木小三郎「『北船場』の町割と町家の変遷について——特に江戸時代から今日まで——」『大阪市立大学生活科学部紀要』（1980）
娜迦璽「東京にて」安井仲治撮影 渋谷区立松涛美術館、名古屋美術館、共同通信社編集『安井仲治写真集』（2004）
松実輝彦「安井仲治と丹平写真倶楽部——写真集『光』を中心に——」『日本写真芸術学会誌』第12巻第12号 日本写真芸術学会
光田由里「安井仲治 リアルさの果て——写真黄金期の巨人」渋谷区立松涛美術館・名古屋市美術館・共同通信社編著『安井仲治写真集』共同通信社（2004）
光田由里編「安井仲治年譜」渋谷区立松涛美術館・名古屋市美術館・共同通信社編著『安井仲治写真集』共同通信社（2004）
宮本又次「大阪町人の家訓と気質」宮本又次編『大阪の研究3』清文堂出版（1969）
安井仲治「遠西奇器」川崎亀太郎『安井仲治の人とその業績 その4』日本写真会会報第11巻第5号 日本写真会（1965）
安井仲治「寫眞の發達とその芸術的諸相」川崎亀太郎『安井仲治の人と其作品』くらぶ草土（1979）
安井仲治「讀後小感」渋谷区立松涛美術館・名古屋市美術館・共同通信社編集『安井仲治写真集』共同通信社（2004）
安井仲雄「父のこと」渋谷区立松涛美術館・名古屋市美術館・共同通信社編集『安井仲治写真集』共同通信社（2004）

CD-ROM

- 井上吉次郎「大大阪と移入鮮人の問題」大阪都市協会『大大阪』思文閣（1996）
岡實「我國都市の特色」大阪都市協会『大大阪』思文閣（1996）
岡實「特別市制について」大阪都市協会『大大阪』思文閣（1996）
後藤新平「自治精神と政治の倫理化」大阪都市協会『大大阪』思文閣（1996）
西村健吉「市會の腐敗墮落と其對策」大阪都市協会『大大阪』思文閣（1996）

第2章

- 岩本憲児編集『日本映画とナショナリズム 1931-1945 日本映画史叢書①』森話社（2004）
大隈秀夫『マスコミ帝王 裸の大宅壮一』三省堂（1996）
大谷渡『北村兼子——炎のジャーナリスト——』東方出版（1999）
大原社会問題研究所『日本労働年鑑』大原社会問題研究所出版部（1920）
柴桂子『近世おんな旅日記』吉川弘文館（1997）
渋谷区立松涛美術館（1993）
瀬戸内寂聴『余白の春』新潮社（2001）
高井浩『天保期、少年少女の教養形成過程の研究』河出書房（1991）
長野ひろ子『明治維新とジェンダー——変革期のジェンダー再構築と女性たち——』明石書店（2016）
吉行エイスケ『新種族ノラ』ゆまに書房（2000）

雑誌・新聞

- 『アサヒカメラ』朝日新聞社（1935）7月号
北村兼子「あなたも失業か」『婦人記者廃業記』大空社（1992）
北村兼子「女浪人」『女人芸術』10月号 女人芸術社（1928）
北村兼子「恋愛小説のお経と殺人光線以上のもの」『婦人』第4巻第1号（1927）
ささきふさ「表情即偽装」『婦人公論』第16巻第3号 婦人公論者（1931）
佐藤春夫「酒、歌、煙草、また女」『三田文学』第3巻第1号（1927）
『寫眞月報』寫眞月報社（1939）11月号
安井仲治「寫眞家四十八宜」『丹平写真倶楽部会報』第25巻12号 丹平写真倶楽部（1950）

論文・その他

- アン・ウォルソール「江戸文化における大奥」森本恭代訳『ジェンダー研究 お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報』第4巻 茶の水女子大学ジェンダー研究センター（2001）
大宅壮一「百パーセント・モガ」『大宅壮一全集』第2巻 蒼洋社（1981）
大宅壮一「女性先端人批判」『大宅壮一全集』第2巻 蒼洋社（1981）
宜野座菜央見「“小春日和の平和”における非常時 映画『非常時日本』のイデオロギー」（2015）
北沢秀一「モダン・ガール」『コレクション・モダン都市文化 第16巻 モダンガール』

ゆまに書房 (2009)

北沢長梧「モダン・ガールの表現——日本の妹に送る手紙——」『コレクション・モダン都市文化 第16巻 モダンガール』ゆまに書房 (2009)

群馬県立歴史博物館編集『第81回企画展 幕末の写真師夫妻 島霞谷と島隆』群馬県立歴史博物館 (2007)

玉置真吉「社交ダンス十年の想ひ出」『コレクション モダン都市文化』第4巻 ゆまに書房 (2004)

中野節子「解題」『江戸時代女性文庫99』大空社 (1998)

新居格「モダン・ガールの輪郭」『コレクション・モダン都市文化 第16巻 モダンガール』

ゆまに書房 (2009)

光田由里「レディス・カメラ・クラブと野島の作風の展開」『野島康三とレディス・カメラ・クラブ』渋谷区立松涛美術館 (1993)

吉行和子「後書き」吉行エイスケ『吉行エイスケ 作品と世界』国書刊行会 (1997)

和田桂子「吉行エイスケ——エロティッシュ・クンストの行方」『言語都市・上海』

藤原書店 (1999)

和田博文「エロ・グロ・ナンセンス」和田博文監修『コレクション・モダン都市文化 第15巻 エロ・グロ・ナンセンス』ゆまに書房 (2002)

映画

清水宏監督 及川道子出演『港の日本娘』松竹 (1933)

第3章

巖谷國士『シュルレアリスムとは何か』筑摩書房 (2016)

梅本順子『闘う牧師 田村直臣の挑戦』大空社 (2010)

大橋房子『断髪』警醒社書店 (1921)

大橋房子『愛の純一性』アルス (1922)

岡田章子『女学雑誌と欧化』森話社 (2013)

川崎賢子・原田健一『岡田桑三 映像の世紀——グラフィズム・プロパガンダ・科学映画——』平凡社 (2002)

河出書房新社 (1984)

ガントレット恒『77年の想ひ出』大空社 (1989)

菅野昭正『憂鬱の文学史』新潮社 (2009)

今和次郎編集『新版大東京案内』中央公論社 (1929)

塩野和夫『禁教国日本の報道——「ヘラルド」誌(1825年-1873年)より——』雄松堂出版 (2007)

中川邦昭『カメラ・オブスキュラの時代 映像の起源』筑摩書房 (2001)

長岡安平顕彰事業実行委員会編『租庭 長岡安平——わが国近代公園の先駆者』財団法人東京農業大学出版会 (2000)

日本基督教団横浜指路教会125年史編纂委員会『横浜指路教会125年史 通史編』日本基督教団横浜指路教会 (2004)

日本キリスト教婦人矯風会編『日本キリスト教婦人矯風会百年史』ドメス出版 (1986)

- 松本清張『形影 菊池寛と佐佐木茂索』文芸春秋社（1982）
- 宮本顕治『『敗北』の文学——芥川龍之介氏の文学について——』『昭和文学全集第33巻』小学館（1989）
- 森まゆみ『断髪のモダンガール 42人の大正快女伝』文藝春秋（2008）
- 山田兼士『ボードレール《パリの憂愁》論』砂小屋書房（1991）
- 横浜市中区役所福祉部市民課編『横浜のおんなたち』横浜市中区役所福祉部市民課（1997）
- 吉屋信子『自伝的女流分断史』中央公論社（1977）
- Jacqueline Rose, *Sexuality and Vision: Some Questions of Visuality* Edited by Hal Foster, The New Press.1999.
- Rosalind Krauss, *The Impulse to See: Vision and Visuality* Edited by Hal Foster, The New Press.1999.

雑誌・新聞

- 安部磯雄「公娼制度と社會の風儀」『廓清』第1巻第1号 廓清会（1911）
- 井深花子「娼妓の解放と相俟つき家庭の廓清」『廓清』第2巻第11号 廓清会（1912）
- 大隈重信「待合の大都市」『廓清』第1巻第3号 廓清会（1911）
- 大橋房子「送別会の夜」『女子青年界』第15巻第6号 日本基督教女子青年会（1918）
- 大橋房子「かゞやくみすがたを」『女子青年界』第16巻第3号 日本基督教女子青年会（1919）
- 大橋房子「フランス・ウキラード」『婦人新報』婦人新報社（1919）
- 大橋房子「自由と責任」『女子青年界』第17巻第2号 日本基督教女子青年会（1920）
- 大橋房子「仙臺修養会の日々」『女子青年界』第17巻第8号 日本基督教女子青年会（1920）
- 大橋房子「第9回万国婦人参政権大会に臨みて」大阪朝日新聞夕刊（1923）
- 大橋房子「旅装のままで 横濱本牧にて」読売新聞（1924）
- 大橋房子「巴里で遇つた舞踏家・女優・其他」『女性改造』（1924）
- 大橋房子「舊きを懐かしむ」『婦人公論』婦人公論社（1925）
- 小崎弘道「海外醜業婦の惨状」『廓清』第1巻第1号（1911）
- ささきふさ「人間以外」『不同調』不同調社（1925）
- ささきふさ「一服」『不同調』文藝時代（1927）
- ささきふさ「行乳薬求死」『不同調』文藝時代（1927）
- ささきふさ「ことよせて」『映画時代』文藝春秋社（1928）
- ささきふさ「明日の空漠」『輝ク』輝く会（1936）
- 島貫兵太夫「米国と娼業と風紀」『廓清』第1巻第1号 廓清会（1911）
- 益富政助「此罹災者を救へ」『廓清』第1巻第1号（1911）
- 山室軍平「廢業娼妓の身の上」『廓清』第1巻第1号（1911）
- 横浜指路教会『指路』第112号 日本基督教団横浜指路基督教会（1911）

論文・その他

- 巖谷國士「コラージュ・シュルレアリスト」『カルメル修道会に入ろうとしたある少女の

夢』河出書房（1984）

江黒清美「ささきふさ『春浅く』と『ある対位』——モダニズムとフェミニズムの視点から——」『昭和前期女性文学論』新・フェミニズム批評の会（2016）

大屋典一「ささきふさ年譜」『ささきふさ作品集』中央公論社（1956）

岡部一興「全国協同伝道の研究」『キリスト教史学』第59集 キリスト教史学会（2005）

紅野敏郎「大橋房子＝ささきふさ——『断髪』『出港』など——」『解釈と鑑賞』第833巻 至文堂（2000）

佐光美穂「大橋房子／ささきふさ研究のために——付、著作目録・参考文献目録——」『名古屋近代文学研究』第22巻名古屋近代文学研究会（2008）

佐々木晃「J・C・ヘボン 施療・辞書編纂・聖書翻訳」『横浜開港と宣教師たち——伝道とミッションスクール』横浜プロテスタント教会編 有隣堂（2015）

ささきふさ「素の身上」『有島武郎全集』月報

ささきふさ「ただ見る」『モダン都市文学Ⅰ モダン東京案内』平凡社（1993）

篠崎美生子「モダニズム——『大きな物語』は解体されたか」『国文学解釈と鑑賞別冊』学

灯社（2004）

立原道造「風立ちぬ 堀辰雄論」『現代詩読本』思潮社（1978）

寺田由美「フランシス・ウィラードと社会的福音」北九州市立大学文学部紀要（2012）

廣津和郎「ささき・ふさ小論」『ささきふさ作品集』中央公論社（1956）

堀辰雄「水族館」『モダン都市文学Ⅰ モダン東京案内』平凡社（1993）

水谷真紀「モダンガールの断髪と自我——ささきふさと「婦人グラフ」の東京モード」『東

洋学』第48号 東洋大学東洋学研究所（2011）

Naomi Tamura『The Japanese Bride』『横濱バンドの女性観』明治学院大学キリスト教研究所（1997）

映画

清水宏監督 及川道子出演『港の日本娘』松竹（1933）

第4章

井出研・杉田暉道編集『横浜区史跡めぐり』横浜総合医学振興財団（1995）

エドゥアルド・スエンソン『江戸幕末滞在記 若き海軍士官の見た日本』長島要一訳 講談社（2003）

北林透馬「ホンモク・ガイド」である社（1932）

酒井潔『日本歓楽郷案内』彩流社（2014）

佐藤惣之助『蠅と蛍』新报社（1924）

重富昭夫『横浜「チャブ屋」物語 日本のムーランルージュ』センチュリー（1995）

セオダテ・ジョフリー『横浜ものがたり——アメリカ女性が見た大正期の日本——』中西道子訳 雄松堂出版

檀原照和『消えた横浜娼婦たち——港のマリーの時代を巡って——』データハウス（2009）

戸伏太兵『洋娼史談』鱒書房（1956）

ヘンリー・ヒュースケン『ヒュースケン日本日記』青木史朗訳 岩波書店（1989）

マーガレット・バラ『古き日本の瞥見』川久保としお訳 有隣堂（1992）
横濱市役所『横濱市史稿 風俗編』横濱市役所（1932）

論文・その他

井上勝生「幕末期、欧米に対し、日本の自立はどのように守られたか」岩波新書編集部編『日本の近現代史をどう見るか シリーズ日本近現代史⑩』岩波書店（2011）
神奈川県保険医協会編集「“横浜における梅毒”の史的研究」『仙花堂医師往来』（）
下岡蓮杖「黒船来」石井光太郎、東海林静男編『横浜どんたく』有隣堂（1973）
中西淳朗「近代横浜医学への歩み——松山棟庵と松山不苦庵義定まで——」『郷土神奈川』第39号 神奈川県立図書館（）
横濱市役所『横濱市史稿』横濱市役所（1932）

第5章

浅見雅男『華族誕生——名誉と体面の明治——』講談社（2015）
池田浩士『大衆小説の世界と反世界』現代書館（1983）
大久保遼『映像のアルケオロジー 視覚理論・光学メディア・映像文化』青弓社（2015）
加藤陽子『徴兵制と近代日本』吉川弘文館（1996）
川崎賢子・原田健一『岡田桑三 映像の世紀——グラフィズム・プロパガンダ・科学映画——』平凡社（2002）
久世光彦『美の死 ぼくの感傷的読書』筑摩書房（2006）
小松弘『起源の映画』青土社（1991）
専修大学今村法律研究室編『今村力三郎訴訟記録第35巻 虎の門事件（一）』専修大学出版局（2004）
田中純一郎『日本映画発達史 I 活動写真時代』中央公論社（1980）
林禮子『男』白鯨社（1948）
原武史『大正天皇』朝日新聞社（2001）
ベラ・バラージュ『映画の精神』佐々木基一、高村宏訳 創樹社（1984）
山口且訓・渡辺泰『日本アニメーション映画史』有文社（1978）
山口昌男『「敗者」の精神史（上）』岩波書店（2005）
彌吉光長『未完資料による日本出版文化 第5巻 近代出版文化』ゆまに書房（1990）
吉原順平『日本短編映画史——文化映画・教育映画・産業映画』岩波書店（2011）
Crafton, Donald. *Emile Cohl, Caricature, and Film*: Princeton UP, 1990.
Gerow, Aaron. *Visions of Japanese Modernity: Articulations of Cinema, Nation, and Spectatorship, 1895–1923*. U of California, 2010.

雑誌・新聞

浅田江村「尼港問題を論ず」『新青年』第1巻第4号（1920）

石井勝「腐ったパン スタディオのからくり」『新興映画』第1巻第1号 新興映画社
(1929)

江口雄輔『『新青年』とその時代』『ユリイカ』青土社 (1987)

北林透馬「ホンモク・ガイド」である社 (1932)

小林伸一編集「珠玉の短編を残した夭折の作家——渡辺温と日立市・水戸市——」『常陽
藝文』No.182 (1998)

瀧田出「地方小都市農村と小唄映畫」第1巻第3号 新興映画社 (1929)

南木摩天楼「解散より選挙へ—解散の意義外三項」『新青年』第1巻第5号 (1920)

長谷川騏之「河合映畫と一族郎黨主義」『新興映画』第1巻第1号 新興映画社 (1929)

安成二郎「外国へ行って帰って来ない人々」第1巻第4号 (1920)

山崎新雨「南洋の混血児」『新青年』第1巻第1号 (1920)

論文・その他

飯島正「日本映画の黎明——純映画劇の周辺——」『無声映画の完成 講座日本映画2』岩波
書店 (1986)

宇和川雄「バラージュ、コメレル、ベンヤミンと無声映画の時代——動物の身振りのなか
で——」『研究報告』第25号 京都大学大学院独文研究室研究報告刊行会 (2011)

小川佐和子「外国映画との対峙——大正初期日本映画のダイナミズム——」『映画史を読
み直す——日本映画は生きている——』第二巻 岩波書店 (2010)

オン・ワタナベ「オング君の説」渡辺温『アンドロギュノスの^{ちすじ}裔』東京創元社 (2011)

オン・ワタナベ「古都にて」渡辺温『アンドロギュノスの^{ちすじ}裔』東京創元社 (2011)

花中仙「妓仙生活も神聖だというなら神聖です」『ソウルにダンスホールを』法政大学出
版局 (2005)

川崎賢子『『新青年』は横断する ——久生十蘭ふう“少女と戦争機械”』『ユリイカ』
青土社 (1987)

金多希「韓国の近代化と女性——『妓生』と『遊女』、そして『女給』を手がかりとして
——」『宇都宮大学国際学部研究論集第36号』宇都宮大学国際学部 (2013)

小林伸一編集「珠玉の短編を残した夭折の作家」

小山直子「近代日本におけるフロックコートとシルクハットの紳士像の普及——『通常
服・黒高帽』に示された国家表現』『国際服飾学会誌』国際服飾学会 (2013)

鈴木貞美「プロブレマチック：装置としての『新青年』」『昭和文学研究第1集』笠間書院
(1979)

田中純一郎「映画製作・興業の創始者たち」『日本映画の誕生 講座日本映画1』岩波書店
(1986)

トム・ガニング「アトラクションの映画」中村秀之訳 長谷正人・中村秀之編『アンチ・ス
ペクタクル 沸騰する映像文化の^{エルクモロジー}考古学』東京大学出版会 (2003)

- 中野収「メディアとしての『新青年』——浮遊するマイクロコスモス』『ユリイカ』青土社(1987)
- 前田良三「キルヒャーと可視性のメディア——メディア文化史的注記——」『19世紀学研究』第9号 19世紀学学会 (2015)
- 水谷準「記憶の断層」渡辺温『アンドロギュノスの裔』薔薇十字社 (1970)
- 横溝正史「昭和11年温の七回忌に当りて」『W・W・W・長すぎた男・短すぎた男・知りすぎた男 渡辺啓助、渡辺温、渡辺濟——「新青年」とモダニストの影』ギャラリー・オキュルス (2008)
- 横溝正史「惜春賦——渡辺温君の思い出——」『アンドロギュノスの裔』薔薇十字社 (1970)
- ローランド・ドメーニグ「映画の誕生」再考——映画の起源に関する見解と日本のスクリーン・プラクティス」 碓井みちこ・大傍正規訳『映画史を読み直す 日本映画は生きている 第二巻』岩波書店 (2010)
- 渡辺温「ああ華族様だよと私は嘘を吐くのであった」渡辺温『アンドロギュノスの裔』東京創元社 (2011)
- 渡辺温「或る母の話」渡辺温『アンドロギュノスの裔』東京創元社 (2011)
- 渡辺温「アンドロギュノスの裔」渡辺温『アンドロギュノスの裔』東京創元社 (2011)
- 渡辺温「可哀想な姉」『アンドロギュノスの裔 渡辺温全集』創元社 (2011)
- 渡辺温「巷説『街の天使』」『アンドロギュノスの裔 渡辺温全集』創元社 (2011)
- 渡辺温「十年後の映画界」渡辺温『アンドロギュノスの裔』東京創元社 (2011)
- 渡辺温「シルクハット」渡辺温『アンドロギュノスの裔』東京創元社 (2011)
- 渡辺温「続アルペエヌ嬢の話」渡辺温『アンドロギュノスの裔』東京創元社 (2011)
- 渡辺温「父を失う話」渡辺温『アンドロギュノスの裔』東京創元社 (2011)
- 渡辺温「兵隊の死」渡辺温『アンドロギュノスの裔』東京創元社 (2011)
- 渡辺温「当選者の言葉」『アンドロギュノスの裔 渡辺温全集』創元社 (2011)
- 渡辺温「私の好きな一隅」『アンドロギュノスの裔 渡辺温全集』創元社 (2011)
- 渡辺啓助「温という弟」『アンドロギュノスの裔』薔薇十字社 (1970)

第6章

- 横浜市『横浜市史第2巻』横浜市 (1970)
- 横浜市歴史博物館編集『横浜の礎・吉田新田いまむかし』横浜市歴史博物館 (2006)
- 龍山親祇『濱の以左古』龍山親祇 (1930)

論文・その他

- 青木祐介「幕末・明治初期の横浜」『伝統都市 I アイデア』東京大学出版会 (2010)
- 吉崎雅規「港をめぐる二都関係——江戸・東京と横浜」『水都学V』法政大学出版局 (2016)

第7章

- 岩村登志夫『在日朝鮮人と日本労働者階級』校倉書房 (1987)
- 大生川志郎『近代日本青年期教育叢書・第IV期 第6巻』日本図書センター (1992)

神奈川県立婦人総合センターかながわ女性史編集委員会 『夜明けの航跡 かながわ近代の女たち』 ドメス出版 (1987)

神奈川県警察史編さん委員会 『神奈川県警察史 上巻』 神奈川県警察本部 (1970)

金子文子 『赤いつつじの花』 黒色戦線社 (1984)

ガブリエル・タルド 『模倣の法則』 池田祥英・村澤真保呂訳 河出書房 (2007)

川崎賢子・原田健一 『岡田桑三 映像の世紀——グラフィズム・プロパガンダ・科学映画——』 平凡社 (2002)

クリストファー・アレグザンダー 『パターン・ランゲージ』 平田翰邦訳、鹿島出版会 (1984)

再審準備会編集 大島英三郎 『金子文子・朴烈裁判記録』 黒色戦線社 (1977)

佐藤忠男 『日本映画史 I』 岩波書店 (2006)

佐藤惣之助 『蠅と螢』 新作家 (1924)

瀬戸内寂聴 『瀬戸内寂聴全集』 新潮社 (2001)

野本三吉 『裸足の原始人たち』 田畑書店 (1974)

廣畑研二 『大正アナキスト覚え帖』 アナキズム文献センター (2013)

藤森岳夫 『たぎつ瀬』 中央公論 (1986)

森田友昇 『横濱地名案内』 森田友昇 (1875)

山田昭次 『自己・天皇制国家・朝鮮人』 影書房 (1996)

山本薫子 『横浜・寿町と外国人——グローバル化する大都市インナーエリア』 福村出版 (2008)

レイ・ベントゥーラ 『ぼくはいつも隠れていた フィリピン人学生不法就労記』 草思社 (1993)

雑誌・新聞

「所謂傾向的作品について」 『新興映画』 第2巻第1号 新興映画社 (1930)

「^{かよわ}纖弱い女性の身で大逆犯人の金子ふみ子の数奇の半生 暗い家庭に生まれ遂に大罪を犯すまでの彼女の涙の生立記」 『主婦之友』 東京家政研究社 (1926)

ささきふさ 「表情即偽装」 『婦人公論』 第29巻第3号 中央公論社 (1931)

城昌幸 「都会の神秘」 『新青年 復刻版』 第7巻、本の友社 (1998)

布施辰治 「怪寫眞事件の主点と批判」 『改造』 第8巻第11号 改造社 (1926)

帆足みゆき 「私の青春時代」 『婦人公論』 中央公論社 (1938)

論文・その他

茨木憲 「『何が彼女をさうさせたか』——と、その周辺——」 『悲劇喜劇』 (1986)

岩田一正 「『少年世界』が提示した少年像——国語読本との比較を中心に——」 『大阪国際児童文学振興財団 研究紀要 (29)』 大阪国際児童文学振興財団 (2016)

太田米男 「非常時の少年たち (1) ——映画『僕らの弟』をめぐって——」 『Journal of Osaka University of Arts (21)』 大阪芸術大学 (1998)

オータバシ・メレック 「乱読の癖：明治大正のエリートと子供時代の読書経験」 『明治学院大学国際学部付属研究所研究年報』 Vol.19 明治学院大学国際学部付属研究所 (2016)

大和田茂 「〈棄教〉の文学——加藤一夫『見神』への挫折」 『大正宗教小説の流行 その背景と“いま”』 論創社 (2011)

小田光雄 「春秋社と『何が私をかうさせたか』」 叢書月刊 (2006)

許世楷 「朴烈事件」 『日本政治裁判史録 大正』 第一法規出版 (1969)

- 金素雲「図書館大学」『天の涯に生くるとも』新潮社（1983）
- 栗原一男「歌稿を見た後に」『赤いつつじの花——金子文子の思い出と歌集』黒色戦線社（1984）
- 崔凡述「立松判事と朴烈大逆事件」尹青光編集『忘れ得ぬ日本人 朝鮮人の怨恨と愛惜』六興出版（1976）
- 佐藤惣之助「蠅と蚩」『横浜懐古』新作社（1924）
- ささきふさ「表情即偽装」『婦人公論』第29巻3号 中央公論社（1931）
- 城昌幸「都会の神秘」『新青年 復刻版』第7巻 本の友社（1998）
- 瀬戸内寂聴「余白の春」解説『瀬戸内寂聴全集』新潮社（2001）
- 塚原孝「日本におけるアルツィバーシェフ——「サーニン」翻訳以前——」早稲田大学ロシア文学会編『ロシア文化研究』早稲田大学ロシア文学会（1994）
- トム・ガニング「個人の身体を追求する——捨身、探偵、そして初期映画」加藤祐治訳『アンチ・スペクタクル 沸騰する映像文化の考古学』東京大学出版会（2003）
- 昇隆一「後書き」ミハイル・アルツィバーシェフ『アルツィバーシェフ名作集』昇隆一訳 青娥書房（1975）
- 布施辰治「怪寫眞事件の主点と批判」『改造』第8巻第11号 改造社（1926）
- 古田大次郎「死刑囚の思い出」『日本の自伝8』平凡社（1981）
- 古田大次郎「死の懺悔」『ドキュメント日本人3 反逆者』学藝書林（1968）
- 渡辺英俊「地べたに在す神——寿町」『低きに立つ神』コイノニア社（2009）
- Musser, Charles. *The emergence of Cinema: The American screen to 1907*. New York: Charles Scribners Sons. 1994.

第8章

- 金子文子『わたしはわたし自身を生きる 手記・調書・歌・年譜』鈴木裕子編 梨の木舎（2006）
- 築地藤子『椰子の葉』岩波書店（1931）
- 山田孝雄『肇国の精神』教学局（1939）

雑誌・新聞

- ささきふさ「私の青春時代」『婦人公論』（1938）

論文・その他

- 片山杜秀「写生・随順・拝誦 三井甲之の思想圏」『日本主義的教養の時代』柏書房（2006）
- 米田利昭「抒情的ナショナリズムの成立——三井甲之（一）——」『文学』Vol. 28 岩波書店（1960）
- 田中元「『中今』について——日本人の時間意識」『理想』No. 584 理想社（1982）

第9章

- アレクサンドル・ボグダーノフ『赤い星』大宅壮一訳 新潮社（1929）
- 伊藤白蓮『白蓮自選歌集』大鑑閣（1921）
- 今村力三郎『大逆事件と今村力三郎』専修大学出版局（2012）
- 牛島秀彦『昭和天皇と日本人』三一書房（1989）
- 大塚有章『未完の旅路』第1巻 三一書房（1976）
- 河上肇『思ひ出』月曜書房（1947）

相良亨『武士の倫理・近世から近代へ』ペリカン社（1993）
末松謙澄『防長回天史』柏書房（1980）
専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（一）』専修大学出版局（2004）
専修大学今村法律研究室編『虎の門事件（三）』専修大学出版局（2006）
谷川健一編『近代民衆の記録 8 娼婦』新人物往来社（1971）
テツオ・ナジタ『明治維新の遺産』坂野潤治訳 講談社（2013）
中原静子『難波大助・虎ノ門事件——愛を求めたテロリスト——』影書房（2002）
樽橋渡『人間の反逆』芝園書房（1959）
日本アナキズム運動人名事典編集委員会『日本アナキズム運動人名事典』ぱる出版（2004）
林茂『湯浅倉平』三彩社（1969）
毎日新聞社『決定版 昭和史』毎日新聞社（1984）
松谷與二郎『思想犯罪編』世界犯罪叢書第1巻 天人社（1931）
横田正俊『父を語る』巖松堂書店（1942）

雑誌・新聞

油谷治郎七「松村介石先生の存娼論を評す」『廓清』（復刻版）第6巻第5号 竜溪書舎（1980）
今村力三郎「難波大助事件 虎ノ門大逆事件の真相」『文芸春秋』文芸春秋社（1950）
岡田靖雄「呉秀三先生に学ぶもの」第87回日本医史学会総会抄録（1986）
小野俊一「子孫崇拜論」『中央公論』第418号 中央公論社（1923）
勝承夫「新興時代の中堅たる青年學生」『新興』第1号 新興社（1924）
椋本運雄「有無空」『自然児』自然児連盟（1925）
山田作松「階級的立場より」『自然児』自然児連盟（1925）
山田作松「死盃はお手もとへ」『自然児』自然児連盟（1925）

論文・その他

阿部葆一「天皇制と山口県人（その二） はじめに大逆ありき——『虎の門事件研究ノート』（一）——」『自衛官合祀拒否訴訟にゆうす 通巻9号』自衛官合祀拒否訴訟中谷康子さんを支える山口の会（1983）
新井勉「近代日本の大逆罪」『日本法学』日本大学法学会（2009）
今村力三郎「芻言」『大逆事件と今村力三郎』専修大学出版局（2012）
歌川克己「難波君と私」『自由の狩人たち 反逆と革命』三一書房（1973）
岡田靖雄「呉秀三先生に学ぶもの」第87回日本医師学会抄録（1986）
鹿野政直編「英将秘訣」『日本の思想集 20 幕末思想』筑摩書房（1969）
河上肇「断片」『思ひ出』月曜書房（1947）
徳富健次郎「難波大助の処分について」『謀叛論』岩波書店（1976）
布引敏雄「高須久子と吉田松陰」『地方史研究』地方史研究協議会（1977）
松谷與二郎「難波大助大逆事件」『思想犯罪篇』世界犯罪叢書第1巻 天人社（1931）

光用潤一郎「淫慾を目的とする賣笑婦の悲劇」『變態心理』日本精神医学会
森永英三郎「史談裁判第四集 4 難波大助事件——革命のための大逆」『法学セミナー』日本評論社（1973）
森光子「光明に芽ぐむ日」谷川健一編『近代民衆の記録 8 娼婦』新人物往来社（1971）
山家悠平「ものを読む娼妓たち——森光子と松村喬子の作品に描かれる『読書』を中心に——」『女性学年報』第 38 号 日本女性学研究会（2017）

写真資料

fig. 1 安井仲治「クレインノヒビキ」（1923）

fig. 2 安井仲治「メーデーの写真」（1931）

fig. 3 安井仲治「或る船員の肖像」（1927）

fig. 4 安井仲治「犬」（1935）

fig. 5 安井仲治「熊谷守一氏肖像」（1935-42）

fig. 6 安井仲治「夏の妻」（mid. 1930' s）

fig. 7 安井仲治「生」（1932）

fig. 8 安井仲治「惜別」（1939 - 40）

渋谷区立松涛美術館・名古屋市美術館・共同通信社編著『安井仲治写真集』共同通信社（2004）より転載

fig. 9 島隆「島霞谷像」

fig. 10 島隆「カボチャを持って笑う島霞谷像」

群馬県立歴史博物館企画展展示図録『幕末の写真師夫妻 島霞谷と島隆』より転載

提供：群馬県立歴史博物館

fig. 11 「横浜指路教会」（1892年に建設された指路教会堂）：横浜指路教会所蔵

提供：横浜指路教会

fig. 12 「カルメル修道会に入ろうとしたある少女の夢」（1930）

マックス・エルンスト『カルメル修道会に入ろうとしたある少女の夢』巖谷國士訳 河出書房より転載

fig. 13 「横濱随一の歓楽場 大丸谷ビジネス案内」1930年代 久米正雄関係資料：横浜都市発展記念館所蔵

吉崎雅規編『モダン横濱案内』横浜都市発展記念館（2010）より転載

fig. 14 奉公袋（渡辺温 私物）

fig. 15 シルクハット（渡辺温 私物）

提供：ギャラリー・オキュルス

fig. 16 横浜久保山墓地（2016）

fig. 17 法廷の金子文子と朴烈（1925.2.26）東京朝日新聞

fig. 18 難波邸（2016）

fig. 19 難波覃庵覚書：山口県光市文化センター所蔵

提供：山口県光市文化センター